県道大内白鳥インター線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

原　間　遺　跡

2005.3

香　川　県　教　育　委　員　会

県道大内白鳥インター線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

原　間　遺　跡

2005.3

香　川　県　教　育　委　員　会

序　　文

原間遺跡は県道大内白鳥インター線建設に伴い発掘調査が行われた香川県東かがわ市川東原間に所在する遺跡です。

調査は、香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成９・11・13年度に発掘調査を実施し、縄文時代晩期以前の旧河道、弥生時代後期・古墳時代中期～後期の集落を検出することができました。殊に弥生時代後期～終末期の集落については、四国横断自動車道建設に伴って発掘調査を実施した原間遺跡の集落跡との関係が明らかとなり、また、住居跡内から未製品を含む多くの鉄器が出土したことも注目されます。

整理作業は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成15年11月～平成16年３月まで、平成15年度末の財団の解散に伴い事業を引き継いだ香川県埋蔵文化財センターが平成16年４月～10月まで実施し、「県道大内白鳥インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　原間遺跡」として刊行することとなりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、香川県長尾土木事務所及び関係諸機関、地元関係者各位に多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年３月

香川県埋蔵文化財センター

所長　中　村　　仁

例　　言

1．本報告書は、県道大内白鳥インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、香川県東かがわ市川東原間（発掘調査時は大川郡大内町川東、白鳥町白鳥）に所在する原間遺跡（わらまいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部道路建設課から依頼され、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は、以下のとおり実施した。

予備調査

調査期間　　平成９年４月１日～平成９年５月２日

調査担当　　片桐孝浩、野崎隆亨、大屋敷慶子

本調査

平成９年度

調査期間　　平成９年９月１日～平成10年３月31日

調査担当　　喜岡永光、岡本利、小野秀幸、陶山仁美

平成11年度

調査期間　　平成11年４月１日～平成11年５月31日

調査担当　　片桐孝浩、多田佳弘、正山泰久

平成13年度

調査期間　　平成13年７月１日～平成13年11月22日

調査担当　　山元素子、石原徹也、松田朝由

4．調査にあたっては下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

香川県土木部道路建設課、香川県長尾土木事務所、香川県歴史博物館、地元自治会、地元水利組合、千葉　豊・富井　眞（京都大学）、福井県埋蔵文化財調査センター、福井県立若狭歴史民俗資料館

5．本報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、および、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成15年度末で廃止となったことから、業務を引き継いだ香川県埋蔵文化財センターが実施した。

6．本報告書の執筆・編集は山元・小野が分担して担当した。分担は以下のとおりである。

第１章、第２章第１節～第３節　山元

第２章第４節～第８節　小野

第３章第１節、第２節　パレオ・ラボ　植田弥生

第３章第３節　安来市体育文化振興財団　和銅博物館　村上義行

なお、本報告書で用いる北は、旧国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はT.P.を基準としている。
また、遺構の略号は以下のとおりである。
ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＨ：竪穴住居　　ＳＫ：土坑　　ＳＰ：ピット　　ＳＲ：自然河川
ＳＸ：性格不明遺構

7．遺構断面図および土器観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1998年度版』による。

8．出土遺物観察表中の土器の残存率は遺物の図化部分に占める実物の割合であり、完形品に対する割合ではない。

9．調査地周辺の地理的、歴史的環境は、香川県教育委員会ほか『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告　第39冊　原間遺跡Ⅰ』2002．3に詳しく掲載しているので、今回の報告では省略した。

本文目次

第１章	調査に至る経緯と経過	
第１節	調査の経緯	1
第２節	調査の経過	3
第３節	整理作業の経過	3
第２章	調査の成果	
第１節	Ⅰ・Ⅱ区の土層序	5
第２節	Ⅰ・Ⅱ区の遺構・遺物	11
第３節	小結	114
第４節	Ⅲ区の調査成果	117
第５節	Ａ区の調査成果	162
第６節	Ｂ区の調査成果	168
第７節	Ｃ区の調査成果	214
第８節	小結	222
第３章	自然科学分析の結果	
第１節	原間遺跡焼失家屋SH303出土炭化材樹種同定	228
第２節	原間遺跡SRB07出土杭の樹種同定	232
第３節	原間遺跡出土鉄製遺物の分析調査	240

挿図目次

第1図 遺跡の位置（1/50,000） 1
第2図 調査区割図（1/8,000） 2
第3図 Ⅰ区西壁土層断面図1（1/80） 6
第4図 Ⅰ区西壁土層断面図2、北壁土層断面図（1/80） 7
第5図 Ⅱ区西壁土層断面図1（1/80） 8
第6図 Ⅱ区西壁土層断面図2、南壁土層断面図（1/80） 9
第7図 遺構配置図（1/300） 10
第8図 SH101平・断面図（1/60） 11
第9図 SH101出土遺物（1/4） 12
第10図 SH102平・断面図（1/60） 12
第11図 SH102出土遺物（1）（1/4） 13
第12図 SH102出土遺物（2）（1/4） 14
第13図 SH103平・断面図（1/60） 15
第14図 SH103出土遺物（1）（1/4・1/2） 16
第15図 SH103出土遺物（2）（1/4） 17
第16図 SH103出土遺物（3）（1/4・1/2） 18
第17図 SH104･105･106平･断面図（1/60） 19～20
第18図 SH104出土遺物（1/4・1/2） 22
第19図 SH105遺物出土状況（1/30） 23～24
第20図 SH105出土遺物（1）（1/4） 26
第21図 SH105出土遺物（2）（1/2・1/3） 27
第22図 SH105出土遺物（3）（1/4） 28
第23図 SH105出土遺物（4）（1/2・1/3） 29
第24図 SH105出土遺物（5）（1/4・1/2） 30
第25図 SH105出土遺物（6）（1/4） 31
第26図 SH105出土遺物（7）（1/2） 32
第27図 SH105出土遺物（8）（1/4） 33
第28図 SH105出土遺物（9）（1/2・1/3） 34
第29図 SH106出土遺物（1/4・1/2） 34
第30図 SH104～106出土遺物（1/4・1/2） 35
第31図 SH104～106上面出土遺物（1/4・1/2） 36
第32図 SH104～106付近機械掘削出土遺物（1/4・1/2） 37
第33図 SH107平・断面図（1/60） 38
第34図 SH107出土遺物（1/4） 39
第35図 SH108平・断面図（1/60） 40
第36図 SH108出土遺物（1/4・1/2） 41
第37図 SH109・110平・断面図（1/60） 42
第38図 SH109・110・112出土遺物（1/4・1/2） 43
第39図 SH111平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） 44
第40図 SH201平･断面図（1/60･1/20） 45～46
第41図 SH201遺物出土状況（1/40） 47～48
第42図 SH201出土遺物（1）（1/4・1/2） 50
第43図 SH201出土遺物（2）（1/2・1/3） 51
第44図 SH201出土遺物（3）（1/4・1/2） 52
第45図 SH202平・断面図（1/60） 53
第46図 SH202遺物・炭化材検出状況（1/40） 54
第47図 SH202出土遺物（1）（1/4・1/2・1/3） 55
第48図 SH202出土遺物（2）（1/4・1/2） 56
第49図 SH204平・断面図（1/60） 56
第50図 SH204遺物出土状況（1/30） 57
第51図 SH204出土遺物（1/4・1/2） 58
第52図 SH205･208平・断面図（1/60） 59～60
第53図 SH205･208遺物出土状況（1/30） 61～62
第54図 SH205出土遺物（1/4・1/2） 63
第55図 SH208出土遺物（1）（1/4・1/2） 64
第56図 SH208出土遺物（2）（1/4・1/2） 65
第57図 SH209平・断面図（1/60） 65
第58図 SH209出土遺物（1/4・1/2・1/3） 66
第59図 SH210平・断面図（1/60） 67
第60図 SH210内SP03平・断面図（1/20） 68
第61図 SH210出土遺物（1/4） 68
第62図 SH113平・断面図（1/60） 69
第63図 SH113出土遺物（1）（1/4） 69
第64図 SH113出土遺物（2）（1/2） 70
第65図 SP1001出土遺物（1/4） 70
第66図 SH203平・断面図（1/60） 71
第67図 SH203竈平・断面図（1/20） 72
第68図 SH203出土遺物（1/4・1/2） 73
第69図 SH207平・断面図（1/60）、SP10平・断面図（1/20） 74
第70図 SH207出土遺物（1/4・1/2） 75
第71図 SB201平･断面図（1/60） 77～78
第72図 SB201出土遺物（1/4） 79
第73図 SB101平・断面図（1/60） 80
第74図 SB202平・断面図（1/60） 81
第75図 SB203平・断面図（1/60） 81
第76図 SP1002北部包含層遺物出土状況（1/20） 82
第77図 SP1002出土遺物（1/4） 83
第78図 北部包含層（土器集中部）出土遺物（1）（1/4） 84
第79図 北部包含層（土器集中部）出土遺物（2）（1/4） 85
第80図 北部包含層（上層）出土遺物（1/4・1/2） 86
第81図 北部包含層（その他）出土遺物（1）（1/4） 87
第82図 北部包含層（その他）出土遺物（2）（1/2） 88
第83図 SK101平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 88
第84図 SK108平・断面図（1/40） 89
第85図 SK108出土遺物（1/4） 89
第86図 SK114平・断面図（1/40） 89
第87図 SK114出土遺物（1/4） 90
第88図 SK110平・断面図（1/40） 90
第89図 SK110出土遺物（1/4・1/2） 90
第90図 SK115平・断面図（1/40） 91
第91図 SK115出土遺物（1/4・1/2） 91
第92図 SK209平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 92
第93図 SK210平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 92
第94図 SK215平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 93
第95図 SK216平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 93
第96図 SK222平・断面図（1/40） 94
第97図 SK223平・断面図（1/40） 94
第98図 SK227平・断面図（1/20） 94
第99図 SK228平・断面図（1/20） 95
第100図 SK227・228出土遺物（1/4・1/2） 96
第101図 SK102平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 97
第102図 SK103平・断面図（1/40） 97
第103図 SK106平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 98

第104図 SK107平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 98
第105図 SK206平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 99
第106図 SK225平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2） 100
第107図 SK208平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 101
第108図 SK212平・断面図（1/40） 101
第109図 SK211平・断面図（1/40） 102
第110図 SK217平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 102
第111図 SK104平・断面図（1/40） 103
第112図 SK105平・断面図（1/40） 103
第113図 SK104・105出土遺物（1/4・1/2） 104
第114図 SK201平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 104
第115図 SK202平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 105
第116図 SK203平・断面図（1/40） 105
第117図 SK204平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2） 106
第118図 SK205平・断面図（1/40） 106
第119図 SK207平・断面図（1/40） 106
第120図 SK218平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 107
第121図 Ⅰ区ピット出土遺物（1/4） 107
第122図 Ⅱ区ピット出土遺物（1/4） 108
第123図 SX203断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2） 109
第124図 SH104～106南側上面掘り下げ出土遺物（1/4・1/2） 110
第125図 Ⅰ区平面精査出土遺物（1/4・1/2） 111
第126図 Ⅰ区側溝出土遺物（1/4） 111
第127図 Ⅰ区機械掘削出土遺物（1/4・1/2） 112
第128図 Ⅱ区平面精査など出土遺物（1/4・1/2） 112
第129図 Ⅱ区南端旧河道トレンチ（1/40） 113
第130図 調査区割図及び周辺地形復元図（1/3,000） 117
第131図 Ⅲ区遺構配置図（1/400） 118
第132図 Ⅲ区西壁土層断面図（天地1/40・左右1/80） 119～120
第133図 Ⅲ区南壁土層断面図（天地1/40・左右1/80） 121
第134図 Ⅲ区土層序模式図（1/40） 122
第135図 SH301平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 122
第136図 SH302平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 123
第137図 SH303平・断面図（1/40） 125
第138図 SH303炭化材検出状況、遺物出土状況（1/40） 126
第139図 SH303・SH303内SK01・SH303内P03出土遺物（1/4・1/2） 127
第140図 SH304平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 128
第141図 SH305平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2） 129
第142図 SH306・SH306内SK01・SH306内P05・06・11・12平・断面図（1/60） 131
第143図 SH306出土遺物1（1/4・1/2） 132
第144図 SH306遺物出土状況平面図（1/40） 133
第145図 SH306出土遺物2（1/4） 134
第146図 SH306内SK01・03、SH306内P05・06出土遺物（1/4） 135
第147図 ST301・302平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4） 136
第148図 ST303・304平・断面図（1/20） 138
第149図 ST305・306平・断面図（1/20）、ST305出土遺物（1/4） 139
第150図 SK301～307平・断面図（1/40） 141
第151図 SK303・304・306・307出土遺物（1/4・1/2） 143
第152図 SK308～318平・断面図（1/40） 145
第153図 Ⅲ区柱穴配置図（A-1～B-2グリッド）（1/100） 148
第154図 Ⅲ区柱穴配置図（C-1・2グリッド）（1/100） 149
第155図 Ⅲ区柱穴配置図（D-1・2グリッド）（1/100） 150
第156図 Ⅲ区柱穴配置図（E-1・2グリッド）（1/100） 151
第157図 SP出土遺物1（1/4） 152
第158図 SP出土遺物2（1/4） 153
第159図 SD301～303断面図（1/20）、SD302・303出土遺物（1/4） 154
第160図 SX301平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 156
第161図 Ⅲ区包含層出土遺物1（1/4） 157
第162図 Ⅲ区包含層出土遺物2（1/4・1/2） 158
第163図 Ⅲ区包含層（暗渠）出土遺物（1/4） 159
第164図 A～C区調査区割及び周辺丈量図（1/800） 163～164
第165図 微地形分類図及び調査区配置図（1/1,000） 162
第166図 A区北壁・南壁土層断面図（天地1/40・左右1/80）、遺構配置図（1/400） 165
第167図 SPA01平・断面図、SDA01～04断面図（1/40）、SDA04・06出土遺物（1/4） 166
第168図 SPA01・A区包含層出土遺物（1/4） 168
第169図 B区土層序模式図 168
第170図 B区東半北端トレンチ南壁土層断面図1（天地1/40・左右1/80） 169
第171図 B区東半北端トレンチ南壁土層断面図2（天地1/40・左右1/80） 170
第172図 B区西半北端トレンチ南壁土層断面図（天地1/40・左右1/80） 172
第173図 B区東半南壁トレンチ南壁土層断面図1（天地1/40・左右1/80） 173
第174図 B区東半南壁トレンチ南壁土層断面図2（天地1/40・左右1/80） 174
第175図 B区西半東西トレンチ南壁土層断面図（天地1/40・左右1/80） 175
第176図 B区遺構配置図（1/400） 177
第177図 SKB02・04平・断面図（1/40）、SKB04出土遺物1（1/4） 178
第178図 SKB04出土遺物2（1/4） 179
第179図 SKB05平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） 180
第180図 SKB09平・断面図（1/40）、出土遺物1（1/4） 181
第181図 SKB09出土遺物2（1/4） 183
第182図 SKB10・11平・断面図（1/40）、SKB11出土遺物1（1/4） 184
第183図 SKB11出土遺物2（1/4） 185
第184図 SKB12・13平・断面図（1/40） 185

第185図　SPB06・07・14・15・19・21～23・27平・断面図（1/40）　186
第186図　SDB01～03断面図（1/40）、SDB03出土遺物（1/4）　187
第187図　SDB04断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）　189
第188図　SXB01平・断面図（1/40）　190
第189図　SXB02平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）　191
第190図　SRB01（北）出土遺物（1/4・1/2）　192
第191図　SRB01（南）出土遺物（1/4）　193
第192図　SRB02出土遺物（1/4・1/2）　194
第193図　SRB04出土遺物（1/4）　195
第194図　SRB05出土遺物（1/4・1/2）　196
第195図　B区東半・西半包含層出土遺物（1/4・1/2）　197
第196図　B区第2面　SRB07土層断面図（天地1/40・左右1/80）　201～202
第197図　SRB07杭分布図及び立面図（1/80）　203～204
第198図　SRB07杭打設パターン模式図　200
第199図　SRB07出土遺物1（1/4）　205
第200図　SRB07出土遺物2（1/4）　206
第201図　SRB07出土遺物3（1/4）　207
第202図　SRB06・07上層・07下層出土遺物（1/2）　208
第203図　SRB07下層出土遺物1（1/2）　210
第204図　SRB07下層出土遺物2（1/2）　211
第205図　SRB07下層出土遺物3（1/2）　212
第206図　C区土層序模式図　214
第207図　C区北壁土層断面図（天地1/40・左右1/80）、遺構配置図（1/400）　215～216
第208図　SKC01・04平・断面図（1/40）、SKC04出土遺物（1/4）　217
第209図　SPC21・37・43・80・86平・断面図（1/40）　218
第210図　SDC01～12・14～20・22～30・33～37・39～42断面図（1/40）　219
第211図　SDC45断面図（1/40）、SDC09・17・22・45出土遺物（1/4・1/2）　220
第212図　C区包含層出土遺物（1/4・1/2）　221
第213図　B区SRB07杭類型別分布図（1/100）　224

図版目次

図版 1　原間遺跡Ⅰ区（下が北）
原間遺跡Ⅱ区（右が北）
図版 2　Ⅰ区全景（南から）
Ⅰ区全景（北から）
図版 3　Ⅱ区全景（北から）
Ⅱ区全景（南から）
図版 4　SH101全景（南から）
SH102全景（東から）
SH101遺物出土状況（東から）
図版 5　SH103全景（西から）
SH103北西部壁溝遺物出土状況（南から）
SH103南東部遺物出土状況（東から）
SH103-SK02断面（北から）
SH103-SP02断面（西から）
図版 6　SH104・105全景（南から）
SH104全景（北から）
図版 7　SH105遺物出土状況（北から）
SH105全景（北から）
図版 8　SH105遺物出土状況（西から）
SH105-SK01断面（南から）
SH106南端遺物出土状況（南から）
SH106-SP05出土遺物（南から）
図版 9　SH107全景（南から）
SH107遺物出土状況（北から）
SH107遺物出土状況（東から）
SH107遺物出土状況（東から）
図版10　SH109・110全景（北から）
SH109・110・112断面（南西から）
図版11　SH201遺物出土状況（南西から）
SH201全景（南から）
図版12　SH201-SK02断面（西から）
SH201-SK02断面（南から）
SH201-焼土塊西（南から）
SH201-焼土塊東（南から）
SH201-SK03断面（西から）
SH201-SK03遺物出土状況（東から）
SH201南西部遺物出土状況（南から）
SH201-SP15断面（南から）
図版13　SH202全景（北西から）
SH202炭化材検出状況（北西から）
SH202北東部遺物出土状況（東から）
SH202-SP05断面（西から）
図版14　SH204遺物出土状況（北から）
SH204全景（北から）
図版15　SH205遺物出土状況（東から）
SH205全景（北から）
図版16　SH205炭化物検出状況（東から）
SH205炭化材出土状況（北から）
SH205-SK03付近遺物出土状況（東から）
SH205-SK03遺物出土状況（西から）
図版17　SH208遺物出土状況（西から）
SH208全景（南から）
図版18　SH208中央部付近遺物出土状況（東から）
SH208-SP04遺物出土状況（西から）
SH208-SK01断面（東から）
図版19　SH204・205・208・209全景（北から）
SH209遺物出土状況（北から）
SH209西部遺物出土状況（東から）
SH210-SP03遺物出土状況（北から）
図版20　SH113全景（東から）
SP1001遺物出土状況（東から）
図版21　SH201・203・207付近全景（西から）
SH203-竈①東側断面（南から）
SH203-竈⑥断面（西から）
SH203-竈遺物出土状況（南から）
SH203-竈遺物出土状況（南から）
図版22　SH207遺物出土状況（東から）
SH207中央部付近遺物出土状況（北から）
SH207南東部遺物出土状況（西から）
SH207南東部SP10遺物出土状況（北から）
図版23　SB201全景（西から）
SB201-SK01断面（東部）（北から）
SB201-SK01断面（中央部）（南から）
SB201-SK01断面（西部）（北から）
SB201-SP01断面（東から）
図版24　SB201-SK02断面（南から）
SB201-SK02断面（東から）
SB201-SK03断面（東から）
SB201-SP79断面（東から）
SB101全景（南東から）
図版25　SP1002遺物出土状況（西から）
SK227遺物出土状況（南から）
SK228遺物出土状況（北から）
図版26　SK215断面（西から）
SK215全景（北から）
SK206断面（北から）
SSK201断面（西から）
図版27　SK104・105全景（南西から）
SK202断面（南から）
SK207断面（西から）
Ⅱ区南端部旧河道部トレンチ（西から）
図版28　原間遺跡遠景（南から）
原間遺跡遠景（北から）
図版29　SH101出土遺物
SH102出土遺物
図版30　SH103出土遺物（1）
図版31　SH103出土遺物（2）
SH104出土遺物
SH105出土遺物（1）
図版32　SH105出土遺物（2）
図版33　SH105出土遺物（3）
図版34　SH105出土遺物（4）
図版35　SH106出土遺物
SH104～106上面出土遺物
図版36　SH104～106付近機械掘削出土遺物
SH107出土遺物
図版37　SH108出土遺物
SH109・110出土遺物
SH201出土遺物（1）
図版38　SH201出土遺物（2）
SH202出土遺物（1）
図版39　SH202出土遺物（2）
図版40　SH202出土遺物（3）
SH204出土遺物（1）
図版41　SH204出土遺物（2）
SH205出土遺物（1）
図版42　SH205出土遺物（2）
図版43　SH208出土遺物
図版44　SH209出土遺物
図版45　SH113、SP162出土遺物
SH203出土遺物
図版46　SH207出土遺物

図版47　SH207出土遺物
SP1002、SB201出土遺物
図版48　北部包含層出土遺物（1）
図版49　北部包含層出土遺物（2）
北部包含層出土遺物（3）
図版50　SK108、SK114出土遺物
SK227・228出土遺物（1）
図版51　SK227・228出土遺物（2）
Ⅰ区ピット、SX203
図版52　Ⅰ区側溝出土遺物
Ⅱ区平面精査など出土遺物
図版53　焼成時破裂土器1
図版54　焼成時破裂土器2
図版55　Ⅲ区航空写真
図版56　Ⅲ区調査前風景　北から
Ⅲ区調査前風景　南から
図版57　Ⅲ区全景　北から
Ⅲ区全景　南から
Ⅲ区南半遺構検出状況　北から
図版58　Ⅲ区南部遺構検出状況　北から
Ⅲ区北半遺構検出状況　南から
図版59　Ⅲ区南壁土層断面　北東から
Ⅲ区西壁南端土層断面　南東から
Ⅲ区西壁南端土層断面　北東から
Ⅲ区西壁土層断面　東から（南→北）
図版60　Ⅲ区西壁土層断面　東から（南→北）
図版61　Ⅲ区SH302土層断面　東から
Ⅲ区SH303炭化木材検出状況　南東から
図版62　Ⅲ区SH303土層断面　北から
Ⅲ区SH303土層断面　北西から
図版63　Ⅲ区SH303ベッド内土層断面　北東から
Ⅲ区SH303ベッド内土層断面　南西から
図版64　Ⅲ区SH303炭化木材検出状況　南東から
Ⅲ区SH303炭化木材検出状況　南東から
図版65　Ⅲ区SH303床面炭化木材検出状況　東から
Ⅲ区SH303完掘状況　東から
図版66　Ⅲ区SH303内P01土層断面　東から
Ⅲ区SH303内P02土層断面　西から
Ⅲ区SH303内P03土層断面　東から
Ⅲ区SH303内P03遺物出土状況　西から
Ⅲ区SH303内P03遺物出土状況　南から
Ⅲ区SH303内P04土層断面　西から
Ⅲ区SH303遺物出土状況　南東から
Ⅲ区SH303床面遺物出土状況　南東から
図版67　Ⅲ区SH304・SH305検出状況　南から
Ⅲ区SH304・SH305検出状況　北西から
図版68　Ⅲ区SH306土層断面　南東から
Ⅲ区SH306土層断面　北西から
図版69　Ⅲ区SH306遺物出土状況　南東から
Ⅲ区SH306遺物出土状況　南東から
図版70　Ⅲ区SH306完掘状況　南東から
Ⅲ区SH306完掘状況　南東から
図版71　Ⅲ区SH306内SK01土層断面　北から
Ⅲ区SH306内P06・P05土層断面　東から
Ⅲ区SH306内P12土層断面　西から
Ⅲ区ST301東西土層断面西半分　北東から
Ⅲ区ST301東西土層断面西半分　北東から
Ⅲ区ST301土層断面　北西から
図版72　Ⅲ区ST302土層断面　東から
Ⅲ区SK303土層断面　南から
Ⅲ区SK306土層断面　東から
Ⅲ区SK306完掘状況　南から
Ⅲ区SK307土層断面　東から
図版73　Ⅲ区SP460遺物出土状況　西から
Ⅲ区SP461遺物出土状況　南東から
Ⅲ区SP462遺物出土状況　西から
Ⅲ区SP662遺物出土状況　西から
Ⅲ区SD301土層断面　南西から
Ⅲ区SD302土層断面　北西から
図版74　Ⅲ区SD302土層断面　北西から
Ⅲ区SD302遺物出土状況　西から
Ⅲ区SD302遺物出土状況　北から
Ⅲ区SD303土層断面　南から
図版75　A区航空写真
図版76　A区完掘全景　西から
A区完掘全景　西から
A区SDA04土層断面　北から
図版77　B区西半航空写真
図版78　B区東半航空写真
図版79　B区西半全景　西から
B区西半全景　東から
図版80　B区西半中央トレンチ土層断面　南から（西→東）
図版81　B区西半北側トレンチ上層土層断面　北から（東→西）
図版82　B区西半北側トレンチ上層土層断面　北から（東→西）
B区西半北側トレンチ下層土層断面　北から（東→西）
図版83　B区西半北側トレンチ下層土層断面　北から（東→西）
B区西半北側トレンチ下層土層断面　北西から
図版84　B区西半仮第2面東半全景　南から
B区西半仮第2面東半全景　北から
B区西半仮第2面東半全景　西から
B区西半仮第2面東半下層確認状況　西から
B区東半全景　西から
図版85　B区東半南側トレンチ土層断面　北から（東→西）
図版86　B区東半南側トレンチ土層断面　北から（東→西）
図版87　B区東半北側トレンチ土層断面　北から（東→西）
図版88　B区東半北側トレンチ土層断面　北から（東→西）
図版89　B区SKB02遺物出土状況　東から
B区SKB02遺物出土状況　東から
B区SKB04土層断面　南西から
B区SKB04土層断面　北東から
B区SKB04遺物出土状況　北西から
B区SKB04遺物出土状況　東北東から
図版90　B区SKB04遺物出土状況　北から
B区SKB04遺物出土状況　西から
B区SKB04遺物出土状況　南西から
B区SKB04遺物出土状況　西から
B区SKB04遺物出土状況　西から
B区SKB04完掘状況　北から
図版91　B区SKB05土層断面　西から
B区SKB05遺物出土状況　西から
B区SKB09土層断面　東から
B区SKB09土層断面　東から
B区SKB09土層断面　東から
B区SKB09遺物出土状況　東から
図版92　B区SKB09遺物出土状況　東から
B区SKB09最下層遺物出土状況　東から
B区SKB09完掘状況　東から

B区SKB10土層断面　北東から
B区SKB11検出状況　南から
B区SKB11検出状況　東から
図版93　B区SKB11土層断面　北東から
B区SKB11土層断面　北から
B区SKB11土層断面　西から
B区SKB11完掘状況　南から
B区SKB12土層断面　西から
B区SKB13土層断面　西から
図版94　B区SDB04土層断面　北から
B区SXB02遺物出土状況　南から
B区SXB02遺物出土状況　北から
B区SXB02遺物出土状況　北西から
図版95　B区SRB04土層断面　北から
B区SRB04土層断面　北から
B区SRB04土層断面　北から
図版96　B区SRB04遺物出土状況　西から
B区SRB05検出状況　南から
B区SRB05検出状況　南から
図版97　B区SRB06土層断面　西から
図版98　B区SRB06流木出土状況　西から
B区SRB06流木出土状況　南から
図版99　B区SRB06流木出土状況　北から
B区西端予備調査トレンチ土層断面　南から
図版100　B区第２面SRB07航空写真
図版101　B区SRB07杭検出状況北半全景　西から
B区SRB07杭検出状況中央全景　西から
図版102　B区SRB07杭検出状況南半全景　西から
B区SRB07杭検出状況　北から
図版103　B区SRB07杭検出状況　北から
B区SRB07南端杭検出状況　北から
図版104　B区SRB07杭検出状況　南から
B区SRB07杭検出状況　南から
図版105　B区SRB07杭検出状況　南から
B区SRB07杭検出状況　南から
図版106　B区SRB07杭検出状況　西から
B区SRB07杭検出状況　西から
図版107　B区SRB07杭検出状況　南から
B区SRB07杭検出状況　南から
B区SRB07杭検出状況　南から
図版108　B区SRB07杭検出状況　北から
B区SRB07杭下層検出状況　南から
B区SRB07杭下層検出状況　南から
図版109　B区SRB07杭下層検出状況　南から
B区SRB07杭下層検出状況　南から
図版110　B区SRB07杭下層検出状況　北から
B区SRB07杭下層土層断面　南から
図版111　B区SRB07杭下層土層断面　南から
B区SRB07杭下層土層断面　北から
図版112　B区SRB07杭下層土層断面　南から
B区SRB07杭下層土層断面　北から
図版113　C区航空写真（左：西側、右：東側）
図版114　C区東半全景　西から
C区西半全景　西から
C区西半全景　西から
図版115　C区西半遺構検出状況　西から
C区西半中央南部遺構検出状況　北から
C区西半中央北部遺構検出状況　東から
図版116　C区北壁土層断面　南東から
C区北壁土層断面　南から
C区北壁土層断面　南から
C区北壁土層断面　南から
C区北壁土層断面　南から
図版117　C区SKC01土層断面　西から
C区SKC04土層断面　西から
C区SKC04礫及び遺物出土状況　西から
C区SKC04礫除去後半截　西から
C区SKC04礫除去後半截　西から
C区SKC04完掘状況　西から
図版118　C区SPC80土層断面　西から
C区SPC86土層断面　南西から
C区SDC01土層断面　南から
C区SDC02土層断面　南から
C区SDC04土層断面　南から
C区SDC05土層断面　南から
C区SDC06土層断面　南から
C区SDC07土層断面　南から
図版119　C区SDC08土層断面　南から
C区SDC09土層断面　南から
C区SDC10土層断面　南から
C区SDC11土層断面　南から
C区SDC12土層断面　南から
C区SDC13土層断面　南から
C区SDC14土層断面　南から
C区SDC15土層断面　南から
図版120　C区SDC16土層断面　南から
C区SDC17土層断面　南から
C区SDC18土層断面　南から
C区SDC19土層断面　南から
C区SDC25土層断面　北から
C区SDC26土層断面　北から
C区SDC27･28土層断面　北から
C区SDC29土層断面　北から
図版121　C区SDC34土層断面　南から
C区SDC35土層断面　北から
C区SDC35土層断面　北から
C区SDC36土層断面　南から
C区SDC39土層断面　北から
C区SDC40･41土層断面　南から
C区SDC42土層断面　北から
C区SDC43土層断面　北から
図版122　C区SDC45西畦土層断面　東から
C区SDC45中央畦土層断面　東から
C区SDC45東畦土層断面　東から
C区SDC45東畦土層断面　東から
C区SRC01検出状況　東北東から
C区SRC01検出状況　北から
図版123　C区SRC02下層土層断面　南から
C区SRC02下層土層断面　南から
C区SRC02下層土層断面　南から
C区SRC02下層土層断面　南から
C区SRC02下層土層断面　南から
C区SRC02全景　北から
図版124　遺物写真１
図版125　遺物写真２
図版126　遺物写真３
図版127　遺物写真４
図版128　遺物写真５
図版129　遺物写真６
図版130　遺物写真７
図版131　遺物写真８
図版132　遺物写真９
図版133　遺物写真10
図版134　遺物写真11
図版135　遺物写真12
図版136　遺物写真13
図版137　遺物写真14
図版138　遺物写真15
図版139　遺物写真16
図版140　遺物写真17

表　目　次

第1表	新旧調査区名対応および面積一覧	3
第2表	発掘調査および整理作業体制	4
第3表	Ⅰ・Ⅱ区竪穴住居一覧	116
第4表	Ⅰ・Ⅱ区土坑一覧	116
第5表	Ⅲ区　柱穴埋土及び出土遺物一覧	CD内
第6表	竪穴住居跡内出土遺物角閃石混入状況	CD内
第7表	Ⅲ区検出竪穴住居跡属性一覧	161
第8表	B区SRB07出土杭観察表	CD内
第9表	焼失家屋SH303出土炭化材樹種同定結果	230
第10表	SRB07出土杭材の樹種同定結果	235
第11表	SRB07出土杭材のセット関係ごとの樹種比較	236

付　図　目　次

付図1	Ⅰ区遺構配置図（1/100）
付図2	Ⅱ区遺構配置図（1/100）
付図3	Ⅲ区遺構配置図及び南壁西壁土層断面図（1/40）
付図4	A～C区遺構配置図（1/200）

第１章　調査にいたる経緯と経過

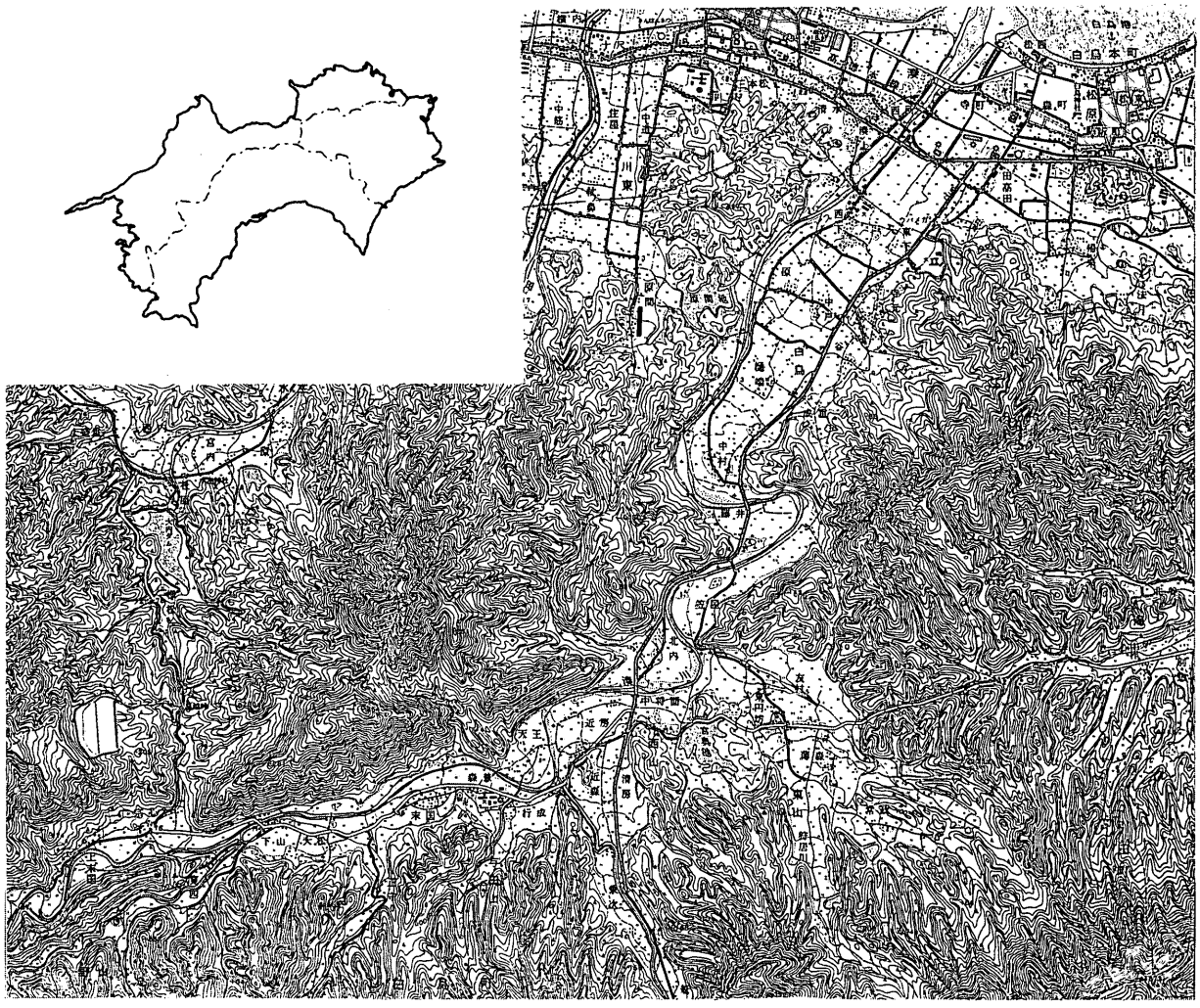
第１節　調査の経緯

県道大内白鳥インター線は、四国横断自動車道大内白鳥インターチェンジと国道11号との間約２㎞をつなぐアクセス道路として計画されたもので、現道の拡幅工事が主体である。

香川県教育委員会が平成８年度に試掘調査を実施したところ、道路用地内のうち、北側の微高地上で古墳時代の遺構・遺物が、南側の微高地上では弥生土器片を多量に含む遺物包含層が確認された。この結果から、北部の地域1,275㎡を「住屋遺跡」、南側の地域1,009㎡を「原間遺跡」とし，保護措置の必要な地域とした。平成９年度には、引き続き実施された試掘調査の結果、前年度に保護措置を必要とした地域の南側1,680㎡についても保護措置の必要な地域とした。

また、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成９年度に四国横断自動車道および県道大内白鳥インター線用地内で実施した予備調査の結果、県道から横断道への進入路部分5,173㎡についても発掘調査を実施することとした。

平成８年度の試掘調査で保護措置が必要とされた範囲については、平成11年度に、平成９年度に保護措置が必要とされた範囲については平成13年度に発掘調査を実施し、原間遺跡の調査は終了した。



第１図　遺跡の位置（１/50,000）

第２図　調査区割図（１/8,000）

第２節　調査の経過

発掘調査は平成９年度・11年度・13年度の計３年度にわたって実施された。

平成９年度調査

平成９年９月１日から平成10年３月31日までの６ヶ月間で調査を実施した。調査対象面積は5,173㎡を測る。これを大きく３区にわけ、東側から調査区名を付けている（第２図）。当初、同年度に四国横断自動車道建設に伴い原間遺跡（以下横断原間遺跡）の調査が実施されており、調査区名はこの横断原間遺跡から連続して付けられていた。その後、横断原間遺跡の整理作業が実施され、調査区名の付け直しがされたことから、今回の原間遺跡の報告でも別の調査区名を付けることにした。新旧調査区名対応及び面積一覧表を付ける（第１表）。調査地の旧地目は全て田である。遺跡は旧大内町と旧白鳥町の行政境にまたがっており、A・B区が白鳥町側に、C区が大内町側に位置する。調査に際しては旧国土座標系第Ⅳ系を用いた基準点を設置し、記録作業の基準とした。発掘調査は調査員３名で、直営方式で行なった。なお、調査員は途中で配置転換があり、担当者は４名となる。

	旧	新	調査面積(㎡)	合計(㎡)
調査区名	Ⅴ区	A区	436	436
	Ⅵ区 - ①	B区	1,720	3,308
	Ⅵ区 - ②		1,588	
	Ⅶ区 - ①	C区	711	1,429
	Ⅶ区 - ②		718	
			総面積(㎡)	5,173

第１表　新旧調査区名対応および面積一覧

平成11年度調査

平成11年４月１日から５月31日までの２ヶ月間で調査を実施した。調査対象面積は1,009㎡を測る。

調査に際しては対象地内を通る旧国土座標系第Ⅳ系を基に20m四方のグリッドに割りを行なった。グリッド割りはY軸76.850を中心に東西に分け、西を１、東を２とした。また、北から順にA．B．C．…とし、グリッド名は両者の組み合わせによって命名している。

今回、当調査区の調査成果報告にあたり、新たに調査区名を設定しなおした。当調査区の南側で平成13年度において調査が実施され、平成15年度にその整理作業が行われた際に調査区をⅠ・Ⅱ区と命名したため、平成11年度の調査はそれに続く調査区であることを示すⅢ区という名前を付けて報告することとした。

平成13年度調査

平成13年度は平成13年７月１日～11月22日までの４ヶ月半で調査を実施した。調査対象面積は1,680㎡である。

調査は対象地を北と南を２地区にわけ、北側をⅠ区、南側をⅡ区とし、Ⅰ区から調査に着手した。報告書に記載した地区名は調査時のものを踏襲している。調査に際しては旧国土座標第Ⅳ系を用いた基準点を設置し、記録作業の基準とした。発掘調査は調査員３名で、直営方式で行った。

第３節　　整理作業の経過

整理作業は、平成13年度に発掘調査をしたものについては平成15年11月１日～平成16年３月31日までの５ヶ月間、平成９年度および11年度に発掘調査をしたものについては平成16年４月１日～10月31日までの７ヶ月間で実施した。

なお、発掘調査及び整理作業の体制は表２のとおりである。

発掘調査									整理作業					
香川県教育委員会														
	平成９年度		平成11年度		平成13年度		平成15年度		平成16年度					
総括	課長	菅原良弘	課長	小原克己	課長	北原和利	総括	課長	北原和利	総括	課長	北原和利		
	課長補佐	北原和利	課長補佐	小国史郎	課長補佐	小国史郎	芸術文化グループ	課長補佐	森岡修	芸術文化グループ	課長補佐	森岡修		
	副主幹	渡部明夫	副主幹	廣瀬常雄	副主幹	大山真充		主任	香川浩章		主任	香川浩章		
総務	係長	山崎隆	係長	中村禎伸	副主幹	中村禎伸		主任	須崎陽子		主任	堀本由紀		
	主査	星加宏明(~5.31)	主査	三宅陽子	主査	須崎陽子		主任主事	八木秀憲		主任主事	八木秀憲		
	主事	松村崇史(6.1~)	主査	松村崇史	主事	亀田幸一	文化財グループ	副主幹	大山真充	文化財グループ	課長補佐	大山真充		
	主事	打越和美						主任	片桐孝浩		主任	山下平重		
埋蔵文化財			係長	西村尋文				文化財専門員	佐藤竜馬		文化財専門員	佐藤竜馬		
	文化財専門員	木下晴一	文化財専門員	森　格也	主任	西岡達哉		主任技師	松本和彦		主任技師	松本和彦		
	技師	塩崎誠司	技師	塩崎誠司	文化財専門員	古野徳久								
					文化財専門員	宮崎哲治								
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター										香川県埋蔵文化財センター				
総括	所長	大森忠彦	所長	菅原良弘	所長	小原克己	総括	所長	中村仁	総括	所長	中村仁		
	次長	小野善範	次長	小野善範	次長	川原裕章		次長	渡部明夫		次長	渡部明夫		
総務	係長	田中秀文(6.1~)	副主幹	六車正憲	参事	河野浩征		副主幹	野保昌弘		課長	野保昌弘		
	主査	前田和也(~5.31)	副主幹	田中秀文	副主幹	大西誠治	総務	係長	多田敏弘	総務	係長	松崎日出穂		
	主事	佐々木隆	係長	新一郎	係長	多田敏弘		主査	塩崎かおり		主査	塩崎かおり		
			主査	山本和代	主査	山本和代		主任主事	田中千晶		主査	田中千晶		
調査	参事	近藤和史	参事	長尾重盛	参事	梅木正信								
	主任文化財専門員	大山真充	主任文化財専門員	大山真充	主任文化財専門員	廣瀬常雄	調査	主任文化財専門員	真鍋昌宏	資料普及	課長（兼）	渡部明夫		
	主任文化財専門員	藤好史郎	主任文化財専門員		主任文化財専門員	藤好史郎		文化財専門員	山元素子		主任技師	小野秀幸		
	文化財専門員	喜岡永光												
	文化財専門員	岡本利	文化財専門員	片桐孝浩	文化財専門員	山元素子								
	技師	小野秀幸	文化財専門員	多田佳弘	主任技師	石原徹也								
	調査技術員	陶山仁美	調査技術員	正山泰久	調査技術員	松田朝由								

第２表　発掘調査および整理作業の体制

整理作業に携わった方々は以下のとおりである。

平成15年度

整理員　　猪木原美恵子

整理補助員　　矢野ゆかり

整理作業員　　森光恵、松本恭子、白川智子、米田静江

平成16年度

磯崎福子、北濱敦子、小林里美、鈴木菜穂子、前田好美、松下美沙穂

第2章　調査の成果

第1節　Ⅰ・Ⅱ区の土層序

Ⅰ区西壁土層（第3・4図）

Ⅰ区西壁の土層断面である。南から北へ傾斜する地形で、延長64mで、高低差は旧地表面では約1.2m、遺構面では約1.7mある。西壁の土層断面には地境と考えられる箇所が少なくとも4箇所認められ、5面の水田があったことがわかる。北側の水田ほど遺構面の上面に旧耕土と考えられる土層の堆積が厚く認められる。基本層序は、南から2面目までの水田までは耕作土の下部にベースが認められ、ベースは黄褐色砂、その下部が明褐色砂である。3面目の水田面では北半部より北側で耕作土とベースの間に灰褐色粗砂質土、暗灰褐色粗砂混弱粘質土の堆積が認められる。ベースは黄褐色粗砂混粘質土で、その下部に明褐色粗砂のベースがある。この水田面と4面目の水田面の境は旧地表面で際立った段差が認められる。4面目と5面目には耕作土の下部に明灰色砂質土・灰褐色粗砂混粘質土などの旧耕作土の堆積がみられ、その下部にはFe・Mnの集積層を挟んで茶灰褐色砂質土・灰褐色砂質土の包含層が見られる。包含層の堆積は4面目の水田部分では底部に凹凸が見られるが、最も北側の5面目ではほぼ水平堆積である。この包含層からは弥生土器の小片が、また、包含層除去後には弥生土器集中箇所が数ヶ所見られた。ベースは4面目部分で赤褐色砂、褐灰色粗砂、5面目では黄褐色粗砂混粘質土、茶褐色砂である。

Ⅰ区北壁土層（第4図）

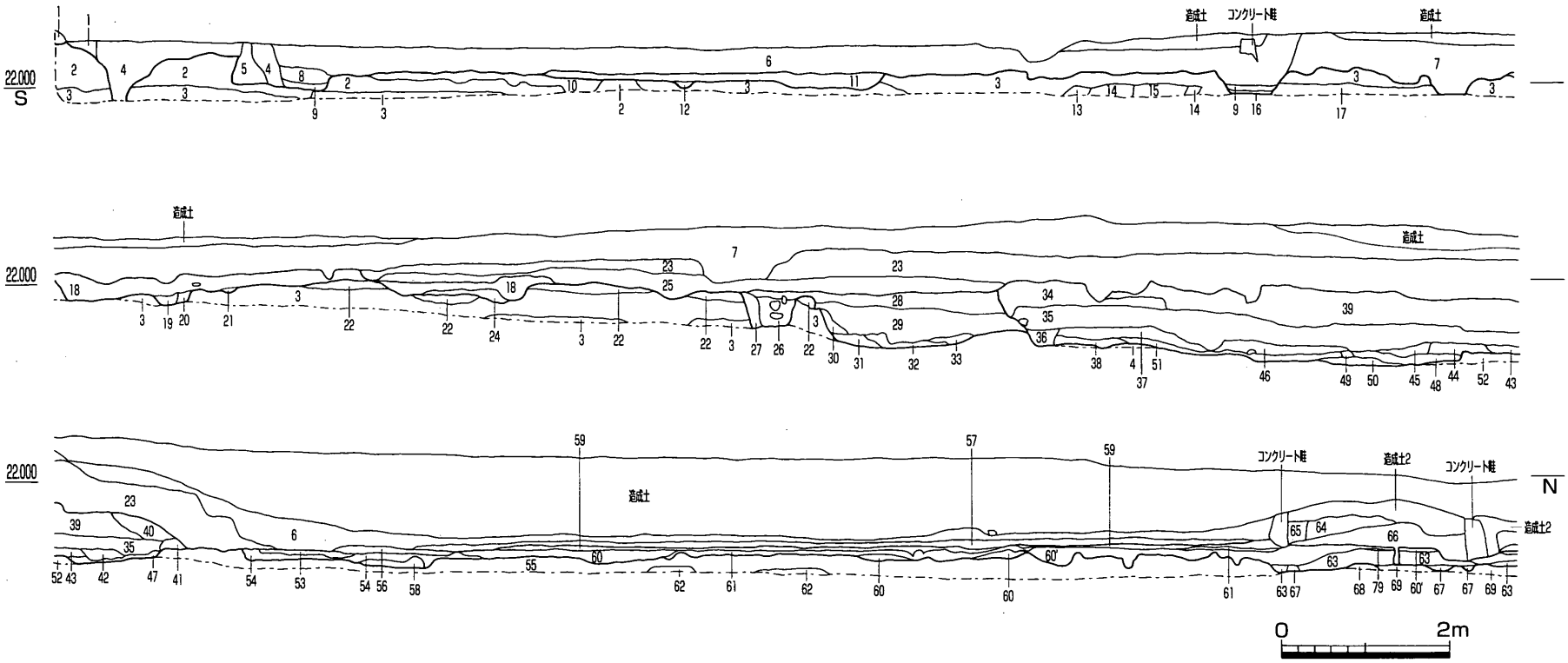
Ⅰ区北端部分および10m南側の屈曲部で作成した土層図である。厚さ約70cmの造成土・耕作土・旧耕土の下部に厚さ30cmの濃茶褐色砂混粘質土・灰褐色砂質土の包含層が堆積し、黄褐色粗砂混粘質土のベースを検出した。平面的には検出できなかったものの、包含層の上面から溝が切り込まれていたことが観察でき、その溝は平成11年度調査区の古代後半の溝へ連続すると考えられる。包含層の上面の標高は20.8m、遺構面の標高は20.5mであった。

Ⅱ区西壁土層（第5図）

Ⅱ区西壁土層の北半部である。南端付近では厚さ40～50cm程度の耕作土・茶褐色腐植土（旧耕土）の下部で明黄褐色砂質土のベースが認められた。SH209より北側ではベースは黄褐色砂質土に茶褐色土が筋状に混入するのが認められた。Ⅰ区との境から10m付近ではベースは黄褐色砂混弱粘質土・黄茶褐色粗砂混弱粘質土などが厚さ約20cmにわたって堆積し、その下部には明黄褐色砂層・明灰褐色砂層が堆積する。また、Ⅰ区との境から10m付近では厚さ20～30cmの茶褐色砂混粘質土層・暗灰褐色砂混弱粘質土層の包含層の堆積が認められた。遺構面の標高は22.9～22.7mである。

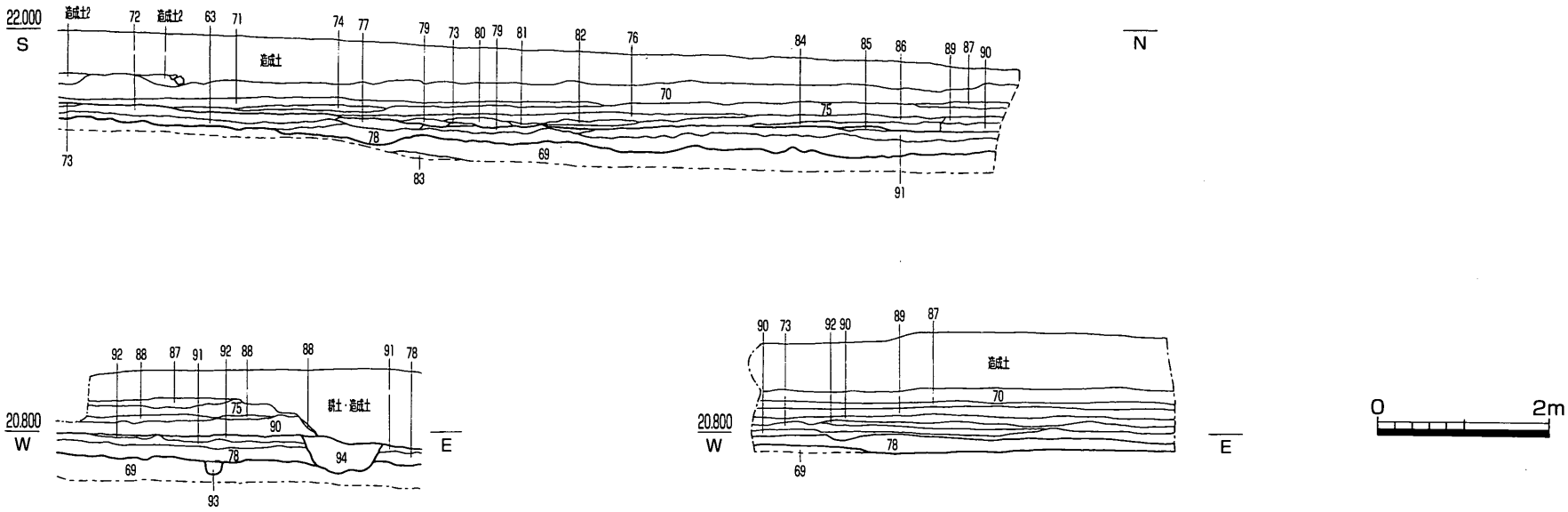
Ⅱ区西壁土層（第6図）

Ⅱ区西壁土層の南半部である。遺構の希薄な箇所で、古川に最も近づく箇所である。土層断面では南端から5m付近までは耕作土の下部で古川の氾濫源が認められた。氾濫源の埋土は肩付近が褐色・明褐色・茶褐色砂質土で、その他が上部から茶褐色・灰褐色砂（粘土混）、暗灰色・暗灰褐色粘土、茶褐色砂であった。埋土中からは備前焼擂鉢が出土しており、古くても近世以降の堆積物である。さらに5m北側まではさらに古い古川の氾濫源が認められた。埋土は上部は明褐色・赤茶褐色・明黄褐色砂・粗砂などで、下部肩付近は明灰褐色・青灰白色・オリーブ灰白色粘土・砂混粘土などであった。いずれも氾濫源の立ち上がりが急であるが、現在の流路もこの地点付近で南から東へ急激に方向を変えており、流路の変換点の内側に当たるために肩の立ち上がりが急激であると考えられる。これより北側の地点でも



1. 褐色粗砂質土　10YR5/4
2. 明黄褐色砂（ベース）10YR7/4
3. 明褐色粗砂（ベース）　10YR6/4
4. 黄褐色粗砂　10YR5/6
5. 褐灰色粗砂　2.5Y4/1
6. 旧耕土
7. 褐灰色粗砂混粘質土（旧耕土）
8. 褐色砂質土　2.5Y5/3
9. 黄褐色粗砂混粘質土　2.5Y7/8
10. 褐色粗砂混砂質土　2.5Y5/4
11. 褐色粗砂混砂質土　2.5Y5/3
12. 褐色粗砂質土　2.5Y5/2
13. 明褐色砂（ベース）　10YR6/4
14. 明灰色砂（ベース）　5Y4/1
15. 明黄褐色砂（ベース）　10YR6/6
16. 灰褐色砂質土　10YR4/2
17. 黄褐色粗砂混粘質土（ベース）　10YR5/6
18. 暗褐色粗砂混弱粘質土　10YR4/1
19. 褐灰色粗砂混弱粘質土　2.5Y4/1
20. 褐色粗砂混砂質土　2.5Y5/2
21. 褐灰色砂混粘土（ベースブロック混）　2.5Y4/1
22. 褐灰色砂質土　2.5Y5/2
23. 褐灰色粗砂質土　2.5Y5/2
24. 18 でやや砂っぽい
25. 暗灰褐色粗砂混弱粘質土　2.5Y4/1
26. 暗褐色砂混粘質土　2.5Y4/1
27. 褐灰色砂質土　2.5Y5/2
28. 暗褐灰色砂混粘質土　2.5Y3/1
29. 暗灰褐色砂混弱粘質土　5Y3/1
30. 29 で黄色土ブロックが少し混
31. 29 で黄色土ブロックが多く混
32. 暗灰色砂質土　N4/
33. 32 で黄色土ブロック多く混
34. 灰褐色粗砂質土　10YR4/2
35. 褐色粗砂質土　2.5Y5/3
36. 暗灰褐色砂質土　10YR3/2
37. 灰褐色粗砂混砂質土　10YR4/1
38. 37 で黄色土ブロック混
39. 褐灰色粗砂混弱粘質土　10YR4/1
40. 黄茶褐色砂質土で 39 の土が混（旧耕土）　2.5Y5/3
41. 黄茶褐色粗砂　10YR6/6 で 35 の土が混
42. 茶褐色粗砂質土　10YR4/4
43. 42 で汚れた土が混
44. 茶褐色粗砂混弱粘質土　10YR4/2
45. 黄茶褐色粗砂混弱粘質土　10YR5/3
46. 褐色砂質土　10YR5/2
47. 褐色砂質土　10YR5/2
48. 暗茶褐色細砂混弱粘質土　10YR3/2

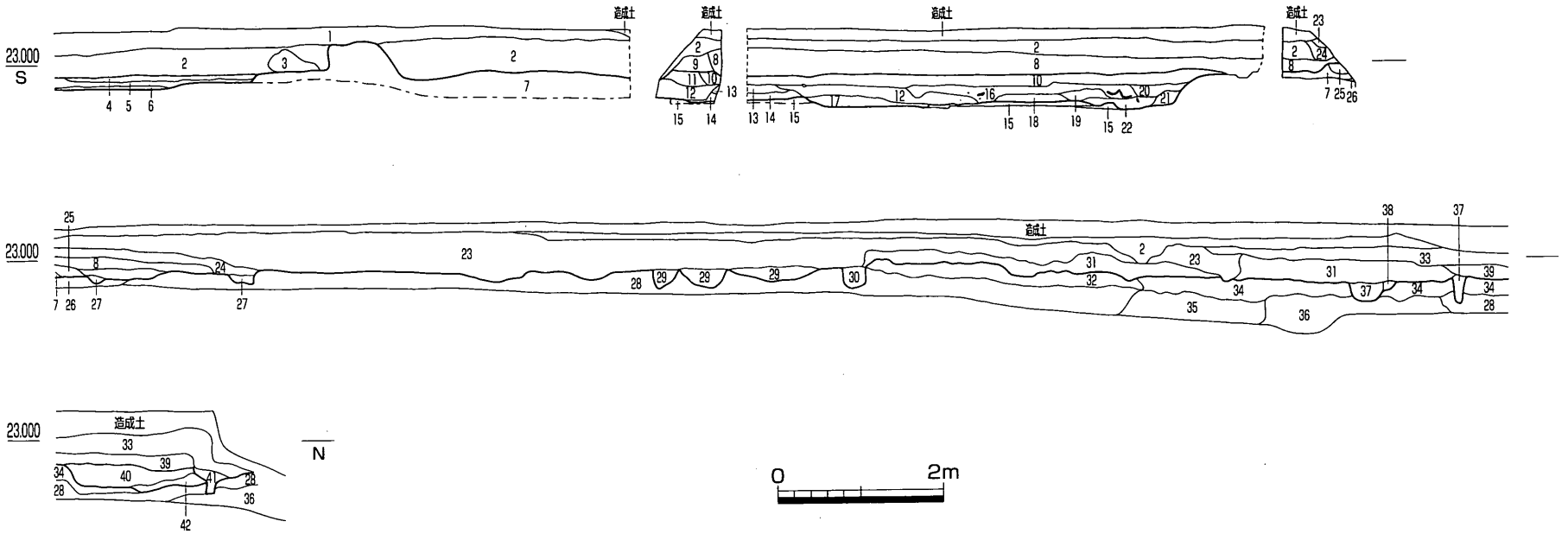
第 3 図　I 区西壁土層断面図 1 （1 /80）



49. 黄茶褐色粗砂ブロック　10YR6/6
50. 褐色砂質土　10YR6/2
51. 明黄褐色砂　2.5Y8/6
52. 黄褐色砂（ベース）　10YR7/6
53. Mn 集積層（包含層）
54. 茶灰褐色砂質土（包含層）10YR5/2
55. 赤茶褐色砂（ベース）　7.5YR6/6
56. 灰褐色粗砂混砂質土（Fe 多い）　10YR5/2
57. 明灰色砂質土（Fe 混）（旧耕土）
58. 茶褐色粗砂混弱粘質土（包含層）　10YR3/3
59. Fe 集積
60. 灰褐色粗砂混砂質土（上面 Mn 集積）（包含層）　10YR5/2
60' 茶褐色砂混弱粘質土（上面 Mn 集積）（包含層）　10YR4/2
61. Mn、Fe 集積層
62. 褐灰色粗砂（ベース）　5Y5/1
63. 60 でやや色が薄い（包含層）
64. 明灰色砂質土（旧耕土）
65. 64 で Fe 多い
66. 灰色砂質土（旧耕土）
67. 暗褐色砂質土　10YR3/2
68. 黄褐色粗砂（63 の土混）（ベース）　10YR5/8
69. 黄褐色粗砂混粘質土（ベース）　10YR5/6
70. 旧耕土
71. 灰白色砂質土（旧耕土）Fe 多　7.5Y6/1
72. 暗茶褐色砂混粘質土（上面に Mn、Fe 集積）　10YR3/2
73. Mn、Fe 集積
74. 褐色砂質土で Fe 多い　10YR5/2（旧耕土）
75. 明褐色砂質土　2.5Y5/2
76. 赤茶褐色粘質土　7.5YR4/4
77. 上面に Mn 集積、茶褐色砂混粘質土　10YR3/2
78. 灰褐色砂質土（包含層）　10YR5/2
79. Mn 集積
80. Mn、Fe 集積　褐色砂質土が少し混　10YR5/2
81. Fe 集積
82. Mn 非常に多い茶褐色粘質土　10YR3/2
83. 茶褐色砂（ベース）　7.5YR3/4
84. 86 で茶褐色土多く混、Mn 混　10YR5/1
85. 茶褐色砂混粘質土　7.5YR3/4
86. 褐色砂質土（Mn、茶褐色土混）　10YR5/2
87. 明褐色砂質土　2.5Y5/1
88. 茶褐色砂質土　10YR4/3
89. 明褐色砂質土　2.5Y5/2（Fe 少し混）
90. 明灰褐色砂質土　2.5Y5/2
91. 濃茶褐色砂混粘質土（Mn 集積層）
92. 赤茶褐色砂質土（Fe 集積層）
93. 灰褐色粗砂質土（ピット？）
94. 褐灰色砂質土（Mn 混）　溝

11·12　SH108、18～21　SH113、28～33　SH111、34～51　SH106

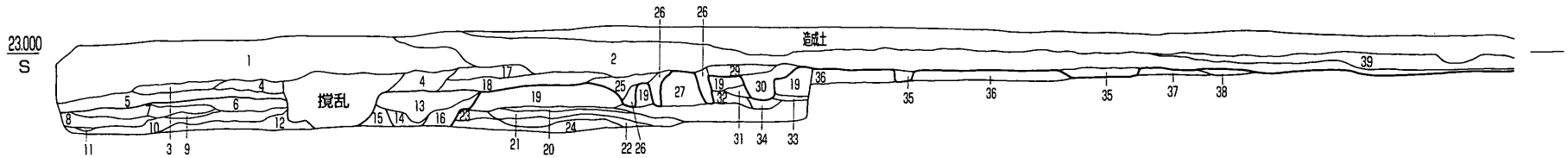
第 4 図　I 区西壁土層断面図 2 、北壁土層断面図（1 /80）



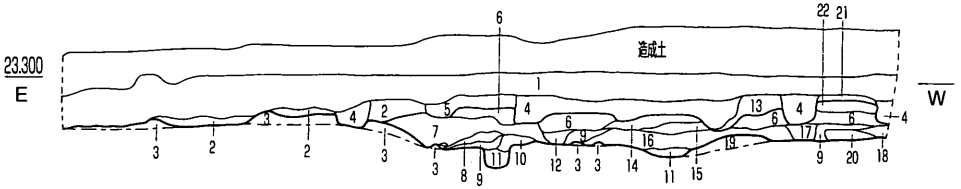
1. 旧耕土
2. 茶褐色腐食土（旧耕土） 10YR4/2
3. 2とベースの混合
4. 褐色砂質土（黄色土混） 10YR6/2
5. 茶褐色砂質土（固い） 10YR5/2
6. 明灰褐色砂質土 10YR6/1
7. 明黄褐色砂質土（ベース） 10YR7/6
8. 茶褐色粗砂混弱粘質土（旧耕土） 10YR3/2
9. 明褐色砂質土（旧耕土） 10YR6/2
10. 褐灰色砂質土（灰色土、黄色土ブロック混） 2.5Y5/1
11. 褐色砂質土（黄色土少し） 7.5YR4/1
12. 茶褐色砂質土（黄色土、炭混）（固い） 10YR4/1
13. 黄褐色砂質土（褐色土混） 10YR7/6
14. 褐色砂質土 7.5YR5/1
15. 黄褐色砂質土で褐色土混（ベースの土壌化層） 10YR7/8
16. 褐色砂質土で焼土ブロック、黄色土ブロック混（固い） 7.5YR4/1
17. 灰褐色砂質土（黄色土混） 10YR5/1
18. 黄茶褐色砂質土（茶褐色土ブロック混）（焼土塊） 10YR6/4
19. 褐色砂質土（黄色土混） 7.5YR4/1
20. 明褐色砂質土で黄色土混 7.5YR5/1
21. 暗褐灰色砂質土（固い） 10YR3/2
22. 暗褐砂質土（固い） 7.5YR3/1
23. 茶褐色砂質土 10YR4/2
24. 茶褐色砂混弱粘質土 10YR4/2
25. 褐色砂質土で黄色土混 10YR5/2
26. 黄褐色砂質土で褐色土混（ベース、土壌化層） 10YR7/6
27. 暗褐色砂混弱粘質土 7.5YR4/1
28. 黄褐色砂質土（茶褐色土筋状）（ベース） 10YR7/6
29. 黄茶褐色砂質土で灰色土混 10YR5/6
30. 暗褐色砂質土 10YR4/2
31. 茶褐色砂混弱粘質土（固い） 2.5Y4/1
32. 黄褐色砂混弱粘質土（固い、ベース） 2.5Y4/3
33. 黄褐色砂質土（旧耕土） 10YR5/4
34. 黄茶褐色粗砂混弱粘質土 10YR5/4
35. 明黄褐色砂（褐色土横縞状、ベース） 10YR8/4
36. 明灰褐色砂（ベース） 10YR6/2
37. 暗褐色砂質土 10YR3/2
38. 34で37の土が少し混
39. 暗灰褐色砂混弱粘質土 2.5Y3/2
40. 暗褐色砂質土（遺構？） 10YR3/1
41. 茶褐色砂混粘質土 10YR4/2
42. 暗黄褐色砂混粘質土 10YR5/3

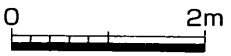
4～6 SH208、9～14・16～22 SH209

第5図 Ⅱ区西壁土層断面図1（1/80）



1. 黄褐色砂質土（旧耕土）
2. 旧耕土
3. 灰褐色（粗砂混）砂質土　10YR5/2
4. 褐色（粘土混）砂　10YR4/2
5. 褐灰色砂質土　2.5Y5/2
6. 茶褐色砂（粘土混）　10YR3/3
7. 灰褐色砂（粘土・粗砂混）　10YR4/2
8. 灰褐色砂混粘土　2.5Y4/2
9. 灰褐色砂質土で青灰色土混　2.5Y4/2
10. 暗灰色粘土　N2/
11. 暗灰褐色粘土　2.5Y3/3
12. 茶褐色砂　10YR4/3
13. 褐色砂質土　10YR4/1
14. 茶褐色砂質土　10YR3/3
15. 青灰色砂質土　10BG4/1
16. 明褐色砂質土　2.5Y7/4
17. 茶褐色砂質土　2.5Y4/3
18. 茶褐色砂質土（17より濃い）　10YR3/3
19. 明褐色砂　7.5YR6/2
20. 明灰褐色砂混粘土　7.5YR6/1
21. 明灰褐色粘土　7.5YR6/1
22. 青灰白色粘土　2.5GY8/1
23. 青灰白色砂混粘土　2.5GY8/1
24. オリーブ灰白色粘土　10Y8/2
25. 茶褐色砂質土（木の根多い）　10YR4/1
26. 灰褐色砂質土　10YR5/1
27. 赤茶褐色粗砂（ベース）　5YR5/6
28. 明灰褐色砂　10YR5/2
29. 灰褐色粗砂混砂質土　10YR5/2
30. 灰色粗砂混砂質土　5Y5/1
31. 明黄灰色粗砂　2.5Y6/3
32. 赤茶褐色粗砂（Fe集積）　5YR4/4
33. 暗褐色粘質土　10YR4/1
34. 茶褐色砂　10YR4/2
35. 明褐灰色粗砂　10YR6/2
36. 黄褐色粗砂　10YR7/6
37. 明褐色砂質土　10YR6/2
38. 黄褐色砂　10YR6/4
39. 褐色砂質土（旧耕土）　10YR5/3

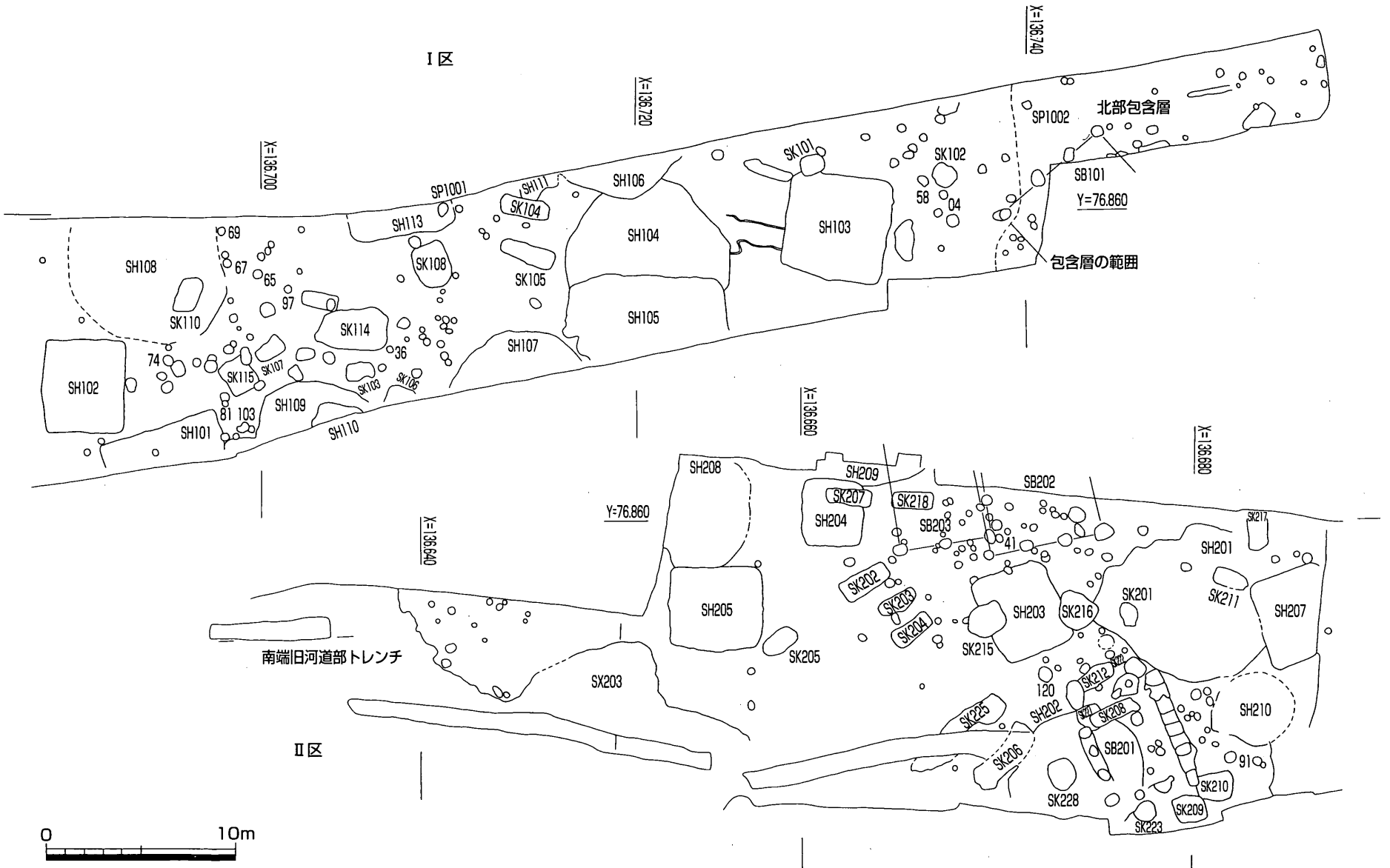




1. 旧耕土
2. 褐灰色砂質土（暗褐色土混）　2.5Y5/1
3. 明黄灰色砂（ベース）　5Y6/2
4. 茶褐色砂質土（鋤溝）　10YR4/1
5. 褐色砂質土　10YR4/2
6. 褐灰色砂質土（暗褐色土が横縞状に入る）　5Y5/1
7. 暗褐灰色砂質土（暗褐色土が横縞状に入る）　7.5Y4/1
8. 灰褐色砂質土　10YR5/1
9. 暗褐灰色砂質土（固い）　10YR4/1
10. 明褐灰色砂＋暗褐色土　2.5Y5/1
11. 明褐色粗砂（茶褐色土筋状）　10YR6/1
12. 褐灰色砂質土で暗褐色土が太く筋状に入る　10YR5/1
13. 明褐色砂（暗褐色土縞状に入る）　2.5Y6/2
14. 褐灰色砂質土（暗褐色土が横縞状）　5Y5/1
15. 灰褐色砂質土（暗褐色土が横縞状）　2.5Y5/1
16. 灰褐色砂質土（暗褐色土が太く横縞状）　2.5Y5/1
17. 暗褐色砂質土　7.5YR4/1
18. 茶褐色砂質土（固い）　10YR6/1
19. 明褐色粗砂（ベース）　10YR8/3
20. 灰～灰褐色砂（茶褐色土横縞状）　2.5Y5/1
21. 褐灰色砂質土（旧耕土）　2.5Y6/1
22. 褐色砂質土　7.5YR4/1

6～12・14～18・20　SH208

第6図　Ⅱ区西壁土層断面図2、南壁土層断面図（1/80）



第７図　遺構配置図（１/300）

耕作土直下のベースは黄褐色粗砂であり、地盤は不安定であったことがわかる。ベースの標高はおおむね22.8mである。

Ⅱ区南壁土層（第６図）

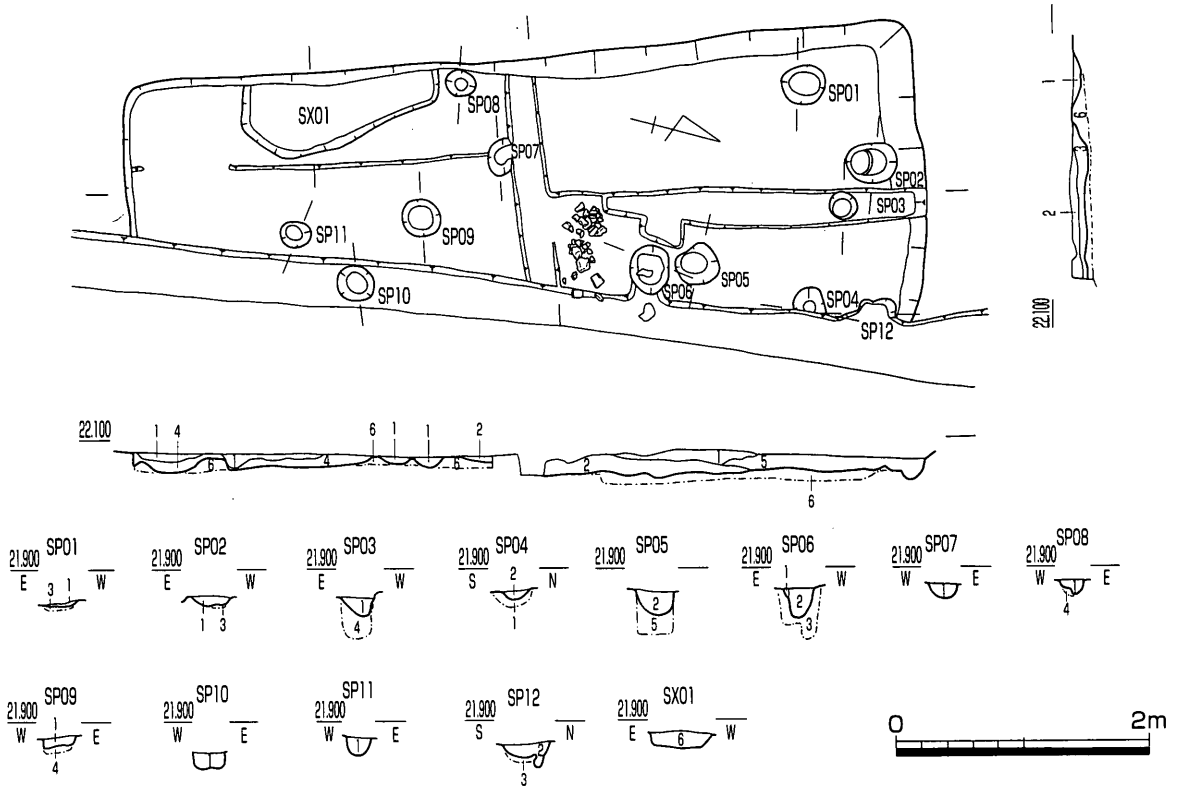
Ⅱ区の南端部から約21mで調査区が西側へ屈曲して広がる部分の南壁土層である。西から５m付近までSH208の断面が観察できる。層序は30～50cmの造成土の下部に厚さ30～40cmの耕作土、厚さ10cm程度の褐色砂質土（旧耕土）などが堆積し、その下部に東側では明黄灰色砂、西側では明褐色粗砂のベースがみられた。遺構面の標高はおおむね22.9mである。

第２節　Ⅰ・Ⅱ区の遺構・遺物

（１）竪穴住居

SH101（第８・９図、図版４・29）

Ⅰ区南東部で検出した竪穴住居である。東部2/3程度は調査区外へ延びる。方形で１辺6.3m、深さは遺構面から15cm、推定の面積は39.7m²、主軸方向はN19°Wである。埋土は褐色砂質土、茶褐色砂・粗砂混弱粘質土である。竪穴住居内からは12基のピットを検出した。主柱穴の特定は難しいが、４穴とすればSP06･10が主柱穴の一部と考えられる。ピットは直径約20～30cmの円形で、深さはおおむね15～25



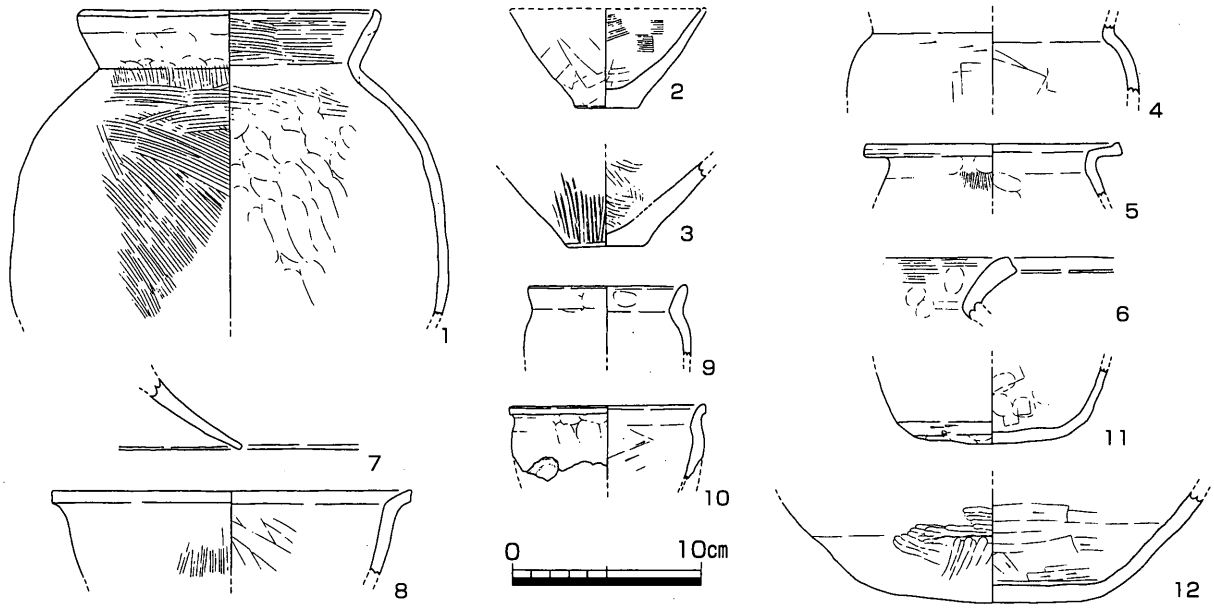
SH101　土層

1. 褐色砂質土　10YR6/3
2. 茶褐色粗砂混弱粘質土　10YR4/4
3. 褐色砂混弱粘質土　10YR4/2
4. 褐色砂　2.5Y5/2
5. 茶褐色砂混弱粘質土　10YR4/2
6. 明褐色砂（ベース）10YR7/3

ピット等　土層

1. 明褐色砂質土　10YR5/3
2. 茶褐色砂質土　10YR4/2
3. 明黄褐色砂（ベース）10YR7/2
4. 褐色砂（ベース）10YR5/2
5. 黄褐色砂（ベース）10YR7/6
6. 黄褐色砂（ベース）がブロック状（ベースか？）10YR7/6

第８図　SH101平・断面図（１/60）

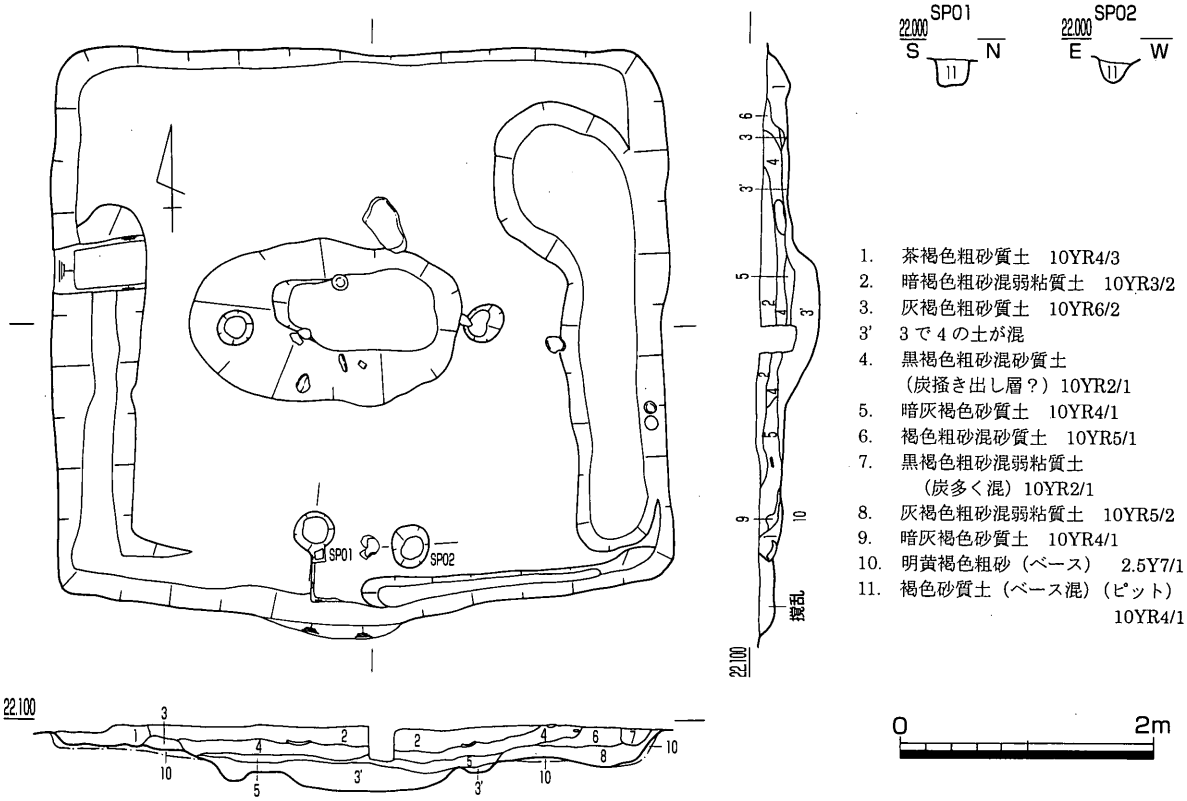


1～3　床面上　4～12　埋土中

第９図　SH101出土遺物（１/４）

cm 程度、埋土は明褐色砂質土、茶褐色砂質土である。壁溝・炉は検出できなかったが、炉は調査区外にある可能性が高い。竪穴住居南西隅付近で、楕円形にベースブロックを埋め込んだような土坑状の遺構を検出した。床を修復したものの可能性もある。竪穴住居中央部西寄りで土器が集中して出土した。

１～３は床面上から出土した土器である。１は土師器甕。口縁部内外面と体部外面にハケメを施す。口縁端部をわずかに内側へ肥厚させる。２は鉢。椀型の器形。口縁端部がわずかに欠損する。３は底部。４～12は埋土中から出土した土器。４は壺。口縁部が直立する器形。５・６は甕。５は胎土中に角閃石



第10図　SH102平・断面図（１/60）

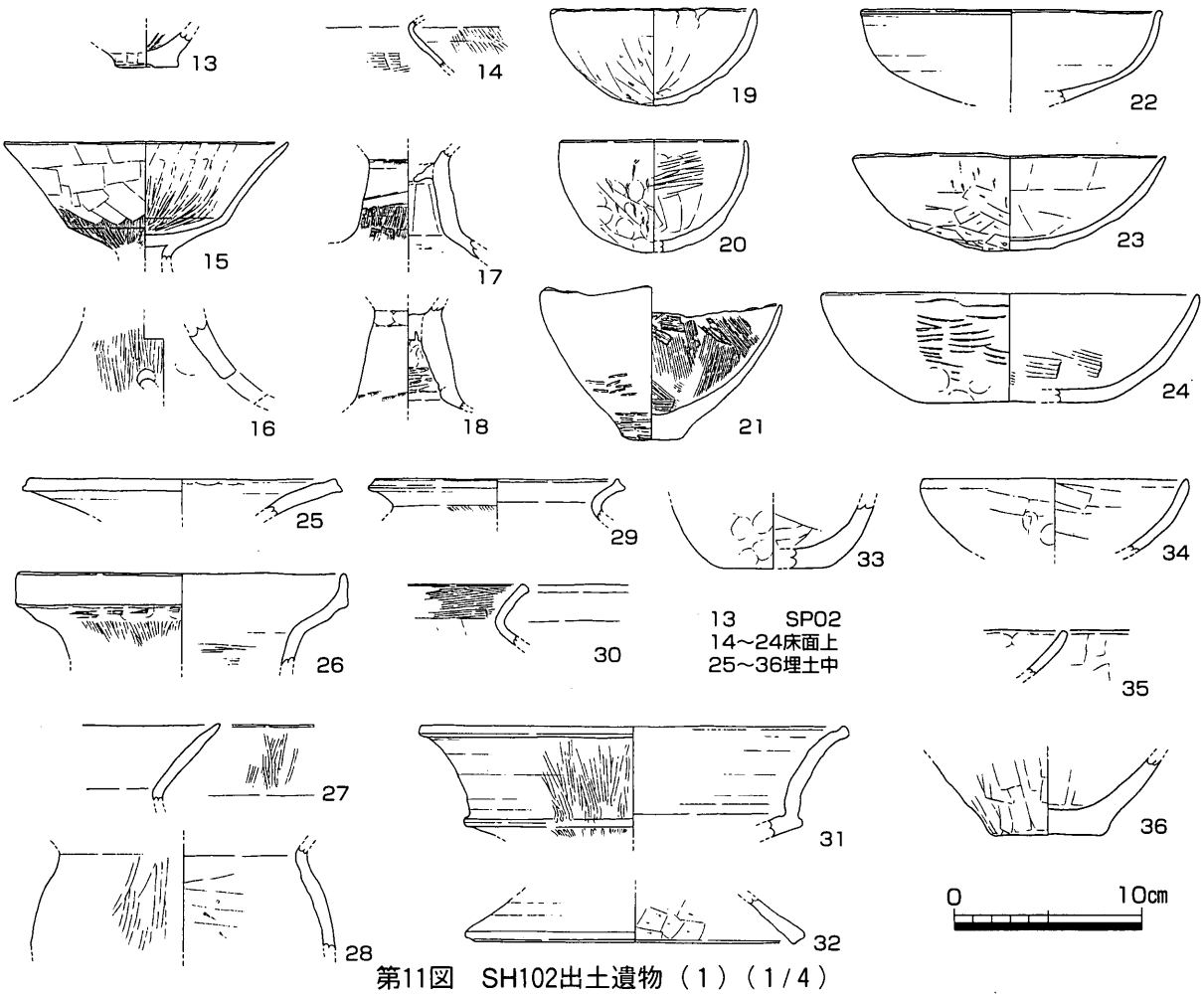
を少量含む。口縁端部を少し引き上げる。7は高杯脚部小片。8～10は鉢。いずれも口縁端部を外反させる。9・10は小型。10は焼成中に表面が破裂した痕跡が残る。11・12は鉢底部か。

出土遺物は弥生時代後期後半～古墳時代前期のものまで含むが、遺物の出土状況により、遺構の時期は古墳時代前期頃としておく。

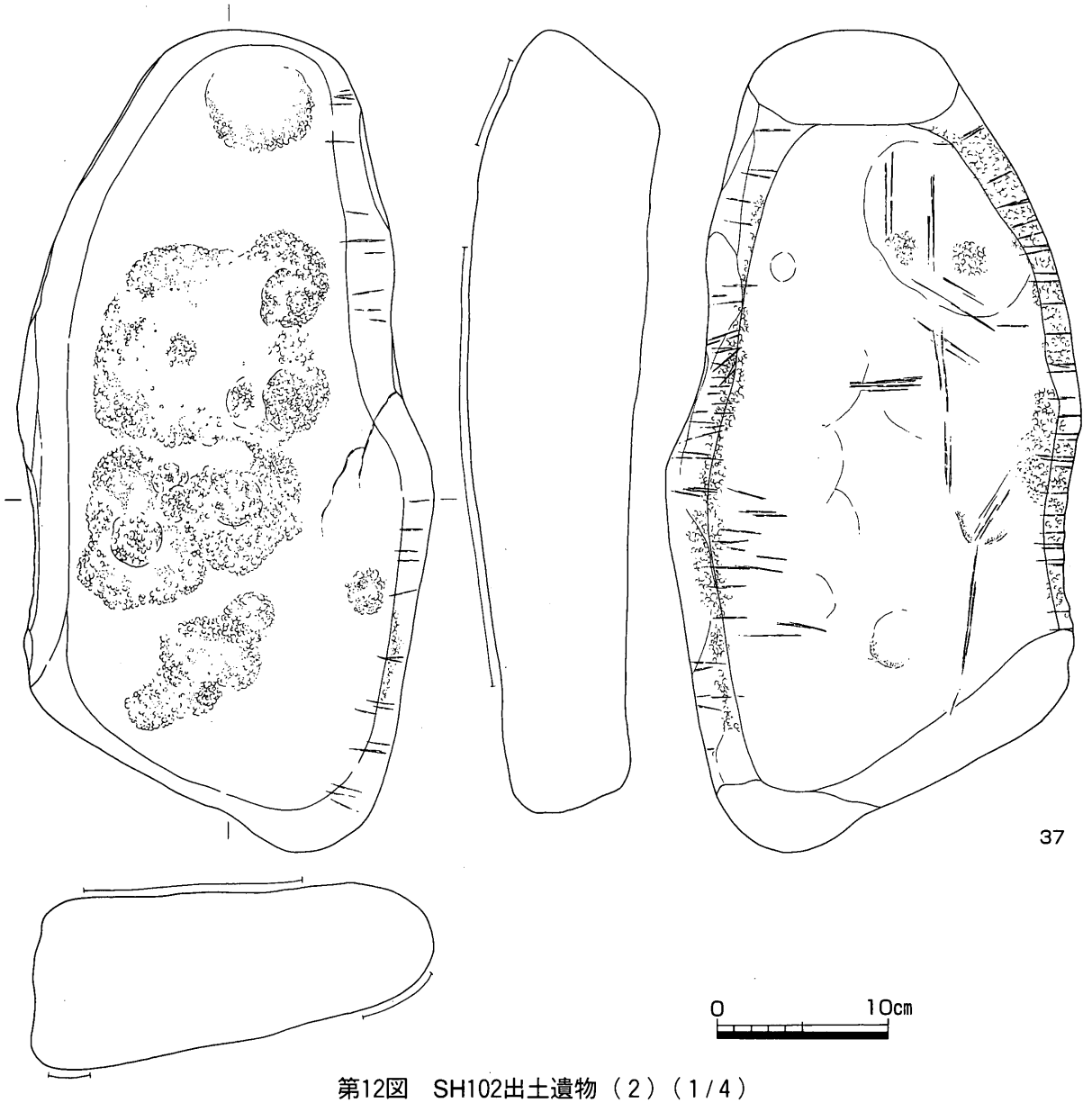
SH102（第10～12図、図版4・29）

Ⅰ区南端部付近で検出した竪穴住居である。方形で1辺4.6～4.8m、深さは遺構面から約20cm、推定面積は22.1m²、主軸方向は真北である。埋土はおもに上部が暗褐色粗砂混弱粘質土、中央部が黒褐色粗砂混弱粘質土、下部が暗灰褐色砂質土である。黒褐色粗砂混弱粘質土の上面で土器が数点出土する。住居内にピットを4基検出したが、そのうちの2基は住居の中央南端部付近でたがいに近接し、他の2基は炉の南北に位置するもので、主柱穴は明らかではない。住居中央付近では楕円形の落ち込みを検出した。長径2.1m、短径1.2m、深さ約20cmで、埋土は灰褐色粗砂質土層に炭が混じるものであった。落ち込みの肩付近からは土器がやや集中して出土しているほか、長さ50cm大の凹み石と考えられる砂岩が出土した。また、住居の東側と西側に幅60～80cm、深さ5cm程度の緩い落ち込み状の溝状遺構を検出した。

13はピットから出土した遺物である。弥生土器鉢底部。14～24は床面上から出土した遺物。14は甕小片。15～18は高杯。15は杯部。内面には密にヘラミガキを施す。16～18は脚部。16は1ヶ所に穿孔が見られる。17・18は脚部下端部近くで屈曲する。19～24は鉢。いずれも椀型。19・20は口径10cm程度、深めの椀型で底部は丸い。19にはヘラ削り痕、20にはクラックが残る。21は平底の底部を持つ。外面は叩



第11図　SH102出土遺物（1）（1/4）



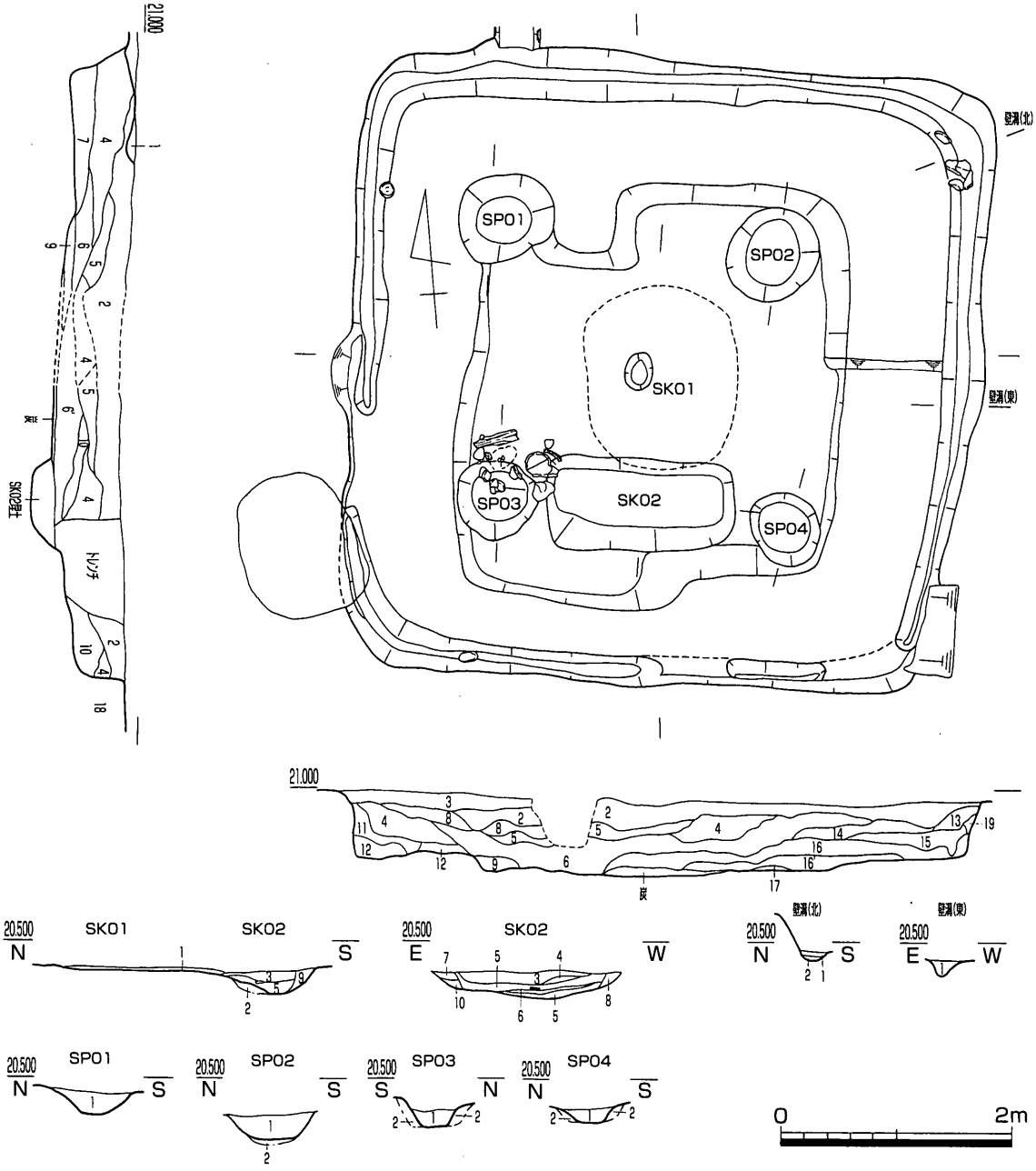
第12図　SH102出土遺物（２）（１/４）

き痕、内面にはハケメを施す。歪みが著しい。22～24は浅めの椀型。23は外面下半をヘラ削りし、上半部にはクラックを残す。24は底部径がやや広い。25～36は埋土中から出土した。25～27は壺。25は広口壺。26は口縁端部を二重口縁にする。27は小型丸底壺口縁部。丸い体部が付くと考えられる。28～30は甕。31・32は高杯。31は杯部。外面には縦方向のハケメが残る。32は脚部。内面に横方向のヘラ削りを施す。33～35は鉢。36は底部。37は凹み石。砂岩製。上面に凹み状に敲打痕、側面に楔形石器を打ちつけた敲打痕が残る。床面上より出土した。

床面上から布留式最古相併行期の高杯が出土していることなどから、遺構の時期は古墳時代初頭～前期頃と考えられる。

SH103（第13～16図、図版５・30・31）

Ｉ区北部で検出した竪穴住居である。方形で１辺5.3～5.5m、深さは遺構面から約60cm、推定面積は29.2㎡、主軸方向はＮ８°Ｅである。住居内からは主柱穴４基、壁溝、炉、ベッド状遺構を検出した。ベッド状遺構は幅約80cm、段差約10cmでベースを掘り込んで作っている。おおむね方形であるが、北西隅の



SH103　土層

1. 暗褐色粗砂混砂質土（包含層）　10YR4/2
2. 褐色粗砂混砂質土　10YR5/4
3. 褐色粗砂混砂質土　10YR3/2
4. 灰褐色粗砂混砂質土　10YR4/1
5. 黄褐色砂質土　2.5Y6/6
6. 暗褐色粗砂混粘質土　10YR4/1
6'　褐色砂質土　2.5Y4/2
7. 褐色砂質土　10YR5/1
8. 褐色粗砂混弱粘質土　10YR4/2
9. 灰褐色砂　7.5YR5/1
10. 6'に似る。やや粘性あり
11. 灰褐色砂質土　2.5Y5/1
12. 灰褐色砂質土　5Y4/1
13. 暗褐色砂混粘質土　2.5Y3/1
14. 褐色粗砂質土　2.5Y5/2
15. 褐色粗砂質土　10YR4/1
16. 褐色粗砂質土　2.5Y4/2
16'　16よりやや粘性あり 2.5Y4/2
17. 褐色砂　2.5Y4/2
18. 明黄色砂質土（ベース）　2.5Y8/6
19. ベースブロック

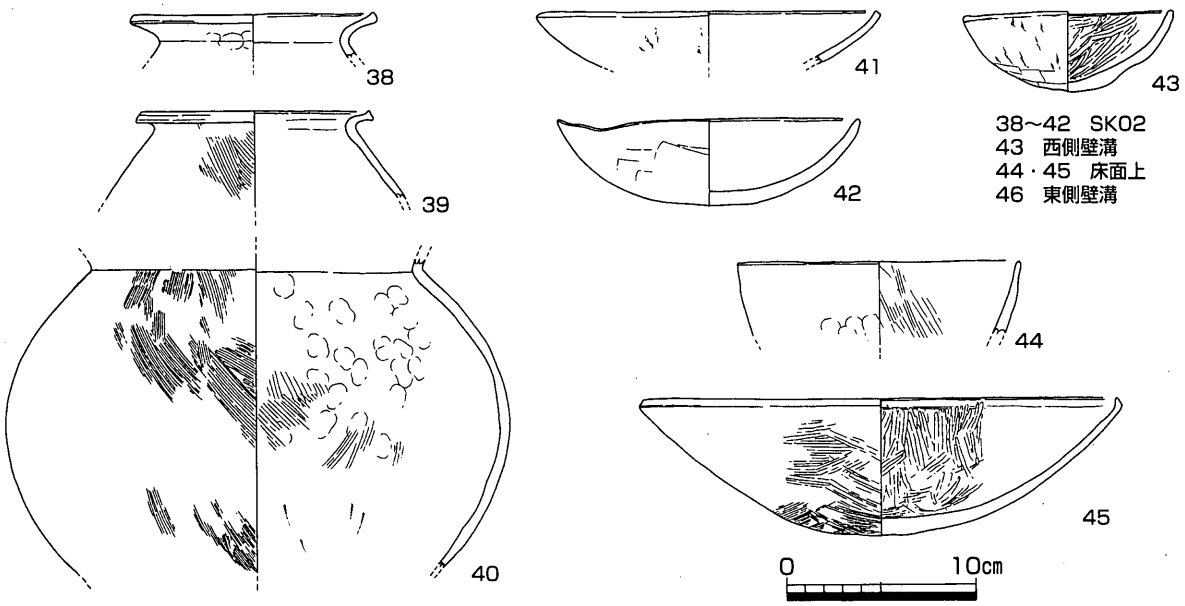
SK01・02　土層

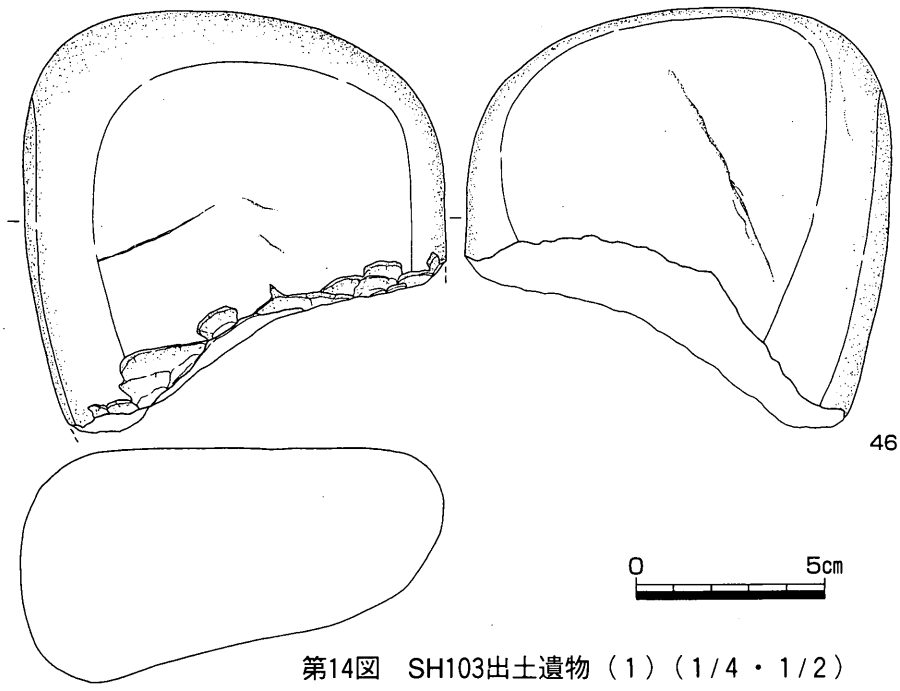
1. 黒褐色粘土（炭堆積層）
2. 黄茶褐色砂質土（ベース）　10YR6/6
3. 灰褐色粗砂混砂質土　2.5Y4/1
4. 灰褐色粗砂混粘質土　2.5Y4/1
5. 黒褐色粘土（炭堆積層）　N2/
6. 黄褐色砂　2.5Y6/6
7. 褐色粗砂混砂　10YR5/1
8. 暗灰褐色砂混粘質土　2.5Y5/2
9. 灰褐色粗砂混砂質土　10YR4/1
10. 暗灰褐色砂質土　10YR3/2

ピット、壁溝　土層

1. 灰褐色砂質土　2.5Y4/1
2. 黄茶褐色砂質土（ベース）　10YR6/6

第13図　SH103平・断面図（1/60）

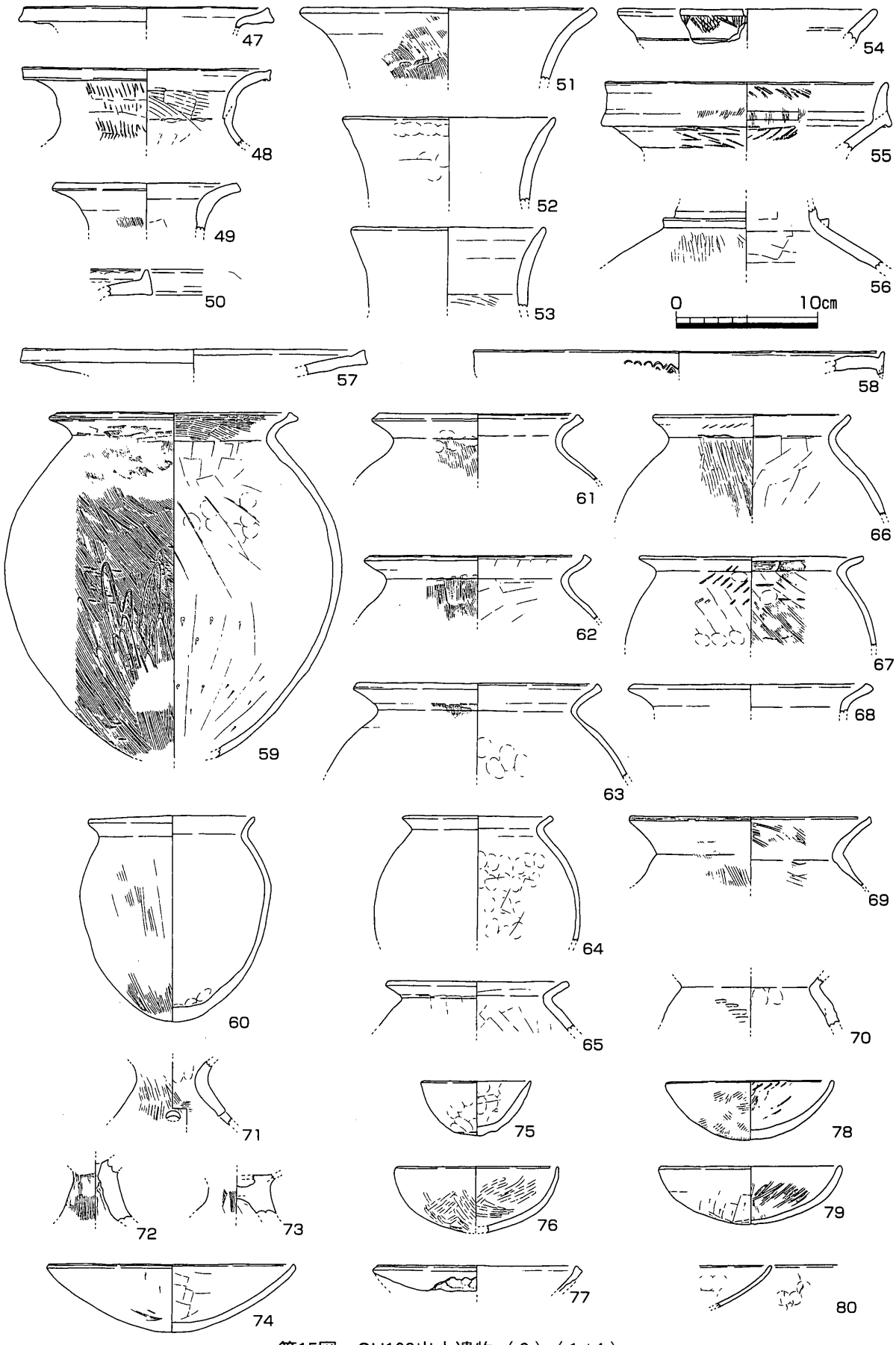




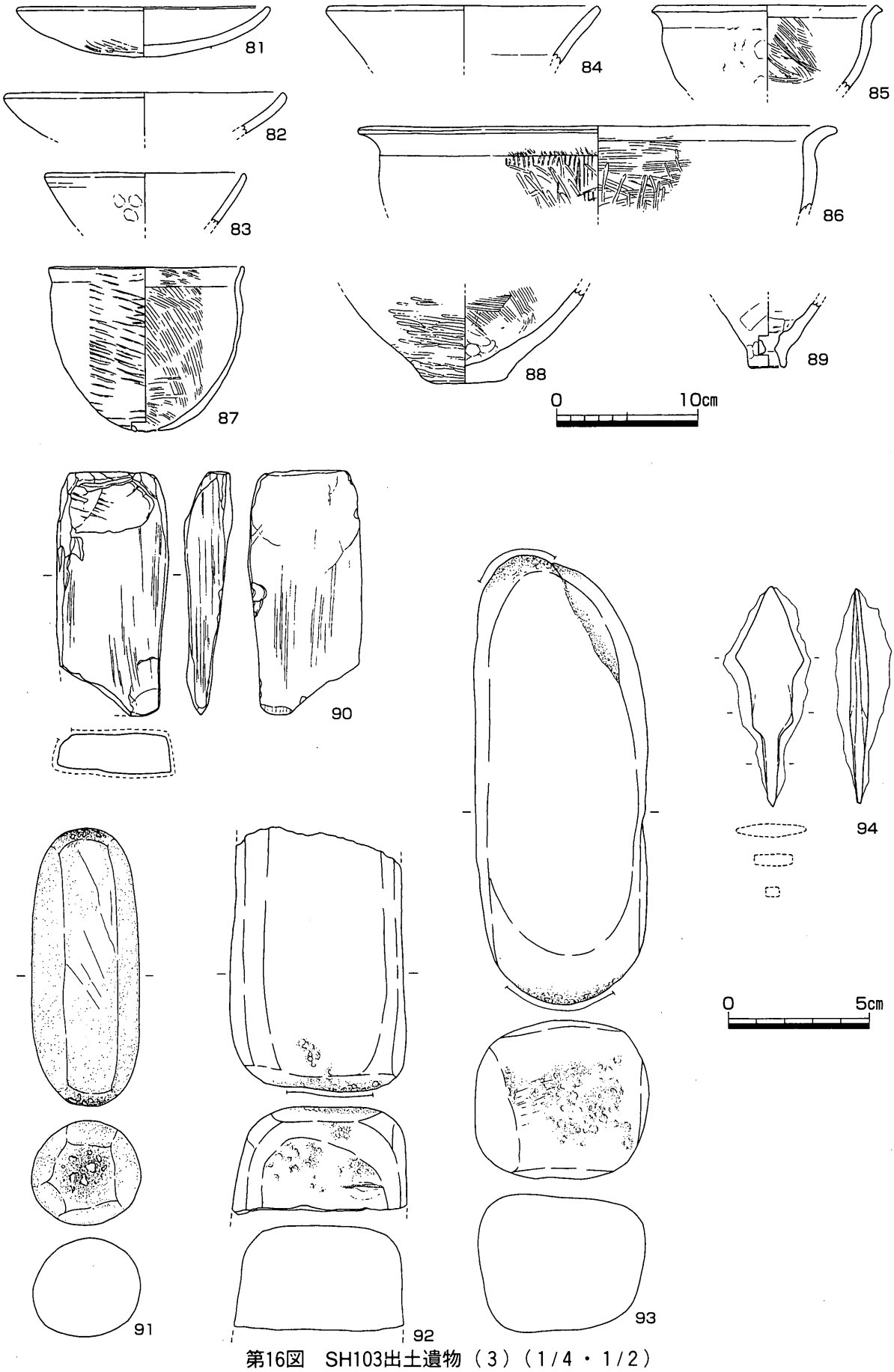
第14図　SH103出土遺物（1）（1/4・1/2）

主柱穴の南側に接して幅約80cm、長さ約55cmにわたって内側に張り出し、南辺部では東半部が30cm程度外側へ張り出している。主柱穴はSP01以外はベッド状遺構の内側に接して4隅で検出した。柱穴は円形で直径40～75cm、深さ12～20cm、埋土は灰褐色砂質土である。南西隅の柱穴では甕や炭が集中して出土した。壁溝はほぼ全周にわたって検出した。幅約30cm、深さ約10cm、埋土は灰褐色砂質土である。壁溝の北東隅で礫が、西側で鉢が完形で出土している。中央部では長径1.8m、短径1.3mの範囲で厚さ約6cmの炭の堆積層SK01が見られ、その南側に接して長方形の土坑SK02を検出した。この土坑は長辺1.65m、短辺0.8m、深さ25cmで、埋土の下半部は炭で占められる。SK02の上部でSK01が見られるので、SK01はSK02の炭を掻き出したものと考えられる。

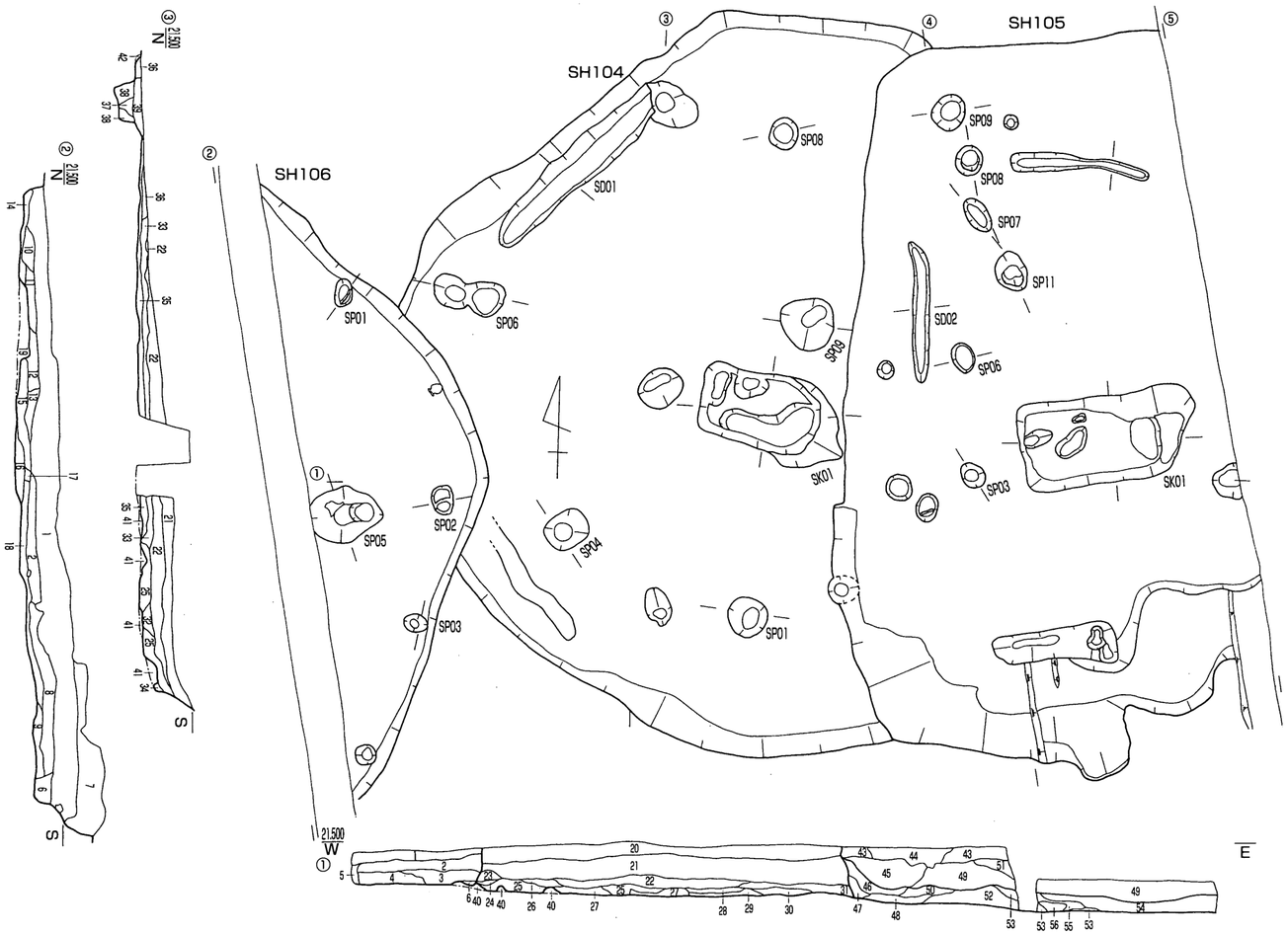
38～42はSK02から出土した遺物である。38～40は甕。39は胎土中に角閃石を少し含む。41・42は鉢。浅めの椀型で、ほとんど調整痕を残さない。43は西側壁溝から出土した遺物。小型でやや深めの椀型。



第15図　SH103出土遺物（２）（１/４）



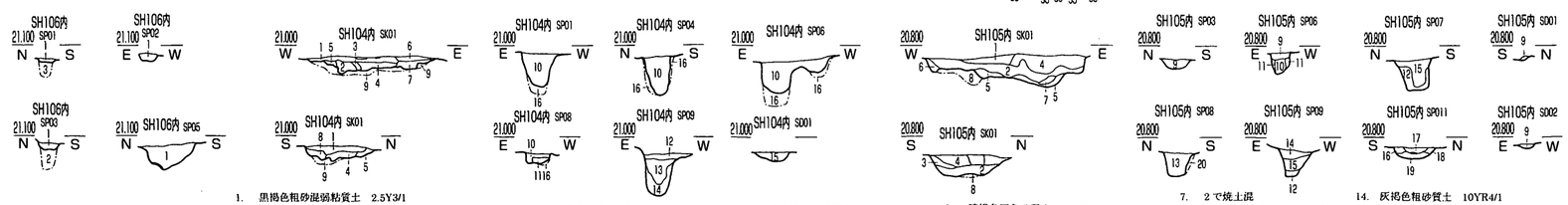
第16図　SH103出土遺物（3）（1/4・1/2）



SH104～106土層

1. 黄褐色粗砂混砂質土　10YR5/3
2. 褐色粗砂混砂質土　10YR4/3
3. 暗褐色粗砂混弱粘質土　10YR3/2
4. 褐色粗砂混砂質土（ベースブロック混）　10YR4/1
5. 褐色砂質土（粗砂少し混）　10YR4/2
6. 明灰褐色砂質土（壁溝）　10YR5/1
7. 灰褐色粗砂質土　10YR4/2
8. 灰褐色粗砂混砂質土　10YR4/1
9. 8で黄色土ブロック混
10. 茶褐色粗砂質土　10YR4/4
11. 10で汚れた土が混
12. 茶褐色粗砂混弱粘質土　10YR4/2
13. 黄茶褐色粗砂混弱粘質土　10YR5/3
14. 褐色砂質土　10YR5/2
15. 暗茶褐色粗砂混弱粘質土　10YR3/2
16. 褐色砂質土　10YR6/2
17. 黄茶褐色粗砂ブロック　10YR6/6
18. 明黄褐色砂　2.5Y8/6
19. 黄褐色砂（ベース）　10YR7/6
20. 褐色粗砂混砂質土　10YR5/2
21. 茶褐色粗砂混砂質土　10YR5/3
22. 茶褐色粗砂混砂質土　10YR4/2
23. 暗褐色粗砂混弱粘質土　7.5YR3/1
24. 茶褐色砂質土　10YR4/2
25. 灰褐色砂質土　10YR5/2
26. 明灰褐色粗砂混砂質土（ベース少し混）　10YR6/2
27. 26でベースブロックを多く含む
28. 赤褐色粗砂混弱粘質土（焼土層）　2.5YR5/6
29. 黒褐色砂質土（炭堆積層、ベースブロック含む）（炭掻き出し層）　2.5Y3/1
30. 29で31の土ブロック、ベースブロック混
31. 灰褐色粗砂混砂質土　10YR4/2
32. 褐色粗砂質土　10YR4/2
33. 暗褐色粗砂質土（やや粘性あり）（土器片がやや目立つ）　10YR3/2
34. 明灰褐色砂（壁溝）　2.5Y5/1
35. 茶褐色粗砂質土と明黄色土が筋状に堆積（部分的に炭も平らに堆積）
36. 茶褐色粗砂混弱粘質土で茶色土が所々混　10YR4/2
37. 茶褐色粗砂質土　10YR4/2
38. 褐色砂質土、明褐色土ブロック混　2.5Y5/2
39. 茶褐色粗砂質土で黄色土がブロック状に混　10YR4/2
40. 明黄褐色粗砂（ベース）　10YR7/6
41. 明褐色砂（ベース）　10YR8/4
42. 黄褐色粗砂（ベース）　7.5YR7/8
43. 茶褐色粗砂質土（土器混）　10YR4/2
44. 暗褐色粗砂質土（土器混）　10YR4/1
45. 茶褐色粗砂質土　7.5YR4/3
46. 暗褐色粗砂質土（炭を多量に含む）　10YR4/1
47. 茶褐色砂質土（粗砂混）　10YR4/2
48. 灰褐色砂質土（ベースブロック混）　10YR5/1
49. 暗褐色粗砂混粘質土（土器・炭少し）　10YR3/2
50. 灰褐色粗砂混砂質土　10YR4/1
51. 暗褐色粗砂質土　10YR3/1
52. 59の土でベースが少し混
53. 暗褐色砂質土で炭、ベースブロック混　10YR4/2
54. 暗褐色粗砂混砂質土（土器混）　10YR4/2
55. 暗褐色砂質土　10YR4/2
56. 炭堆積層
57. 褐色砂質土　10YR6/3
58. 褐色砂質土　10YR5/4
59. 褐色粗砂混砂質土（やや粘い）　10YR5/6
60. 黄褐色砂質土、57の土混　10YR6/6
61. 褐色砂混粘質土　10YR4/2
62. 褐色粗砂混弱粘質土　10YR4/3
63. 明黄褐色粗砂（ベース）　10YR7/6
64. 炭堆積層
65. 暗灰色砂混弱粘質土（炭混）　5Y3/1
66. 茶褐色砂混弱粘質土　10YR4/2
67. 褐灰色砂質土　10YR6/2
68. 褐色砂質土（土器あり）　10YR6/2
69. 黄灰褐色砂質土　10YR6/2
70. 褐色砂質土　10YR5/2
71. 灰褐色粗砂質土（ベースブロック混）　2.5Y5/1
72. 暗灰褐色粗砂混砂質土　10YR4/1
73. 暗褐色砂混弱粘質土　10YR3/2
74. 褐色砂混弱粘質土　10YR5/3
75. 暗褐色砂質土、炭混、褐った土　7.5YR3/2
76. ベースに54、75の土のブロックが混
77. 褐色砂質土　10YR5/3
78. 暗褐色粗砂混弱粘質土（炭混）　10YR3/1
79. 焼土ブロック＋暗褐色土
80. 暗褐色砂混弱粘質土でベースブロック、焼土ブロック少し混
81. 上半、焼土。下半、炭。
82. ベースで褐色砂質土（ベースの土壌化）
83. 暗褐色砂混粘質土　10YR3/2
84. 褐色砂質土　10YR5/2
85. 褐色砂混弱粘質土　10YR5/3
86. 褐色粗砂混砂質土（土坑墓？）　10YR4/4
87. 暗褐色粗砂混粘質土（土坑墓？）　10YR2/3
88. 明黄褐色粗砂（ベース）　10YR8/6
89. 黄褐色砂質土（ベース）　10YR7/8
90. 明黄褐色砂（ベース）　10YR7/8

1～18　SH106、20～39　SH104、43～62・64～85
19・40～42・63・88～90　ベース、87　土坑墓？
43～45　49　51・58・73・77　SH105　上層
46～48　50　52～57、59～72、74～76　78～85　SH105　下層



1. 灰褐色砂質土　10YR4/2
2. 褐色砂質土（ベース）　10YR5/2
3. 灰色砂質土（ベース）　5Y4/1

1. 黒褐色粗砂混弱粘質土　2.5Y3/1
2. 暗褐灰色粗砂混弱粘質土（5の土ブロック混）　2.5Y4/2
3. 4で黄褐色土ブロックが多い　16YR5/3
4. 暗茶褐色砂質土（黄褐色土ブロック混）　10YR3/3
5. 黄褐粗砂混粘質土（ベース）　10YR6/8
6. 褐灰色粗砂混砂質土、7の土壌化　2.5Y5/1
7. 2で5のブロックはなし
8. 褐灰色砂質土　7.5Y4/1
9. 明褐色砂（ベース）　10YR7/3
10. 茶褐色砂質土　10YR4/1
11. 褐色砂質土　10YR5/4
12. 灰褐色粗砂質土　10YR4/1
13. 灰褐色弱粘質土　10YR4/1
14. 明灰褐色砂質土　10YR5/1
15. 黄茶褐色粗砂混弱粘質土
16. 明黄褐色砂（ベース）　10YR7/3
1～8　SK01、
10～15 ピット、
9・16　ベース

1. 暗褐色灰色砂質土　2.5Y3/1
2. 黒褐色砂質土　2.5Y2/1
3. 暗茶褐色粗砂質土　2.5Y3/2
4. 褐色砂質土　2.5Y4/2
5. 暗褐灰色砂質土（炭、黄色土混）　2.5Y3/1
6. 灰褐色砂質土　10YR4/1
7. 2で焼土混
8. 明褐色砂（ベース）　2.5Y6/2
9. 灰褐色砂質土　10YR4/1
10. 灰褐色弱粘質土　10YR4/1
11. 黄褐色砂質土　10YR7/6
12. 褐色砂質土　10YR5/2
13. 褐色粗砂混砂質土　10YR5/2
14. 灰褐色粗砂質土　10YR4/1
15. 灰褐色粗砂混弱粘質土　10YR4/1
16. 炭＋17のブロック＋18のブロック
17. 明黄褐色砂ブロック　10YR7/6
18. 暗灰褐色砂混粘質土　10YR3/2
19. 18の土に暗灰褐色砂ブロック混　10YR3/2
20. 明黄褐色砂　10YR7/6

1～7　SK01、
8・20　ベース、
9～19　ピット

第17図　SH104・105・106平・断面図（1/60）

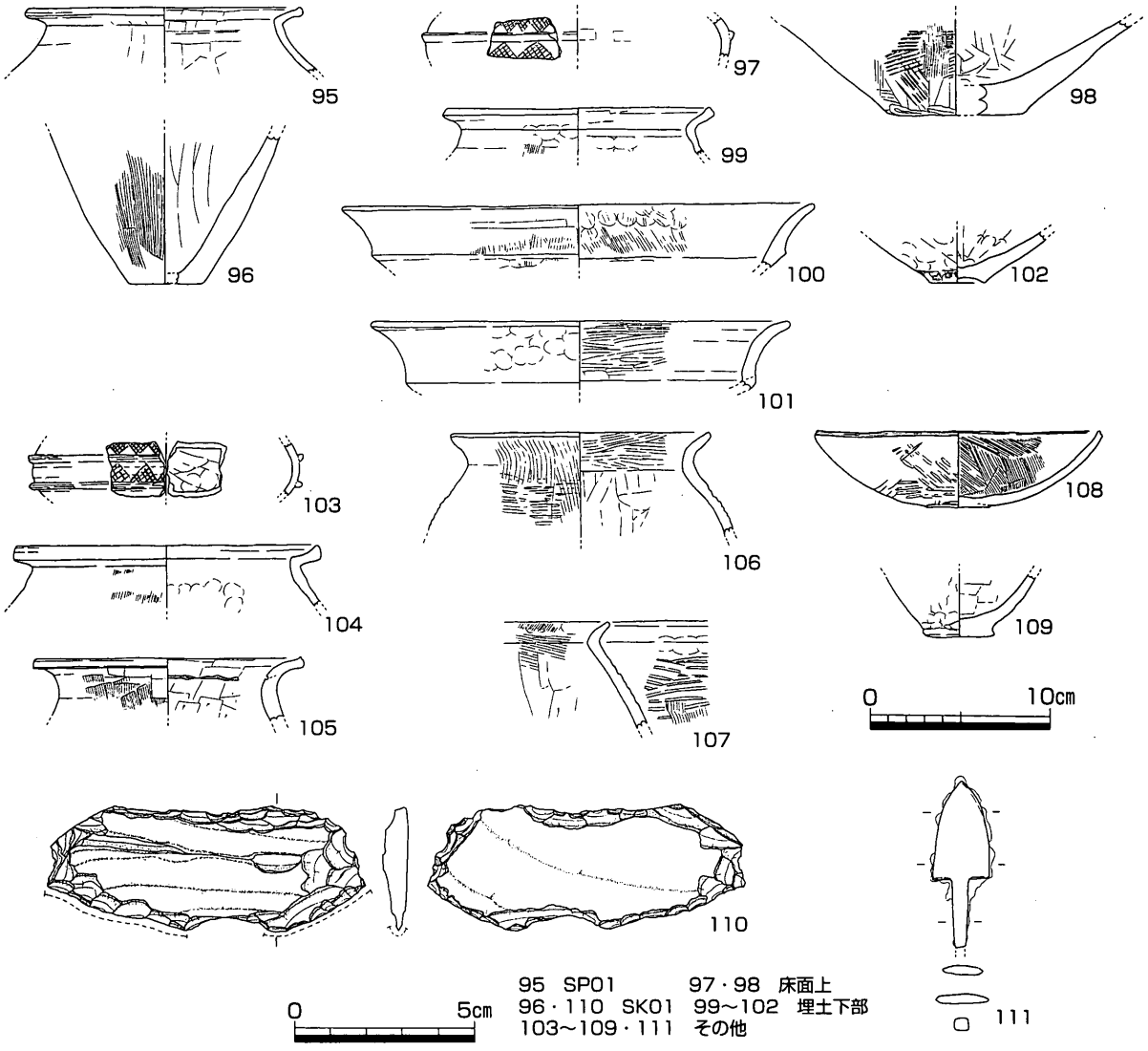
外面にクラックを残す。44・45は床面上から出土した遺物。ともに鉢。46は東側壁溝から出土した遺物。安山岩製の磨石。下半部は欠損。全面を研磨する。使用痕は認められなかった。47～94は埋土中から出土した遺物。47～58は壺。47は下川津B類土器。口縁端部は短く外反させ、長い頸部がつくと考えられる。48・49は大きく開く口縁部にほぼ直立する頸部が付くもの。51は口縁部から頸部にかけて斜め上方に大きく開く広口壺。52・53は緩く外反する口縁部。54・55は二重口縁壺。54は二重口縁の立ち上がり部分で、ヘラ描きの鋸歯文を外面に施す。55は二重口縁の立ち上がり部分に接合痕が観察できる。胎土中に片岩が含まれる。56は頸部と体部の境に突帯を1条巡らせる。57・58は口径が大きい広口壺。58は口縁端部に波状文を施す。59～70は甕。59・61～63は口縁端部をわずかに拡張させ、面を持たせている。器壁を薄くし、外面はハケを施す。66は胎土中に結晶片岩が含まれる。東阿波型土器。69は布留式まで下るもの。71～73は高杯。いずれも脚部。71は底部が認められない。穿孔が1ヶ所認められる。底部は剥離したと考えられる。74～86は鉢。74～84は椀型。75・76・78・79は口径8～13cm程度のもの。77には外面に焼成時に破裂したと考えられる剥離痕跡が見られた。74・80～82は浅い皿型に近い。外面にクラックが残る。85・86は口縁端部を緩く外反させる。87は底部穿孔土器。口縁部は緩く外反し、底部に焼成前に穿孔をする。88は底部。89は製塩土器か。底部は充填していたものが剥離したものと考えられる。90は砥石。安山岩製。表面・裏面・側面に擦痕が認められるが、それほど顕著ではない。裏面は一旦割れたものを再度使用している。91～93は磨石または叩き石。91は安山岩製。92・93は砂岩製。92は上半部欠損。いずれも下端部の敲打痕、91・93は上端部にも敲打痕を残す。94は鉄鏃。定角式。大型。錆化が著しい。

比較的多くの遺物が出土したが、傾向としては、甕に東阿波型の形態と類似するものが多いこと、高杯が少なく、椀が多いこと、椀は浅めの器形が多いこと、定角式の大型の鉄鏃が出土することが挙げられる。遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代初頭頃と考えられる。

SH104（第17・18図、図版6・31）

Ⅰ区やや北寄りで検出した竪穴住居である。SH105･SH106に切られる。円形で直径8.6m、深さは地表面から40cmを測る。想定面積は58.1m²である。竪穴住居のベースから8～10cm上面では土器片が目立つ面があり、床面はそのあたりとも考えられる。中央付近には主軸をN13°Eに向けた中央土坑（SK01）を検出した。SK01は長方形～長楕円形を呈し、長軸170cm、短軸90cm、深さ17cmで、断面形状は浅い皿型を呈するが、多少凹凸がある。その南側に接して炭の堆積層および焼土層が認められた。柱穴は8穴確認できたが、竪穴住居のラインに沿って円形に巡る4穴が主柱穴になると考えられる。残り1～2穴はSH105で検出している可能性が高い。おおむね円形で直径35～50cm、深さ15～44cm、埋土は茶褐色粗砂質土である。壁溝は北西側と南西側で部分的に検出するに留まった。幅37cm、深さ11cm、埋土は黄茶褐色粗砂混弱粘質土である。

95はSP01から出土した遺物である。甕。下川津B類土器。96はSK01から出土した。底部。97・98は床面上から出土した。97は壺体部小片。1条の突帯をめぐらせ、その上下に鋸歯文を描く。弥生時代中期後半頃。98は底部。99～102は埋土の下部で出土した遺物。99は甕。下川津B類土器。100・101は高杯。100は内外面に縦方向のハケメを、101は内面に横方向のヘラミガキを施す。102は鉢底部。103～109は埋土中から出土した遺物。103は壺。97と同一個体の可能性が高い。104～107は甕。104は形態は下川津B類土器と類似するが、胎土中に角閃石などは含まない。その他はおおむね外面をタタキ後ハケ、内面をハケ、ヘラ削りで調整する。108は鉢。浅めの椀型の器形。109は底部。110は打製石庖丁。結晶片岩



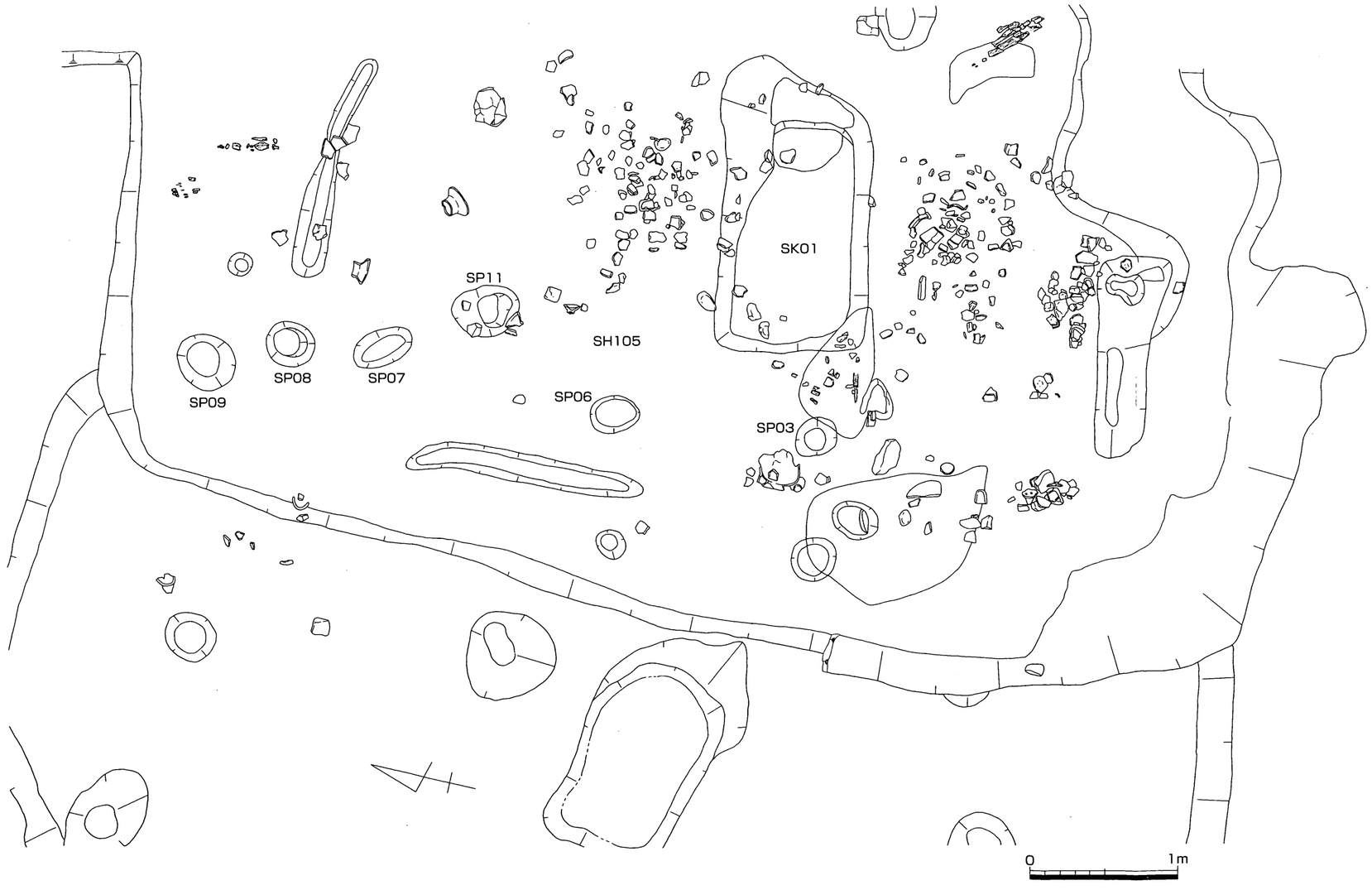
第18図　SH104出土遺物（1/4・1/2）

製。SK01から出土した。111は有茎三角鉄鏃。茎部との境をノミ切りしている。竪穴住居埋土中から出土した。

出土遺物の特徴は、下川津B類土器が出土すること、鉢が浅いこと、結晶片岩製の石庖丁、鉄鏃が出土することが上げられる。遺構の時期は弥生時代後期後半頃と思われる。

SH105（第17・19～28図、図版6～8・31～34）

Ⅰ区北寄り東部で検出した竪穴住居である。方形で1辺8.3m、地表面からの深さ68cm、主軸方位はN2°E、推定面積は68.9m² である。東側は調査区外へ延びる。竪穴住居のベース直上部分は土壌化が進み、当初の床面があったと考えられるが、そこから20～30cm 上面で土器が集中する面があり、その面に生活面があった時期もあると考えられる。土器はおもにSK01の周辺及びその南側で多く出土した。やや南寄りには長方形～長楕円形の中央土坑（SK01）を検出した。長軸186cm、短軸100cm、深さはおおむね26cm 程度で底部にはやや凹凸がある。底付近に一部炭が埋積していた。柱穴は10穴確認したが、この中の2穴程度はSH104の柱穴になると考えられる。直径は30～40cm 程度、深さは22～34cm である。柱穴の検出状況から方形に巡ると思われるが、詳細は不明である。壁溝の可能性のある溝は北辺および西辺で検出したが、やや住居内の内側によっており疑問も残る。幅は20cm、深さ6cm、埋土は灰褐色砂質土であ



第19図　SH105遺物出土状況（1/30）

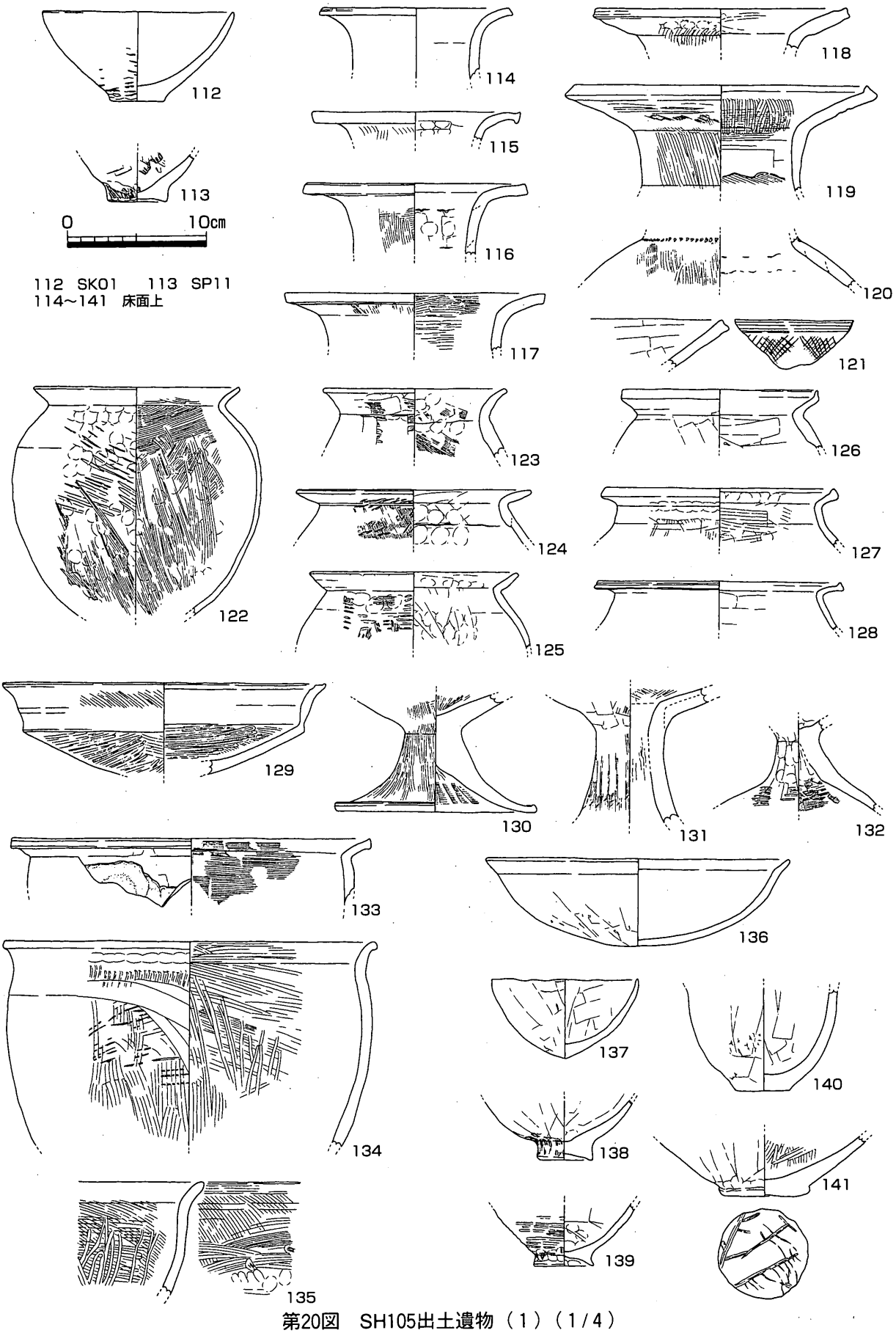
る。床面上から炭化材や炭が少し出土しており、焼失家屋であったと考えられる。竪穴住居埋土中および検出面からも摩滅の進んだ土器小片が大量に出土した。住居廃棄後はゴミ捨て場として利用されていたと思われる。

112はSK01から出土した土器である。鉢。椀型でやや深め、底部は平底である。113はSP11から出土した。底部。114～146は床面から出土した遺物である。114～121は壺。いずれもほぼ直立する頸部に大きく開く口縁部を持つ広口壺。119は下川津B類土器。内外面をヘラミガキし、口縁端部を上方へ拡張する。120は頸部と体部の境に刺突文を巡らせる。122～128は甕。127・128は胎土中に角閃石を少し含む。体部内面上半をハケまたは板ナデで調整するが、形態は下川津B類土器に似る。その他の甕はおおむね外面をタタキ後ハケで、内面をハケや板ナデで調整する。129～132は高杯。129は下川津B類土器。底部内外面に4分割のヘラミガキを施す。130～132は脚部。131は充填していた底部が剥離して残っていない。133～137は鉢。133～136は口縁部外面がわずかに外反するもの。133は外面に焼成時に破裂したと考えられるハガレが見られる。136は浅い器形で、底部外面をヘラ削りする。137は小型で椀型のもの。138～141は底部。141は底部に木の葉圧痕が残る。142は叩き石。砂岩。上部・下部・側面に敲打痕を残す。143～146は台石。いずれも砂岩製。おおむね両面に敲打痕を残し、側面にも敲打痕（144・145）を残すものや、楔形石器を敲打した痕跡を残すもの（143・145）がある。

147～164は埋土下層から出土した遺物である。147～149は壺。いずれも広口壺。148は口縁部下部の拡張部分は剥離しているが、147・148とも口縁端部は上下へ拡張させる。150～156は甕。150・151は口縁端部に面を持たせ、外面と口縁部内面にハケメを、151では体部内面にヘラ削りを施し、器壁を薄くする。胎土中に雲母を少量含む。157～160は高杯。157は杯部。下川津B類土器。158～160は脚部。いずれも脚裾部がなだらかに広がる。158には脚部に1ヶ所穿孔が残る。杯部内面にはヘラミガキが残る。159は穿孔が2ヶ所に残り、残存状態から穿孔は4ヶ所にあったと考えられる。160には3ヶ所に穿孔が認められる。161は鉢。口縁端部を屈曲させる。162は叩き石。上半部欠損。下部に敲打痕、側面には擦痕が少し残る。全体を研磨する。安山岩製。163・164は台石。砂岩。上面に敲打痕を残す他、側面にもわずかに敲打痕を残す。164は上面に楔形石器による敲打痕が認められ、上部中央付近は磨滅している。

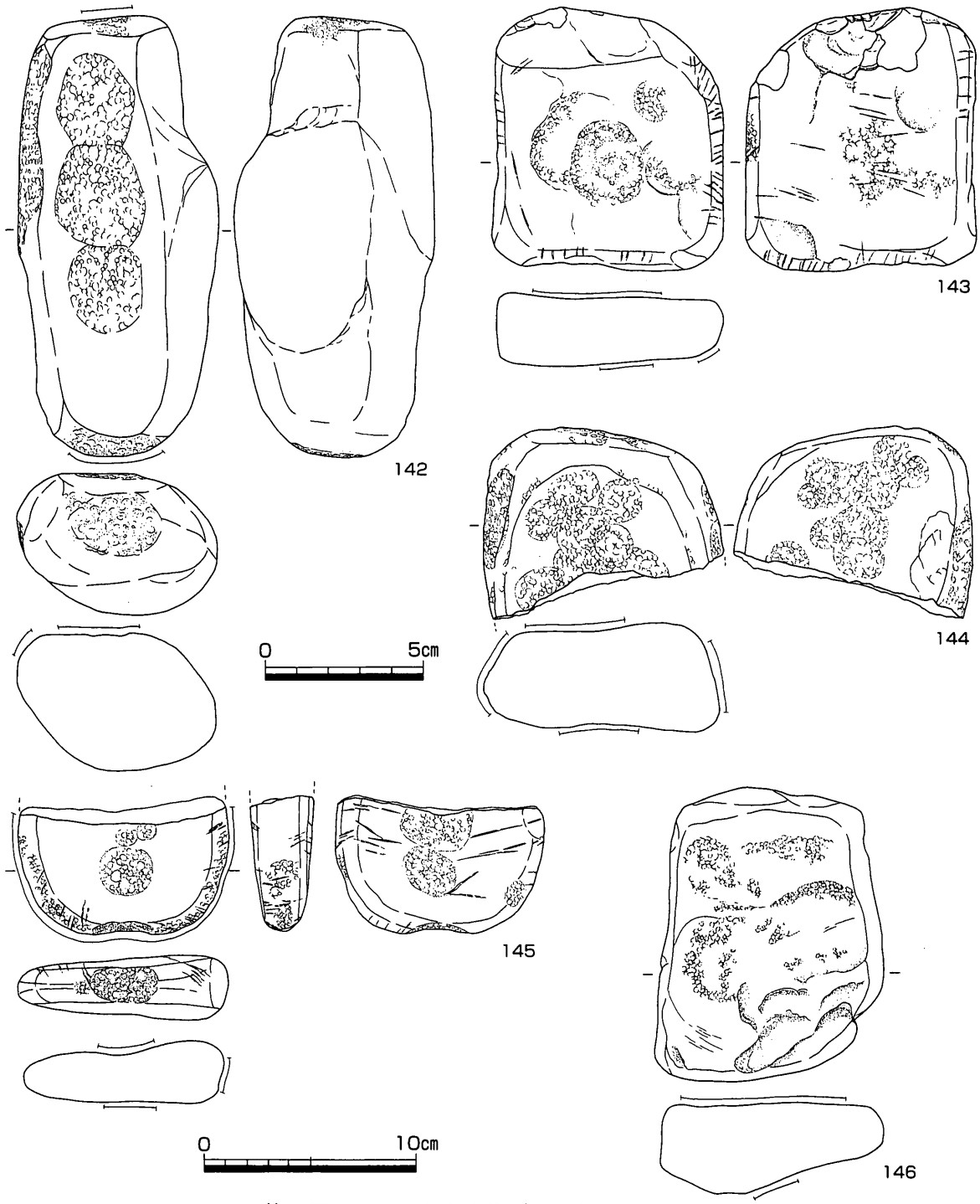
165～176は埋土上層から出土した遺物である。165は二重口縁壺。口縁部。東阿波型土器。166～170は甕。166は下川津B類土器に形態が似るが、胎土中に角閃石は含まず、少量の雲母を含む。167は口縁端部を上部へ引き上げ、体部外面をハケ、体部内面は上半を指押さえ、下半をヘラ削りする。171は鉢。172・173は底部穿孔土器。173はわずかに平底にする。174・175は底部。175は底部に木の葉圧痕がある。176は磨石。安山岩製。残存部分に敲打痕は残っていない。

177～208は埋土最上層から出土した遺物である。177～185は壺。177～178は広口壺。直立気味の頸部から口縁部が大きく開く。179は端部に剥離痕が認められ、口縁部を拡張させるか二重口縁の壺になると考えられる。180・181・183・185は二重口縁壺。181は口縁端部を下方へも拡張し、外面に鋸歯文と刺突文、下端部に刺突文、内面下部にも刺突文を施す。182は口縁端部を上下に拡張させ、外面に鋸歯文と刺突文を施す。183は東阿波型土器。184は頸部と体部の境に細い突帯を巡らせる。185は二重口縁部の立ち上がった場所のみ残る。下端部には剥離痕が残る。外面には鋸歯文をヘラ描きする。186～195は甕。194・195は下川津B類土器。194は内面上半部の指頭痕部分に横方向の押圧痕が残る。196・197は高杯脚部。196は脚部に3ヶ所の穿孔が残る。残存部分から穿孔は4ヶ所と考えられる。197には穿孔が1ヶ所に残される。198～201は鉢。198・199は口縁部を外反させる。200は椀型。201は底部を少し作り



112 SK01　113 SP11
114~141 床面上

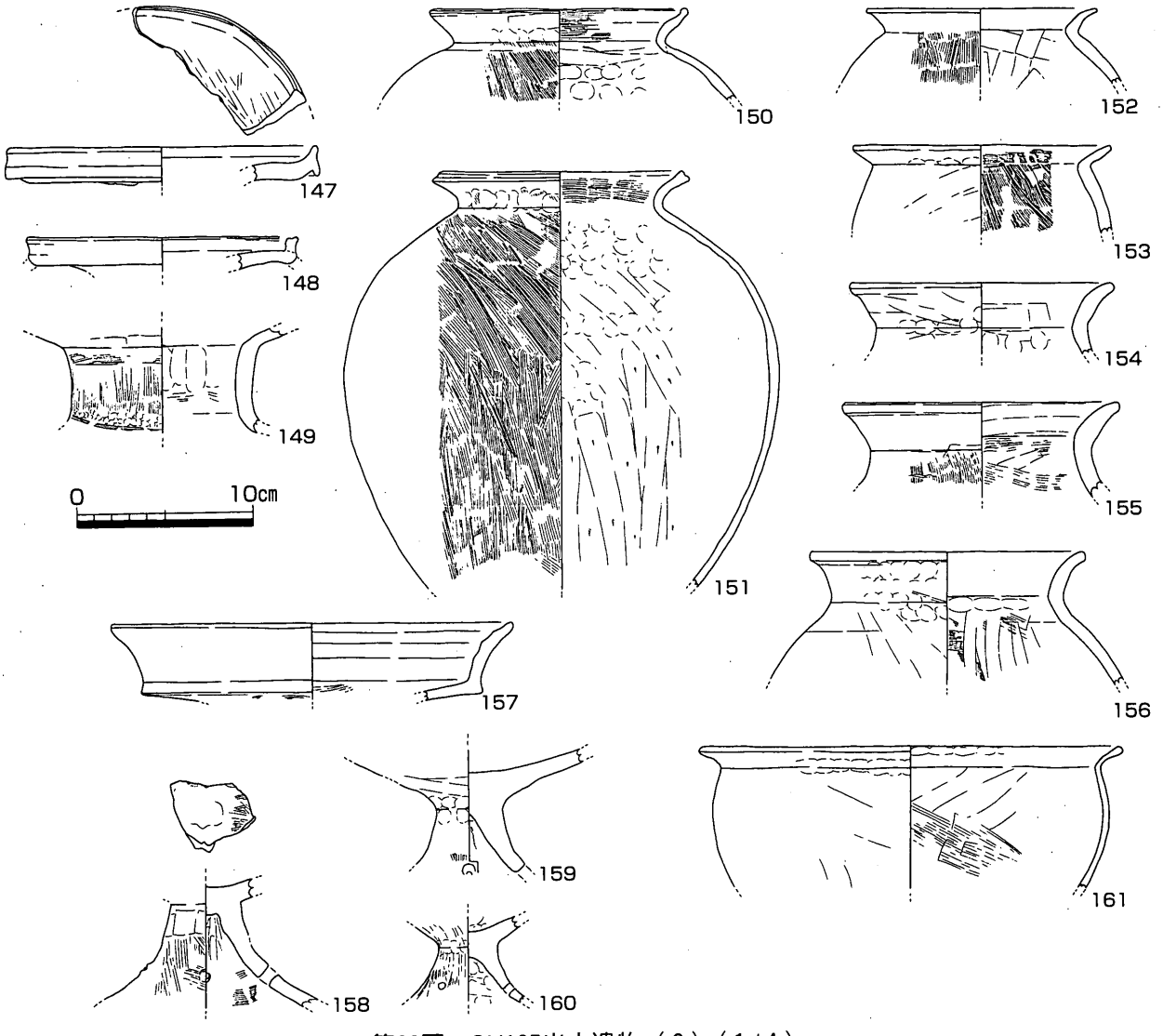
第20図　SH105出土遺物（1）（1/4）



第21図　SH105出土遺物（2）（1/2・1/3）

出し、外面にはクラックを多く残す。202は脚付鉢。203は鉢。204は製塩土器。外面にはヘラ削り痕が顕著に残る。胎土中に角閃石を含む。205～207は底部。208は叩き石。砂岩。側面部と表・裏面に敲打痕や楔形石器の敲打痕を残し、下部にはわずかに敲打痕を残す。

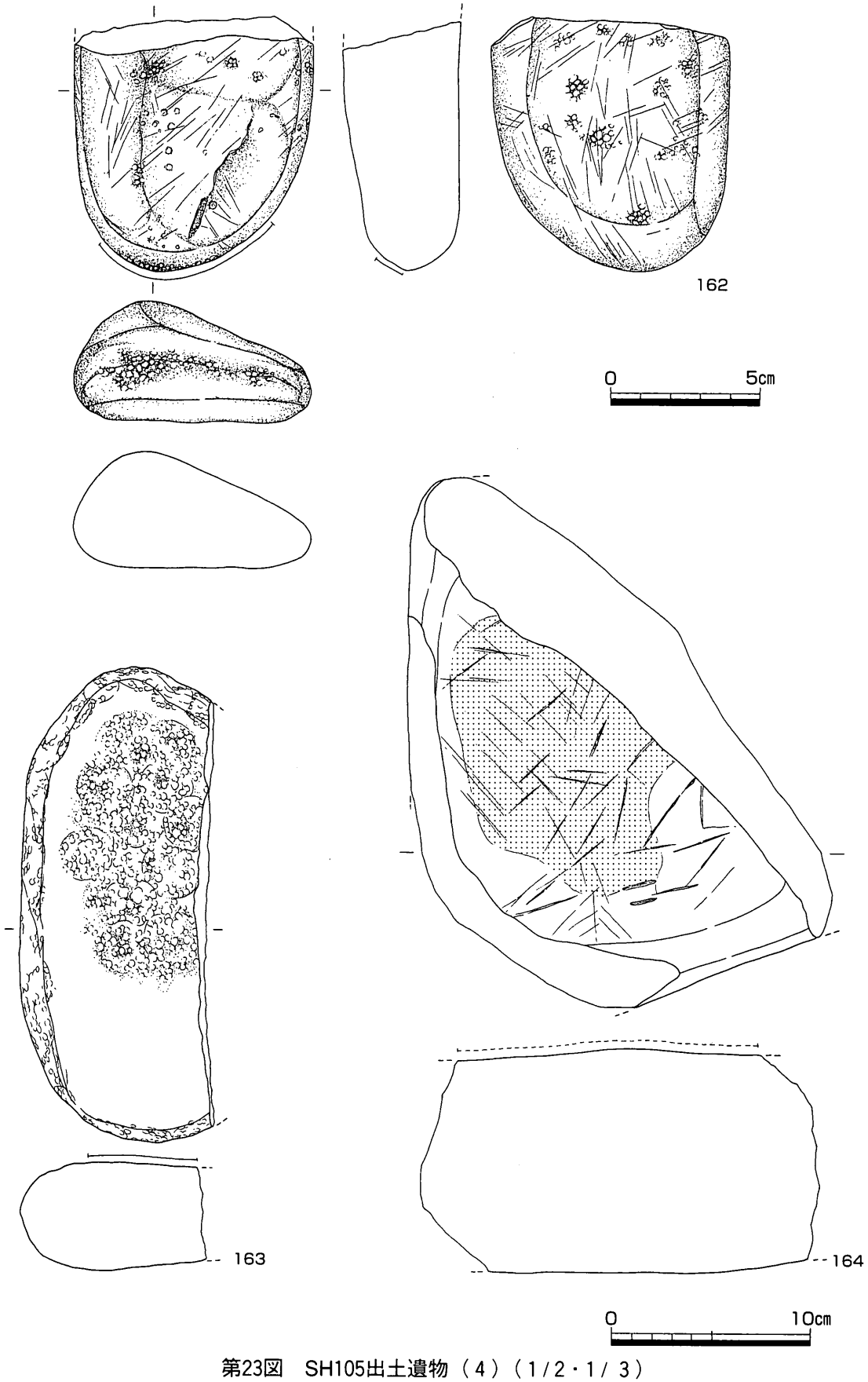
209～231はトレンチ出土など層位不明の遺物である。209～216は壺。209～213は広口壺。ほぼ直立する頸部から口縁部が大きく開く。209は東阿波型土器。210は下川津B類土器。212は体部と頸部の境に刺突文を施す。214～216は二重口縁壺。214は口縁端部内面に幅約1.5cmのハケメが残されており、この部分は二重口縁の端部が剥離したものと考えられる。215は東阿波型土器。216は二重口縁端部。上半部



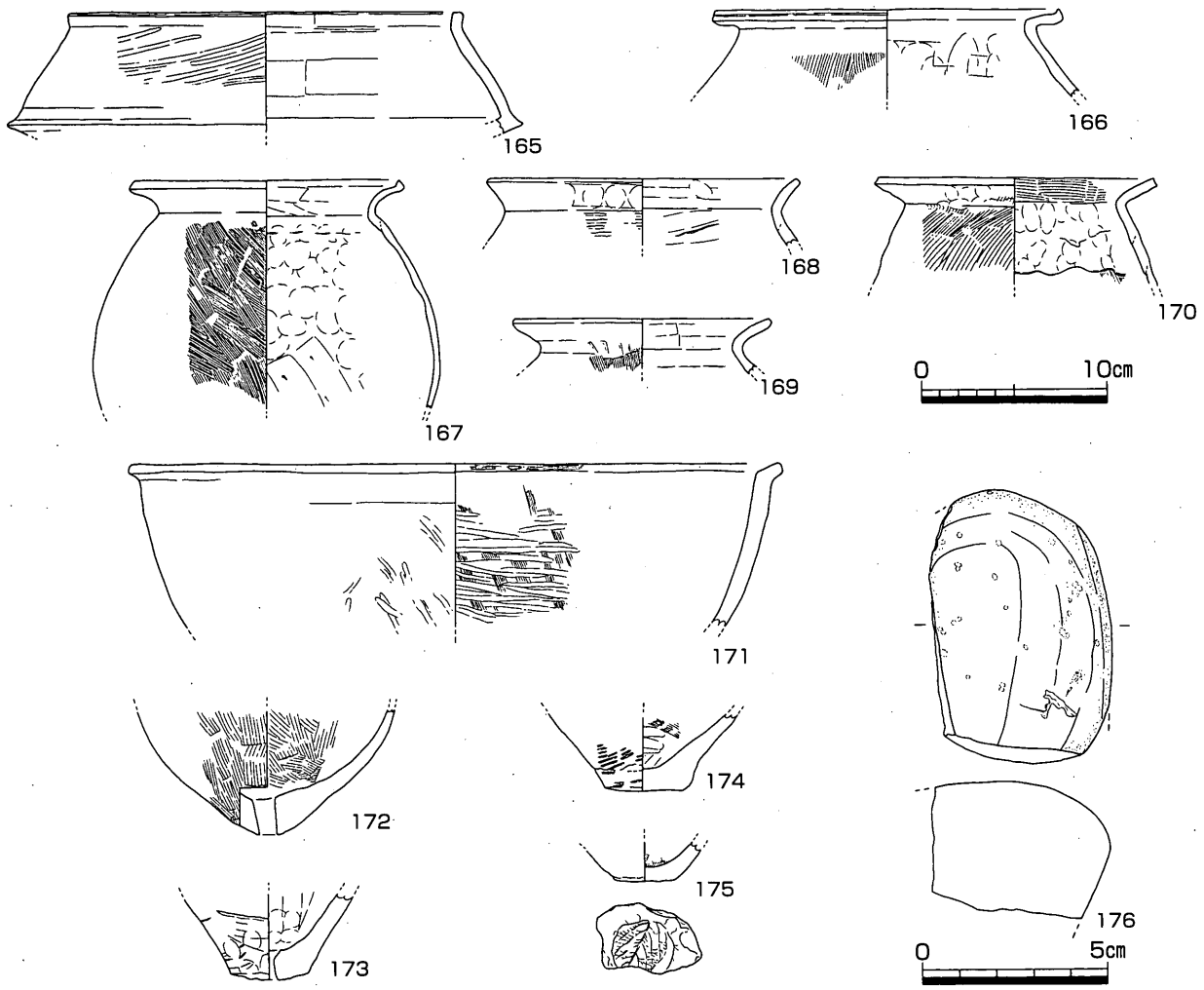
第22図　SH105出土遺物（3）（1/4）

に鋸歯文、下半部には刺突文を施す。181と同一固体か。217～223は甕。220は体部外面上端付近に縦方向の工具痕が残される。223は立ち上がりのある口縁部に櫛描きの沈線を施す。吉備系。224･225は高杯。224は杯部。内面には横方向、外面には縦方向のヘラミガキを施す。225は脚部。縦方向に密にヘラミガキを施す。脚端部付近でわずかに屈曲を見せる。226は鉢。椀型で浅めの器形。227は手捏ねの鉢。内外面に指頭痕を顕著に残し、歪みが著しい。228は底部穿孔土器。229は底部。底部外面にもヘラミガキを施す。230は叩き石。砂岩。下部に敲打痕を少し残す。上半部は折損と考えられるが、折れ面全体が磨滅しており、磨石などに転用されたと考えられる。231は台石。砂岩。上・下面ともに敲打痕、楔形石器を打ちつけた痕跡を残す。

SH105からは多量の土器が出土したが、傾向としては下川津B類土器が他の竪穴住居よりやや目立つこと、東阿波型土器や吉備系の甕が出土したこと、台石が多いこと、鉄製品がほとんどないことなどが上げられる。遺構の時期は出土遺物とSH104より新しいことから、おおむね弥生時代終末頃と考えられる。



第23図　SH105出土遺物（4）（1/2・1/3）



第24図　SH105出土遺物（5）（1/4・1/2）

SH106（第17・29図、図版8）

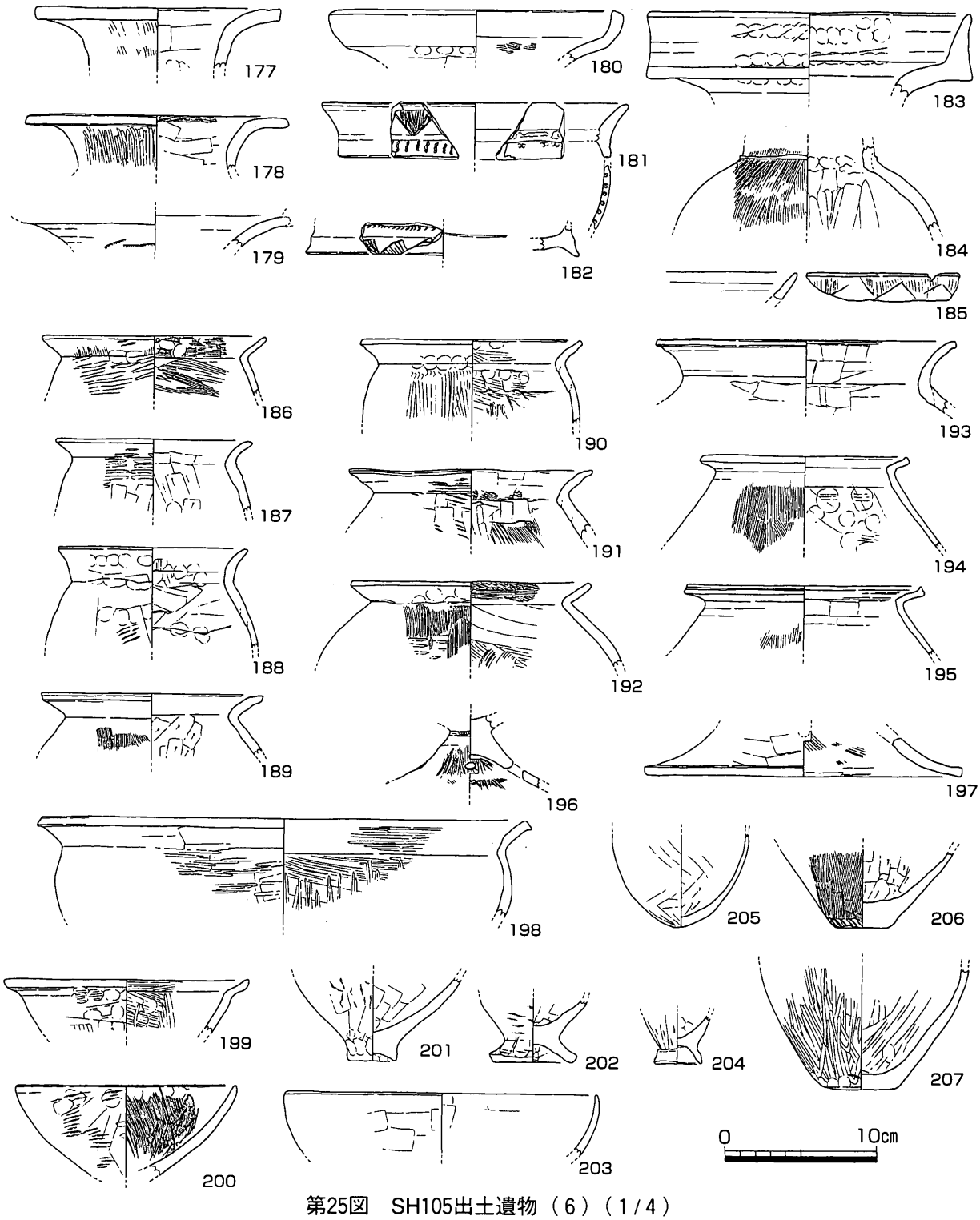
I区北寄り西部で検出した竪穴住居である。方形と考えられるが、大半は西側調査区外へ延びる。1辺3.2m以上、深さ80cmである。柱穴は4穴を竪穴住居のラインに接して検出した。いずれも円形で直径22cm程度、深さ8～10cm程度、埋土は灰褐色砂質土である。西壁際では長径80cm、短径62cm、深さ26cmの楕円形の柱穴（SP05）を検出し、そこからは壺の口縁部が出土した。壁溝は平面的には確認できなかったが、断面観察では幅18cm、明灰褐色砂質土の埋土の壁溝を東西土層と西壁土層の南側で確認できた。主柱穴、炉、中央土坑は調査区外へ外れると考えられる。

232はSP05から出土した。壺口縁部。口縁部は斜め外方へ大きく開く。胎土中に雲母を多量に含む。233～242は埋土中から出土した。233は壺口縁部。234は体部。235は壺。236・237は甕。237は下川津B類土器。236は形態は下川津B類土器に似るが、角閃石は含まず、雲母をわずかに含む。238～240は鉢。238・239は椀型、240は口縁端部をわずかに外反させる。241は底部。242はヤリガンナ下部欠損。先端部には鏑がある。

遺構の時期は、弥生時代終末期でも最も新しいと考えられる。

SH104～SH106出土遺物（第30～32図、図版6・35・36）

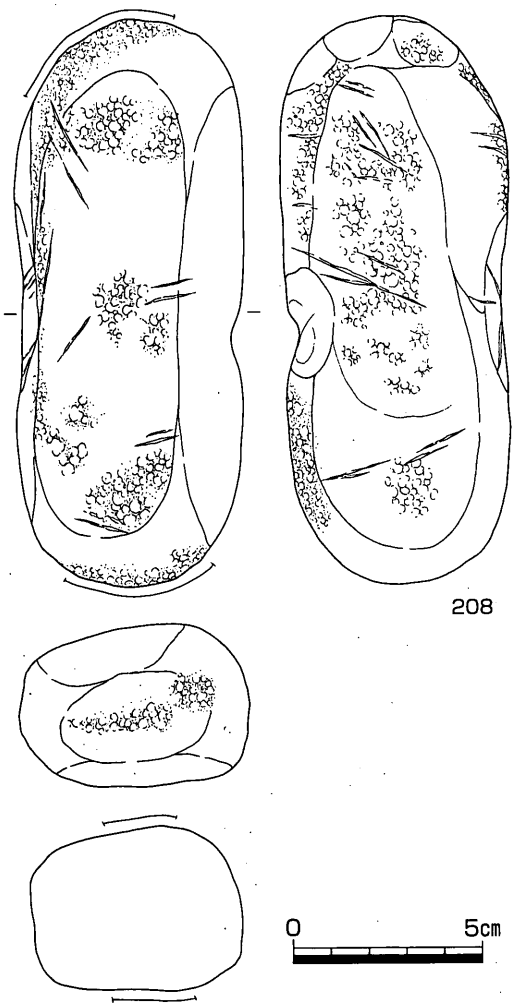
SH104～106が重複して検出された付近は、機械掘削時から大量の土器小破片が出土したため、遺構の



第25図　SH105出土遺物（6）（1/4）

検出に手間取った。竪穴住居の棟数や前後関係を平面的に明確にするために、上面掘削や上面精査を繰り返したが、その過程でもまた多くの土器が出土した。最終的にはトレンチを掘り、アゼの断面確認によって竪穴住居の棟数や前後関係を確定した。

243～247はSH104～106を横断する位置で設定した。トレンチの東半部分で出土した遺物で、SH104またはSH105から出土したものである。243～246は壺。243・244は広口壺で、ほぼ直立する頸部に開く口縁部を持つ。245は口縁端部上面に4条の沈線を持つ。246は体部中程に貼付突帯を巡らせ、その下部に



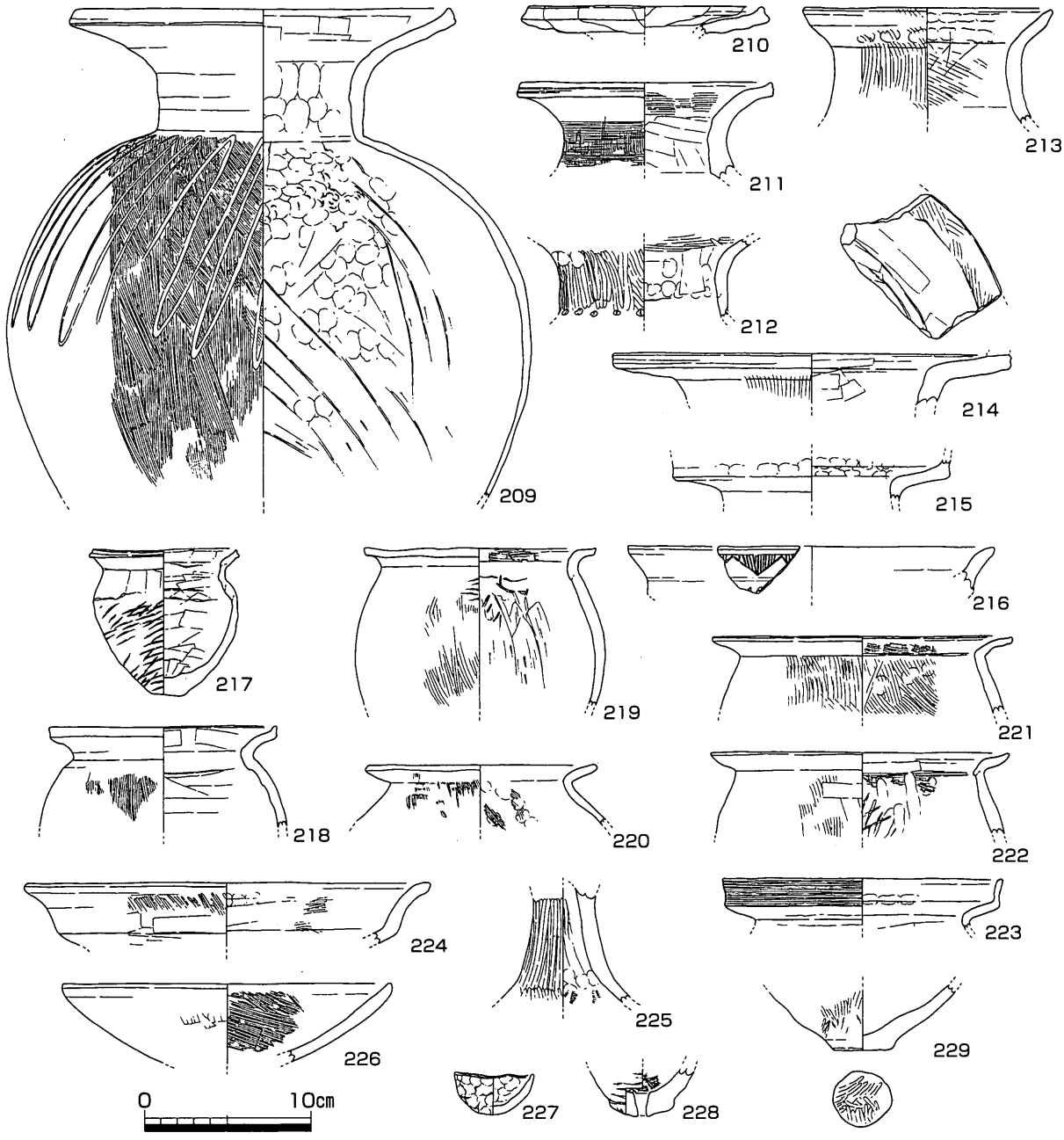
第26図　SH105出土遺物（7）（1/2）

刺突文、ヘラ描き沈線を施す。247は鉄鏃。柳葉式。248はトレンチの西半分で出土した遺物で、SH104またはSH106から出土したものである。高杯脚部。下川津B類土器。内面を横方向にヘラ削りする。

249～281はSH104～SH106の平面的なプランを確定させるために、上面を手作業で掘り下げた際や上面精査の際に出土した遺物である。大部分はSH105の上面で出土したものである。249～258は壺。250は頸部と体部の境に円形刺突文を巡らせる。251は口縁部が緩やかに斜めへ立ち上がる。252は突帯を貼り巡らせ、突帯の上半部と下半部に刻み目を入れ、突帯の上部に鋸歯文と思われるヘラ描き沈線がみられる。253～257は二重口縁壺。254は胎土中に片岩を含む。東阿波型土器。255は口縁部の立ち上がり部分の上面に剥離痕跡が認められる。口縁部の立ち上がり部分に刻み目を施す。256･257は立ち上がり部分のみ残す。256は立ち上がり部分の中央付近に刻み目突帯を巡らせ、その上下に鋸歯文を施す。突帯の下部には円形刺突文が1ヶ所残される。下端部に剥離痕跡がある。257は小片。下端部に剥離痕がある。上半部に鋸歯文が認められ、その下部には円形刺突文を巡らせる。259～263は甕。262は下川津B類土器に形態が似るが、胎土中に角閃石は含まれない。264～267は高杯。264には脚部上端に粘土を充填して底部を作った痕跡が認められる。266・267には脚部に穿孔が1ヶ所残る。268～277は鉢。268は脚付。269は椀型。外面にクラックが多く残る。270･271は椀型だが、体部は直線的に上がる。270には外面にクラックが多く残る。272･273は口縁端部を外反させる。272には焼成時に破裂したと考えられる剥離痕が表面に見られる。274は土師器皿。底部外面をヘラ削りする。275は口縁部小片。鋸歯文をヘラ描きする。276はミニチュア土器。内面は粗いヘラ削りをし、外面にはクラックを残す。278･279は底部。280は土錘。281は打製石庖丁。結晶片岩製。下部に摩滅痕がある。

282～299はSH104～106付近上面を機械掘削した際に出土した遺物である。大半はSH105の上部から出土したものである。282～284は壺。282・283は広口壺。282は形態は119・209に類似するが、胎土中には多量の雲母を含む。283は外面に密にヘラミガキを施す。284は小型丸底壺。器形は下川津B類土器に類似するが、胎土中に角閃石を含まず少量の雲母を含む。285～289は甕。286は東阿波型土器。290～292は高杯。内外面にヘラミガキを施す。292は脚部と杯部の境付近に剥離痕が見られる。293・294は底部穿孔土器。294は底部にわずかに剥離が認められる。295～297は底部。298は砥石。砂岩製。上面と一側面に擦痕があり、他の面は割れている。299は器種不明。円盤型に成形し、上部には敲打痕により角をとっている。表裏とも研磨している。結晶片岩製。

これらの遺物はおおむね弥生時代後期後半～終末期と考えられ、SH104～106の時期を反映している



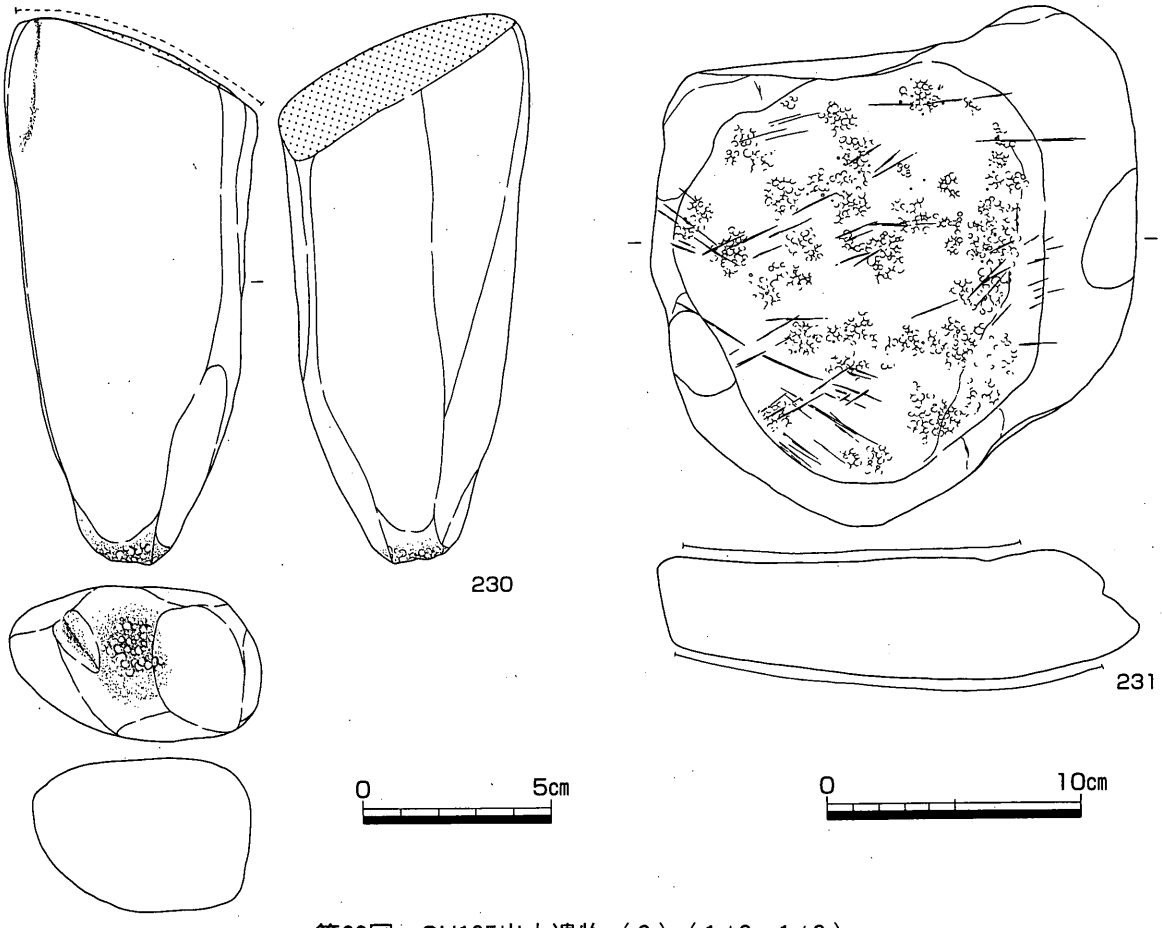
第27図　SH105出土遺物（8）（1/4）

と考えられる。

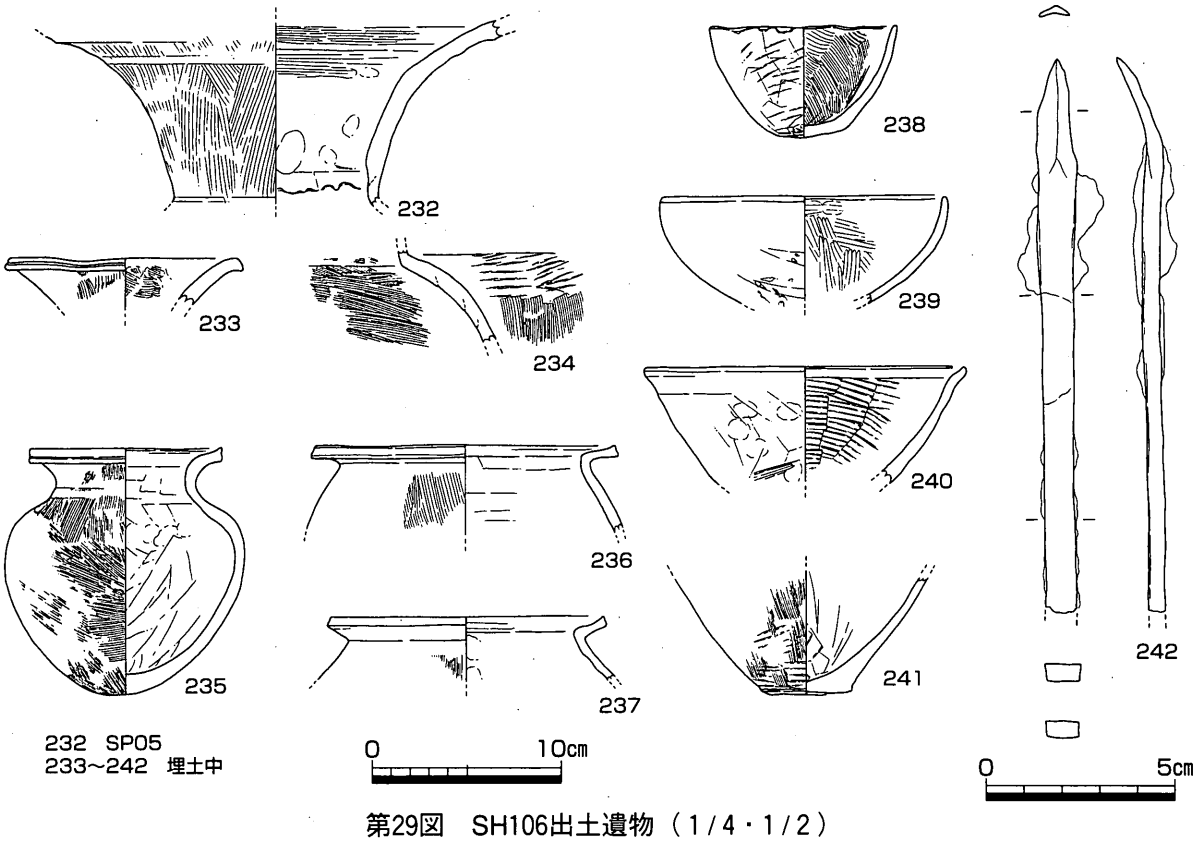
SH107（第33・34図、図版9・36）

Ⅰ区中央部東側で検出した竪穴住居である。東側2/3程度は調査区外へ延びる。円形で直径は8m程度と考えられ、深さは東壁土層より約1mを測る。住居内には東壁際付近で浅い落ち込みがみられた他は壁溝、主柱穴とも検出できなかった。この落ち込みの埋土は竪穴住居の埋土とは区別できず、ベッド状遺構となる可能性もあろう。また、東壁の土層断面には中央部付近に炭の堆積層がわずかに認められ、東側に炉が検出できる可能性が高い。平面精査では検出できなかったが、東壁土層から古墳時代の土坑に切られることが判明した。また、SH105とは重複関係にはない。

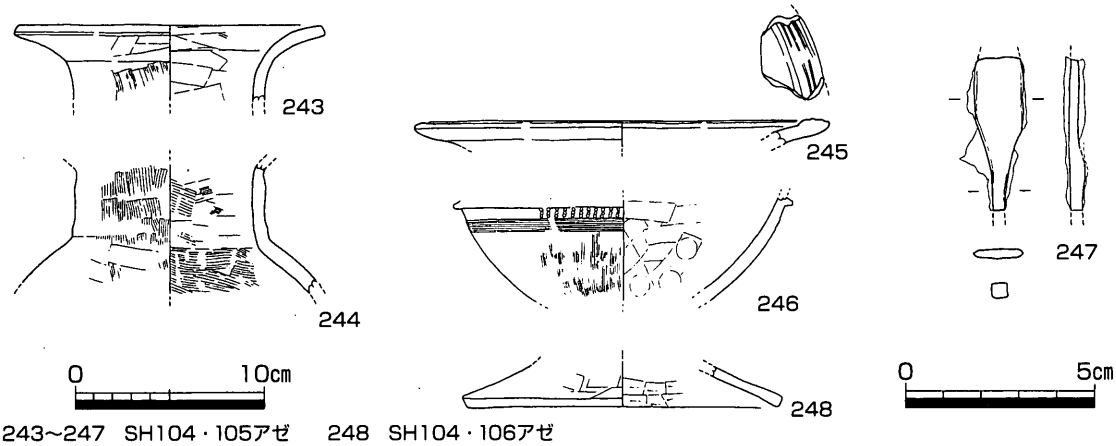
300～308は床面から出土した遺物である。300･301は壺。300は広口壺。口縁端部を上下に拡張し、端部に櫛描き波状文を施す。301は緩やかに斜めに立ち上がる壺。布留式まで下るものか。302・303は甕。



第28図　SH105出土遺物（9）（1/2・1/3）



第29図　SH106出土遺物（1/4・1/2）



243~247 SH104・105アゼ　248 SH104・106アゼ

第30図　SH104～106出土遺物（1/4・1/2）

いずれも外面は叩き痕、内面は板ナデ痕を残す。304～307は鉢。304·305は口縁端部を外反させる。306は高杯の杯部の形態で、底部外面はヘラ削りする。下川津B類土器と同じ形態であるが、胎土中に角閃石を含まず雲母を含む。307は椀型。308は底部。底部外面にまでハケが及ぶ。

309～311は最下層から出土した遺物。309は甕小破片。310は高杯脚部。穿孔は1ヶ所に確認できる。311は鉢。椀型。

312～318は下層出土遺物。312は広口壺。313～315は甕。313は口縁部小片。下部は剥離痕で、その断面から3層の粘土が見える。315は下川津B類土器。316・317は高杯。316は内外面をヘラミガキする。317は脚部。外面は太目のヘラミガキを施し、上端部には杯部との剥離痕跡を残す。318は鉢。

319～322は上層から出土した遺物。319は下部は剥離しており、剥離面の断面に2層の粘土の接合面が認められる。320は甕小片。321・322は底部。322の底部外面と体部外面下端部付近には指押さえ痕跡が顕著であり、底部の粘土板が剥離した可能性もあろう。

323～326は層位不明の遺物である。323・324は壺。325は鉢。浅い椀型。326は底部。

327～330はSH105との境付近で出土した遺物。平面的には確認できなかったが、壁面土層観察により確認された土坑の遺物が混入している可能性もある。327は壺か。328は甕。329は高杯脚部。脚部と杯部の接合部が長い。330は底部。

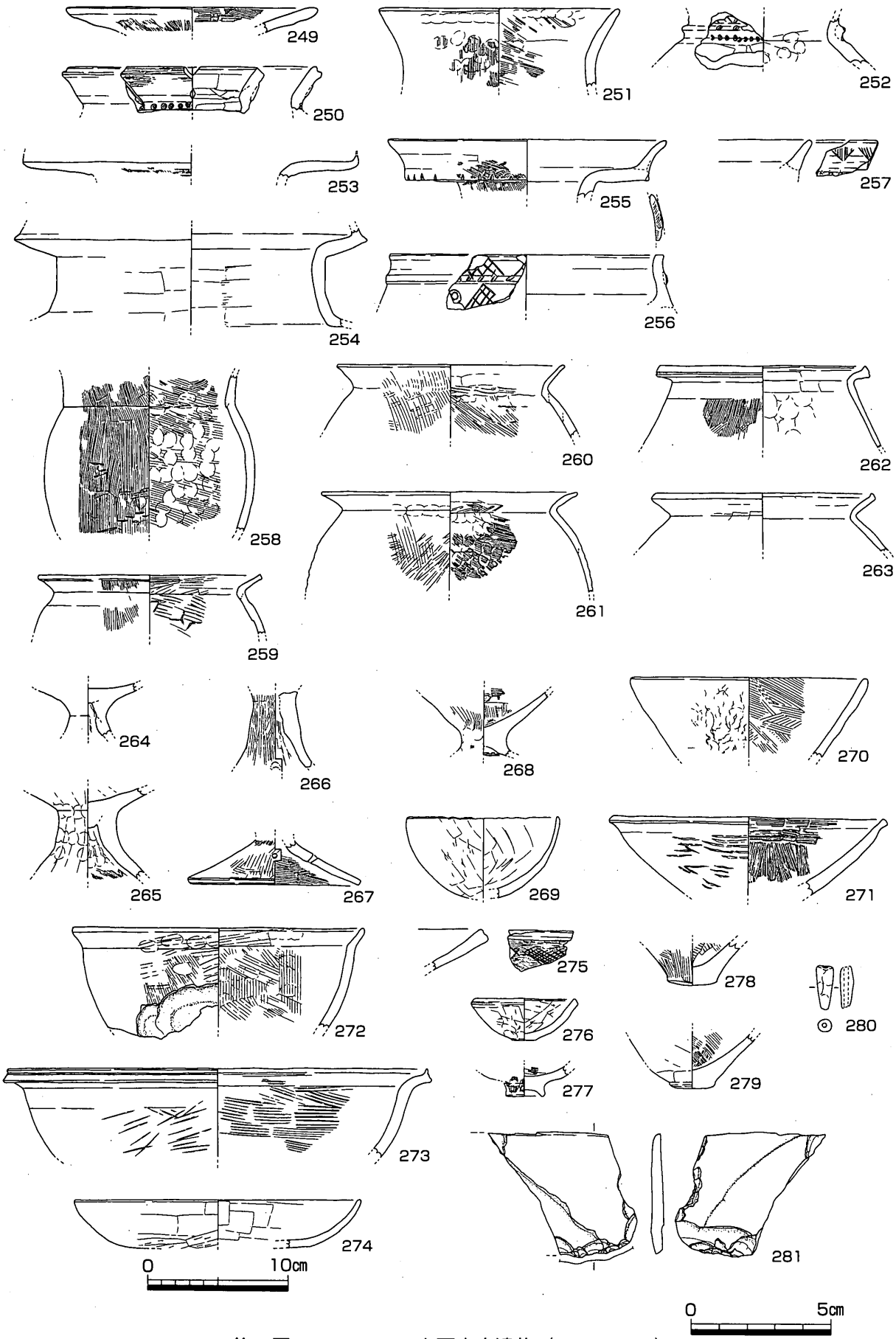
331～335はSH107を検出する際の上面掘削・精査の際に出土した遺物である。331・332は甕。331は形態は下川津B類土器にも似るが、角閃石は含まない。332は東阿波型土器。胎土中に片岩を含む。333・334は鉢。いずれも椀型。334は口縁端部に沈線が1条巡る。335は須恵器瓶。口縁部外面に波状文を施し、その下部には突帯を巡らせる。

SH107の時期はおもに床面上の遺物から古墳時代初頭頃と考えられる。

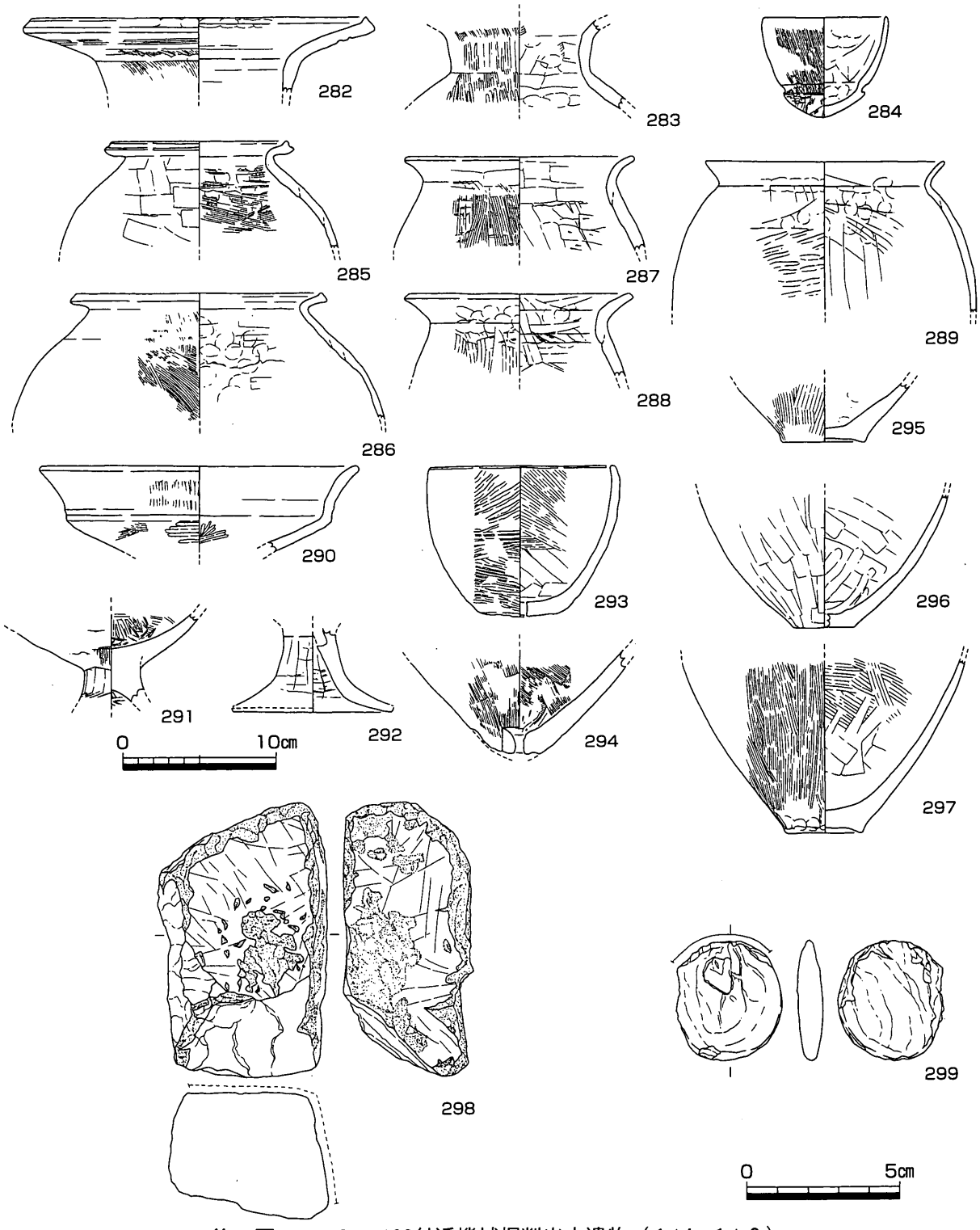
SH108（第35・36図、図版37）

Ⅰ区南西部で検出した竪穴住居である。明確な遺構のラインは認められなかったが、直径5～5.5m、明確な掘り込みは認められなかった。住居内の壁溝は不明、主柱穴は竪穴住居のラインに沿って円形に巡ると考えられる。主柱穴は円形で直径約40cm、深さ16～30cmで、5基検出した。住居内の中央付近では長径1.5m、短径0.6m、深さ12cmの楕円形の範囲で炭の堆積層を検出した。その北側には長径0.95m、短径0.45m、深さ25cmの楕円形の土坑を検出しているが、竪穴住居に伴うものかどうかは不明である。

336～339はSP01から出土した遺物である。336・337は壺である。336は外面を密にヘラミガキする。

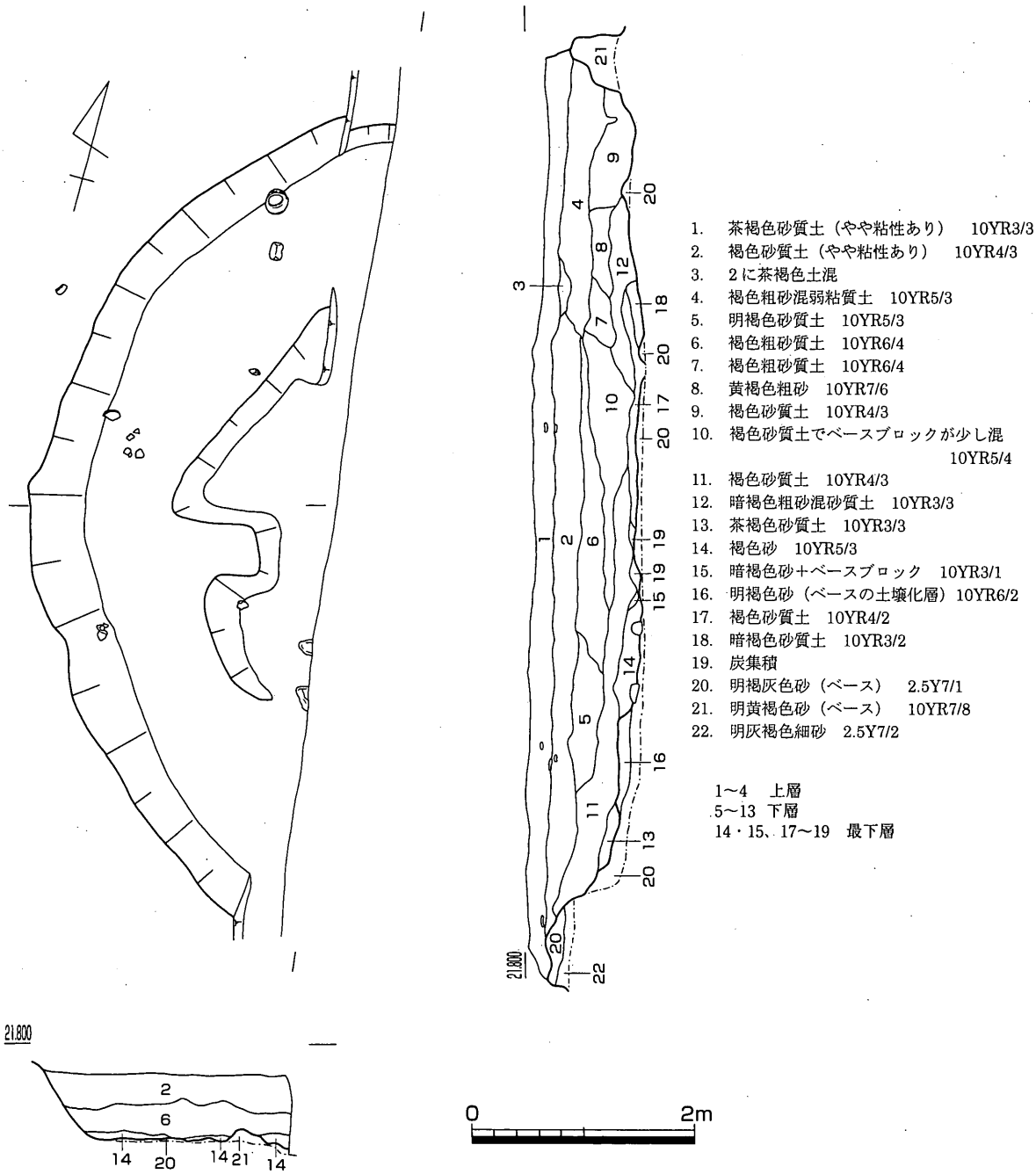


第31図　SH104～106上面出土遺物（1/4・1/2）



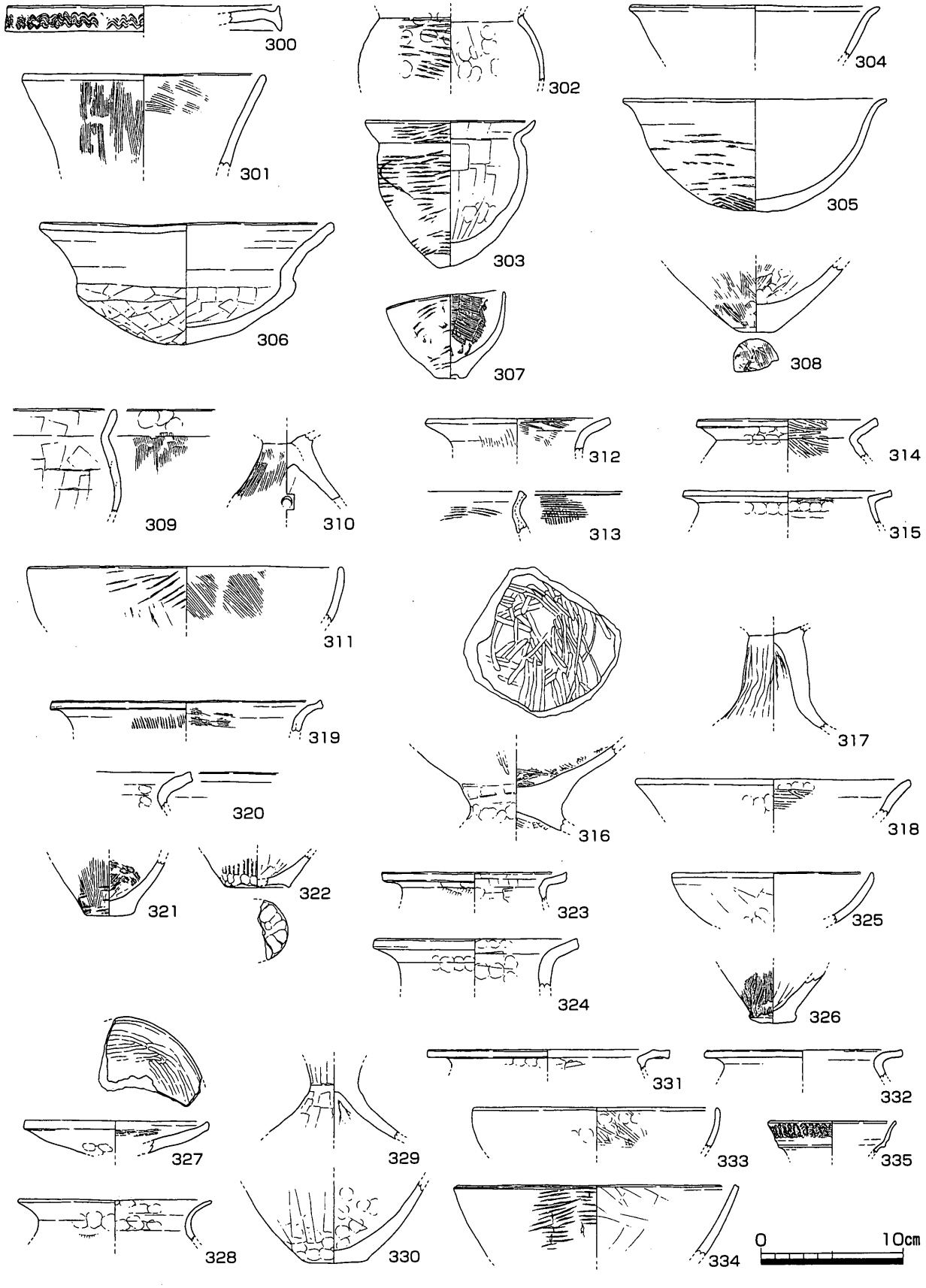
第32図　SH104～106付近機械掘削出土遺物（1/4・1/2）

337は口縁部。下端部は剥離面。剥離面の断面では、粘土板を重ねたようになっている。338は甕。339は高杯。内外面を4分割のヘラミガキをする。充填していた底部は剥離している。下川津B類土器。340はSP02から出土した。壺。頸部は緩く外反しながら立ち上がり、口縁部は大きく開く。体部と頸部の境に刻み目突帯を巡らせる。341はSP03から出土した遺物。底部。底部外面と体部下端部外面には指押さえ痕が顕著に残っており、底部にはさらに粘土板を貼り付けていた可能性もある。342はSK01から



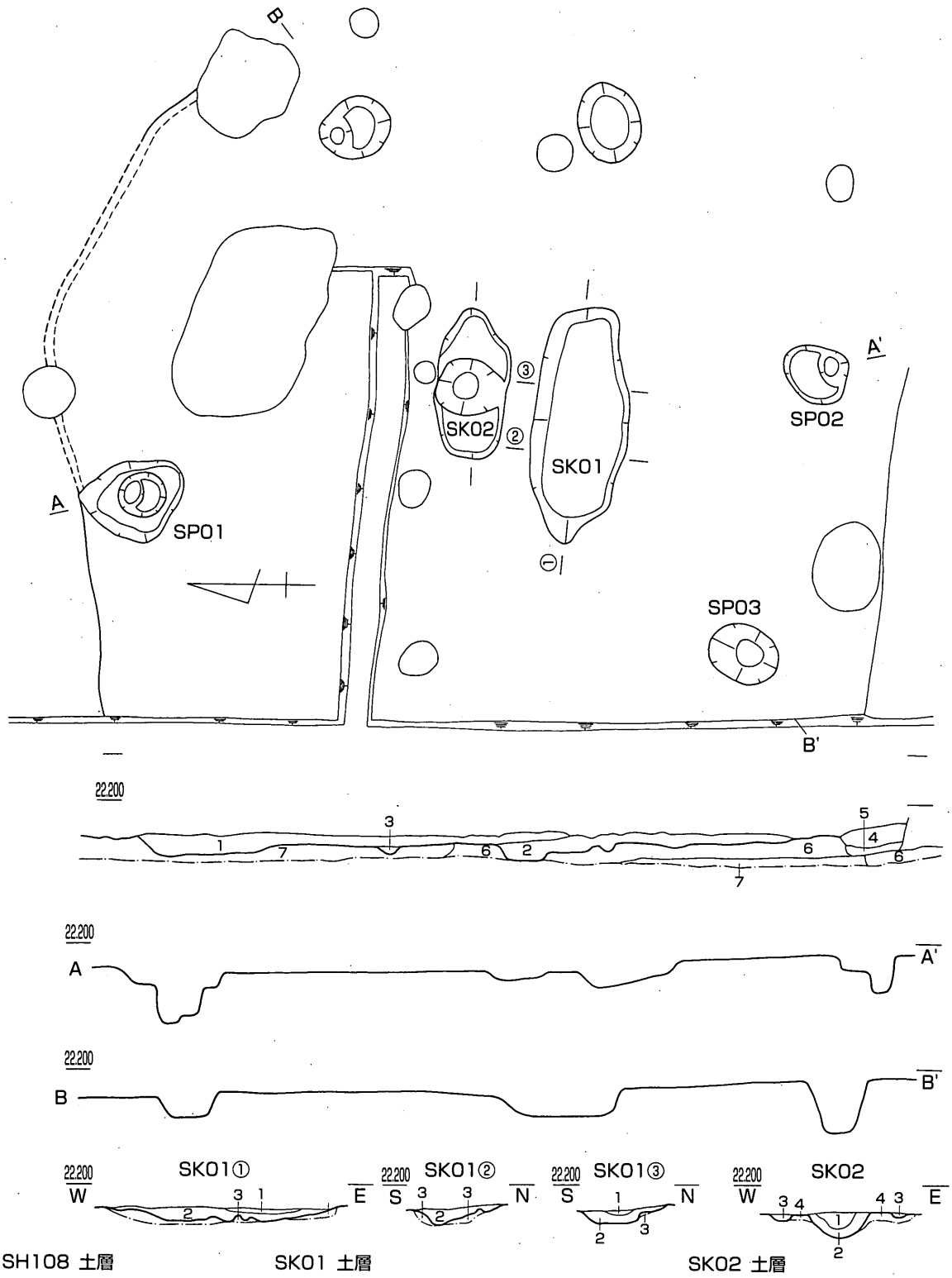
第33図　SH107平・断面図（1/60）

出土した遺物。壺口縁部。343～345はSK02から出土した遺物。343は高杯脚部。344は鉢口縁部。345は壺口縁部。外面に焼成時に破裂したと考えられるハガレが見られた。346～370は埋土中出土遺物。346～349は壺。348・349は広口壺の頸部。350～356は甕。350は下川津B類土器。357～358は高杯。357は胎土中に角閃石を含む。杯部内外面に4分割のヘラミガキを施す。口縁端部は平らにする。358は脚部。脚部外面はヘラミガキ、杯部内面はハケを施す。脚部には穿孔を5ヶ所に施す。359～366は鉢。359・360は口縁端部を外反させる。361～366は椀型。361・362は口径12cm程度のもの。361は内外面を密にヘラミガキ、362は外面にクラックを多く残す。363・364は口径14cm程度のもの。363は外面に指押え痕とクラックを残し、364は外面を叩きとハケで調整する。365・366は鉢口縁部小片。中型程度の鉢か。367・368は底部。369はスクレイパー。サヌカイト製。370は鉄器。先端部を折り曲げる。



300～308　床面上　　309～311　最下層　　312～318　下層　　319～322　上層
323～326　その他　　327～330　SH105との境付近　　331～335　上面精査

第34図　SH107出土遺物（1/4）



SH108 土層

1. 褐色粗砂混砂質土. 2.5Y5/3
2. 褐色粗砂混砂質土 2.5Y5/4
3. 褐色粗砂質土 2.5Y5/2
4. 褐色砂質土 2.5Y5/3
5. 黄褐色粗砂混粘質土 2.5Y7/8
6. 明黄褐色砂（ベース）10YR7/4
7. 明褐色粗砂（ベース）10YR6/4

SK01 土層

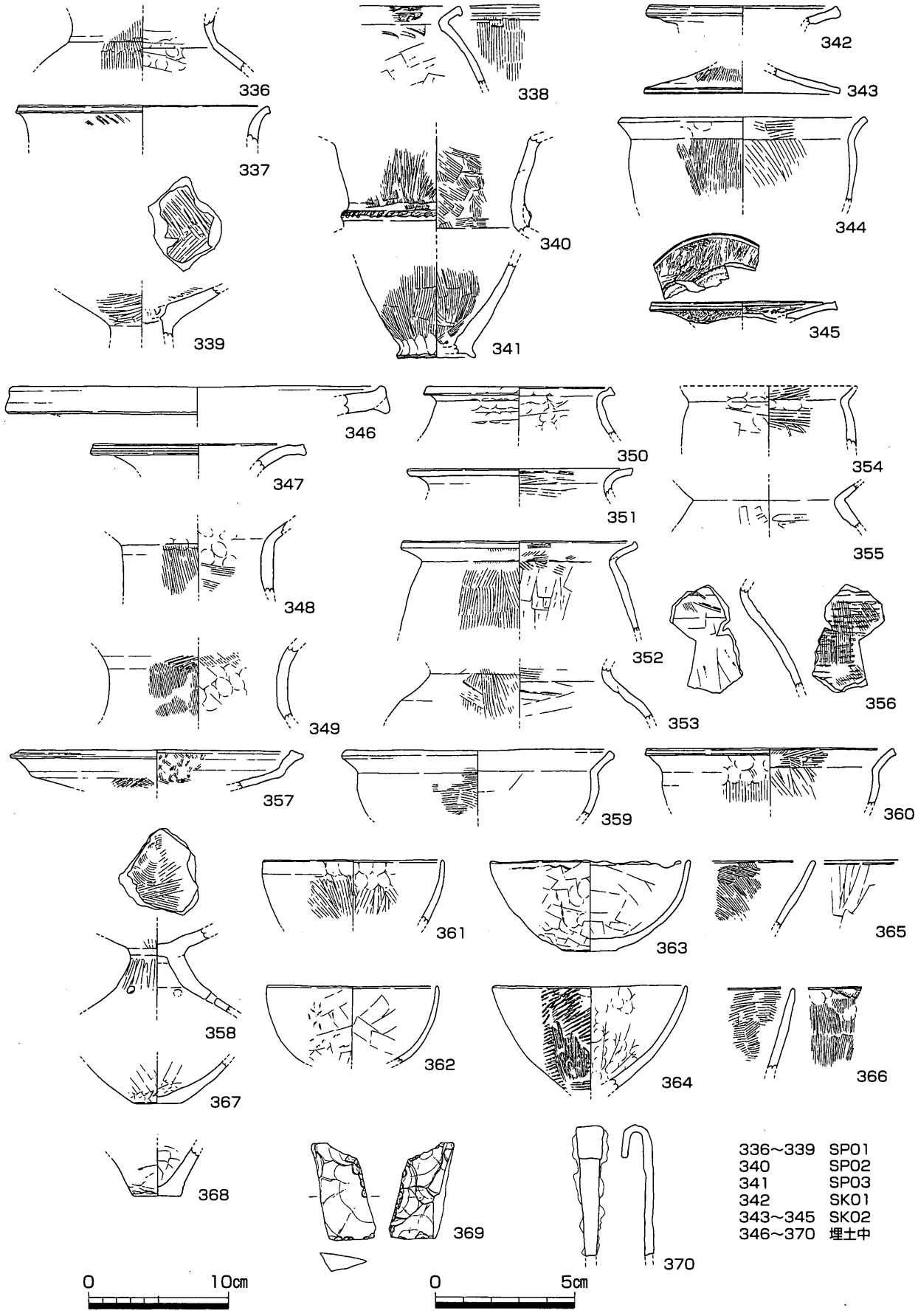
1. 暗褐色粗砂混砂質土 10YR4/1
2. 黒褐色粗砂混弱粘質土（炭掻き出し層） 10YR2/1
3. 黄褐色粗砂（ベース） 10YR7/8

SK02 土層

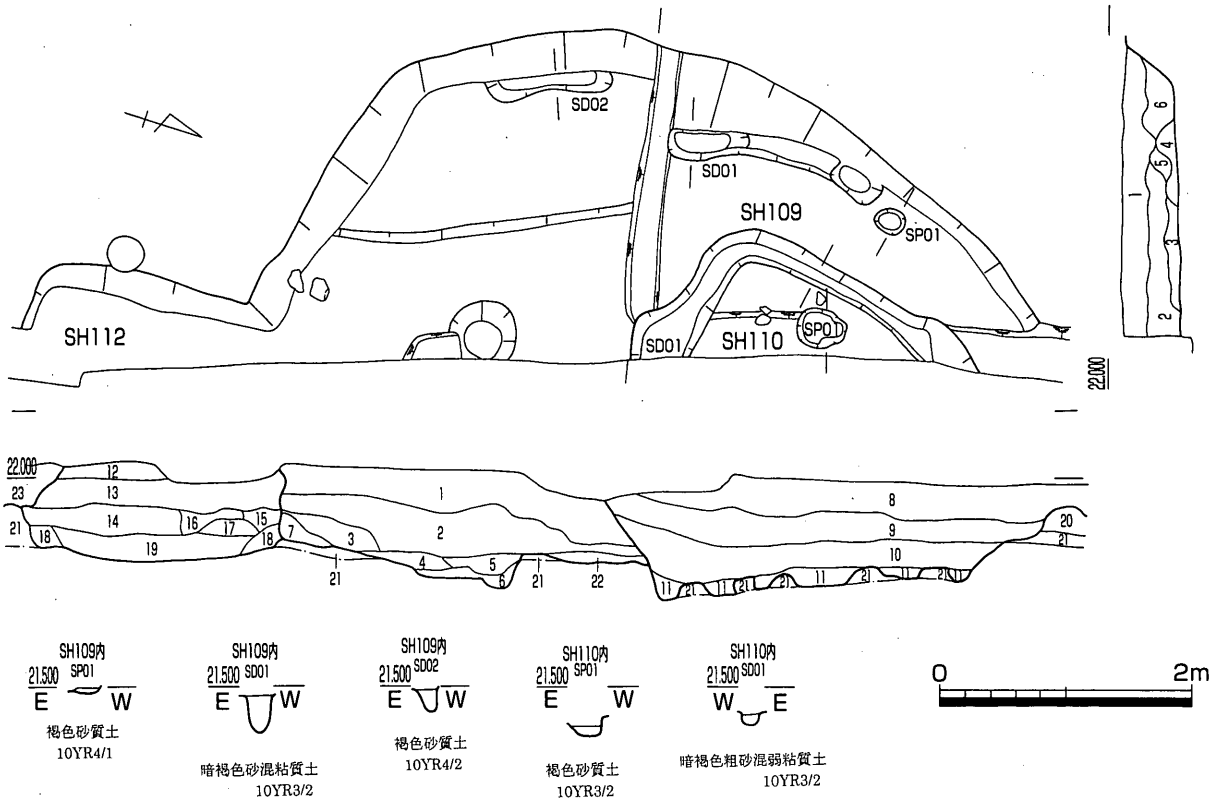
1. 黄褐色粗砂混砂質土 10YR4/4
2. 暗灰褐色粗砂混砂質土 2.5Y3/2
3. 茶褐色砂質土 10YR4/1
4. 褐色砂（ベース） 10YR6/3

0 2m

第35図 SH108平・断面図（1/60）



第36図　SH108出土遺物（1/4・1/2）



1. 灰褐色粗砂混砂質土（少し粘い）10YR3/2
2. 褐灰色砂質土（粗砂混） 10YR4/1
3. 褐灰色砂質土（粗砂少し） 7.5YR4/1
4. 灰褐色砂質土でベースが斑に混 7.5YR4/1
5. 灰褐色砂質土でベースブロック混 7.5YR5/1
5' 黄褐色粗砂（ベース）で2の土混 10YR6/8
6. 灰褐色砂質土でベースブロック多く混 7.5YR5/1
7. 茶褐色砂混弱粘質土 10YR5/3
8. 灰褐色粗砂混弱粘質土 10YR4/2（上層）
9. 褐灰色粗砂混弱粘質土 2.5Y4/2（中層）
10. 褐灰色砂質土 2.5Y4/2（下層）
11. 褐灰色砂質土 2.5Y4/1（下層）
12. 暗褐色粗砂混弱粘質土 10YR3/2
13. 褐色粗砂混弱粘質土 10YR5/3
14. 13より少し明るい 10YR5/4
15. 褐色粗砂＋黄褐色粗砂 10YR6/4 2.5Y7/4
16. 褐色砂混弱粘質土 10YR6/3
17. 褐色砂混弱粘質土 10YR4/2
18. 褐色砂質土（壁溝） 10YR5/2
19. 褐色砂質土でベースブロックが多く混（床面）10YR5/3
20. 黄褐色粗砂混弱粘質土 2.5Y6/6
21. 明灰褐色細砂（ベース）2.5Y7/2
22. 黄褐色粗砂混粘質土（ベース） 10YR8/6
23. 茶褐色砂混弱粘質土 10YR4/3

1～7、22 SH109、8～11 SH110、12～19 SH112

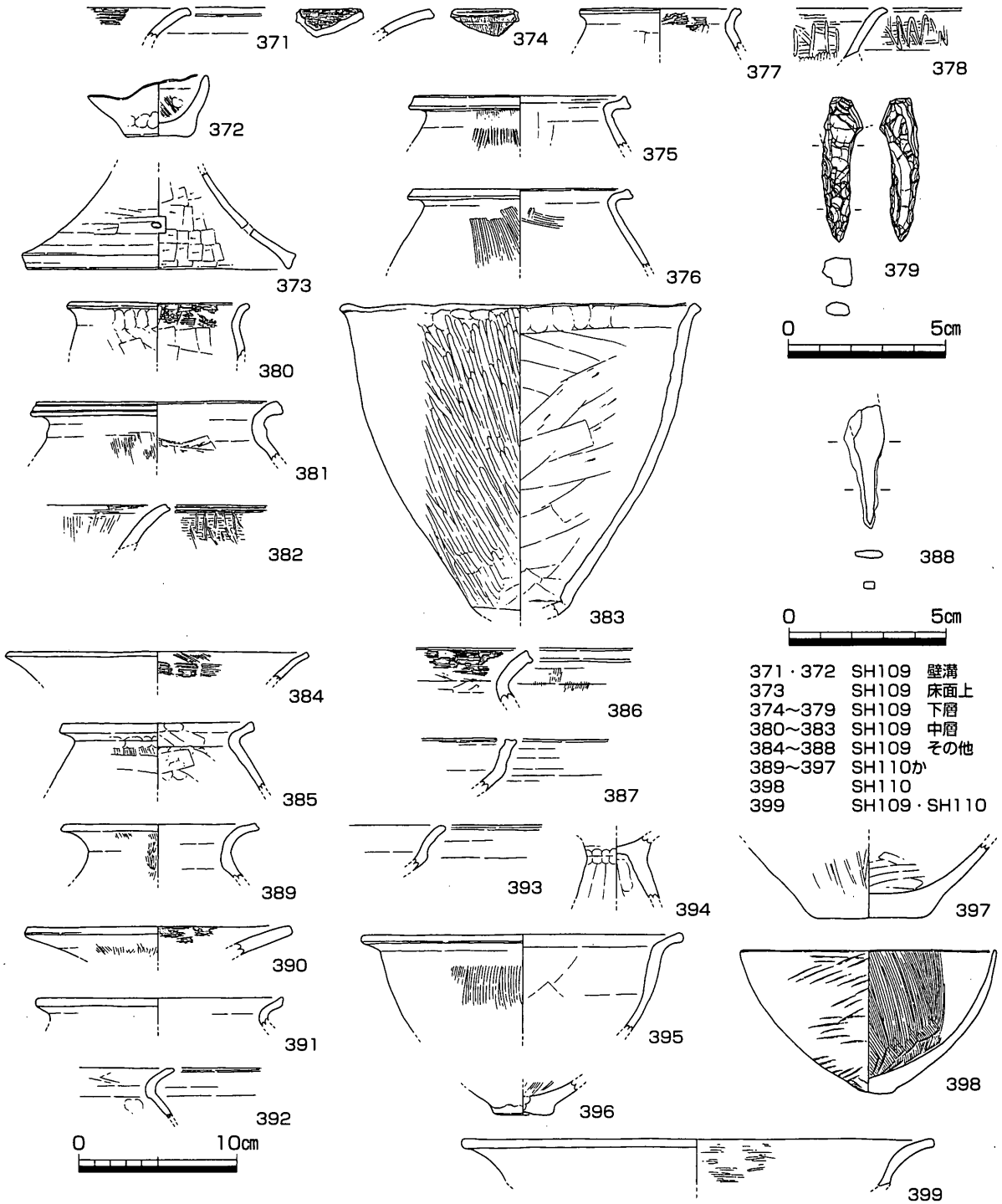
第37図 SH109・110・112平・断面図（1/60）

遺構の時期は弥生時代後期後半頃と考えられる。

SH109（第37・38図、図版10・37）

Ⅰ区南寄り東側で検出した竪穴住居である。円形と考えられるが、ややいびつである。半分以上は調査区外へ延びる。直径は約3.5～4mと考えられ、深さは東壁土層により75cmを測る。住居内には西側に部分的に壁溝が、東側調査区端でピットを検出しており、このピットは主柱穴となる可能性がある。また、住居の南半部では東側で落ち込みが見られる。壁溝は幅15cm、深さ17cm、埋土は褐色砂質土を呈す。ピットは円形で直径50cm、深さ22cm、埋土は灰褐色砂質土でベースブロックを多く含む。住居内南半部東側で検出した落ち込みはラインが住居の肩に沿わず直線状を呈する。この部分は住居の埋土とやや異なることから貼り床の可能性も考えられるかもしれない。SH109は断面観察によりSH110より古い。

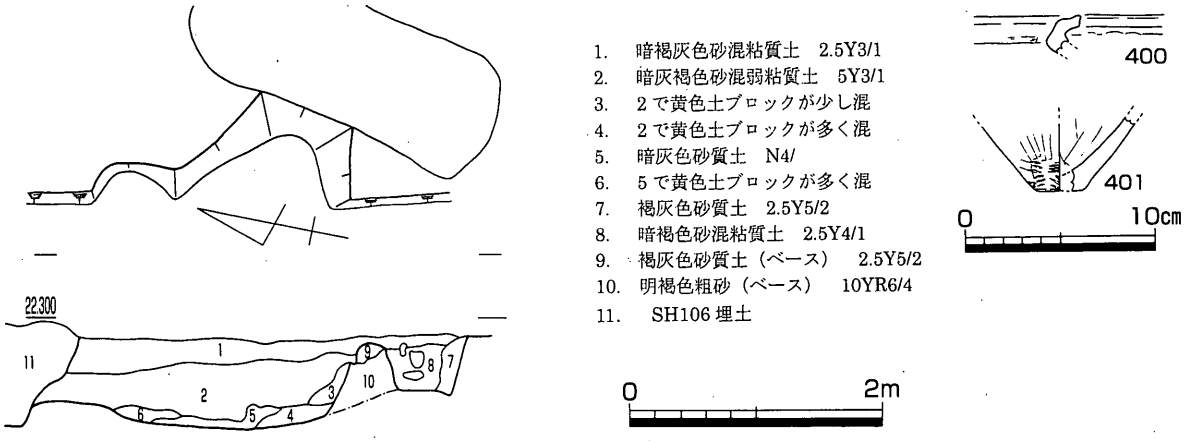
調査の際当初SH109とSH110の重複関係を認識できず、同一の遺構として掘り下げたため、SH109と



第38図　SH109・110出土遺物（1/4・1/2）

SH110の遺物を正確に取り上げることができなかったが、取り上げ地点によりある程度推測が可能であるので、それに基づいて記述する。

371・372は壁溝から出土した遺物である。371は壺口縁部小片。372は鉢。歪みが著しく、内外面とも指押え痕を残す。内面は軽くハケで調整する。373は床面直上で出土した。高杯脚部。下川津B類土器。内面は横方向にヘラケズリを施す。穿孔は2ヶ所に残り、残存部分から穿孔は4ヶ所あったと考えられる。374～379は南半部下層から出土した。南半部はSH110と重複する部分がないので、SH109出土と考



第39図　SH111平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

えられる。374は壺口縁部小片。375～377は甕。375は下川津B類土器。内面の指押えは顕著ではない。376は胎土中にほとんど砂粒を含まない。378は高杯口縁部小片。下端部に杯底部との境に剥離痕跡が残る。内外面とも横方向の後粗い縦方向のヘラミガキが残る。379は石錐。サヌカイト製。380～383は南半部中層から出土した遺物。380・381は甕。381は口縁端部に沈線を2条巡らせる。382は高杯口縁部小片。378と同一個体の可能性がある。383は鉢。外面は密にヘラミガキ、内面はヘラ削りで、口縁端部は波打っている。底部穿孔土器になるものか。384～388は南半部から出土した層位不明遺物。384～386は甕。387は高杯口縁部小片。胎土中に角閃石を含む。388は鉄器。鉄鏃。柳葉式。上部は欠損。

遺構の時期はおおむね弥生時代後期後半～終末期頃と考えられる。

SH110（第37・38図、図版10・37）

Ⅰ区SH109内の北側で検出した竪穴住居である。方形と考えられるが南東隅部分しか検出できず、大部分は調査区外へ延び、全体の規模は不明である。深さは東壁土層により80cmを測り、主軸方位は検出範囲ではN14°Eと考えられる。住居内からは壁溝とピットを1基検出した。壁溝は幅20cm、深さ16cmで埋土は暗褐灰色粗砂混弱粘質土を呈する。ピットは円形で直径27cm、深さ8cm、埋土は暗褐灰色粗砂混弱粘質土である。遺構の前後関係によりSH110はSH109より新しい。

SH110は当初SH109との重複関係を認識できずにSH109として掘り下げたため、本来SH110の遺物もSH109として取り上げた可能性が高い。SH109の北半部として取り上げた遺物はSH110からの出土の可能性が高いので、それも併せてここで記述する。

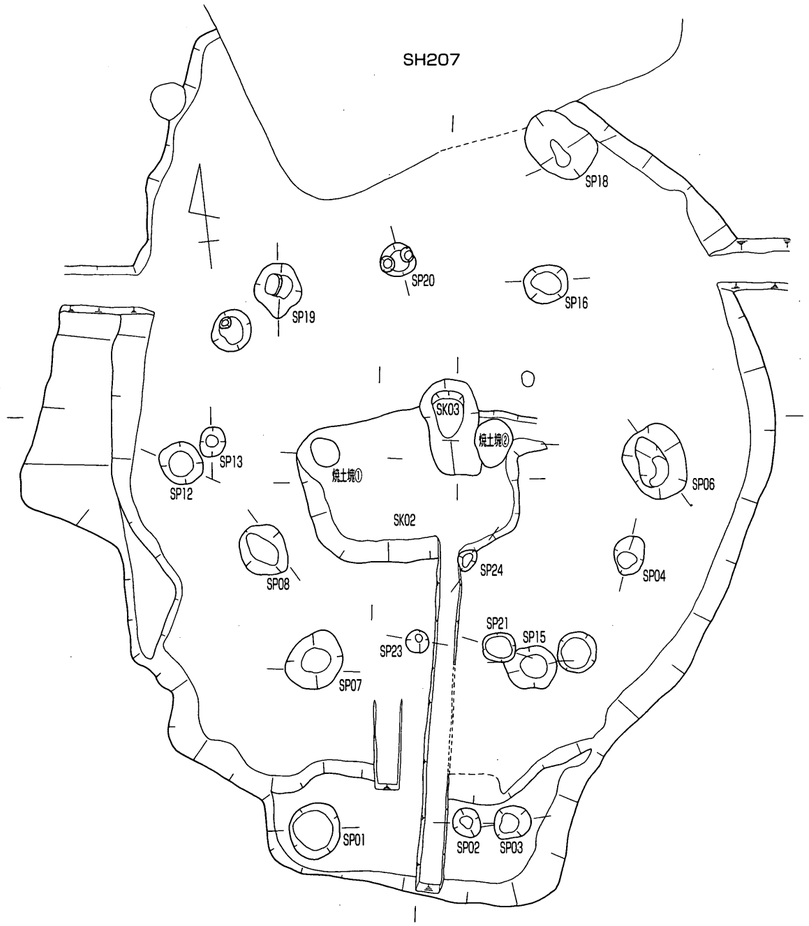
389～397はSH109北半部の遺物として取り上げたものである。389・390は壺。391・392は甕小片。393は高杯口縁部小片。394は脚部。395は鉢。口縁端部を外反させる。396・397は底部。398はSH110を検出後、掘り下げ中に出土した遺物である。鉢。内面はハケ、外面はタタキで調整する。

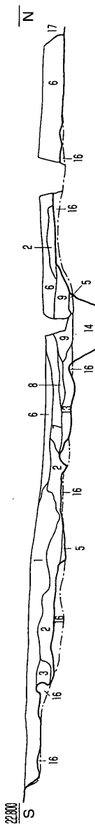
399はSH109を上面精査した際に出土した遺物である。SH109とSH110の双方で可能性がある。高杯杯部小片。内面に横方向のヘラミガキが観察でき、杯底部との剥離痕が残る。外面は摩滅する。378・382と同一個体か。

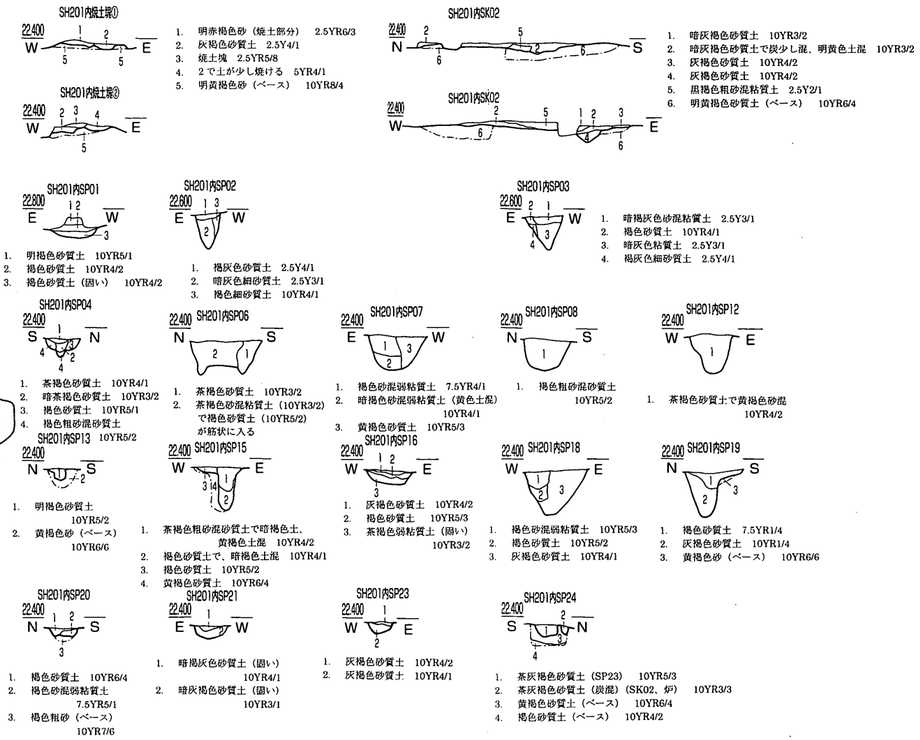
SH110の時期は出土遺物がどちらの竪穴住居から出土したのか不明確なのであいまいな部分が残るが、SH109とはあまり時期差はないのではないかと思われる。

SH111（第39図）

SH106の南側に接して検出した竪穴住居である。平面的には確認できたのは北東隅部分のみであり、







1. 明赤褐色砂（焼土部分） 2.5YR6/3
2. 灰褐色砂質土 2.5Y4/1
3. 焼土塊 2.5YR5/8
4. 2で土が少し焼ける 5YR4/1
5. 明黄褐色砂（ベース） 10YR8/4

1. 暗灰褐色砂質土 10YR3/2
2. 暗灰褐色砂質土で炭少し混、明黄色土混 10YR3/2
3. 灰褐色砂質土 10YR4/2
4. 灰褐色砂質土 10YR4/2
5. 黒褐色粗砂混粘質土 2.5Y2/1
6. 明黄褐色砂質土（ベース） 10YR6/4

1. 明褐色砂質土 10YR5/1
2. 褐色砂質土 10YR4/2
3. 褐色砂質土（固い） 10YR4/2

1. 褐灰色砂質土 2.5Y4/1
2. 暗灰色細砂質土 2.5Y3/1
3. 褐色細砂質土 10YR4/1

1. 暗褐灰色砂混粘質土 2.5Y3/1
2. 褐色砂質土 10YR4/1
3. 暗灰色粘質土 2.5Y3/1
4. 褐灰色細砂質土 2.5Y4/1

1. 茶褐色砂質土 10YR4/1
2. 暗茶褐色砂質土 10YR3/2
3. 褐色砂質土 10YR5/1
4. 褐色粗砂混砂質土 10YR5/2

1. 茶褐色砂質土 10YR3/2
2. 茶褐色砂混粘質土（10YR3/2）で褐色砂質土（10YR5/2）が筋状に入る

1. 褐色砂混弱粘質土 7.5YR4/1
2. 暗褐色砂混弱粘質土（黄色土混） 10YR4/1
3. 黄褐色砂質土 10YR5/3

1. 褐色粗砂混砂質土 10YR5/2

1. 茶褐色砂質土で黄褐色砂混 10YR4/2

1. 明褐色砂質土 10YR5/2
2. 黄褐色砂（ベース） 10YR6/6

1. 茶褐色粗砂混砂質土で暗褐色土、黄褐色土混 10YR4/2
2. 褐色砂質土で、暗褐色土混 10YR4/1
3. 褐色砂質土 10YR5/2
4. 黄褐色砂質土 10YR6/4

1. 灰褐色砂質土 10YR4/2
2. 褐色砂質土 10YR5/3
3. 茶褐色弱粘質土（固い） 10YR3/2

1. 褐色砂混弱粘質土 10YR5/3
2. 褐色砂質土 10YR5/2
3. 灰褐色砂質土 10YR4/1

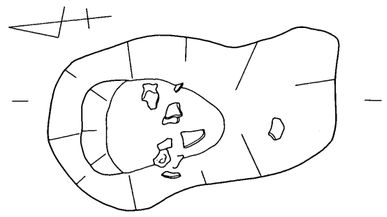
1. 褐色砂質土 7.5YR1/4
2. 灰褐色砂質土 10YR1/4
3. 黄褐色砂（ベース） 10YR6/6

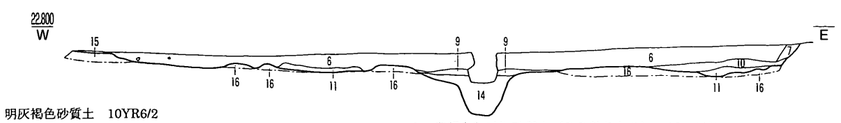
1. 褐色砂質土 10YR6/4
2. 褐色砂混弱粘質土 7.5YR5/1
3. 褐色粗砂（ベース） 10YR7/6

1. 暗褐灰色砂質土（固い） 10YR4/1
2. 暗灰褐色砂質土（固い） 10YR3/1

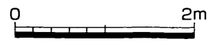
1. 灰褐色砂質土 10YR4/2
2. 灰褐色砂質土 10YR4/1

1. 茶灰褐色砂質土（SP23） 10YR5/3
2. 茶灰褐色砂質土（炭混）（SK02、炉） 10YR3/3
3. 黄褐色砂質土（ベース） 10YR6/4
4. 褐色砂質土（ベース） 10YR4/2

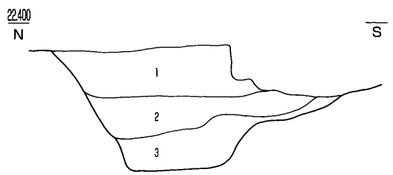




1. 明灰褐色砂質土 10YR6/2
2. 褐色砂質土 10YR5/2
3. 褐灰色砂質土（やや粘性あり） 2.5Y5/1
4. 褐灰色砂質土（上面からの掘りこみ） 10YR5/1
5. 灰褐色砂質土（やや粘性あり） 10YR5/1
6. 灰褐色砂質土 2.5Y5/2
7. 暗灰褐色砂質土（炭混）ただし2との境はわかりにくい 7.5YR4/1
8. 暗灰褐色砂質土（7より暗い、炭混） 7.5YR3/2
9. 暗灰褐色砂質土 7.5YR4/1
10. 黄褐色粗砂混砂質土（やや粘りあり） 10YR4/3
11. 褐灰色砂 2.5Y5/2
12. 褐色砂質土 10YR5/2
13. 暗灰褐色砂質土＋炭、焼土もあり 10YR4/1
14. SK03 埋土
15. 黄褐色砂質土 10YR6/4
16. 黄褐色砂（ベース） 10YR6/6
17. 灰褐色砂質土（SH07） 10YR4/2



1、6 上層
2、7～11、13下層



1. 灰褐色砂混弱粘質土 10YR4/2
2. 1で黄褐色多く砂混（土器多い） 2.5Y7/6
3. 灰褐色砂質土 10YR4/1

第40図 SH201平・断面図（1/60・1/20）

第41図　SH201遺物出土状況（１/40）

大半は西側の調査区外へ延びる。西壁土層断面により確認できたもので、土層によりSH106より古い。方形と考えられるが、全体の規模は不明、深さは67cmを測る。竪穴住居の端の部分は中央より約10cm程度窪んでおり、その部分には埋土にベースブロックが混じったような土で埋められている。後に床を補修した痕跡とも考えられる。検出範囲内では壁溝や主柱穴などはなかった。

400は甕小片。401は底部。遺構の時期は明確ではないが、SH106との重複関係と考え合わせれば弥生時代後期後半頃かと考えられる。

SH112（第37図、図版10）

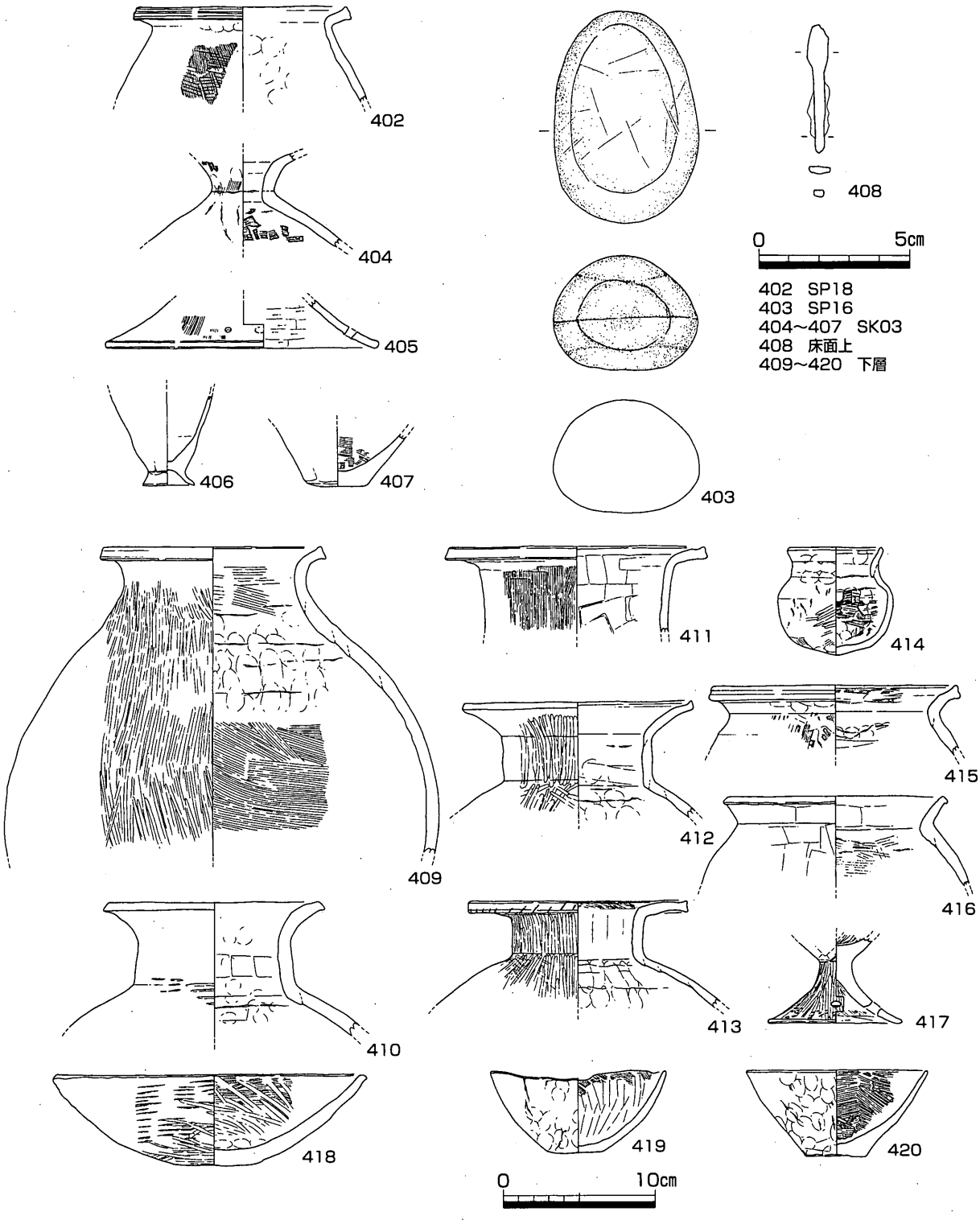
SH109の南側に接して検出した竪穴住居である。方形と考えられるが南東隅部分しか検出できず、大部分は調査区外へ延び、全体の規模は不明である。深さは東壁土層より約80cmを測る。主軸方位は検出範囲ではN6°Wである。住居内からは平面精査では遺構は検出できなかったが、東壁土層より幅約20cm、深さ約20cm、埋土が褐色砂質土の壁溝が観察できる。土層断面によりSH112はSH109に切られる。

SH201（第40～44図、図版11・12・37・38）

Ⅱ区とⅠ区の境付近で検出した円形の竪穴住居である。長楕円形で、北側ではSH207により消滅する。南側に張り出しを持つ。張り出し部を除く長軸は推定8.8m、短軸8.3m、深さは30cm程度、想定面積約58m^2、主軸方向はN10°Eである。床面上から柱穴を19穴検出しているが、主柱穴は楕円形部分で6穴、張り出し部分で2穴と考えられる。柱穴はおおむね円形で、直径42～84cm、深さ9～51cmを測る。住居の中央やや南寄りで中央土坑SK03とその周囲に焼土の広がり（SK02）が認められた。SK03は楕円形で長径108cm、短径65cm、深さ46cmで、土坑の北寄りで深い。埋土の中位から土器が多く出土したが、炭や焼土は検出しなかった。SK02は長方形で長辺2.4m、短辺1.8m程度に広がる。SK02の北半部の東西にSK03を挟むように直径35cmの円形の焼土塊2ヶ所に認められた。

402はSP18から出土した。甕。口縁端部に凹線状の沈線が巡る。下川津B類土器。403はSP16から出土した遺物。磨石か。安山岩製。敲打痕は認められず、わずかに擦痕が残る。404～407はSK03から出土した遺物。404・405は高杯。404は底部が剥離していると考えられる。405には2孔1対の穿孔が1ヶ所に認められる。406は製塩土器。摩滅が著しい。胎土中に角閃石を多量に含む。407は底部。408は床面上から出土した遺物。ヤリガンナ。409～424は埋土下層から出土した遺物である。409～414は壺。410～413はいずれもほぼ直立する頸部から口縁が広がる広口壺。外面を密にヘラミガキする。409は頸部がやや内傾しながら立ち上がり、やや古い要素を持つ。414はミニチュアの壺。内外面ともに指押え痕を残し、外面にはクラックを残す。内外面とも最後に軽くハケやヘラミガキで調整する。415・416は甕。417は高杯。脚部はヘラミガキを密に行う。脚部に穿孔が1ヶ所残り、残存部分から1～3ヶ所程度に穿孔があったと考えられる。杯部は丸みを持った小型のもの。418～420は鉢。いずれも椀型。418は中型でやや浅め。419・420は外面に調整痕をほとんど残さず、クラックを残す。内面はハケまたは板ナデでていねいに調整する。421はスクレイパー。サヌカイト製。稜線部分で摩滅が認められる。422は砥石。出土時には表面が剥離した状態であり、剥離した破片を接合して図化した。現在剥離していない部分もひびが入っていた。安山岩製。表面に擦痕が顕著に認められる他、剥離が見られた裏面にも擦痕が認められた。423は台石。砂岩。表面に敲打痕、側縁に楔形石器を打ちつけた跡が残る。424は鉄鏃。柳葉式。茎部は完存している。

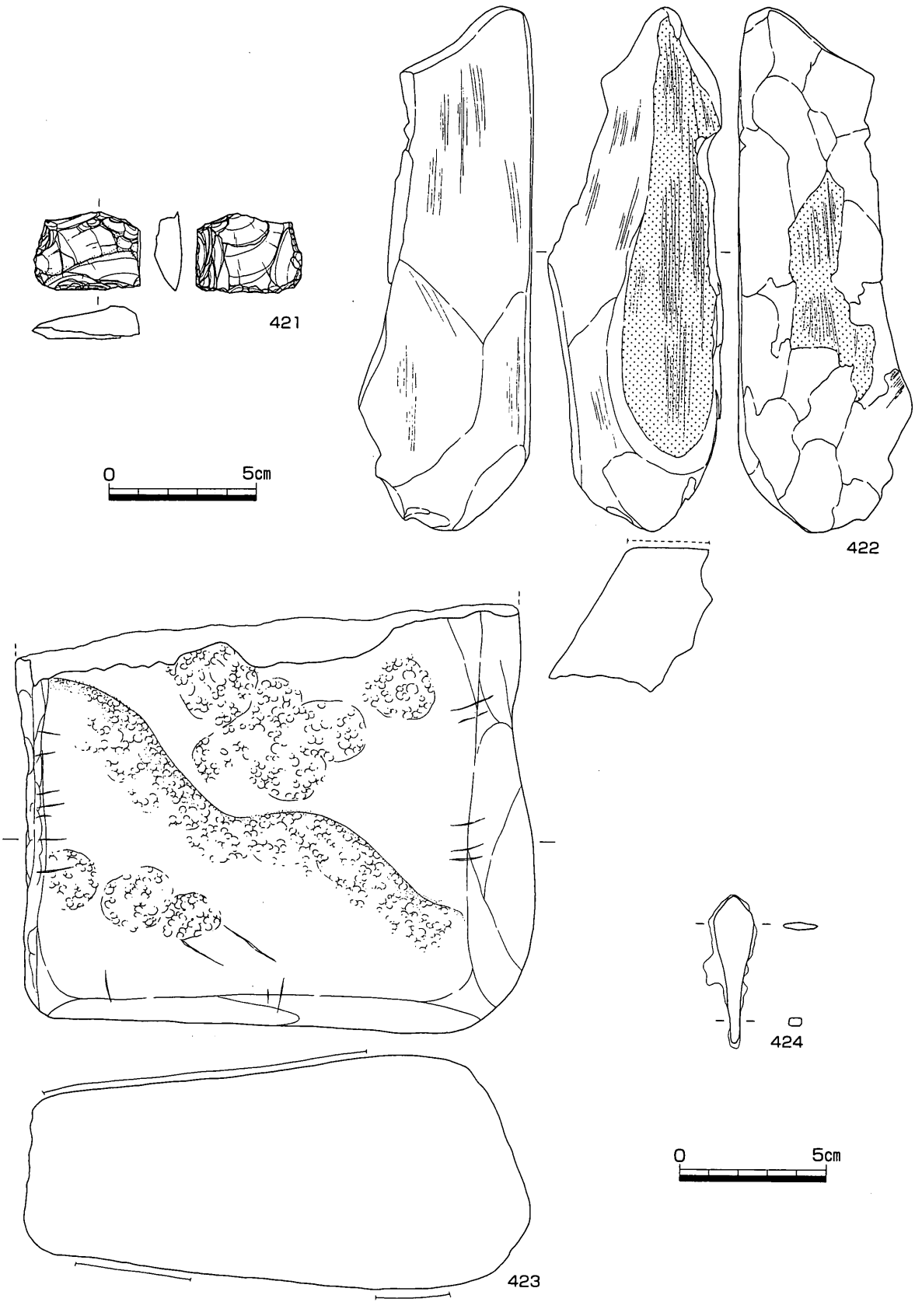
425～433は上層で出土した遺物である。425は二重口縁壺口縁部。外面にヘラ描きによる鋸歯文が描かれる。426は高杯杯部。口縁部外面には縦方向の、内面には横方向のヘラミガキを施す。427は鉢。椀



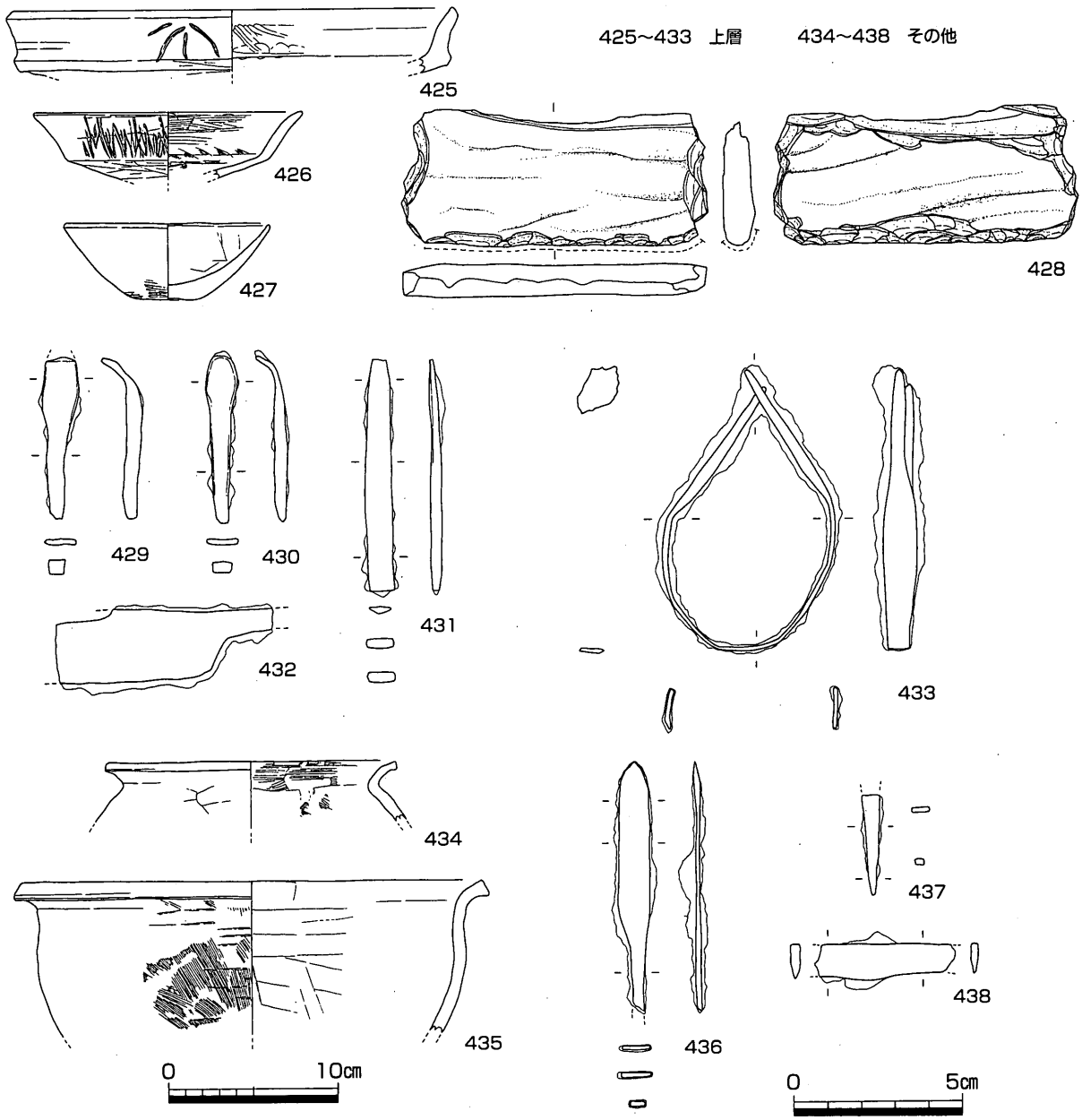
第42図　SH201出土遺物（1）（1/4・1/2）

型。428は打製石庖丁。結晶片岩製。刃部は摩滅する。429～433は鉄器。429～431はヤリガンナ。432、433は器種不明。433は短冊状の鉄を中央付近で折り曲げて端部同士を交差させている。端部は中央部に比べて細い。434～438は層位不明の出土遺物。 434は甕。435は大型の鉢。口縁部を外反させる。436～438は鉄器。436はヤリガンナ。SH105出土のものと接合した。

出土遺物からは弥生時代後期後半頃と考えられるが、SH105出土のヤリガンナと接合することを考え



第43図　SH201出土遺物（2）（1/2・1/3）

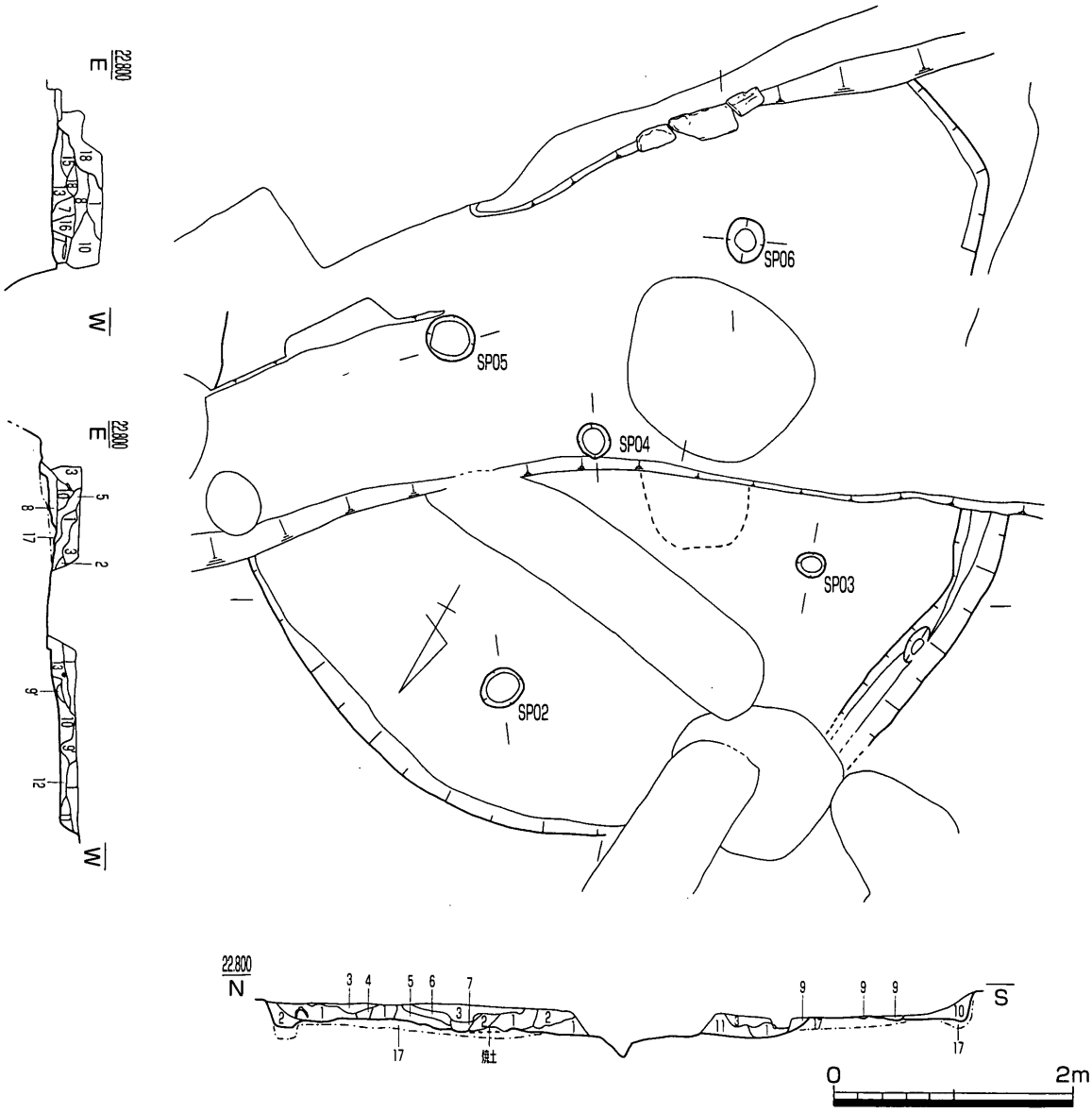


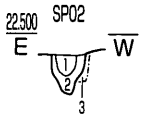
第44図　SH201出土遺物（3）（1/4・1/2）

併せれば弥生時代後期後半～終末期頃と考えられる。

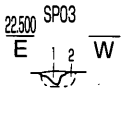
SH202（第45～48図、図版13・38・39・40）

Ⅱ区北西部で検出した竪穴住居である。東端部付近が一部調査区外へ延びる。遺構の重複関係により、SB201・SK208・SK227・SK228より古い。円形で直径6.8m、深さ20cm程度、面積は約36.3m² である。主柱穴は4穴と考えられる。炉および中央土坑は検出できなかったが、中央部分の撹乱により消失した可能性もある。壁溝は西部の一部で検出したにとどまった。遺構検出時より炭化木材や焼土がかなり確認でき、当初より焼失家屋であることが想定できた。遺構検出の結果、垂木と考えられる、中心より放射状に延びる炭化材を北側を中心に検出したほか、壁溝部分や垂木と垂木の間、竪穴住居中央付近に薄い炭化層が認められた。中央付近に垂木材とは方向の異なる炭化材があったが、柱穴の位置とは整合せず、

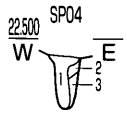




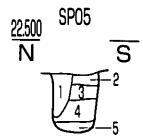
1. 暗灰褐色砂質土 10YR2/1
2. 暗褐色砂質土 10YR3/3
3. 黄褐色砂（ベース） 10YR6/6



1. 暗褐灰色砂質土 10YR3/2
2. 黄褐色砂（ベース） 10YR6/6



1. 暗褐色灰色砂質土 10YR3/2
2. 暗黄褐色砂質土 2.5Y4/3
3. 灰褐色砂質土 10YR4/1

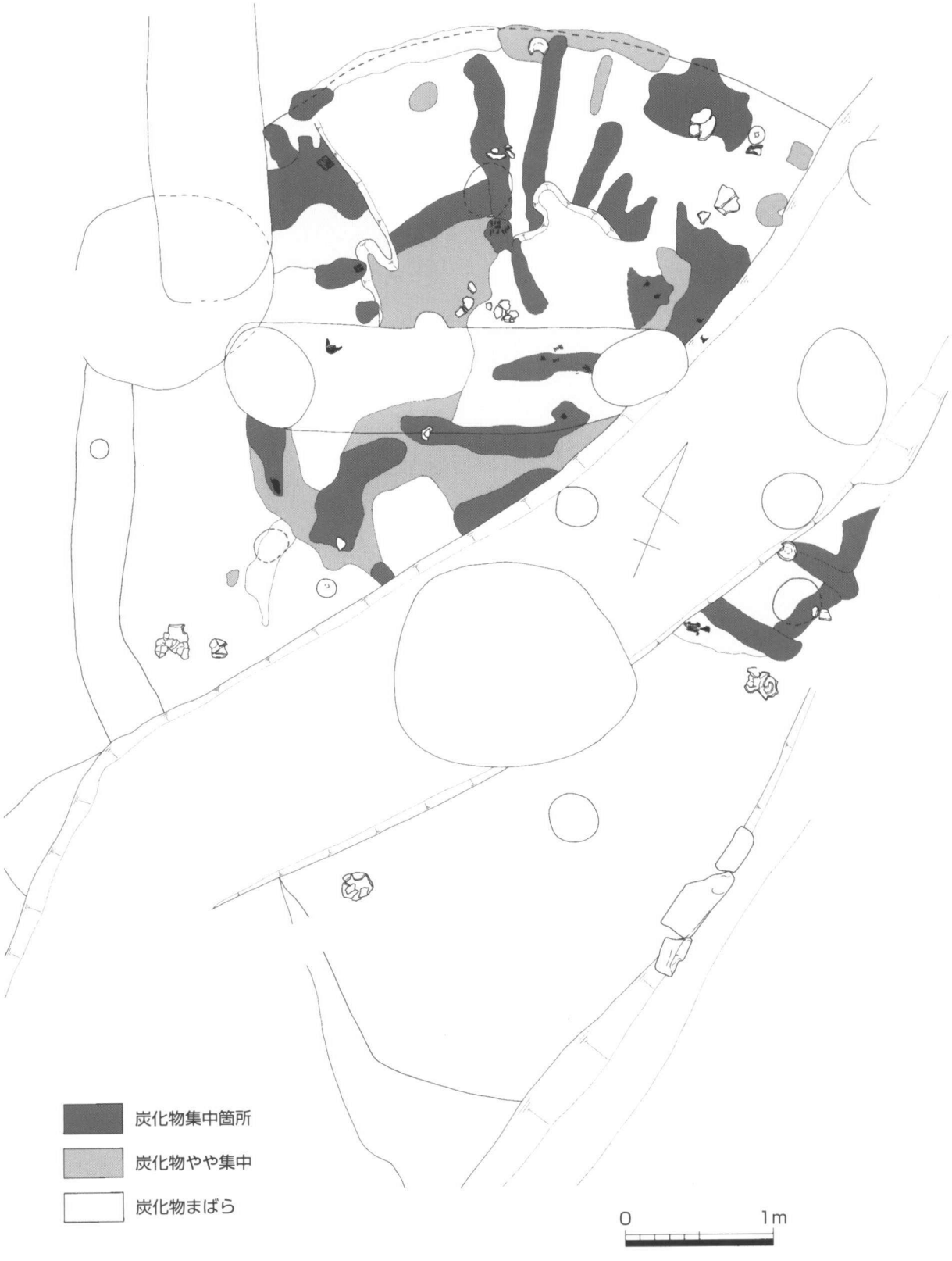


1. 灰褐色砂質土 10YR3/2
2. 明褐灰色砂質土 10YR6/2
3. 灰褐色砂質土 10YR4/2
4. 灰褐色砂質土 10YR4/1
5. 褐色砂質土 10YR3/3

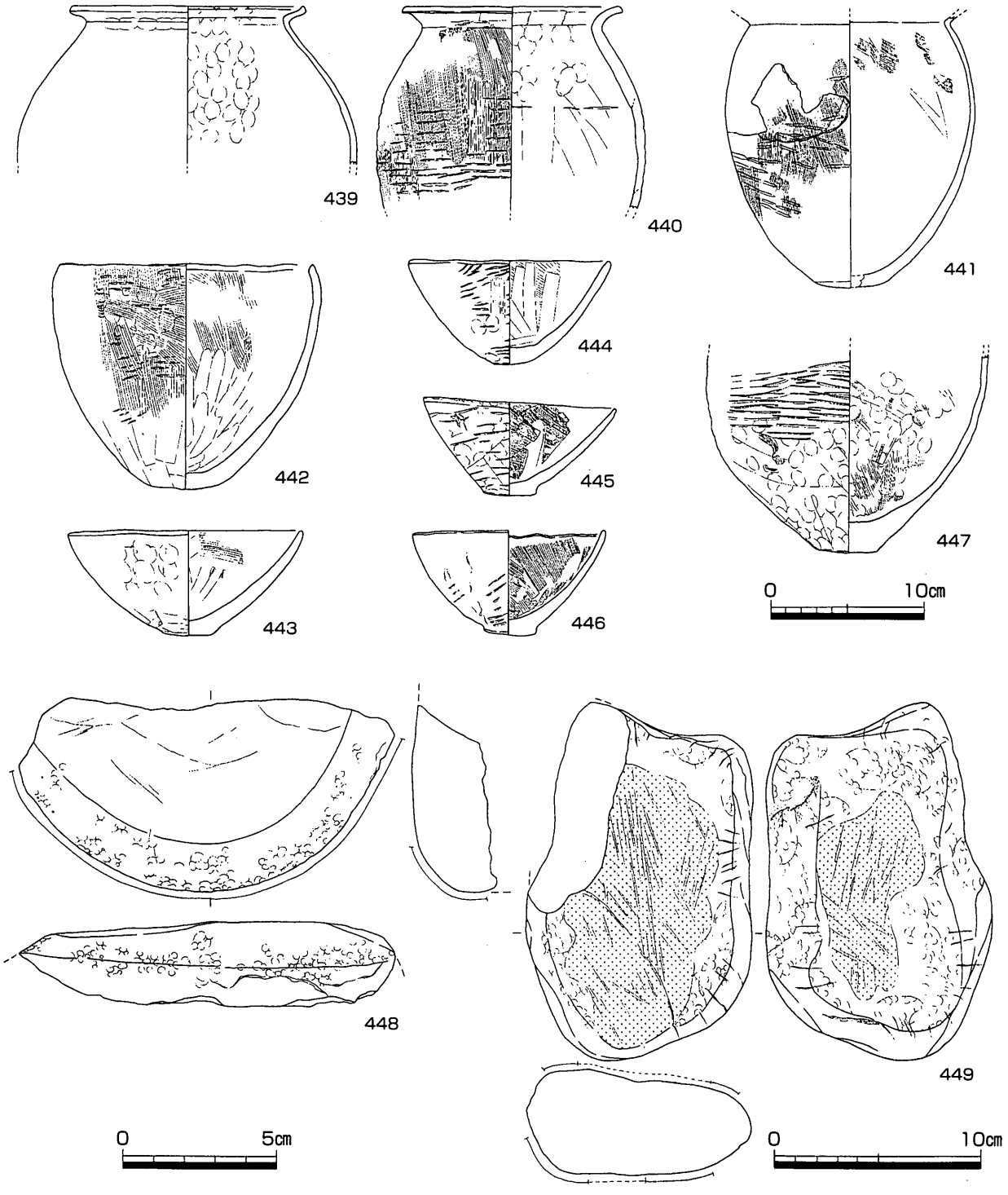
1. 暗灰褐色砂質土 10YR3/2
2. 灰褐色砂質土 10YR5/1
3. 灰褐色砂質土（固いベース） 10YR5/2

1. 黒褐色砂質土（炭集積） 10YR1.7/1
2. 茶褐色砂質土（3の土、炭が少し混） 10YR3/1
3. 黄褐色砂質土 10YR5/8
4. 暗褐色砂質土 10YR3/2
5. 暗褐灰色砂質土（炭、3のブロック混） 2.5Y3/2
6. 5で1と3のブロックが多く混
7. 褐色砂質土 10YR5/2
8. 黒灰色砂質土（炉、炭集積） N2/
9. 灰褐色砂混弱粘質土 10YR4/1
9' 9で炭混
10. 褐色砂質土 10YR5/3
11. 暗灰褐色砂混弱粘質土（炭混） 2.5Y3/2
12. 黄褐色土ブロック＋炭ブロック 明灰褐色土混
13. 暗茶褐色～黒褐色砂混粘質土（炭集積層）で黄褐色土、明褐色土ブロック混 10YR3/1、10YR2/1
14. 暗茶褐色粗砂混砂質土 2.5Y3/3
15. 黄灰褐色粗砂混砂質土 2.5Y4/3
16. 暗茶褐色砂質土（黒色土混） 10YR4/2
17. 明黄褐色砂（ベース） 10YR8/6
18. 暗褐色砂質土（旧畦畔） 10YR3/2

第45図 SH202平・断面図（1/60）



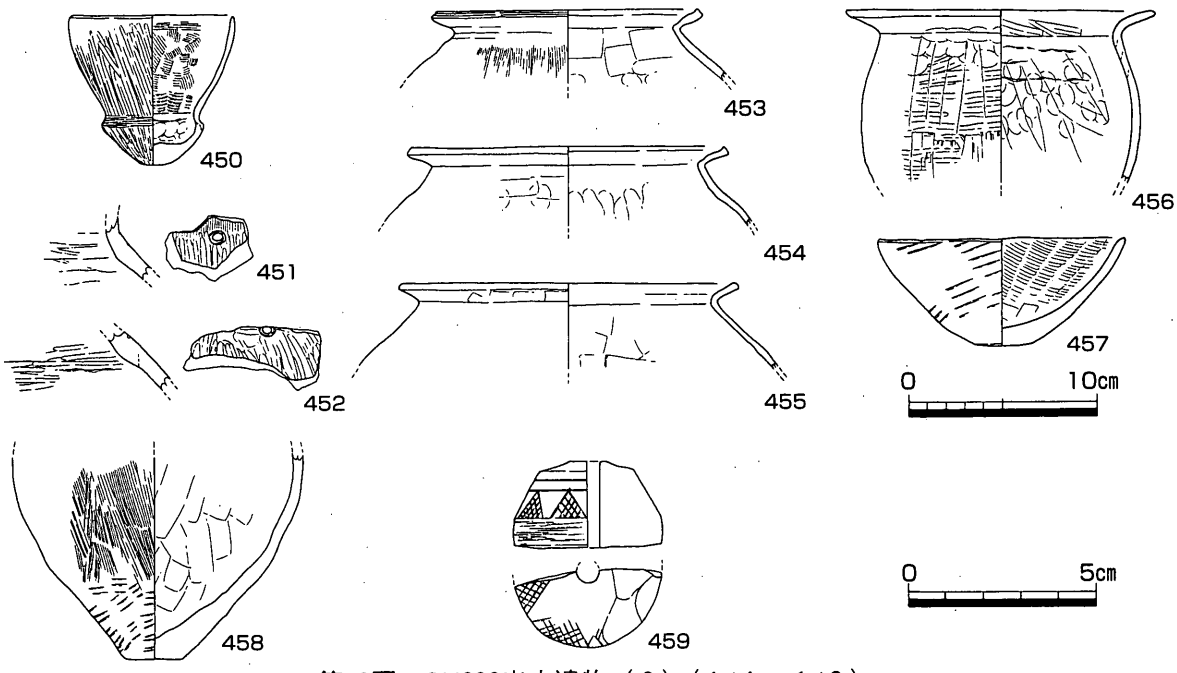
第46図　SH202遺物・炭化材検出状況（1/40）



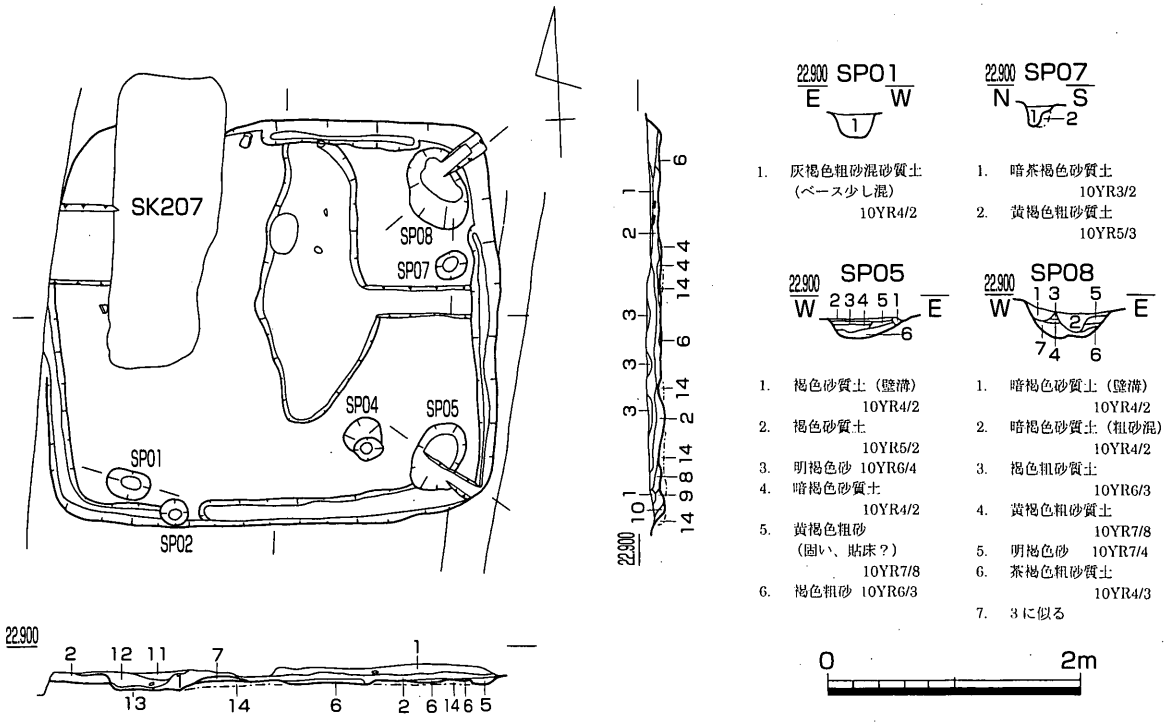
第47図　SH202出土遺物（1）（1/4・1/2・1/3）

梁材とは異なると考えられる。炭化材を除去した段階で床面上から竪穴住居の周縁部を中心に遺物が出土している。

439～449は床面上から出土した遺物である。439～441は甕。439は下川津B類土器。全体に摩滅していて調整などは不明瞭である。441は割れた面に焼成時に破裂したと考えられる表面の剥離痕が認められる。442～446は鉢。442は深めの椀型の器形。443～446は口径12～15cm 程度の椀型の鉢。おおむね外面には指押さえ痕とクラックを残し、タタキを施すものも多い。内面は放射状にハケまたは板ナデをす



第48図　SH202出土遺物（2）（1/4・1/2）



1. 明褐灰色砂　2.5Y6/2
2. 褐色砂質土（固い）　10YR4/2
3. 2に似る
4. 焼土層　2.5YR5/8
5. 褐色砂質土（壁溝）　10YR5/2
6. 黄褐色砂質土（固い、貼床？）　10YR6/8
7. 明褐灰色砂　10YR6/1
8. 明褐色砂　10YR7/2
9. 2に似る
10. 褐色砂質土　10YR4/1
11. 明褐色砂質土　10YR6/2　(SK207)
12. 暗褐色砂混弱粘質土　10YR3/2　(SK207)
13. 黄褐色砂で12の土少し混　10YR7/6　(SK207)
14. 明黄褐色砂（ベース）　10YR7/6

第49図　SH204平・断面図（1/60）

る。 447は底部。448･449は石器。448は器種不明。上半部欠損。縁辺部に敲打痕跡を残し上面は磨耗する。砂岩。449は台石。砂岩。449は両面に敲打痕と楔形石器を打ちつけた痕跡を残す。

第50図　SH204遺物出土状況（1/30）

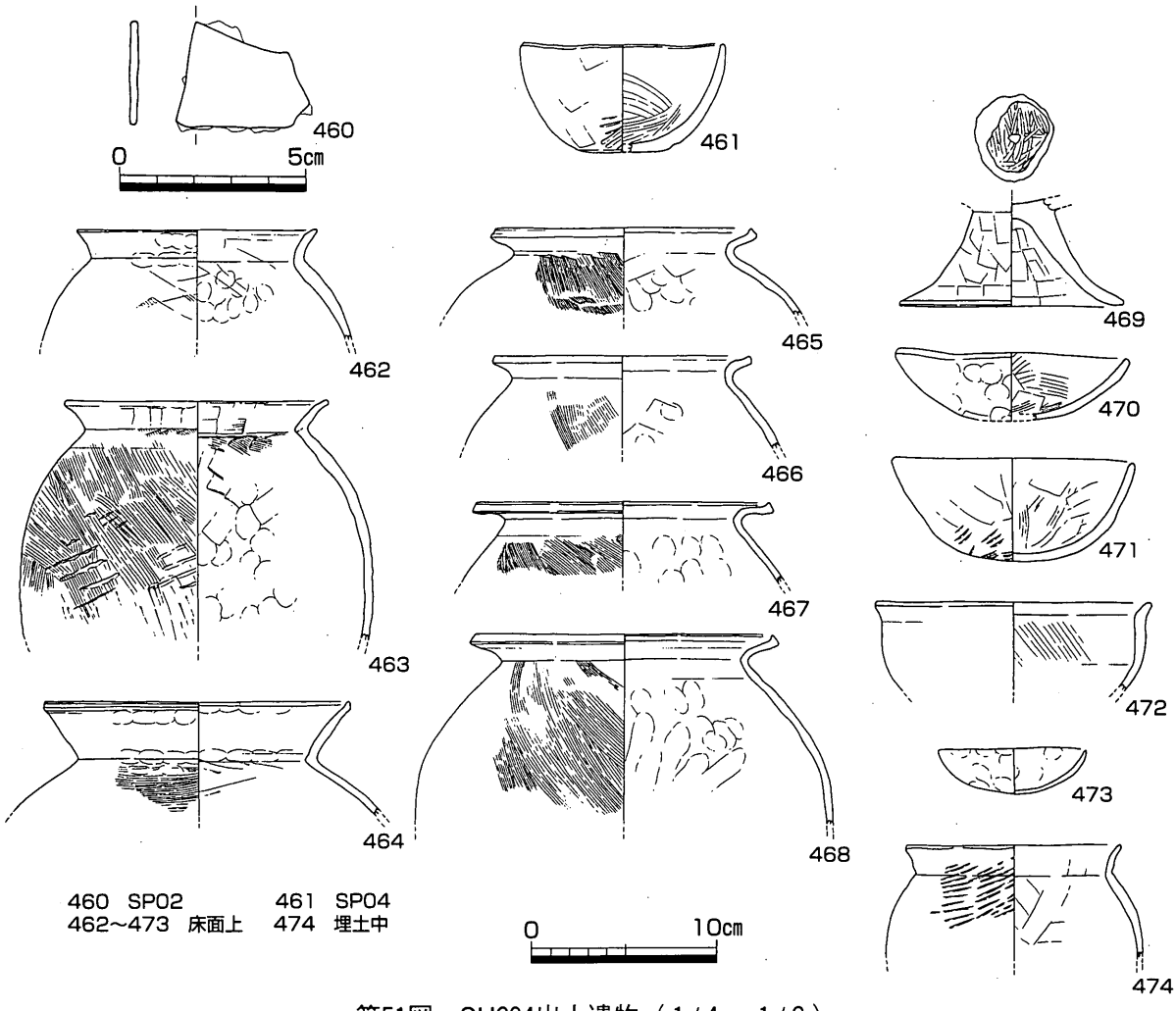
450～459は埋土中から出土した遺物である。450～452は壺。450は小型丸底壺。形態は下川津B類土器と類似するが、胎土中に角閃石は含まれない。451・452は小片で傾きが不確か。内外面にヘラミガキで調整し、外面に円形刺突文を施す。453～456は甕。453・454は下川津B類土器。457は鉢。椀型でやや厚め。外面はタタキ、内面はハケを施す。クラックや指頭痕はみられない。458は甕底部。459は紡錘車。碧玉製。側面部に鋸歯文をヘラ描きする。やや時期の下るもので、紛れ込みの可能性が高い。

SH202の時期は弥生時代終末期頃と考えられる。

SH204（第49～51図、図版14・19・40・41）

Ⅱ区南部で検出した竪穴住居である。方形で南北方向が3.15m、東西方向が3.60m、深さは14cmで、面積は約11.3m²、主軸方位はほぼ真北である。主柱穴は4隅にあると考えられるが、北西の1穴は確認できなかった。SK207により消失した可能性もある。壁溝は幅約20cm、深さ8cmで途切れながらもほぼ全体に巡る。中央やや北寄りで長軸30cm、短軸20cmの楕円形を呈する焼土の広がりが認められた。その周囲は他の床面部分より3cm程度低かったが、埋土の差は認められず、竪穴住居内の遺構ではなく、使用による落ち込みと思われる。

460はSP02で出土した遺物である。鉄片。分析をかけた試料である（第4章参照）。461はSP04から出土した遺物である。鉢。椀型。底部は平底気味。462～473は床面上で取り上げた土器である。462～468



第51図　SH204出土遺物（1/4・1/2）

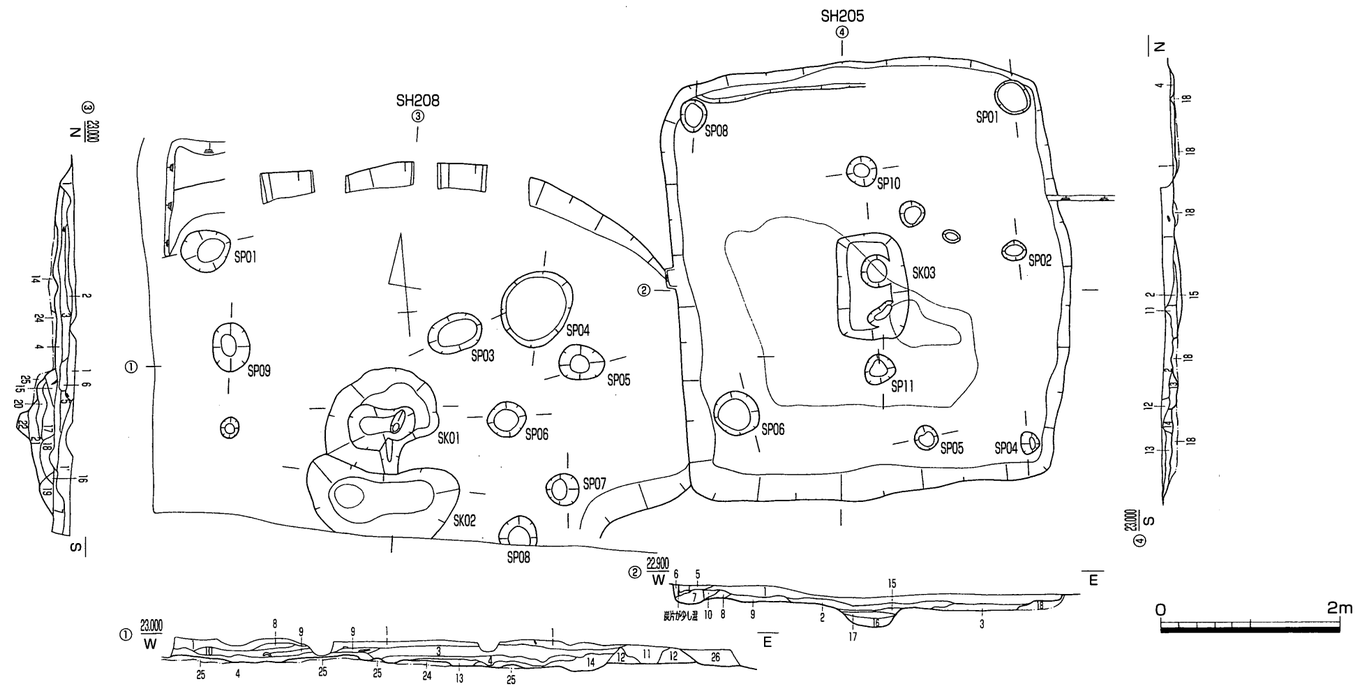
は甕。465～468は胎土中に片岩を含む。東阿波型土器。464は布留式まで下るもの。紛れ込みか。469は高杯脚部。470～473は鉢。470・471・473は椀型。470・473は器形が浅くなる。473は小型で指押さえ痕を内外に残す。手捏ね。472は口縁端部を外反させる。外面には顕著な調整痕を残さない。474は埋土中から出土した遺物である。甕。

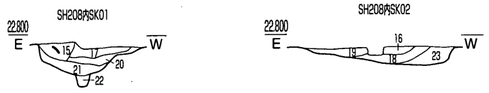
SH204の時期は、東阿波型土器の甕が多いこと、鉢が浅くなりつつあることなどから、古墳時代初頭頃と考えられる。またピット内から鉄片が出土したのも注意される。

SH205（第52～54図、図版15・16・19・41・42）

Ⅱ区南部で検出した竪穴住居である。おおむね方形で、南北方向が4.4m、東西方向は5.0m、深さ約20cmで、面積は約22㎡、主軸方位はN5°Eである。主柱穴は竪穴住居の4隅にある4穴と考えられるが、中央土坑の北と南にもピットがそれぞれ1穴あり、主柱穴を構成するものかもしれない。壁溝は北側でわずかに確認したにとどまった。竪穴住居の中央付近では長辺1.2m、短辺0.8mの長方形の土坑を検出した。深さは約20cm、断面形状が浅い皿状を呈し、底部約20cmには炭の堆積が認められた。床面の上部ではこの土坑を中心としたやや広い範囲で炭の堆積が広がり、それ以外の部分でも炭化材が多く検出できたことから、焼失住居であったと考えられる。遺構の切り合い関係により、SH208より新しい。

475～480はSK03内から出土した遺物である。475は甕。東阿波型土器。476は高杯。小型で丸い杯部を持ち、脚部は短い。477～480は鉢。478は小型の椀型。外面はタタキ、内面はヘラミガキし、外面の指





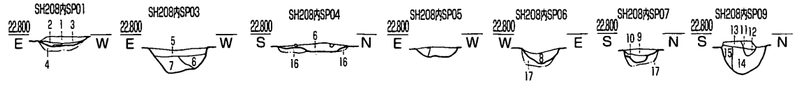
1. 褐色粗砂混砂質土　10YR5/2
1' 褐色粗砂混砂質土　10YR5/3
2. 暗灰褐色粗砂混砂質土（固い）　10YR4/2
3. 明褐灰色砂質土（固い）　10YR5/1
4. 暗茶褐色砂質土（固い）　10YR3/3（下層）
5. 茶褐色砂質土　10YR4/2
6. 暗褐灰色砂質土　2.5Y4/1
7. 暗褐灰色砂質土（砂のブロック混）　10YR3/2（下層）
8. 茶褐色粗砂混砂質土（固い）　10YR3/2
9. 8によく似る　10YR3/2
10. 明褐灰色砂質土　10YR5/2

11. 褐灰色砂質土　10YR5/2
12. 明褐色砂質土　10YR6/4
13. 暗褐灰色粗砂混砂質土　2.5Y3/1（下層）
14. 褐色粗砂混砂質土　10YR7/6（下層）
15. 灰褐色砂質土　10YR4/1
16. 黒褐色砂質土（炭層）　N2/
17. 褐色砂質土　10YR5/2
18. 褐灰色砂質土（15層が所々混）　5Y4/1
19. 褐灰色砂質土　7.5Y4/1
20. 暗褐色砂質土（固い）　10YR3/2
21. 褐灰色砂質土　2.5Y4/1
22. 暗褐灰色砂質土　2.5Y3/1
23. 褐灰色粗砂混砂質土　2.5Y4/1
24. 黄褐色砂質土（ベース）　10YR6/3
25. 黄褐色砂（ベース）　10YR7/8
26. SH05 埋土

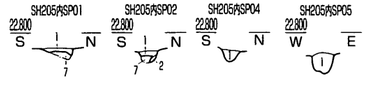
1～14　SH208 埋土、15～23　炉、24・25 ベース

1. 褐色粗砂混砂質土　10YR4/2
2. 褐色砂質土で暗灰色土ブロック混　10YR4/1
3. 明褐色砂質土　10YR5/2
4. 暗褐灰色砂質土　2.5Y4/1
5. 明黄褐色砂質土で6,7層土が少し混　2.5Y7/4
6. 茶褐色粗砂混弱粘質土　7.5YR3/3
7. 暗褐灰色砂質土　2.5Y3/1
8. 明褐色砂質土　2.5Y6/4
9. 褐色砂質土　7.5YR4/1
10. 黒褐色弱粘質土（炭堆積層）　N2/
11. 灰褐色砂質土　10YR3/2
12. 灰褐色粗砂混砂質土（炭混）　10YR4/1
13. 褐色砂質土　10YR4/1
14. 明灰褐色砂質土　2.5Y7/3
15. 暗黄茶褐色砂混粘質土　10YR4/2
16. 黒褐色砂質土（炭堆積層）　2.5Y2/1
17. 暗茶褐色砂質土（炭、黄色土ブロック混）　2.5Y3/2
18. 明黄褐色砂質土（ベース）　10YR7/4

1～14　SH205、15～17　炉、18　ベース

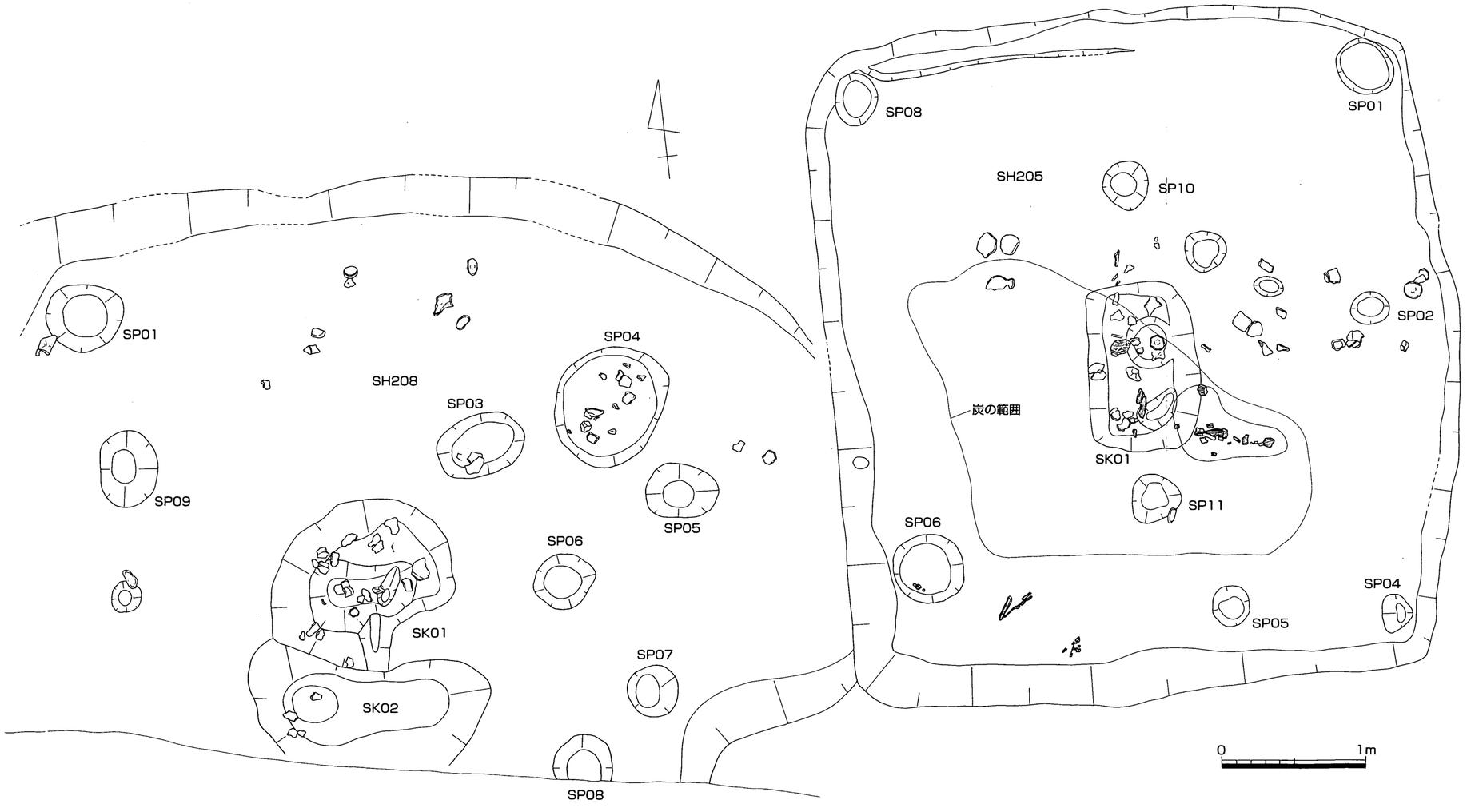


1. 暗灰褐色砂質土（粗砂混）　10YR4/1
2. 暗褐色砂質土（粗砂混、よくしまって固い）　10YR3/2
3. 暗灰褐色砂質土（弱粘質土、よくしまって固い）　10YR3/2
4. 黄褐色砂質土（ベース、よくしまって固い）　10YR6/4
5. 明灰褐色砂質土　10YR5/1
6. 暗灰褐色砂質土　10YR3/1
7. 灰褐色粗砂質土　10YR4/1
8. 暗灰褐色砂質土（灰色砂が部分的に入る）　10YR3/2
9. 暗褐灰色砂質土　2.5Y3/1
10. 暗褐灰色砂質土（固くしまる）　2.5Y3/1
11. 褐灰色粗砂混砂質土　5Y4/1
12. 褐灰色粗砂混粘質土（固い）　10YR4/1
13. 灰褐色粗砂混粘質土　2.5Y4/1
14. 茶褐色砂混粘質土（固い）　7.5YR4/1
15. 褐灰色粗砂混砂質土　10YR4/2
16. 黄褐色砂質土（ベース）　10YR6/6
17. 黄褐色粗砂（ベース）　10YR6/6

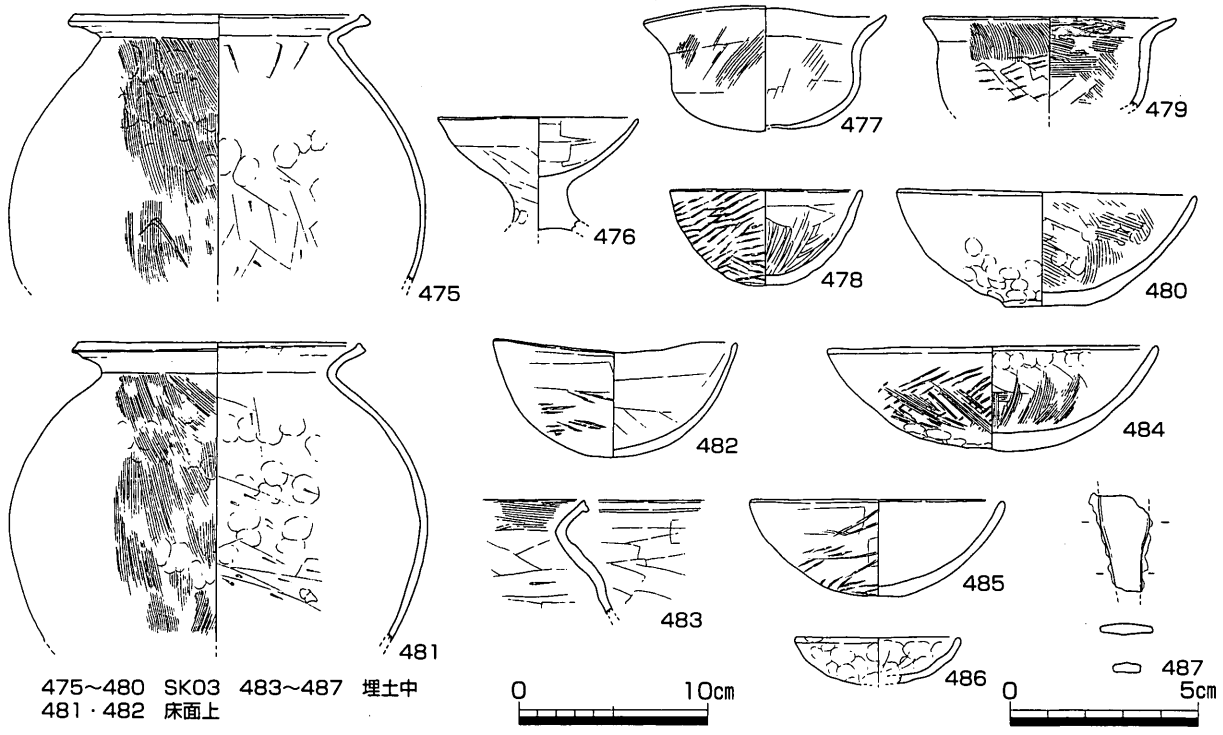


1. 褐灰色砂質土　10YR4/1
2. 褐灰色砂質土　2.5Y4/1
3. 明褐色砂質土　2.5Y6/4
4. 茶褐色砂質土　10YR4/2
5. 暗茶褐色砂質土（炭混）　7.5YR3/1
6. 明灰褐色粘質土混砂質土　5Y6/1
7. 褐色砂質土（ベース）　10YR7/2
8. 褐色砂質土で黄色土混　2.5Y5/2

第52図　SH205・208平・断面図（1/60）



第53図　SH205・208遺物出土状況（1/30）



第54図　SH205出土遺物（1/4・1/2）

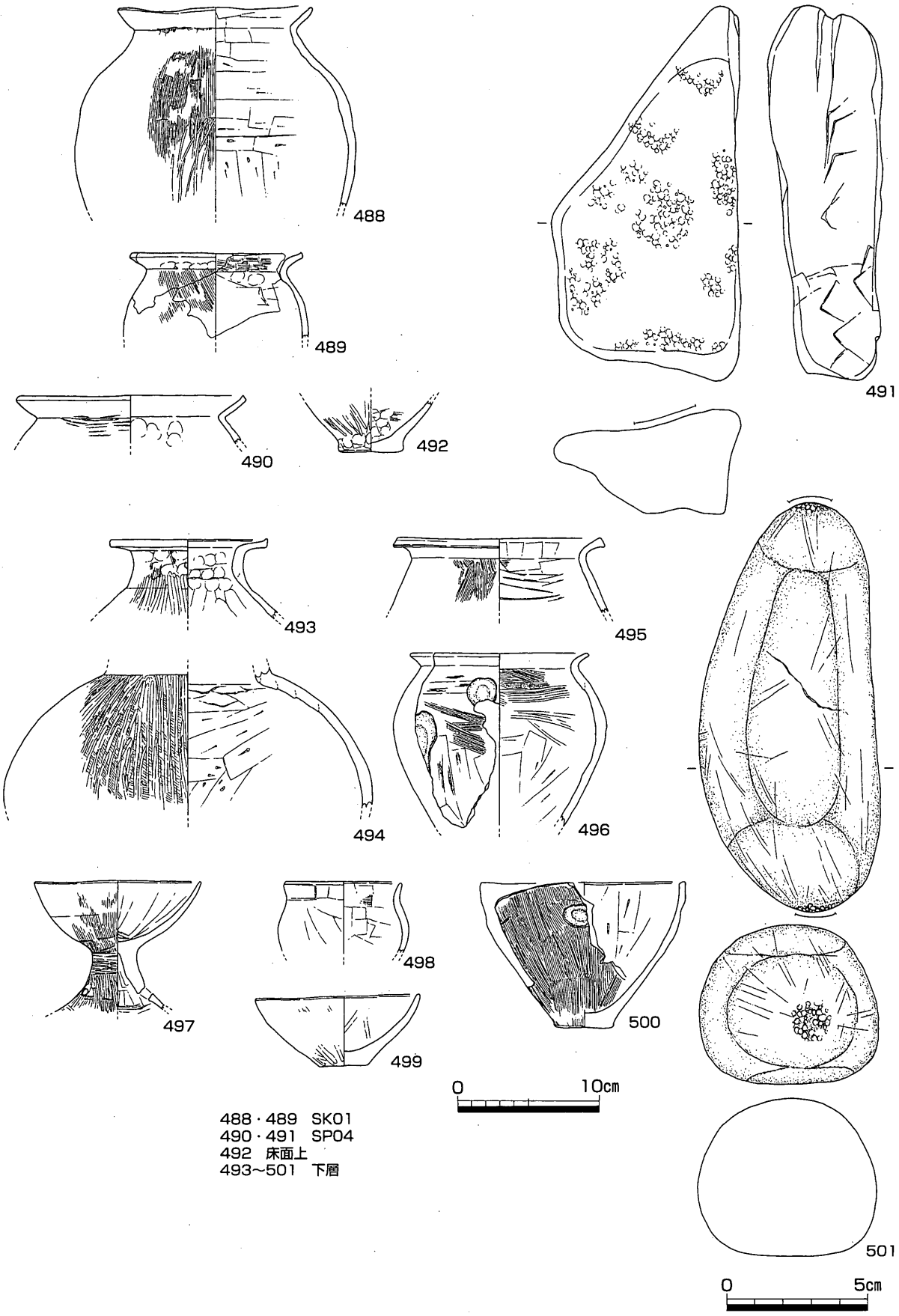
押さえやクラックは見られない。477・479は口縁部が外反する。歪みが著しく、内外面ともハケを施す。480は椀型。外面下半部に指押さえ痕が顕著。481・482は床面上から出土した遺物である。481は甕。東阿波型土器。482は鉢。483～487は埋土中から出土した遺物。483は甕。484～486は鉢。いずれも椀型。486は小型で内外面とも指押さえが顕著。手捏ね。487は鉄器。鉄鏃。柳葉式。上・下部は欠損。

SH205は古墳時代初頭頃と考えられる。

SH208（第52・53・55・56図、図版17・18・19・43）

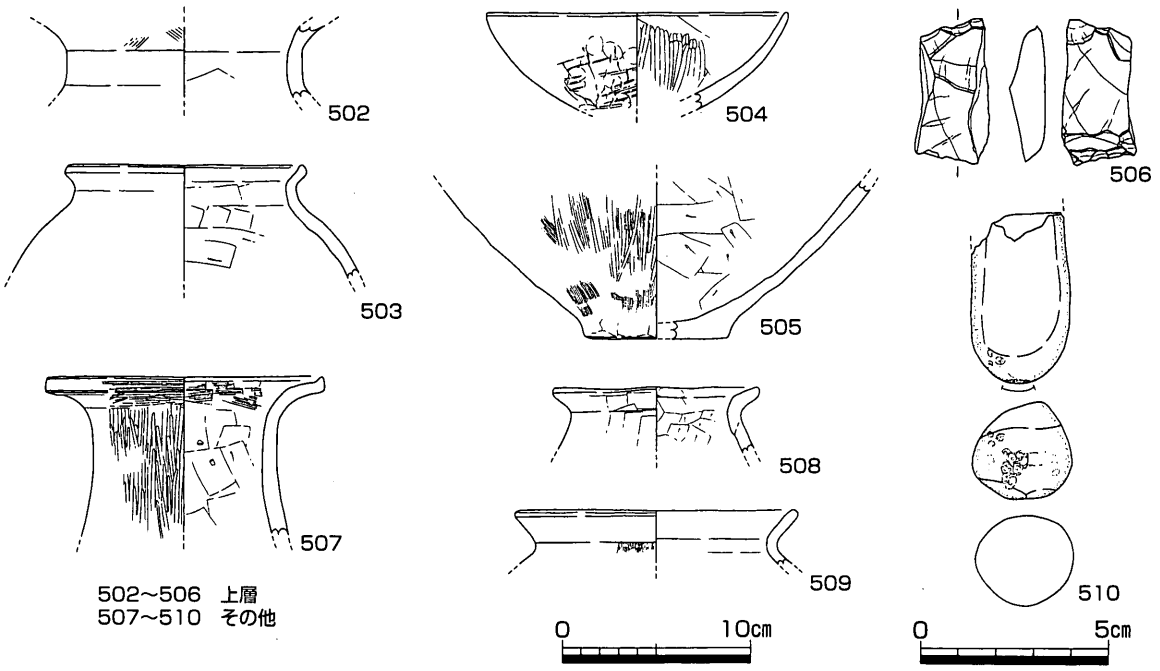
Ⅱ区南部、SH205の西側で、SH205に切られて検出した竪穴住居である。おおむね円形を呈すと思われ、西側と南側は調査区外へ延びる。土坑を中心と仮定すれば直径は約7.4mで深さは24cm、面積は約43㎡となる。柱穴は北西側と東側に9穴検出しているが、主柱穴は4穴とすればSP09・05と調査区外へ延びる南東・南西に1穴ずつと考えられるが、柱穴の深さを重視すればSP09・03・08と調査区外へ延びる5穴程度で構成されることも考えられる。中央部には不整円形の土坑（SK01）とその南側に接してSK02を検出した。SK01は長径132cm、短径93cmの長楕円形の土坑であったと考えられるが、南側部分だけ遺構の肩が崩れてSK02に接している。断面形状は2段掘り状を呈し、深さはテラス状部分が33cm、最深部が60cmである。埋土は上部一部に炭が混じるが、おおむね褐色・暗褐色・褐灰色・暗褐灰色砂質土などである。土坑内からはおもに北東側のテラス状部分から土器が出土している。断面観察によりSK01はSK02により切られている。その南側のSK02は南肩は調査区外へ延びるが、規模・形状は楕円形で長径1.7m、短径約0.85m、深さは30cmで、埋土はSK01と類似するが、中部～西部にかけて炭の集中範囲が認められた。「10型土坑」である。北東側の深さ7.5cmのピットSP04からは土器の小片が集中して出土した。

488・489はSK01出土遺物。ともに甕。489は数片が接合したが、そのうち濃い灰黄褐色を呈する破片と橙色を呈する破片が接合している。濃い灰黄褐色を呈する破片はSK01出土の遺物、その他は橙色の破片でSH208埋土中なので、SK01出土の破片は火を受けて色調変化をした可能性もあろうが、焼成時の

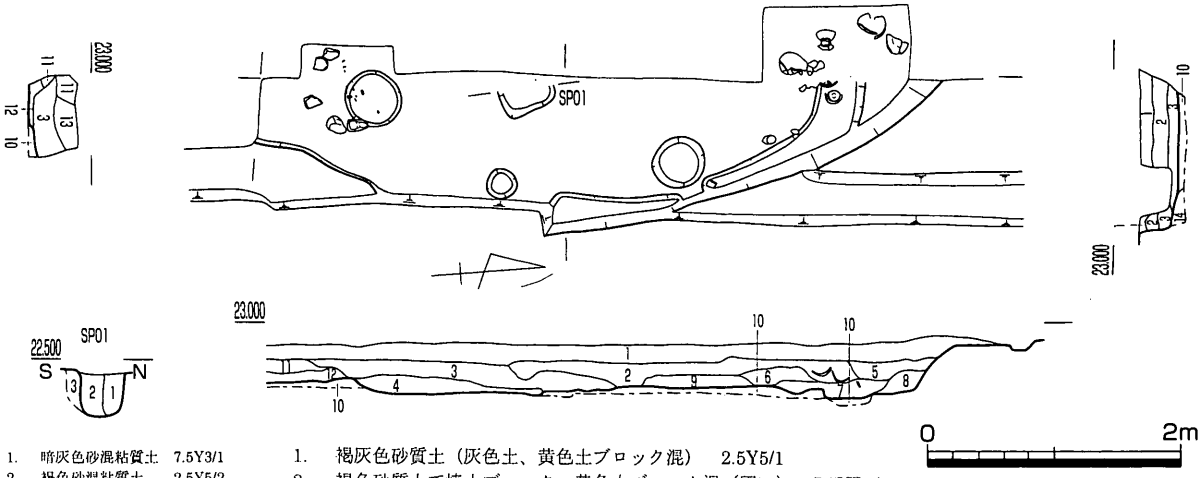


488・489　SK01
490・491　SP04
492　床面上
493～501　下層

第55図　SH208出土遺物（1）（1/4・1/2）



第56図　SH208出土遺物（2）（1/4・1/2）

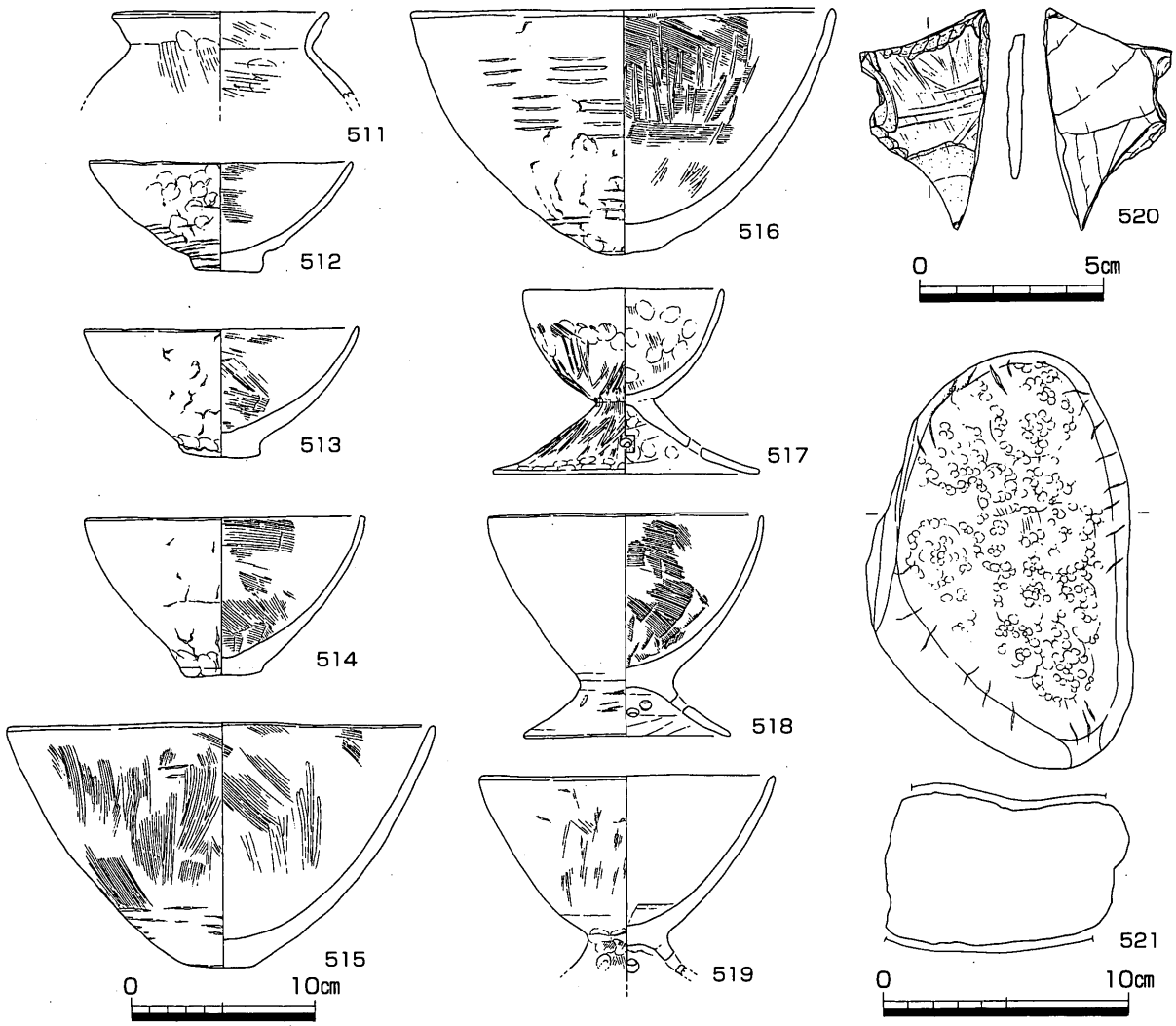


1. 暗灰色砂混粘質土　7.5Y3/1
2. 褐色砂混粘質土　2.5Y5/2
3. 茶褐色砂混粘質土（ベース）　10YR6/2

1. 褐灰色砂質土（灰色土、黄色土ブロック混）　2.5Y5/1
2. 褐色砂質土で焼土ブロック、黄色土ブロック混（固い）　7.5YR4/1
3. 茶褐色砂質土（黄色土、炭混）（固い）　10YR4/1
4. 灰褐色砂質土（黄色土混）　10YR5/1
5. 明褐色砂質土で黄色土混　7.5YR5/1
6. 褐色砂質土（黄色土混）　7.5YR4/1
7. 暗褐色砂質土（固い）　7.5YR3/1
8. 暗褐灰色砂質土（固い）　10YR3/2
9. 黄茶褐色砂質土（茶褐色土ブロック混）焼土塊　10YR6/4
10. 黄褐色砂質土で褐色土混（ベース）　10YR7/8
11. 黄褐色砂質土（褐色土混）　10YR7/6
12. 褐色砂質土　7.5YR5/1
13. 褐色砂質土（黄色土少し）　7.5YR4/1
14. 黄褐色粘質土（ベース）　10YR6/2

第57図　SH209平・断面図（1/60）

失敗品の可能性もあるかもしれない。490・491はSP04から出土した遺物である。490は甕。491は台石。上面の数箇所に敲打痕が残る。石は意図的に半裁したものか、割れ面の上部に工具痕跡が残る。492は床面上から出土した。甕底部。493～501は床面より5cm程度高い、下層から集中して出土した遺物。493・494は壺。493は頸部は短めで体部外面は密にヘラミガキする。494は体部。ハケ後ヘラミガキを施す。頸部はやや内傾気味に付く。495・496は甕。496は表面に焼成時に破裂したと考えられる剥離痕が2ヶ所



第58図　SH209出土遺物（1/4・1/2・1/3）

に認められる。497は高杯。杯部は小型で丸みを持つ。脚部には3ヶ所に穿孔が認められる。498～500は鉢。500は中型でやや深めの椀型。外面はハケを密に施す。焼成中に破裂したと考えられる剥離痕が認められる。501は叩き石。安山岩製。全面を研磨する。上・下部に敲打痕をわずかに残す。

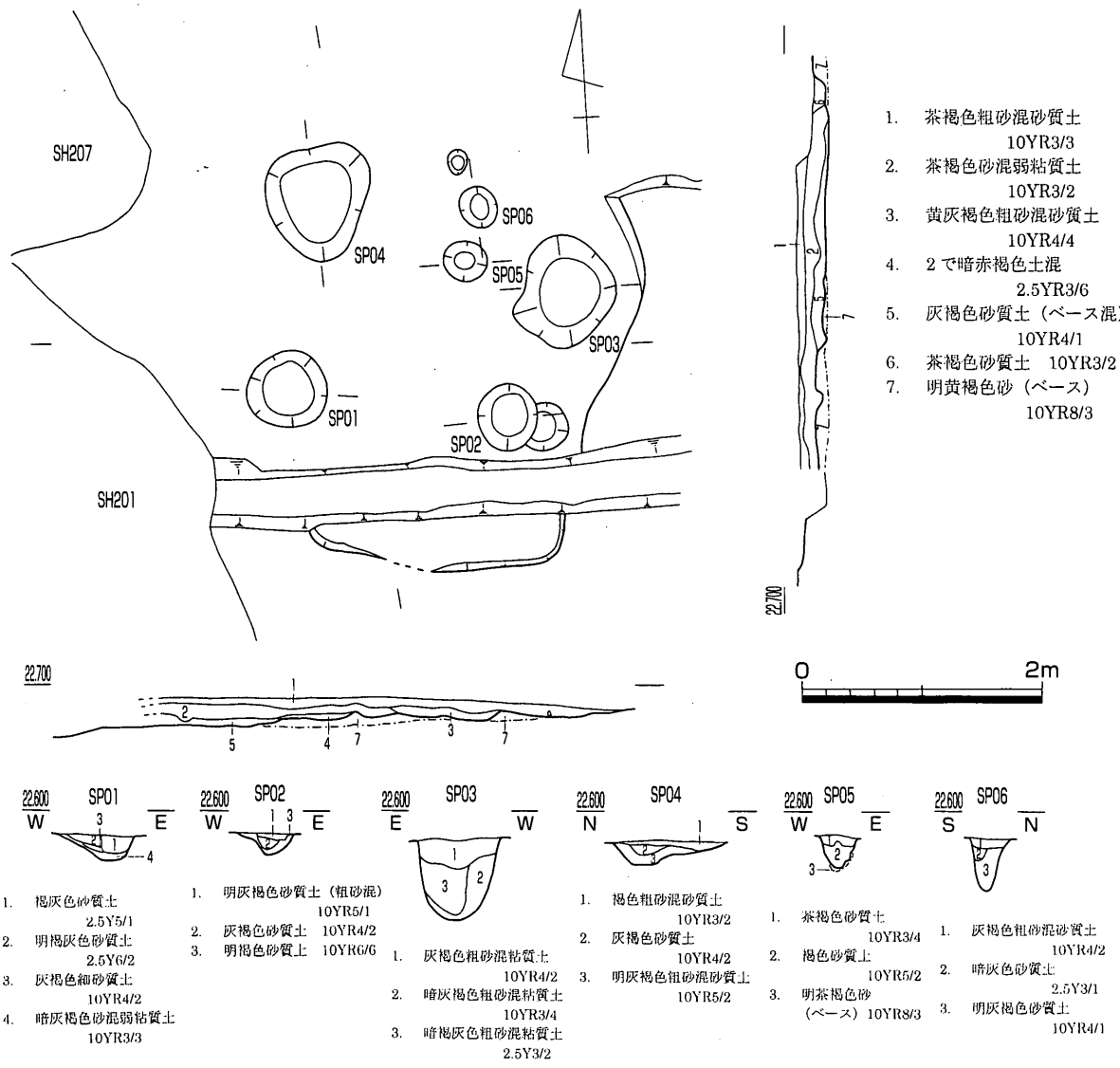
502～506は上層から出土した遺物である。502は壺頸部。503は甕。504は鉢。内面には密なヘラミガキ、外面には指押さえ痕とクラックが残る。505は底部。506は楔形石器。サヌカイト製。

507～510は層位不明遺物。507は壺。やや長めの頸部を持ち、頸部をヘラミガキする。508・509は甕。510は叩き石。安山岩。上半部は折損。下部に敲打痕を残す。全体を研磨する。

遺構の時期は弥生時代後期中葉頃、SH201とおおむね同じ時期と考えられる。また、ここからは焼成中に破裂したと考えられる遺物が2～3点出土したことも注意される。

SH209（第57・58図、図版19・44）

Ⅱ区南西部、SH204の西側に接して検出した竪穴住居である。大半は調査区外へ延びるため、全体の規模・形状は不明である。遺構の切り合い関係によりSH204より古い。検出範囲から竪穴住居の直径を推定すれば、約4.5m、面積は63.6㎡の住居となる。深さは36cmを測る。主柱穴と考えられる柱穴を半穴検出しているが、全体の構造は不明である。壁溝は東側北半部分で幅14cm、深さ約5cmを検出しているが、北側部分では幅36cm、深さ約8cmと規模を大きくし、竪穴住居のラインよりも内側を巡る。この部



第59図　SH210平・断面図（1/60）

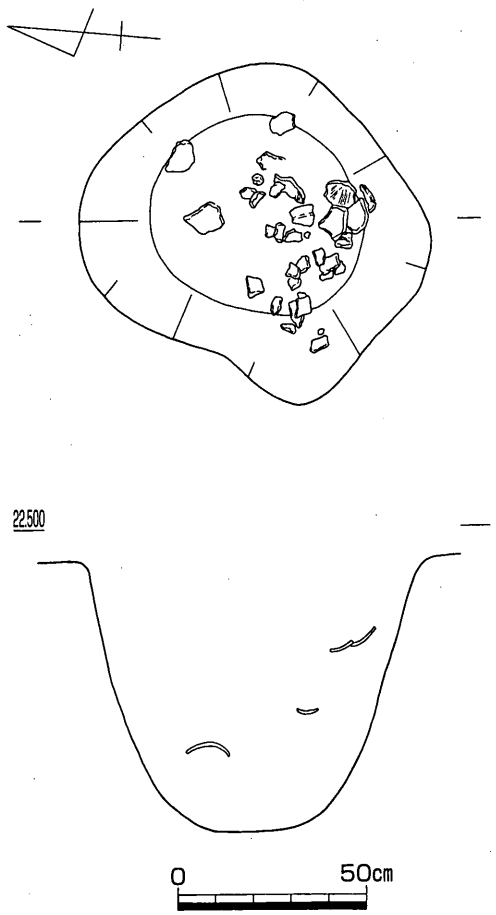
分から完形に近い弥生土器鉢が4点出土した。

511は甕。512～519は鉢。512～514は口径14.3～15.4cm の椀型の鉢。いずれも内面は左上がりの斜め方向～横方向のハケ、外面は指押さえ痕にクラックを残す。底部は平底である。512は叩き痕も残す。515・516は口径23cm 前後の大型の椀型の鉢。内面はハケ後ヘラミガキ、外面はタタキで515はその後ハケを施す。516には外面にクラックが残る。517～519は脚付鉢。517はやや小型。脚部には4ヶ所に穿孔する。518・519は口径14.8～16cm。鉢部分の製作技法は脚の付かない鉢と同じである。518は脚部に4ヶ所の穿孔が残り、現存部分から5ヶ所の穿孔があったと考えられる。519は穿孔は3ヶ所に施す。520は磨製石庖丁の未製品か。安山岩。表面には多数の擦痕が見られる。521は台石。砂岩。上面には敲打痕が、縁辺部には楔形石器を打ちつけた痕跡が認められる。

大半が鉢の出土で遺構の時期はわかりにくいが、検出した範囲では鉢は小型化・浅型化したものがないこと、SH204との重複関係により弥生時代後期後半～終末期頃と考えられる。

SH210（第59～61図、図版19）

Ⅱ区北端部、SH201・SH207に接して検出した竪穴住居である。竪穴住居の平面プランは明らかにはで



第60図　SH210内SP03平・断面図（1/20）

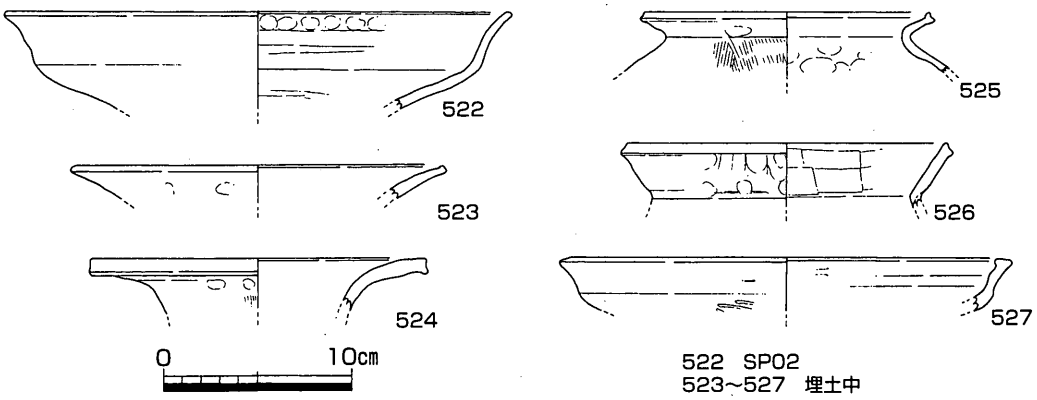
きなかったが、南側に張り出しを持つ円形と考えられる。遺構の前後関係は、SH207よりは古いがSH201とは明らかではない。おおむね直径4.1m程度、深さ22cm、想定面積は13.2m² と考えられる。炉、壁溝は検出していない。竪穴住居内からはピットを８穴検出しているが、主柱穴は特定できない。このうちSP03からは土器が散乱した状態で出土した。

522はSP02から出土した遺物である。高杯杯部。523～527は埋土中から出土した遺物。523・524は壺。524の頸部は斜め上方気味に立ち上がる。525･526は甕。525は体部の球形化は進むようだが、内面上部調整は指押さえである。526は古墳時代前期まで下るもの。527は高杯杯部。やや古い形態のもので、胎土中に角閃石を含む。

出土遺物に時期幅があり遺構の時期は決めがたいが、弥生時代終末期～古墳時代初頭頃としておく。

SH113（第62～64図、図版20・45）

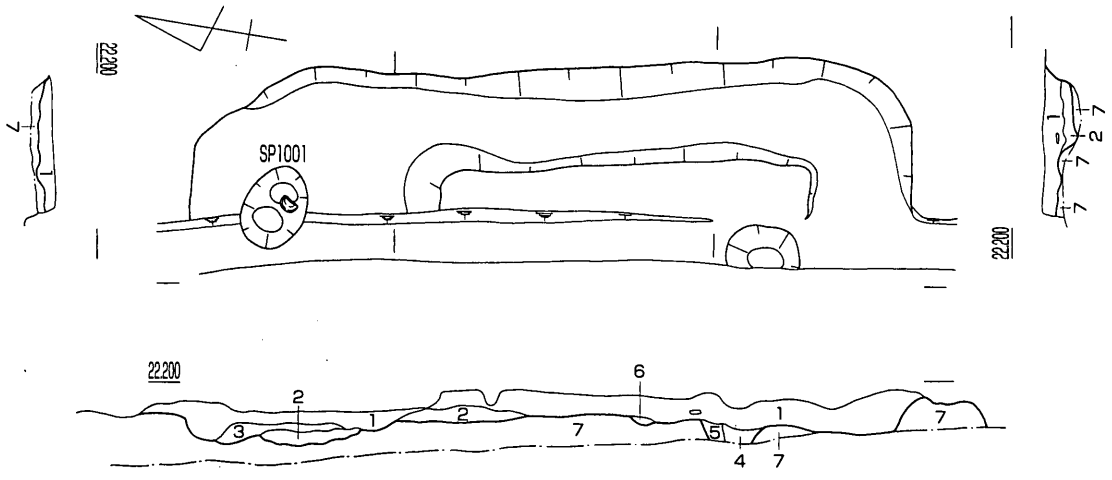
Ⅰ区やや南寄り西端部で検出した。大半は調査区外へ延びるため、遺構の規模、形状は明らかではないが、方形または長方形を呈し、１辺5.6m、深さは西壁土層断面



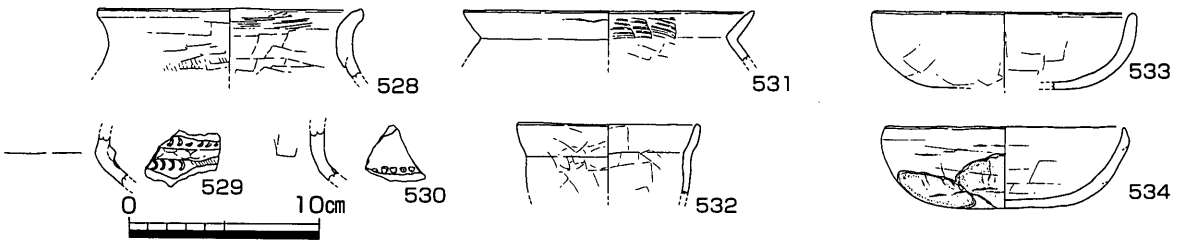
第61図　SH210出土遺物（1/4）

により約25cm を測る。埋土はおおむね暗褐色粗砂混弱粘質土である。遺構の外側約75cm（北辺のみ約２m）は中央部分より約10cm 高い。埋土の除去後、南側でピットを検出した。

528～530は壺。529は頸部と体部の境に貼付突帯を巡らせ、その上下に半裁竹管文を配する。下段の半裁竹管文は途中で途切れている。530は頸部と体部の境に刺突文を施す。531は甕。532は鉢。口縁部を緩く外反させる。533・534は土師器杯。いずれも器形の浅型化が進み、調整痕をほとんど残さない。534は外面にクラックを残し、凹レンズ状のハガレ２ヶ所を器面に残す。535・536は叩き石。ともに安山岩質斑岩。表面は研磨しているが、536は磨き方が足りず、表面に凹凸が残る。いずれも上・下部ともに敲打痕を少し残す。



第62図　SH113平・断面図（1/60）



第63図　SH113出土遺物（1）（1/4）

遺構の時期は533・534の時期が下るが、弥生時代終末～古墳時代初頭頃と考えられる。

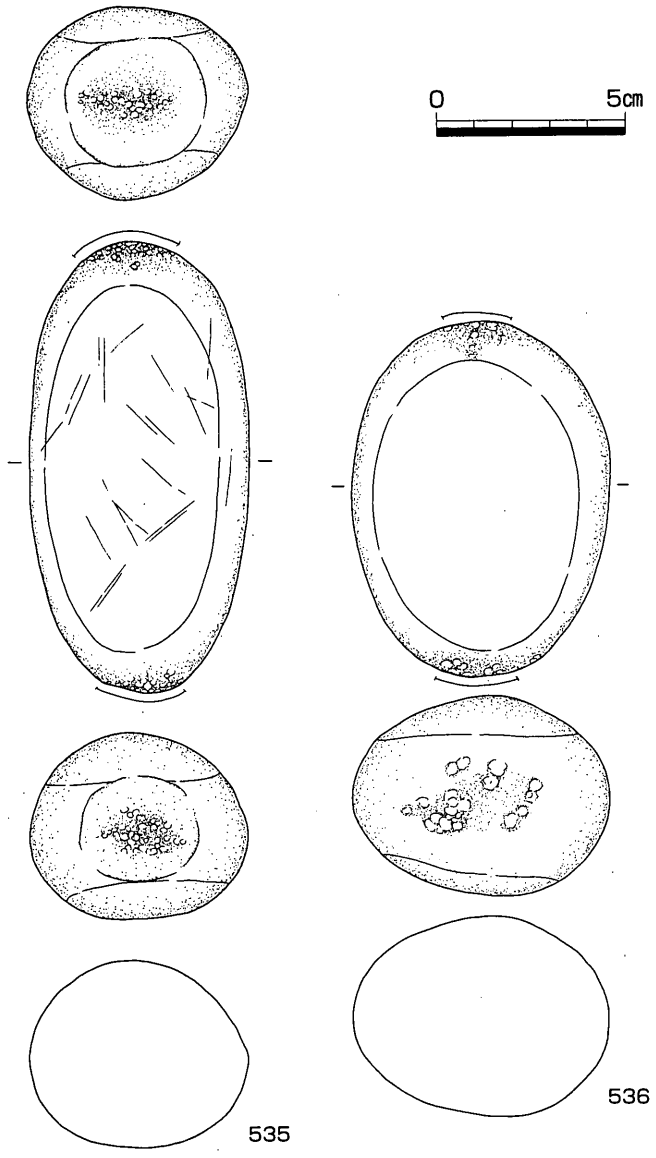
SP1001（第65図、図版45）

Ⅰ区やや南寄り西部、SH113の北側で検出したピットである。SH113の上面精査中に検出したが、削平により、SH113の北半部分は埋土がほとんど残っておらず、SP162を検出した時点ではSH113はほとんど床面を検出していたため、SH113とSP162の関係を明らかにすることはできなかった。形状は楕円形で、規模は長径66cm、短径52cm、深さ34cmである。埋土中の最上部からは土師器杯が出土した。出土遺物からSP1001はSH113の上面で検出された遺構と考えられる。

537は土師器杯。内面はヘラミガキを密にする。538・539は須恵器。いずれも焼成不良気味。538は杯身底部。体部下端部をヘラ削りするが、底部はヘラ切りの後少しなでるのみである。539は杯蓋。ピットの時期は7世紀前半頃と考えられる。

SH203（第66～68図、図版21・45）

Ⅱ区北部で検出した竪穴住居である。やや東西方向の長い長方形で、長辺4.7m、短辺4.0m、深さ16cm、面積は約18.8m²、主軸方位はN23°Wである。竪穴住居の北辺中央部付近では竈を検出した。主柱穴はやや配置がいびつであるが、SP01・07・12・02または03の4穴と考えられる。壁溝は竈より西側の部分で検出した。竈は上部が削平により消失し、窯壁もほとんど残っていなかったが、住居内部分での長さは約1m、幅0.7mである。断面観察により窯壁はベースブロックの混じる明褐色砂混粘質土で構築される。窯の内部は厚さ3～6cm程度の焼土層か見られ、その上部には天井が崩れて埋まったような様相が見え



第64図　SH113出土遺物（2）（1/2）

る。竈のほぼ中央部の焼土層中にうつ伏せになったほぼ完形の杯を始めとする土器片がやや固まって出土した。

540・541・543は竈内から出土した遺物である。540は土師器杯。粗製で厚手、調整痕をあまり残さない。内面には指押さえ痕を少し残す。541は須恵器蓋か。543は壺体部。542とは同一個体と考えられる。542は床面から出土した。544・545は埋土中から出土した。544は土師器甕。545は須恵器蓋。546はSP05からほぼ直立した状態で出土した。叩き石。下部と側面に敲打痕を残す。花崗岩製。

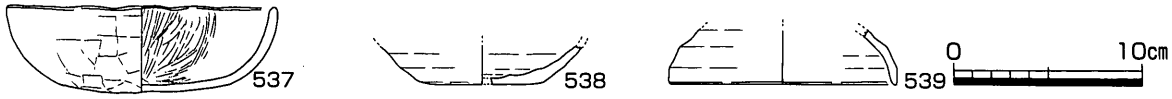
遺構の時期は7世紀前半頃と考えられる。規模や平面形態、時期は横断道原間遺跡Ⅴ区で検出した竪穴住居と類似する。

SH207（第69・70図、図版21・22・46・47）

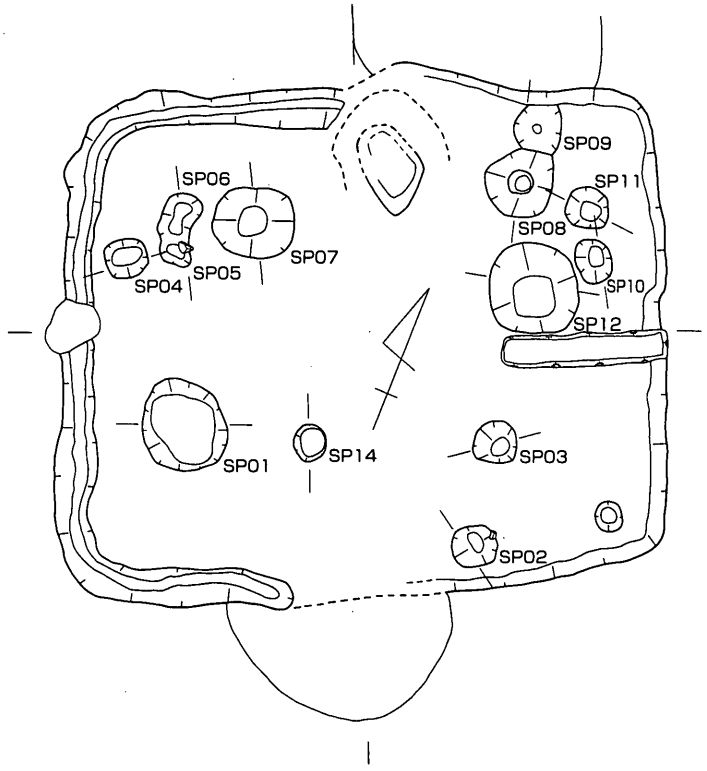
Ⅰ区とⅡ区の境付近で検出した竪穴住居である。東西方向のやや長い長方形で、長辺4.7m、短辺3.8m、深さ約15cm、面積は約17.8m²、主軸方位はN24°Wである。竪穴住居の北半部は後世の削平により消失している。主柱穴はSP09・12とⅠ区で検出したピット、北西側の未検出のピットの4穴と考えられる。壁溝や竈は検出できなかった。竪穴住居の南東隅のコーナーに直径48cm、深さ18cm程度の円形のピット（SP10）を検出し、そこから須恵器蓋、土師器高杯・甑などが出土した。

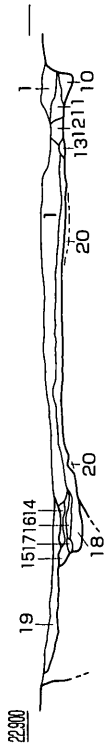
547～554はSP10から出土した遺物である。547～553は土師器。547・548は杯。547は外面を密に横方向にヘラミガキし、内面には縦方向の粗なヘラミガキをする。548はヘラミガキをしないもの。549～551は高杯。552は壺。摩滅が著しい。553は甑。内外面ともハケを施す。底部には中心に1孔、その周囲に5孔の合計6孔の孔がある。554は須恵器杯蓋。頂部と口縁部の境は突出し、頂部は幅の狭い回転ヘラ削りを施す。頂部にはほぼ全体に自然釉がかかる。555・556は床面上から出土した遺物である。ともに高杯。557～562は埋土中から出土した。557は高杯。558は弥生土器甕。口縁端部には緩い凹線が巡る。混入と考えられる。559・560は甕。560は内外面をハケで仕上げる。561は弥生土器高杯小片。胎土中に角閃石を少量含む。内外面には横方向のヘラミガキをする。混入と考えられる。562は叩き石。下部に敲打痕を少し残す。

遺構の時期は出土した須恵器蓋によりTK23併行期、5世紀末頃と考えられる。

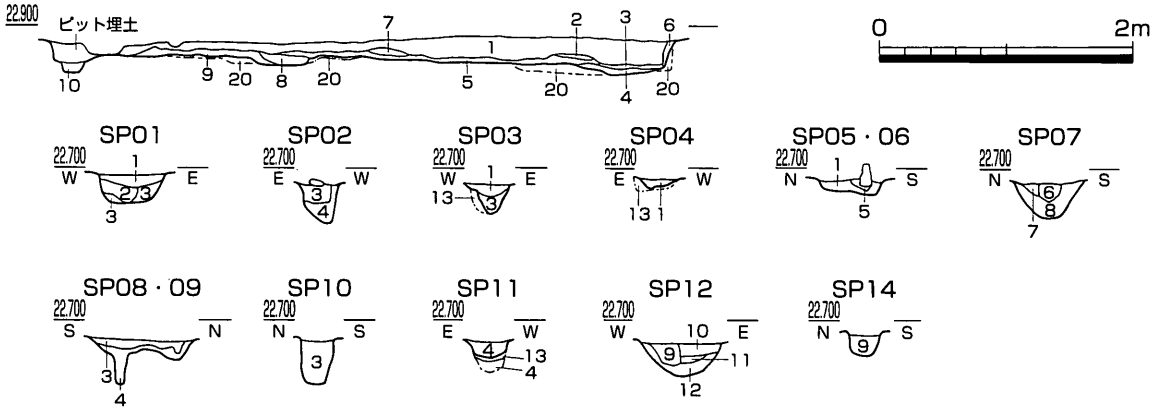


第65図　SP1001出土遺物（1/4）



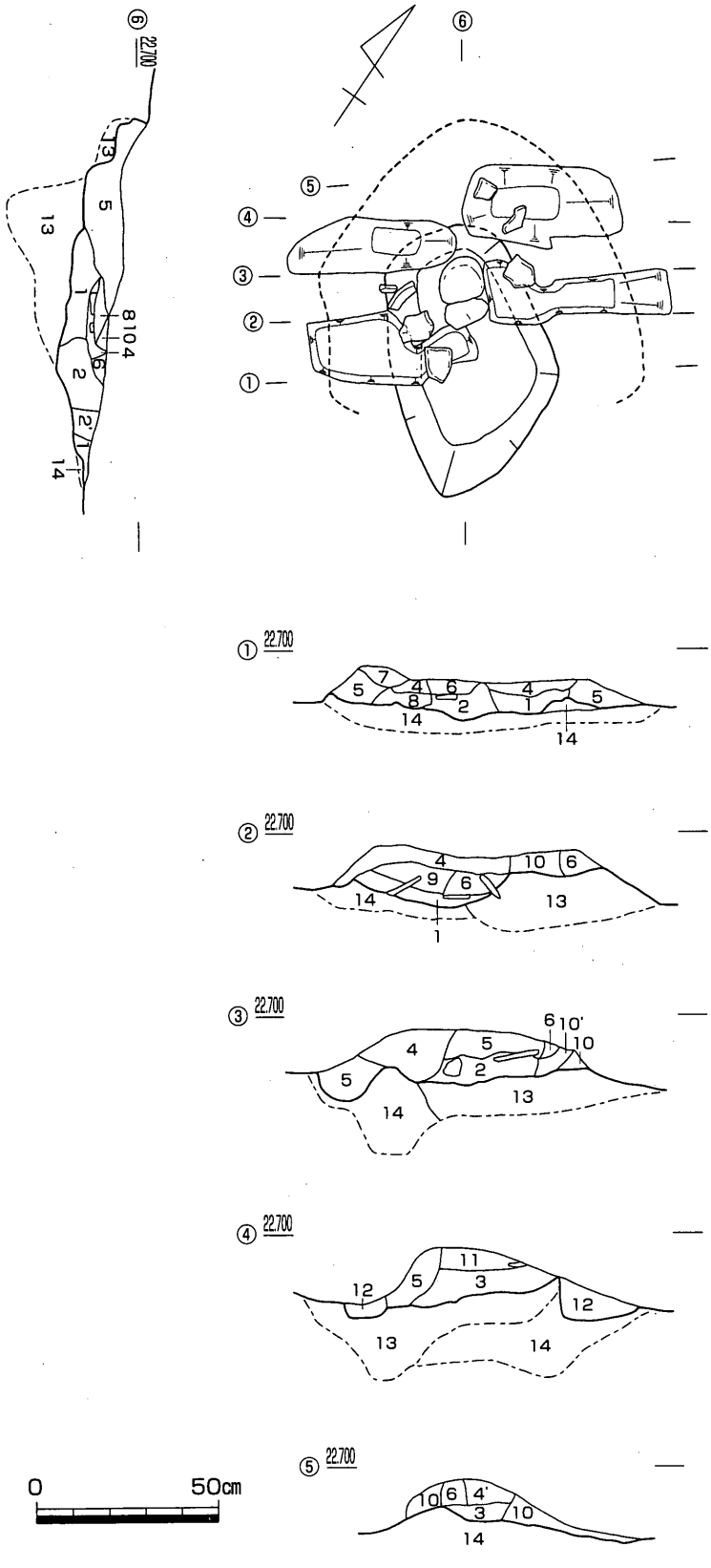


1. 褐灰色砂質土　10YR5/1
2. 明灰褐色砂　10YR6/2
3. 茶褐色砂混粘質土（やや固い、貼床？）　10YR4/2
4. 茶褐色砂質土　7.5YR4/1
5. 茶褐色砂混粘質土（固い、貼床？）　10YR4/3
6. 黄茶褐色砂混粘質土　10YR5/6
7. 褐色砂質土　10YR4/4
8. 灰褐色砂質土で黄色土ブロック混　10YR5/2
9. 茶褐色粗砂混砂質土（固い）　10YR4/2
10. 褐色砂質土（壁溝）　10YR4/2
11. 褐色砂質土で黄色土ブロック混　10YR4/1
12. 褐色砂質土で黄色土ブロック多く混　10YR5/3
13. 赤灰褐色粗砂混砂質土　2.5YR5/4
14. 暗褐色砂質土　10YR4/1
15. 明灰色砂　10YR7/4
16. 14に似る
17. 14に似る
18. 15に似る
19. SK15埋土
20. 黄褐色砂質土（ベース）　10YR7/6



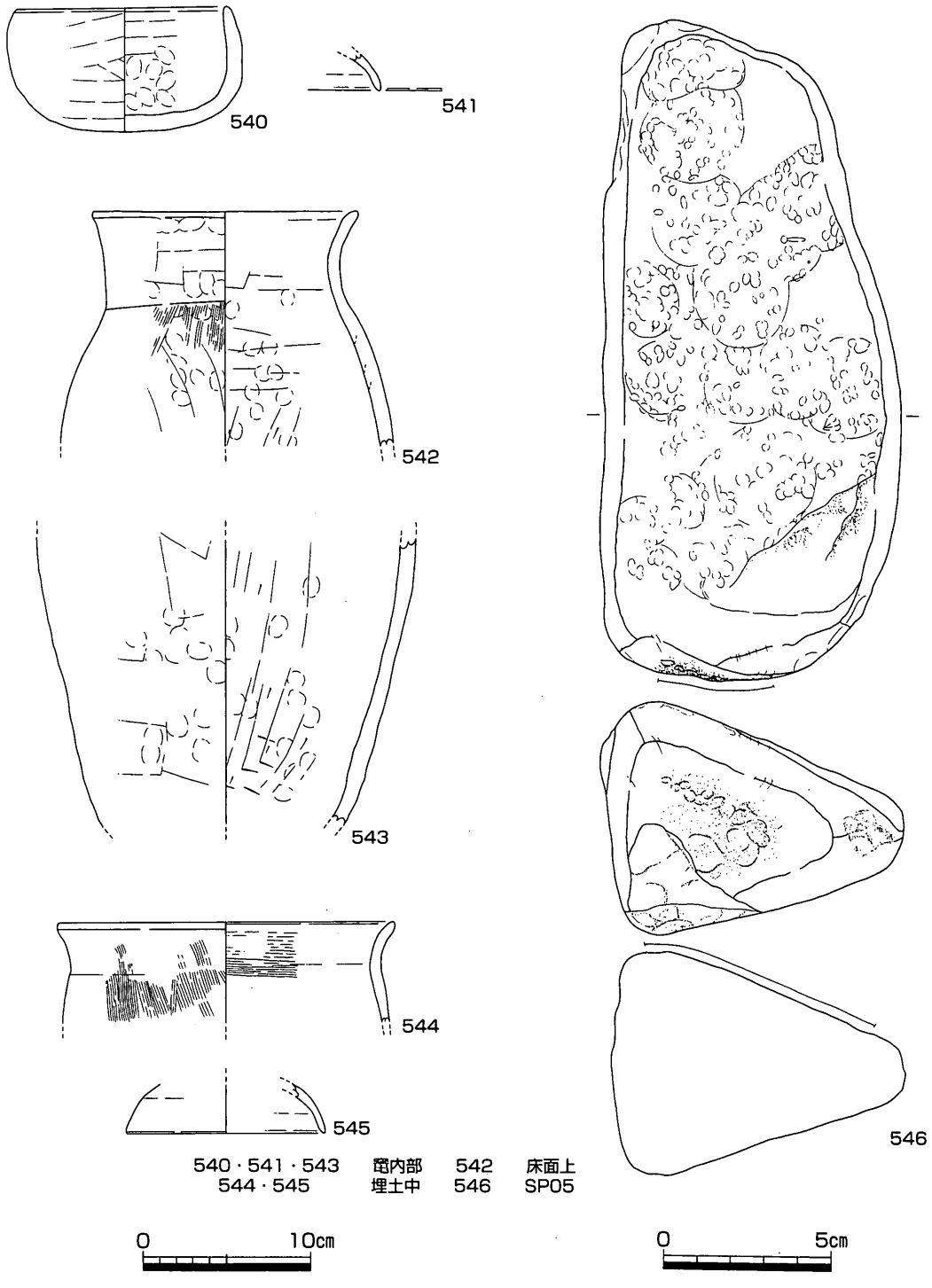
1. 灰褐色砂質土　10YR5/2
2. 褐灰色砂質土　2.5Y5/1
3. 暗褐色砂質土　10YR4/1
4. 褐色砂質土　10YR5/3
5. 褐色砂質土　10YR5/2
10. 褐色砂質土（ベースブロック混）　10YR6/3
11. 褐灰色砂質土　10YR5/1
12. 10でベースブロック多く混
13. 黄褐色砂質土（ベース）　10YR6/5
6. 明褐色砂質土（明灰色土ブロック）　10YR6/2
7. 明褐色砂質土　10YR6/2
8. 明褐色砂質土　10YR5/1
9. 褐灰色砂質土　10YR4/1

第66図　SH203平・断面図（1/60）

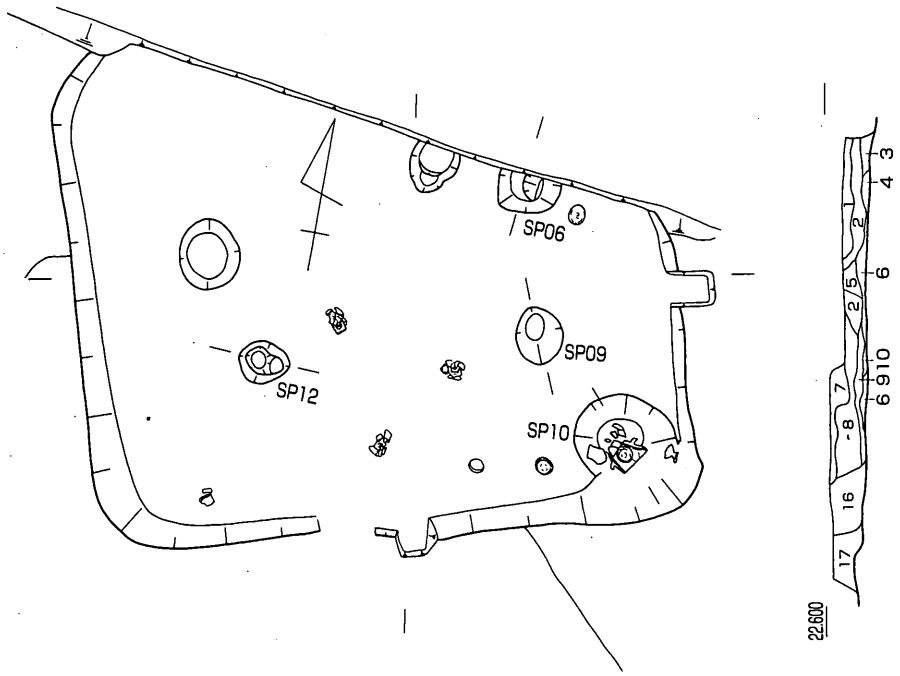


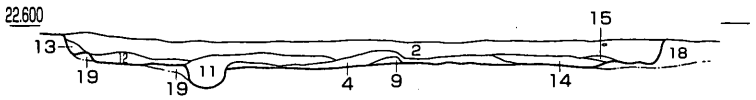
1. 暗茶褐色粗砂混粘土（焼土層） 7.5YR3/3
2. 暗褐色粗砂混粘質土（黄色土ブロック混、焼土層） 7.5YR3/1
2' 2で黄色土ブロックやや多い
3. 茶褐色砂混弱粘質土（焼土面） 10YR4/1
4. 灰褐色砂質土で焼土ブロック混 10YR4/2
4' 4で焼土をほとんど含まない
5. 明褐色粗砂混粘質土（黄色土ブロック混） 10YR5/2
6. 焼土ブロック
7. 8+黄色土ブロック
8. 灰褐色砂質土 10YR4/2
9. 褐灰色砂混粘質土で焼土ブロック、黄色土ブロック混 2.5Y5/1
10. 明黄色砂質土ブロック 10YR6/2
10' 10で灰褐色土・焼土少し混
11. 明灰褐色砂質土（炭混） 10YR5/1
12. 褐灰色砂質土（SH203埋土） 5Y4/1
13. SK216埋土
14. 明黄褐色砂質土（ベース） 10YR6/2

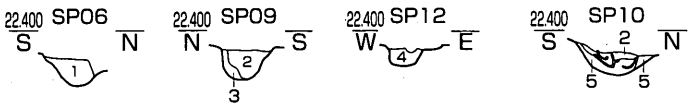
第67図 SH203竈平・断面図（1/20）

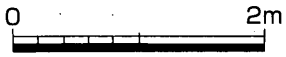


第68図　SH203出土遺物（1/4・1/2）



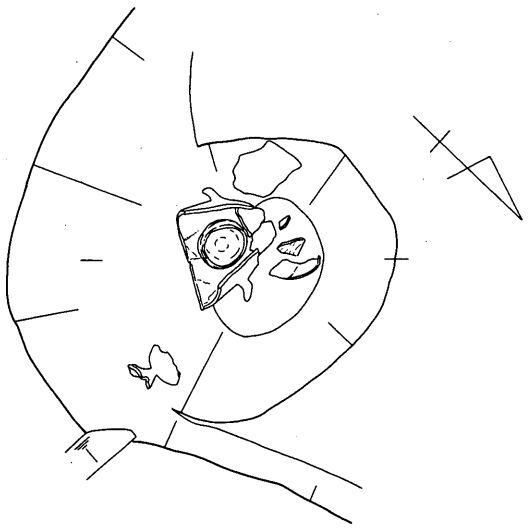


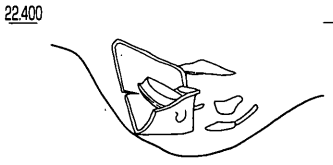




ピット土層

1. 褐色砂質土でベース混、暗褐色土混　10YR4/2
2. 褐灰色砂質土　10YR4/1
3. 褐灰色粗砂　10YR5/3
4. 褐色粗砂混砂質土　10YR5/2
5. 明褐色砂質土（粗砂混）　5Y5/2

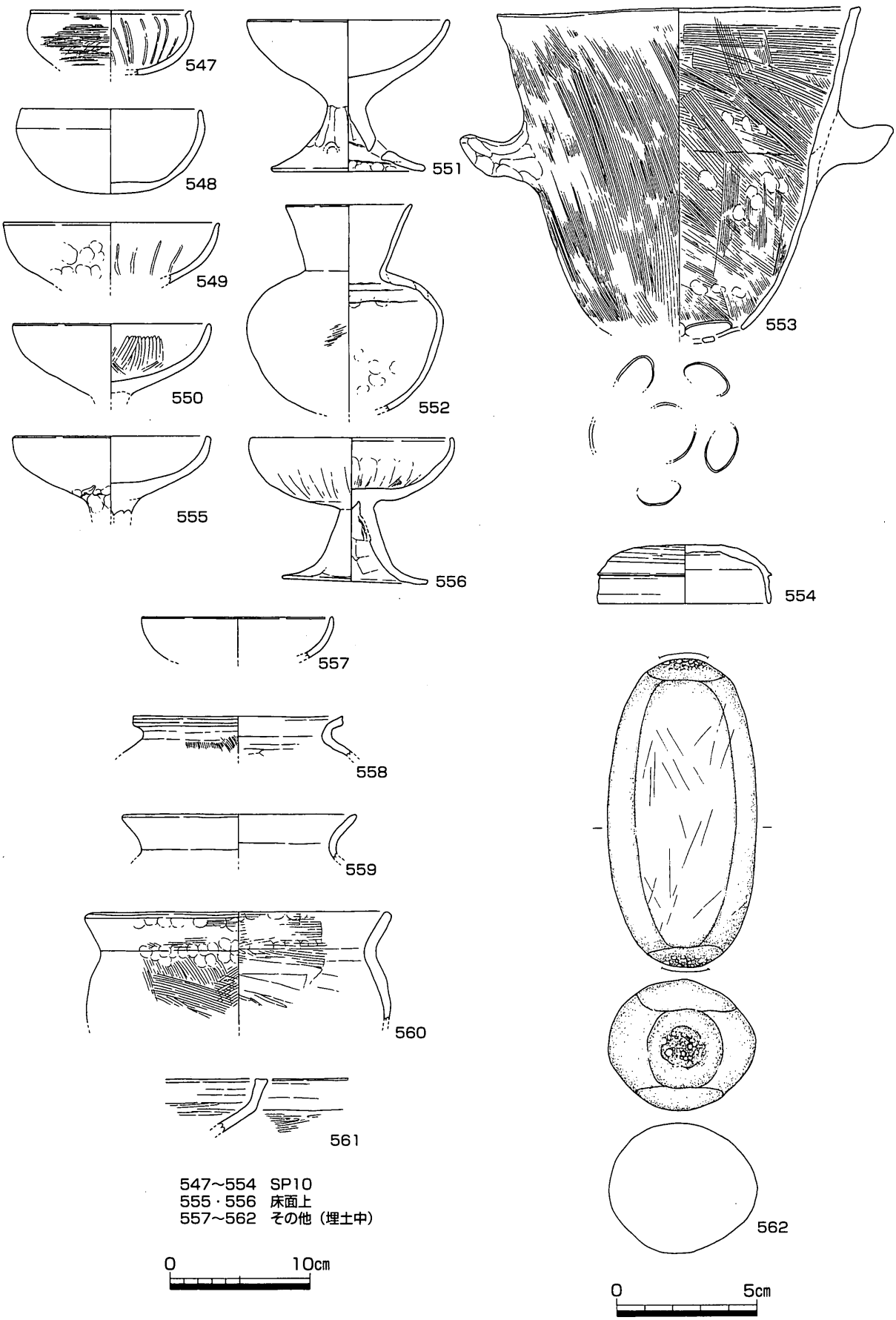




SH207土層

1. 茶褐色粗砂混砂質土　10YR3/3
2. 茶褐色砂質土　10YR3/3
3. 暗褐色砂質土　10YR3/1
4. 黄褐色砂混粘質土　10YR6/8
5. 褐色粗砂　10YR5/3
6. 褐灰色砂　2.5Y6/2
7. 暗灰褐色粗砂混砂質土　2.5Y4/2
8. 暗灰褐色粗砂混砂質土　2.5Y3/2
9. 暗灰色砂混粘土　10YR3/1
10. 暗灰色砂　N3/
11. 灰褐色砂　2.5Y4/1
12. 褐色砂　2.5Y5/3
13. 灰褐色砂　10YR4/2
14. 茶褐色粗砂混弱粘質土（固い、貼床？）　10YR3/3
15. 黄茶褐色粗砂混弱粘質土（固い、貼床？）10YR4/6
16. 灰褐色粗砂混砂質土　10YR4/2
17. SH201 埋土
18. SH210 埋土
19. 明褐色砂（ベース）　10YR7/4

第69図　SH207平・断面図（1/60）・SP10平・断面図（1/20）



第70図　SH207出土遺物（1/4・1/2）

（2）掘立柱建物

SB201（第71・72図、図版23・24・47）

Ⅱ区北東部で検出した掘立柱建物である。桁行4間、梁間3間で、南西側には間仕切りと思われる、柱穴列を検出している。建物規模は桁行5.8m、梁間4.3m、床面積は24.9㎡で、主軸方位はN20°Wである。掘立柱建物の掘り方は、桁側と北東側の梁間側は布掘り状に掘り下げた後、一度埋め戻して柱穴部分を再度掘削している。南西側の柱列は布掘り状の掘り方は認められず、掘立柱建物を構成する柱穴が明確ではなかったが、位置関係から復元した。

北側柱穴列（SK01）はおおむね長方形の土坑を掘り下げた後、一度埋め戻して再度柱穴を掘り下げている。柱穴は5穴持つ。ただし、中央部分の柱穴はその両脇の柱穴に切り込まれており、その両脇の柱穴の肩は崩れたようになだらかになっている。土坑の長さは6.64m、幅80cm、深さは柱穴部分で約50cm、それ以外で約30cmを測る。

南側柱穴列（SK02・SP01）は北側同様長方形の土坑状に掘り下げて柱穴を持つが、西端の柱穴部分を欠き、SK01とは西から2穴目から東端の柱穴（SP01）まで列を揃える。SP01はSK02とは別に検出したが、SP01は後世の撹乱掘り下げ後に検出したもので、もともとはSK02に含まれていたと考えられる。最も西側の柱穴はSP02が相当すると考えられ、SP02とSK02との間には土坑状の掘り込みはない。SK02での柱の据え方は、西端の柱穴では土坑をいったん埋め戻した後で柱穴を掘りなおした様子が土層図から認められるが、その他の柱穴については不明瞭であった。土坑の長さは4.85m、幅70cm、深さは柱穴部分で30～46cm、その他の部分で18cmで、柱穴部分でも両端のものは中央のものより10～15cm程度深い。SP01は楕円形のピットで長軸156cm、短軸93cm、深さ86cmを測る。

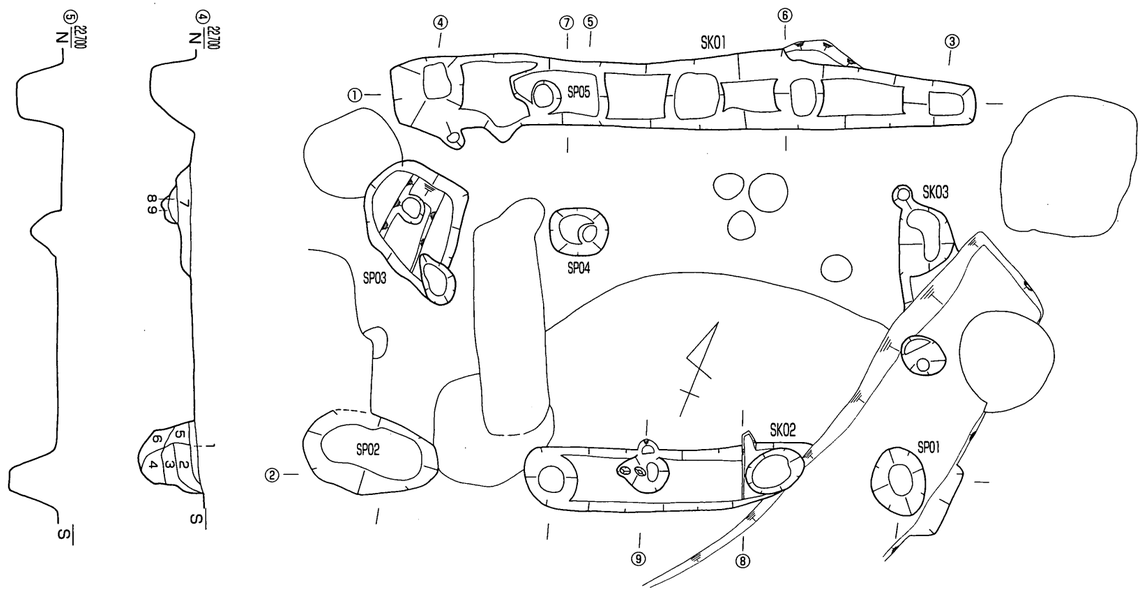
東側の柱穴列（SK03）は後世の撹乱により掘り込みは明確ではないが、SK01の南側95cmの部分から土坑状の掘り込みが見え始め、撹乱部分まで土坑は延びているので、おそらくSK03は東側の柱穴列のうち中央の2穴部分が相当すると考えられる。土坑の推定の長さは2m、幅55cm、深さは柱穴部分で48cm、その他の部分で26cmである。土坑状の掘り方と柱穴の掘り方の関係は不明である。

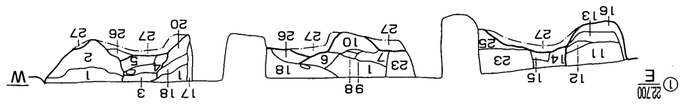
西側の柱穴列は、北から2穴目はSP03が相当すると考えられる。その南側の柱穴は検出できなかった。SP03は不整形で長軸1.8m、短軸1.75m、断面形状は浅い2段掘り状になっており、深い部分に柱穴があったと考えられる。深さは28cmであった。柱穴の深さは両端に比べ浅い。

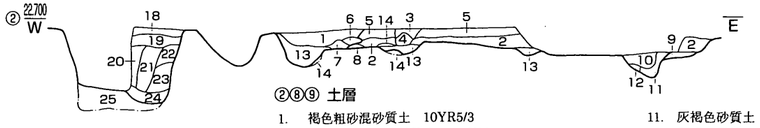
西側から2列目には北から2列目の箇所にSP04を検出しており、間仕切りがあったと考えられる。柱穴は円形で直径70cm、深さ32cmを測る。この列でも南から2穴目は検出されていない。

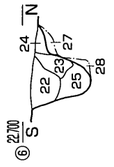
563～566はSK01内のSP05から出土した遺物である。563は高杯。杯部内底面はほとんど剥離している。564～566は須恵器。564は杯蓋。頂部はヘラ削りする。565・566は甕。566は口縁部外面を肥厚させ、外面をタタキの後カキ目で、内面は青海波文の当て具痕を残す。567～573はSK01埋土内から出土した遺物である。すべて弥生土器。567は壺。口縁端部に円形刺突文を施し、円形浮文を貼る。口縁部内面にも円形刺突文を施す。568～572は甕。572は下川津B類土器。571も口縁形態は下川津B類土器と類似するが、胎土中に角閃石は含まない。573は鉢。口縁部小片。574～577はSK02出土遺物。574・575は弥生土器。574は壺。広口壺口縁部小片。575は甕小片。576は土師器高杯脚部小片。脚端部付近で屈曲する。577は須恵器杯身。小片。578・579はSP02出土遺物。578は高杯脚部。579は弥生土器鉢。外面にタタキ痕が残る。

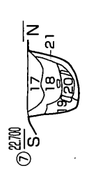
出土遺物は弥生時代後期後半から7世紀中頃までの遺物を含むが、周囲に弥生時代後期後半～終末期

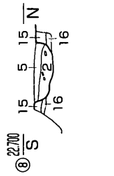


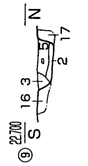












0 2m

①⑥⑦ 土層

1. 褐灰色砂質土（よくしまる） 10YR3/2
2. 褐色砂質土（黄色土混、よくしまる） 10YR4/1
3. 灰褐色粗砂混砂質土 10YR4/2
4. 褐色砂質土 10YR4/2
5. 褐灰色砂質土 10YR4/1
6. 黄褐色粗砂混砂質土 10YR5/4
7. 2に似るが、黄色土は混じらない
8. 6で黄色土ブロック混
9. 灰褐色砂質土 10YR4/1
10. 明褐色砂質土 10YR5/2
11. 暗灰褐色粗砂混砂質土 2.5Y3/1
12. 褐色粗砂混砂質土 10YR4/3
13. 暗灰褐色（粘土混）砂質土 10YR3/1
14. 暗灰褐色砂質土（やや粘い） 10YR3/1
15. 暗褐色砂質土 10YR3/2
16. 暗褐灰色砂質土 2.5Y3/1
17. 暗褐灰色粗砂混粘質土 2.5Y3/1
18. 暗灰褐色粗砂混粘質土 10YR3/1
19. 暗灰褐色粗砂混砂質土 10YR3/1
20. 暗灰褐色砂質土 10YR3/1
21. 灰褐色粗砂混砂質土 10YR4/2
22. 暗褐色粗砂混弱粘質土 10YR3/2
23. 茶褐色砂質土 10YR4/2
24. 褐色砂質土 10YR5/3
25. 灰褐色粗砂混砂質土 10YR5/1
26. 黄褐色砂質土（ベース） 10YR5/2
27. 黄褐色粗砂（ベース） 10YR7/4
28. 明灰色粗砂（ベース） 2.5Y7/1

③ 土層

1. 褐灰色砂質土 10YR4/1
2. 明灰褐色砂 10YR5/1
3. 暗褐灰色砂質土 10YR3/2
4. 灰褐色粗砂混砂質土 2.5Y4/2
5. 暗灰色砂質土（粗砂混） 5Y3/1
6. 暗灰色砂混粘質土 7.5Y3/1
7. 明黄褐色砂（褐色土混） 2.5Y7/4
8. 灰白色砂（ベース） 7.5Y7/1

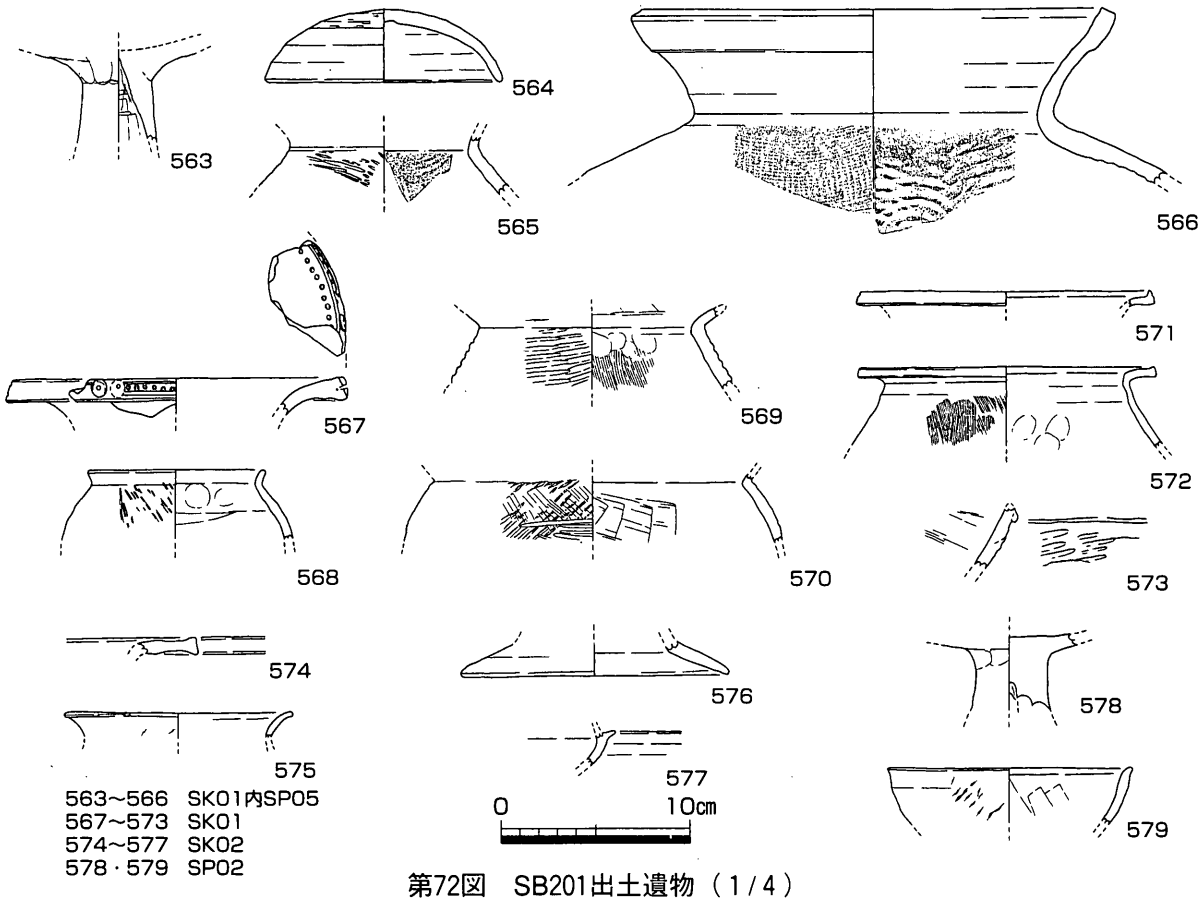
④ 土層

1. 茶褐色砂混弱粘質土 10YR5/3
2. 暗褐灰色砂混弱粘質土 7.5YR3/1
3. 淡褐色砂質土 2.5Y6/4
4. 暗褐色砂混弱粘質土 7.5YR3/1
5. 灰褐色砂質土 7.5YR4/2
6. 茶灰褐色砂質土 7.5YR3/2
7. 褐色粗砂混砂質土 10YR4/2
8. 褐色砂質土 10YR4/2
9. 明褐色砂質土 10YR5/2

②⑧⑨ 土層

1. 褐色粗砂混砂質土 10YR5/3
2. 暗褐色粗砂混弱粘質土 2.5Y3/2
3. 茶褐色粗砂混砂質土 10YR4/2
4. 暗褐色粗砂混砂質土（ベースブロック混） 10YR3/2
5. 茶褐色粗砂混砂質土 10YR3/3
6. 明褐色砂 2.5Y8/3
7. 褐色砂 2.5Y7/3
8. 1に似る、少し暗い 10YR4/2
9. 褐灰色砂質土（ベースブロック混） 2.5Y4/1
10. 黒褐色砂質土 2.5Y3/1
11. 灰褐色砂質土 5Y4/1
12. 灰褐色砂質土（ベースブロック混） 5Y4/1
13. 褐色砂質土 10YR3/2
14. 暗灰褐色砂質土（炭混） 10YR3/2
15. 暗黄褐色砂質土 10YR5/4
16. 炭
17. 暗褐色砂質土 10YR3/1
18. 明褐色砂質土（粗砂混） 10YR4/1
19. 明褐色砂質土で黄色土混（粗砂混） 10YR4/1
20. 暗褐色砂質土 2.5Y3/1
21. 灰褐色砂質土 5Y4/1
22. 茶褐色砂質土（粗砂混） 10YR4/2
23. 暗茶褐色砂質土（粗砂混） 10YR3/2
24. 明褐灰色砂質土 2.5Y5/1
25. 灰色砂（ベース） 2.5Y8/2

第71図 SB201平・断面図（1/60）



第72図　SB201出土遺物（1/4）

の遺構が多いことや遺物の出土状況から、建物の時期は7世紀中頃と考えられる。

SB101（第73図、図版24）

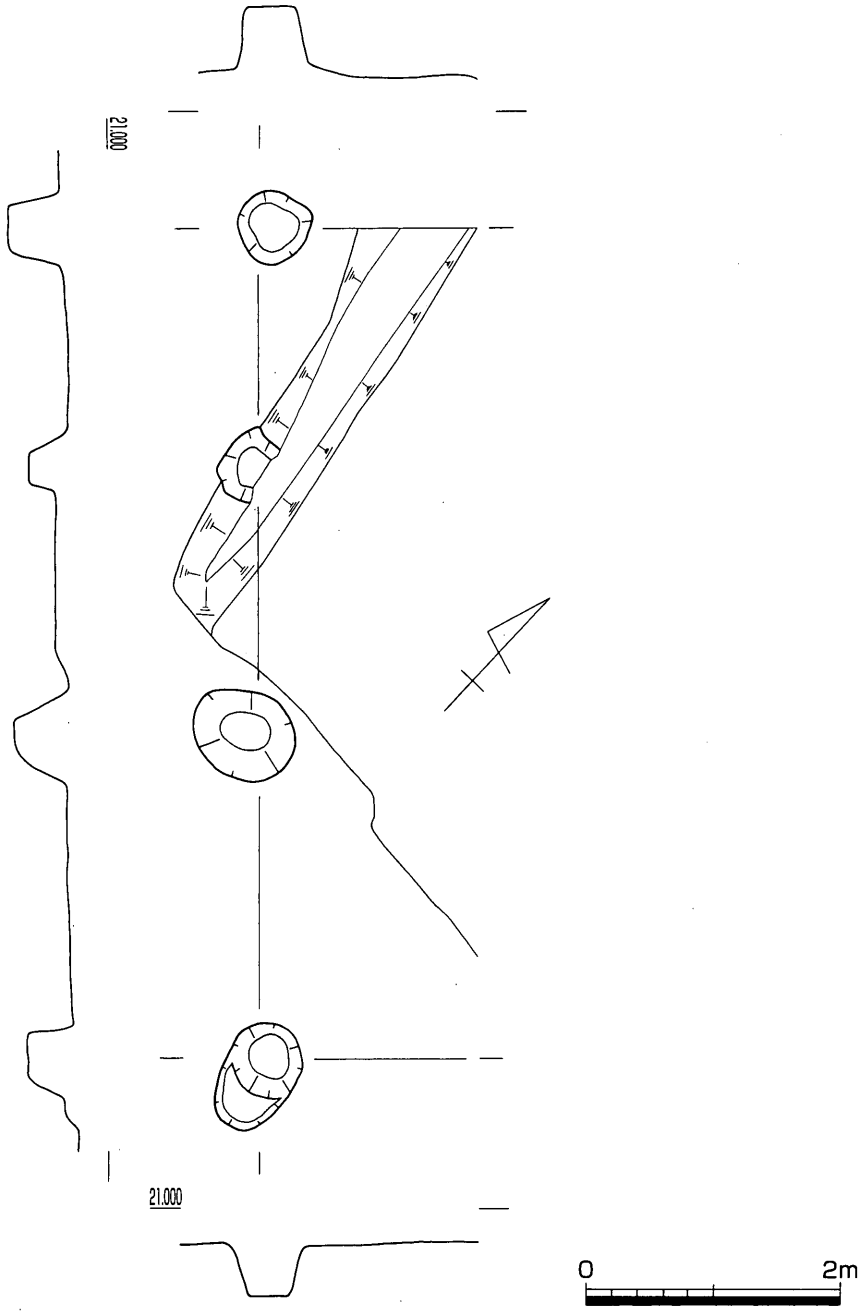
Ⅰ区北端部で検出した掘立柱建物である。桁行3間で北東部の調査区外へ延びると考えられ、梁間は不明である。桁行6.2m、梁間は2.4m以上で、面積は14.9㎡以上である。柱間は桁行が約2m～2.5m、梁間は2.4m以上、柱穴はほぼ円形で直径60～78cm、深さ30～44cmを測る。主軸方位はN43°Wで、これと同方向の竪穴住居および掘立柱建物はない。柱穴は後述する包含層除去後に検出し、包含層除去後に古墳時代初頭の土器を多く出土していることから、遺構の時期は古墳時代初頭以前と考えられる。

SB202（第74図）

Ⅱ区中央部西部で検出した掘立柱建物である。桁行3間、梁間2間以上で、西側は調査区外へ延びる。桁行6.2m、梁間は3.3m以上で、面積は20.5㎡以上である。柱間は桁行が約2m、梁間は約2.6m、柱穴は不整円形または円形で、直径約45～80cm、深さ13～28cmである。主軸方位はN12°Wである。遺構の所属時期は不明である。

SB203（第75図）

Ⅱ区中央部西部、SB202とほぼ接して検出した掘立柱建物である。桁行・梁間の方向は不明。2間以上×2間で、西側は調査区外へ延びる。南北方向は4.7m、東西方向は3.4m以上で、面積は16.0㎡以上ある。南側柱列の東から2穴めは検出できなかった。柱間は東側の柱列で2.4m、柱穴はおおむね円形で、直径60cm、深さ24～34cm、埋土は灰褐色粗砂混砂質土・茶褐色砂質土などである。主軸方位はN9°Wである。遺構の所属時期は不明である。



第73図　SB101平・断面図（1/60）

（3）Ⅰ区北部土器集中箇所など

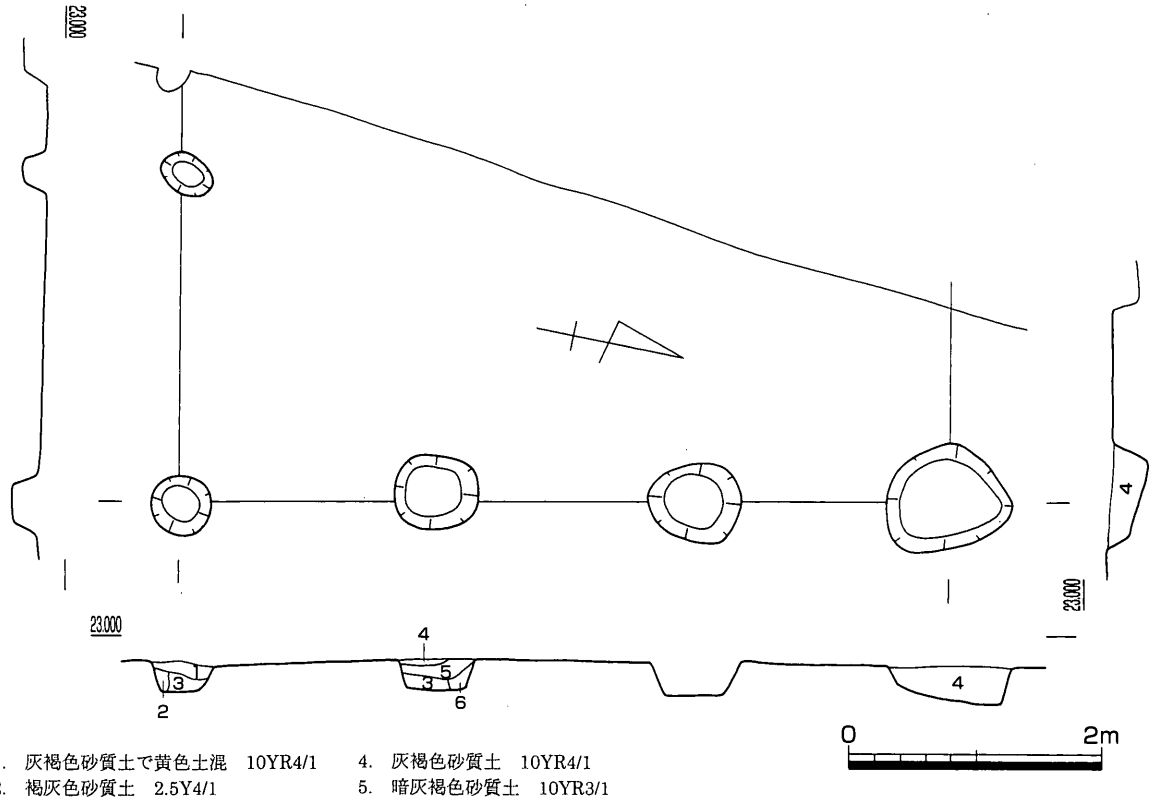
SP1002（第76・77図、図版25）

包含層の広がる南端付近で包含層を除去後に検出したピットである。包含層中で土器が集中して出土した箇所のほぼ西端中央部に当たる。直径46cm、深さ22.5cm、断面形状は擂鉢状である。掘立柱建物を構成するものではない。埋土の中位からは土器が集中して出土した。

580は甕。東阿波型土器。外面はハケで調整し、下半部はヘラミガキする。内面は上部に指押さえ痕を残し、下部はヘラ削りする。581・582は甕底部。外面はハケ、内面はハケまたは板ナデである。時期は古墳時代初頭頃と考えられ、後述する土器集中箇所の時期とおおむね一致する。

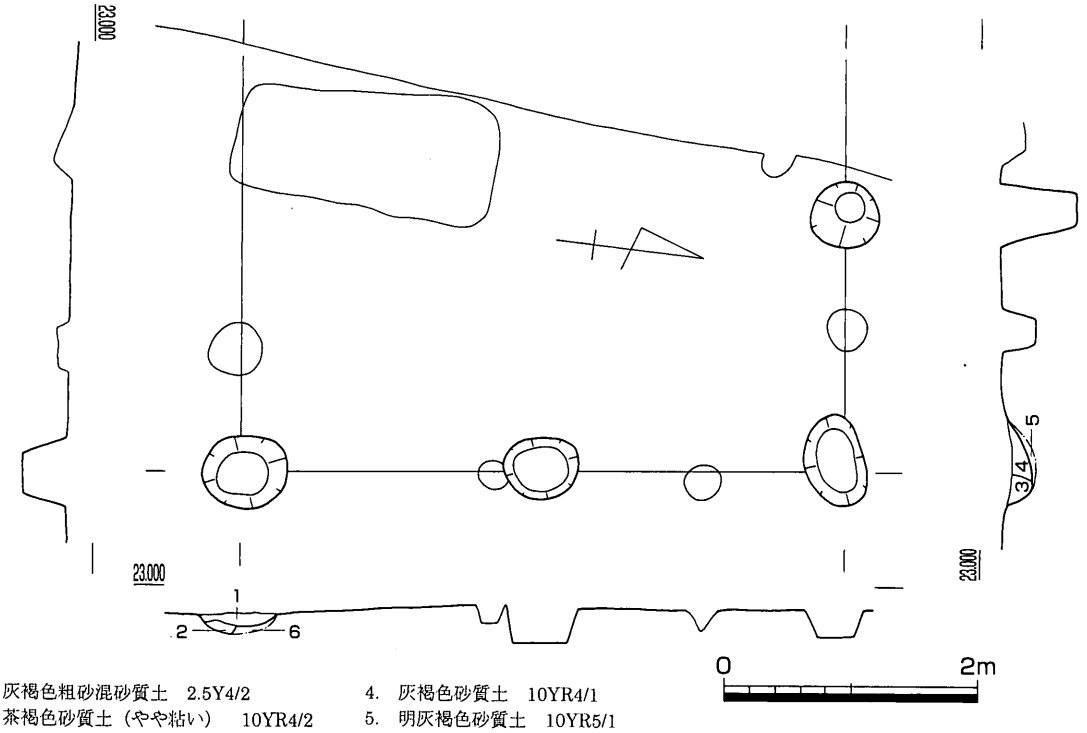
北部包含層（第76・78～82図、図版48・49）

Ⅰ区北辺部付近で堆積する包含層である。SH03の北側5m付近から北側で検出した。厚さは最も厚



1. 灰褐色砂質土で黄色土混　10YR4/1
2. 褐灰色砂質土　2.5Y4/1
3. 黄褐色砂質土　2.5Y4/2
4. 灰褐色砂質土　10YR4/1
5. 暗灰褐色砂質土　10YR3/1
6. 灰褐色砂質土（やや粘りあり）　10YR4/1

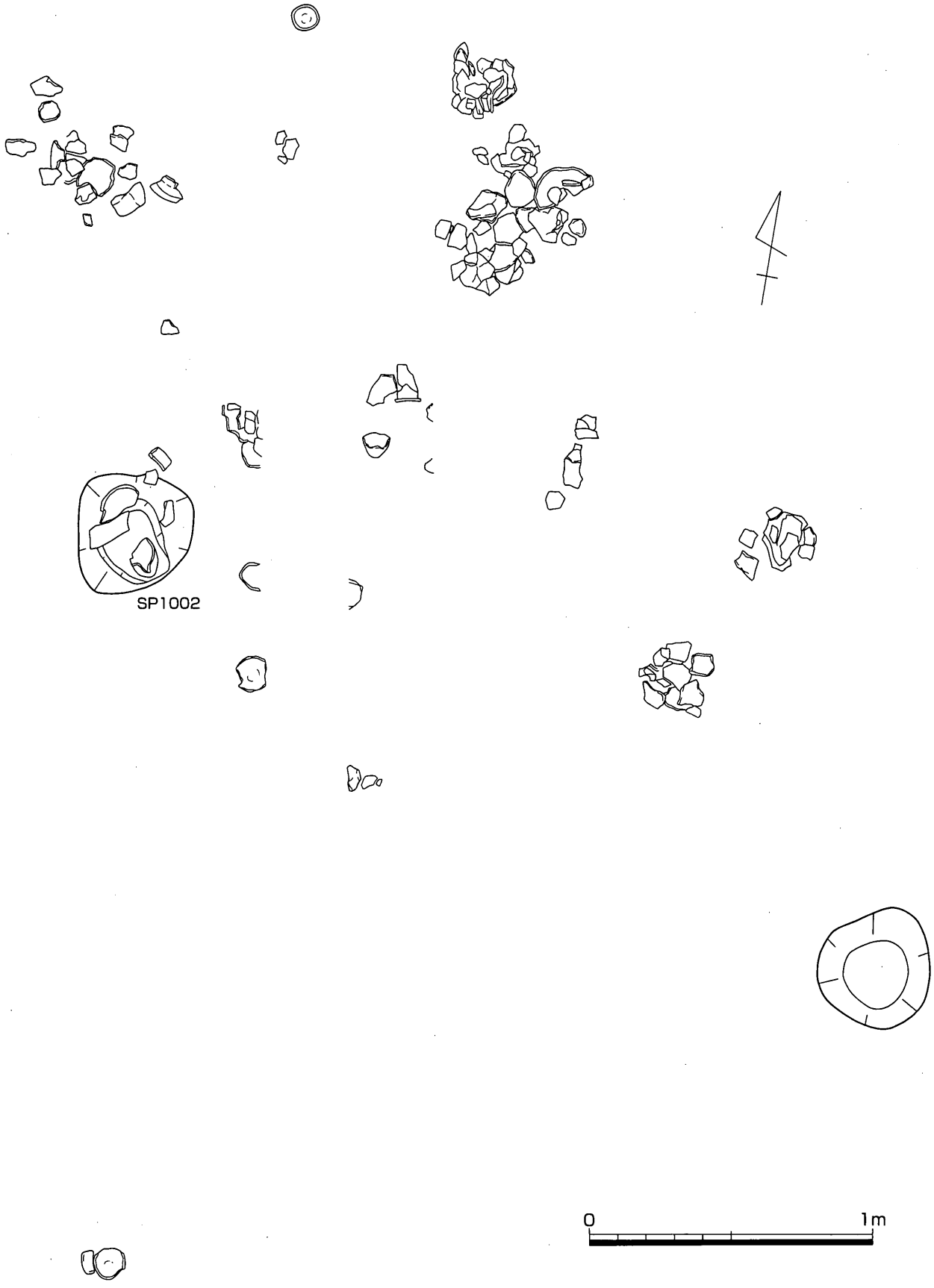
第74図　SB202平・断面図（1/60）



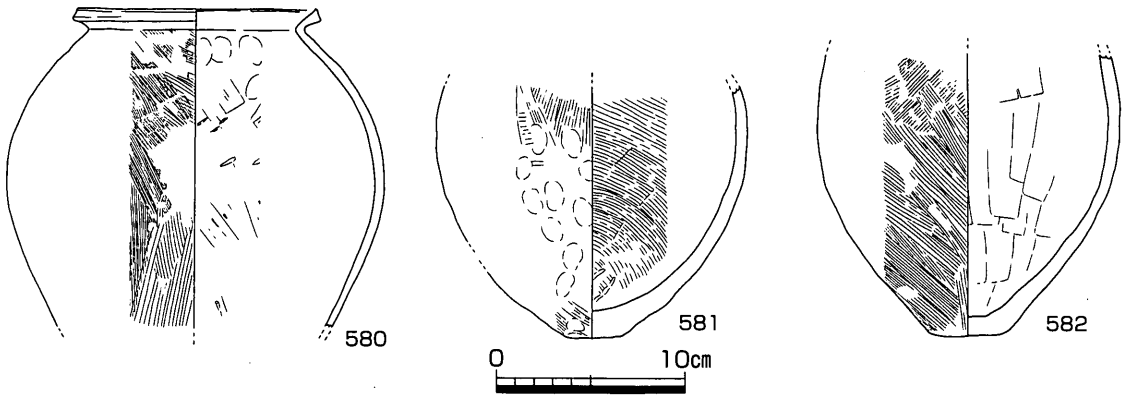
1. 灰褐色粗砂混砂質土　2.5Y4/2
2. 茶褐色砂質土（やや粘い）　10YR4/2
3. 灰褐色砂質土　10YR4/1
4. 灰褐色砂質土　10YR4/1
5. 明灰褐色砂質土　10YR5/1
6. 明黄褐色砂　10YR7/4

5・6　ベース

第75図　SB203平・断面図（1/60）



第76図　SP1002・北部包含層遺物出土状況（1/20）



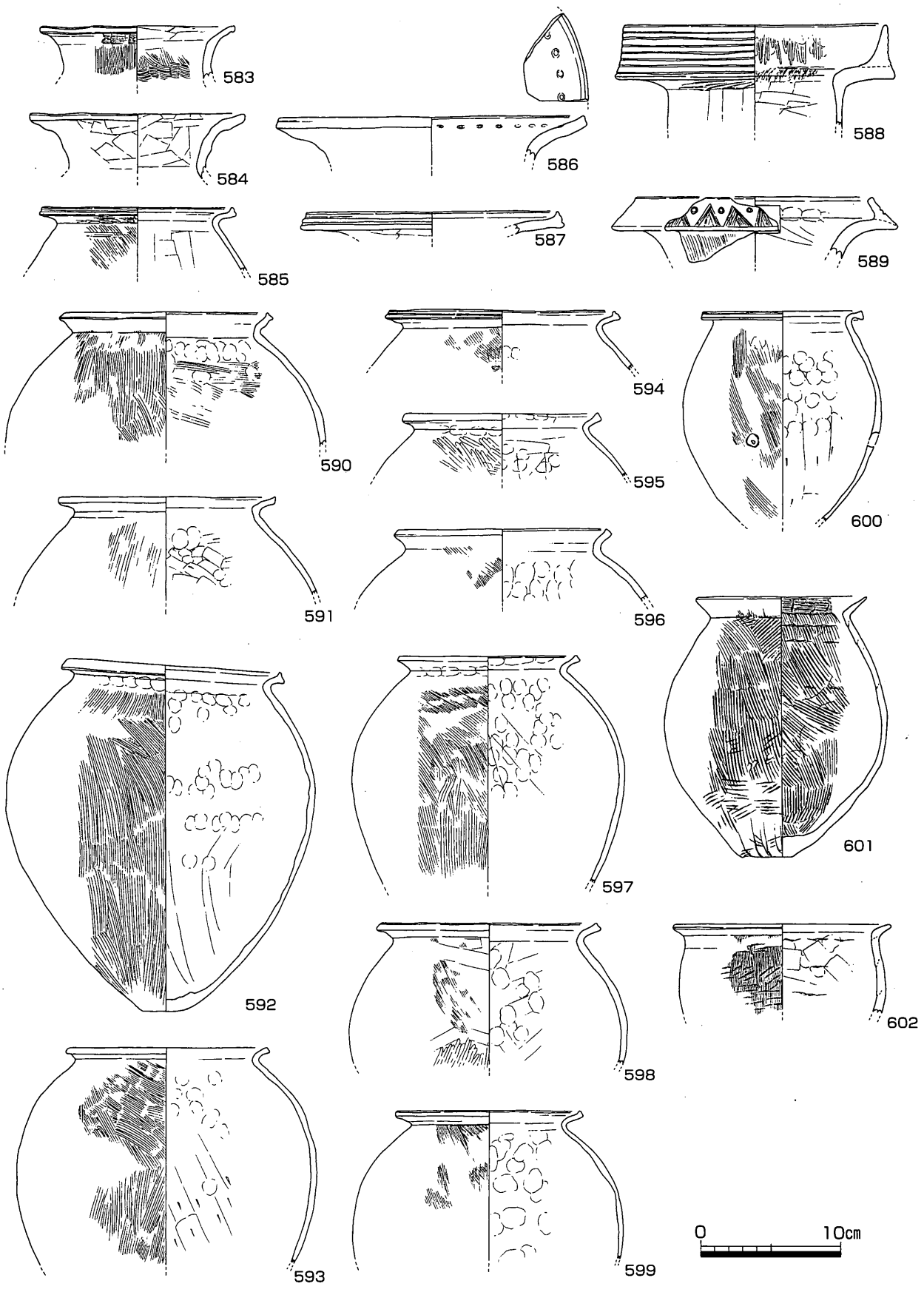
第77図　SP1002出土遺物（1/4）

い部分で20cm、埋土は灰褐色砂質土である。ピット等は包含層の除去後に検出した。包含層中でに土器が集中して出土した地点が包含層の南西部、SP1002付近で幅約2m、延長約4mの範囲内で数箇所認められたが、遺構としては捉えられなかった。

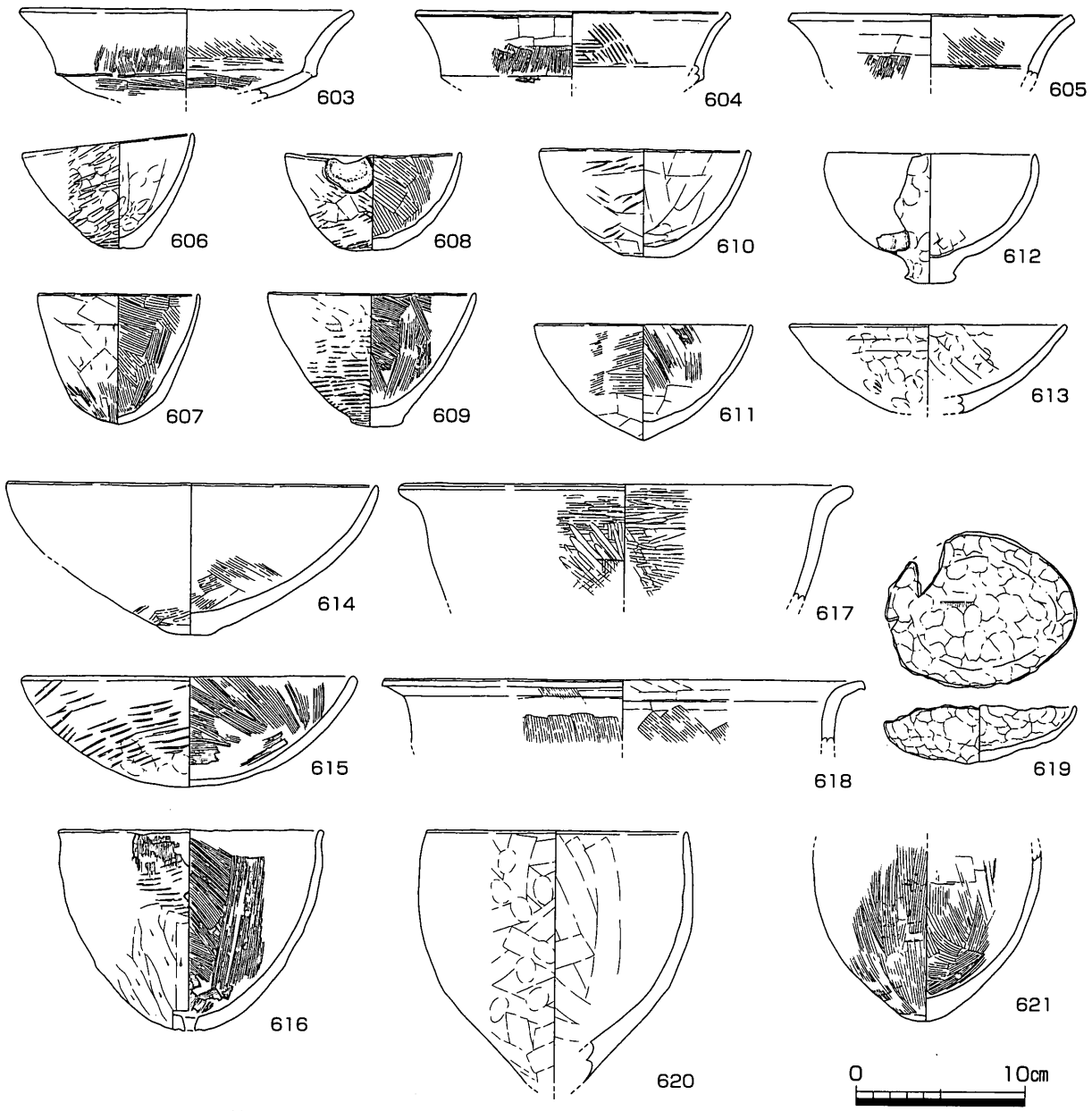
583～621は包含層南西部の土器集中地点から出土した遺物である。583～589（585は除く）は壺。583は頸部から口縁部にかけてなだらかに外反する。球形の体部が付く。古墳時代前期。584は形態は583に類似するが、作りは粗く器壁も厚い。586は口縁部内面に円形刺突文を巡らせる。587は口縁端部に凹線を2条巡らせる。588・589は二重口縁壺。588は口縁部外面にヘラミガキに近い弱い沈線を7条巡らす。口縁の立ち上がる部分に剥離痕が見られる。589は口縁部外面にヘラ描きで鋸歯文を施し、その間に円形刺突文を配する。口縁部の立ち上がり部分に剥離痕跡を残す。585・590～602は甕。585・590～600は口縁端部をやや上方へ引き上げ、外面にはハケ、内面は上部に指押さえを多く残し、下部はヘラ削り（590はハケ）する。体部は球形化し、器形・調整は類似するものである。592・593・597・598・600には胎土中に片岩が含まれ、東阿波型土器である。600には体部下半部に焼成後の穿孔がある。603～605は高杯。いずれも杯部。内外面ともハケで調整し、杯底部と口縁部の接合面を明瞭に残す。これら3点は遺物の収納段階で接合した。606～619は鉢。606～608は口径10cm 前後の椀型の鉢。607は外面にクラックを少し残す。608は口縁部にレンズ状のハガレがみられ、焼成中に破裂した可能性が考えられる。609～612は口径12cm 程度の椀型の鉢。612は体部が丸い。体部にやや厚い底部を作り出し、他の鉢の形態とは若干異なる。608と同様、焼成中に破裂した可能性のある剥離痕が見られる。613はやや浅めの椀型の鉢。外面にクラックをわずかに残す。614・615は口径20cm 前後の椀型の鉢。616は底部穿孔の鉢。深めの器形で、外面にクラックを少し残し、外面下半部はヘラ削りする。617・618は口縁端部を外反させる。619は不整円形の浅い器形。内外面に指押さえ痕を顕著に残し、歪みが著しく器壁も薄い。620は底部を欠くが、形態から底部穿孔の鉢と考えられる。621は甕底部。

土器集中部分の時期は古墳時代初頭頃と考えられる。また、東阿波型土器が多いこと、鉢が多いこと、焼成中に破裂した可能性のある遺物が2点あることが注意される。

622～636は包含層上層（濃茶色粘質土層）除去中に出土した遺物である。622～625は壺。622は二重口縁壺の口縁部。外面に円形刺突文を施す。小片で口径は不確か。624は体部と頸部の境に貼付突帯を巡らせる。弥生時代後期中～後半頃。626は甕。口縁端部と体部の屈曲がきつく、外面はハケ、内面は指押さえ痕を残す。627は高杯。外面にハケが観察できる。小片で体部径は不確か。628は土師器鉢。629～635は須恵器。629～631は杯身。いずれも口縁部の返りの退化が著しい。629は底部外面に回転ヘラ削



第78図　北部包含層（土器集中部）出土遺物（1）（1/4）

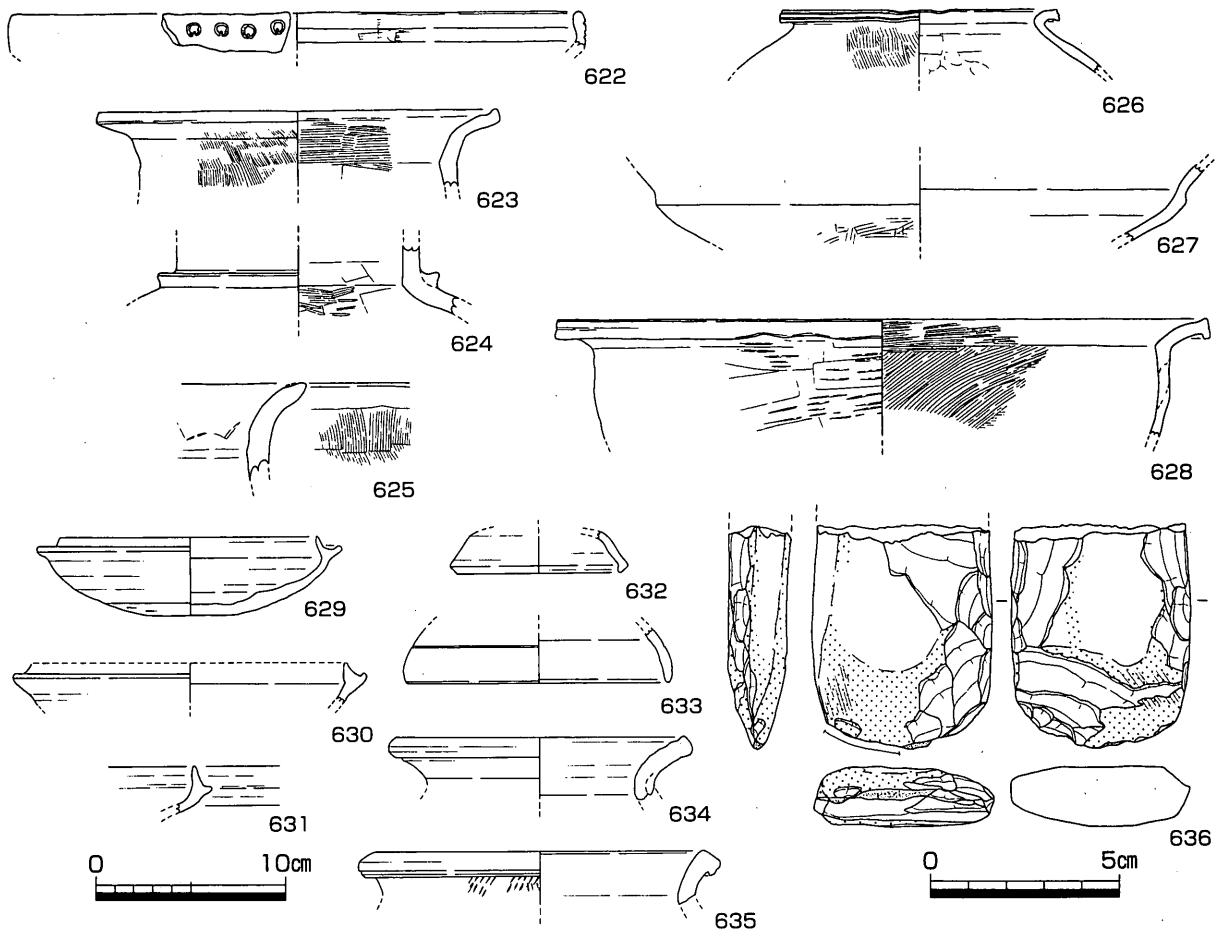


第79図　北部包含層（土器集中部）出土遺物（２）（１/４）

りをする。630は口縁部小片で口径は不確か。632・633は杯蓋。633は頂部と体部の境に緩い沈線を１条巡らせる。634･635は甕口縁部。636は扁平片刃石斧。安山岩製。きれいに調整せずに剥離したままの面を残す箇所も多い。下端部に敲打痕を残す。

包含層上層出土の遺物はおおむね古墳時代初頭を中心とする時期と７世紀前半頃を中心とする時期に分かれる。

637～659は包含層出土の層位不明遺物である。637～639は壺。637は胎土中に角閃石を含む。639は長めの頸部で、頸部に沈線を２条巡らせる。外面はヘラミガキする。640～646は甕。642は東阿波型土器。内面の指押さえ痕跡部分に横方向の押圧痕があり、指押さえの際に直接指で押さえずに何かの上から押さえていったようだ。調整は641～645は外面にハケを施し、内面はハケや板ナデをする。647・648は高杯。648は脚部。穿孔が２ヶ所残り、残存部分から穿孔は４ヶ所あったと考えられる。649～651は鉢。649は口縁部を外反させる大型のもの。650・651は椀型。650は口径10cm 程度で、外面に焼成時に破裂した可能性のある、レンズ状の剥離痕がある。651は中型の鉢。外面にクラックを多く残す。652～654



第80図　北部包含層（上層）出土遺物（1/4・1/2）

は底部。655は製塩土器脚部。底部･体部は剥離しており、脚部分しか残らない。底部と体部の剥離痕の境に稜線があることから、底部と体部は別々に取り付けていたとも考えられる。656･657は須恵器。656は杯身。底部はヘラ切りの後なでるだけである。657は杯蓋。頂部付近は回転ヘラ削りし、頂部と体部の境付近で緩い沈線が入る。658は叩き石。安山岩で、全体を研磨している。下端部にわずかに敲打痕を残す。659は器種不明。砂岩。円形にし、側縁部に敲打痕を少し残す。上･下面は磨滅により研磨される。

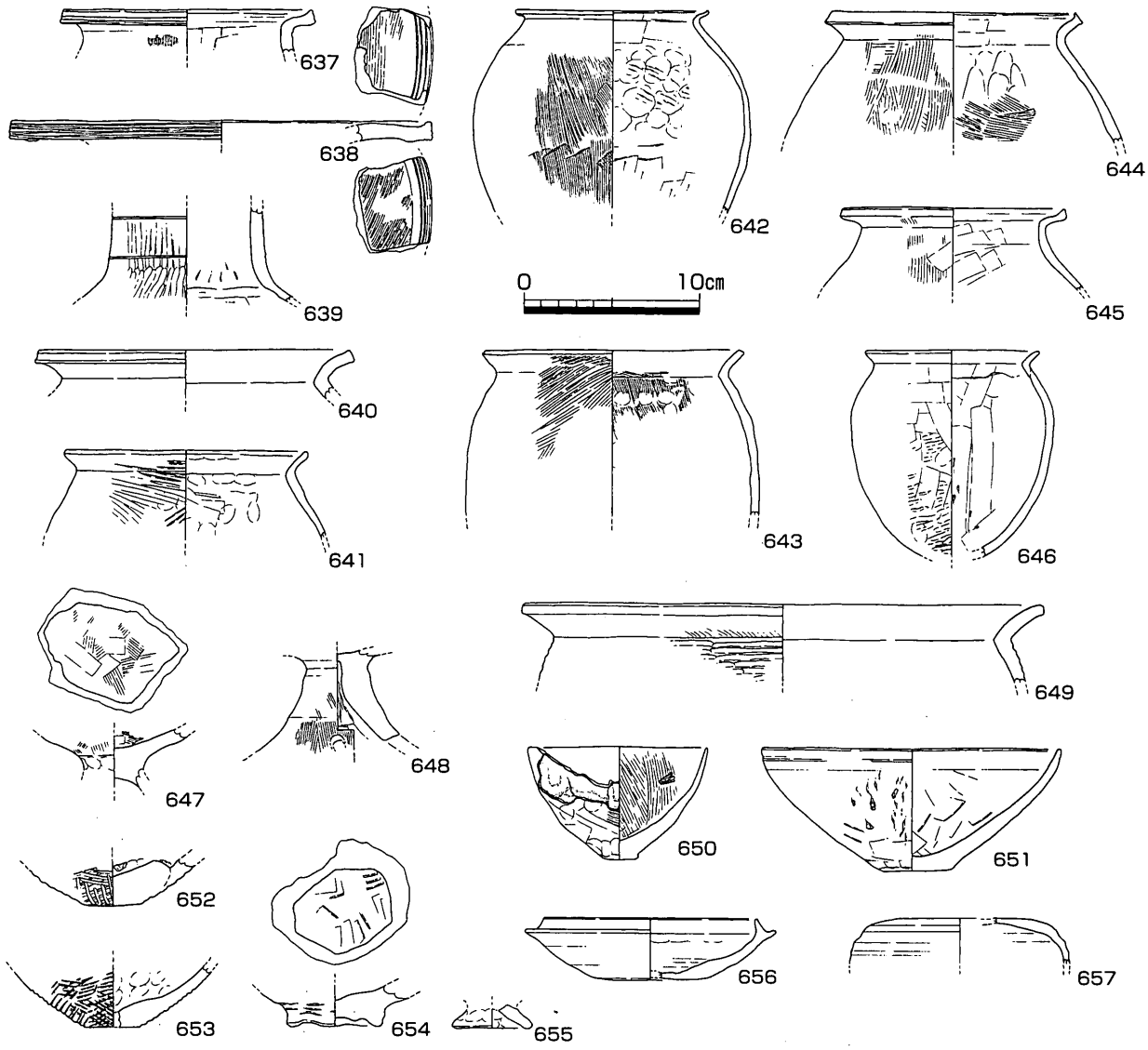
これらの出土遺物から古墳時代初頭頃に土器が散乱するような行為があった後、7世紀前半頃に包含層が形成され、埋没していったと考えられる。7世紀前半頃は北側の平成11年度調査区の土坑墓とおおむね同時期である。

（4）土坑

SK101（第83図）

Ⅰ区北部で検出した土坑である。遺構の重複関係によりSH103より新しい。楕円形で長軸1.3m、短軸1.0m、深さ42cmで断面形状は長方形、埋土は褐色粗砂混砂質土である。埋土中からは弥生土器壺小破片が出土した。出土遺物は弥生時代終末期頃と考えられるが、SH103より新しく、時期は古墳時代初頭以降と考えられる。

660は弥生土器壺口縁部。広口壺で口縁端部に粘土を貼り付けて下側へ拡張させる。



第81図　北部包含層（その他）出土遺物（1）（1/4）

SK108（第84・85図、図版50）

Ⅰ区中央部やや南寄りで検出した土坑である。長方形で長辺2.37m、短辺1.85m、深さ35cmである。断面形状は逆台形、埋土は大部分を茶褐色・褐色砂質土で占めるが、土坑の底部、側部付近は黄褐色粗砂・砂質土である。埋土中からは弥生土器小破片が出土した。

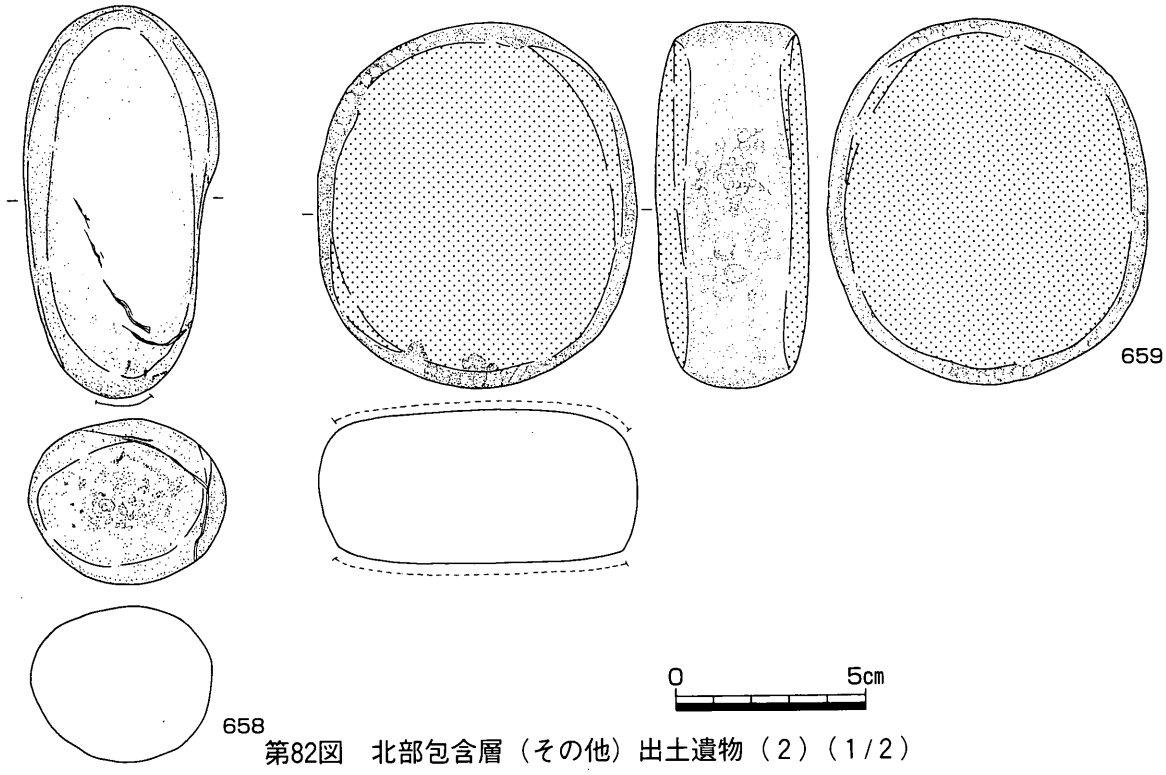
661～664は壺。661～663は広口壺の口縁部。664は口縁端部に2条の凹線文が施される。665は甕。外面にはハケ、内面上半部には指押さえ痕が顕著に残る。胎土中に角閃石を含む。下川津B類土器。666は底部。

遺構の時期は弥生時代後期中～後半頃と考えられる。

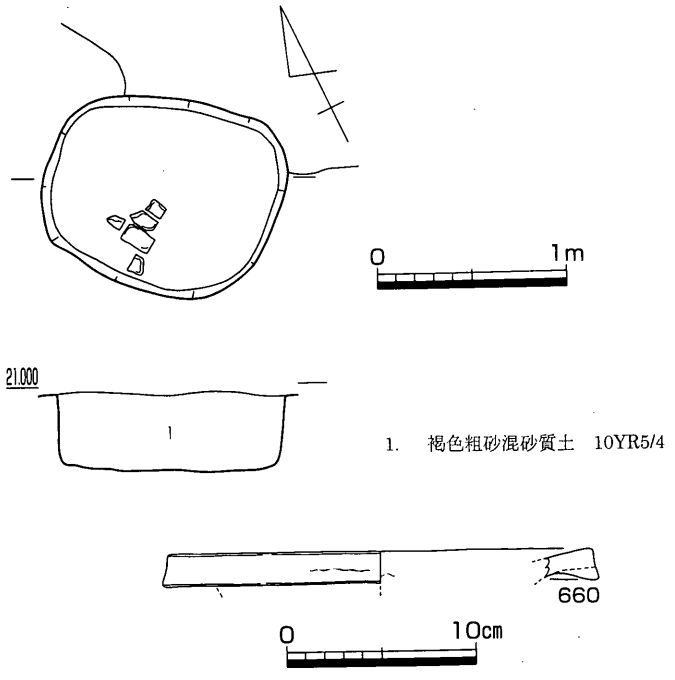
SK114（第86・87図、図版50）

Ⅰ区やや南寄り付近で検出した。おおむね長方形で南側短辺に小さい突出部を持つ。突出部分は他の長方形部分より浅く、遺構の肩が崩れたためと考えられる。長方形部分の長辺3.44m、短辺2.10m、深さ30cm、断面形状は逆台形である。埋土はおおむね茶褐色・褐色粗砂混弱粘質土であるが、最下部および肩部分に一部灰褐色粗砂の堆積が認められる。埋土中からは弥生土器片が出土した。

667～670は壺。667は口縁端部を上方へ引き上げる。下川津B類土器か。668は広口壺。671～678は甕。



第82図　北部包含層（その他）出土遺物（２）（１/２）



第83図　SK101平・断面図（１/40）、出土遺物（１/４）

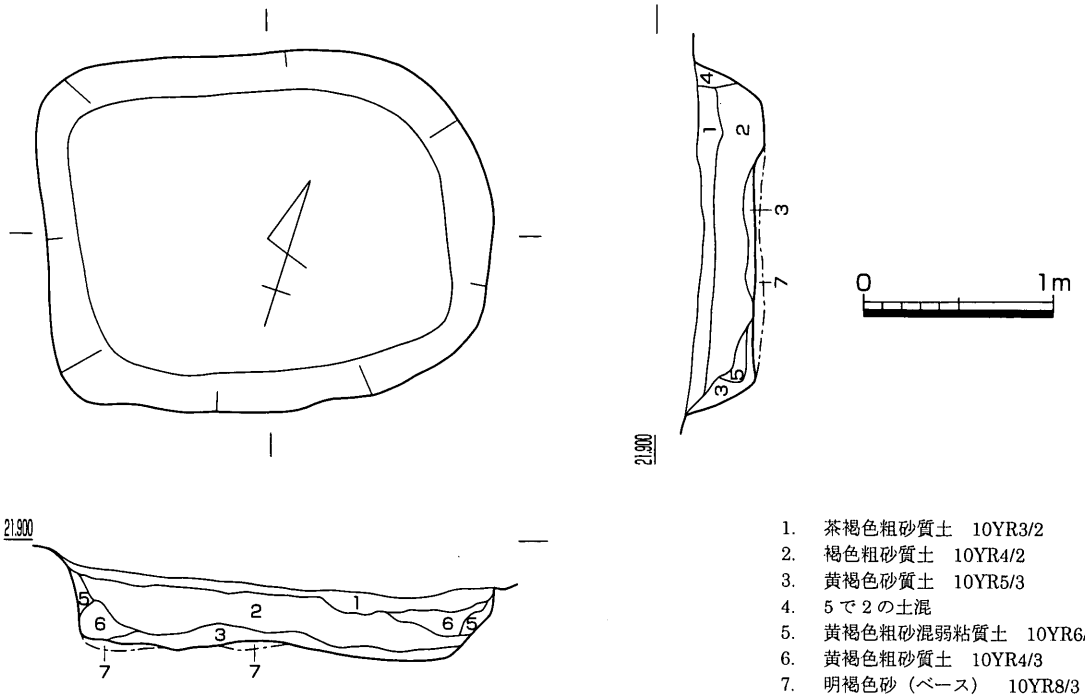
672～674は内外面ともハケで仕上げる。676は小型。677・678は下川津B類土器。679・680は高杯。679は杯下半部で内外面に４分割と考えられるヘラミガキを行う。調整方法は下川津B類土器と似るが、胎土中に角閃石は含まない。680は脚部上端で杯体部との剥離痕跡がみられる。681～684は鉢。681～683は口縁端部がやや外反するもの。684は椀型の器形になる。685～688は底部。外面はハケまたは板ナデ、内面は685がヘラ削りするほかは指押さえ痕と板ナデ痕を残す。

遺構の時期は弥生時代後期後半頃と考えられる。

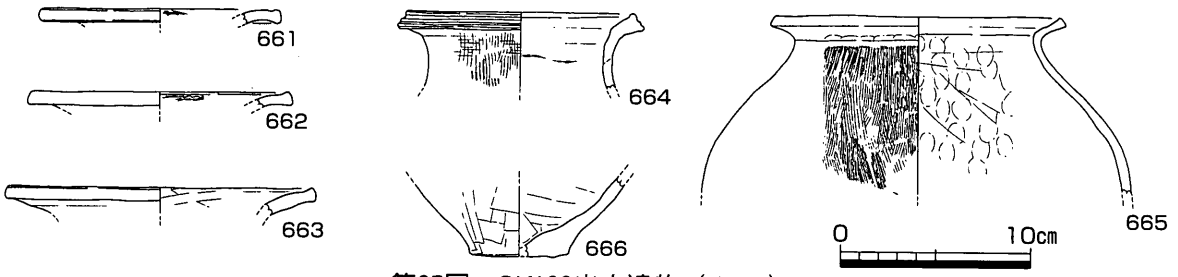
SK110（第88・89図、図版）

Ｉ区南部で検出した土坑である。おおむね長方形で長辺1.90m、短辺1.18m、深さ35cm、断面形状は逆台形である。埋土はおおむね褐色砂混砂質土・砂質土で、最底部・肩部に部分的に灰褐色砂質土が堆積する。埋土中からは弥生土器が出土した。

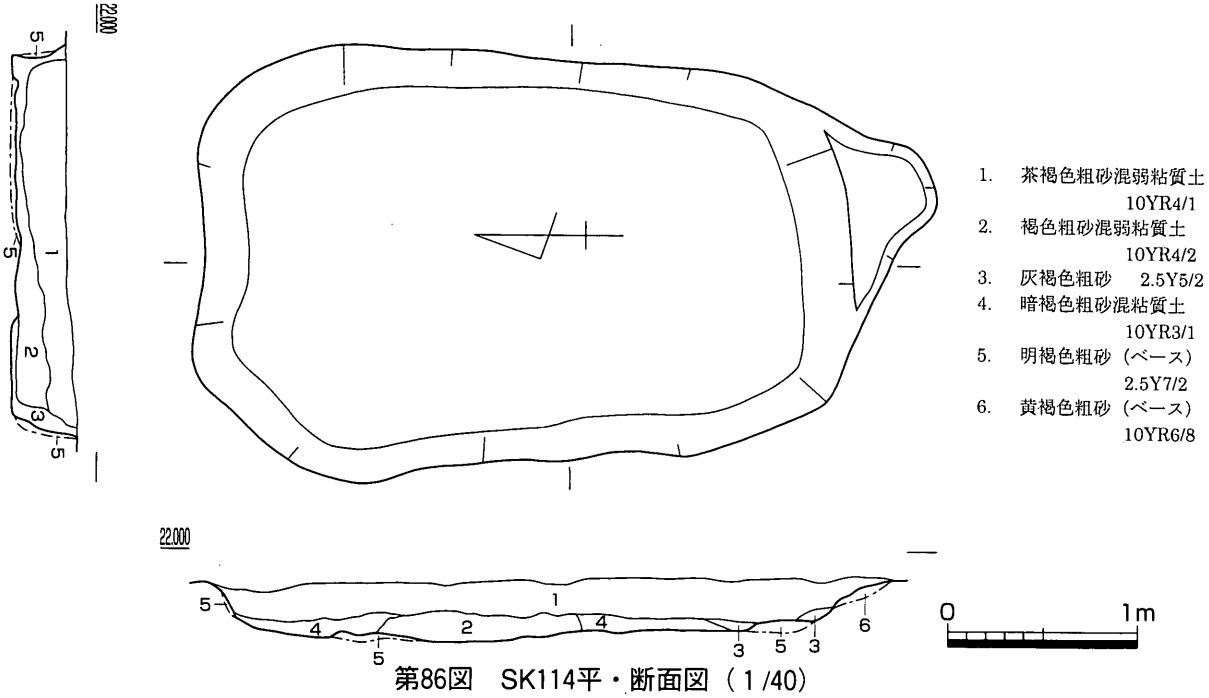
689・690は甕。689は口縁端部をわずかに上部へ引き上げ、外面にはハケ、内面には指押さえ痕を顕著に残す。胎土中に角閃石を含む。下川津B類土器。691は高杯。杯部内外面に分割にも見える横方向のヘラミガキを施す。胎土中に角閃石は含まれない。692は鉢。椀型でやや浅めの器形。693は底部穿孔の土器。焼成後の穿孔で、尖底を呈する。694は石鏃。サヌカイト製。平基式。



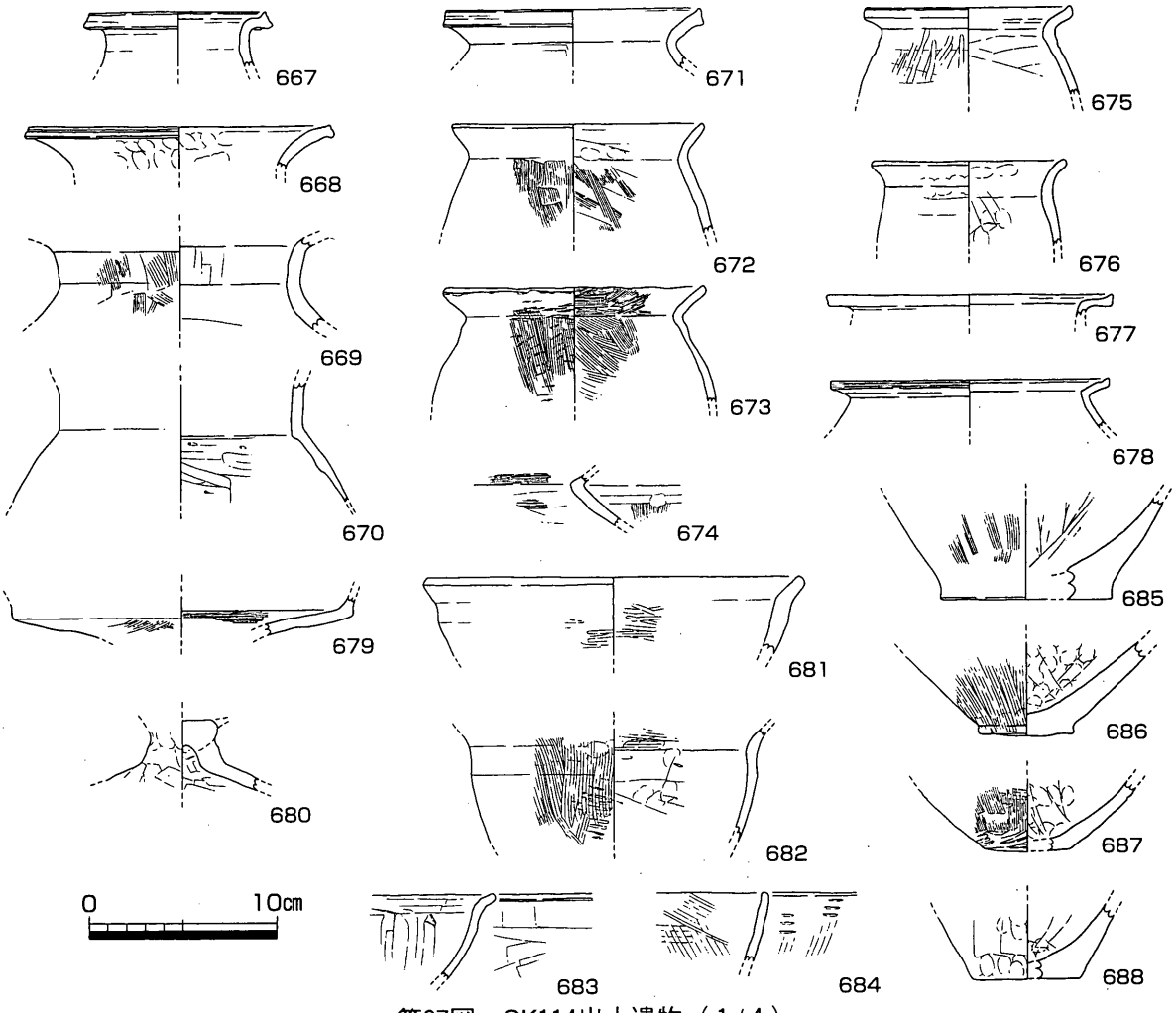
第84図　SK108平・断面図（1/40）



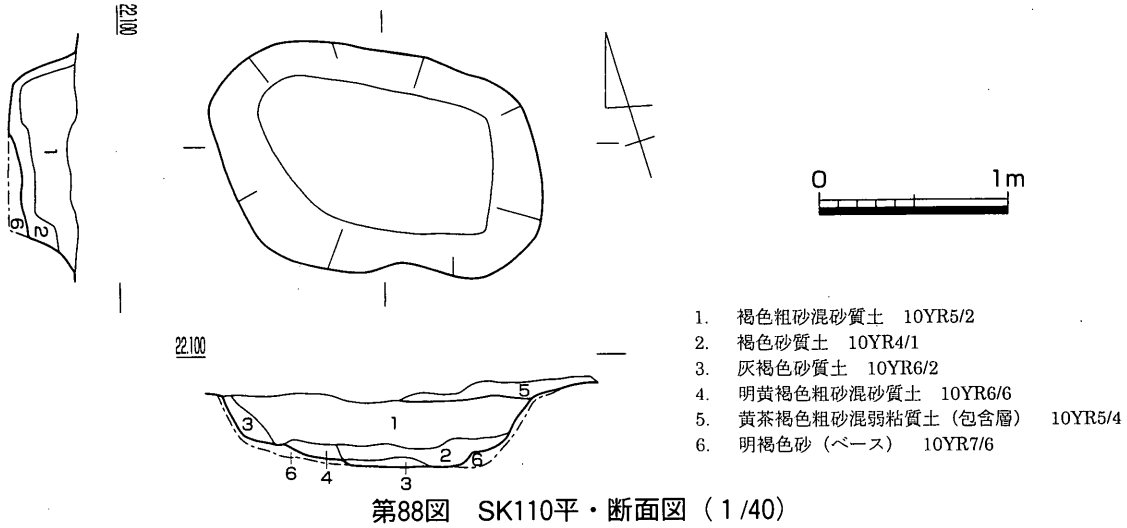
第85図　SK108出土遺物（1/4）



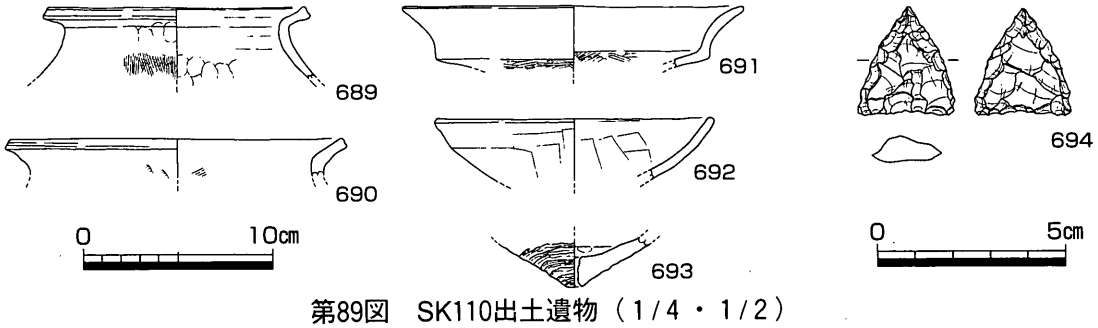
第86図　SK114平・断面図（1/40）



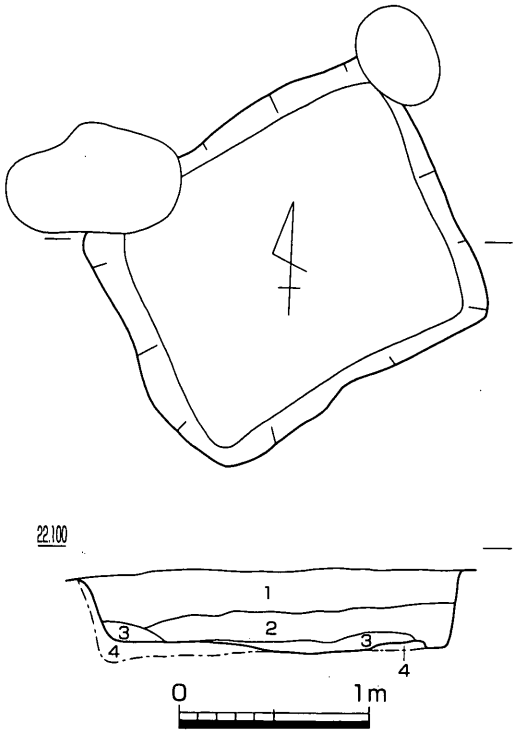
第87図　SK114出土遺物（1/4）



第88図　SK110平・断面図（1/40）



第89図　SK110出土遺物（1/4・1/2）



1. 茶褐色粗砂混砂質土　10YR3/2
2. 黄茶褐色粗砂混砂質土　10YR4/2
3. 灰褐色砂質土　10YR5/2
4. 明褐色砂（ベース）　10YR8/3

第90図　SK115平・断面図（1/40）

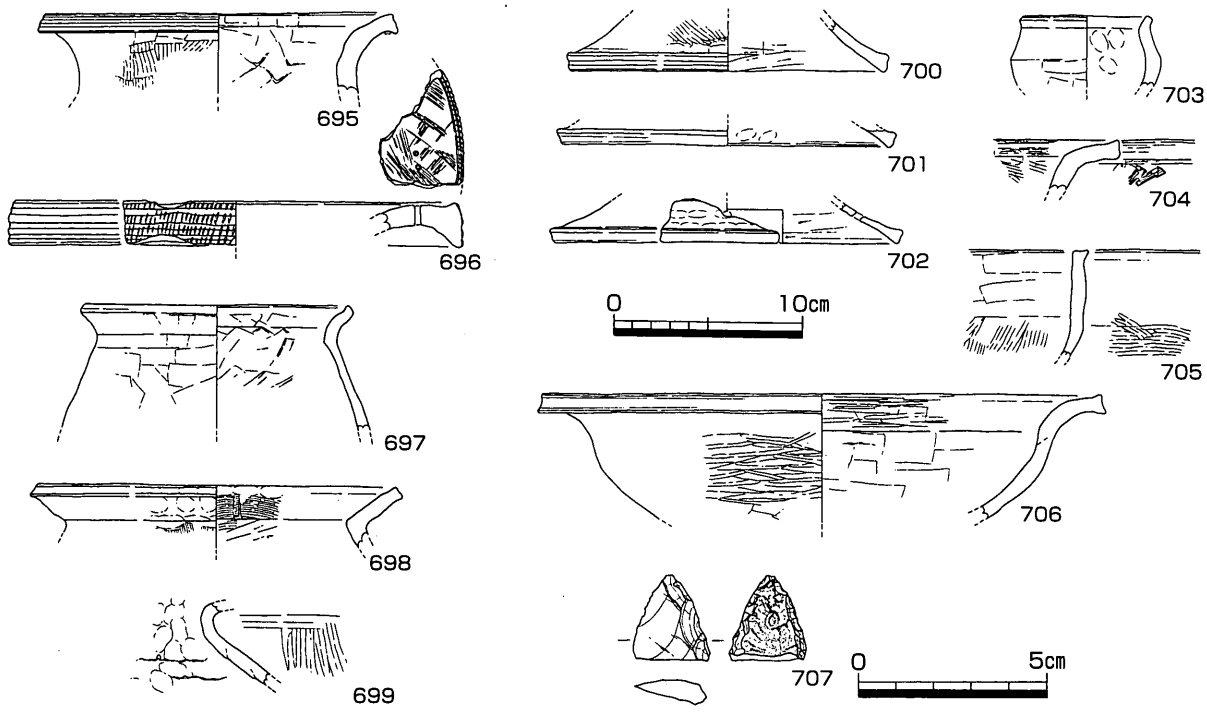
遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期後半頃と考えられる。

SK115（第90・91図）

Ⅰ区やや南寄りで検出した。正方形に近い長方形で、長辺1.85m、短辺1.50m、深さ45cmで断面形状は逆台形である。埋土はおおむね茶褐色・黄茶褐色粗砂混砂質土であるが、部分的に最下部に灰褐色砂質土が堆積する。この遺構はピットに切られる。埋土中からは弥生土器が出土した。

695・696は壺。695は口縁端部に2条の凹線文を施す。696は口縁端部に3条の凹線文を施し、その上から細かい刻みを施す。内面には格子文を施し、2孔1対と考えられる穿孔が1ヶ所に認められる。いずれも弥生時代中期後半に遡るもの。697～699は甕。700～702は高杯脚部。いずれも端部に面を持ち、内面は横方向のヘラ削りをする。702は1ヶ所に穿孔が認められる。702は下川津B類土器。703～706は鉢。703は小型。704・706は口縁端部を外反させる。707は石鏃。平基式。サヌカイト製。刃部の調整をほとんど行わず、片面に自然面を多く残す。

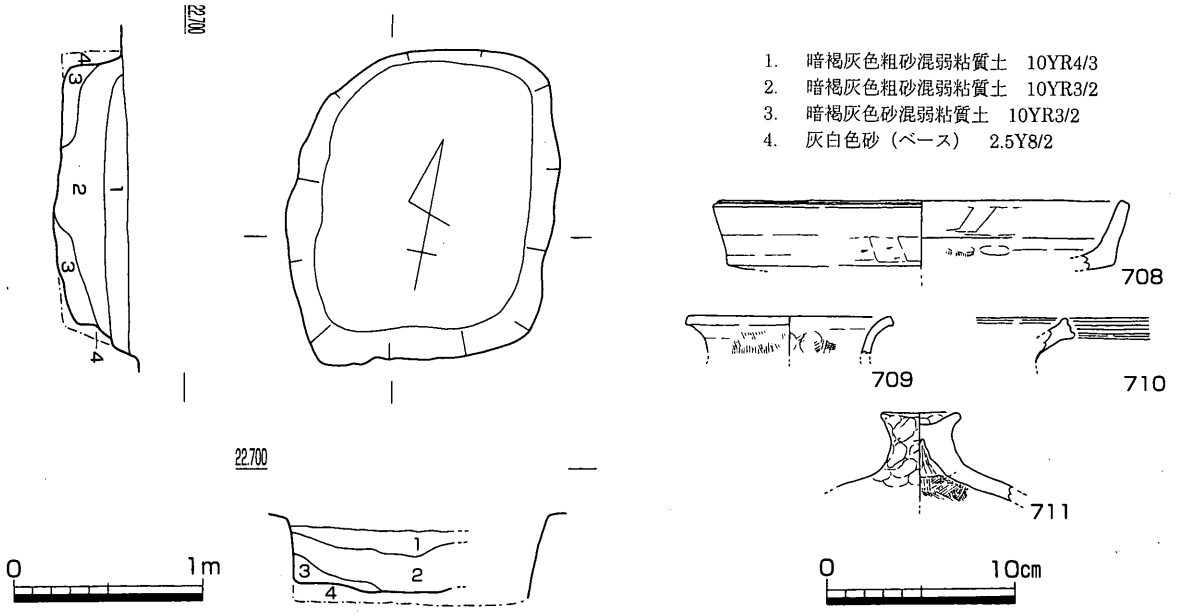
遺構の時期は弥生時代後期前半頃と考えられる。



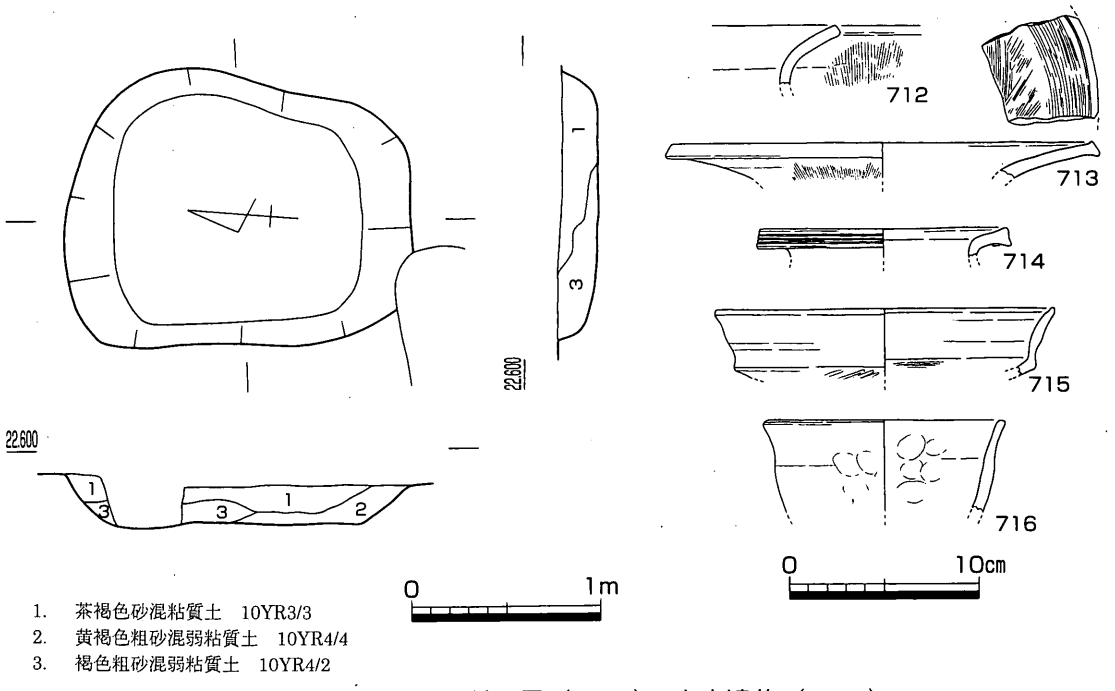
第91図　SK115出土遺物（1/4・1/2）

SK209（第92図）

Ⅱ区北東端、Ⅰ区との境付近で検出した土坑である。長方形で長辺1.6m、短辺1.4m、深さ40cmで、断面形状は逆台形、埋土は暗褐灰色粗砂混弱粘質土が大半を占める。埋土からは弥生土器片が出土した。



第92図　SK209平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第93図　SK210平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

708・709は壺口縁部片。708は二重口縁壺。710は甕の小破片。端部には2条の凹線文を施す。中期後半。711は蓋。頂部付近の指押さえは顕著。

遺構の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

SK210（第93図）

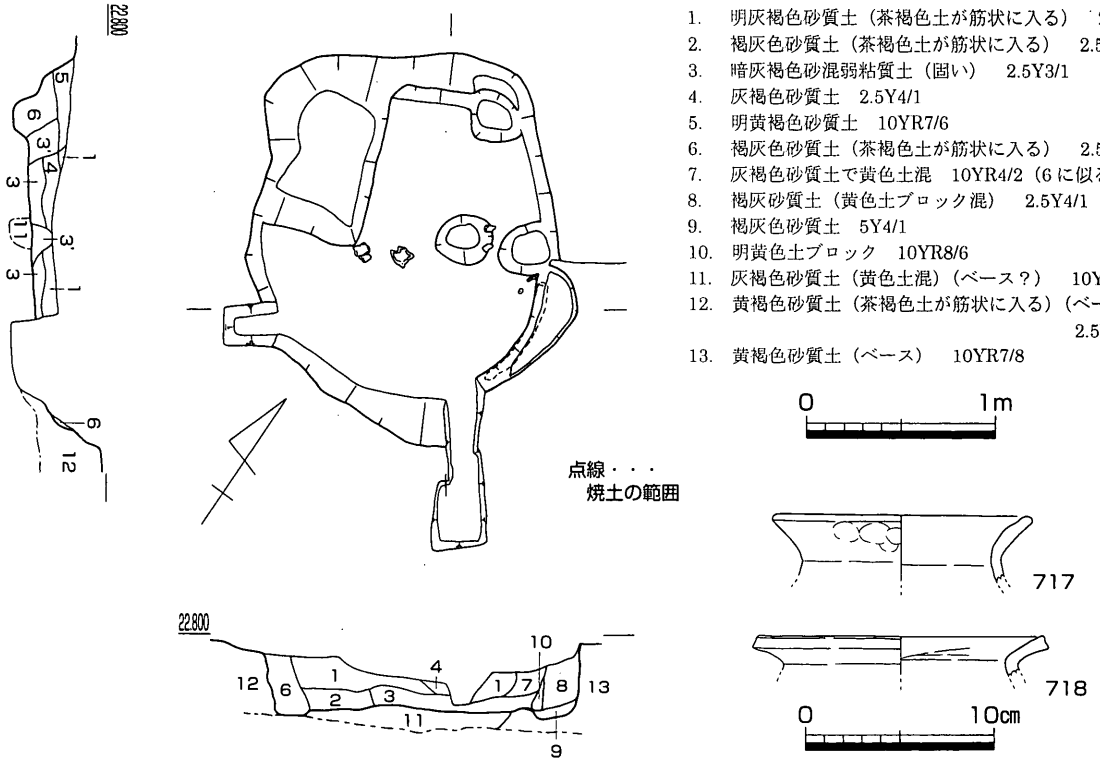
Ⅱ区北東端、SK209の北西に接して検出した土坑である。遺構の重複関係によりSB201より古い。長方形で長辺1.9m、短辺1.4m、深さ22cmで、断面形状は逆台形、埋土は茶褐色砂混粘質土、褐色粗砂混弱粘質土などである。埋土中からは弥生土器片が出土した。

712・713は壺。713は広口壺の口縁。714は甕小片。口縁端部に沈線が巡る。715は高杯。下川津B類土器。杯部内外面に分割と考えられるヘラミガキが認められる。716は鉢。外面にクラックをわずかに残す。

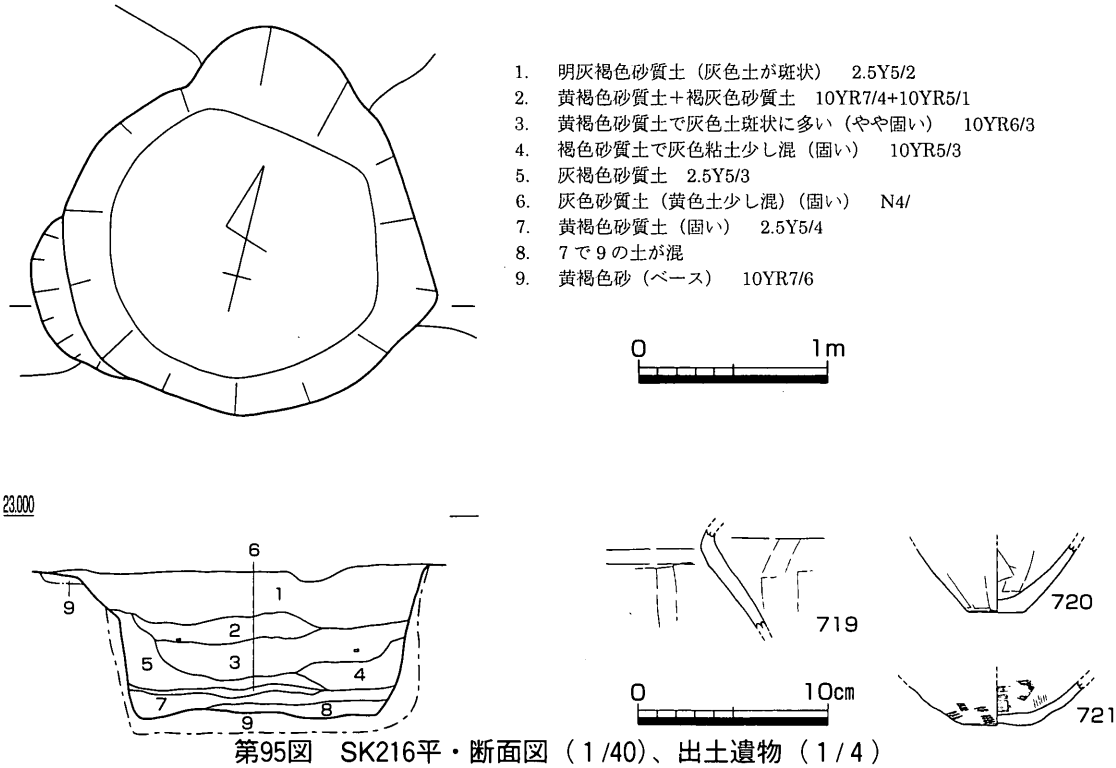
遺構の時期は弥生時代後期後半～終末期と考えられる。

SK215（第94図、図版26）

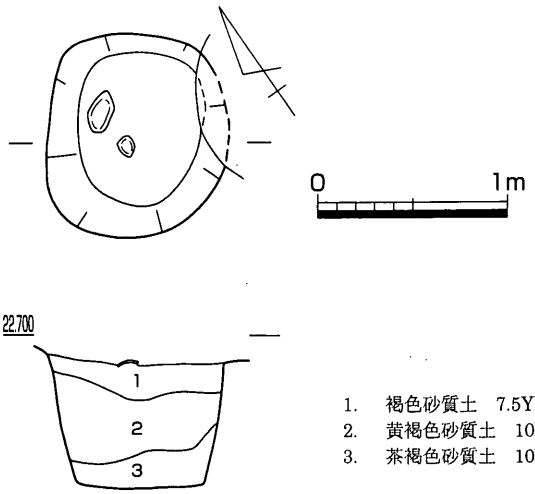
Ⅱ区中央部付近で検出した土坑である。北半部にはSH203により消失する。不整円形で長軸2.05m、短軸1.65m、深さ36cm、断面形状は逆台形で端部分が5cm程度窪む。埋土はおおむね上部が明灰褐色砂質土、下部が暗灰褐色砂混弱粘質土、肩付近は褐灰色砂質土である。土坑の南東部では、上面精査の際に



第94図　SK215平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

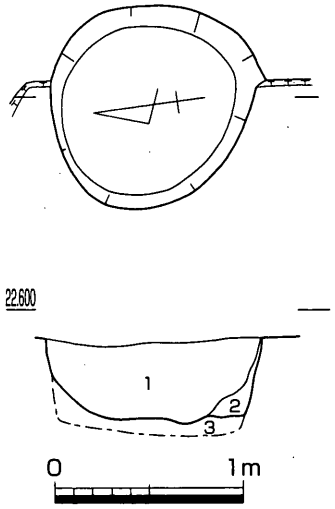


第95図　SK216平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



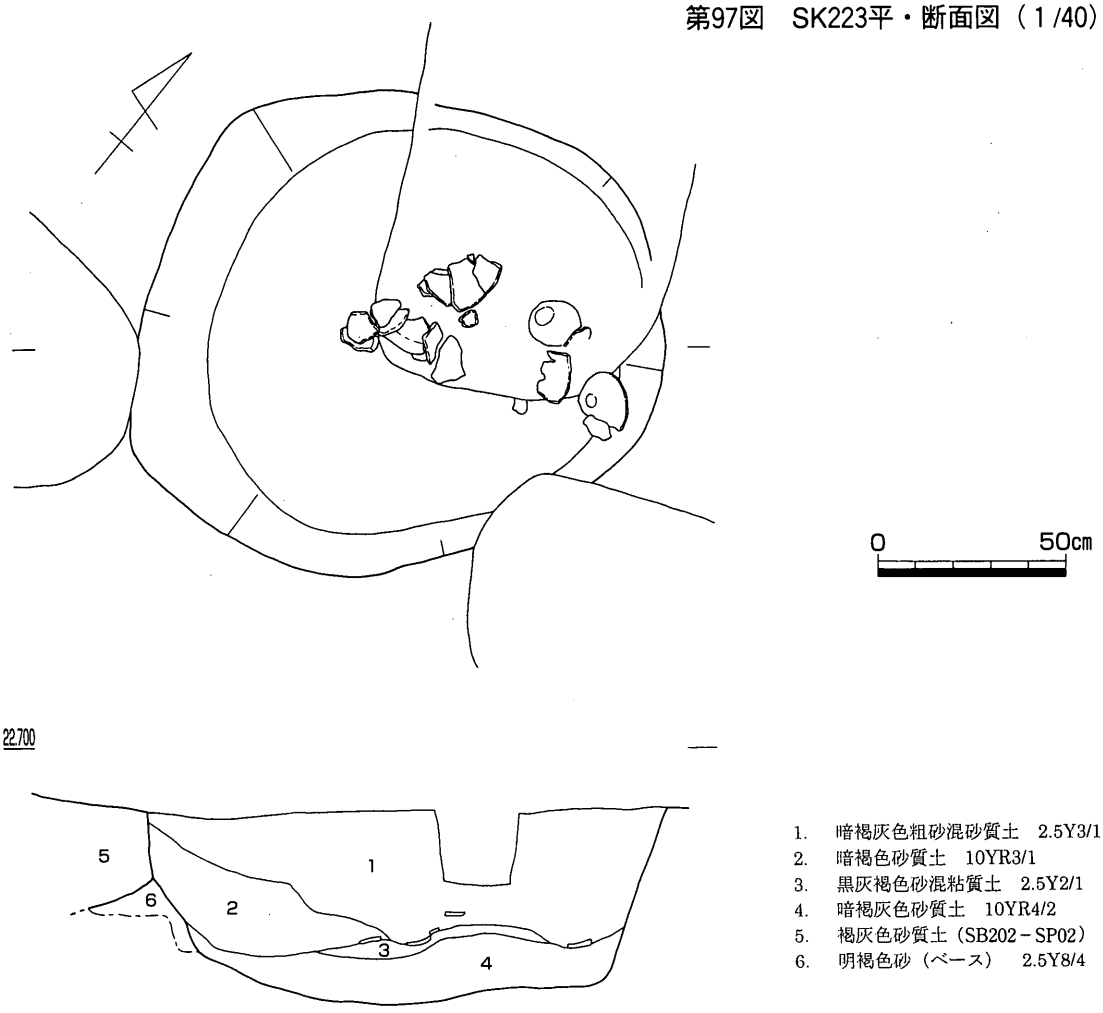
1. 褐色砂質土　7.5YR4/1
2. 黄褐色砂質土　10YR6/4
3. 茶褐色砂質土　10YR4/1

第96図　SK222平・断面図（1/40）



1. 明褐色砂　10YR5/3
2. 明褐灰色砂　10YR5/1
3. 灰白色砂（ベース）　2.5Y2/1

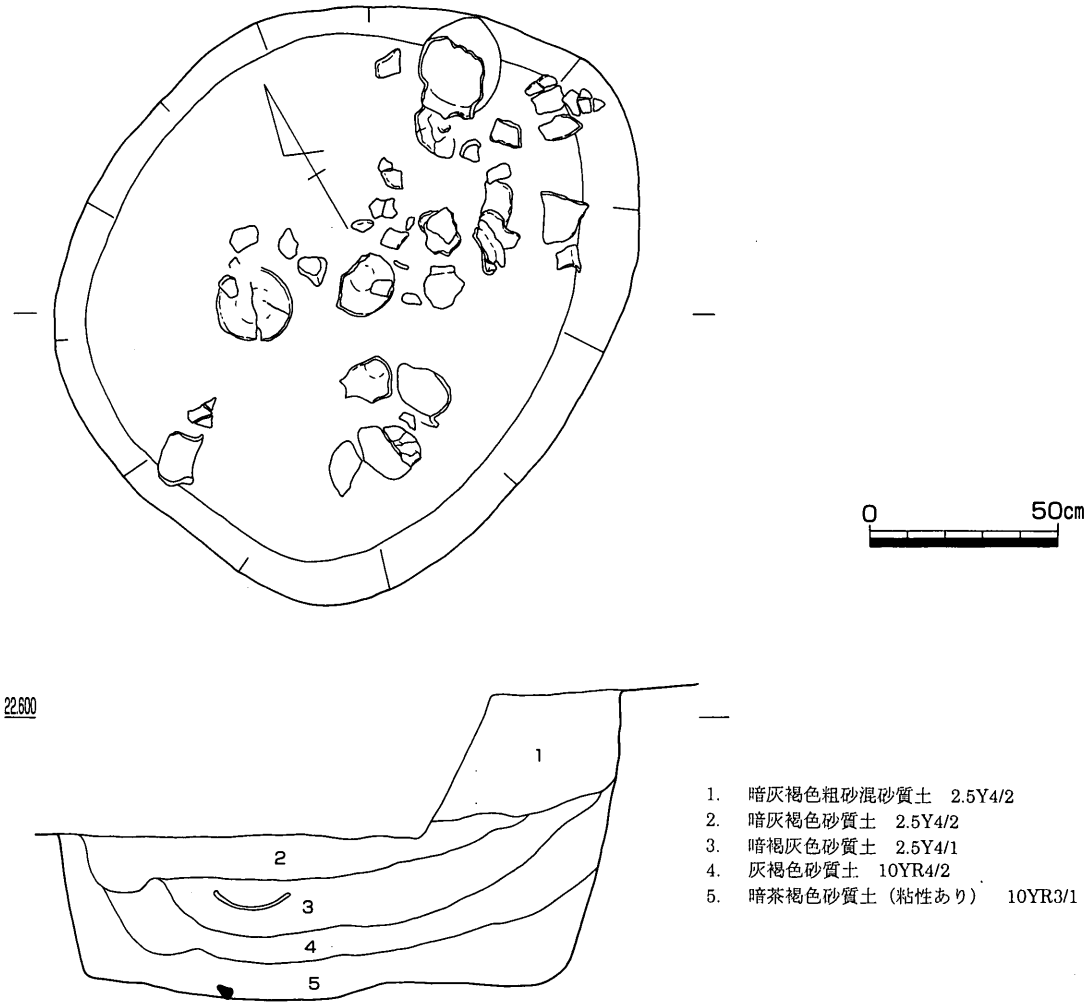
第97図　SK223平・断面図（1/40）



1. 暗褐灰色粗砂混砂質土　2.5Y3/1
2. 暗褐色砂質土　10YR3/1
3. 黒灰褐色砂混粘質土　2.5Y2/1
4. 暗褐灰色砂質土　10YR4/2
5. 褐灰色砂質土（SB202－SP02）　10YR4/1
6. 明褐色砂（ベース）　2.5Y8/4

第98図　SK227平・断面図（1/20）

遺構の肩から約18cm内側、底部の窪んだ部分と5cm程上がった部分の境付近に当たる箇所で幅5cm程度の焼土が薄く遺構のラインに沿って検出された。この焼土は厚さも5cm程しか残っておらず、遺構全体



第99図　SK228平・断面図（1/20）

の約1/8程度しか検出できなかった。土坑の北東部では底付近から東西方向を向く炭化材を検出した。焼土面の検出と炭化材が出土したことから窯または炉などの遺構を想定し、埋土の水洗等も行ったが、微細遺物の検出には至らなかった。埋土中からは土器の小片が出土しただけであった。

717・718は弥生土器甕小片。遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

SK216（第95図）

Ⅱ区やや北寄りで検出した土坑である。直径約1.9m、深さ76cm、断面形状は長方形に近い。埋土は上位が明褐色砂質土、中～下位は黄褐色・褐灰色・褐色砂質土などで、よく締まった埋土である。遺構の重複関係からSH203より古いが、SH201との重複関係は不明である。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

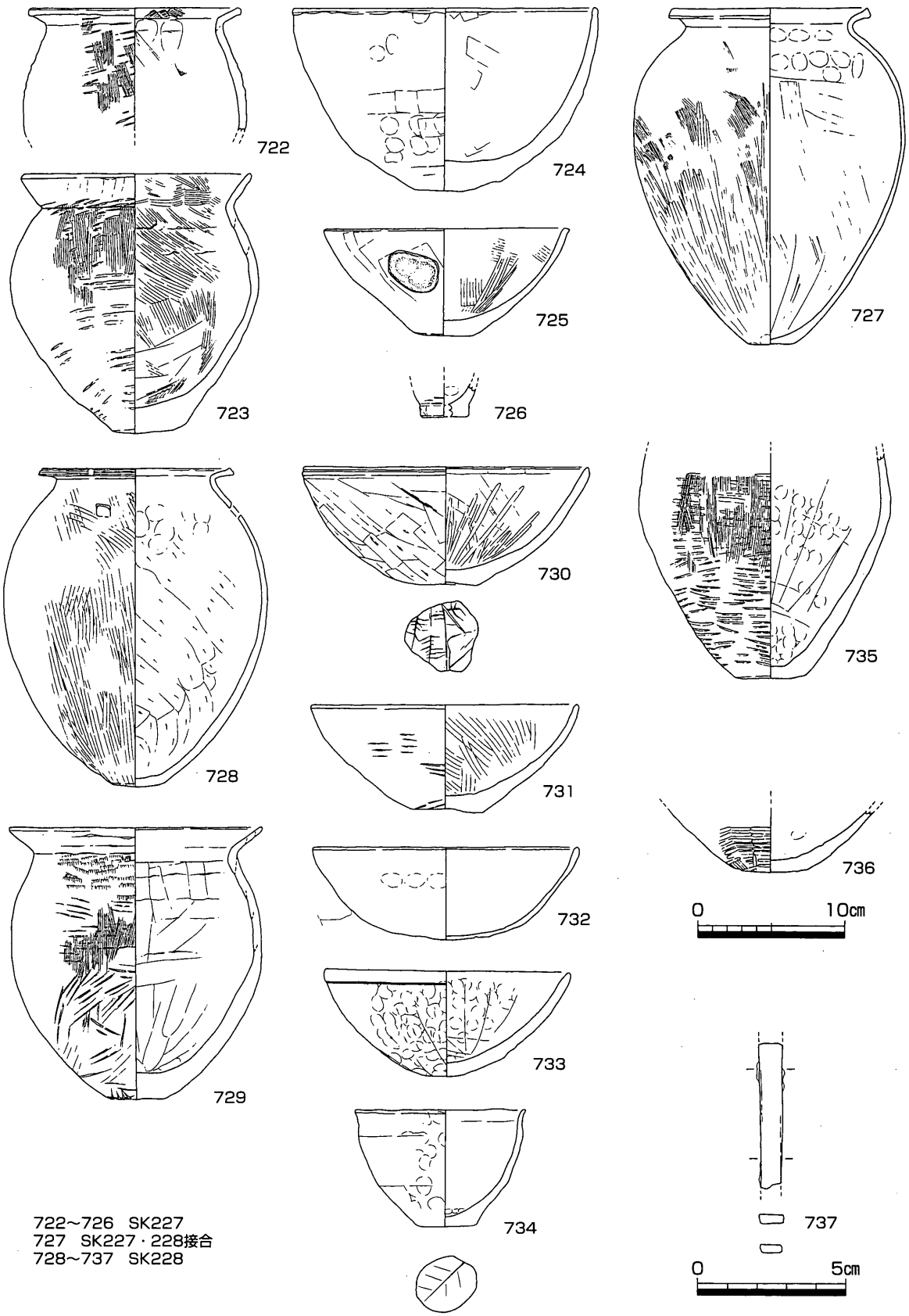
719は甕小片。720・721は底部。遺構の時期は弥生時代後期か。

SK222（第96図）

Ⅱ区やや北寄りで検出した土坑である。遺構の重複関係によりSB201より古い。円形で直径0.87m、深さ54cm、断面形状は逆台形である。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

SK223（第97図）

Ⅱ区北東端付近でSK209・210に近接して検出した土坑である。円形で直径0.86m、深さ32cm、断面形状はほぼボウル型で埋土は明褐色砂・明褐灰色砂である。埋土中からは弥生土器小破片が出土しただけである。



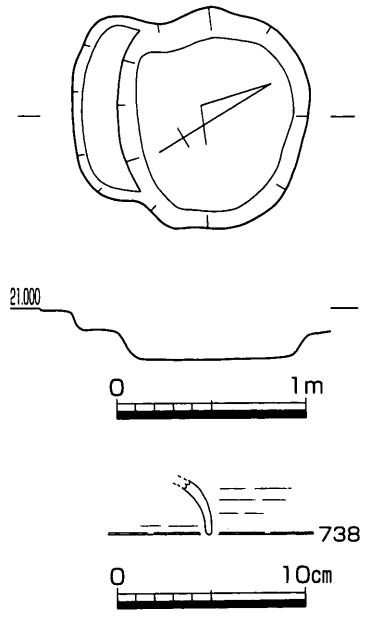
722～726　SK227
727　SK227・228接合
728～737　SK228

第100図　SK227・228出土遺物（1/4・1/2）

SK227（第98・100図、図版25・50・51）

Ⅱ区北東部で検出した円形の土坑である。直径1.35m、深さ52.5cm、断面形状は逆台形で埋土は暗褐灰色粗砂混砂質土・暗褐色砂質土・黒灰褐色砂混粘質土・暗褐灰色砂質土などである。遺構の重複関係によりSH202より新しく、SB201・SK208より古い。埋土中位よりやや下部、黒灰褐色砂混粘質土の上面からは破片の大きい弥生土器が出土した。

722・723は甕。いずれも外面にはタタキのちハケメ、内面にはハケメを残す。724・725は鉢。ともに椀型の器形。724はやや大型。725には焼成中に破裂した可能性のある剥離の痕跡が認められた。726は底部小片。727は甕。外面はハケメの後に下半部に縦方向のヘラミガキを施し、内面は下半部をヘラ削り、上半部には明瞭な指押さえ痕跡を残す。形態や土器の色調が東阿波型に類似し、結晶片岩は見つからなかったが東阿波型土器の可能性がある。これはSK228出土の破片と接合した。



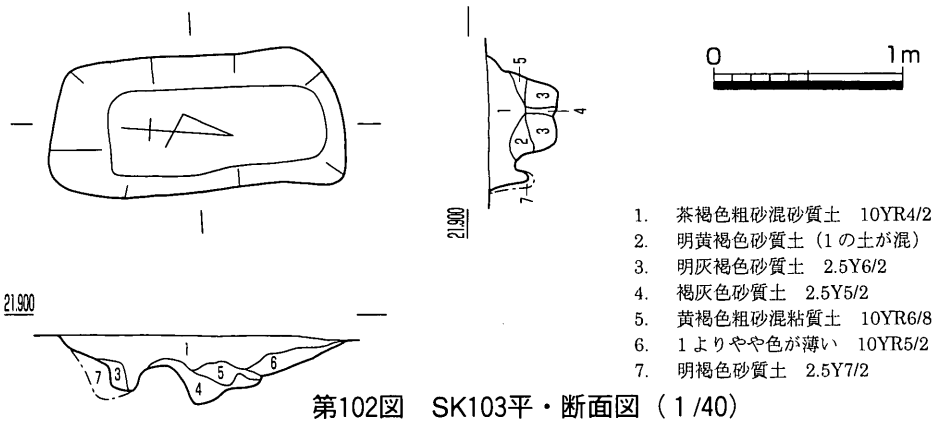
第101図　SK102平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

遺構の時期は出土遺物からは弥生時代終末期と考えられるが、ゴミ捨て穴として利用されたことを考えれば、SB201を掘り下げた際に出土したSH202に由来する土器を埋めるために作られた可能性も考えられよう。

SK228（第99・100図、図版25・50・51）

Ⅱ区北東部、SK227の約2m東側で検出した円形の土坑である。直径約1.5m、深さ約80cm、断面形状は逆台形を呈する。遺構の重複関係によりSH202より新しい。埋土は暗灰褐色粗砂混砂質土・暗灰褐色砂質土・暗褐灰色砂質土などである。埋土の中位から弥生土器の大きめの破片が多く出土した。遺構の規模・形状・埋土ともにSK227に類似し、両者は接合関係にもあることから、同時期に同様の機能を果たした遺構と考えられる。

728・729は甕。728は外面をハケメ、内面はヘラ削りし、上部に指押さえ痕を顕著に残す。体部上部に焼成後に施された穿孔が1ヶ所認められる。胎土中に結晶片岩を含む東阿波型土器である。730～734は鉢。730～733は椀型、730は口縁端部に緩い沈線を巡らせ、外面はヘラ削り、内面はヘラミガキする。733は外面に指押さえ痕とクラックを残す。734はやや深めの器形で口縁端部を外反させる。730・734の底部には木の葉の圧痕が残る。735・736は甕体部から底部。737は鉄器。ヤリガンナか。



第102図　SK103平・断面図（1/40）

SK102（第101図）

Ⅰ区北部で検出した土坑である。不整円形で南西側にやや張り出したような形状である。おおむね円形で、直径1.2m、深さ25cmである。埋土中からは須恵器杯蓋小片が出土した。

738は須恵器杯蓋小片。古墳時代後期。

SK103（第102図）

Ⅰ区やや南寄りで検出した長方形に近い土坑である。長辺155cm、短辺90cm、深さはもっとも深い場所で36cmであるが、底部は凹凸を持つ。埋土中からは弥生土器小破片、須恵器甕小破片が出土したが、図化できるような遺物はなかった。遺構の時期は出土した須恵器甕片により古墳時代後期頃としておく。

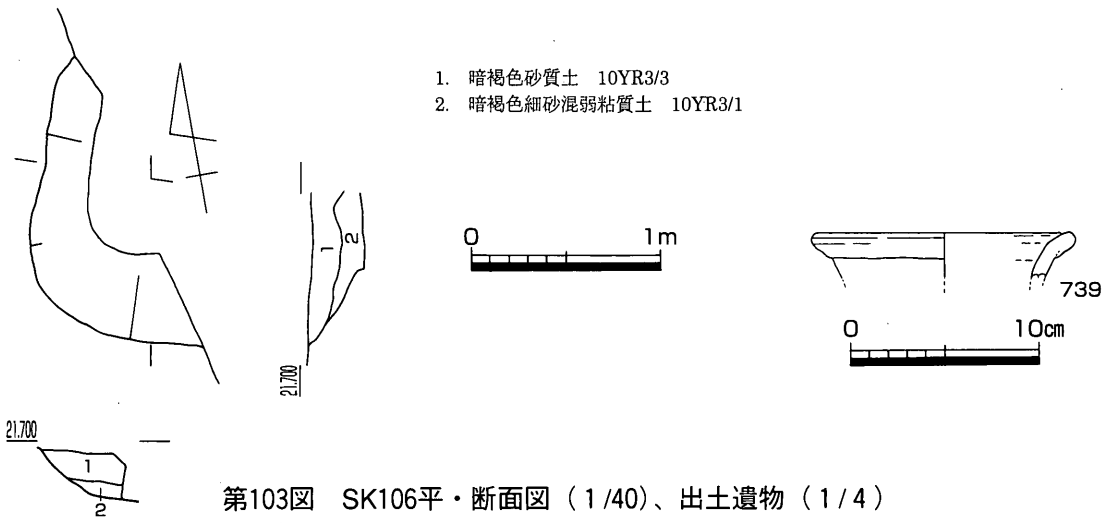
SK106（第103図）

Ⅰ区やや南寄り東端部で検出した。遺構内に壁溝などが認められず、北西側のコーナーがわずかに見えることを考え合わせ、竪穴住居とはせず長方形の土坑とした。調査区外へ延びるため全体の規模は不明であるが、残っていると考えられる1辺は約80cm、深さ28cm、断面形状は逆台形と考えられ、埋土は上層・暗褐色砂質土、下層・暗褐色細砂混弱粘質土である。埋土中からは須恵器小片が出土した。

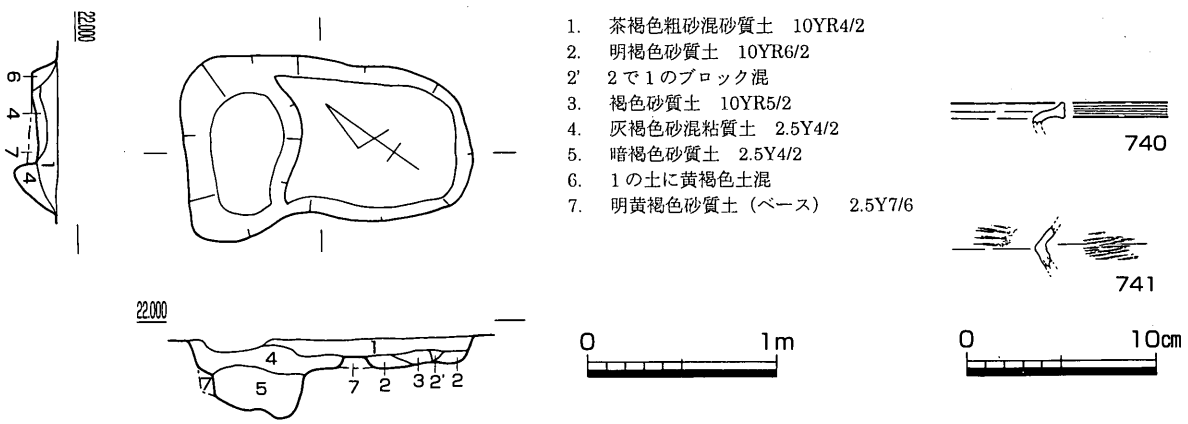
739は須恵器壺口縁部。口縁端部は外側へ肥厚させる。7世紀前半～中頃。

SK107（第104図）

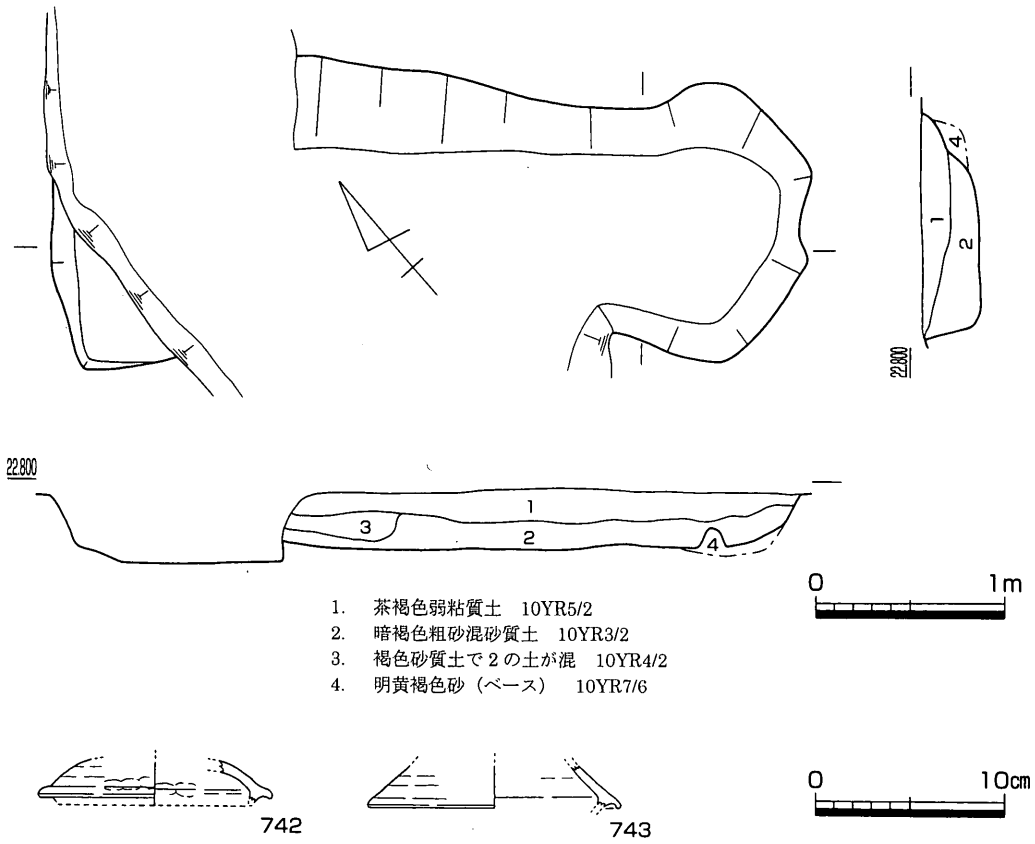
Ⅰ区南寄りで検出した土坑である。長方形で長辺1.54m、短辺0.84m、断面形状は北西側が深い2段状になっており、その他の部分でもやや凹凸がある。深さは深い部分で45cm、浅い部分で15cmである。埋



第103図 SK106平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第104図 SK107平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第105図　SK206平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

土中からは弥生土器・須恵器小片が出土した。

740・741は弥生土器甕。740は口縁端部に沈線を持ち、胎土中に角閃石を含む。下川津B類土器。

遺構の時期は須恵器小片が出土したことから古墳時代中期以降としておく。

SK206（第105図、図版26）

Ⅱ区北東部で検出した土坑である。SK225とほぼ列を揃える。北西部は一部後世の撹乱により消失しているが、おおむね長方形を呈し、南東側はやや膨れて丸みを帯びたような形状になる。長辺4.0m、短辺1.2m、深さ25cmで断面形状は逆台形を呈する。埋土は上層が茶褐色弱粘質土、下層が暗褐色粗砂混砂質土であった。遺構の重複関係によりSH202より新しい。埋土中からは弥生土器・須恵器小破片が出土した。

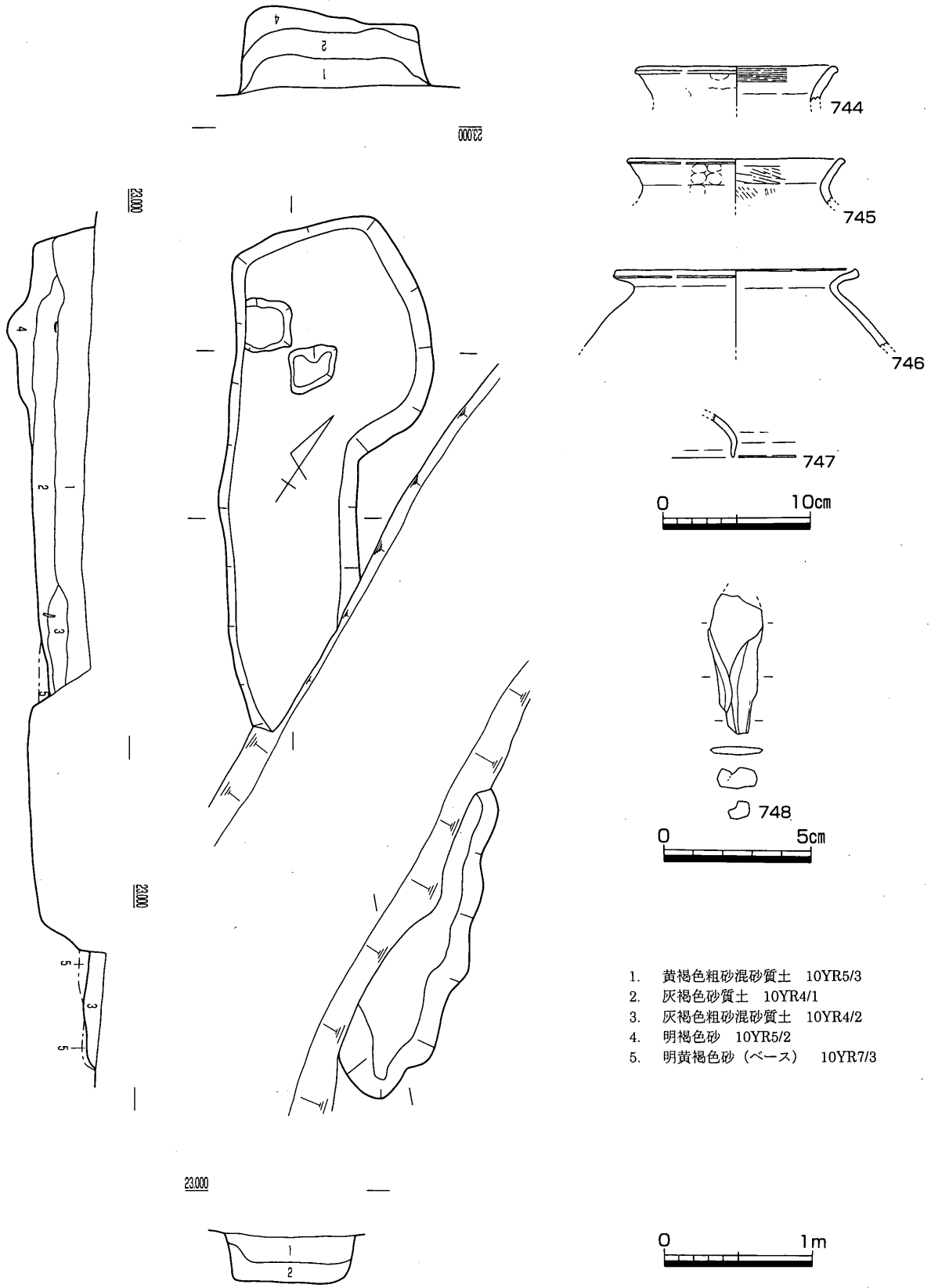
742・743は須恵器杯蓋小破片。わずかに返りを持つ。7世紀中～後半頃。

SK225（第106図）

SK206の南西側で検出した土坑である。SK206と方位がほぼ揃う。形状は長方形に北西端に長方形の張り出しを持ち、南東端は不整形を呈する。北西側の張り出した部分での遺構の切り合い関係は認められない。長軸は5.6m、短軸0.9～1.3m、深さ約30cmで埋土はおおむね黄褐色粗砂混砂質土、灰褐色砂質土を呈する。埋土中からは弥生土器・須恵器小片が出土した。

744～746は甕。746は結晶片岩は認められないが、形状などから東阿波型土器の可能性がある。747は須恵器杯蓋小片。748は鉄鏃。未製品。茎部と身の境を折り曲げて身を作り出す。

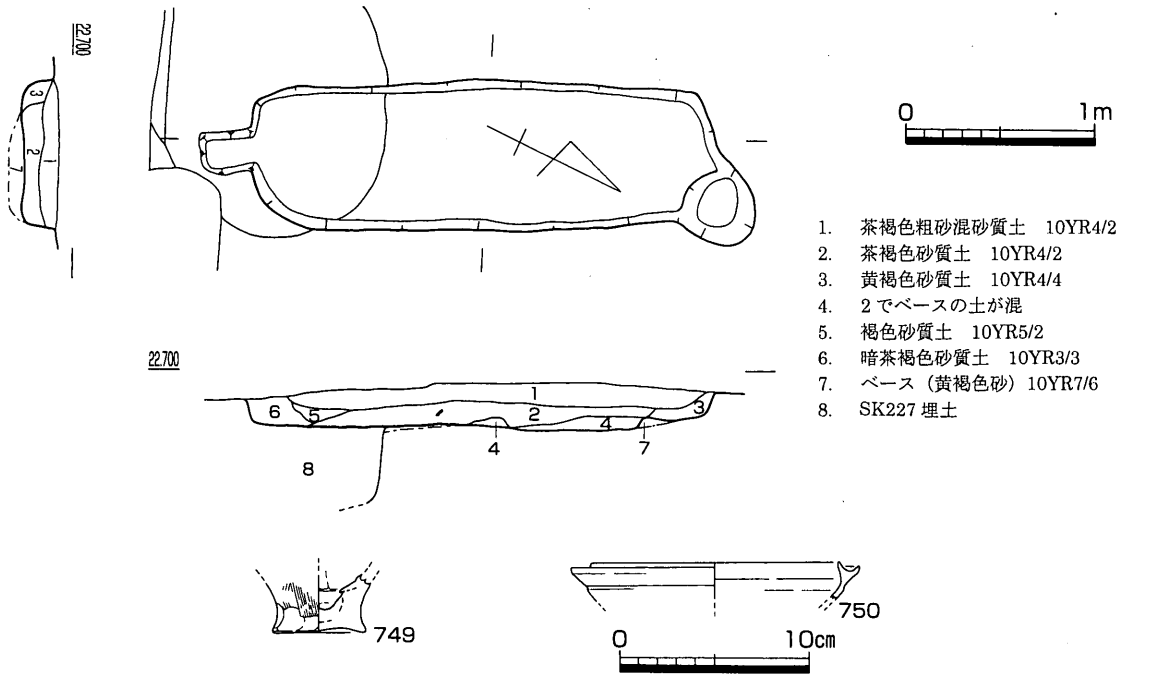
遺構の時期は746の時期とSK206との関係から7世紀中頃と考えられ、残りの遺物は周囲からの紛れ込みと思われる。



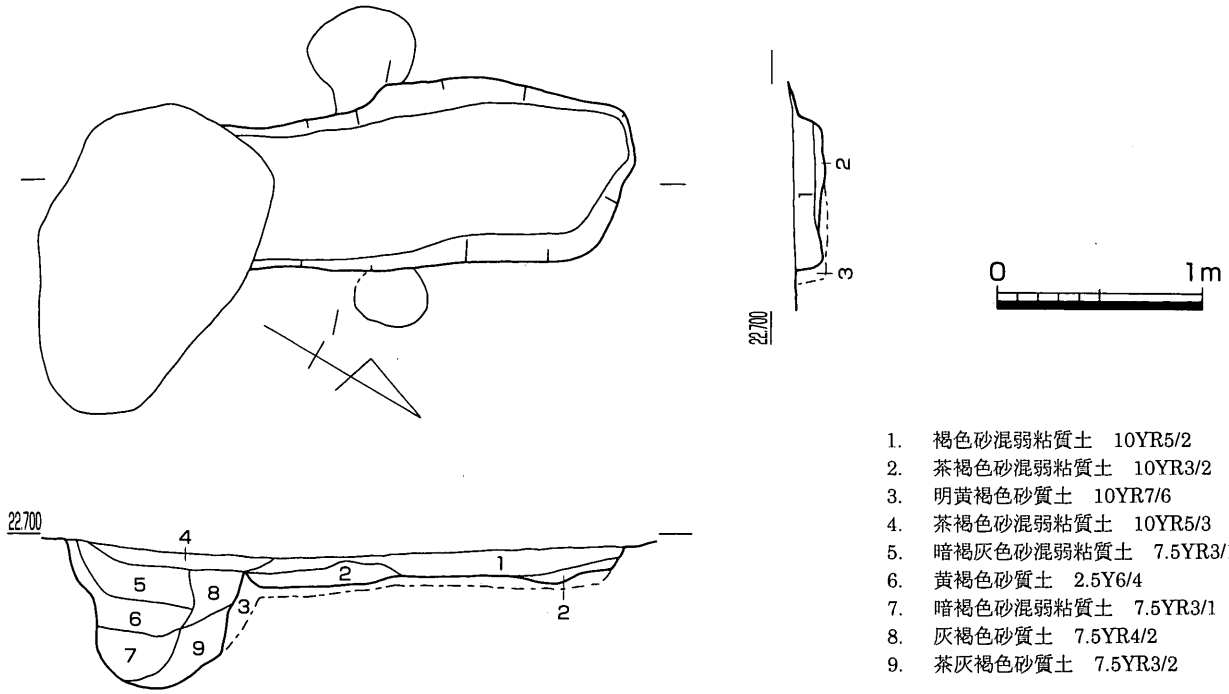
第106図　SK225平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

SK208（第107図）

Ⅱ区北東部で検出した長方形の土坑である。遺構の重複関係によりSH202・SK227より新しい。南東



第107図　SK208平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第108図　SK212平・断面図（1/40）

側で検出したSK212と規模・形状・方位がほぼ同じである。長辺2.4m、短辺0.8m、深さ25cm、断面形状は逆台形で、埋土は茶褐色粗砂混砂質土・茶褐色砂質土などである。埋土中からは弥生土器・須恵器小片が出土した。

749は弥生土器底部。体部下端部付近に指押さえ痕を顕著に残す。750は須恵器杯身。口縁端部の返りは退化する。7世紀前半頃。

SK212（第108図）

SK208の1.3m南西側で検出した長方形の土坑である。遺構の重複関係からはSB201よりも古い。長辺

1.9m、短辺0.88m、深さ13cm、断面形状は逆台形で、埋土はおおおむね褐色粗砂混粘質土、茶褐色粗砂混粘質土である。埋土中からは弥生土器・須恵器小片が出土した。

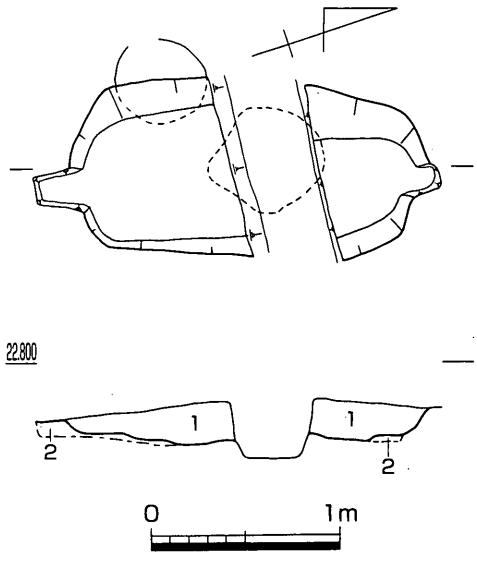
遺構の時期はSK208と同じ7世紀前半頃としておく。

SK211（第109図）

Ⅱ区北部、SH201の上面で検出した土坑である。隅丸長方形で長軸1.9m、短軸0.9m、深さ20cmで、段面形状は逆台形、埋土は灰褐色粗砂混砂質土である。出土遺物はなく、SH201より新しいということ以外は不明である。

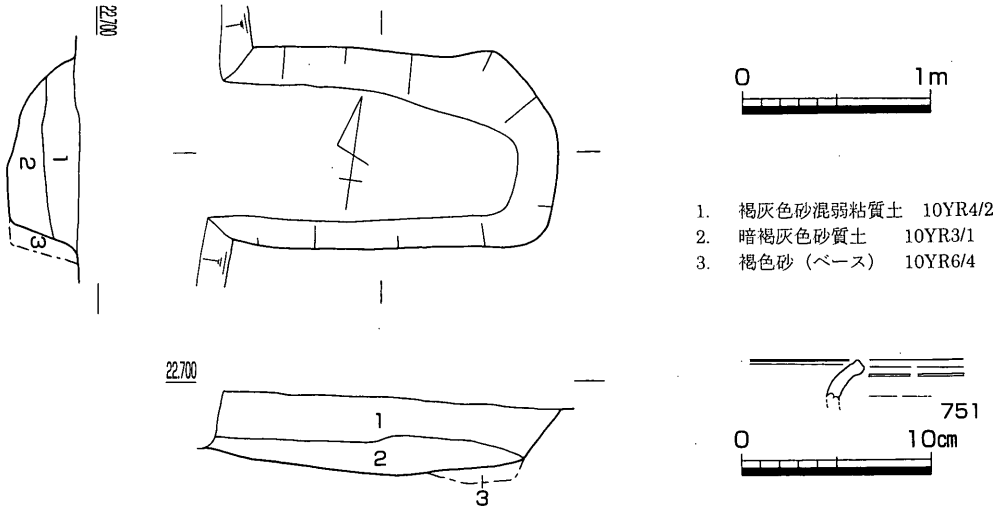
SK217（第110図）

Ⅱ区北西端部、Ⅰ区との境付近で検出した土坑である。西側は調査区外へ延びるため、全体の規模・形状は不明であるが、長方形を呈すると考えられ、長辺1.8m以上、短辺1.05m、深さ40cm、断面形状は逆台形を呈し、埋土は褐灰色砂混弱粘質土・暗褐灰色砂質土である。埋土中からは弥生土器・須恵



1. 灰褐色粗砂混砂質土　2.5Y5/2（SK211）
2. 暗褐色砂質土　10YR3/2（SH201）

第109図　SK211平・断面図（1/40）



1. 褐灰色砂混弱粘質土　10YR4/2
2. 暗褐灰色砂質土　10YR3/1
3. 褐色砂（ベース）　10YR6/4

第110図　SK217平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

器小片が出土した。

751は須恵器甕口縁部小片。端部を外側へ若干肥厚させる。

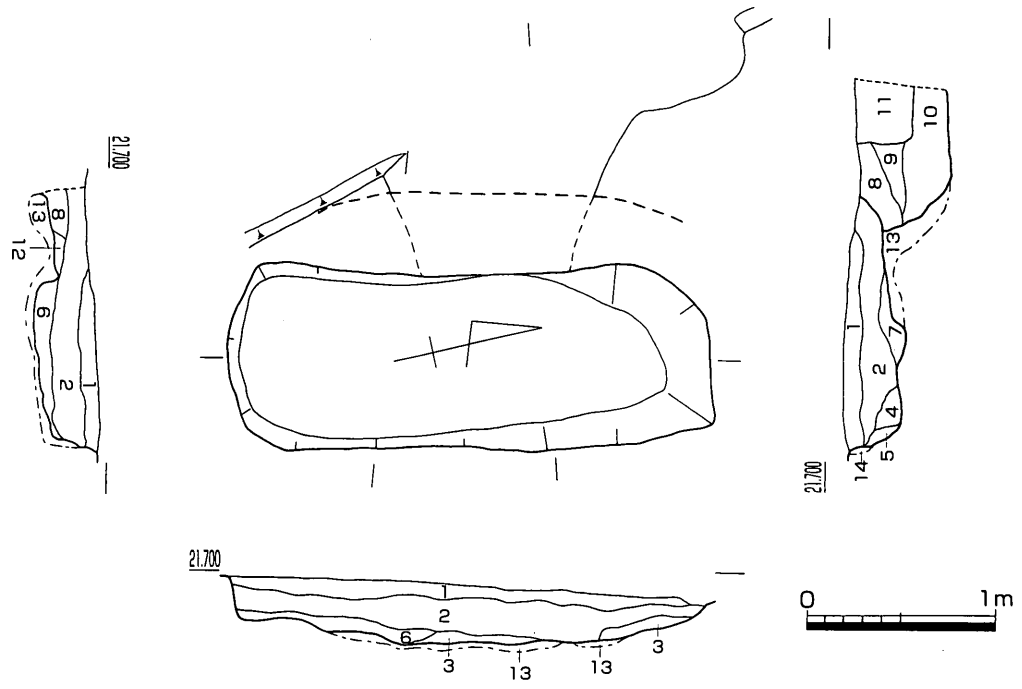
SK104（第111・113図、図版27）

Ⅰ区中央付近で検出した土坑である。SK105の西側約1.3mに位置し、主軸方位もほぼ同じである。検出した範囲では長方形で長辺2.56m、短辺0.90m、深さ35cmで断面形状は逆台形であるが、北側の東西土層断面の断面観察により短辺側は1.35mを測ると考えられる。埋土は上層・褐色粗砂質土、中層・暗灰褐色粗砂混弱粘質土、下層・灰褐色粗砂質土である。SK104はSH111を切っているが、南側の東西土層断面によれば、SK104の上層・中層は本来の遺構の肩を超えてSH111の上面まで覆っているようである。断面に明確な木棺痕跡等は確認できなかったが、遺構の形状や周辺の状況から土坑墓の可能性が考えられる。

752～754は壺。752は頸部。753は口縁部小片。広口壺の口縁部と考えられる。754は体部小片。貼付

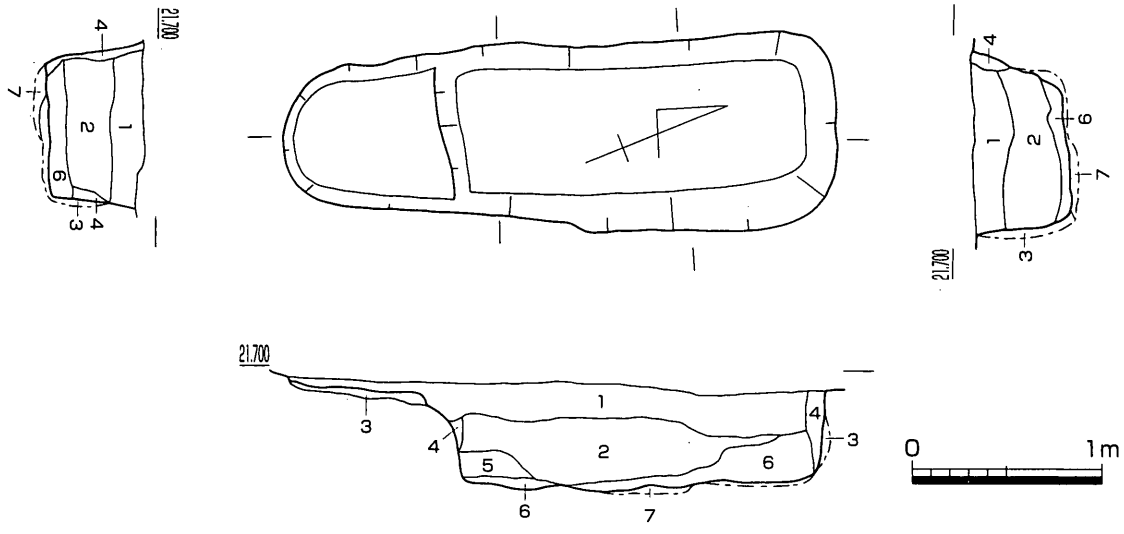
突帯を巡らせ、その上･下部にヘラ描きの鋸歯文を描く。755は高杯。体部内面には放射状のヘラミガキがある。756は脚付鉢。757は鉢底部。底部と体部の境に剥離痕が見られ、円盤状の粘土を底部とした様子がよくわかる。758は底部。759は石鏃。有茎式。サヌカイト製。

出土遺物はすべて弥生土器だが、土坑の規模・形状・配置から７世紀代頃としておく。弥生土器はSH111や上面の包含層からの混入であろう。



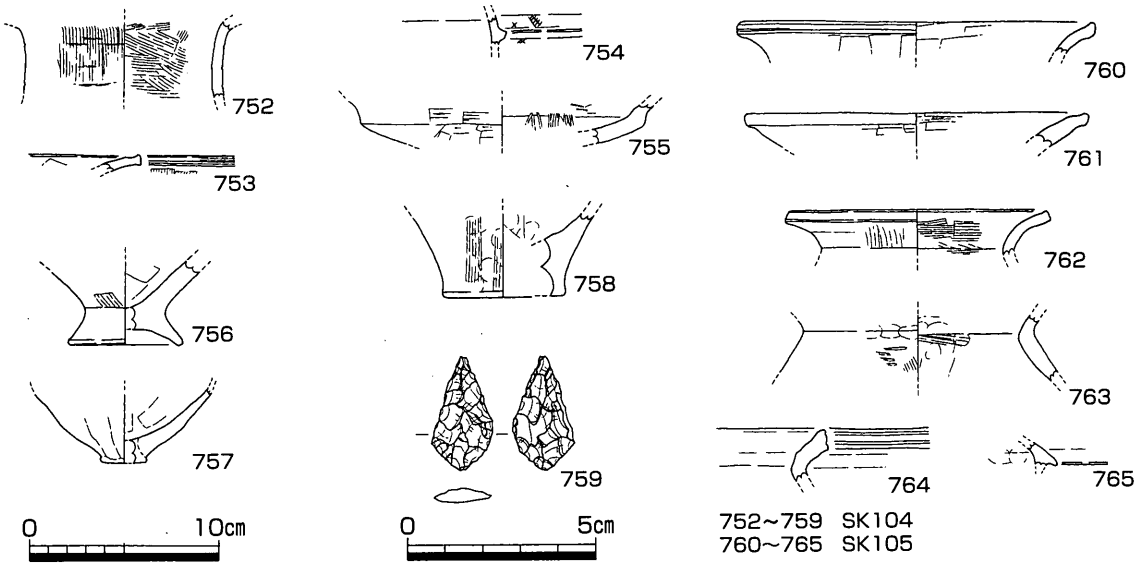
1. 褐色粗砂質土　10YR4/2
2. 暗灰褐色粗砂混弱粘質土　2.5Y3/1
3. 灰褐色砂質土（黄色土混）　2.5Y5/1
4. 灰褐色砂混粘質土　10YR4/1
5. 明褐色砂質土　10YR6/2
6. 褐色粗砂質土　10YR4/2
7. 暗灰褐色砂質土　10YR4/1
8. 茶褐色砂質土　10YR4/4
9. 茶褐色砂質土（9よりやや暗い）　10YR4/2
10. 暗灰褐色粗砂混弱粘質土　10YR3/3
11. 暗褐色粗砂質土　10YR3/1
12. 8で黄色土が多く混
13. 明黄褐色砂（ベース）　10YR8/6
14. 黄褐色砂質土（ベース）　10YR6/8

第111図　SK104平・断面図（１/40）

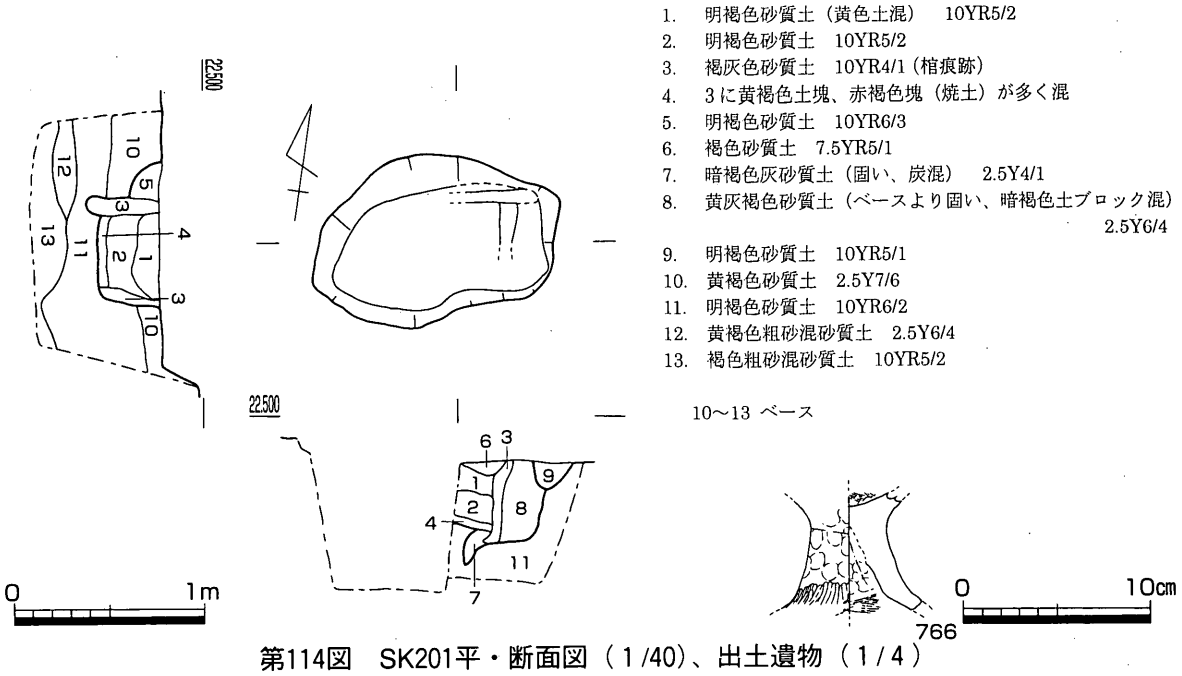


1. 茶褐色粗砂質土　10YR4/3
2. 茶褐色砂質土　10YR3/3
3. 黄褐色粗砂質土（ベース）　10YR7/8
4. 茶褐色砂質土でベースの土が少し混　10YR4/3
5. 暗褐色砂質土　10YR3/1
6. 灰褐色砂混弱粘質土　2.5Y5/1
7. 明黄褐色砂（ベース）　10YR8/8

第112図　SK105平・断面図（１/40）



第113図　SK104・105出土遺物（1/4・1/2）



第114図　SK201平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

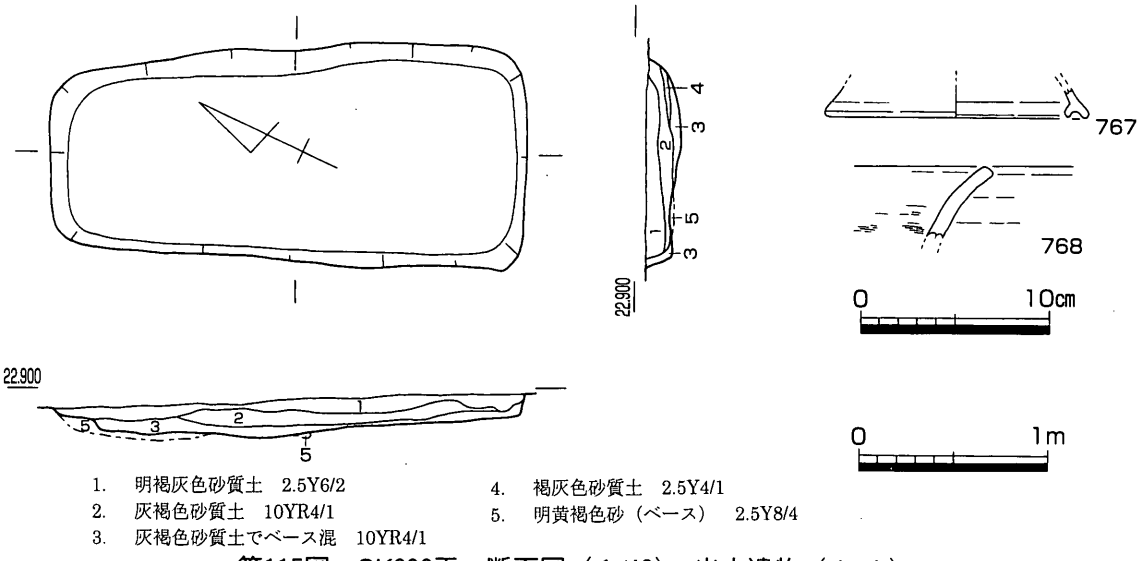
SK105（第112・113図、図版27）

Ⅰ区中央部付近で検出した土坑である。SK104の東側約1.3mに位置し、主軸方位もほぼ同じである。長方形で、長辺292cm、短辺は北東寄りで105cm、南西寄りで75cm、深さは50cm であるが、南西側約1/3では急激に浅くなり、5cm となる。断面形状は逆台形で、埋土はおおむね茶褐色砂質土・粗砂質土で、最底部で灰褐色砂混弱粘質土、肩付近では黄褐色砂質土でベースブロックを含む。埋土中からは弥生土器・須恵器の小片が出土した。断面に明確な木棺痕跡等は確認できなかったが、土坑墓の可能性がある。南西部の浅い部分及び肩付近のベースブロックを含む埋土は遺構の肩が崩れた結果と考えられる。

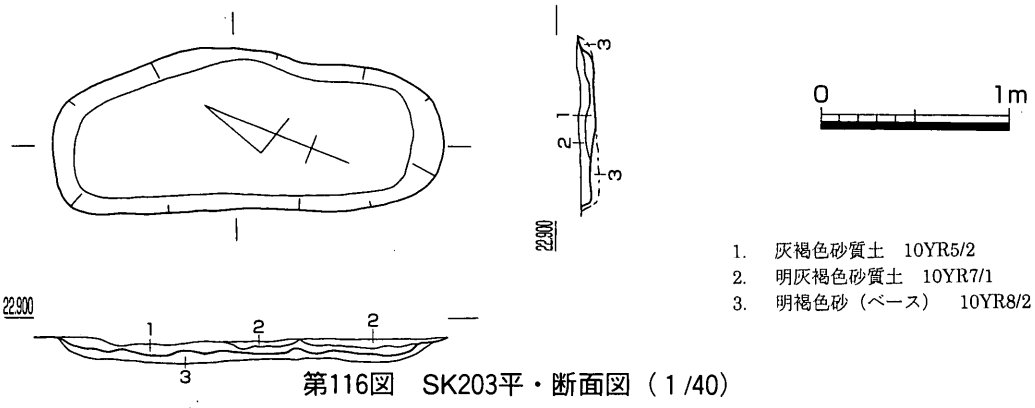
760～764は弥生土器。760・761は壺。762～764は甕。765は須恵器蓋。退化した返りが付く。外面に自然釉が付着する。遺構の時期は7世紀後半頃と考えられる。

SK201（第114図、図版26）

Ⅱ区北部で検出した土坑である。SH201の上面から切り込まれた遺構である。楕円形に近い形状で、



第115図　SK202平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第116図　SK203平・断面図（1/40）

長軸1.28m、短軸0.85m、深さ32cm、断面形状は逆台形である。断面観察により木棺痕跡と考えられる褐灰色砂質土層が土坑の両側と底部に認められた。埋土中からは弥生土器片が出土しているが、いずれもSH201からの混入と思われる。

766は弥生土器高杯。脚部に穿孔が1ヶ所残る。SH201からの混入。遺構の時期は不明。

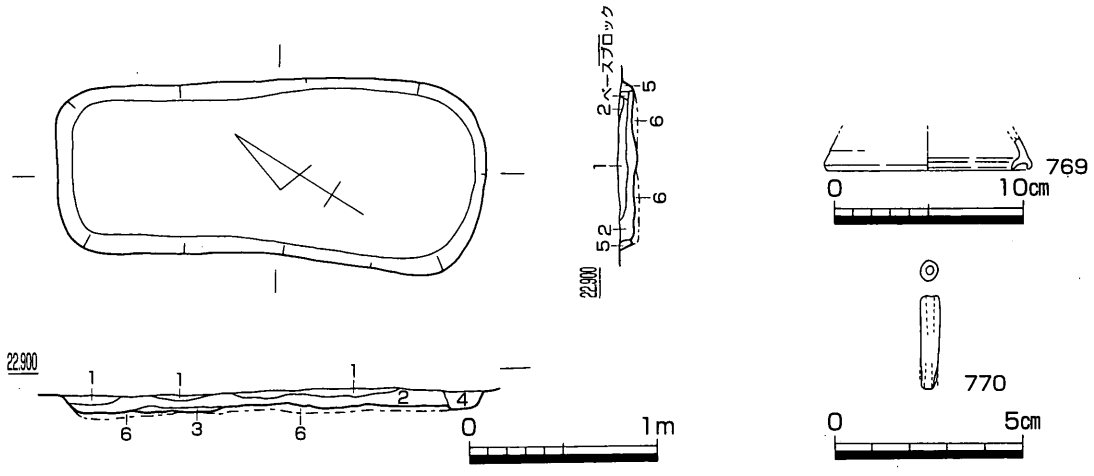
SK202（第115図、図版27）

Ⅱ区中央付近で検出した土坑である。SK203･SK204と列を揃えて検出した。長方形で長辺2.5m、短辺1.1m、深さ17cm、断面形状は逆台形で、埋土は灰褐色砂質土･明褐灰色砂質土などである。木棺痕跡等は認められなかったが、規模・形状や配置から土坑墓の可能性が高いと考えられる。埋土の水洗選別を行ったが、埋土中からは弥生土器・須恵器の小片が出土しただけであった。

767は須恵器蓋。返りの退化が著しい。768は弥生土器甕口縁部。頸部が斜め上方へ立ち上がる広口壺になる。遺構の時期は767により7世紀後半頃と考えられる。

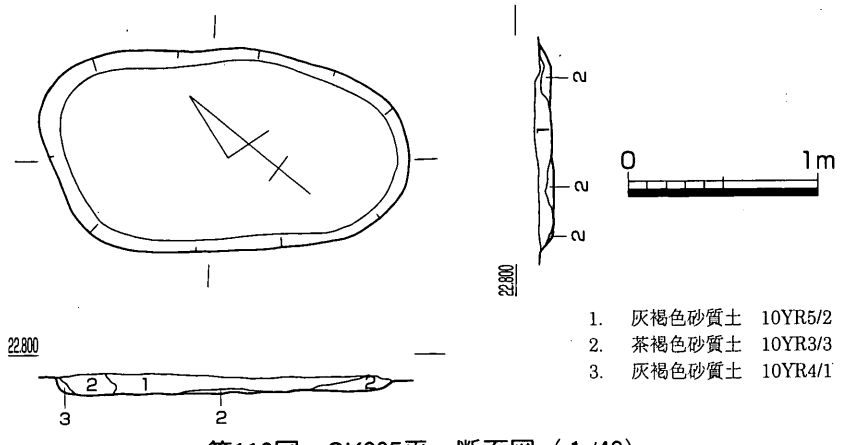
SK203（第116図）

Ⅱ区中央付近で検出した土坑である。SK202･SK204と列を揃えて検出した。隅丸長方形で、長軸2.0m、短軸0.8m、深さ8cm、断面形状は浅い皿状で、埋土は灰褐色砂質土・明灰褐色砂質土である。木棺痕跡等は確認できなかったが、規模･形状や配置から土坑墓の可能性が高いと考えられ、遺構の時期もSK202と同じと考えられる。埋土の水洗選別を行ったが、埋土中からは弥生土器・須恵器の小破片が出土しただけであった。



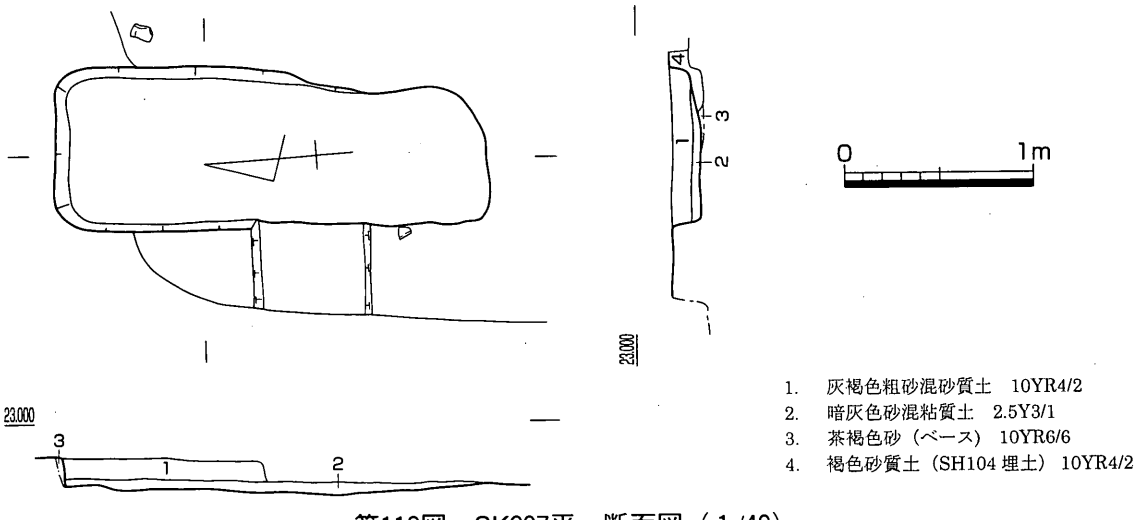
1. 明灰褐色砂質土　10YR7/1
2. 灰褐色砂質土　10YR5/2
3. 明褐色砂質土　10YR6/2
4. 茶褐色砂質土　10YR4/3
5. 2でベース混
6. 明褐色砂（ベース）　10YR8/2

第117図　SK204平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）



1. 灰褐色砂質土　10YR5/2
2. 茶褐色砂質土　10YR3/3
3. 灰褐色砂質土　10YR4/1

第118図　SK205平・断面図（1/40）

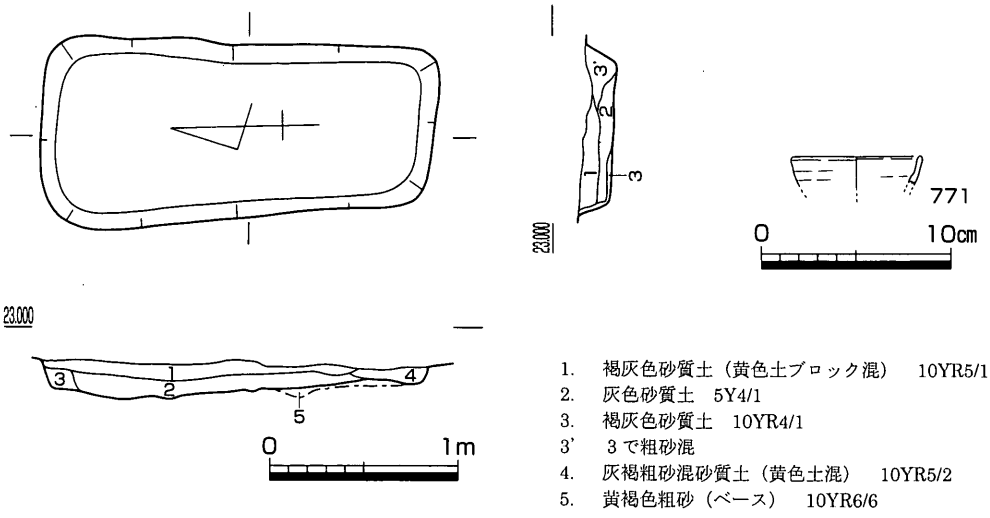


1. 灰褐色粗砂混砂質土　10YR4/2
2. 暗灰色砂混粘質土　2.5Y3/1
3. 茶褐色砂（ベース）　10YR6/6
4. 褐色砂質土（SH104埋土）　10YR4/2

第119図　SK207平・断面図（1/40）

SK204（第117図）

Ⅱ区中央部付近で検出した土坑である。SK202･SK203と列を揃えて検出した。長方形で長辺2.2m、短辺0.9m、深さ11cm、断面形状は逆台形である。埋土は明灰褐色砂質土・灰褐色砂質土などである。木棺痕跡等は確認できなかったが、土坑の規模・形状と配置から土坑墓の可能性が高いと考えられる。埋土



第120図　SK218平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

中からは弥生土器・須恵器小片のほか管玉が出土した。埋土の水洗選別を行ったが、その他のものは出土しなかった。

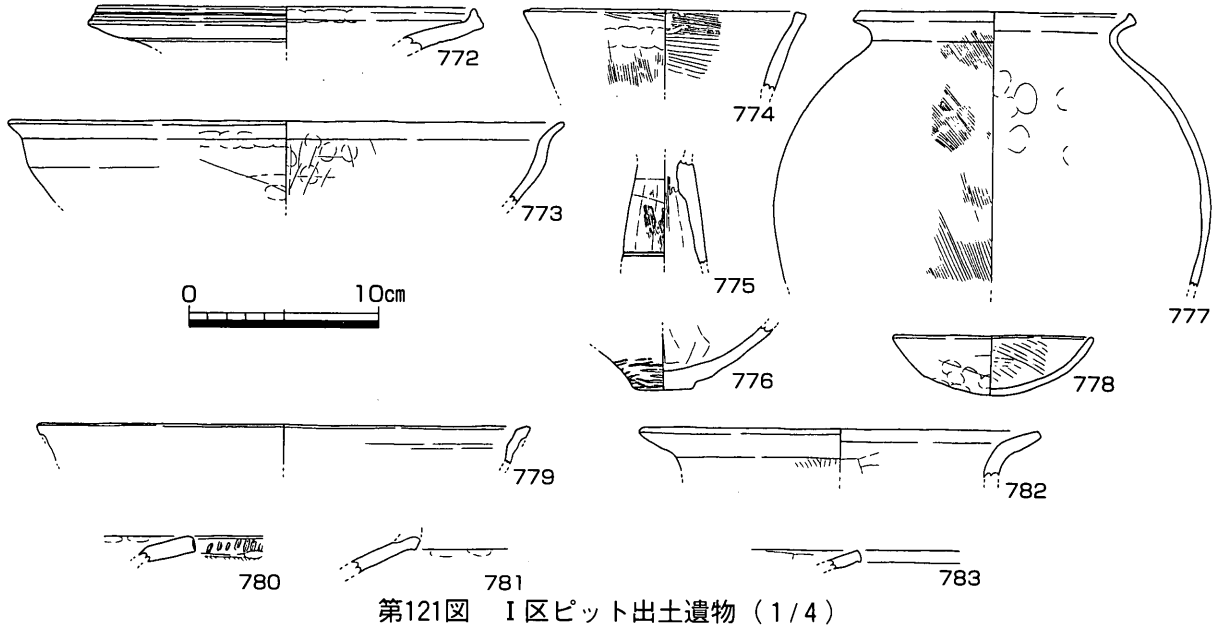
769は須恵器杯蓋小片。返りの退化が著しい。770は管玉。上部・下部とも欠損。碧玉製。土坑の時期は遺物から7世紀後半頃と考えられる。

SK205（第118図）

Ⅱ区南部で検出した土坑である。SK202の南東側に列を揃えて検出した。長楕円形で長軸2.0m、短軸1.0m、深さ10cm で、断面形状は浅い皿状、埋土は灰褐色・茶褐色砂質土である。木棺痕跡等は確認できなかったが、土坑の規模・形状や配置から土坑墓の可能性が高いと考えられる。埋土の水洗選別を行ったが、弥生土器・須恵器小破片しか出土しなかった。

SK207（第119図、図版27）

Ⅱ区南部で検出した土坑である。SH204の上面から切り込み、SK218と列を揃える。長方形で長辺2.3m、短辺0.86m、深さ15cm、断面形状は逆台形で、埋土は上層が灰褐色粗砂混砂質土、下層は暗灰色砂混粘質土である。木棺痕跡等は確認できなかったが、規模・形状や配置から土坑墓の可能性が高いと



第121図　Ⅰ区ピット出土遺物（1/4）

第122図　Ⅱ区ピット出土遺物（1/4）

考えられる。

SK218（第120図）

Ⅱ区南部で検出した土坑である。SK207と列を揃えて検出した。長方形で長辺2.1m、短辺0.8m、深さ20cm、断面形状は逆台形で、埋土は褐灰色・灰色砂質土などである。規模・形状・配置より土坑墓の可能性が高いと考えられる。

771は須恵器杯小片。口径は不確か。7世紀代頃。

（5）ピット

Ⅰ区ピット（第121図、図版51）

Ⅰ区のピットはSH103の北側で散在して、また南部ではSH108・109付近でやや集中して検出した。この中で掘立柱建物を構成したのは北側のもので、南側の柱穴は掘立柱建物を復元することはできなかった。ピット内の出土遺物は図化したもの以外は大半が弥生土器または土師器小片と思われるもので、ピットの時期を特定することはできなかった。

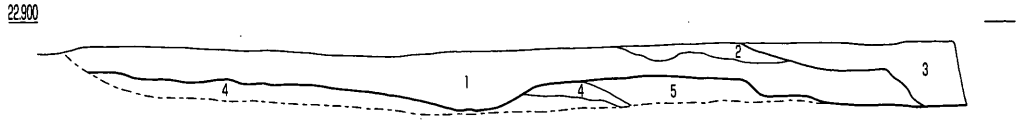
SP04・58は北部包含層の消失する付近、SH103の北側で検出したピットである。772はSP04から出土した。壺。広口壺。口縁端部をやや上方へ拡張し、端部に2条の緩い沈線を巡らせる。古墳時代初頭頃。774はSP58出土遺物。鉢。椀型の器形。弥生時代後期後半頃。その他のピットはSH107とSH102の間付近で検出したピットである。773はSP36出土遺物。弥生土器鉢。口縁端部をわずかに外反させる。775・776はSP65出土遺物。775は高杯脚部。脚部下部に沈線を2条巡らせる。杯底部は剥離している。776は底部。777・778はSP67出土遺物。777は甕。東阿波型土器。778は鉢。小型で浅い。外面はほとんど調整痕がない。古墳時代初頭頃。779はSP69出土遺物。高杯杯部小片。外面が剥離し、剥離面に指押さえ痕が見られる。780はSP74出土遺物。壺口縁部。口縁端部に刻み目を持つ。781はSP81出土遺物。壺小片。口縁端部内側に幅1cmの剥離痕が残されており、二重口縁壺になる。782はSP97出土遺物。壺小片。783はSP103出土遺物。壺小片。

ピットからの出土遺物はおおむね弥生時代後期後半～古墳時代初頭と考えられ、竪穴住居の時期と一致するようである。

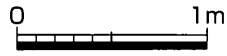
Ⅱ区ピット（第122図）

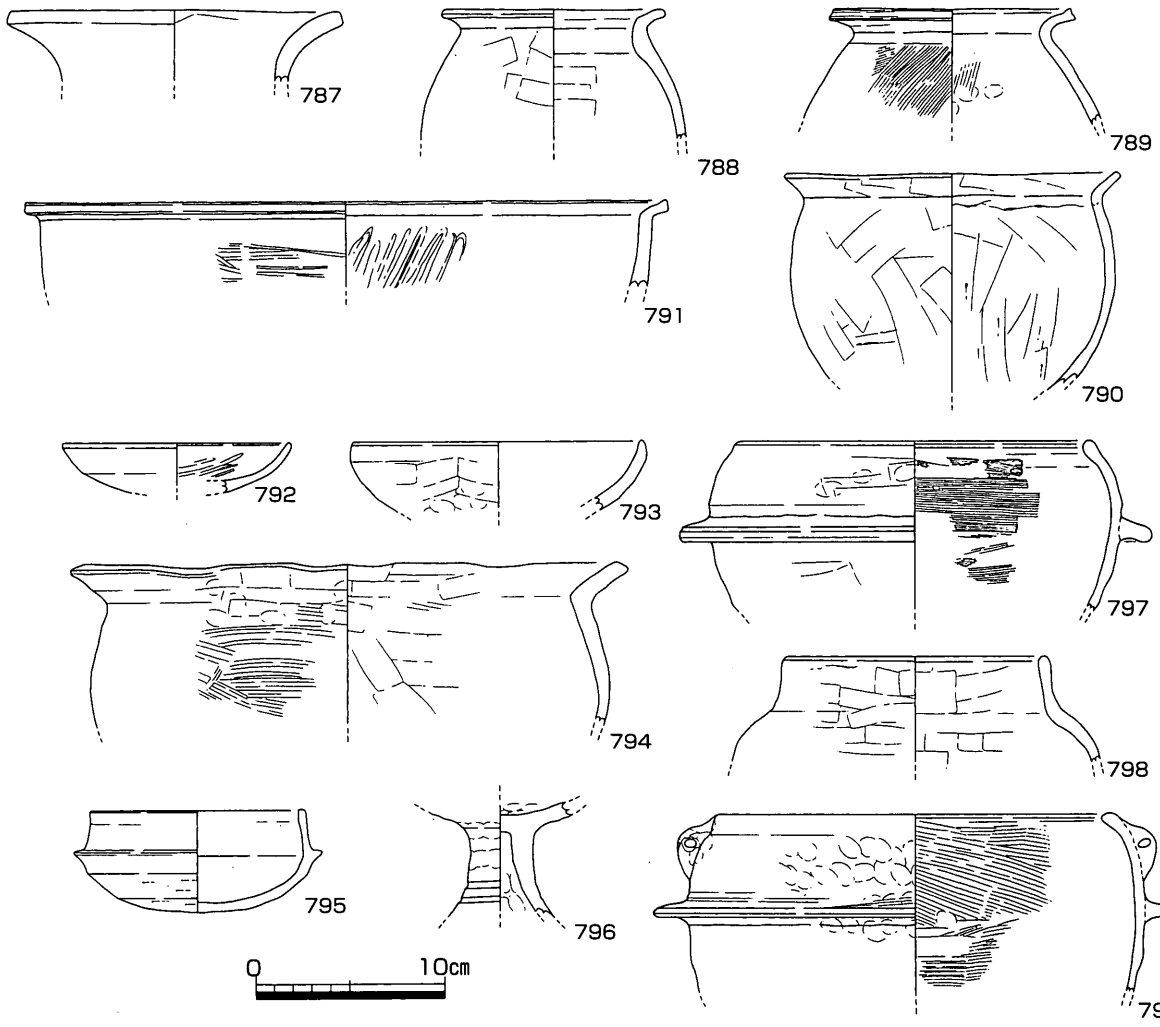
Ⅱ区のピットはおもにSH203の西側、SH204の北側で検出した。ここでは2棟の掘立柱建物を復元した。ピットから出土した土器は図化したもの以外は大半が弥生土器または土師器小破片で、時期のわかるものはほとんどない。

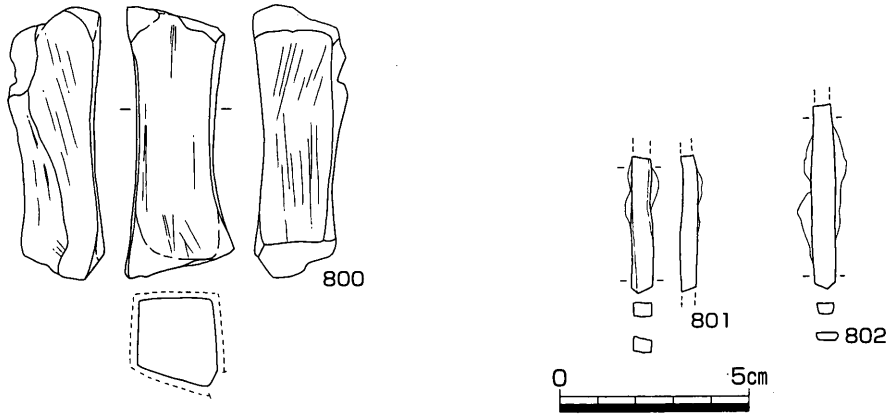
784はSB202・203に近接するピットSP41から出土した。須恵器杯蓋。口縁端部は欠損するがわずかに外反するようである。体部と頂部の境に鋭く突出した稜線を持つ。785はSB201の北側で検出したSP91から出土した。須恵器高杯。体部中程に緩い沈線を巡らせる。786はSH203とSB201に挟まれた位置で検出したSP120から出土した。弥生土器鉢。小型で椀型。外面にはクラックが残る。



1. 灰褐色砂質土　10YR5/3
2. 茶褐色砂質土　10YR4/2
3. 茶褐色砂質土（旧耕土）　10YR4/3
4. 黄灰褐色砂質土（ベース）　10YR7/4
5. 褐灰色砂質土（ベース）　10YR6/2







第123図　SX203断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

（6）落ち込み　包含層　その他

SX203（第123図、図版51）

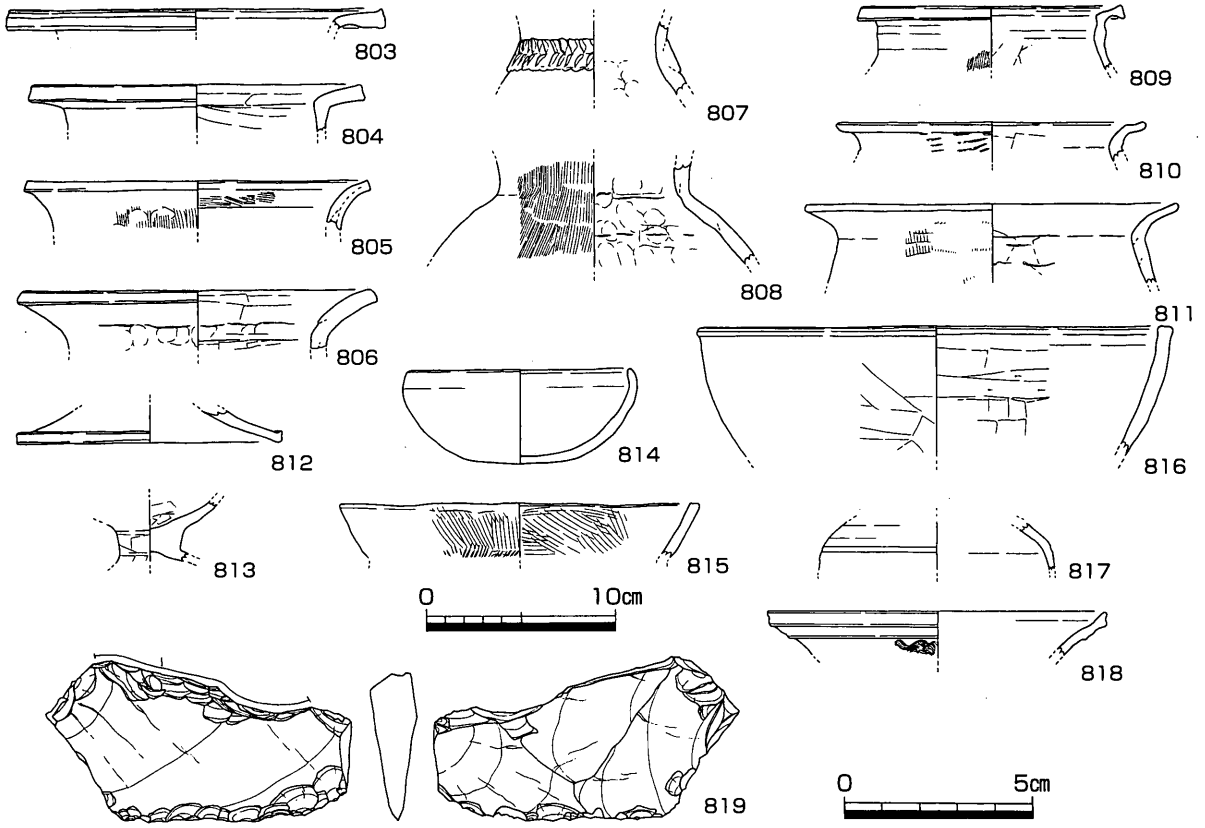
Ⅱ区南端付近で検出した落ち込みである。落ち込みの東肩は後世の地下げにより明らかではない。北西から南東へ緩やかに傾斜し、深さは30cm、埋土はおもに灰褐色砂質土である。古川が西へ向けて蛇行する地点に近く、古川の氾濫原に近付くと考えられ、自然地形による落ち込みであろう。埋土中からは弥生土器・須恵器・土師質土器などが出土した。比較的大きい破片が含まれており、近隣の遺構からの流入と思われ、近在に当該期の遺構があると思われる。

787～791は弥生土器。787は壺。広口壺の口縁部。788～790は甕。791は鉢。口縁端部を外反させるもの。792～794は土師器。792・793は杯。794は鉢。口縁端部を外反させる。795・796は須恵器。795は杯身。焼成状況が悪く、白色に近い色を呈し、生焼け状態である。底部外面には回転ヘラ削りを施す。口縁端部は四角くする。5世紀末頃。796は高杯脚部。内外面に自然釉が掛かる。脚部外面に2条の沈線が巡る。7世紀中頃。797～799は土師質土器。797は羽釜。内面はハケで調整し、下半部に退化した鍔が付く。798は内傾気味に直立する口縁部に丸い体部が残る。体部中程に鍔が付き、茶釜となる。799は797と同様の器形で、外耳が2ヶ所に取り付く。800は砥石。上・下部は折損。4面を使用している。中央部分が使用により磨り減っている。801と802は鉄製器。器種不明。

SX203からは弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃、5世紀末、7世紀中頃、江戸時代の遺物が出土した。遺構の形成は、江戸時代の遺物が出土することから江戸期以降と考えられるが、SH207以外では出土しない5世紀後半の須恵器が出土することから、近辺に他の当該期の遺構の存在が推測できる。

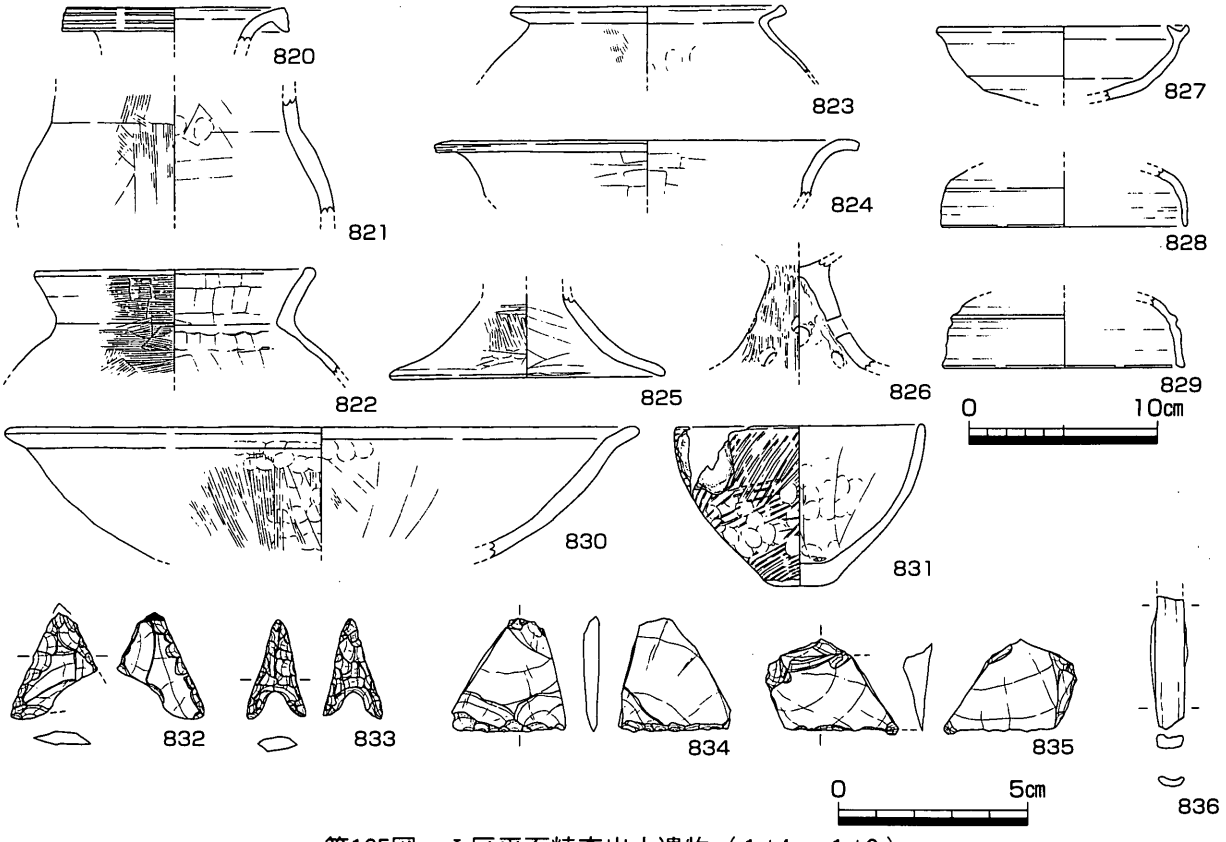
SH104～106南部掘り下げ（第124図）

SH104～106の南西部を、機械掘削を行った後に遺構検出のために上面掘削・精査をした際出土した遺

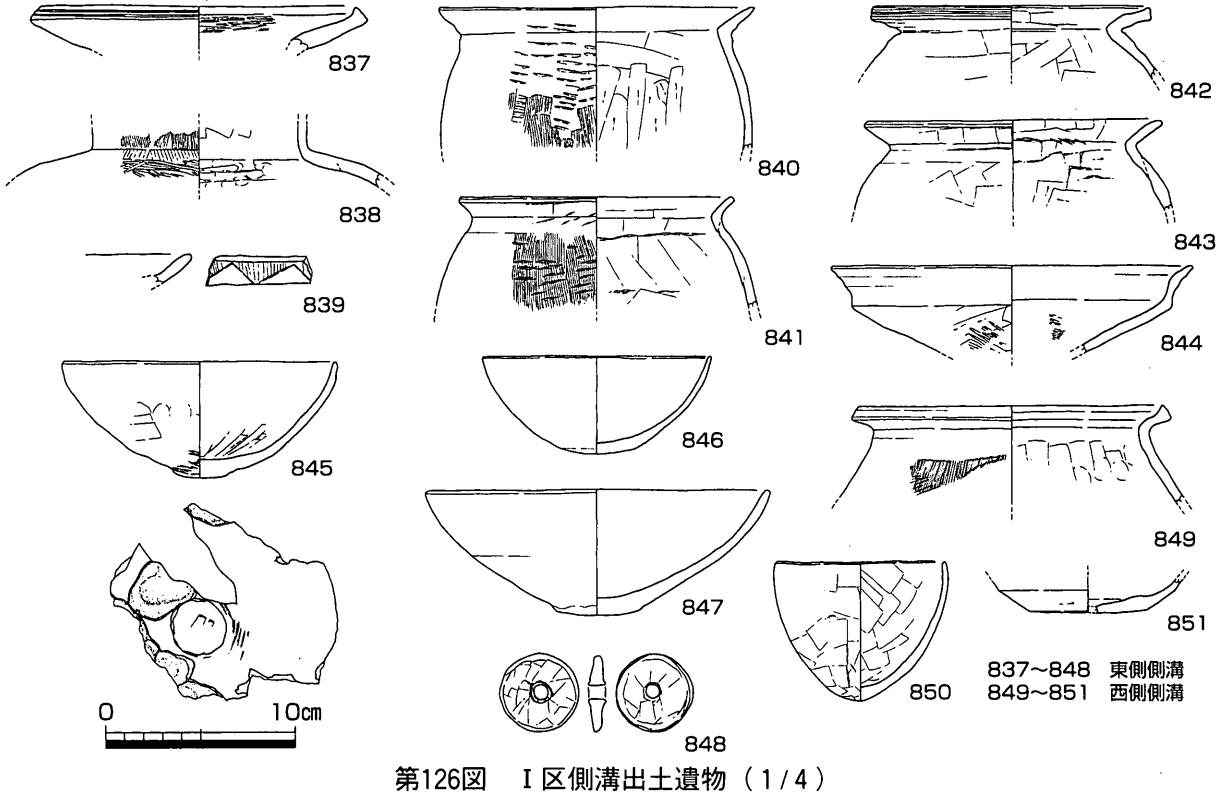


第124図　SH104～106南側上面掘り下げ出土遺物（1/4・1/2）

物である。遺構の前後関係や遺構とベースの差を見極めが難しかったため、遺構やベースを20cm程度掘り込んでいたことが西壁土層断面との照合で判明した。したがって出土遺物の中には本来竪穴住居や土坑、ピットから出土していたものが多く含まれると考えられる。

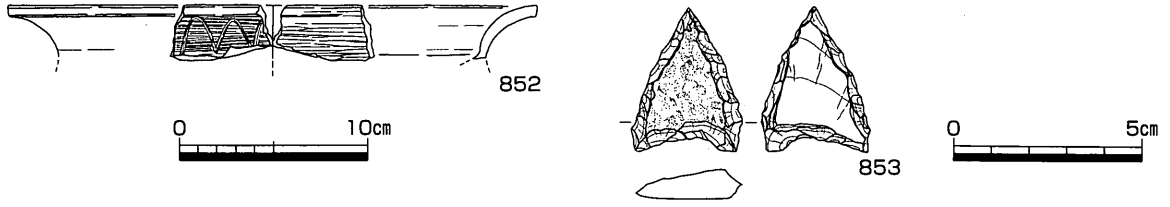


第125図　Ⅰ区平面精査出土遺物（1/4・1/2）

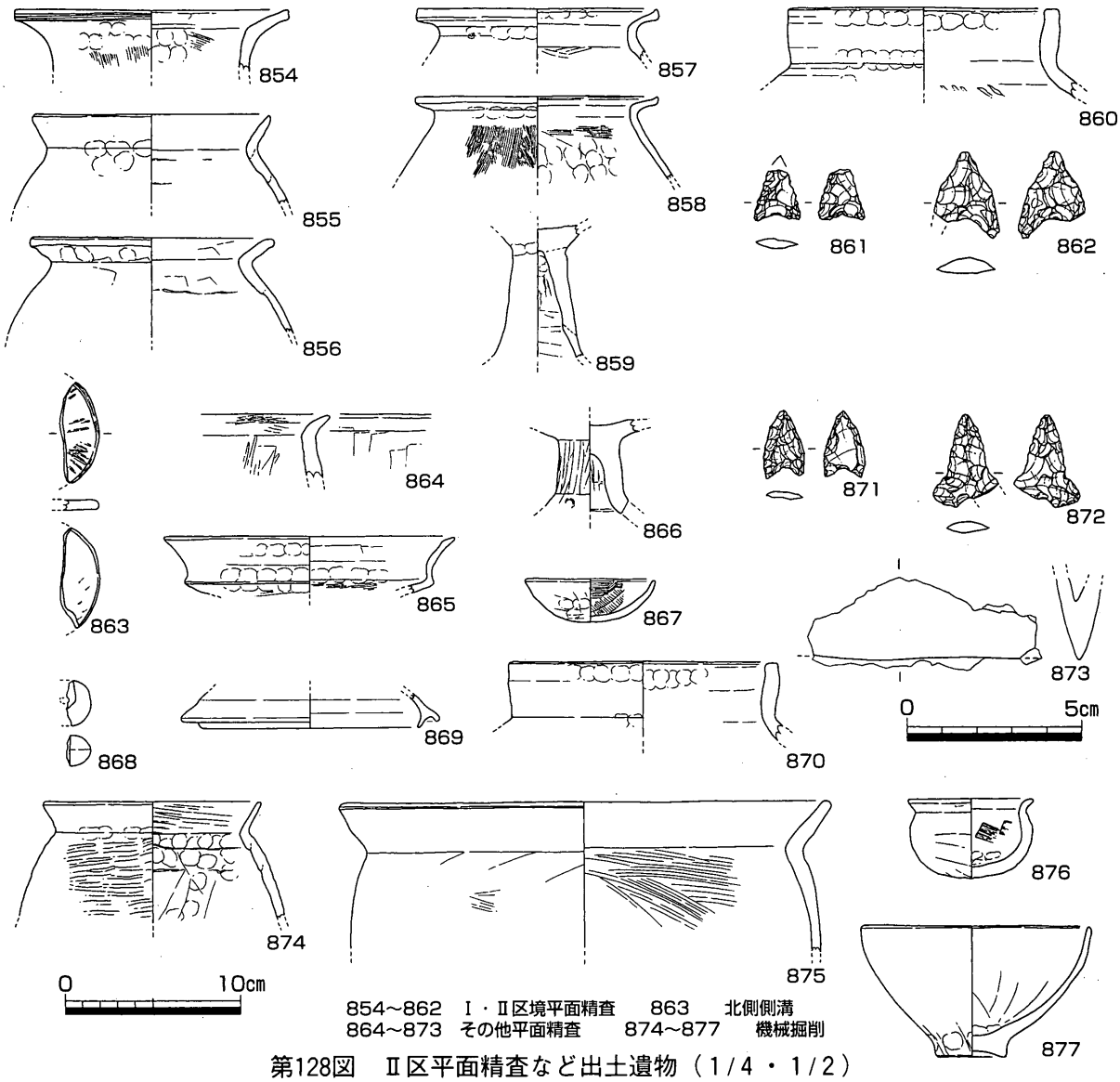


第126図　Ⅰ区側溝出土遺物（1/4）

803～808は壺。808は下川津B類土器。後期前半頃。805は下端部が粘土紐の継ぎ目で剥離しており、その断面から3層の粘土が合わさっている様子が窺える。806でも下端部で粘土紐の継ぎ目で剥離している。807は頸部と体部の境に綾杉状の刻目突帯を巡らせる。中期後半まで遡る。809～811は甕。 809は下川津B類土器。812・813は高杯。812は脚部。813は脚部と杯部の接続部で小型のもの。814は土師器杯。内外面とも調整はナデのほかは見られない。815・816は鉢。いずれも椀型。817・818は須恵器。817は杯蓋。頂部と口縁部の境にゆるい沈線を巡らせる。6世紀中頃。818は瓶口縁部。口縁端部より少し下がった箇所で突帯を巡らせ、その下部に波状文を巡らせる。819はスクレイパー。サヌカイト製。上部には敲打痕がある。



第127図　Ⅰ区機械掘削出土遺物（1/4・1/2）



854～862　Ⅰ・Ⅱ区境平面精査　　863　北側側溝
864～873　その他平面精査　　874～877　機械掘削

第128図　Ⅱ区平面精査など出土遺物（1/4・1/2）

遺物の時期は大雑把に捉えれば弥生時代後期後半頃と6世紀後中～半頃に分かれる。それらはこの下部で検出したSH104～106・111や土坑墓、ピットなどの時期におおむね相当するものであろう。

Ⅰ区平面精査（第125図）

820～836はⅠ区のその他の平面精査の際に出土した遺物である。

820・821は壺。820は口縁端部に凹線を3条巡らせる。弥生時代中期後半。821は頸部から体部。822・823は甕。822は土師器。外面はハケ、内面は板ナデで体部を薄くする。口縁端部は四角くする。823は外面をハケ、上半部内面に指押さえ痕を残す。形態は下川津B類土器と類似するが、胎土中に角閃石は含まない。824は高杯杯部。杯口縁部と底部の境に剥離痕がある。825・826は高杯脚部。826は穿孔が上段に3ヶ所、下段に1ヶ所残る。残存部分から穿孔は上段で4～5ヶ所残ると考えられるが、下段は不明である。827～829は須恵器。827は杯身。体部下半部はヘラ削りする。口縁部の返りは退化が著しい。828・829は杯蓋。828は頂部外面を回転ヘラ削りする。頂部と口縁部の境に緩い沈線を1条巡らせる。827·828は6世紀末頃。829は頂部と口縁部の境に突帯を1条巡らせる。口縁端部は四角くする。SH207とほぼ同時期と考えられる。830・831は鉢。830は口縁端部を外反させる。832は椀型。外面はタタキ痕を顕著に残す。焼成時に破裂したと考えられる剥離痕跡が残る。832・833は石鏃。サヌカイト製。いずれも凹基式と考えられる。834・835はスクレイパー。834は稜線上が摩滅する。836は鉄製品。

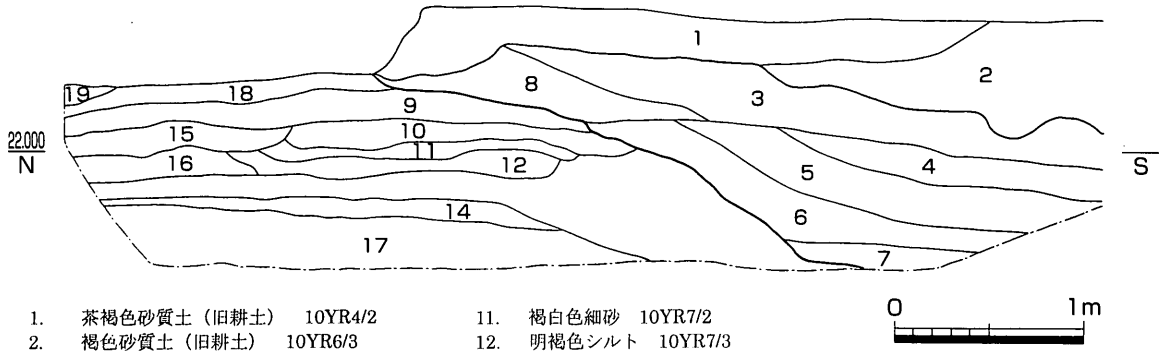
Ⅰ区側溝出土遺物（第126図、図版52）

837～848は東側の側溝から出土した遺物である。837～839は壺。839は二重口縁壺の口縁部。外面に鋸歯文をヘラ描きする。840～843は甕。842は口縁端部に凹線を2条巡らす。844は高杯。底部内外面に4分割のヘラミガキをする。下川津B類土器。845～847は鉢。いずれも椀型。845は焼成時に破裂したと考えられる剥離痕が見られる。848は紡錘車。

849～851は西側の側溝から出土した遺物である。849は下川津B類土器。850は鉢。851は須恵器杯身。底部は回転ヘラ削りする。色調は土師器に似ており、焼成不良品と考えられる。

Ⅰ区機械掘削出土遺物（第127図）

852は弥生土器高杯。杯底部部分は剥離する。口縁部は横方向にヘラミガキする。外面はその後に粗い連弧状のヘラミガキを施す。853は石鏃。サヌカイト製。片面側は自然面を顕著に残す。凹基式。



1. 茶褐色砂質土（旧耕土） 10YR4/2
2. 褐色砂質土（旧耕土） 10YR6/3
3. 灰褐色砂質土（粘土混） 10YR4/1
4. 褐灰色砂（粗砂·粘土混） 2.5Y4/2
5. 明褐灰色砂（粗砂·粘土混） 10YR5/2
6. 明褐灰色砂質土（よく締まる） 10YR6/1
7. 灰褐白色砂質土（よく締まる） 10YR7/1
8. 明灰褐色砂 10YR5/1
9. 明褐色砂混粘土 10YR5/2
10. 明褐色砂 10YR6/2
11. 褐白色細砂 10YR7/2
12. 明褐色シルト 10YR7/3
13. 明褐色粗砂 10YR7/3
14. 褐白色シルト 10YR8/2
15. 明灰褐色砂混粘質土 10YR6/1
16. 褐白色シルト 10YR7/2
17. 明灰褐色砂 10YR7/2
18. 明黄褐色砂 2.5Y7/4
19. 赤茶褐色砂（Fe集積層） 2.5YR4/4

第129図　Ⅱ区南端旧河道部トレンチ（1/40）

Ⅱ区平面精査など出土遺物（第128図、図版52）

854～862はⅡ区とⅠ区の境部分の平面精査により出土した遺物である。この部分はSH201・SH207・SH210がかなりの部分を占める箇所であり、これらのうちのどれかに帰属する可能性がある。

854は広口壺。855～858は甕。858は下川津B類土器。857は形態は下川津B類土器に類似するが、胎土中に角閃石を含まない。859は高杯脚部。杯部と脚部の境に接合痕が見られる。860は須恵器壺。口縁部は直立し、体部内面には青海波文の当て具痕を残す。861･862は石鏃。サヌカイト。凹基式。863はⅡ区北壁側溝から出土した遺物。SH201、SH210に帰属する可能性の高いものである。円盤状土製品。器種不明。表面をヘラミガキし、裏面をヘラ削りする。864～873は平面精査により出土した遺物。864は甕小片。865･866は高杯。865は杯部。底部内面は横方向に近いヘラミガキ、底部外面はヘラ削りする。胎土中には雲母を少量含む。866は脚部。穿孔が２ヶ所に残り、残存部分から穿孔は３ヶ所にあったと考えられる。穿孔部分から下部は屈曲して広がる。867は小型の鉢。内面はハケ、外面には調整痕はほとんど残さない。868は器種不明。球状を呈する。869・870は須恵器。869は杯蓋。退化した返りが付く。870は壺口縁部。860と同一個体の可能性が高い。871･872は石鏃。サヌカイト製。凹基式。873は鉄器製品。器種不明。874～877は機械掘削の際に出土した遺物。874は甕。875～877は鉢。875は口縁端部を外反させる。876は小型で口縁端部を外反させるもの。877は椀型。

Ⅱ区南端旧河道トレンチ（第129図）

Ⅱ区南端部に設定した南北方向のトレンチである。古川の氾濫源に相当する。ベースは砂層･粘土層･シルト層などの水平堆積層で、それを切り込んで，砂層を中心とする旧河道の堆積が見られる。旧河道の堆積層は有機物をあまり含まず，遺物も出土しなかった。また、ベース自体もさらに古い旧河道の堆積と考えられる。

第３節　小結

a. 弥生時代後期後葉～終末期の竪穴住居について

Ⅰ・Ⅱ区では、調査区壁面でのみ確認したものも合わせて、合計22棟の竪穴住居を確認した。このうち弥生時代後期～終末期にかけてのものが17棟、古墳時代のものが３棟、時期の不明なものが２棟である。ここで報告したⅠ・Ⅱ区は、『横断道原間遺跡Ⅰ』で片桐氏が地形分類をしたうちの微高地aの南部に相当し、弥生時代後期～終末期の集落の中心部分に想定された。この時期の竪穴住居については、『成重遺跡Ⅰ』において、信里氏によって弥生時代後期後葉（古）～終末期（新）の四段階に分類されたが、おおむね後期後葉のものは円形の竪穴住居が主体で、このうち50㎡以上の床面積を持つものがその古・新段階でそれぞれ１～２棟、それ以外のものが１～３棟であるが、床面積はおおむね広めである。ただし、調査区の幅が狭いため、竪穴住居の一部しか検出していないものが多く、計算の誤差は大きいと思われる。終末期の竪穴住居は、古段階で５棟を数え、おおむね方形で、SH202のみ円形である。古段階にあたるSH105のみが床面積が50㎡以上を有すると思われ、残りはおおむね20～35㎡程度と考えられる。主軸方位はSH103･106が真北よりやや西へ偏し、他はほぼ真北を向くが、これは地形に制約されたものであろう。調査区の範囲内では１小期あたり５棟程度の竪穴住居を検出しているが、調査区壁面にも竪穴住居と考えられる土層が見られ、それぞれの小期がさらに多くの竪穴住居で構成されていると思われる。

弥生時代後期～終末期の多くの竪穴住居から鉄器が出土した。鉄器が出土した竪穴住居は後期後葉古

段階から終末期新段階にまでわたり、床面積の広さにもあまり関係がないようである。ここで注目されるのはSH201である。1棟当たり出土する鉄器は他の住居では1点程度であるが、SH201からは器種不明のものも合わせれば10点程度出土しているほか、竪穴住居の中央付近に、SK02を挟んで相対する位置で、直径約30cmの焼土塊を2ヶ所で検出した。SK02付近および焼土塊付近の土の一部を洗浄して、鍛冶作業の残滓を探したが見つけることはできず、また、自然科学分析の結果からも鍛冶作業を行なっていた証拠をつかむことはできなかったが、出土鉄製品の多さと炉跡を挟んで2ヶ所に焼土塊を持つこと、約58㎡の床面積を持つことから、特異な存在であったと考えられる。

搬入土器については、下川津B類土器と東阿波型土器、1点のみであるが、SH105から吉備系と考えられる土器が出土している。全体に対する割合を算出していないが、全体にそれほど多くはなかった。下川津B類土器については、調査区北側の北部包含層で最も多く出土している。東阿波型土器については、終末期の竪穴住居で多く出土する傾向で、床面積の広さはあまり関係ない。終末期の竪穴住居においては東阿波型土器の出土と鉄器の出土は高い相関関係にあるようにもみえるが、母集団が少ないので、明言はできない。

土器の中には、表面がレンズ状にはがれていて、そのはがれた場所の色調が他のはがれていない部分の色調と同一であった個体が数点認められた。土器の焼成中に、表面がはじけたものがそのまま使用されている可能性も考えられる。ただし、はがれた方の小破片は認められず、また、焼成中に破裂したと考えられているものの中には、SH208から出土したもののように、炉内部から出土したものもあり、この場所で土器を焼成した積極的な証拠とはならないだろう。また、竪穴住居との相関関係も認められなかった。

b. 古墳時代の遺構について

竪穴住居を2棟、掘立柱建物を1棟、土坑を検出した。この中で、SH207は床面上から5世紀末頃の須恵器が出土している。これまでこの時期の竪穴住居は原間遺跡では見つかっていなかったが、東西の丘陵部に展開する古墳群との関係が注目される。ただし、この時期の確実な遺構はこの1棟のみであった。

SH207の南側ではほぼ方位を同じくしてSH203、SB201を検出した。SH203は北側に竈を持つ。SB201は西側の柱筋以外を布掘り状にし、一度埋め戻した後柱穴を掘る特異な構造を持つ。これらの遺構からは7世紀代の遺物が出土しており、集落はこの頃まで存続していたことがわかる。

土坑については長辺2.5m程度、短辺1m程度の長方形のものが2～3基、方向を揃えて配置されたものが認められ、北側に隣接するⅢ区との関係から、土坑墓群が形成されていたことがわかる。各グループで方向が異なるのは地形に制約されたものであろう。SK204からは管玉が出土した。

参考文献

片桐孝浩「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第39冊　原間遺跡Ⅰ」2002.3　香川県教育委員会ほか

信里芳紀「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第47冊　成重遺跡Ⅰ」2004.3　香川県教育委員会ほか

村上恭通「鉄と倭人の考古学」1999　青木書店

第3表　Ⅰ・Ⅱ区竪穴住居一覧

区名	遺構番号	形状	規模(㎡)	主柱穴	炉	その他	主な出土遺物	下川津B類	東阿波型土器	焼成破裂	鉄器	特記	時期
Ⅰ区	SH101	方形	(39.7)	(4穴)	(未確認)	−	甕、鉢	○?	×	○	×	−	終末新～古墳初
Ⅰ区	SH102	方形	22.1	2穴？	○	−	高杯、鉢、台石	×	×	×	×	−	終末新
Ⅰ区	SH103	方形	29.2	4穴	10土坑	壁溝	甕、壺、鉢、叩き石、台石	○	○	×	定角式鉄鏃	焼失家屋	終末新
Ⅰ区	SH104	円形	(58.1)	5～6	○	壁溝	甕、高杯、鉢	○	×	×	鉄鏃	結晶片岩製石庖丁	後期後葉古
Ⅰ区	SH105	方形	(68.9)	4穴？	○	−	壺、甕、鉢、高杯、叩き石、台石	○	○	○	ヤリガンナ	焼失家屋、吉備系土器	終末古
Ⅰ区	SH106	方形	−	(未確認)	(未確認)	−	壺、甕、鉢	○	×	×	ヤリガンナ	−	終末新
Ⅰ区	SH107	円形	(50)	(未確認)	(未確認)	−	壺、甕、鉢	×	○	×	−	−	後期後葉新
Ⅰ区	SH108	円形	−	5～6	○	−	壺、甕、鉢	○	×	×	不明鉄器	−	後期後葉新
Ⅰ区	SH109	円形	−	1穴確認	(未確認)	壁溝？	壺、甕、鉢	○	○	×	柳葉式鉄鏃	−	後期後葉新
Ⅰ区	SH110	−	−	1穴確認	(未確認)	壁溝？	−	−	−	−	−	SH09と一緒に掘り下げてしまったので詳細は不明	SH09より新しい
Ⅰ区	SH111	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	断面で検出したのみ。ほとんどは調査区外	−
Ⅰ区	SH112	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	断面で検出したのみ。ほとんどは調査区外	−
Ⅱ区	SH201	円形	58	8穴	○	張り出し、焼土塊	壺、甕、鉢、高杯、台石、磨き石	○	×	×	ヤリガンナ、鉄鏃、不明鉄器	鉄器多い。結晶片岩製石庖丁	後期後葉新
Ⅱ区	SH202	円形	36.3	4穴	(未確認)	一部壁溝	壺、甕、鉢、台石、叩き石	○	○	×	−	焼失家屋	終末古
Ⅱ区	SH203	方形	18.8	4穴	×	竈	−	×	×	×	−	−	古墳時代後期
Ⅱ区	SH204	方形	11.3	4穴	×	−	甕、高杯、鉢	×	○	×	鉄片	−	終末新
Ⅱ区	SH205	方形	22	4穴	○	一部壁溝	甕、高杯、鉢	×	○	×	柳葉式鉄鏃	焼失家屋	終末新
Ⅱ区	SH207	方形	17.8	4穴？	×	−	須恵器	×	×	×	−	−	古墳時代中期
Ⅱ区	SH208	円形	43	4～5穴	10土坑	−	甕、鉢、高杯、台石	×	×	○	−	焼成中破裂多い	後期後葉古
Ⅱ区	SH209	円形	63.6	(未確認)	(未確認)	−	甕、鉢、台石	×	×	×	−	−	後期後葉新
Ⅱ区	SH210	円形?	13.2	4穴	なし	−	甕、壺、高杯	○	×	×	−	−	終末古

第4表　Ⅰ・Ⅱ区土杭一覧

区名	遺構名	形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	断面形状	方位	出土遺物	時期	その他
Ⅰ区	SK101	楕円形	1.30	1.00	0.42	長方形	N 9°W	弥生土器	古墳時代初頭以降	
Ⅰ区	SK108	長方形	2.37	1.85	0.35	逆台形	N64°E	弥生土器	弥生時代後期	
Ⅰ区	SK114	長方形	3.44	2.10	0.30	逆台形	N 1°E	弥生土器	弥生時代後期後半	
Ⅰ区	SK110	長方形	1.90	1.18	0.35	逆台形	N68°W	弥生土器	弥生時代後期後半	
Ⅰ区	SK115	長方形	1.85	1.50	0.45	逆台形	N29°W	弥生土器	弥生時代後期前半	
Ⅱ区	SK209	長方形	1.60	1.40	0.40	逆台形	N 8°W	弥生土器	弥生時代後期後半	
Ⅱ区	SK210	長方形	1.90	1.40	0.22	逆台形	N 4°W	弥生土器	弥生時代後期後半～終末期	
Ⅱ区	SK215	不整円形	2.05	1.65	0.36	逆台形	−	弥生土器	弥生時代後期	焼土あり
Ⅱ区	SK216	不整円形	1.90	−	0.76	長方形	N25°W	弥生土器	弥生時代後期	
Ⅱ区	SK222	円形	0.87	−	0.54	逆台形	−	−	−	
Ⅱ区	SK223	円形	0.86	−	0.32	ボウル	−	−	−	
Ⅱ区	SK227	円形	1.35	−	0.55	逆台形	−	弥生土器	弥生時代終末期	廃棄土坑
Ⅱ区	SK228	円形	1.50	−	0.80	逆台形	−	弥生土器	弥生時代終末期	廃棄土坑
Ⅰ区	SK102	円形	1.20	−	0.25	逆台形	−	須恵器	古墳時代後期	
Ⅰ区	SK103	長方形	1.55	0.90	0.36	凹凸あり	N	−	古墳時代後期	
Ⅰ区	SK106	長方形	0.80	−	0.28	逆台形	N19°E	須恵器	7世紀前～中	
Ⅰ区	SK107	長方形	1.54	0.84	0.45	二段掘り	N32°W	須恵器小片	古墳時代中期以降	
Ⅱ区	SK206	長方形	4.00	1.20	0.25	逆台形	N53°W		7世紀中～後半	SK225と列を揃える
Ⅱ区	SK225	長方形	5.60	1.30	0.30	逆台形	N40°W	鉄鏃	7世紀中頃	SK205と列を揃える
Ⅱ区	SK208	長方形	2.40	0.80	0.25	逆台形	N27°W	須恵器	7世紀前半	
Ⅱ区	SK212	長方形	1.90	0.88	0.13	逆台形	N20°W	−	7世紀前半	
Ⅱ区	SK211	隅丸長方形	1.90	0.90	0.20	逆台形	−	−	−	
Ⅱ区	SK217	長方形	1.80	1.05	0.40	逆台形	N89°W	須恵器	古墳時代後期？	
Ⅰ区	SK104	長方形	2.56	0.90	0.35	逆台形	N15°E	−	7世紀代？	土坑墓か　SK105と列を揃える
Ⅰ区	SK105	長方形	2.92	1.05	0.50	逆台形	N20°E	須恵器	7世紀後半	土坑墓か　SK104と列を揃える
Ⅱ区	SK201	楕円形	1.28	0.85	0.32	逆台形	N76°E	−	−	土坑墓　棺痕跡あり
Ⅱ区	SK202	長方形	2.50	1.10	0.17	逆台形	N32°W	須恵器	7世紀後半	土坑墓か　SK203･204･205と列を揃える
Ⅱ区	SK203	隅丸長方形	2.00	0.80	0.08	浅皿	N31°W	−	7世紀後半	土坑墓か　SK202･204と列を揃える
Ⅱ区	SK204	長方形	2.20	0.90	0.11	逆台形	N37°W	須恵器、管玉	7世紀後半	土坑墓か　SK202･203と列を揃える
Ⅱ区	SK205	長楕円形	2.00	1.00	0.10	浅皿	N32°W	−	7世紀後半	土坑墓か　SK202と列を揃える
Ⅱ区	SK207	長方形	2.30	0.86	0.15	逆台形	N	−	7世紀代？	土坑墓か　SK218と列を揃える
Ⅱ区	SK218	長方形	2.10	0.80	0.20	逆台形	N 5°E	−	7世紀代？	土坑墓か　SK207と列を揃える

第130図　調査区割図及び周辺地形復元図（１／3,000）
（赤線は微地形復元ライン）

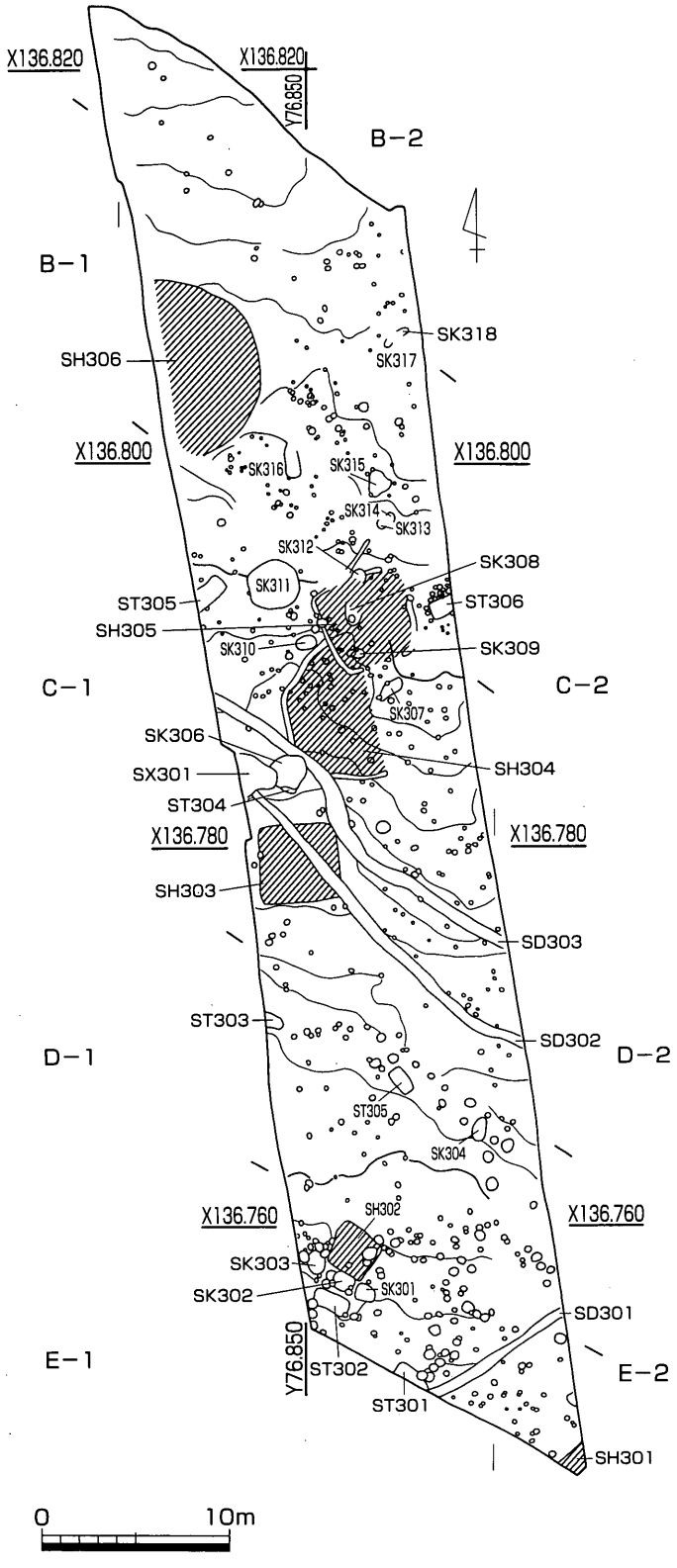
第４節　Ⅲ区の調査成果

１．地形

この調査区の立地は、西から東へ派生する丘陵部の北斜面裾にあたり、標高は19m前後を測る。調査区の周辺地形は南から北へ緩やかに傾斜する。すでに報告された横断道原間遺跡の標高と比較すると約２m高い位置にある。調査区内の地形も南側が高く北へ向かって低くなっており、南端と北端では比高差は約２mを測る。耕地化の影響により旧状は階段状を呈する。調査前の土地利用状況は、概ね等高線に並行するように区画された水田が五筆存在した。

横断道原間遺跡で片桐氏によって復元された旧地形によると、Ⅲ区は微高地aの上に位置し、比較的安定した地形であることが想定される。[1]

しかし、試掘調査に先立ち復元された旧地形の等高線の入り方[2]を見ると、調査区の北東から北へ延び



第131図　Ⅲ区遺構配置図（S＝１／400）

る浅い谷頭上の窪み（開削低地b）が認められ、旧河道あるいは谷地形の存在が想定される。また、調査区北端と原間集会所の間にも西から伸びる谷筋と想定される窪み（開削低地a）が認められ、先の窪みと合流し、北へ延びるようである。この窪みは片桐により低湿地aとされる。先に触れた微高地aは東へやや張り出した後、北のほうへ延びてゆき、平成９年度調査対象地B区へつながる。

2. 土層序

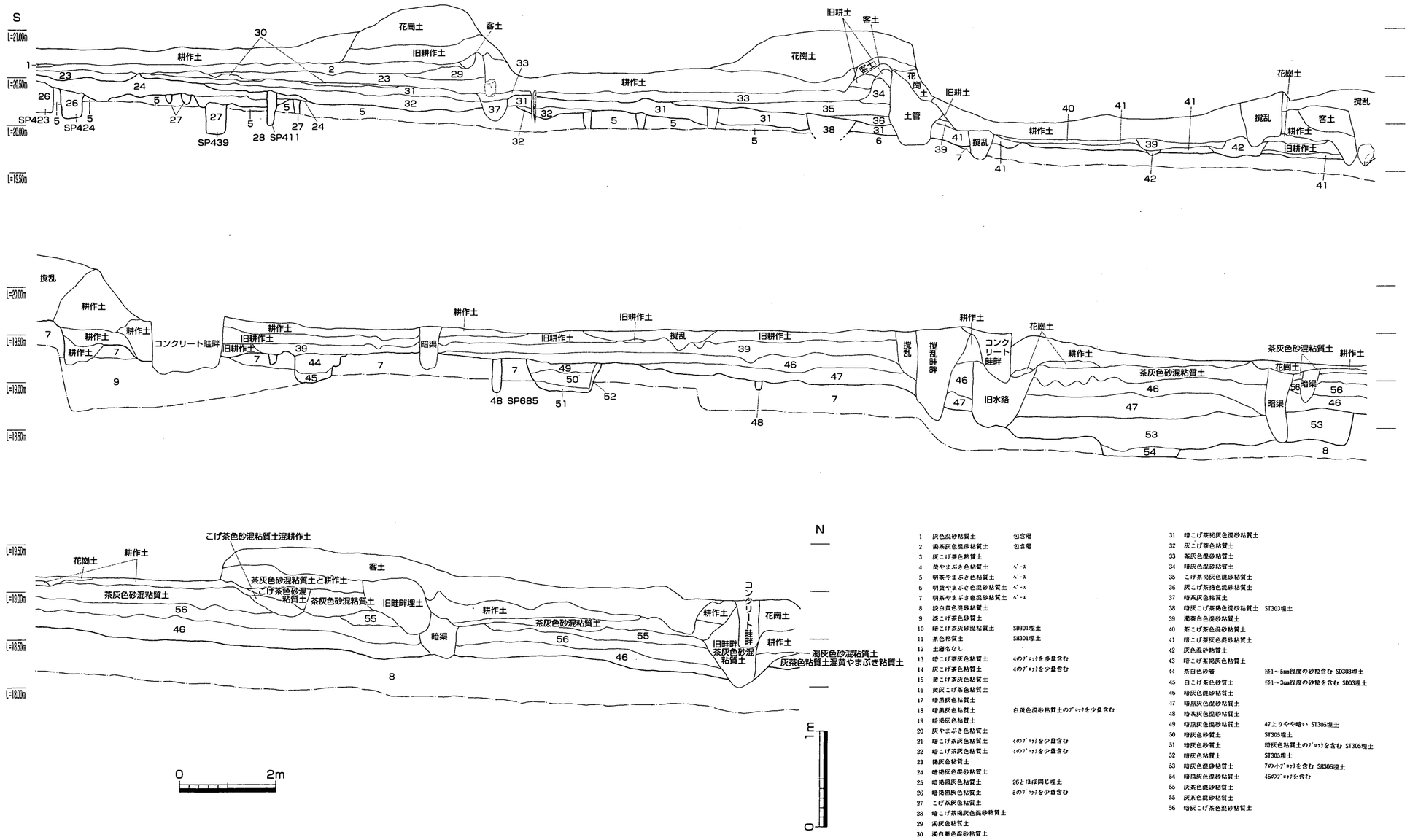
当調査区における土層序は、耕地化の影響を受けたためか旧地筆毎に若干変化しており、共通の土層序としては捉えにくい状況である。調査区の南壁と西壁で認められる土層を記録したが（第132・133図・付図３）、それを基に調査区内での堆積状況を見ていきたい。

全体を概観すると、調査区ほぼ全面において地表下0.10～0.50mまでは耕作土・旧耕作土が認められ、その直下には南側で0.10m、北側で0.50mほどの厚さで水平堆積する暗褐灰色系の砂混じり粘質土層が堆積する。

これらは層の厚い北側では３層前後に分層出来るが、薄い南側では上の層が認められない場合がある。これらは遺物包含層として捉えている。この包含層の下には、竪穴住居跡の検出面であるやまぶき色系の砂混じり粘質土の堆積が認められ、さらにこの下層には淡こげ茶色砂質土層が堆積する。

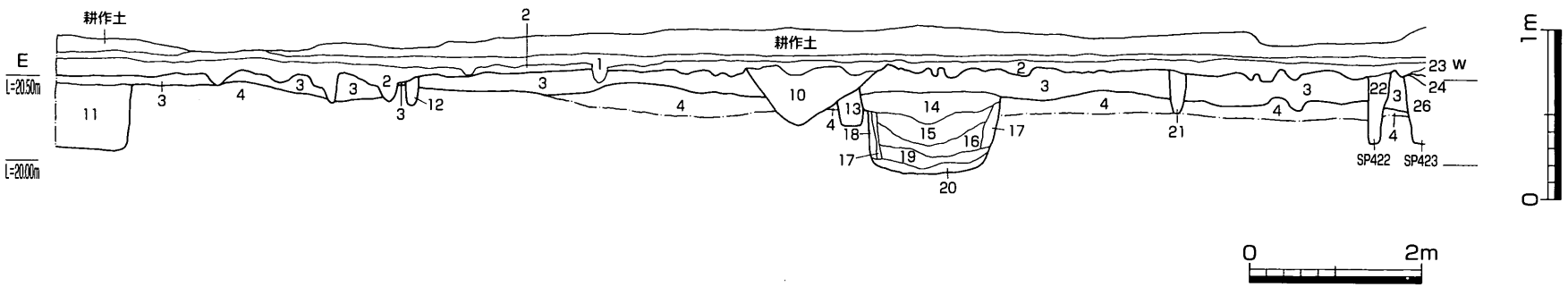
1　p．486　第463図　原間遺跡遺構立地分類図。以下片桐地形分類①。
片桐孝浩編　2002『四国横断自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三十九冊　原間遺跡Ⅰ』香川県教育委員会他

2　p．13　第５図　発掘調査対象範囲図・旧地形復元図。以下片桐地形分類②。出典同上



1 灰色混砂粘質土 包含層
2 濁茶灰色混砂粘質土 包含層
3 灰こげ茶色粘質土
4 黄やまぶき色粘質土 ﾍﾟｰｽ
5 明茶やまぶき色粘質土 ﾍﾟｰｽ
6 明黄やまぶき色混砂粘質土 ﾍﾟｰｽ
7 明茶やまぶき色混砂粘質土 ﾍﾟｰｽ
8 淡白黄色混砂粘質土
9 淡こげ茶色砂質土
10 暗こげ茶灰砂混粘質土 SD301埋土
11 茶色粘質土 SH301埋土
12 土層名なし
13 暗こげ茶灰色粘質土 4のﾌﾞﾛｯｸを多量含む
14 灰こげ茶色粘質土 4のﾌﾞﾛｯｸを少量含む
15 黄こげ茶灰色粘質土
16 黄灰こげ茶色粘質土
17 暗黒灰色粘質土
18 暗黒灰色粘質土 白黄色混砂粘質土のﾌﾞﾛｯｸを少量含む
19 暗褐灰色粘質土
20 灰やまぶき色粘質土
21 暗こげ茶灰色粘質土 4のﾌﾞﾛｯｸを少量含む
22 暗こげ茶灰色粘質土 4のﾌﾞﾛｯｸを少量含む
23 撹灰色粘質土
24 暗褐灰色混砂粘質土
25 暗褐黒灰色粘質土 26とほぼ同じ埋土
26 暗褐黒灰色粘質土 5のﾌﾞﾛｯｸを少量含む
27 こげ茶灰色粘質土
28 暗こげ茶褐灰色混砂粘質土
29 濁灰色粘質土
30 濁白茶色混砂粘質土
31 暗こげ茶褐灰色混砂粘質土
32 灰こげ茶色粘質土
33 茶灰色混砂粘質土
34 暗灰色混砂粘質土
35 こげ茶褐灰色混砂粘質土
36 灰こげ茶褐色混砂粘質土
37 暗茶灰色粘質土
38 暗灰こげ茶褐色混砂粘質土 ST303埋土
39 濁茶白色混砂粘質土
40 茶こげ茶色混砂粘質土
41 暗こげ茶灰色混砂粘質土
42 灰色混砂粘質土
43 暗こげ茶褐灰色粘質土
44 茶白色砂層 径1～5mm程度の砂粒含む SD303埋土
45 白こげ茶色砂質土 径1～3mm程度の砂粒を含む SD03埋土
46 暗灰色混砂粘質土
47 暗黒灰色混砂粘質土
48 暗茶灰色混砂粘質土
49 暗黒灰色混砂粘質土 47よりやや暗い ST305埋土
50 暗灰色砂質土 ST305埋土
51 暗灰色粘質土 暗灰色粘質土のﾌﾞﾛｯｸを含む ST305埋土
52 暗灰色粘質土 ST305埋土
53 暗灰色混砂粘質土 7の小ﾌﾞﾛｯｸを含む SH306埋土
54 暗黒灰色混砂粘質土 46のﾌﾞﾛｯｸを含む
55 灰茶色混砂粘質土
55 灰茶色混砂粘質土
56 暗灰こげ茶色混砂粘質土

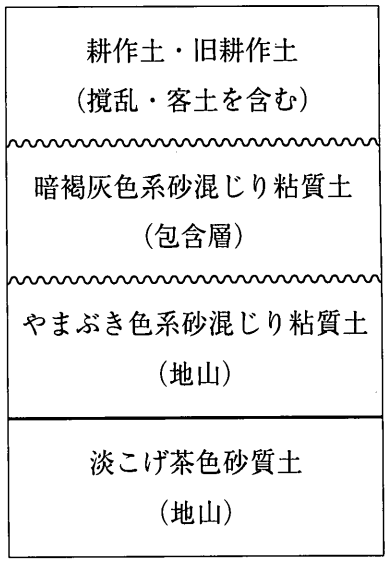
第132図　Ⅲ区西壁土層断面図（天地S＝1/40・左右S＝1/80）



1	灰色混砂粘質土	包含層
2	濁茶灰色混砂粘質土	包含層
3	灰こげ茶色粘質土	
4	黄やまぶき色粘質土	ﾍﾞｰｽ
5	明茶やまぶき色粘質土	ﾍﾞｰｽ
6	明黄やまぶき色混砂粘質土	ﾍﾞｰｽ
7	明茶やまぶき色混砂粘質土	ﾍﾞｰｽ
8	淡白黄色混砂粘質土	
9	淡こげ茶色砂質土	
10	暗こげ茶灰砂混粘質土	SD301埋土
11	茶色粘質土	SH301埋土
12	土層名なし	
13	暗こげ茶灰色粘質土	4のﾌﾞﾛｯｸを多量含む
14	灰こげ茶色粘質土	4のﾌﾞﾛｯｸを少量含む
15	黄こげ茶灰色粘質土	
16	黄灰こげ茶色粘質土	
17	暗黒灰色粘質土	
18	暗黒灰色粘質土	白黄色混砂粘質土のﾌﾞﾛｯｸを少量含む
19	暗褐灰色粘質土	
20	灰やまぶき色粘質土	
21	暗こげ茶灰色粘質土	4のﾌﾞﾛｯｸを少量含む
22	暗こげ茶灰色粘質土	4のﾌﾞﾛｯｸを少量含む
23	褐灰色粘質土	
24	暗褐灰色混砂粘質土	
25	暗褐黒灰色粘質土	26とほぼ同じ埋土
26	暗褐黒灰色粘質土	5のﾌﾞﾛｯｸを少量含む

第133図　Ⅲ区南壁土層断面図（天地S＝１／40・左右S＝１／80）

竪穴住居跡の検出面を地山とした場合、その上面は南から北へとゆるい傾斜が認められるが、特に地筆境において、暗渠や畦畔が繰り返し構築されるなどして削平されたことに起因すると見られる0.10～0.20mの段差が生じている。現状においても暗渠・畦畔は地山層まで達しており、耕地化にあたり、著しい削平が行なわれたことが窺える。包含層の厚さが南と北で異なる状況から見て、本来的には包含層が地山面に対してほぼ水平に堆積していた可能性が想定できるが、削平の状況から見て断言は困難である。



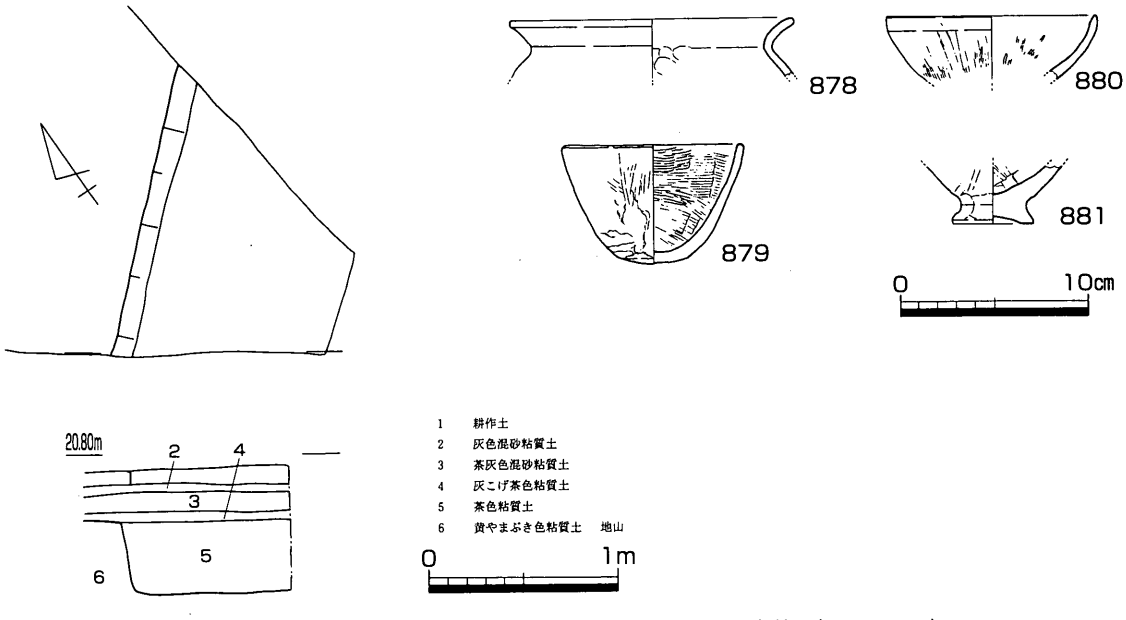
第134図　Ⅲ区土層序模式図
(波線は遺構面を示す)

次に細部の状況について概観する。説明が煩雑になることから、便宜的に調査区を旧地筆毎に南からA．B．C．D．Eと仮称する(付図３参照)。調査区の壁にかかる遺構を手掛かりに遺構面を検討すると、Aにおいては見かけ上、遺構の掘り込み面が地山の他に包含層上面に認められるものが複数存在する。南壁においては３面、西壁においては４面の遺構面が想定できる。Bにおいては西壁で確認する限り、２面の遺構面が想定できる。C以北については西壁にかかる遺構が少ないため、詳細な検討は困難である。上記のように複数面の遺構面を想定できる場所は限られているため断言は出来ないが、本来的には調査区全面において複数の遺構面が存在した可能性が想定できる。

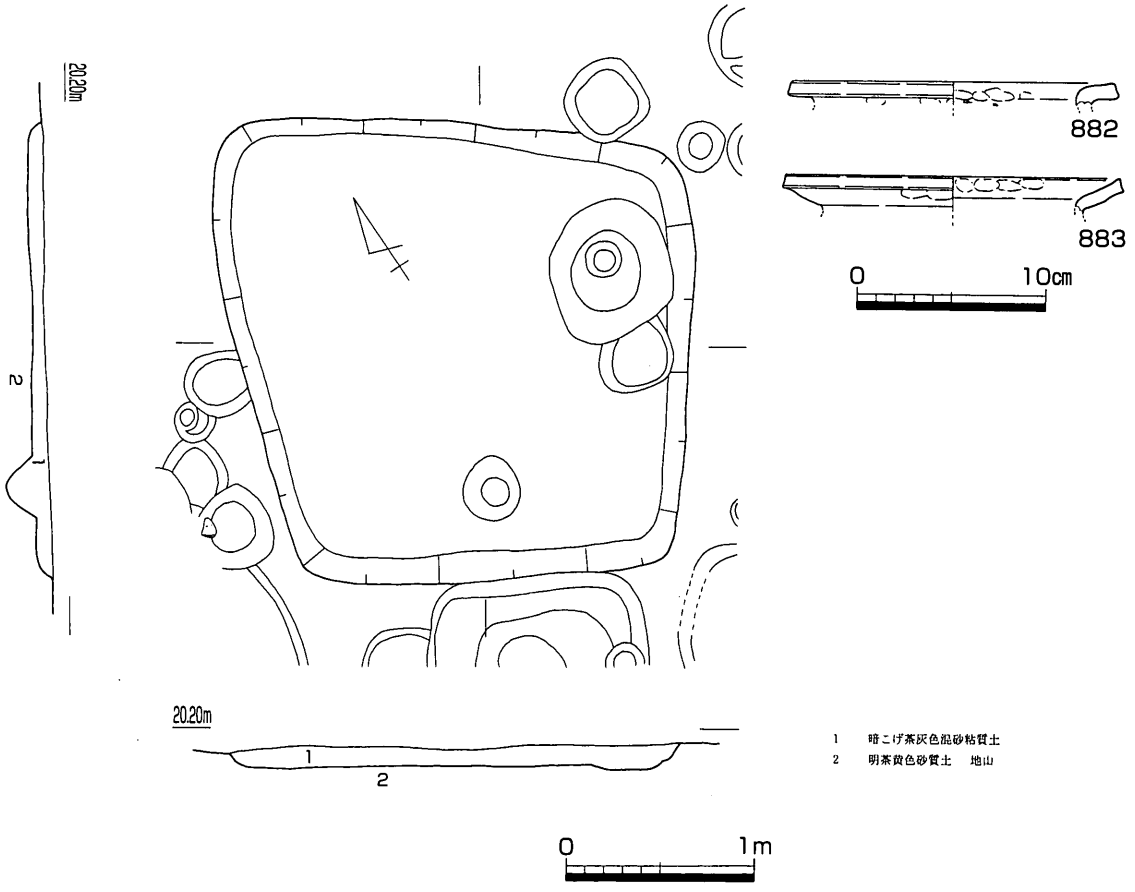
3．遺構と遺物

当調査区における遺構面は、2．で触れたとおり、調査区南端では見かけ上の遺構の掘り込み面（以下掘り込み面と称す）が異なる状況が観察でき、３～４面の遺構面が想定できる。掘削の段階では全ての遺構をやまぶき色砂混じり粘質土上面に合わせたため、各遺構の明確な掘り込み面については不明である。

さて、当調査区において検出した遺構は竪穴住居跡６棟・土坑18基・土坑墓６基・溝状遺構３条・柱



第135図　SH301平・断面図（S＝１/40）、出土遺物（S＝１/４）



第136図　SH302平・断面図（S＝１／40）、出土遺物（S＝１／４）

穴554基である。遺構名は報告書作成段階で調査時に命名されたものから新規に変更している。新規に遺構名を添付するに当たっては、原則南から順に遺構番号を付けている。各遺構には遺構略号の後にⅢ区を示す「３」をつけ、その後に遺構毎の通し番号をつけて遺構番号とした。ただし、柱穴については301からそのまま通し番号をつけており、上記の限りではない。他の遺構と同じ方法で行くと、柱穴の数が100以内に収まらないことから通し番号の表記が４桁となり、煩雑になるため、これを避けるために行なった操作である。

（１）竪穴住居跡

SH301（第135図）

調査区南東隅で検出した遺構である。見かけの平面規模は上底0.60m、下底1.60m、高さ1.12mの台形状を呈し、深さは約0.40mを測る。埋土は茶色粘質土の単層である。大半が調査区外へ伸びており、平成13年度対象地からも外れていることから詳細については不明である。上底側で半円形に焼土を確認している。出土遺物は弥生土器の甕（第135図878）及び鉢（同図879～881）の破片が出土している他は細片がほとんどであるため詳細は不明である。当遺構の時期については上記の理由から詳細不明であり、出土遺物から弥生時代後期に帰属する可能性が想定できるにとどまる。

SH302（第136図）

E－２グリッド北西隅で検出した遺構である。平面形は北西・北東辺が2.40m・南西・南東辺が2.00mを測る歪な方形を呈する。深さは0.08～0.10mを測る。埋土は暗こげ茶灰色砂混じり粘質土の単層である。主軸方位はN34°Eを測る。同遺構に伴う柱穴・壁溝・炉跡などの遺構が認められないことから、同遺構単体をもって竪穴住居跡とするには困難だが、同調査区内で検出しているSH303において認められるようなベッド状遺構の内側底部付近のみが遺存している可能性を想定している。遺物は弥生土器甕の口縁部細片（第136図882・883）が認められるが、他の遺物に乏しく詳細は不明である。当遺構の時期については上記の理由から詳細不明であり、出土遺物から弥生時代後期に帰属する可能性を想定できるにとどまる。

SH303（第137～139図）

C－１・２、D－１・２グリッドの交点付近で検出した竪穴住居跡である。SD302・303に切られて検出したことから同遺構に先行する遺構である。平面形は方形で、南北4.10m・東西4.25mを測る。また、検出面からの深さは0.40mを測る。主軸方位はN５°Wを測る。床面積は約17.4㎡を測る。埋土の色調は暗こげ茶系と暗黄茶色系のものが見られ、土質は砂混じり粘質土である。各層はレンズ状堆積しており、住居が廃絶した後、自然に埋没したものと想定できる。

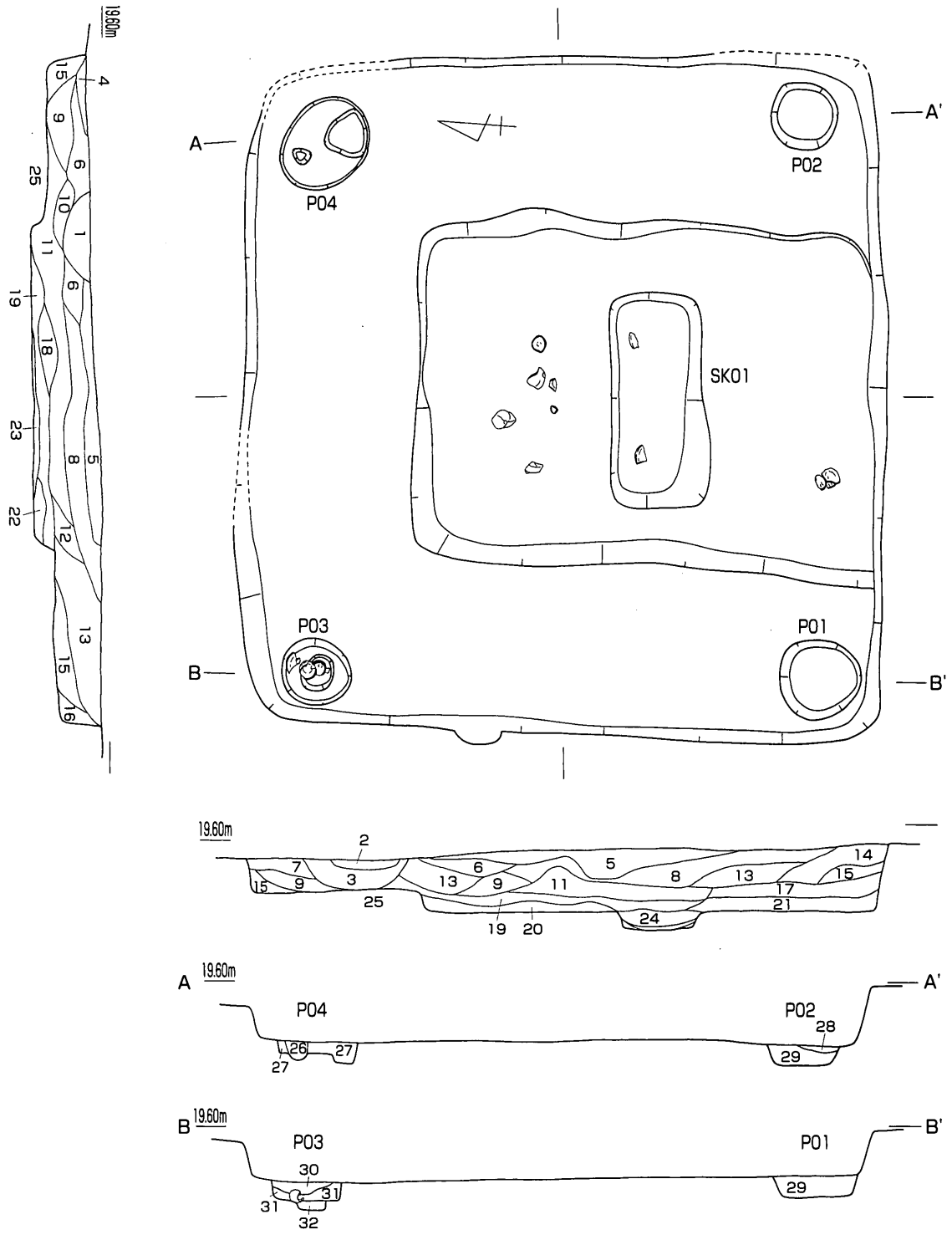
付帯施設としては、まず、住居南辺を除きベッド状遺構が認められるが、地山の土である濁茶白色砂質土と同質であることから地山を削り出したものと見られる。南辺部においては、調査途上ではベッド状遺構らしきものが認められたものの、土層観察の結果、他の三方のものと比較するとやや濁りが見られたほか、床面中央の土坑に一部被覆する状況が認められた（第137図南北土層図17・21層）。これを受けて同部位を竪穴住居埋土として除去したところ、遺物の出土が見られたことから、この部位にはベッド状遺構は無かったと判断した。

主柱穴跡はベッド状遺構上にあり、住居の四隅で４基認められ、直径0.40～0.50mの歪な円形を呈する。P01～04として記録したが、いずれも検出した深さは0.15～0.20mを測り、総じてやや浅めである。また、明瞭な柱痕は土層断面においては認められなかったが、P03･04においては底部に柱根の圧痕と見られる直径0.23～0.30mの窪みが認められた。また、P02埋土上面およびP03埋土中から土器が完形に近い状態で出土していること、埋土中に大型の炭化木材が認められないことなどから、柱材は抜き取られたものと見られる。

床面はベッド状遺構内部で0.10mほど下がっており、南北2.75m･東西1.90mの空間が認められる。この空間の中央部に東西1.65m・南北0.60m・深さ0.10mの土坑が認められる。土坑埋土は上層に炭化物を含む濁黄色砂質土が、下層に炭化物層が堆積する。床面の被熱については確認できなかった。

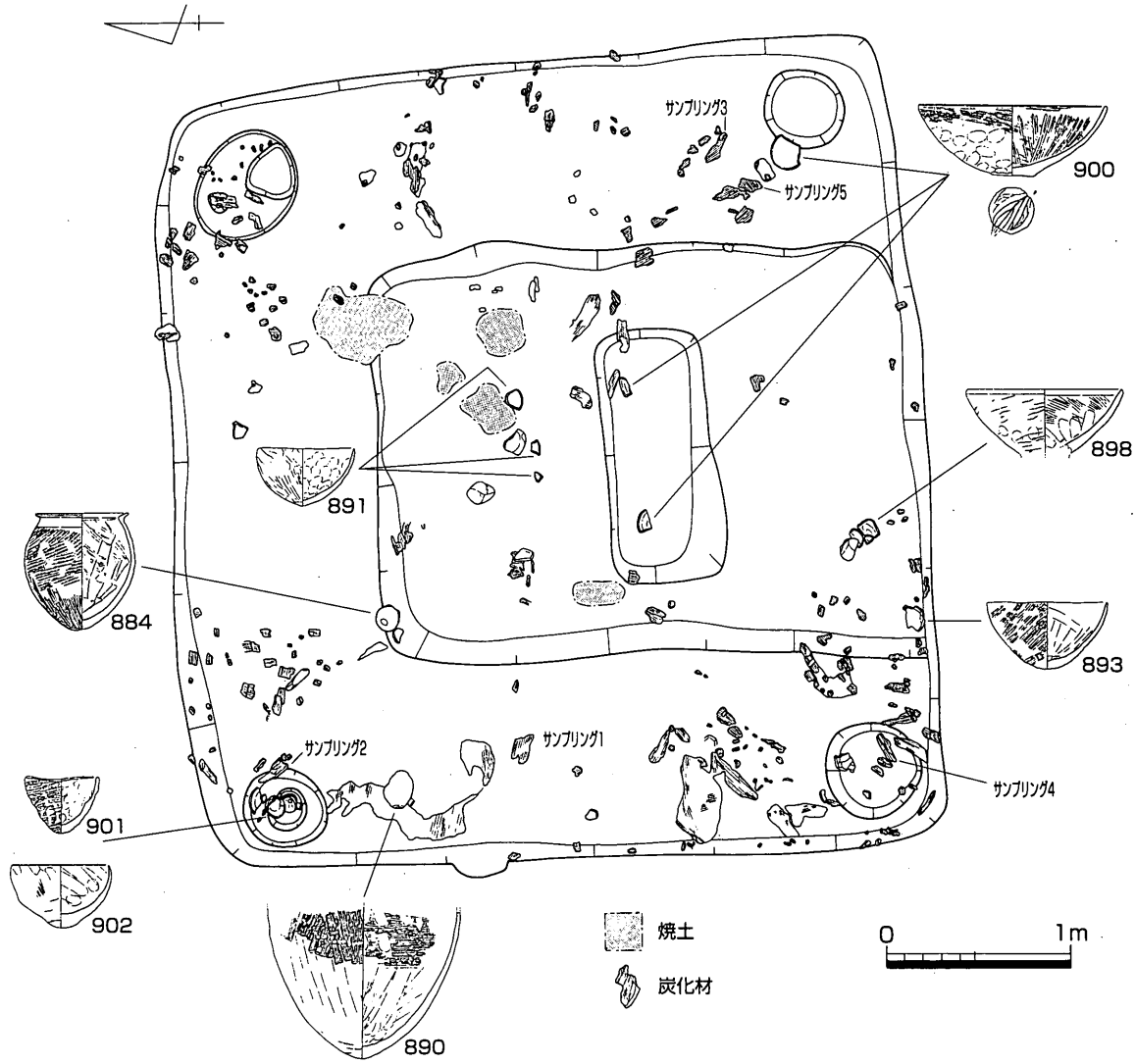
当竪穴住居跡は、床面上面においては若干の炭化木材と焼土塊が確認できたことから、焼失家屋であると想定できる（第138図）。炭化木材はかなり断片化しており旧状は不明であるが、住居跡南半部において炭化木材が住居の中心へ向かって伸びる様子がややまとまって認められることから、焼失した垂木である可能性が想定できる。

出土遺物は弥生土器を中心とするが、上層でわずかに須恵器が混じるほか、サヌカイト製石器・鉄製品が若干認められる。全体的な遺物出土量はあまり多くないうえ、細片が多数を占める。弥生土器は甕・鉢・高坏などが認められる。遺存状況の良好なものを中心に図示した（第139図）。884～890は甕である。884･886は床面からの出土で、他は包含層からの出土である。ほぼ完形に復元できるものは884の



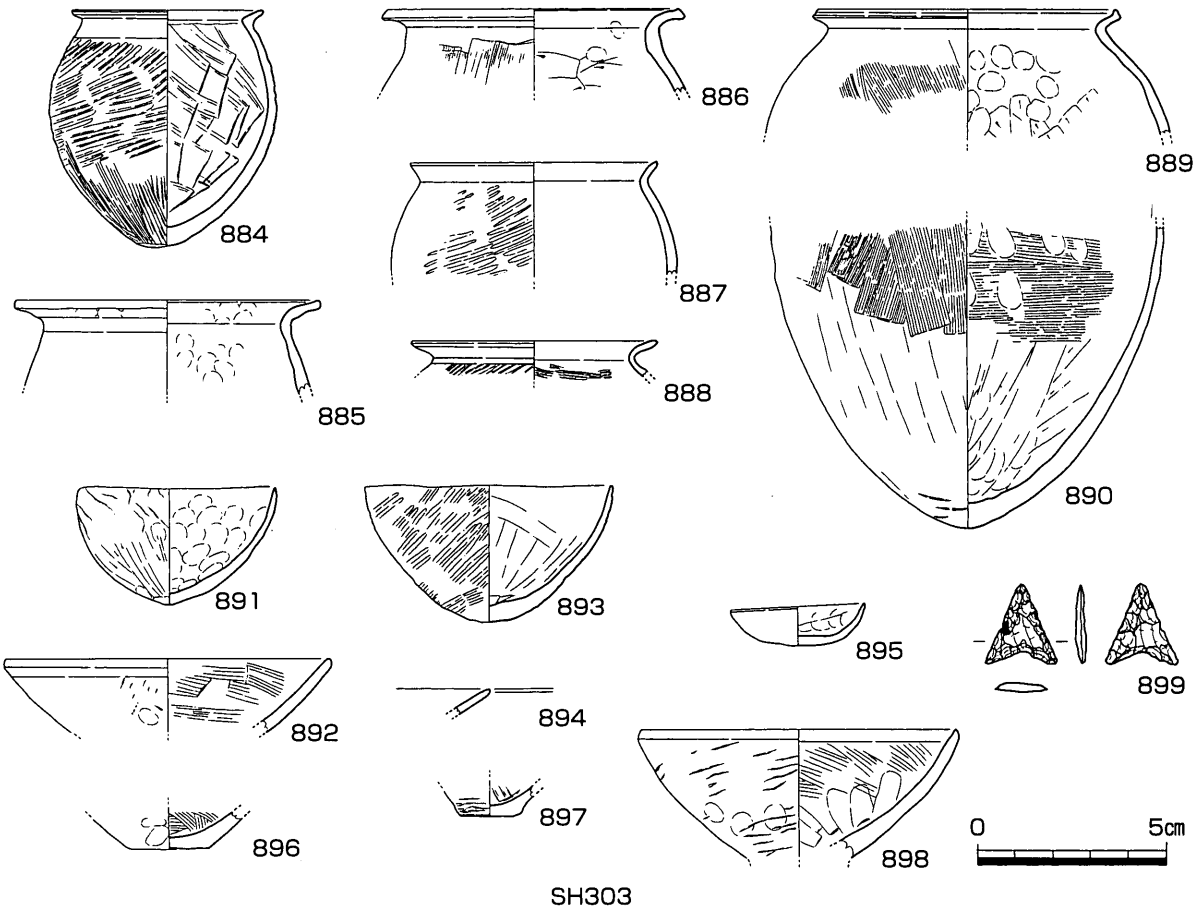
1	暗黄黒灰色混砂粘質土 SD302埋土	14	灰こげ茶色混砂粘質土				
2	黒こげ茶色混砂粘質土 SD302埋土	15	濁こげ茶色混砂粘質土				
3	濁灰こげ茶色混砂粘質土 SD302埋土	16	濁茶黄色砂混砂粘質土				
4	暗こげ茶褐灰色混砂粘質土	17	茶やまぶき色混砂粘質土 地山				
5	灰茶色混砂粘質土	18	やまぶき白色砂質土				
6	黄茶色混砂粘質土	19	暗こげ茶灰色混砂粘質土				
7	暗灰色混砂粘質土	20	暗こげ茶灰色混砂粘質土と炭の互層				
8	黄こげ茶色混砂粘質土	21	濁こげ茶白色砂質土				
9	暗こげ茶灰色混砂粘質土	22	焼土				
10	暗黒灰色混砂粘質土 炭を少量含む	23	炭層				
11	濁黄灰色混砂粘質土	24	濁黄色砂質土 炭を含む				
12	淡黄こげ茶色混砂粘質土	25	濁茶白色砂質土 地山				
13	黄茶灰色混砂粘質土	26	暗こげ茶灰色混砂粘質土				
				27	やまぶき茶色砂質土		
				28	暗灰色粘質土と暗こげ茶灰色混砂粘質土の互層		
				29	濁茶白色砂質土		
				30	やまぶき茶色混砂粘質土		
				31	暗こげ茶灰色混砂粘質土		
				32	暗黒茶灰色混砂粘質土		

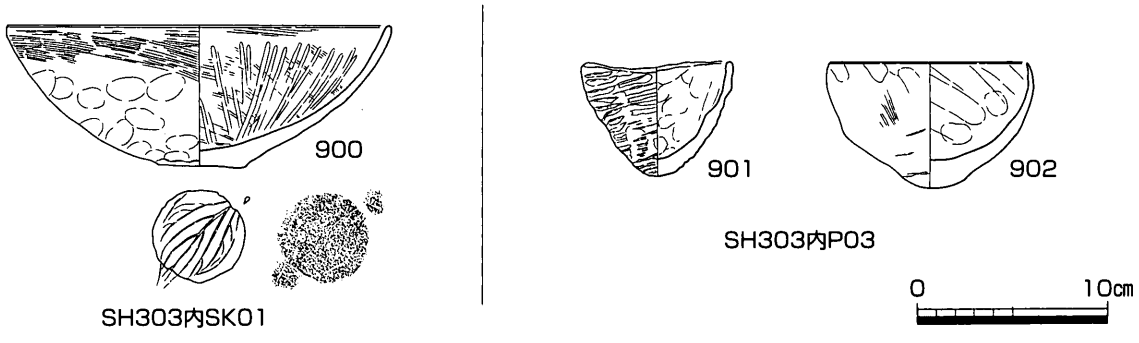
第137図　SH303平・断面図（S＝１／40）



第138図　SH303炭化材検出状況、遺物出土状況（S＝1／40）

みであり、器形についての全容は把握しにくいが、図示しているものの中で傾向を見てゆく。口径のみで分けると、概ね10cm 前後の小型品（884）と15cm 前後の大型品（885～889）が認められる。体部上半から口縁部にかけての状況を見ると、屈曲のゆるいもの（887）、やや屈曲の強いもの（884・885）、屈曲の強いもの（886・888・889）が認められる。底部の遺存する資料は少ないが、884のようにわずかに平底をもつものが認められる。891～897・900～902は鉢である。891・897は床面出土、900は住居内土坑およびベッド状遺構上面、901・902は主柱穴SH303P03内からそれぞれ出土している。その他は包含層からの出土である。900については破片がやや散らばった状況で出土した（第138図）ものが接合している。器形については大きく分けると、大（892・900）・中（891・893・902）・小（895・901）のサイズに分けることが可能で、中型のものは深く、大型・小型のものは浅い器形を呈する。また、中型のものは内外面の調整が粗い傾向が認められる。大型のものは内外面の調整が精緻に行なわれている。896・897は底部のみ、892は口縁の資料であり、他の器種と誤認している可能性もある。特に892は口縁部の形状が後に触れる高坏と類似することから、高坏である可能性もある。底部の状況が不明であることから鉢として分類している。898は高坏である。床面直上出土であるが、脚部は遺存しない。899は凹基式の



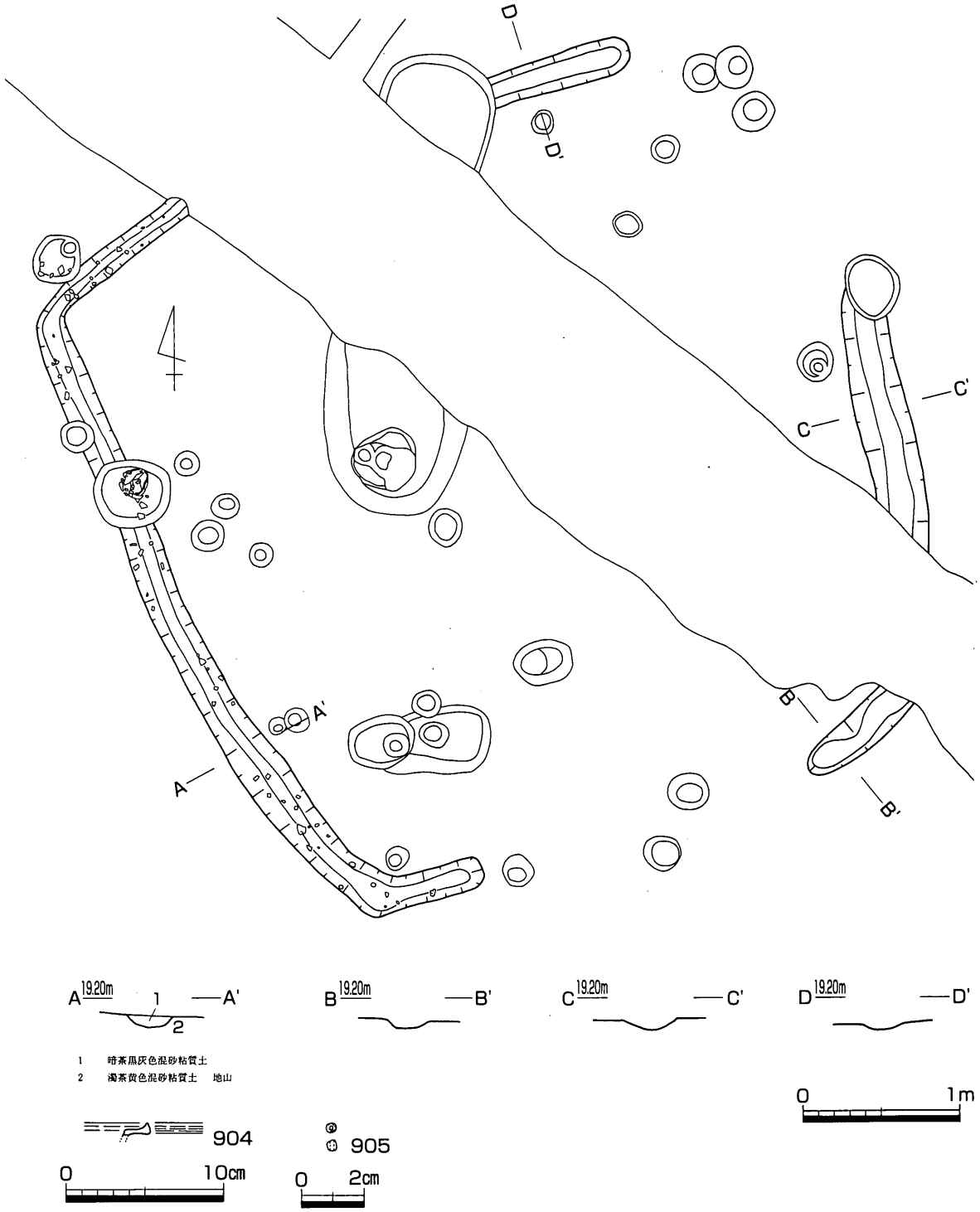


第139図　SH303・SH303内SK01・SH303内P03出土遺物（S＝１／４・１／２）

サヌカイト製石鏃である。表裏中心部に素材面を残し、周縁部に二次調整を施して整形するものである。当遺構の時期については、出土遺物から弥生時代終末期のものであると想定する。

なお、当住居跡出土の炭化材（第138図サンプリング１～５）について樹種同定を試みた（第３章第１節）。詳細はそちらへ委ねる。

第140図　SH304平・断面図（S＝1／40）、出土遺物（S＝1／4）



第141図　SH305平・断面図（S＝１／40）、出土遺物（S＝１／４・１／２）

SH304（第140図）

C－１・C－２グリッドにまたがって検出した竪穴住居跡である。SD303に切られて検出しており、これに先行する遺構である。概ね半円形に巡る溝状遺構として検出しているが、最低３ヶ所において屈曲点が認められることから、平面形が多角形を呈する竪穴住居の壁溝であると想定した。溝状遺構の深さは概ね0.12～0.15mを測る。床面には多数の柱穴が認められるが、明確に当竪穴住居に伴うと断言できるものは不明である。推測の域を出ないが、SP597・599・638・671の４基を直線で結んでゆくと概ね壁

溝と並行するラインが引けることから、柱の芯々間距離は2.50～3.00mとばらつきが認められるものの、これを主柱穴としてみておきたい。竪穴住居の規模は、SP597・671あるいは溝の端部を中心軸として反転させると直径７m前後の大きさ（床面積約38.5㎡）に復元することが可能である。主柱穴の数は６～７基程度であると想定する。なお、主柱穴に囲まれた範囲内には焼土・炭化物は認められないことから、炉跡などの住居に関連する遺構は先述した一部の壁溝および主柱穴以外認められず、ほとんどが削平に伴い消滅していると言える。出土遺物は壁溝内から細片化した土器およびサヌカイト剥片が出土しているが、詳細は不明である。１点のみ図化した。903は弥生土器甕底部である。帰属する時期は不明であるが、出土遺物から弥生時代後期のものと想定する。

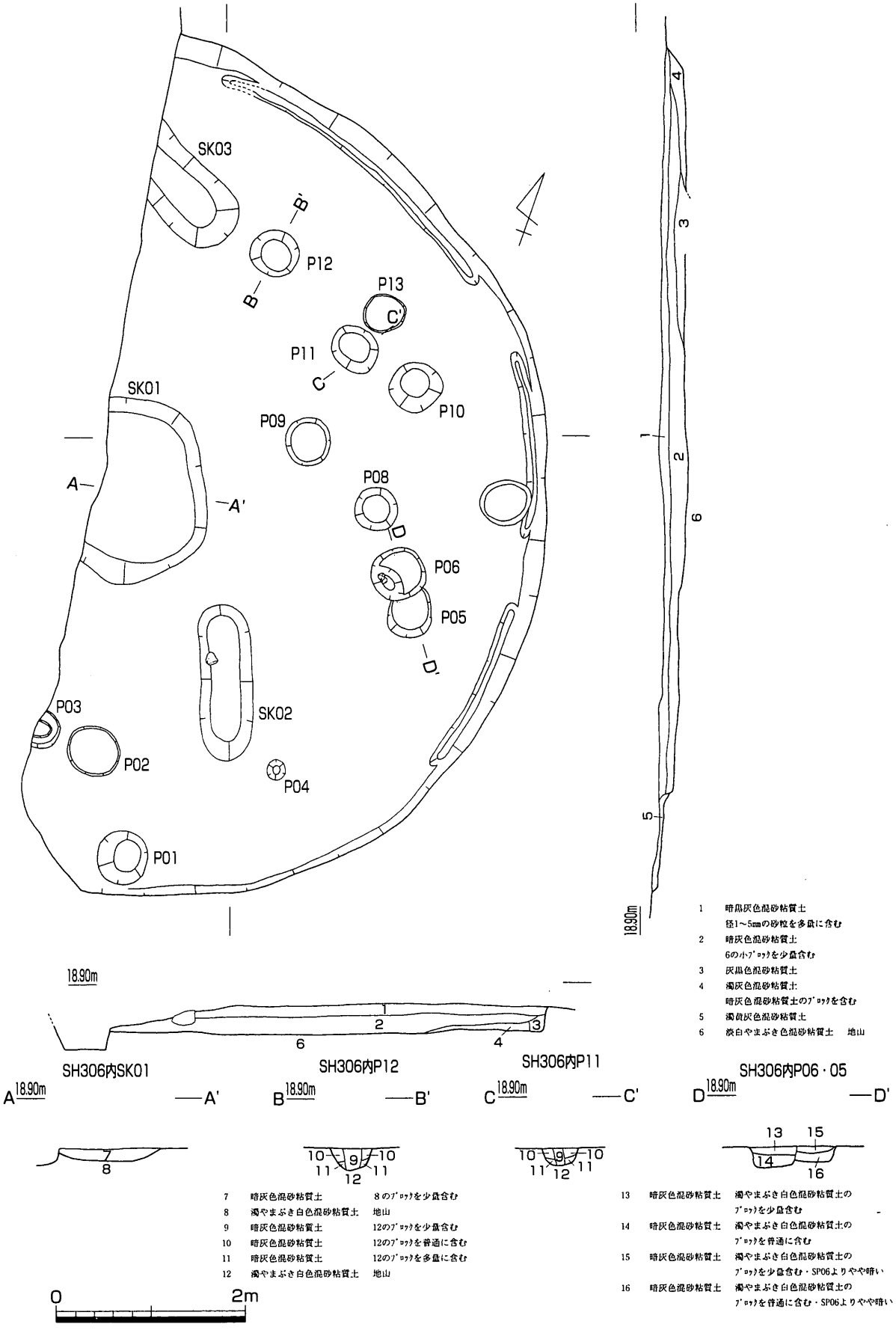
SH305（第141図）

C－２グリッド西端中央で検出した竪穴住居跡である。住居のほぼ中央を後世の畦畔構築に伴う削平により削平されている。SH304と重複して検出しており、切り合いから同遺構に後出する遺構である。断片的に歪な方形に巡る溝状遺構として検出しており、住居の壁溝であると想定する。遺存している溝の状況から見て概ね長辺５m、短辺4.50mの規模の方形住居（床面積約22.5㎡）が復元できる。溝の深さは0.08mほどが遺存しているのみである。主軸方位はN29°Wを測る。壁溝に囲まれた範囲内には土坑・柱穴が若干認められるものの、当竪穴住居に伴うと判断できるものは認められない。竪穴住居全体が著しく削平されているものと想定できる。出土遺物は壁溝内からごくわずかに細片化した弥生土器が出土しているほか、ガラス製小玉が１点出土している（第141図904・905）。帰属する時期は不明であるが、概ね弥生時代後期のものと想定しておく。

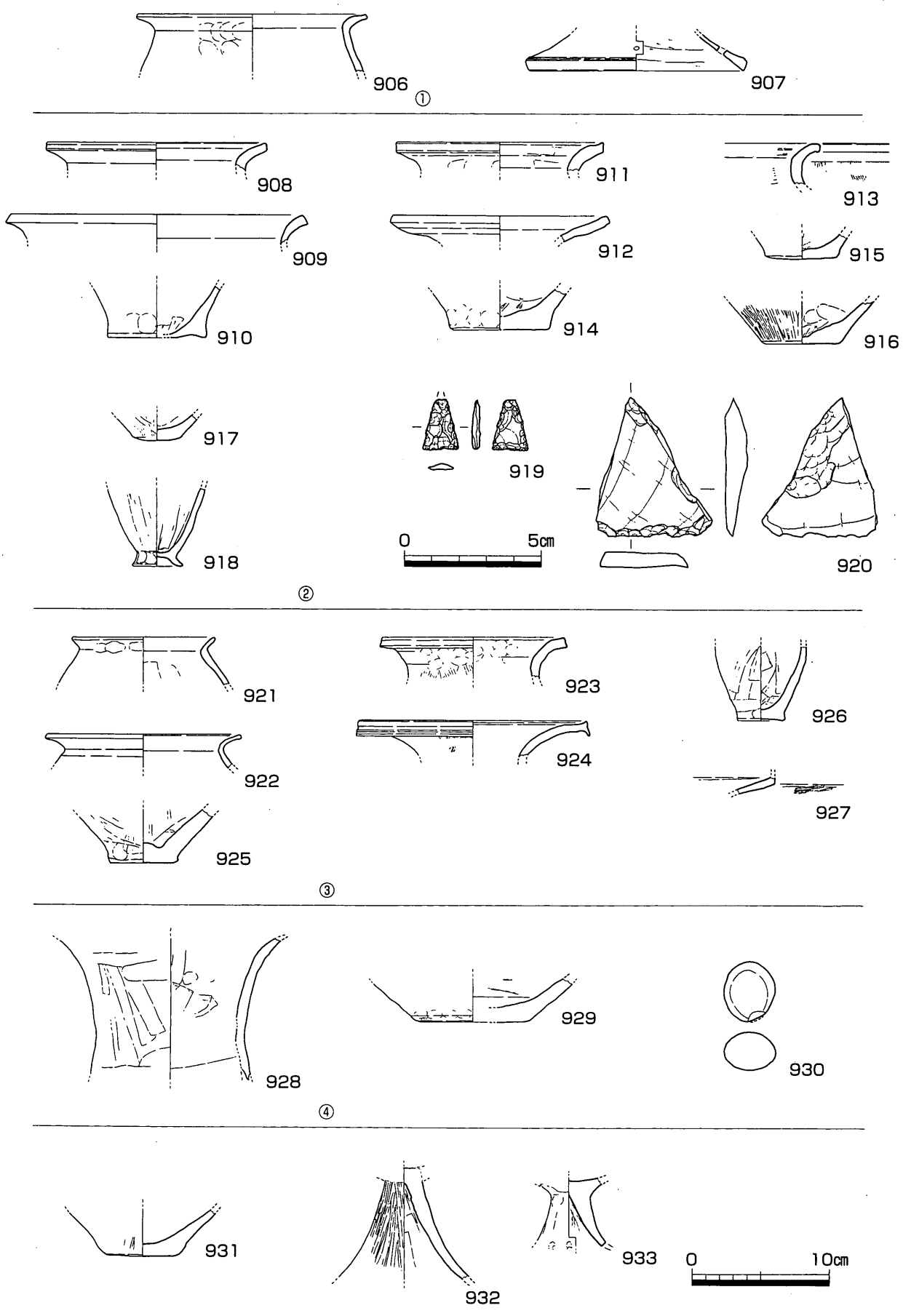
SH306（第142～146図）

B－１グリッド南端で検出した竪穴住居跡である。直径９m前後の円形住居（床面積約63.6㎡）であると想定できるが、西半分が調査対象地外へ延びているほか、南端を撹乱により削平されており、詳細は不明である。検出面から床面までの深さは概ね0.30m前後を測る。埋土は上層に暗黒灰色砂混じり粘質土、下層に地山ブロックを少量含む暗灰色砂混じり粘質土がそれぞれ堆積するほか、北壁裾床面直上で濁灰色砂混じり粘質土が、南壁裾床面直上で濁黄灰色砂混じり粘質土がそれぞれ堆積する。地山は淡白やまぶき色砂混じり粘質土である。この地山層は住居南側壁裾付近の濁黄灰色砂混じり粘質土が堆積している範囲で一段0.10mほどのギャップが認められ、地山削り出しのベッド状遺構を形成していた可能性が想定できる。このギャップは北壁付近では認められないことから、ごく限られた範囲でのみ存在した可能性がある。また、北から東に面する範囲に断片的ながら灰黒色砂混じり粘質土を埋土に持つ溝状遺構が存在し、壁溝の存在が想定できる。床面からは土坑３基と柱穴13基を検出した。特に柱穴においてはいずれもほぼ同一面での検出であり、主柱穴の抽出は困難である。P２・P６・P12については柱の芯々間距離が3.75m前後とほぼ等間隔であることから、これらが主柱穴である可能性が想定できる程度である。

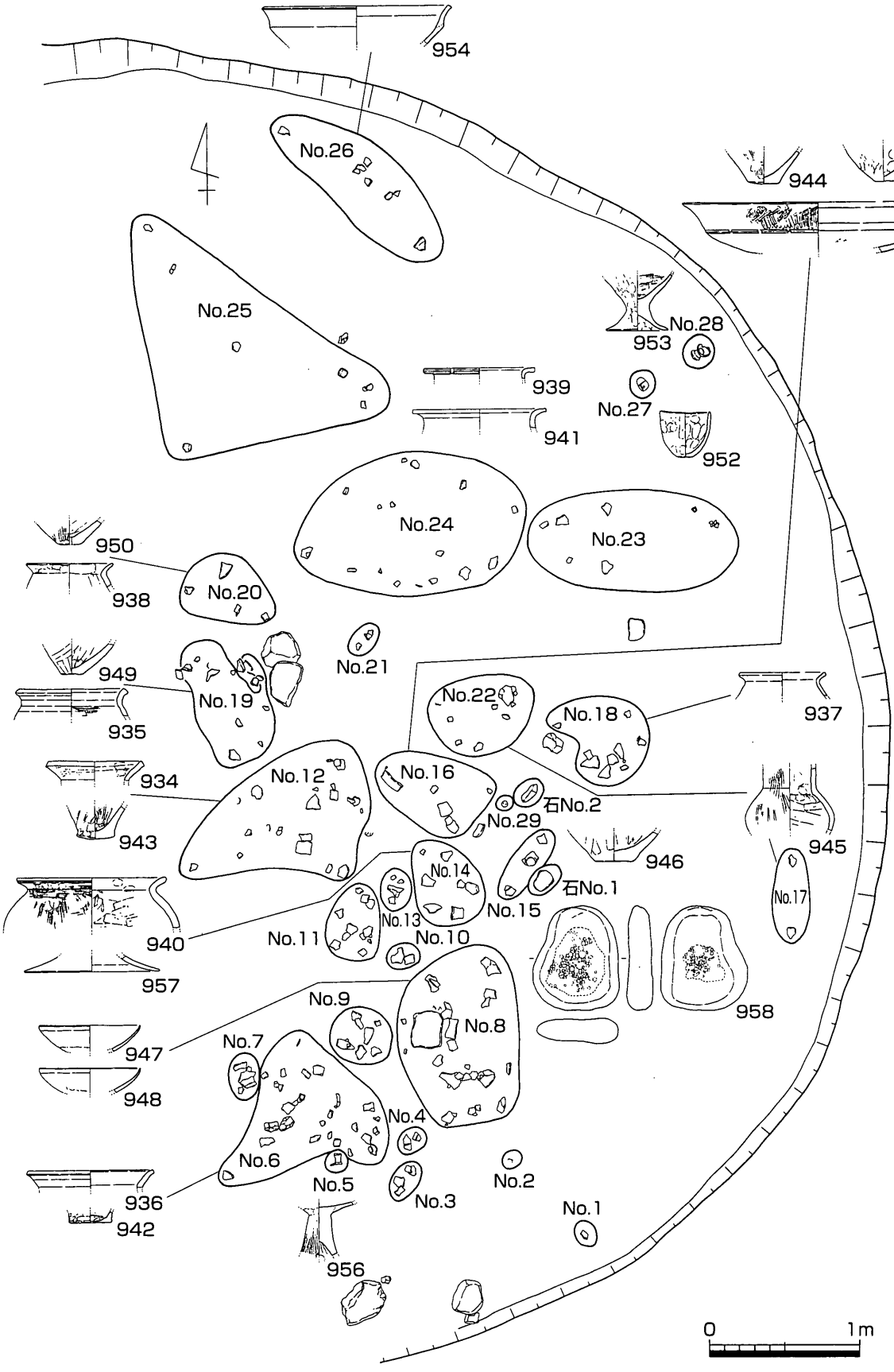
出土遺物は、上層埋土中に図示していないものの須恵器がわずかに認められるほかは、ほとんどが弥生土器である。遺物量が多く比較資料として用いうるSH303出土資料と比較すると、器形が明確に判別できる資料が少なく、遺存状況は当住居の方が不良である。第143図は住居内埋土出土遺物のうち、住居を掘削する際に分割したブロック単位で取上げたものを掲載している。認められる器種は甕・壺・鉢・



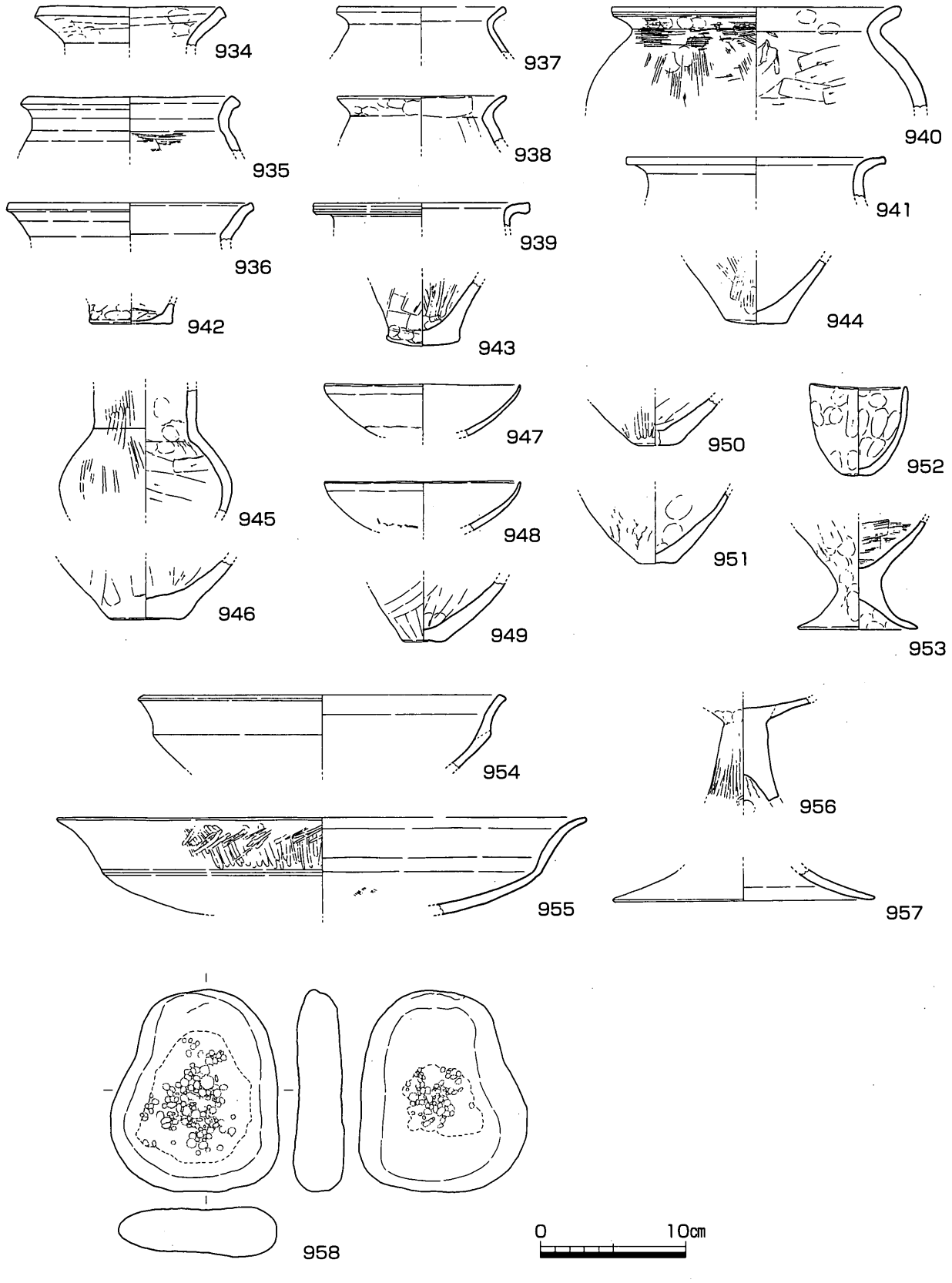
第142図　SH306・SH306内SK01・SH306内P05・06・11・12平・断面図（S＝1／60）



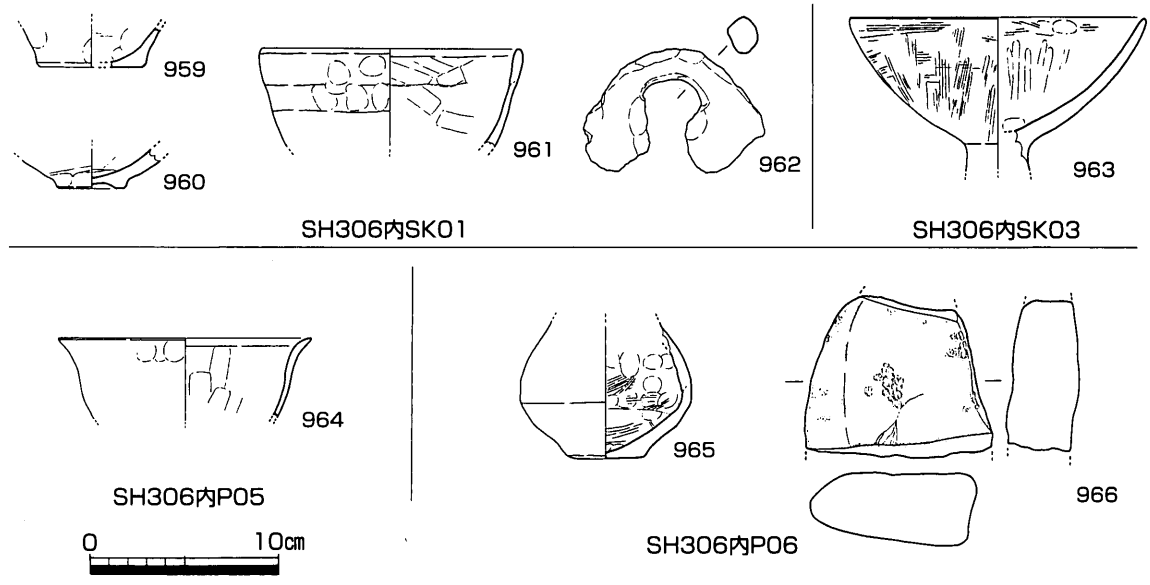
第143図　SH306出土遺物１（S＝１／４・S＝１／２）



第144図　SH306遺物出土状況平面図（S＝１／40）



第145図　SH306出土遺物２（S＝１／４）



第146図　SH306内SK01・03、SH306内P05・06出土遺物（S＝1／4）

高坏のほかにサヌカイト製の石鏃・スクレイパー（919・920）及び安山岩質斑岩[3]製磨石？（930）が認められる。いずれも埋没に伴う周辺からの流れ込み資料であると想定する。第145図には住居内埋土出土遺物で出土位置を記録したものを掲載した。認められる器種は甕（934～944）・壺（945・946）・鉢（947～953）・高坏（954～957）のほか、砂岩製の台石（958）である。垂直分布図が作成できなかったためわかりにくいが、床面から0.10m程浮いたものが多く、これも流れ込み資料の可能性がある。第144図に平面分布図を示しているが、やや住居南側に遺物が纏まる傾向があることから、高い南側から流入したものがこのあたりに溜まった可能性が想定できる。第146図は住居床面に掘り込まれた柱穴及び土坑出土の遺物を掲載した。小片に近いものが多いが、963の高坏や965の壺は比較的器形が判別しやすい状況で出土している。959は甕底部である。その他は鉢に分類している。また、966は砂岩製の台石である。

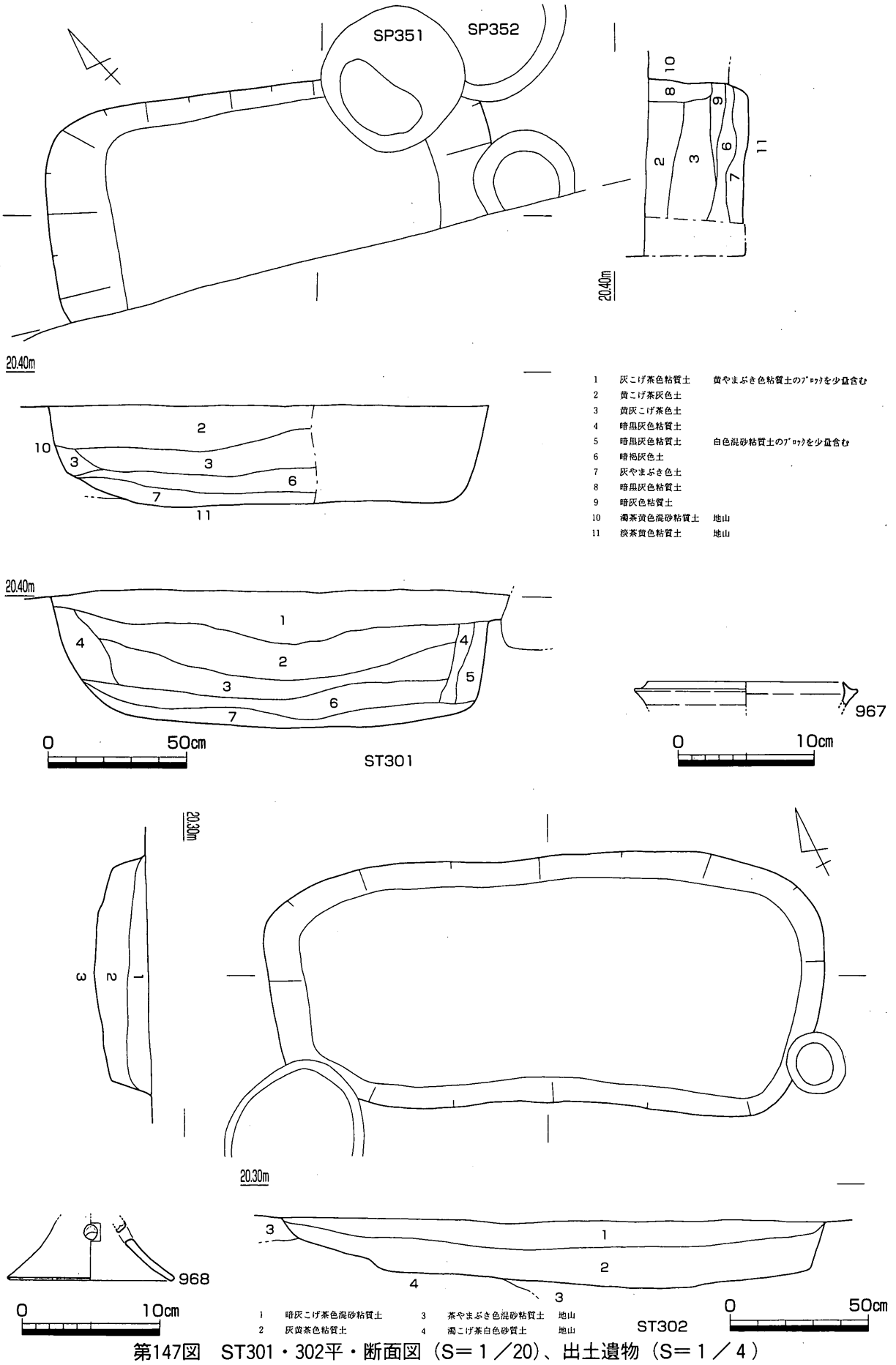
これらの遺物から当遺構は弥生時代後期後半のものと想定する。

（2）土坑墓

当該遺構としたものは6基検出した。調査区の中央付近以南、A－1・B－1・2グリッド以外の全てのグリッドで検出している。分布は若干のまとまりは認められるが散漫である。土坑墓としたものについては、平面プランが長方形を呈するものを抽出した。これらの大半は、等高線に対して主軸あるいは長軸が直交ないしは並行する傾向が認められる。ただし、棺痕跡については不明なものが大半である。

一方、土坑としたものはプランが不整形あるいは円形に近いものを抽出した。長楕円形のものについては長軸が等高線に対して直交ないしは並行するものが認められるものも存在する。以下個別の説明を

3　石材の種別名は成重遺跡Ⅰ・池の奥遺跡・金毘羅山遺跡・原間遺跡などの各報告書を参考にした。当報告書では淡緑灰色を呈するややガラス質の石基に白色の斑晶を多く含む緻密な石材を指す。詳しく計測していないが、手に持った感触から比重は比較的重いと見られる。報告書の発行年度は文末を参照されたい。



第147図　ST301・302平・断面図（S＝1／20）、出土遺物（S＝1／4）

行なう。

ST301（第147図）

調査区南壁中央部、E-2グリッドで検出した土坑墓である。SD301により東端が削平されているほか、北東隅部がSP351・352によって破壊されていることから、これらの遺構に先行する遺構である。また、一部が南側調査対象地外へ延びることから、平面形については詳細不明であるが、検出した部分から想定すると、平面形は長辺1.60m、短辺現存最大長0.70mを測る隅丸の長方形を呈する。主軸方位はN55°Wを測る。検出面からの深さは0.35mであるが、調査区南壁にかかる同遺構の深さは0.49mあり、本来は最低でも0.50mほどの深さがあったものと想定できる。埋土は暗黒灰色・暗黄灰色・暗灰色の粘質土からなり、量の多寡はあるものの地山ブロックを含む。地山は上層が濁茶黄色砂混じり粘質土、下層が淡茶黄色粘質土であるが、埋土中に含まれる地山ブロックは下層のものが中心となる。調査区南壁土層および土坑墓横断土層においては掘方壁際にて0.05～0.12mほどの厚さで縦位に堆積する地山ブロックを含まない暗黒灰色粘質土が認められる。これらの堆積部位には若干差異が認められるため、慎重にならざるを得ないが、棺痕跡の可能性が想定できる。

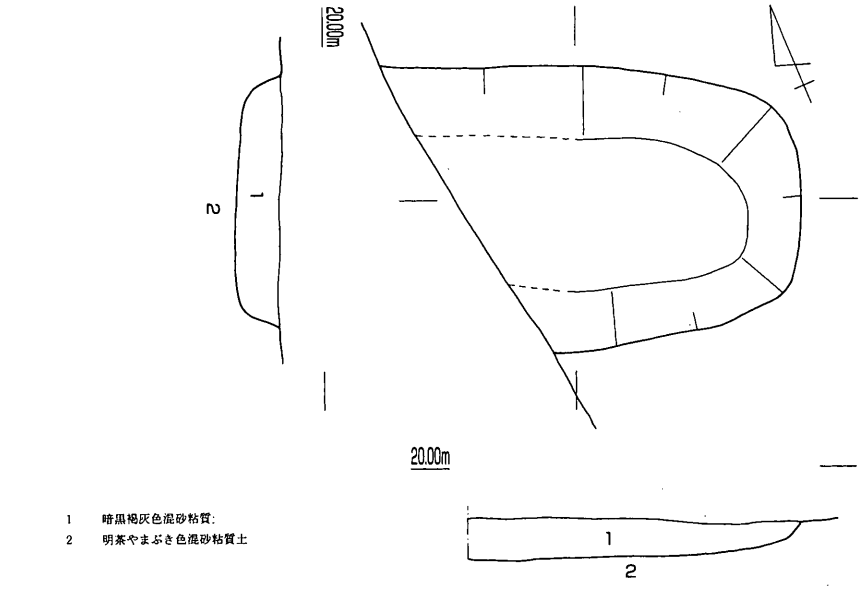
出土遺物は埋土中に弥生土器の小片を多く含むほか、須恵器の小片をわずかに含む以外、副葬品などの明確な遺物は無く、時期決定が困難である。第147図967は須恵器坏身である。周辺の遺構や包含層中に6世紀後半頃の須恵器が認められることから、概ね同時期の遺構が存在する可能性が想定できるが、当遺構の時期としては6世紀後半以降の所産であると想定できるに過ぎない。

ST302（第147図）

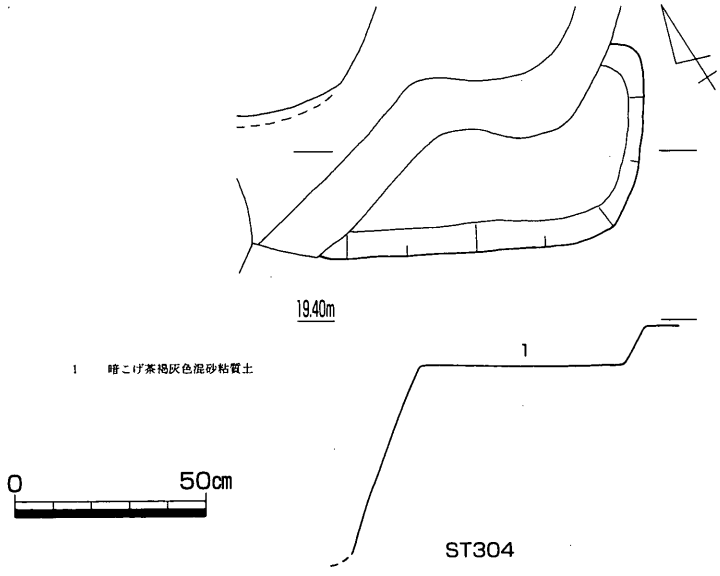
調査区南西隅・E-2グリッド北西隅付近で検出した土坑墓である。長辺2m、短辺0.90m、深さ0.22mを測り、平面形はやや歪な長方形を呈する。主軸方位はN63°Wを測る。長軸断面は東壁がやや直立するが、西壁は底部へ向けて緩やかな傾斜を持つ。短軸断面は浅い箱状を呈する。上層は暗灰こげ茶色砂混じり粘質土・下層は灰黄茶色粘質土からなる。棺痕跡が認められないことからやや難があるかもしれないが、平面形状から土坑墓とした。出土遺物は埋土中に弥生土器の小片を含むほかは、副葬品などの明確な遺物は認められない。第147図968は弥生土器台付鉢の脚台である。遺構の時期については不明である。

ST303（第148図）

調査区西壁際・D-1グリッド東辺中央付近で検出した土坑墓である。西半分が調査対象地外へ延びることから詳細な規模については不明であるが、検出できた部位から推定すると長辺1.10m以上・短辺0.74m、検出面からの深さは0.12mを測る。平面形状は隅丸の長方形を呈すると想定できるがコーナーの丸みがやや強く見える。主軸方位はN67°Wを測る。長軸断面は浅い皿状を呈するが、短軸断面は浅い箱状を呈する。埋土は暗黒灰色砂混じり粘質土の単層である。棺痕跡は認められないことからやや難があるかもしれないが、平面形状から土坑墓とした。出土遺物は弥生土器の細片が出土するのみで、副葬品などの明確な遺物は認められず、時期については不明である。調査区西壁土層の堆積状況（第133図・付図3）を観察すると、本来の遺構の掘り込み面は明茶やまぶき色砂混じり粘質土上に堆積する包含層上面であることから、先述したST301に後出することがわかるに過ぎない。



ST303

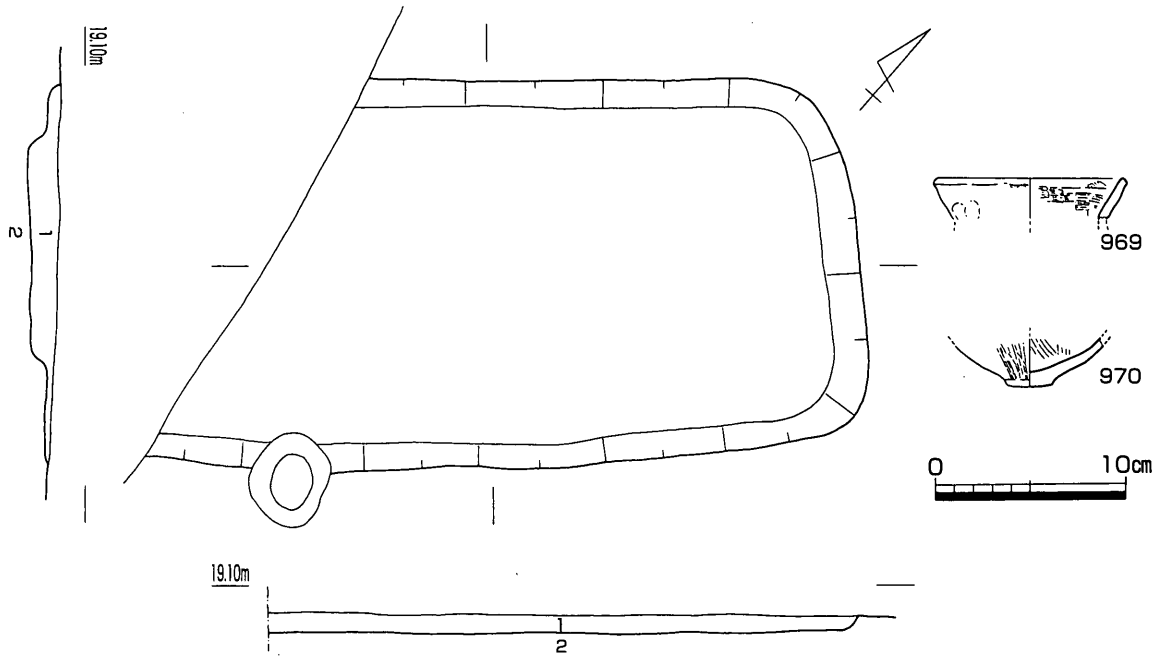


ST304

第148図　ST303・304平・断面図（S＝1／20）

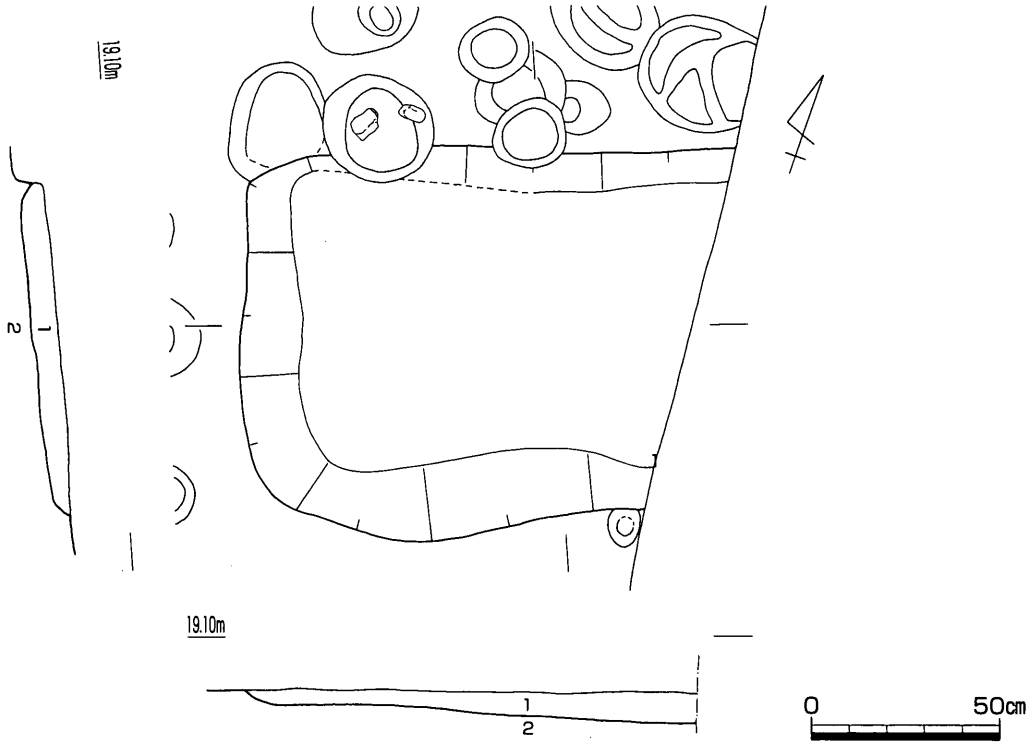
ST304（第148図）

調査区西側・C－1グリッド南東隅で検出した土坑墓である。大半がSK306に破壊されており、詳細な規模は不明である。残存部から推定すると、長辺0.85m以上、短辺0.52m程度、深さ0.10mを測る規模を持つと想定できる。平面形状は隅丸の長方形を呈すると想定できる。主軸方位はN58°Wを測る。断面形状は浅い箱状を呈すると想定できる。埋土は暗こげ茶褐灰色砂混じり粘質土の単層である。棺痕跡は認められないことから、やや難があるかもしれないが、平面形状から土坑墓とした。出土遺物は弥生土器の細片を含むのみで、副葬品などの明確な遺物は認められず、時期については不明である。



1　暗灰色粘質土
2　明やまぶき色混砂粘質土

ST305



1　暗黒灰色混砂粘質土
2　淡茶やまぶき色混砂粘質土　地山

ST306

第149図　ST305・306平・断面図（S＝1／20）、ST305出土遺物（S＝1／4）

ST305（第149図）

調査区西壁際・C－1グリッドで検出した土坑墓である。西側が調査対象地外へ延びるため、詳細な規模については不明であるが、検出できた部位から推定すると長辺1.90m以上、短辺1m、検出面からの深さ0.08mを測る。ただし、調査区西壁土層（第133図・付図3）で観察すると掘り込み面は周辺の地山である明やまぶき色砂混じり粘質土上面で0.15mの深さがあることから、機械掘削時に周辺の地山と共にやや掘り下げすぎてしまったことが判明した。平面形状は隅丸の長方形を呈すると想定できる。主軸方位はN50°Eを測る。断面形状は現状では浅い箱状を呈する。埋土については第149図では暗灰色粘質土の単層に見えるが、西壁土層では4層の埋土を持つことがわかる。また、北辺の壁に沿うようにやや傾くものの、棺痕跡と見られる埋土が確認できる。この状況と平面形状から土坑墓であると判断した。

しかし、埋土中に弥生土器の小片をやや多く含む以外、副葬品などの明確な遺物は認められない。弥生土器片もほとんど接合は見られず、ある程度形状がわかるものは第149図969·970に図示した弥生土器程度である。

ST306（第149図）

調査区東壁際・C－2グリッドで検出した土坑墓である。東側が調査対象地外へ延びることから詳細な規模については不明であるが、検出できた部位から推定すると長辺1.30m以上、短辺1.04m、深さ0.07～0.08mを測る。平面形状は隅丸の長方形を呈するものと想定できる。主軸方位はN70°Eを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土については暗黒灰色砂混じり粘質土の単層である。棺痕跡が認められないことから、やや難はあるかもしれないが、平面形状から土坑墓とした。

出土遺物は埋土中に弥生土器の小片をやや多く含む以外、副葬品などの明確な遺物は認められない。弥生土器片もほとんど接合は見られず、所属時期の決定要素となりえない。したがって、時期不明である。

（3）土坑

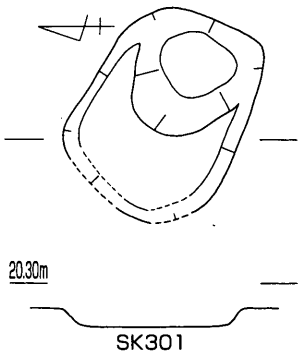
当該遺構としたものは18基検出した。調査区北端以外で検出している。ややまとまりを持って検出しており、粗密があることがうかがえる。なお、土坑墓との区分は先に記したとおりである。

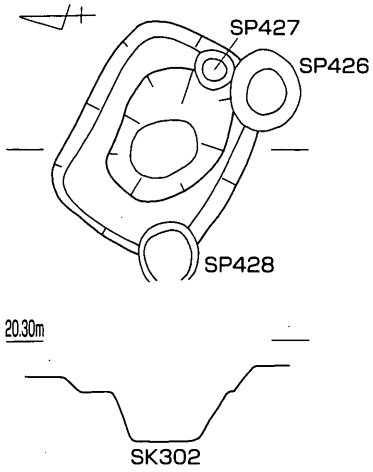
SK301（第150図）

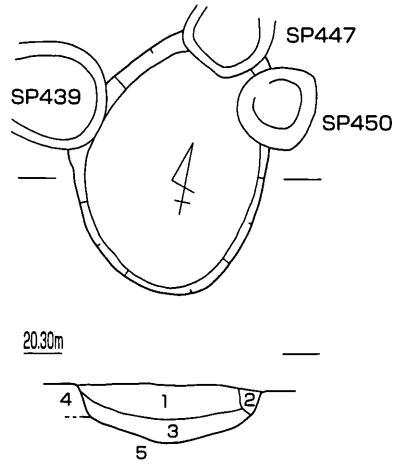
調査区南端、E－2グリッド北西で検出した土坑である。SH302南東隅に近接する。平面形は長軸1.12m·短軸0.82mの隅丸で寸詰まりの長方形を呈し、深さは0.10mを測る。主軸方位はN62°Wを測る。断面形は皿状を呈するが、東半分がやや掘り下がる。ST302と主軸が近似することから土坑墓である可能性も想定できるが、長軸と短軸の比率が近いことから、ここでの土坑墓の基準から外れるため、土坑扱いとした。出土遺物は弥生土器片が若干認められるものの、時期・形状のわかるものがなく、詳細は不明である。

SK302（第150図）

E－2グリッド、SK301に隣接して検出した土坑である。SH302・SP432を切っていることからこれらに後出し、SP426・427・428に切られていることからこれらに先行する遺構であることがわかる。平面

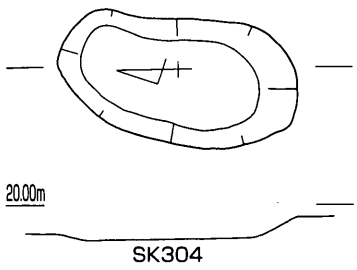


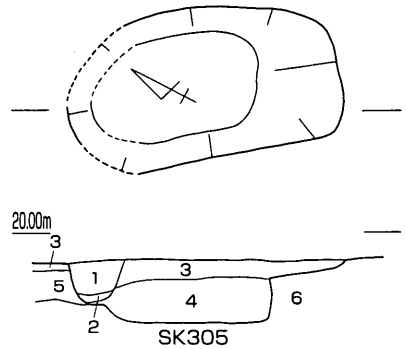




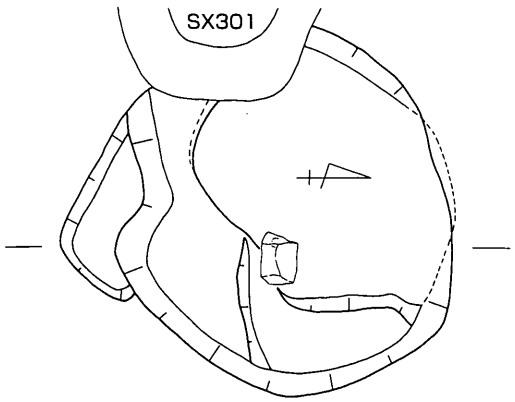
1	淡茶やまぶき色混砂粘質土	暗こげ茶褐色混砂粘質土のﾌﾞﾛｯｸを少量含む
2	暗こげ茶褐色混砂粘質土	淡茶やまぶき色混砂粘質土のﾌﾞﾛｯｸを少量含む
3	褐白やまぶき色混砂粘質土	暗こげ茶褐色混砂粘質土のﾌﾞﾛｯｸを少量含む
4	淡茶やまぶき色混砂粘質土	地山
5	褐こげ茶灰色砂質土層	地山

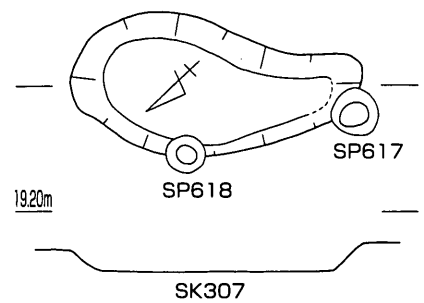
SK303

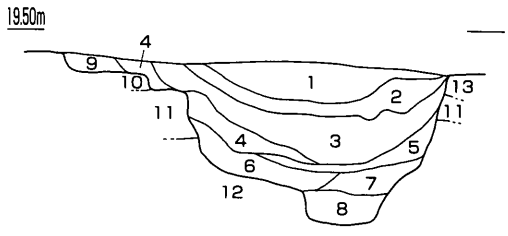




1	暗こげ茶灰色粘質土	褐茶黄色混砂粘質土のﾌﾞﾛｯｸを少量含む
2	暗灰色粘質土	
3	暗灰こげ茶色混砂粘質土	
4	暗黄こげ茶色混砂粘質土	
5	褐茶黄色混砂粘質土	地山
6	黄こげ茶灰色混砂粘質土	地山







1	褐白灰色砂質土	
2	褐茶白色砂	径1～3mm程度の砂粒
3	暗灰色砂質土	褐茶白色砂を少量含む
4	褐白茶色砂	径1mm以下の砂粒
5	淡黄茶色砂	径1～2mm程度の砂粒
6	褐茶灰色砂質土	
7	茶黄灰色砂質土	
8	青灰色砂質土	
9	暗こげ茶褐灰色混砂粘質土	ST306
10	黄やまぶき色混砂粘質土	地山
11	褐こげ茶白色砂質土	
12	褐白こげ茶色砂層	径1mm以下の砂粒　地山
13	褐こげ茶白色砂層	径1～2mm程度の砂粒　SD03

0　1m

第150図　SK301～307平・断面図（S＝１／40）

形は長辺1.18m・短辺0.90mの隅丸で寸詰まりの長方形を呈する。主軸方位はN60°Wを測る。底部は二段に掘り込まれ、深さは最深部で検出面から0.36mを測る。SK301同様、主軸がST302と近似することから、土坑墓の可能性が想定できるが、不整形な断面形状を持つことから土坑とした。出土遺物は弥生土器片が若干認められるものの、時期・形状のわかるものがなく、詳細は不明である。

SK303（第150・151図）

調査区西壁際南端付近、E－2グリッド北西隅で検出した土坑である。SP439・447・450に切られており、これらに先行する遺構であることがわかる。平面形は長軸1.40m前後・短軸1.06mのやや歪な楕円形を呈する。主軸方位はほぼ真北である。深さは最深部で0.31mを測る。断面形状は浅い椀状を呈する。埋土は上層2層・下層1層に分けることができる。上層は淡茶やまぶき色砂混じり粘質土・暗こげ茶褐色砂混じり粘質土で相互にブロックが少量含まれており、若干攪拌を受けている可能性が想定できる。下層は濁白やまぶき色砂混じり粘質土で2層ブロックが少量含まれる。

出土遺物は弥生土器片のほかに流紋岩製と見られる砥石が1点認められた。器形が想定できるものを2点図示した。第151図971は弥生土器甕である。972は砥石である。ほぼ全面に使用に伴うと想定できる擦痕が認められるほか、受熱に伴うとみられる剥落痕および赤化が認められる。時期については遺物が少なく不明である。

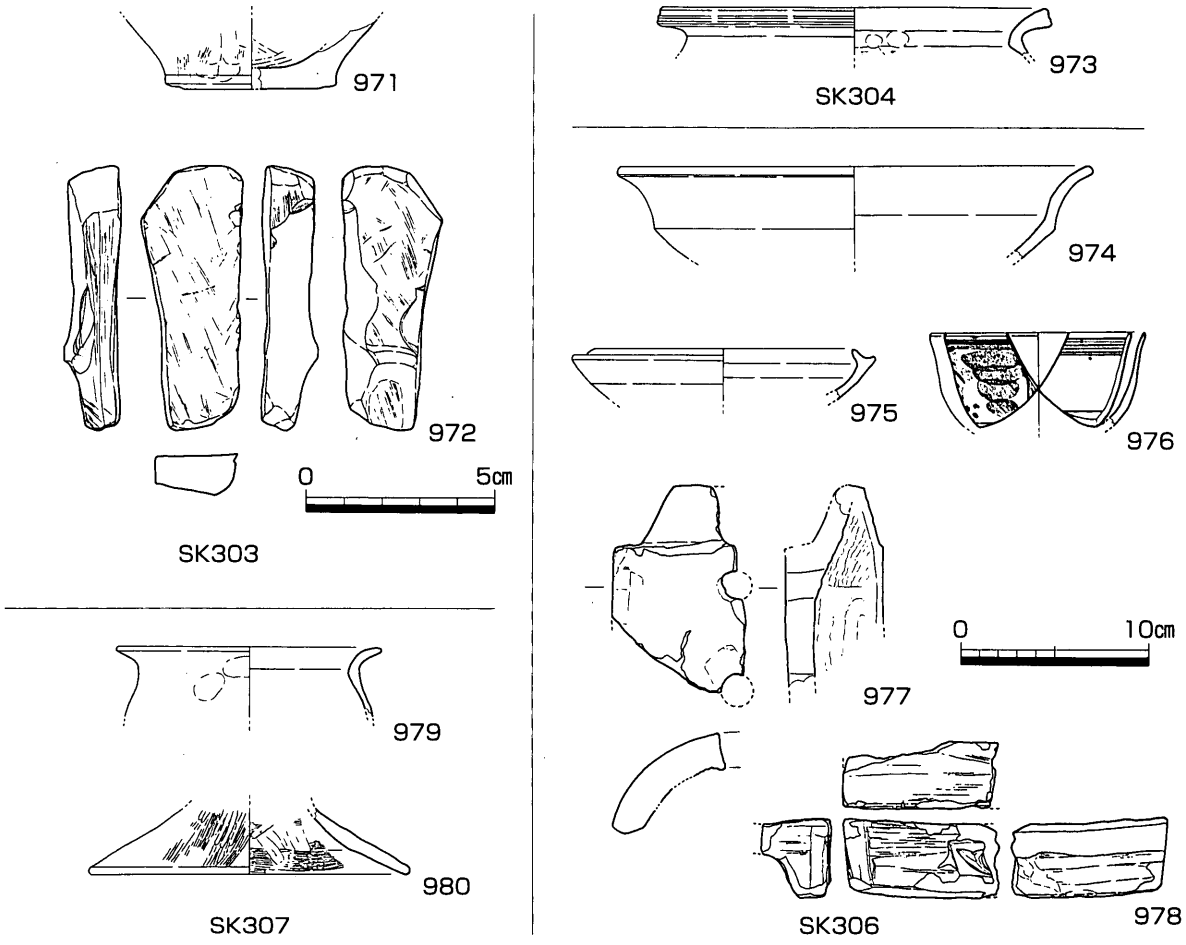
SK304（第150・151図）

調査区南半東寄り、D－2グリッドで検出した土坑である。平面形状は長軸1.30m・短軸0.68mの歪な長楕円形を呈する。主軸方位はN9°Eを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは0.10m前後を測る。北側がやや浅い形状となるが、上面が削平されていることに起因するものと想定できる。出土遺物は弥生土器の小片が認められたのみである。形状のある程度わかるものを1点図化した（第151図973）。弥生土器甕である。口縁部の小片であるため、詳細は不詳であるが、口縁端部をやや肥厚させたものである。また、頸部内面にはやや明瞭な稜線を持つ。遺構の時期については、他に時期を想定できる遺物がないことから不明である。

SK305（第150図）

調査区南半中央、D－2グリッドで検出した土坑である。SP493・494に切られることから、これらに先行する遺構であることがわかる。平面形状は柱穴の撹乱を受けていることからはっきりしないが、長軸1.46m・短軸0.80mの長楕円形ないし隅丸の長方形が想定できる。主軸方位はN50°Wを測る。断面形状は上面が浅い皿状を呈するが、北側に偏った落ち込みを伴う。落ち込みの壁はほぼ直立し、底部は平坦である。深さは検出面から0.35mを測る。埋土は暗こげ茶色砂混じり粘質土の上層と暗黄こげ茶色砂混じり粘質土の下層に二分できる。

出土遺物は弥生土器片が若干出土しているものの、時期・形状が判断できるものがなく、詳細は不明である。



第151図　SK303・304・306・307出土遺物（S＝1／4・1／2）

SK306（第150・151図）

調査区中央西壁寄り、C－1グリッド南東隅付近で検出した土坑である。ST304・SD303を切っていることからこれらに後出し、SX301に切られることからこれに先行する遺構であることがわかる。平面形状は長軸2m・短軸1.80mの歪な楕円形を呈する。断面形状は全体的に不整形な椀状を呈するが、北側の一部で壁がオーバーハングする他、南側は階段状を呈する。北寄りの部分ではさらに一段掘り下がっている。深さは最深部で検出面から0.86mを測る。埋土は8層に分層でき、色調に差はあるものの土質は砂質土層からなる。最下層は滞水に伴うとみられるグライ化した砂質土が認められる。出土遺物は弥生土器・須恵器・染付・瓦片などが認められる（第151図974～978）。974は弥生土器高坏である。ほぼ全面が摩滅しており、調整方法などは不明である。975は須恵器坏身である。立ち上がり部は短く内傾する。6世紀後半頃のものと想定できる。976は染付椀である。977は丸瓦、978は軒平瓦である。いずれも破片であり、詳細は不明であるが、古くても近代のものと想定できる。以上の遺物から見ると、SK306は近代以降の遺構であると想定できる。

SK307（第150・151図）

調査区中央やや北寄り、C－2グリッドで検出した土坑である。SP617・618に切られており、これらに先行する遺構であることがわかる。平面形状は長軸1.54m・短軸0.76mの歪な長楕円形を呈する。主軸方位はN44°Eを測る。断面形状は皿状を呈し、深さは検出面から0.16mを測る。出土遺物は弥生土器の小

片がほとんどである。ある程度形状のわかるものを２点図化した（第151図979・980)。979は甕である。破片資料のため、詳細は不明である。980は高坏である。脚裾部のみの破片資料であることから詳細は不明である。

SK308（第152図）

調査区中央やや北寄り、C－２グリッドで検出した土坑である。SP679が重複していることから、これに先行する遺構であることがわかる。SH305の中央付近で検出したことから、付帯施設である可能性を想定したが、SH305の中央部からずれること、主軸方位が異なることなどから、別遺構であると判断した。北半を撹乱により削平されており、正確な規模は不明であるが、現存の最大長が1.18m・最大幅が0.92mを測り、長楕円形の平面形を呈していたと想定できる。主軸方位はほぼ真北である。深さは検出面から0.03mを測る。出土遺物はわずかに弥生土器片が含まれるほか、摩滅した須恵器の小片がわずかに認められるのみで、詳細は不明である。

SK309（第152図）

調査区中央やや北寄り、C－２グリッドで検出した土坑である。SP673・674に切られており、これらに先行する遺構であることがわかる。西端が柱穴により削平されていることから詳細は不明であるが、長軸0.70m程度・短軸0.44mの隅丸の長方形ないし長楕円形を呈していたものと想定できる。主軸方位はN90°Wを測る。断面形状は皿状を呈し、深さは検出面から0.13mを測るが、中央付近で0.06mほどの浅い落ち込みを伴う。

出土遺物はわずかに弥生土器片を含むのみで、詳細は不明である。

SK310（第152図）

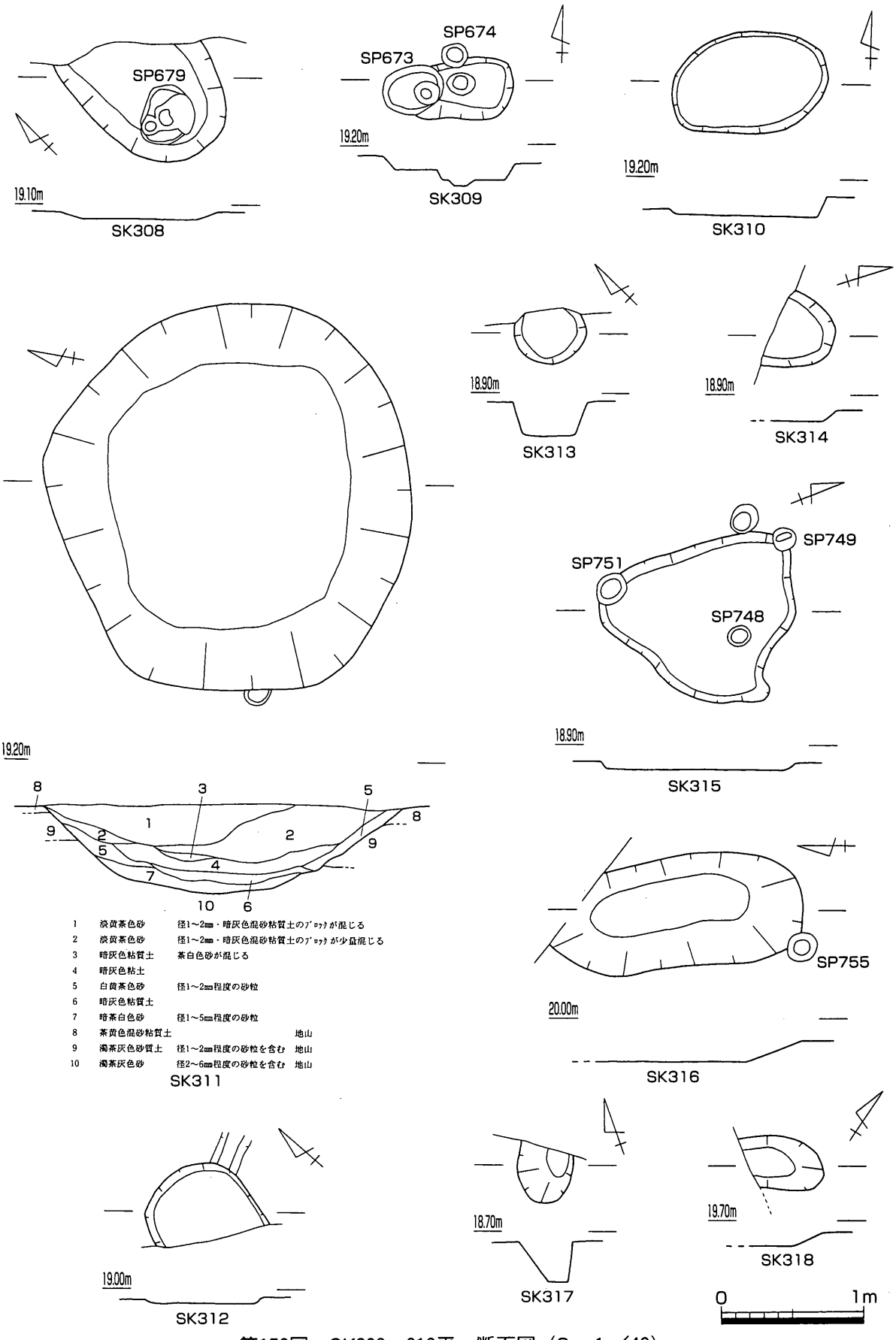
調査区中央やや北寄り、C－１・C－２グリッド境界中央で検出した土坑である。平面形は長軸1.10m・短軸0.74mのやや歪な楕円形を呈する。主軸方位はN75°Eを測る。地形の勾配の影響を受け、検出面は東が高く西が低くなっていることから均等ではないが、深さは東端の最深部で0.15mを測る。底面は平坦に近い。

出土遺物はわずかに弥生土器片を含むのみで、詳細は不明である。

SK311（第152図）

調査区中央やや北寄り、C－１グリッド東辺中央付近で検出した土坑である。平面形は直径2.65m前後を測る歪な円形を呈する。また、断面形状は浅い椀状を呈し、深さは最深部で0.62mを測る。埋土は７層に細分出来るが、概ね上・中・下層の３区分で捉えられる。上層は淡黄茶色砂層からなるが、中層埋土のブロックが混じることから、人為的な埋め戻し行為が想定される。中層は暗灰色粘質土ないし粘土からなり、一定期間滞水状態にあったと想定できる。下層は白黄茶色・暗茶白色の砂層からなる。

出土遺物は若干弥生土器の小片を含むほか、古墳時代後期のものと想定できる須恵器片・７世紀後半～８世紀初頭頃のものと想定できる須恵器坏片の出土が認められるが、小片のため図示できていない。以上の点から古代前半以降の遺構であると想定する。



第152図　SK308～318平・断面図（S＝1／40）

SK312（第152図）

調査区中央やや北寄り、C-２グリッド西辺中央付近で検出した土坑である。南側が攪乱により削平されており、平面形の詳細は不明であるが、東西0.74m・南北0.68mほどの範囲が遺存している。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは0.05mを測る。出土遺物は少量の弥生土器片が出土したのみで、詳細は不明である。

SK313（第152図）

調査区中央北寄り、C-２グリッド北西隅付近で検出した土坑である。北側が攪乱により削平されており、平面形の詳細は不明であるが、長軸0.51m・短軸0.40m程の楕円形に遺存する。断面形状はやや口の開いた箱状を呈し、深さは最深部で0.25mを測る。出土遺物は皆無で、遺構の時期についても不明である。

SK314（第152図）

調査区中央北寄り、C-２グリッド北西隅付近で検出した土坑である。南側が攪乱により削平されており、平面形の詳細は不明であるが、長軸0.44m以上・短軸0.58m程度の楕円形を呈していたものと想定できる。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは0.10mを測る。出土遺物は皆無で、遺構の時期についても不明である。

SK315（第152図）

調査区中央北寄り、C-２グリッド北西隅付近で検出した土坑である。SP748・749・751に切られており、これらに先行する遺構であることがわかる。平面形状は不整形で最大南北1.46m・東西1.21mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは0.05mを測る。

出土遺物は弥生土器片が微量出土するのみで詳細は不明である。

SK316（第152図）

調査区中央北寄り、B-１・C-１グリッドにまたがって検出した土坑である。SP755に切られており、これに先行する遺構であることがわかる。平面形状は北端が攪乱により削平されているが、長軸２m・短軸0.78m程度の歪な長楕円形を呈していたものと想定できる。主軸方位はN８°Wを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは0.14mを測る。

出土遺物は少量の弥生土器片及び微量の須恵器高坏片を含む。遺構の時期は須恵器の存在から古墳時代後期以降のものであると想定できるに過ぎない。

SK317（第152図）

調査区東壁北寄り、B-２グリッドで検出した土坑である。平面形状は北側が攪乱により削平されていることから詳細は不明であるが、長軸0.40m以上・短軸0.40m前後の楕円形を呈していたものと想定できる。断面形状は東へやや傾いた逆台形を呈しており、深さは最深部で0.30mを測る。

出土遺物は弥生土器の小片１点のみで時期決定は困難である。

SK318（第152図）

調査区東壁北寄り、B-2グリッドで検出した土坑である。平面形状は南側が攪乱により削平されていることから詳細は不明であるが、長軸0.60m以上・短軸0.38mの歪な長楕円形を呈していたものと想定できる。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは0.10mを測る。

出土遺物は皆無であり、時期についても不明である。

（4）柱穴（第153～158図・第5表（CD））

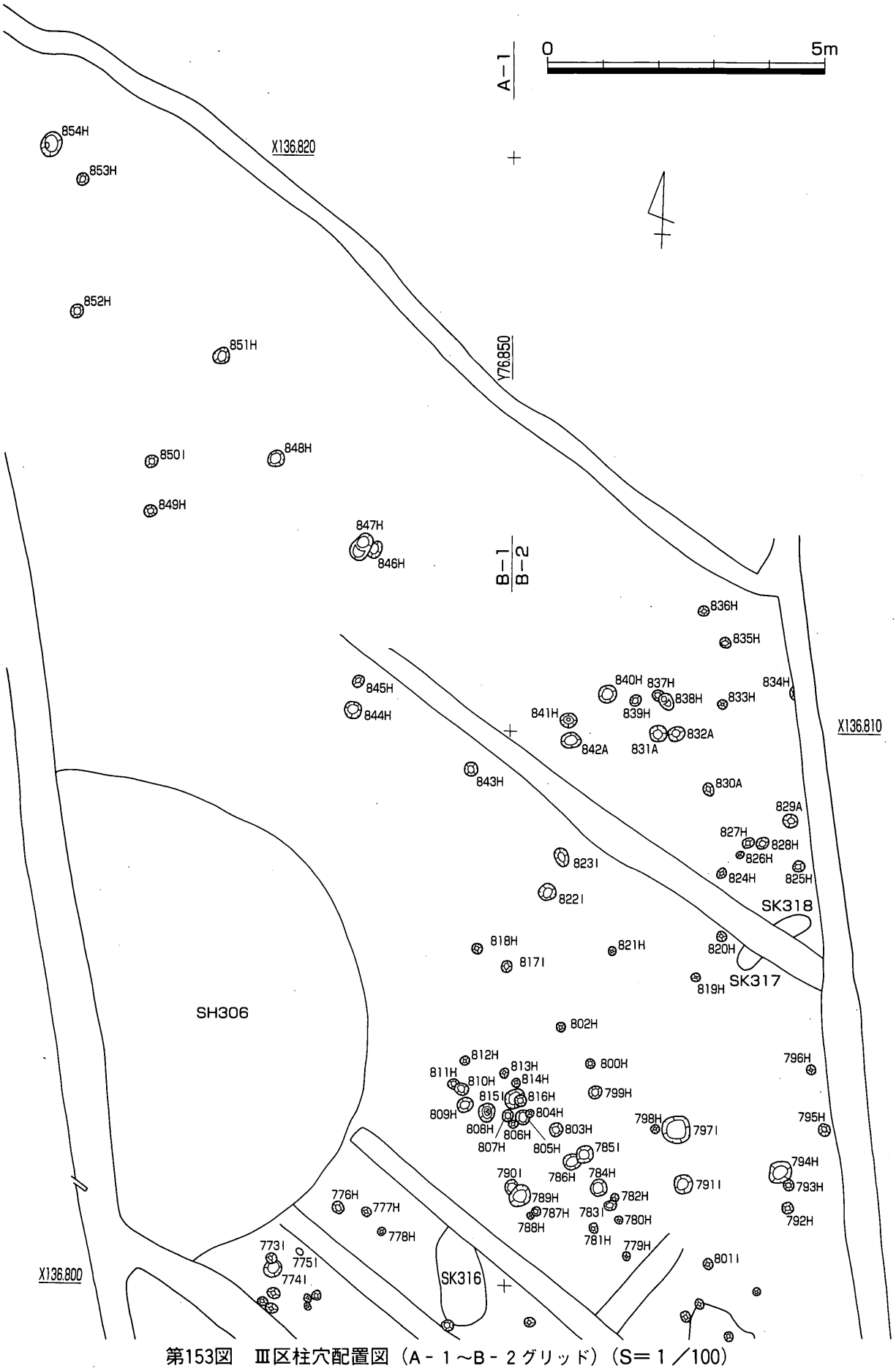
554基検出した。分布は調査区ほぼ全域に亘り、特に集中する部分は認められない。調査区北端においてやや密度が低くなる程度である。埋土の色調は以下の9パターンに分類することが出来る。

A．灰茶色（144基）　B．茶灰色（63基）　C．こげ茶色（14基）　D．灰色（6基）
E．Aに黄茶色のブロックを含む（42基）　F．黄茶色（3基）　G．暗茶灰色（103基）
H．暗灰色（93基）　I．暗灰色（濁白色のブロックを含む）（64基）

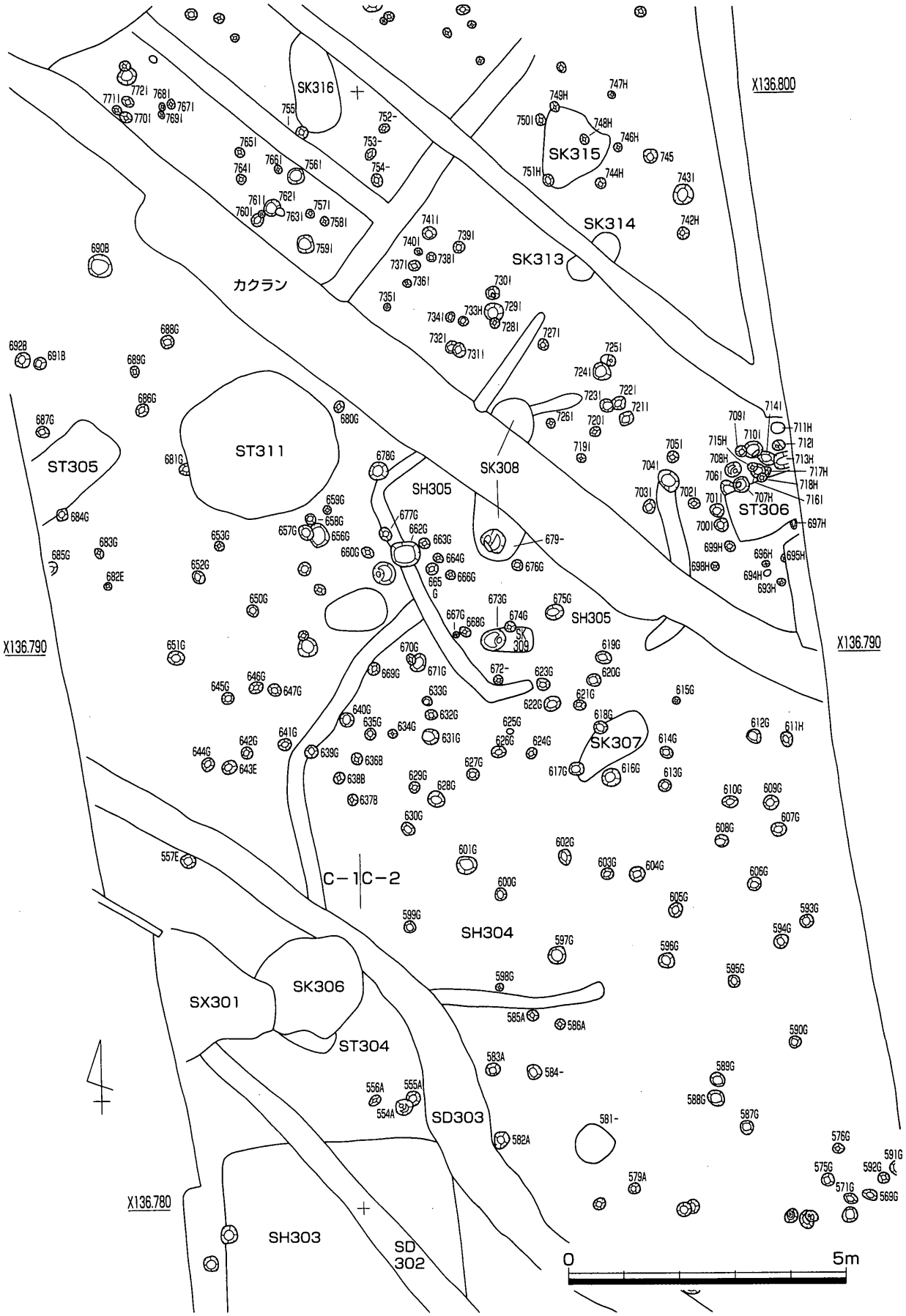
埋土の色調から見た分布はA・B・D・Eが調査区南半部に、G・H・Iが調査区北半部にそれぞれ認められる。ただし、北半グループのGは両者がラップする調査区中央付近のみに認められる。これらのグルーピングは遺構上面埋土による色調であることから、すぐに遺構の時期と直結できるものではない。それを裏付けるように、違う色調の埋土を持つ柱穴の切り合いが相互に異なる（Ex．A＞BとB＞A、＞は切り合いを示す。）ものが認められる。また、調査区壁に掛かる柱穴を見ても、異なる面からの掘り込みでありながらほぼ同じ色調を呈するものが認められる。

遺物の出土したものについては303基が認められ、251基については無遺物であった。遺物の出土した柱穴のうち、ほとんどが埋土中に弥生土器を含んでおり、それ以外の時期の遺物を含むものは古墳時代後期と想定されるものが5基、古代と想定されるものが5基、中世と想定されるものが1基認められる。参考までに埋土の色調に対応させると、Aには古墳時代後期から中世、Dは古代、Hは古墳時代後期から古代、E・G・Iは古墳時代後期、B・C・Fは弥生時代の遺物がそれぞれ確認できる。遺構の性格上、出土遺物を以って遺構の時期決定を行うのは危険である。また、上記の資料を基に上部構造の復元を試みたが、掘立柱建物跡・竪穴住居跡の検出には至っていない。

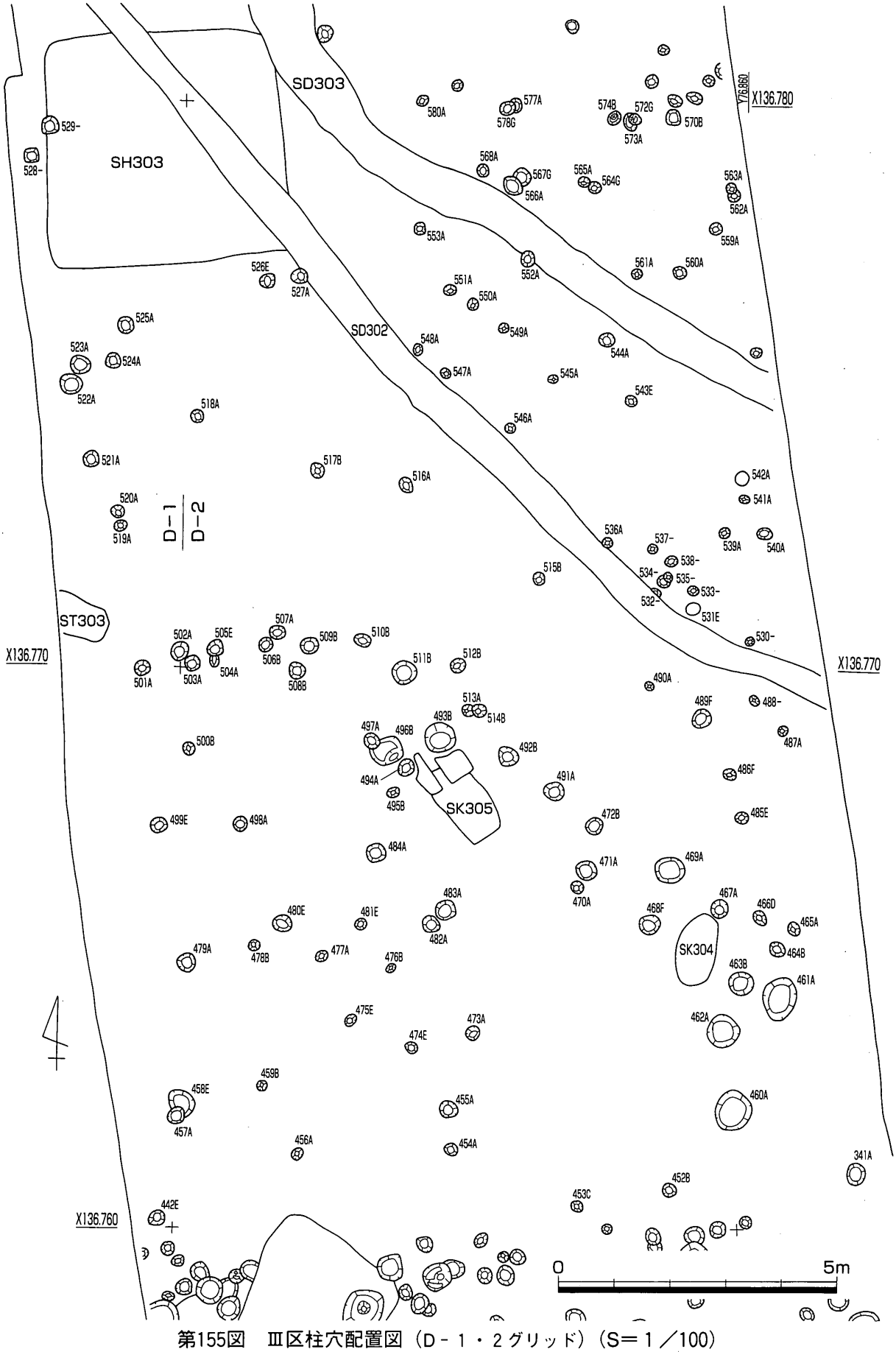
出土遺物は器形がある程度判別できるものを抽出して図化した。基本的にグリッド単位で報告してゆく。981はB-1グリッドSP850出土の弥生土器台付鉢の脚部である。982～989はB-2グリッド柱穴出土遺物である。大半は弥生土器であるが、SP805で古墳時代後期のものと考えられる須恵器坏身（983）が出土している。990・991はC-1グリッド柱穴出土遺物である。990は甕口縁部の小片で詳細は不明であるが、調整方法から見ると古式土師器に分類できる可能性がある。992～1005はC-2グリッド柱穴出土遺物である。いずれも弥生土器の小片が主体となるが、例外的にSP607出土の弥生土器鉢（994）やSP662出土の弥生土器甕（999）などのある程度器形が判別可能なものが認められる。また、SP678からは須恵器坏身（1002）が出土している。1006～1020はD-2グリッド柱穴出土遺物である。いずれも弥生土器であると判断した。甕・壺・鉢と想定できるものが認められる。1021～1024はE-1グリッド柱穴出土遺物である。いずれも弥生土器に分類した。1025～1036はE-2グリッド柱穴出土遺物である。大半は弥生土器に分類したが、SP305出土の1025は口縁部及び底部を欠くため詳細不明であるが、体部の形状



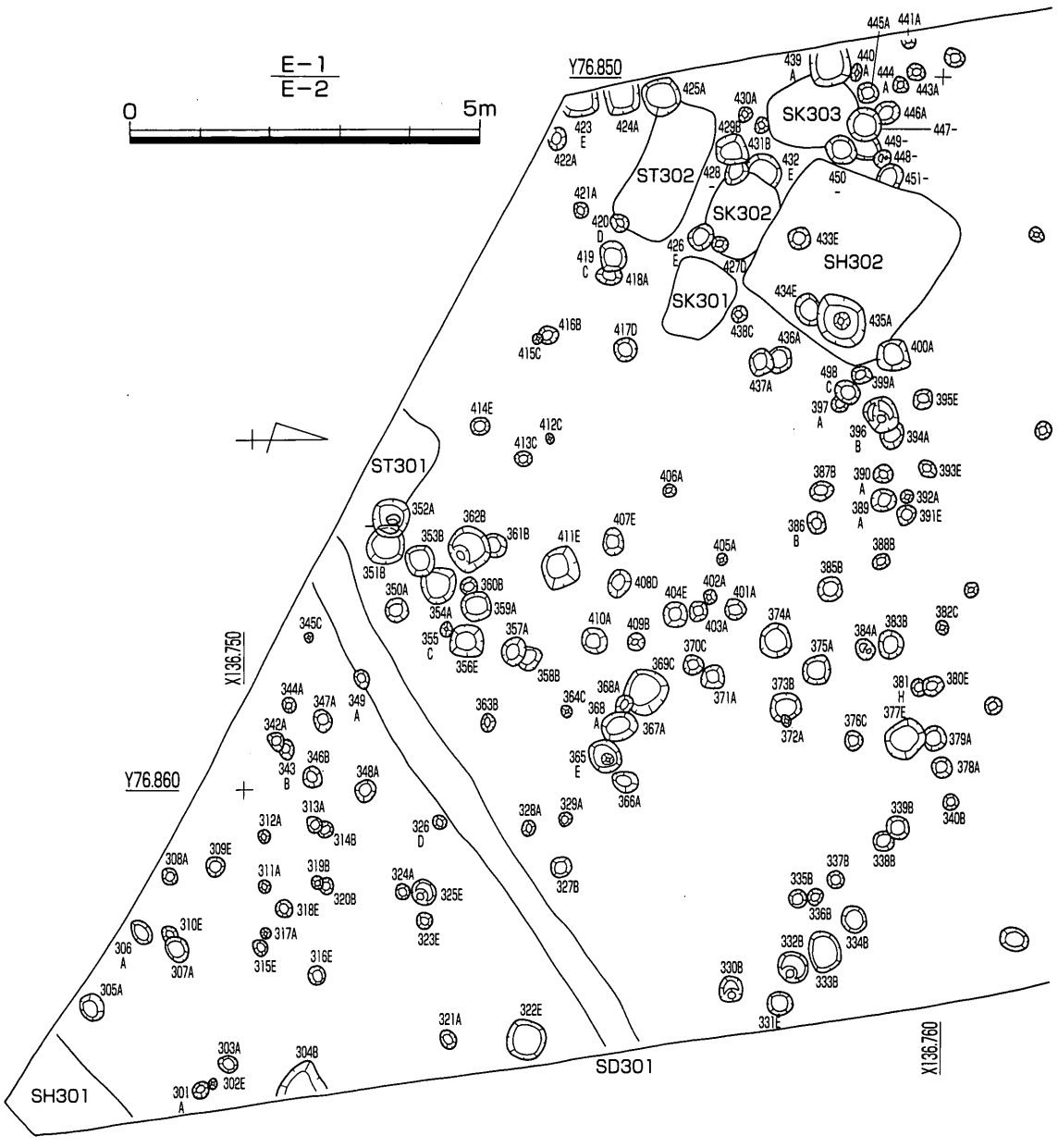
第153図　Ⅲ区柱穴配置図（A－1～B－2グリッド）（S＝1／100）



第154図　Ⅲ区柱穴配置図（C－1・2グリッド）（S＝1／100）

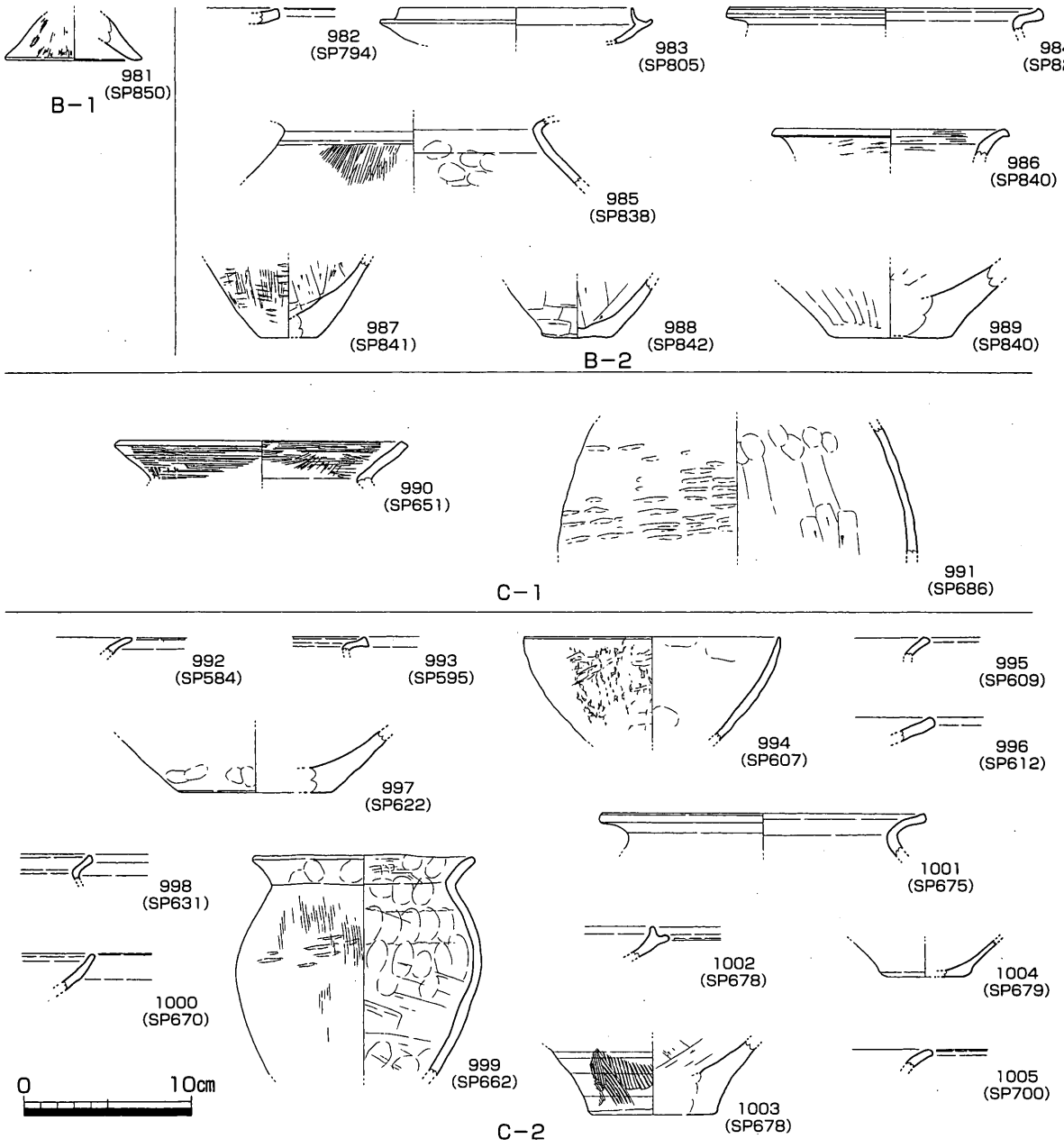


第155図　Ⅲ区柱穴配置図（D－１・２グリッド）（S＝１／100）

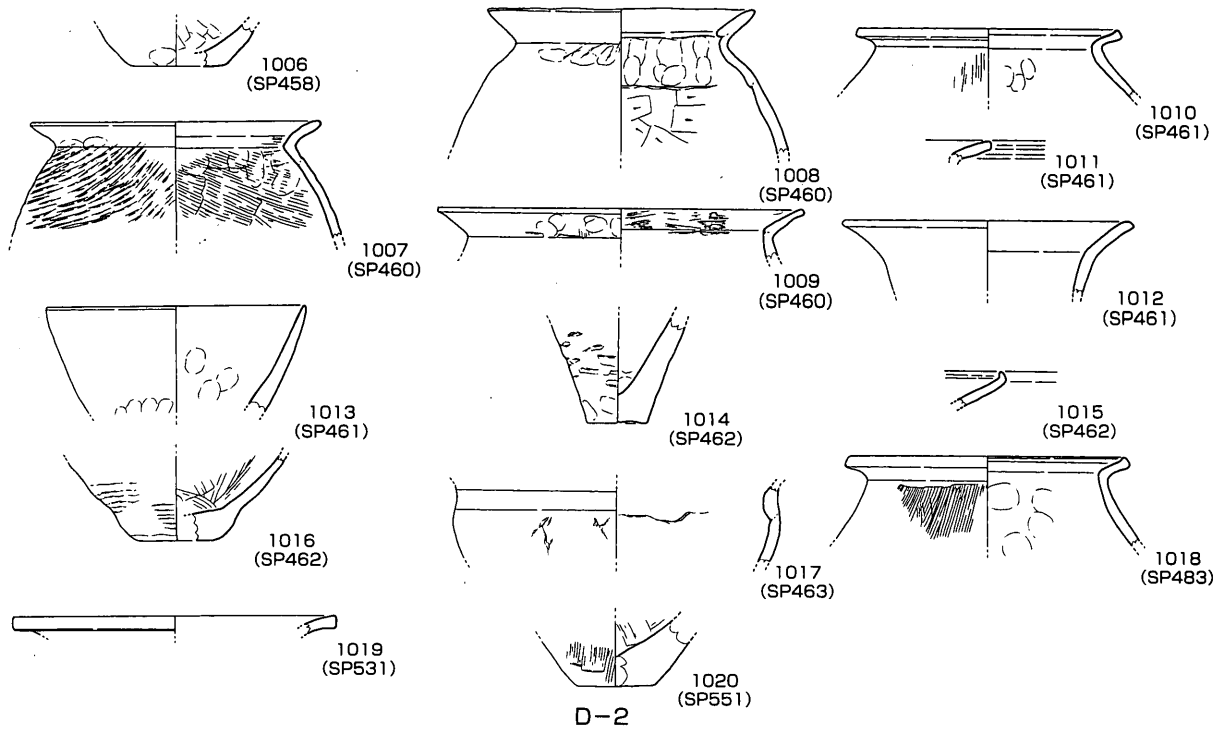


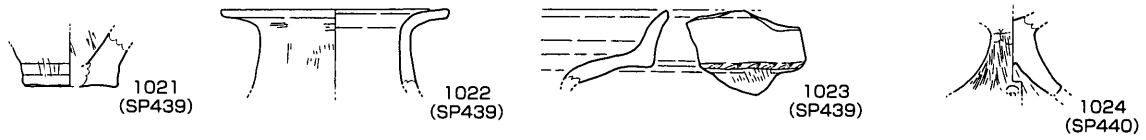
第156図　Ⅲ区柱穴配置図（E－１・２グリッド）（S＝１／100）

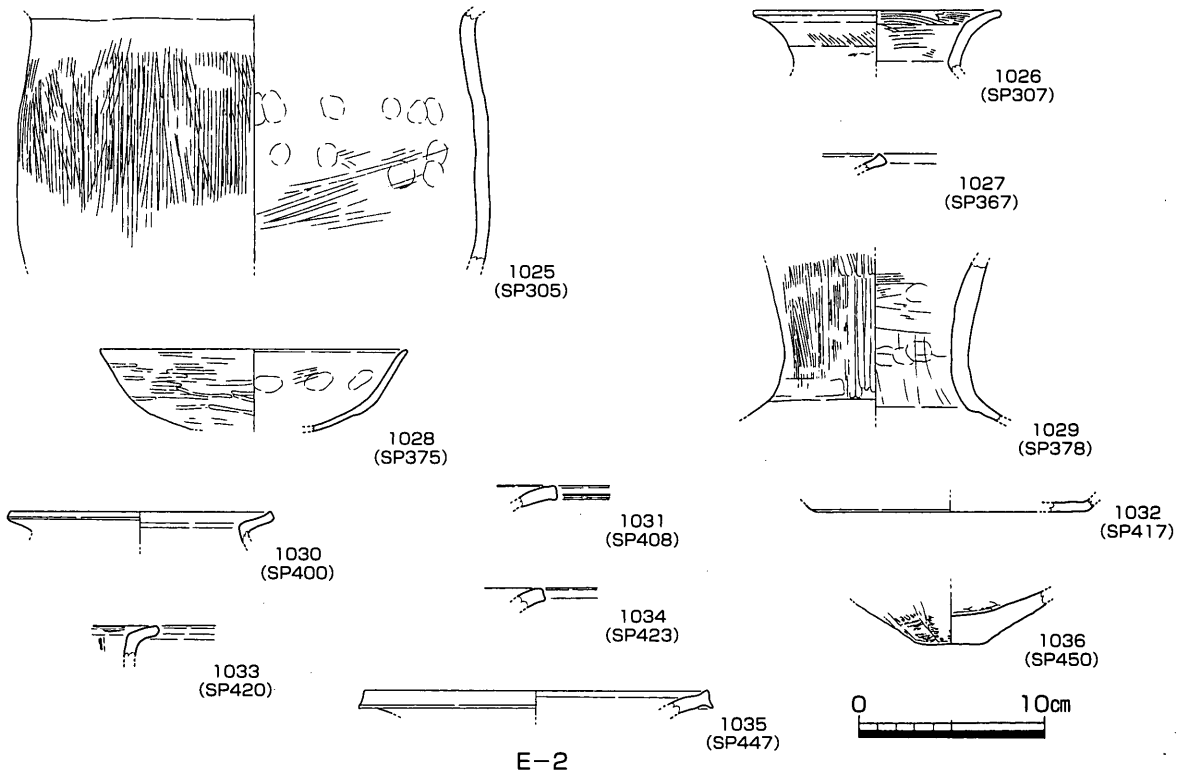
から古墳時代後期以降の土師器甕と想定する。また、SP375からは軟質須恵器椀（1028）、SP417からは須恵器皿（1032）がそれぞれ出土している。



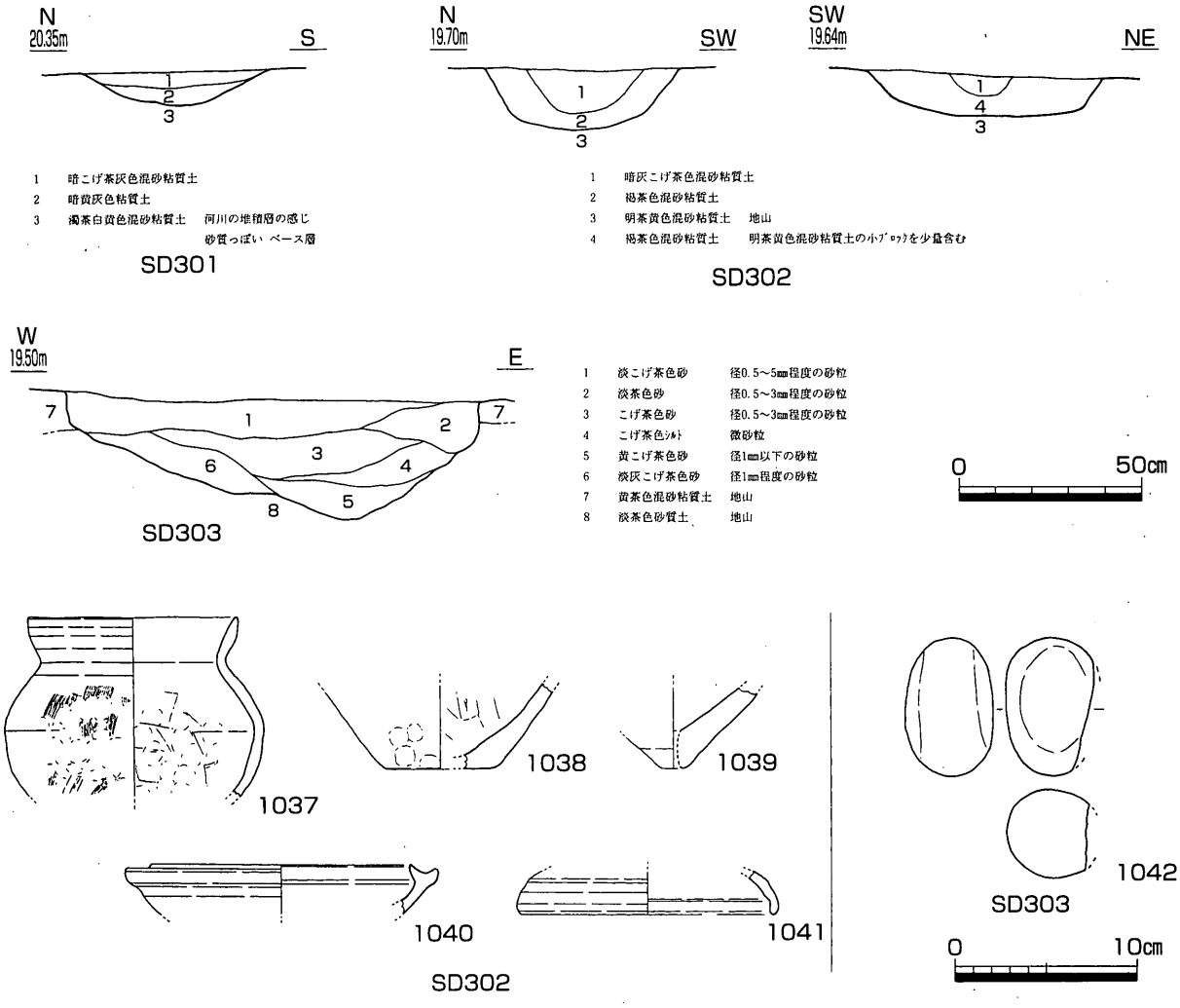
第157図　SP出土遺物１（S＝１／４）







第158図　SP出土遺物２（S＝１／４）



第159図　SD301～303断面図（S＝１／20）、SD302・303出土遺物（S＝１／４）

（５）溝状遺構

当該遺構は３条検出した。調査区中央以南にのみ分布する。

SD301（第131・159図）

調査区南端、E-２グリッド中央付近で検出した遺構である。等高線に対して直交気味に掘削されていることから、自然に穿たれた遺構である可能性も想定される。ST301を切っていることから、これに後出する遺構であることがわかる。遺構は南西から北東へ向けて直線的に延びており、長さ８m、検出幅は0.50mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは最深部で0.90mを測るが、調査区南壁土層の記録を見ると、本来の遺構面は約0.15m上方に設定でき、ここでの深さは最深部で0.30mを測る。埋土は調査区南壁においては暗こげ茶灰色砂混じり粘質土の単層であるが、断面作成位置では暗こげ茶灰色砂混じり粘質土の上層と暗黄灰色粘質土の下層に二分できる。

出土遺物は図示していないが、弥生土器の小片を主体として、若干古墳時代後期のものと想定できる須恵器坏片が出土している。それ以降の遺物については明確にできず、遺構の時期について現状では古墳時代後期以降の所産であると想定できるにすぎない。

SD302（第131・159図）

調査区中央やや南寄りで検出した遺構である。周辺に認められる等高線と概ね平行して掘削されており、人工的な掘削が想定される。SH303を切っていることからこれに後出し、SK301に切られることからこれに先行する遺構であることがわかる。遺構は南東から北西へ向けて緩やかに蛇行しながら延びており、長さは直線距離で20m、検出幅はややばらつきがあるが、0.52～0.64mを測る。断面形状は浅い椀状ないし皿状を呈し、深さは西側断面で0.10m、東側断面で0.16mを測る。埋土は暗灰こげ茶色砂混じり粘質土の上層と褐茶色砂混じり粘質土の下層に二分できる。

出土遺物は弥生土器片がやや多く出土するほか、須恵器片が混じる（第159図1037～1041）。1037は弥生土器甕に分類したが、土師器である可能性も想定できる。底部が遺存しないことから全体の器形については不明であるが、やや扁平な丸底の器形が想定できる。また、口縁部はやや直立気味に立ち上がり、外面中位には弱い稜線が認められる。体部外面の最大径を測る部分にも同様に弱い稜線が認められる。1038は弥生土器壺の底部である。1039は弥生土器甑の底部である。1040・1041は須恵器坏である。1040は身、1041は蓋とした。いずれも小片であることから口径や傾きは定かではない。須恵器の形状から6世紀後半頃のものと想定する。遺構の時期は出土遺物から、古墳時代後期以降のものであると想定できるに過ぎない。

SD303（第131・159図）

調査区中央やや南寄りで検出した遺構である。周辺に認められる等高線と概ね平行して掘削されており、人工的な掘削が想定される。SH303を切っていることからこれに後出し、SK306に切られることからこれに先行する遺構であることがわかる。遺構はSD303とほぼ平行して掘削されているが、調査区中央付近でやや蛇行する。長さは直線距離で20mを測り、検出幅は1.12m前後を測る。断面形状は東にやや芯の寄った浅い椀状を呈し、最深部で0.31mの深さを測る。埋土はこげ茶系の砂質土からなり、6層に分層できる。

出土遺物は図示していないが、弥生土器の小片がやや多く出るほか、古墳時代後期のものと想定できる須恵器片が若干混じる。1042は安山岩質斑岩製の磨石である。全面が光沢を帯びるように摩滅する。敲打痕や擦痕は明瞭に認められず、一部破損が認められるものの使用に伴うものではないと考えられる。したがって、人工遺物かどうか疑わしい部分もある。遺構の時期は重複する遺構の先後関係から、古墳時代後期以降の所産と想定できるに過ぎない。

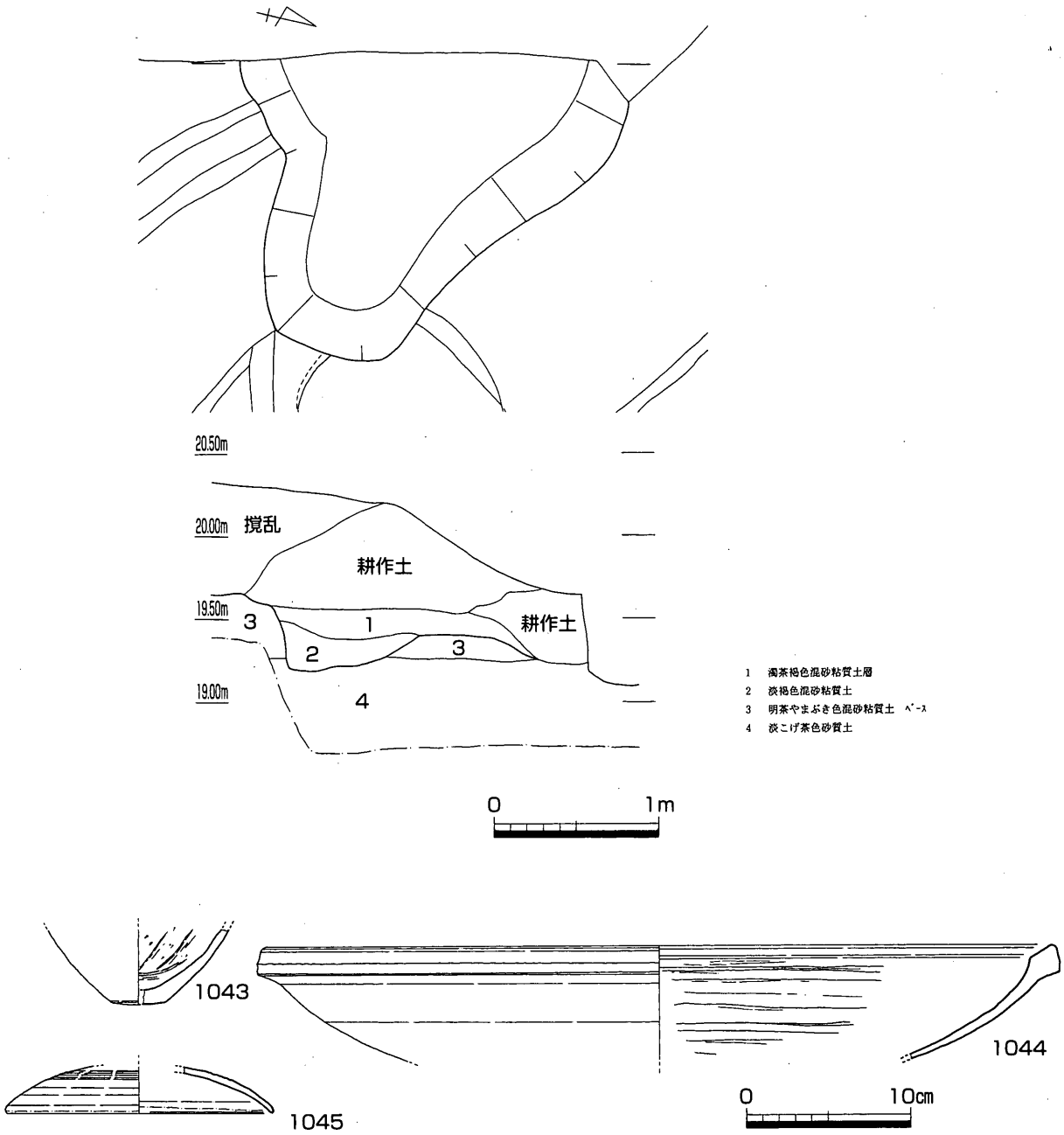
（6）性格不明遺構（第160図）

当該遺構はSX301の1基のみ検出した。埋土の状況などから攪乱としたものとの差が明瞭ではなく、その性格も定かではない。

出土遺物はあまり多くは出土していない。形状の判別できるものを若干掲載した。1043は弥生土器甕底部である。1045は施釉陶器の行平鍋蓋である。1044は瓦質の焙烙である。口縁部の形状が方形を呈していることから、近世から近代にかけてのものと想定できる。

（7）包含層（第161～163図）

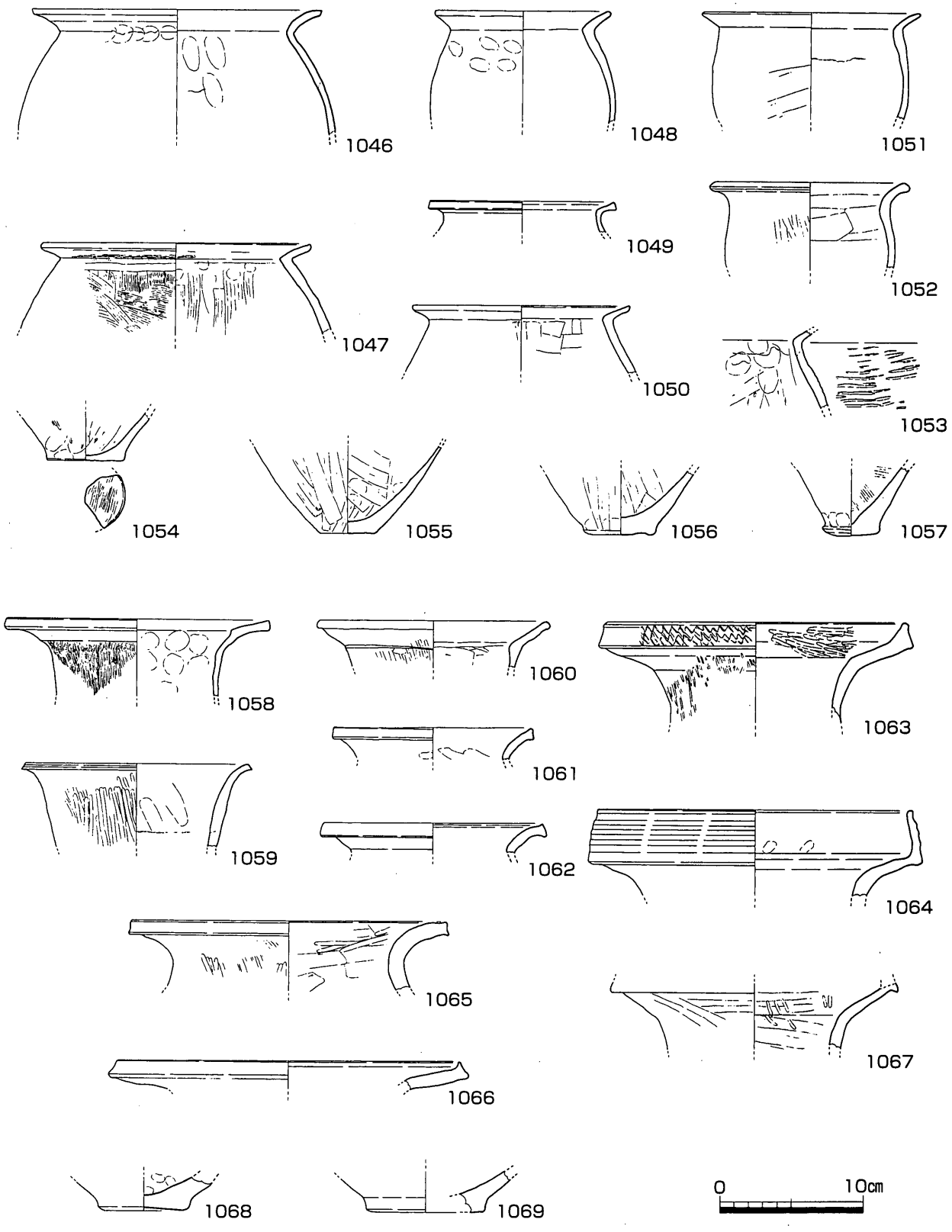
第4節　2.で触れたとおり、遺構面を覆う包含層は最低でも2層に分層が可能で、かつ、調査区全面



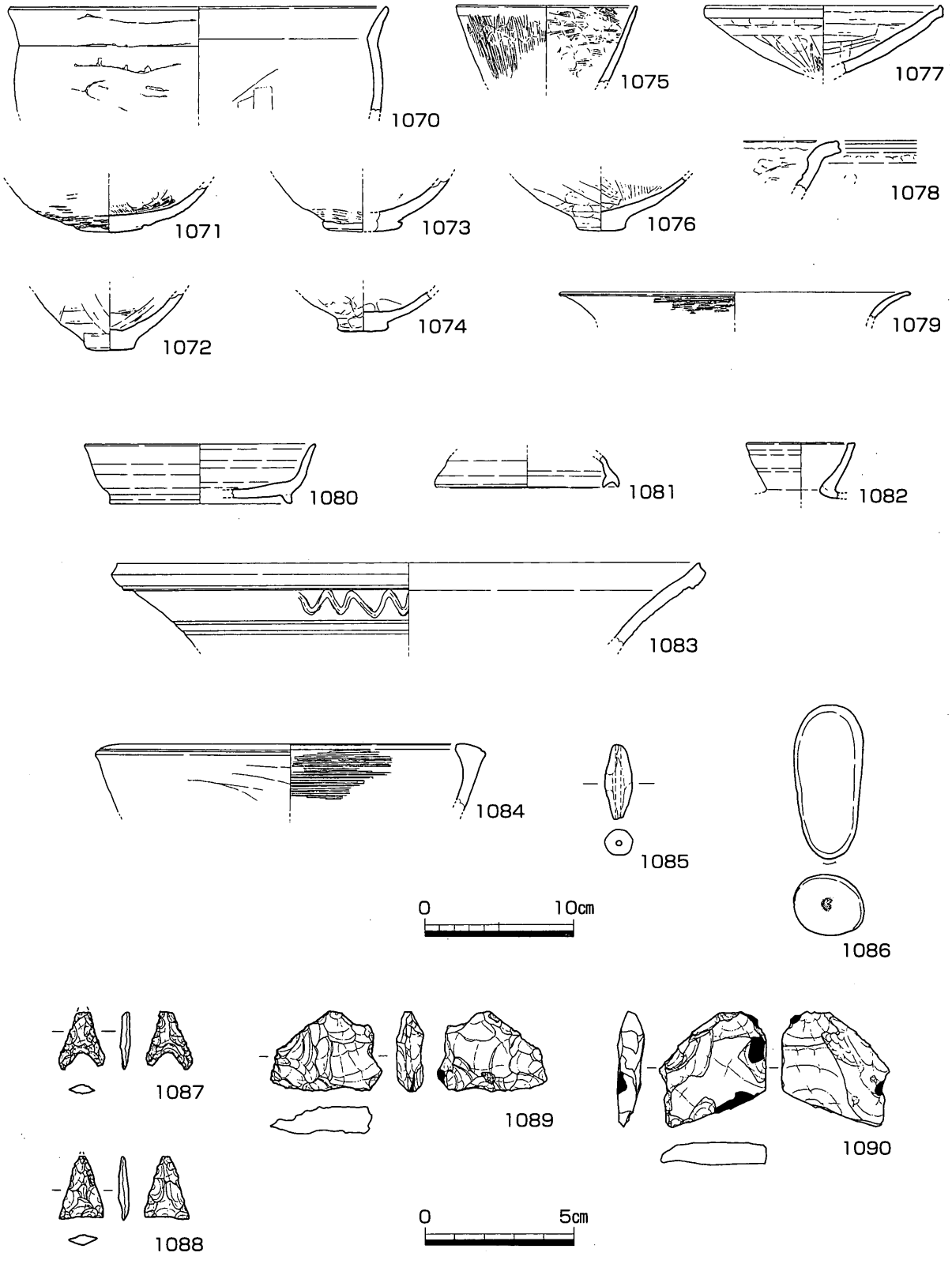
第160図　SX301平・断面図（S＝１／40）、出土遺物（S＝１／４）

を画一的に覆うものではない。更に、基本的に一番下の遺構面に合わせて調査を行っていることから、機械掘削時に上面の遺構とそれに伴う遺物を削平している可能性も想定できる。遺物は28ℓ入りコンテナ８箱分出土している。ここで包含層出土遺物として扱うものは、機械掘削時・側溝掘削時・調査区壁面及び遺構面精査時・後世の暗渠掘削時・包含層人力掘削時の各出土遺物である。挿図作成にあたり、暗渠出土遺物以外は出土位置を反映させず、一括で掲載している。また、抽出遺物は比較的遺存状況の良いものに限ったため、器種組成などの諸要素は反映されていない。

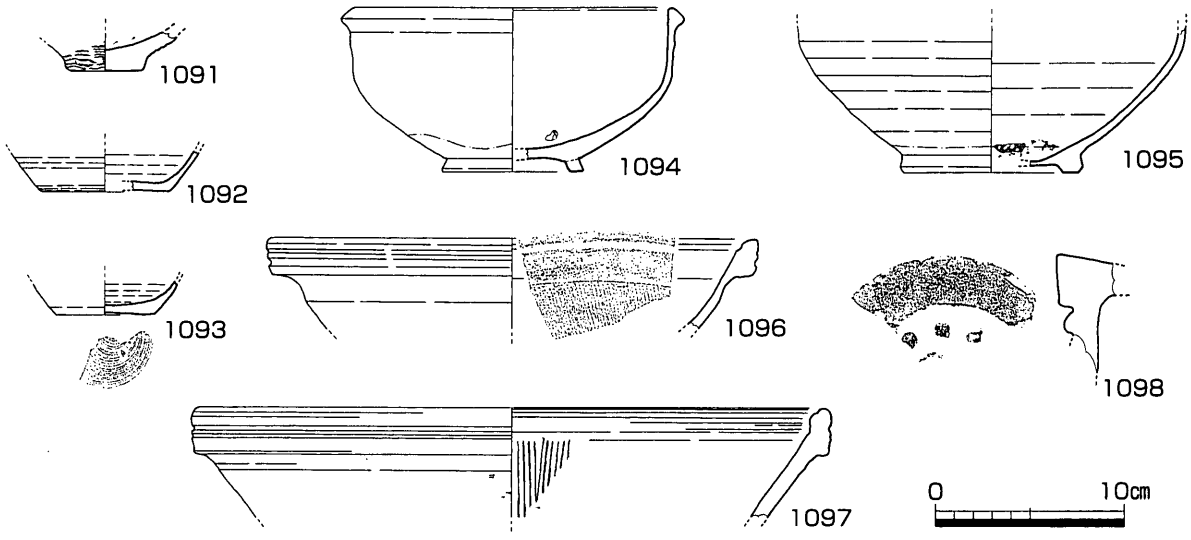
第161図1046～1057は弥生土器甕である。頸部内面に明瞭に稜を形成するものとそうでないものが認められる。口縁端部は上方へ摘み上げるもの（1049）が１点認められる。調整については摩滅が進んで



第161図　Ⅲ区包含層出土遺物１（S＝１／４）



第162図　Ⅲ区包含層出土遺物２（S＝１／４・１／２）



第163図　Ⅲ区包含層（暗渠）出土遺物（S＝１／４）

いるものが多く詳細不明であるが、外面はハケ調整を施すもの（1047）、ヘラミガキを施すもの（1052）、タタキ目を施すもの（1053）が認められる。また、内面についても遺存状況は外面と同じで、板ナデ調整と見られるものが認められるほか、1053においてヘラ削りが施されるのが認められる程度である。1054～1057は甕底部に分類したものである。1054は内外面の調整方法と胎土の状況から見て所謂「下川津B類土器」であると想定できる。1058～1069については弥生土器壺に分類した。口縁部及び口縁部から頚部にかけての破片資料であることから全体の器形については不明である。

第162図1070～1079は弥生土器鉢に分類した。1080～1083は須恵器である。1081は小片のため不明であるが坏蓋と判断した。7世紀頃のものか。1080は高台付坏である。8世紀中葉頃のものと想定する。1082は平瓶の口縁部、1083は甕口縁部と判断した。時期については不明である。

1084は土師質土器捏鉢、1085は管状土錘である。

1086～1090は石器である。1086は槌石に分類した。平面形がやや先細りした長楕円形を呈する安山岩質斑岩の下端を用いたもので、弱い敲打痕が認められる。素材は、全体が光沢を帯びた礫であることから、磨石の転用の可能性も想定できる。1087は凹基無茎式の石鏃である。表裏ともに素材面を残置する。先端に欠損が認められるが、この欠損に伴う折れ面が正面に回り込む状況を呈しており、使用に伴う欠損が想定できる。1088は平基無茎式の石鏃である。表裏ともにほぼ全面に調整加工が施される。先端部をわずかに欠損する。1089・1090は楔形石器である。石鏃・楔形石器はいずれもサヌカイト製である。

第163図は調査区中央やや北寄りに存在した暗渠中出土遺物である。SH305・306ほか多数の遺構を切って掘削されていることと、掘り込み面がほぼ現地表面に位置することから近世ないし近代の遺構であると想定できる。出土遺物は弥生土器（1091）・須恵器坏（1092）・土師質土器坏（1093）・施釉陶器鉢（1094・1095）・備前系擂鉢（1096・1097）・瓦片（1098）などが認められる。出土遺物の状況から見てSX301に近接した時期のものと想定する。

4. 小結

以上、Ⅲ区の状況を見てきたが、ここで簡単にまとめておきたい。微地形の検討から、当調査区は主として西側の丘陵裾から延びる微高地の北斜面上に存在することがわかったが、それを裏付けるように遺構が比較的密集して検出できた。主たる遺構は弥生時代後期から終末期にかけての竪穴住居跡である。明らかに竪穴住居跡であるのはSH303・306の2棟であるが、可能性が想定できるものを含めると6棟存在することになる。すぐ南側で調査されたⅠ・Ⅱ区の状況からすると竪穴住居跡の密度は低いが、これは微高地の裾に近い部分に立地することに起因するものと想定できる。また、南から北へ傾斜する地形に対し、後世、平坦化して耕地化を図る目的で削平された結果、本来もう少し密度が高く展開していた遺構が削り取られた可能性も想定できる。SH304・305において、壁溝がわずかに遺存するのみである状況から見ても、本来の集落のあり方が遺存していない可能性も想定できよう。弥生時代以降の遺構及び包含層中から弥生時代後期から終末期にかけての遺物が比較的多量に出土していることからも、その可能性は捨てきれない。住居の時期はSH303が弥生時代終末期のものと想定できる以外は、基本的に後期後半頃のものと想定している。SH304・305間には切り合いが認められ、SH305が後出するものであることがわかっている以外はそれぞれの住居跡の時期の詳細は不明である。

次に住居の平面プランについてみてみると、SH303・305が方形、SH304が円形ないしは多角形、SH306が円形である。繰り返しになるが、SH304・305は壁溝の形状からの想定であることから本来の住居の平

	SH303	SH304	SH305	SH306
平面プラン	方形	円形or多角形	方形	円形
規模（床面積）	17.4㎡	38.5㎡	22.5㎡	63.6㎡
時期	終末期	後期後半？	後期後半? (SH304より新しい)	後期後半
出土土器器種	甕・鉢・高坏	(甕)	(甕)	甕・壺・鉢・高坏
特筆する遺物	鉄片	—	ガラス小玉	—

第７表　Ⅲ区検出竪穴住居属性一覧

面形状とは異なる可能性はある。住居の平面プランと面積には関連が認められそうで、方形のものは概ね20㎡前後、円形のものが40㎡近いかそれ以上である（第７表）。

次に、遺物の状況を見てみよう。土器の器種組成上には大きな差は見られないようである。搬入土器である角閃石を多く含む土器についてはどうであろうか。各住居において出土した土器片のうち、１cm以上の大きさを持つ土器片全点を母集団とし、その中に認められる角閃石を胎土中に含む土器片数を抽出してその割合を調べてみた（第６表・CD内）。ただし、抽出時に作業担当者との意思疎通が不十分で、第６表に掲載した角閃石を胎土に含む土器片数は含まれる角閃石の多寡が反映されていないことを注意しておく。そこで、右側の表に報告書掲載遺物中における角閃石を多く含む土器の割合を合わせて掲載して参考資料としている。まず、左表からみてゆくと、いずれの住居でも概ね10%前後の土器片に角閃石が認められる。SH301・305においてやや多量に認められるが、遺物量の多いSH303・306の母集団と比較するとその数は１／10程度であり、単純に比較できるものではないかもしれない。SH303・306の資料間で比較するとその比率は大差ないようである。ところが、掲載遺物に見られる比率で比較すると、SH306においては全点中の比率と大差ない割合で角閃石を含む土器が存在するのに対し、SH303においてはまったく認められない。

ただ、土器以外の遺物については、方形住居に鉄片やガラス小玉の存在が認められる一方で、円形住居にはそれが認められない点は差があると見ても良いのかもしれない。

以上の状況を横断道原間遺跡の竪穴住居と比較すると、大型（床面積40㎡以上）の円形住居に鉄鏃・勾玉・土玉・紡錘車といった遺物が認められ、方形のものや床面積40㎡以下のものには認められないという傾向が当遺跡の傾向とは異なる。また、搬入土器の割合は方形住居において比率が上がる傾向も当遺跡とやや異なる様相になるかもしれない。ただし、いずれの例にしても、母集団の差が大きく影響している可能性が高く、単純な比較は危険を伴うだろう。

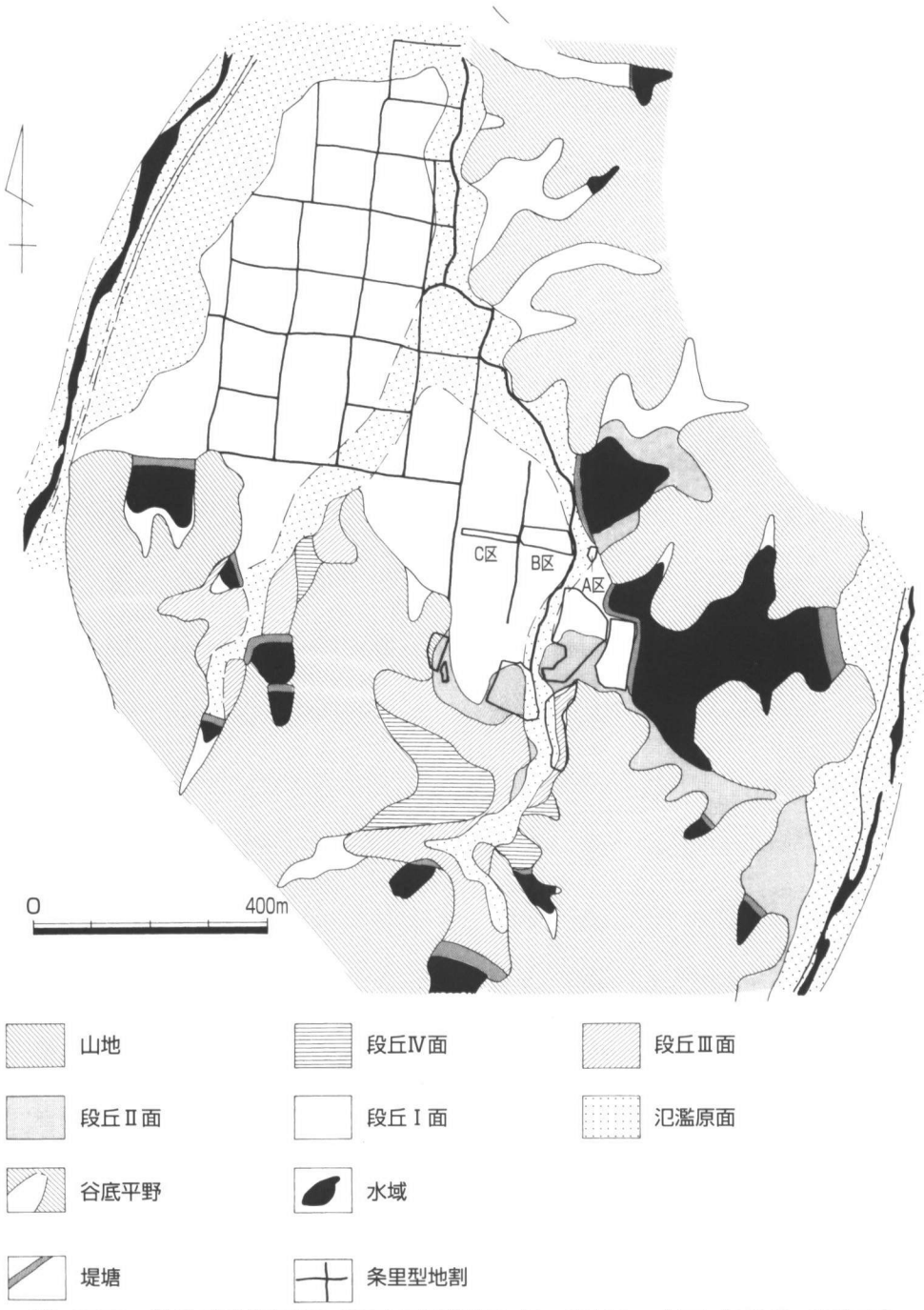
その他の遺構については、特に土坑（墓の可能性のあるものを含む）・柱穴が中心となる。ほとんどの遺構で弥生土器の小片が含まれるが、古墳時代後期から中世の遺物を若干量伴う遺構が認められることから、弥生時代後期から中世にかけて比較的安定した居住域であった可能性が想定できる。ただし、隣接するⅠ・Ⅱ区においては古墳時代中期の遺構が検出されているのに対し、当Ⅲ区においては同時期の遺構が認められず、遺物についても当該時期のものは認められなかった。

集落の消長については当調査区においては追うべくも無いが、概ね横断道原間遺跡で報告された内容と合致するといえる。

第５節　Ａ区の調査成果

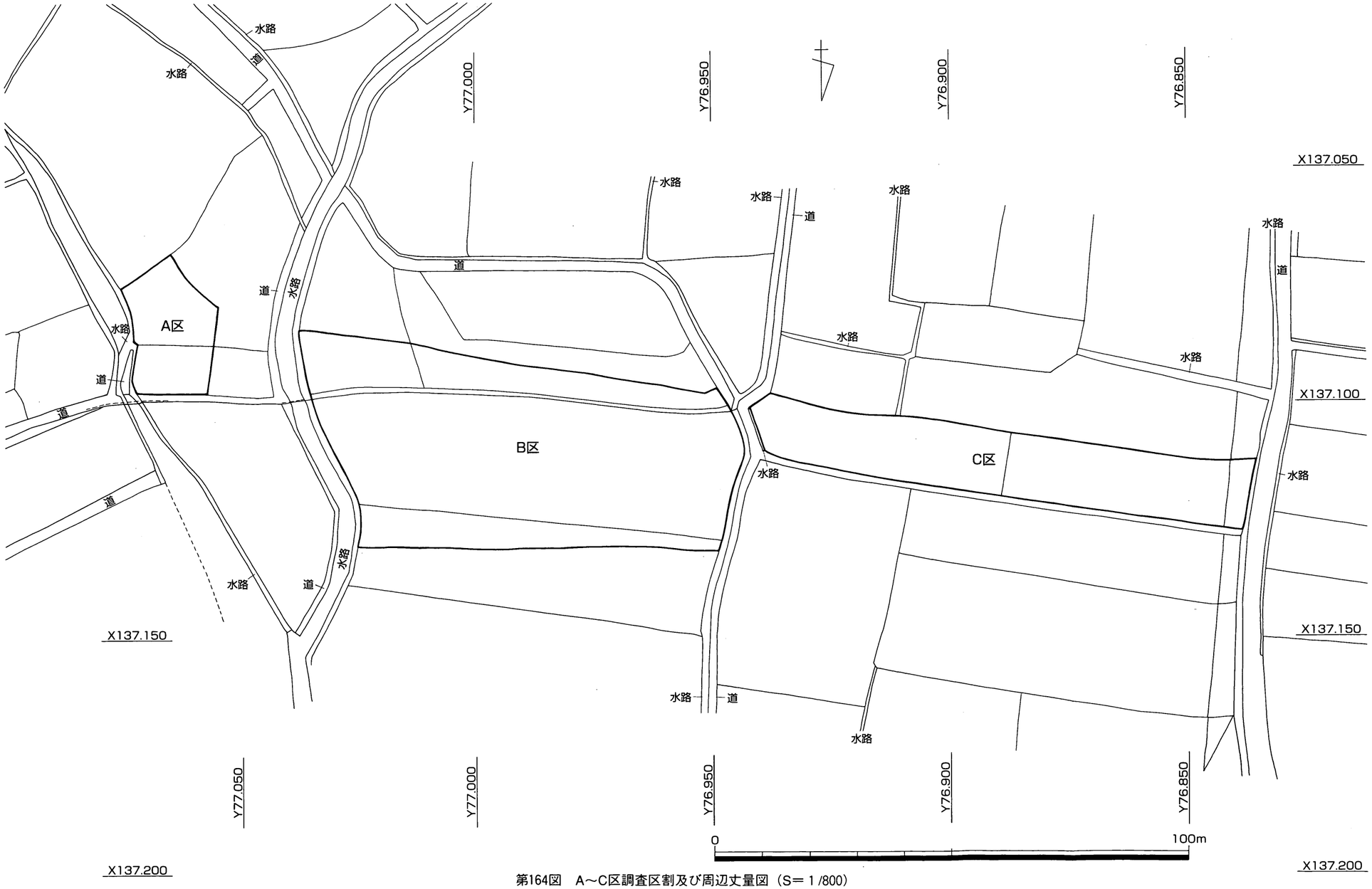
1. 地形

当調査区の立地は北が北池、南は原間池に挟まれた丘陵の西裾傾斜変換点付近で古川の東岸に立地する。標高は14.6m前後である。旧状は二筆の水田に分かれていた。この調査区は片桐地形分類①[4]によると、低湿地bと旧流路bの北側にあたる。調査区南側は低湿地bから派生する落ち込みに、北側は旧流路

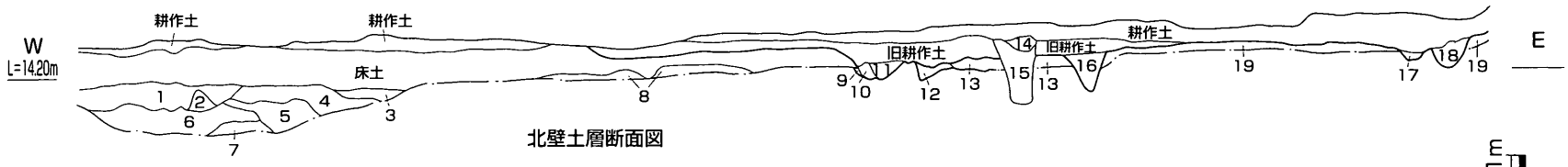


第165図　微地形分類図及び調査区配置図（１／1000、木下（1998）を改変）

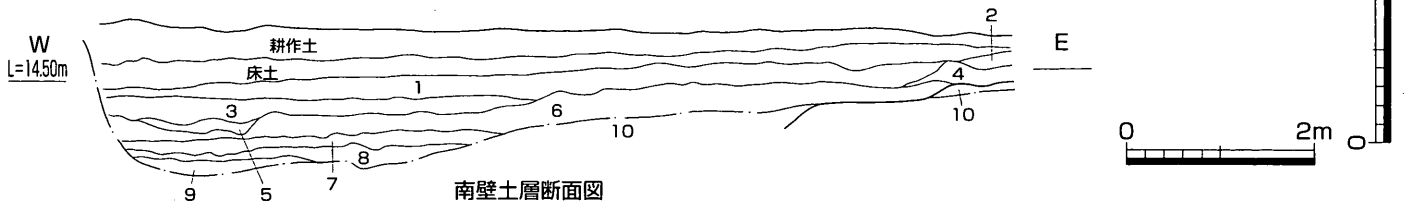
4　片桐孝浩編　2002『四国横断自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三十九冊　原間遺跡Ⅰ』香川県教育委員会他



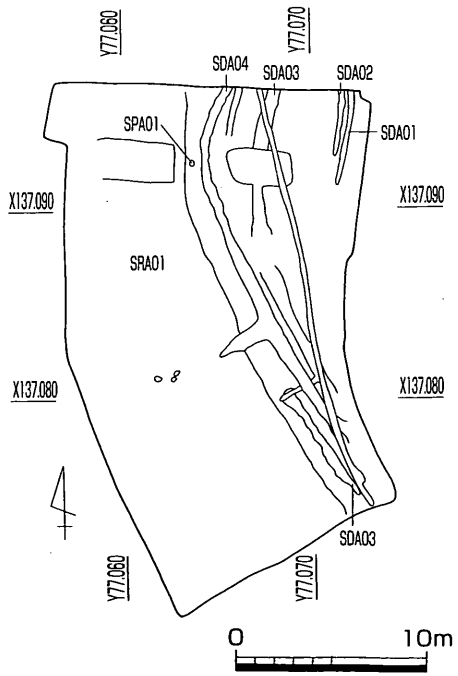
第164図　A～C区調査区割及び周辺丈量図（S＝1/800）



北壁土層断面図



南壁土層断面図



A区北壁

1	淡褐灰色粗砂
2	濃黄褐色細砂
3	淡褐灰色粗砂
4	黄橙色粘性砂質土
5	黄白色細砂
6	淡茶褐色細砂
7	茶褐色粗砂
8	褐灰色粘性砂質土
9	淡褐灰色細砂
10	淡褐色粗砂
11	淡褐色細砂
12	褐灰色粘性粗砂
13	淡褐灰色粘性粗砂
14	淡褐灰色粘性粗砂
15	淡茶褐色粘性粗砂
16	淡褐灰色粘性粗砂
17	淡灰褐色粘性粗砂
18	淡灰褐色粘性粗砂
19	花崗岩ﾍﾞｲﾗﾝﾄ土

A区南壁

1	淡茶褐色粘性粗砂
2	淡灰白色粘質土
3	淡褐灰色粘性砂質土
4	茶褐色粘性砂質土
5	茶褐色粘性砂質土
6	褐灰色粘性砂質土
7	黒褐色粘質土
8	褐色粘質土
9	暗茶褐色細砂
10	灰白色粘性砂質土

第166図　A区北壁・南壁土層断面図（天地S＝１／40・左右S＝１／80）、遺構配置図（S＝１／400）

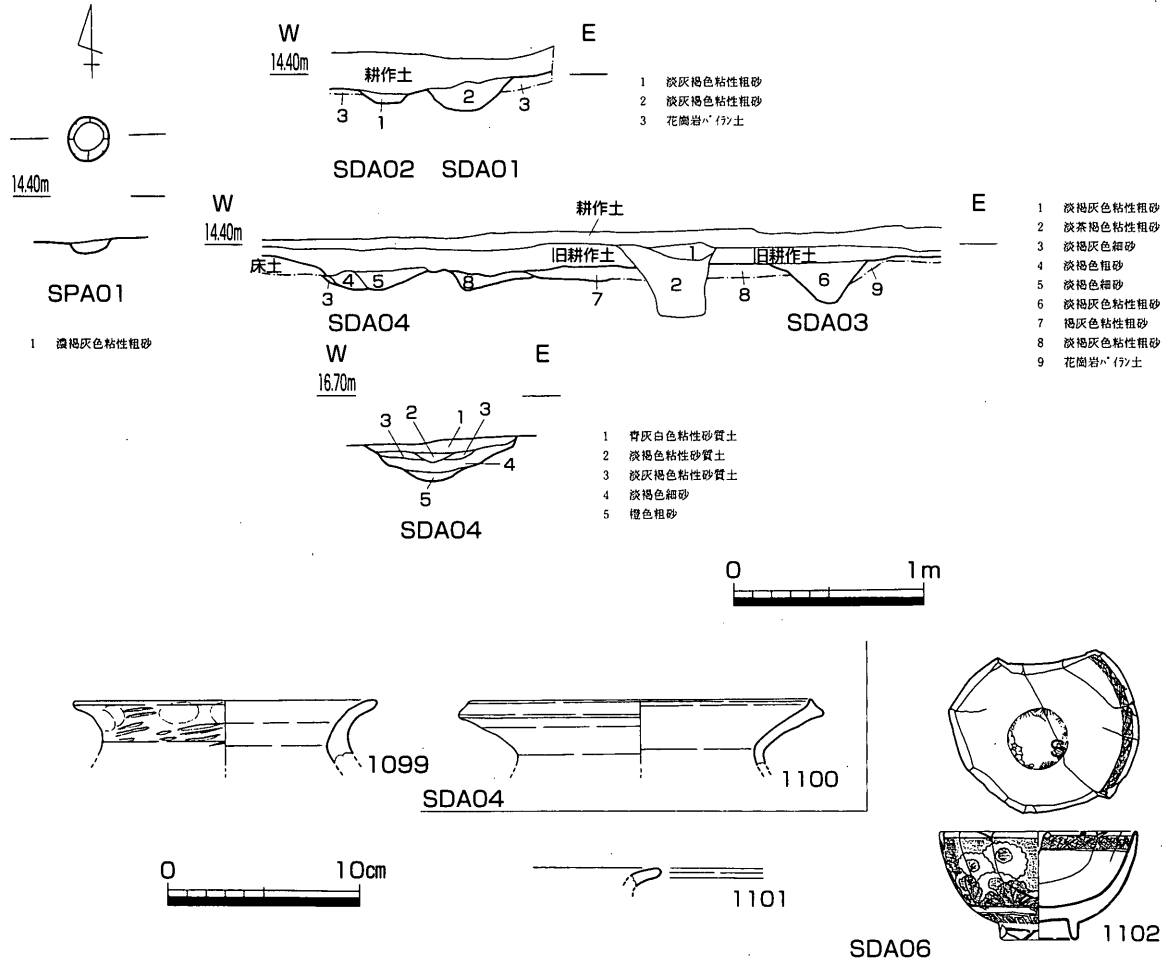
bの東岸にそれぞれ接しているものと想定できる。また、木下地形分類[5]（木下1998）によると、当調査区は段丘Ⅰ面ないし氾濫原面に区分される。

2. 土層序（第166図）

土層序は、東側が丘陵裾に当たるため、基本的に耕作土直下で花崗岩バイラン土ないしは濁黄茶褐色混粗砂粘性細砂の地山に達する。この地山層は緩やかに西へ下がり、調査区外へ延びる。

3. 遺構と遺物

当調査区で検出した遺構は極めて希薄で、柱穴１基・溝状遺構５条・旧河道１条（第166図）である。大半が耕作土直下からの掘り込みであることから近世以降のものである可能性が高い。以下、各遺構について説明する。



第167図　SPA01平・断面図、SDA01～04断面図（S＝１／40）、SDA04・06出土遺物（S＝１／４）

（１）柱穴

SPA01（第167図）

調査区北寄り中央付近で検出した柱穴である。直径0.22m・深さ0.08mを測る。柱痕などは認められな

5　木下晴一・塩崎誠司　1998『香川県内遺跡発掘調査事業　埋蔵文化財試掘調査報告ＸⅠ』香川県教育委員会

いうえ、周辺にも同様の遺構が認められない。

（2）溝状遺構

SDA01・02（第167図）

調査区北東隅で検出した溝状遺構である。共にほぼ北へ向けて並行し、切り合いは認められない。直線距離でSDA01が5m、SDA02が3.40mを測る。埋土は共に淡灰褐色粘性粗砂の単層である。出土遺物は皆無であることから、遺構の時期は判別しがたいが、耕作土直下において検出していることから、近世以降の所産である可能性が想定できる。

SDA03（第167図）

調査区中央東寄りで検出した溝状遺構である。旧地形の等高線に並行することから人為的な遺構であると想定できる。埋土は淡褐灰色粘性粗砂の単層である。

出土遺物は著しく転摩した弥生土器小片を含むのみで時期決定は困難である。

SDA04（第167図）

調査区中央東寄りで検出した溝状遺構である。SDA03とほぼ並行し、調査区東側の丘陵を取り巻くように掘削されており、人為的な遺構であることが想定できる。埋土は5層に細分できたが、大きくは砂混じり粘質土の上層と細砂・粗砂からなる下層に大別できる。掘削された初期は流水していたものが埋没した可能性が想定できるが、西側に旧河道SRA01が存在することから、洪水砂による埋没も想定できる。

出土遺物は希薄で弥生時代の遺物を主体とするものの、小片であることから時期決定の要素とはしがたい。1099は甕である。口縁部は叩きによる調整を施した後折り返して整形したものと想定できる。1100は壺である。口縁端部を上方へ摘み上げる形状を取る。

SDA06（第167図）

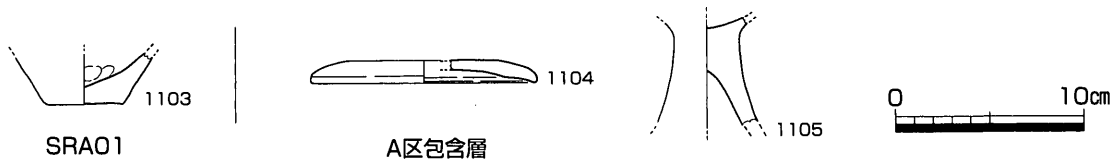
調査区中央付近で検出した溝状遺構である。SDA04から西へ派生する溝として検出した。図示していないが、埋土の状況はSDA04と同じである。SRA01を切ることから、これに後出することがわかる。

出土遺物はSDA04同様希薄であるが、1102の磁器が出土している。内外面共に型紙刷りと見られる染付が認められる。この遺物から近代に帰属する可能性が高い。おそらくSDA04も同時期のものと見てよいと判断する。

（3）旧河道

SRA01（第166・167図）

調査区西半分を占める遺構である。調査区東側の丘陵裾を削剥するように南から北へ流れる。調査区南側においては比較的深く遺存するが、北側では浅く、川の中心が西へ寄っているためと想定する。埋土は調査区北壁土層1～7層、南壁土層1～9層が相当する。遺存する遺構面にギャップがあるため、単純に比較することは困難であるが、いずれもほぼ流路東岸の上層埋土と想定している。



第168図　SPA01・A区包含層出土遺物（S＝１／４）

出土遺物は流路底部から弥生土器甕底部片（1103）１点が出土したのみである。

（４）包含層（第168図）

基本的に耕作土直下でほぼ地山に達することから、明確な包含層はSRA01となる。ここでは機械掘削・平面精査時出土の遺物を報告するが、全体的に遺物は希薄であり、1104の須恵器蓋と1105の弥生土器高坏脚部が辛うじて形状が判別しうる資料である。

第６節　Ｂ区の調査成果

1．地形

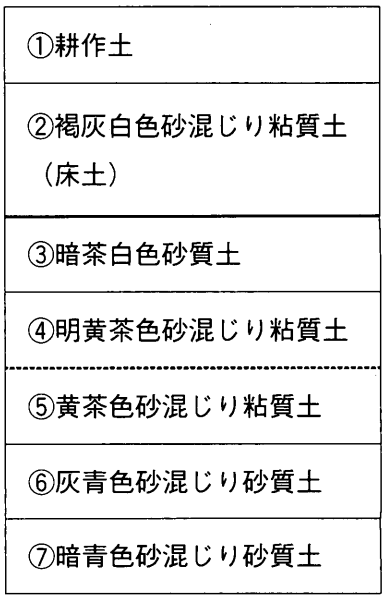
当調査区の立地は、A区から見て古川を挟んだ対岸である。旧状は平坦地で、標高は14.4m前後を測る。対象地は等高線に対してほぼ並行する細長い四筆の水田に分かれていたが、うち三筆は隣接する水田の一部が取り込まれた状態となっている。調査区はこれらの水田にほぼ並行した状態で設定しており、水田面に合わせて３段の段差が生じている。

この調査区は片桐地形分類①及び②によると、中心部は微高地a、東辺部は旧流路b、西辺部は旧流路aに分類される。この旧流路aについては横断道部分予備調査の成果から、最終的に低湿地aとして報告されているが、B区及び後に触れるC区の調査成果からは当該部分において旧河道を検出していることから、地形分類としては旧河道aと低湿地aは別単位と想定しておきたい。また、木下地形分類（第165図）によると調査区東端を除き、段丘Ｉ面に分類される。

2．土層序（第169図）

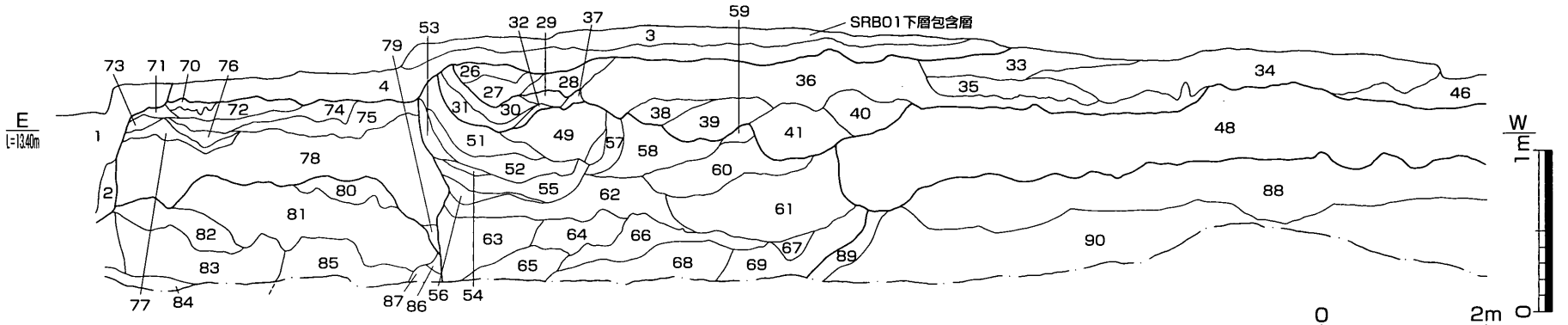
①基本土層序

当調査区での基本土層序と明確に掲載できるものはない。第169図に模式図を掲載し、その代わりとする。遺構面は概ね床土直下に位置する。主たるベース面（第169図太い実線）は暗茶白色砂質土となるが、場所によってはその下層である明黄茶色砂混じり粘質土になる。ただし、後述するが、当調査区は複数の旧河道の存在が認められ、上記の土層序が観察できたところはごく一部である。また、当調査区においては一部下層遺構を検出しているが、その遺構面は概ね黄茶色砂混じり粘質土上面（第169図太い破線）に設定できる。

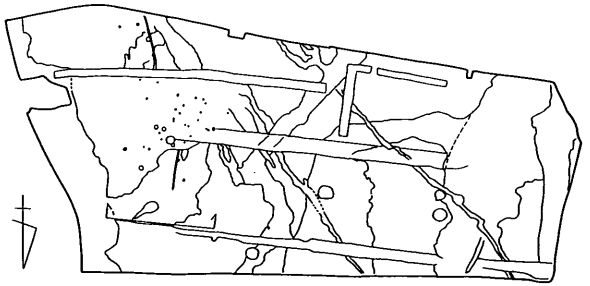


第169図　B区土層序模式図

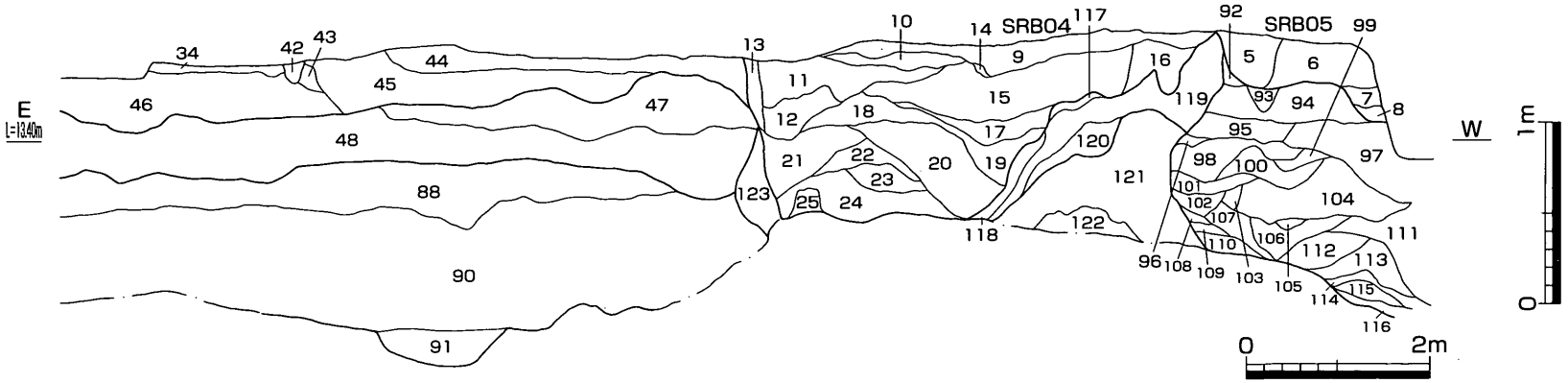
②土層の記録（第170～175図）



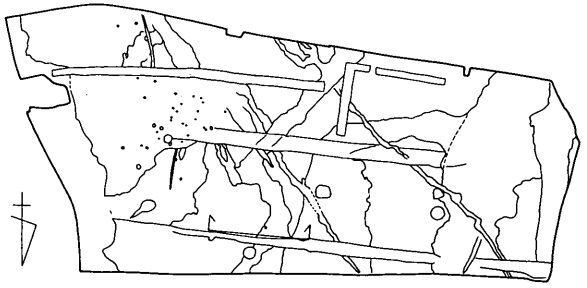
1 攪乱
2 攪乱
3 黒褐色粘質土
4 黄灰褐色粘性粗砂
5 暗褐灰色粘質土
6 灰黄褐色粘性粗砂
7 淡茶褐色細砂
8 暗褐色粗砂
9 灰褐色粘性細砂　灰白色細砂をﾗﾐﾅ状に含む
10 淡褐色粘性粗砂
11 淡褐灰色細砂
12 茶褐色粗砂混じり細砂
13 淡灰褐色粗砂
14 淡褐色細砂
15 暗茶褐色粗砂
16 褐色粘性細砂
17 褐色粗砂
18 褐色粗砂
19 褐色細砂混じり粗砂
20 淡褐色粗砂混じり細砂
21 茶褐色粗砂混じり細砂
22 淡褐灰色細砂
23 茶褐色粗砂
24 暗褐灰色粗砂混じり細砂
25 黄橙褐色粘性粗砂
26 茶褐色粗砂
27 淡茶褐色粗砂混じり細砂
28 茶褐色細砂
29 淡褐色細砂
30 淡褐色粗砂混じり細砂
31 淡灰褐色粗砂　径7㎝前後の小石多含する他径20㎝前後の小礫微量含む
32 淡茶褐色細砂
33 淡褐色細砂
34 黄褐色粘性細砂
35 褐色粗砂
36 黄灰褐色粘性粗砂　暗褐色粘性細砂がﾌﾞﾛｯｸ状に入る
37 淡茶褐色細砂
38 褐色粘性粗砂　黄灰褐色粘性細砂がﾌﾞﾛｯｸ状に入る
39 褐色粘性粗砂
40 褐色粗砂
41 茶褐色粗砂
42 淡褐色細砂
43 淡黄橙褐色粘性粗砂
44 淡褐灰色粘性粗砂
45 淡橙褐色粘性粗砂
46 黄橙褐色粘性粗砂
47 淡黄橙褐色粘性粗砂
48 淡黄褐色粘性粗砂
49 淡褐色粗砂混じり細砂　粗砂径2～3㎜層が水平に縞状を呈して入る
50 淡褐色粗砂混じり細砂　褐色細砂37層がﾌﾞﾛｯｸ状に入る
51 淡褐色粗砂
52 淡褐色粗砂混じり細砂
53 褐色粗砂
54 淡黄褐色粗砂
55 淡褐色細砂
56 褐色粗砂
57 褐色細砂
58 淡茶褐色粗砂
59 淡褐色粗砂
60 淡褐色細砂混じり粗砂
61 淡褐色細砂混じり粗砂　赤褐色粗砂をﾌﾞﾛｯｸ状に含む他径10㎝前後の小石を少量含む
62 淡茶褐色粗砂混じり細砂
63 褐色細砂混じり粗砂　淡褐色細砂をﾗﾐﾅ状に含む
64 淡褐色粗砂混じり細砂　褐色粗砂をﾗﾐﾅ状に含む
65 淡橙褐色細砂混じり粗砂　淡褐色細砂をﾌﾞﾛｯｸ状に含む
66 淡橙褐色粗砂混じり細砂　同層の輪郭に沿って鉄分沈着著しい
67 淡褐色細砂
68 淡橙黄灰色粗砂混じり粘性細砂
69 褐色粗砂
70 淡褐灰色細砂
71 淡灰色細砂
72 淡褐色細砂
73 黄褐灰色粘性細砂
74 淡灰黄褐色粘性細砂
75 淡黄褐色粘性細砂　径2.5㎝の小石微量含む
76 淡黄褐色粗砂
77 淡灰褐色粘性粗砂
78 黄褐色粘性粗砂　黄橙色粘性粗砂の小ﾌﾞﾛｯｸを多く含する
79 黄褐色粘性粗砂
80 黄褐色粘性粗砂
81 黄褐色粘質土　黄橙色粘質土の小ﾌﾞﾛｯｸを多含する
82 灰青色粘性粗砂
83 灰青色粘性粗砂　82層より灰色強し
84 褐黄色粗砂
85 灰青褐色粘性粗砂
86 灰青色粘質土
87 黄橙色粗砂
88 黄褐色粘質土
89 橙褐色粘性粗砂
90 灰黄褐色粘性粗砂
91 褐灰青色粗砂混じり粘質土
92 淡褐灰色細砂
93 褐灰色粗砂
94 茶褐色粘性粗砂
95 暗灰褐色粗砂
96 灰黄白色細砂
97 淡褐色細砂混じり粗砂
98 暗褐灰色細砂混じり粗砂
99 暗赤褐色粗砂
100 暗灰色細砂混じり粗砂
101 暗灰色粗砂
102 黄灰色粗砂混じり粘質土
103 淡黄橙色粗砂
104 灰色粗砂
105 淡灰褐色粗砂
106 淡黄灰色粗砂
107 淡黄灰褐色粗砂
108 暗黄灰色粘質土
109 黄灰色粘性粗砂
110 暗黄灰色細砂混じり粘質土
111 淡褐色粗砂混じり細砂
112 淡褐色細砂混じり粗砂
113 淡灰色細砂
114 赤褐色粗砂
115 灰青色粗砂
116 黒灰色粘性粗砂
117 淡黄橙褐色粘質土
118 橙褐色粘性粗砂
119 黄灰色粘性粗砂
120 灰黄褐色粘性粗砂
121 灰黄褐色粘性粗砂
122 青灰色粗砂混じり粘質土　橙褐色粘性粗砂のﾌﾞﾛｯｸを多く含む
123 橙褐色粘性粗砂



第170図　B区東半北端トレンチ南壁土層断面図１（天地S＝１／40・左右S＝１／80）



1 攪乱
2 攪乱
3 黒褐色粘質土
4 黄灰褐色粘性粗砂
5 暗褐灰色粘質土
6 灰黄褐色粘性粗砂
7 淡茶褐色細砂
8 暗褐色粗砂
9 灰褐色粘性細砂　灰白色細砂をﾗﾐﾅ状に含む
10 淡褐色粘性粗砂
11 淡褐灰色細砂
12 茶褐色粗砂混じり細砂
13 淡灰褐色粗砂
14 淡褐色細砂
15 暗茶褐色粗砂
16 褐色粘性細砂
17 褐色粗砂
18 褐色粗砂
19 褐色細砂混じり粗砂
20 淡褐色粗砂混じり細砂
21 茶褐色粗砂混じり細砂
22 淡褐灰色細砂
23 茶褐色粗砂
24 暗褐灰色粗砂混じり細砂
25 黄橙褐色粘性粗砂
26 茶褐色粗砂
27 淡茶褐色粗砂混じり細砂
28 茶褐色細砂
29 淡褐色細砂
30 淡褐色粗砂混じり細砂
31 淡灰褐色粗砂　径7㎝前後の小石多含する他径20㎝前後の小礫微量含む
32 淡茶褐色細砂
33 淡褐色細砂
34 黄褐色粘性細砂
35 褐色粗砂
36 黄灰褐色粘性粗砂　暗褐色粘性細砂がﾌﾞﾛｯｸ状に入る
37 淡茶褐色細砂
38 褐色粘性粗砂　黄灰褐色粘性細砂がﾌﾞﾛｯｸ状に入る
39 褐色粘性粗砂
40 褐色粗砂
41 茶褐色粗砂
42 淡褐色細砂
43 淡黄橙褐色粘性粗砂
44 淡褐灰色粘性粗砂
45 淡橙褐色粘性粗砂
46 黄橙褐色粘性粗砂
47 淡黄橙褐色粘性粗砂
48 淡黄褐色粘性粗砂
49 淡褐色粗砂混じり細砂　粗砂径2～3㎜層が水平に縞状を呈して入る
50 淡褐色粗砂混じり細砂　褐色細砂37層がﾌﾞﾛｯｸ状に入る
51 淡褐色粗砂
52 淡褐色粗砂混じり細砂
53 褐色粗砂
54 淡黄褐色粗砂
55 淡褐色細砂
56 褐色粗砂
57 褐色細砂
58 淡茶褐色粗砂
59 淡褐色粗砂
60 淡褐色細砂混じり粗砂
61 淡褐色細砂混じり粗砂　赤褐色粗砂をﾌﾞﾛｯｸ状に含む他径10㎝前後の小石を少量含む
62 淡茶褐色粗砂混じり細砂
63 褐色細砂混じり粗砂　淡褐色細砂をﾗﾐﾅ状に含む
64 淡褐色粗砂混じり細砂　褐色粗砂をﾗﾐﾅ状に含む
65 淡橙褐色細砂混じり粗砂　淡褐色細砂をﾌﾞﾛｯｸ状に含む
66 淡橙褐色粗砂混じり細砂　同層の輪郭に沿って鉄分沈着著しい
67 淡褐色細砂
68 褐橙黄灰色粗砂混じり粘性細砂
69 褐色粗砂
70 淡褐灰色細砂
71 淡灰色細砂
72 淡褐色細砂
73 黄褐灰色粘性粗細砂
74 淡灰黄褐色粘性細砂
75 淡黄褐色粘性細砂　径2.5㎝の小石微量含む
76 淡黄褐色粗砂
77 淡灰褐色粘性粗砂
78 黄褐色粘性粗砂　黄橙色粘性粗砂の小ﾌﾞﾛｯｸを多く含する
79 黄褐色粘性粗砂
80 黄褐色粘性粗砂
81 黄褐色粘質土　黄橙色粘質土の小ﾌﾞﾛｯｸを多含する
82 灰青色粘性粗砂
83 灰青色粘性粗砂　82層より灰色強し
84 褐黄色粗砂
85 灰青褐色粘性粗砂
86 灰青色粘質土
87 黄橙色粗砂
88 黄褐色粘質土
89 橙褐色粘性粗砂
90 灰黄褐色粘性粗砂
91 褐灰青色粗砂混じり粘質土
92 淡褐灰色細砂
93 褐灰色粗砂
94 茶褐色粘性粗砂
95 暗灰褐色粗砂
96 灰黄白色細砂
97 淡褐色細砂混じり粗砂
98 暗褐灰色細砂混じり粗砂
99 暗赤褐色粗砂
100 暗灰色細砂混じり粗砂
101 暗灰色粗砂
102 黄灰色粗砂混じり粘質土
103 淡黄橙色粗砂
104 灰色粗砂
105 淡灰褐色粗砂
106 淡黄灰色粗砂
107 淡黄灰褐色粗砂
108 暗黄灰色粘質土
109 黄灰色粘性粗砂
110 暗黄灰色細砂混じり粘質土
111 淡褐色粗砂混じり細砂
112 淡褐色細砂混じり粗砂
113 淡灰色細砂
114 赤褐色粗砂
115 灰青色粗砂
116 黒灰色粘性粗砂
117 淡黄橙褐色粘質土
118 橙褐色粘性粗砂
119 黄灰色粘性粗砂
120 灰黄褐色粘性粗砂
121 灰黄褐色粘性粗砂
122 青灰色粗砂混じり粘質土　橙褐色粘性粗砂のﾌﾞﾛｯｸを多く含む
123 橙褐色粘性粗砂



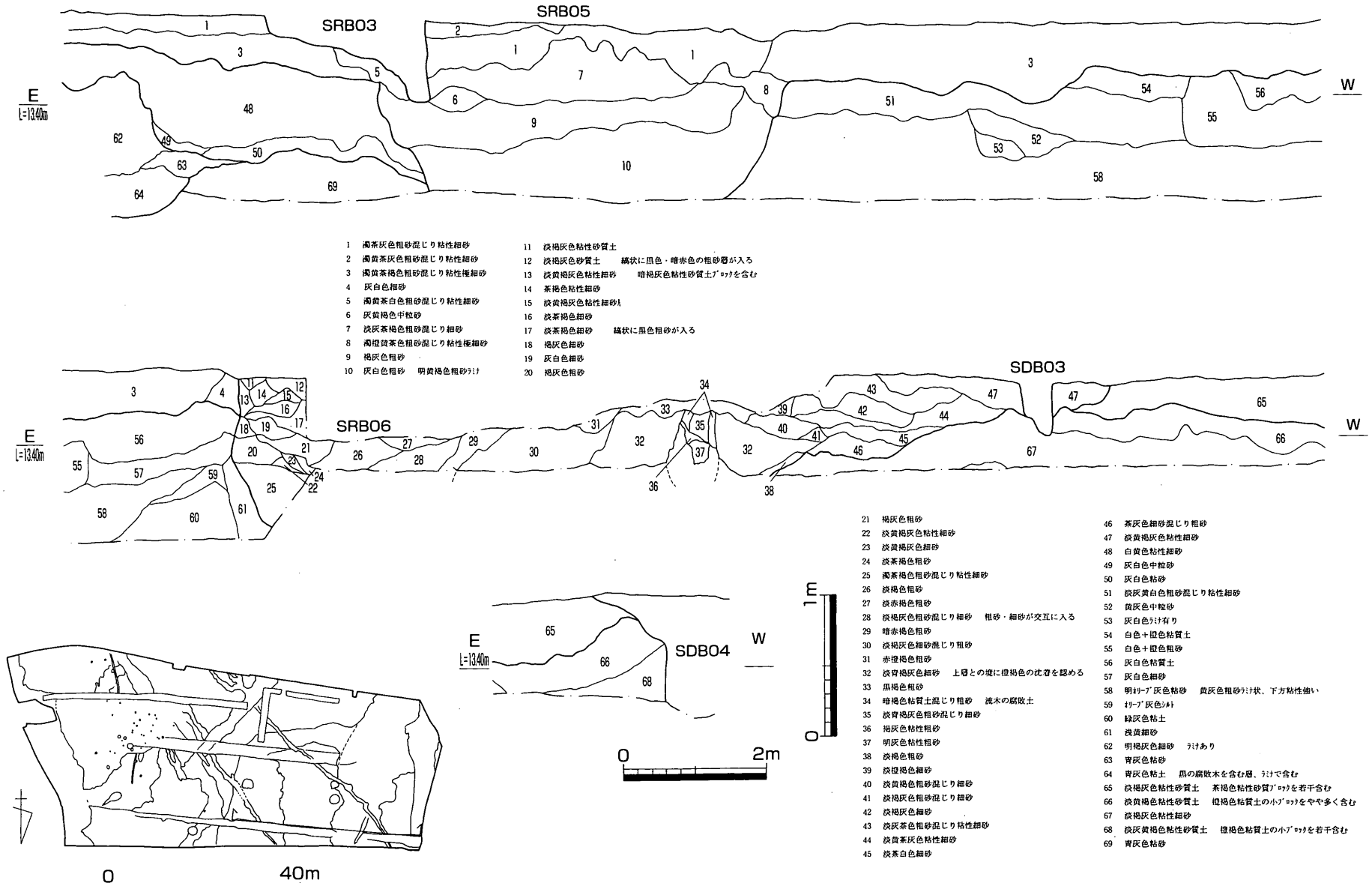
第171図　B区東半北端トレンチ南壁土層断面図２（天地S＝１／40・左右S＝１／80）

主として試掘トレンチ及び下層確認トレンチを用いた。基本的に遺構面は耕作土直下か床土直下で検出していることから、調査区壁の記録はほとんど行なっていない。下層確認トレンチの設定位置は、水田の地境畦直下に暗渠などが設置されて撹乱を受けていたことから、その部分を掘り下げて使用している。その結果、却って土層の堆積状況、特に流路の単位を把握するに当たって検討しにくい状況を招いてしまった。以下、当調査区で掘削したトレンチの土層をかいつまんで説明する。なお、土層作成位置は遺構配置模式図上に図示しているほか、断りがなければトレンチ上端が第1遺構面である。

第170·171図は調査区東半北端で掘削したトレンチ南壁で記録した土層である。122層に細分している。トレンチ中央付近において、模式的に示した基本土層序に近い状況（46・48・88・90層）が認められる以外は河川堆積層が主体となる。トレンチ東端には本来SRB01がかかるが、図作成位置で撹乱が認められたため（第170図1・2層）十分記録が出来ていない。同流路に関連する土層は4層である。後述するSRB01下層北側包含層に相当する。その下層において遺構検出面では確認できなかった旧河道に伴うと見られる堆積層が認められる。トレンチ西端ではSRB04・05が確認できる。この部位だけを見ても堆積状況はかなり複雑で、旺盛な堆積が想定できる。88層上面がトレンチ中央をピークとし、東西それぞれへ向けて若干傾斜することから、SRB04・05及びSRB01は先行して形成された窪地に新たに穿たれた流路であると想定する。

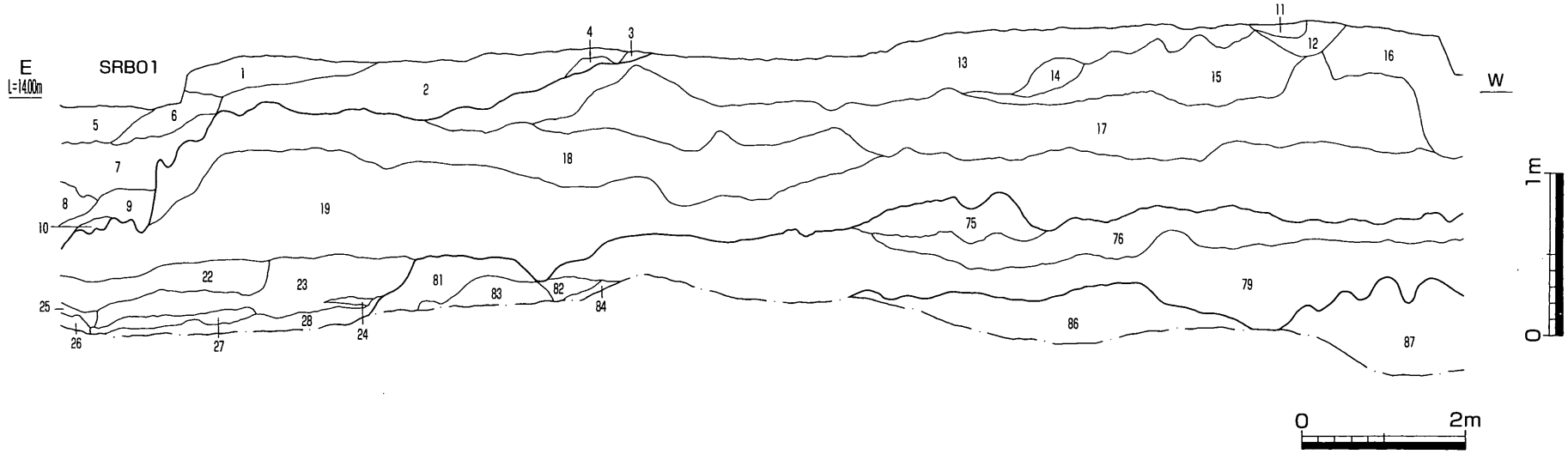
第172図は調査区西半北端で掘削したトレンチの南壁土層である。69層に細分した。東半で掘削したトレンチの延長に当たるが、間に若干のギャップが生じている。この部位では東半トレンチに比べ掘削深度が浅いため、単純な比較は困難であるが、土質・色調からみて69・58層が東半トレンチ90層に概ね対比できる可能性がある。ほぼ全面が河川堆積層からなり、基本土層序として捉えられるものはほとんど認められない。トレンチ東端では東半トレンチで検出したSRB05がかかるほか、これと重複してSRB03が認められた。SRB05の堆積は、1～8層までは粘性細砂及び粘性極細砂を主体とする埋土であることから最終埋没に伴うものと見られ、9・10層が粗砂層を中心とする埋土であることから、流路として機能していた時期のものと想定できる。また、48～50層はその前段階の流路の最終埋没の可能性がある。また、62～64層は下層のSRB07の埋土であると考えられる。トレンチ中央付近では東半トレンチで認められた黄茶色系砂混じり粘質土の水平堆積は認められず、やや白色がかった粘質土と砂層の互層となる。この部分も平面的に確認できなかった下層の流路が存在する可能性が想定できる。西半分は大半がSRB06の堆積で、一部SDB03が重複する。底部まで完掘していないことから詳細は不明であるが、大半が粗砂・細砂の互層からなり、一部ではマンガン分の著しい沈着を認める。また、トレンチ底部付近では直径0.80mほどの流木が認められるほか、その周辺でも砂質土層中で植物遺存体が若干確認できた。トレンチ西端ではSDB04の断面が確認できる。

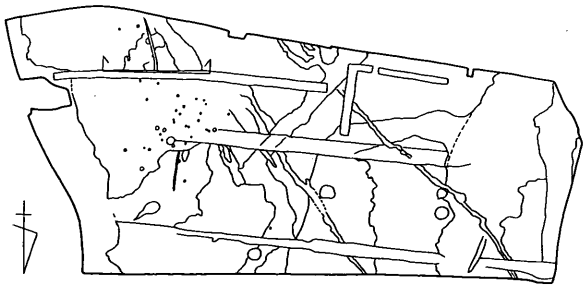
第173・174図は東半南側で掘削したトレンチの南壁土層である。90層に細分した。トレンチ東端はSRB01に達する位置まで掘削していたが、崩落により、メインになる部分の土層記録が出来てない。第173図左端の1～10層がSRB01の西岸に相当する。また、このうち1・2層上面にはSRB01下層包含層の黒褐色粘質土が堆積していた。トレンチ中央の16層上面に認められる箱型の落ち込みはSRB02の断面である。トレンチ西端の88層はSRB04の埋土である。30層は比較的安定した堆積に見えていたが、この下層において粗砂・細砂の互層からなる複雑な堆積が認められ、やはり旧河道の存在が想定できる。このトレンチにおいても第169図模式図に示したような堆積状況はほとんど認められず、トレンチ中央やや東寄り付近の75・76・79・86・87の各層がそれに相当する部分と見られる。



1 褐茶灰色粗砂混じり粘性細砂
2 褐黄茶灰色粗砂混じり粘性細砂
3 褐黄茶褐色粗砂混じり粘性極細砂
4 灰白色細砂
5 褐黄茶白色粗砂混じり粘性細砂
6 灰黄褐色中粒砂
7 淡灰茶褐色粗砂混じり細砂
8 褐橙黄茶色粗砂混じり粘性極細砂
9 褐灰色粗砂
10 灰白色粗砂　明黄褐色粗砂ﾗﾐﾅ
11 淡褐灰色粘性砂質土
12 淡褐灰色砂質土　縞状に黒色・暗赤色の粗砂層が入る
13 淡黄褐灰色粘性細砂　暗褐灰色粘性砂質土ﾌﾞﾛｯｸを含む
14 茶褐色粘性細砂
15 淡黄褐灰色粘性細砂ﾚﾝｽﾞ
16 淡茶褐色細砂
17 淡茶褐色細砂　縞状に黒色粗砂が入る
18 褐灰色細砂
19 灰白色細砂
20 褐灰色粗砂
21 褐灰色粗砂
22 淡黄褐灰色粘性細砂
23 淡黄褐灰色細砂
24 淡茶褐色粗砂
25 褐茶褐色粗砂混じり粘性細砂
26 淡褐色粗砂
27 淡赤褐色粗砂
28 淡褐灰色粗砂混じり細砂　粗砂・細砂が交互に入る
29 暗赤褐色粗砂
30 淡褐灰色細砂混じり粗砂
31 赤橙褐色粗砂
32 淡青褐灰色細砂　上層との境に橙褐色の沈着を認める
33 黒褐色粗砂
34 暗褐色粘質土混じり粗砂　流木の腐敗土
35 淡青褐灰色粗砂混じり細砂
36 褐灰色粘性粗砂
37 明灰色粘性粗砂
38 淡褐色粗砂
39 淡橙褐色細砂
40 淡黄褐色粗砂混じり細砂
41 淡褐灰色粗砂混じり細砂
42 淡褐灰色細砂
43 淡灰茶色粗砂混じり粘性細砂
44 淡黄茶灰色粘性細砂
45 淡茶白色細砂
46 茶灰色細砂混じり粗砂
47 淡黄褐灰色粘性細砂
48 白黄色粘性細砂
49 灰白色中粒砂
50 灰白色粘砂
51 淡灰黄白色粗砂混じり粘性細砂
52 黄灰色中粒砂
53 灰白色ﾗﾐﾅ有り
54 白色＋橙色粘質土
55 白色＋橙色粗砂
56 灰白色粘質土
57 灰白色細砂
58 明ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘砂　黄灰色粗砂ﾗﾐﾅ状、下方粘性強い
59 ｵﾘｰﾌﾞ灰色ｼﾙﾄ
60 緑灰色粘土
61 淡黄細砂
62 明褐灰色細砂　ﾗﾐﾅあり
63 青灰色粘砂
64 青灰色粘土　黒の腐敗木を含む層、ﾗﾐﾅで含む
65 淡褐灰色粘性砂質土　茶褐色粘性砂質ﾌﾞﾛｯｸを若干含む
66 淡黄褐色粘性砂質土　橙褐色粘質土のﾌﾞﾛｯｸをやや多く含む
67 淡褐灰色粘性細砂
68 淡灰黄褐色粘性砂質土　橙褐色粘質土のﾌﾞﾛｯｸを若干含む
69 青灰色粘砂

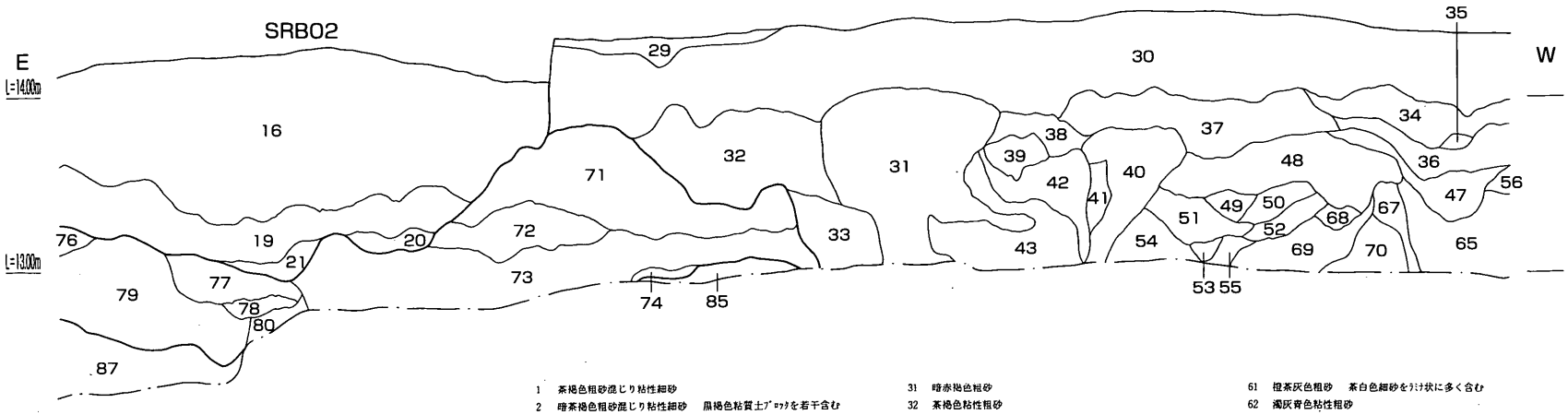
第172図　B区西半北端トレンチ南壁土層断面図（天地S＝１／40・左右S＝１／80）

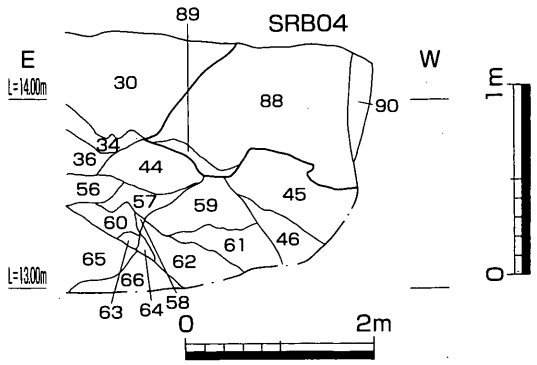


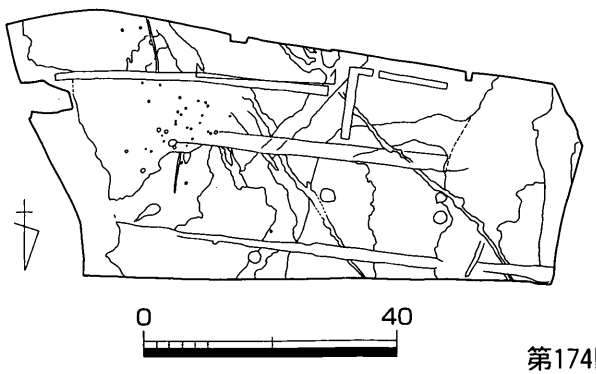


1 茶褐色粗砂混じり粘性細砂
2 暗茶褐色粗砂混じり粘性細砂　黒褐色粘質土ﾌﾞﾛｯｸを若干含む
3 褐色粘性砂質土
4 淡褐黄色粘性砂質土
5 濁茶灰色細砂混じり粗砂
6 灰褐色粗砂混じり細砂
7 褐色粘性細砂　黒褐色粘質土層を間層としてはさむ
8 淡茶褐色細砂
9 暗褐色粗砂混じり粘性細砂
10 茶褐色粗砂
11 暗褐色粘性粗砂
12 茶褐色粗砂混じり細砂
13 淡橙黄褐色粘性砂質土
14 黄茶褐色粘性細砂
15 淡褐色粘性細砂
16 濁茶灰色粗砂混じり粘性細砂
17 橙黄褐色粗砂混じり粘性細砂
18 灰黄褐色粗砂混じり粘性砂質土　暗褐色粘性細砂が層に垂直に入る他橙黄色粘質土の小ﾌﾞﾛｯｸを多く含む
19 灰褐色粗砂混じり粘性砂質土
20 黄灰色粘質土
21 黄灰褐色粘質土
22 黄灰褐色粘性細砂　茶褐色粗砂を薄く層状に含む
23 灰褐色粗砂混じり細砂
24 褐灰色粘質土　灰青色粘質土の小ﾌﾞﾛｯｸを若干含む
25 灰褐色粘質土
26 青灰色粘質土
27 濁橙黄灰色粘性細砂
28 暗褐灰色粘質土　植物遺存体をやや多く含む
29 濁茶灰色粗砂混じり粘性細砂
30 茶灰褐色粗砂混じり粘性細砂
31 暗赤褐色粗砂
32 茶褐色粘性粗砂
33 褐色粗砂　灰黄色細砂などを互層にはさむ
34 淡褐色粗砂混じり細砂
35 淡褐色細砂
36 淡褐灰色粗砂
37 淡黄灰褐色細砂
38 淡褐灰色粘性細砂
39 淡黄橙褐色粗砂混じり粘性細砂
40 淡褐色粗砂混じり細砂
41 赤褐色粗砂
42 黄灰褐色粗砂混じり粘性細砂
43 茶褐色粗砂
44 暗灰色粗砂　白灰色細砂をﾗﾐﾅ状に含む
45 暗橙褐色混粗砂細砂
46 橙茶色混粗砂細砂　暗灰色及び茶白色細砂をﾗﾐﾅ状に多く含む
47 灰白色細砂
48 茶灰褐色粗砂混じり細砂
49 茶灰色粗砂混じり細砂
50 淡灰青色粗砂混じり粘性細砂
51 赤褐色粗砂
52 赤茶褐色粗砂
53 暗茶褐色粗砂
54 淡黄茶色細砂
55 淡黄褐色粗砂混じり細砂
56 濁淡灰色粗砂混じり粘性細砂　47層ﾌﾞﾛｯｸ若干含
57 灰茶色細砂混じり粗砂
58 暗灰色粗砂
59 橙茶灰色粗砂　暗灰色細砂をﾗﾐﾅ状に多く含む
60 暗茶灰色粗砂
61 橙茶灰色粗砂　茶白色細砂をﾗﾐﾅ状に多く含む
62 濁灰青色粘性粗砂
63 濁黄灰色粘性細砂
64 淡灰茶色細砂
65 灰茶色細砂混じり粗砂
66 茶灰色粘性粗砂
67 灰色細砂
68 黒褐色粗砂
69 橙褐色粗砂混じり細砂
70 淡灰色粗砂混じり細砂
71 明茶褐色粘性粗砂
72 淡橙褐色粘性細砂
73 明黄灰茶色粗砂混じり粘性極細砂
74 青灰褐色粘質土
75 灰褐色粘性粗砂
76 黄灰褐色粗砂混じり粘質土
77 暗灰褐色粘質土
78 暗青灰色粘質土
79 81に同じ
80 暗灰青色粘質土
81 灰青褐色粗砂混じり粘性細砂
82 灰褐色粗砂混じり粘性細砂
83 青灰色粘性粗砂
84 淡橙褐色粗砂混じり細砂
85 87層に同じ
86 青灰色粗砂混じり粘質土
87 青灰色粗砂混じり粘質土
88 茶灰色粘性粗砂　黒色ﾏﾝｶﾞﾝ沈着層を層底部に多く認める
89 暗橙褐色混粗砂細砂
90 撹乱

第173図　B区東半南壁トレンチ南壁土層断面図１（天地S＝１／40・左右S＝１／80）

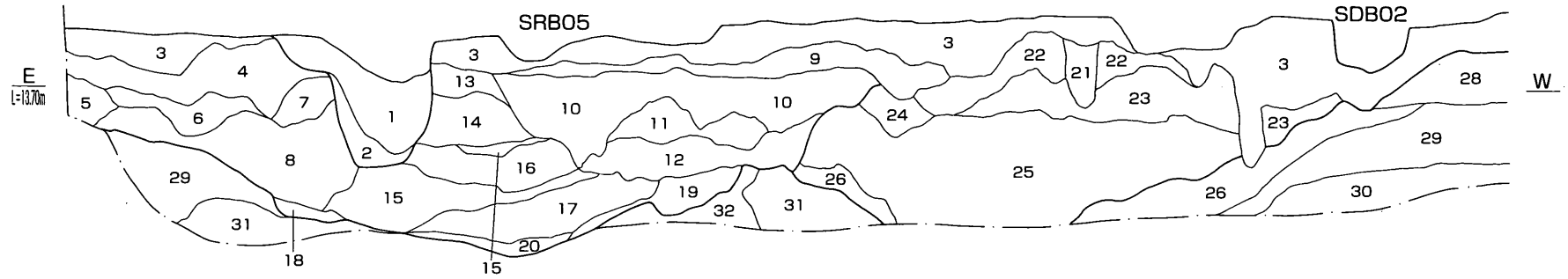


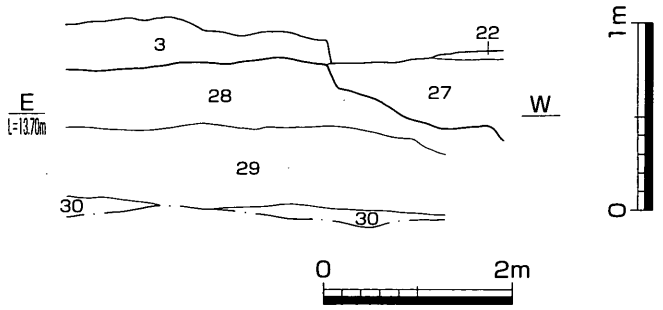




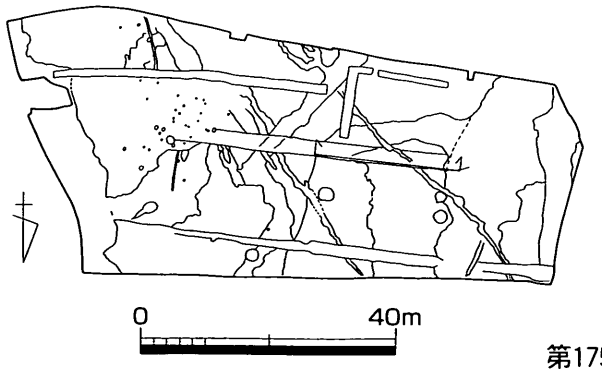
1 茶褐色粗砂混じり粘性細砂
2 暗茶褐色粗砂混じり粘性細砂　黒褐色粘質土ﾌﾞﾛｯｸを若干含む
3 褐色粘性砂質土
4 淡褐黄色粘性砂質土
5 濁茶灰色細砂混じり粗砂
6 灰褐色粗砂混じり細砂
7 褐色粘性細砂　黒褐色粘質土層を間層としてはさむ
8 淡茶褐色細砂
9 暗褐色粗砂混じり粘性細砂
10 茶褐色粗砂
11 暗褐色粘性粗砂
12 茶褐色粗砂混じり細砂
13 淡橙黄褐色粘性砂質土
14 黄茶褐色粘性細砂
15 淡褐色粘性細砂
16 濁茶灰色粗砂混じり粘性細砂
17 橙黄褐色粗砂混じり粘性細砂
18 灰黄褐色粗砂混じり粘性砂質土　暗褐色粘性細砂が層に垂直に入る他橙黄色粘質土の小ﾌﾞﾛｯｸを多く含む
19 灰褐色粗砂混じり粘性砂質土
20 黄灰色粘質土
21 黄灰褐色粘質土
22 黄灰褐色粘性細砂　茶褐色粗砂を薄く層状に含む
23 灰褐色粗砂混じり細砂
24 褐灰色粘質土　灰青色粘質土の小ﾌﾞﾛｯｸを若干含む
25 灰褐色粘質土
26 青灰色粘質土
27 濁橙黄灰色粘性細砂
28 暗褐灰色粘質土　植物遺存体をやや多く含む
29 濁淡灰色粗砂混じり粘性細砂
30 茶灰褐色粗砂混じり粘性細砂
31 暗赤褐色粗砂
32 茶褐色粘性粗砂
33 褐色粗砂　灰黄色細砂などを互層にはさむ
34 淡褐色粗砂混じり細砂
35 淡褐色細砂
36 淡褐灰色粗砂
37 淡黄灰褐色細砂
38 淡褐灰色粘性細砂
39 淡黄橙褐色粗砂混じり粘性細砂
40 淡褐色粗砂混じり細砂
41 赤褐色粗砂
42 黄灰褐色粗砂混じり粘性細砂
43 茶褐色粗砂
44 暗灰色粗砂　白灰色細砂をﾗﾐﾅ状に含む
45 暗橙褐色混粗砂細砂
46 橙茶色混粗砂細砂　暗灰色及び茶白色細砂をﾗﾐﾅ状に多く含む
47 灰白色細砂
48 茶灰褐色粗砂混じり細砂
49 茶灰色粗砂混じり細砂
50 淡灰青色粗砂混じり粘性細砂
51 赤褐色粗砂
52 赤茶褐色粗砂
53 暗茶褐色粗砂
54 淡黄茶色細砂
55 淡黄褐色粗砂混じり細砂
56 濁淡灰色粗砂混じり粘性細砂　47層ﾌﾞﾛｯｸ若干含
57 灰茶色細砂混じり粗砂
58 暗灰色粗砂
59 橙茶灰色粗砂　暗灰色細砂をﾗﾐﾅ状に多く含む
60 暗茶灰色粗砂
61 橙茶灰色粗砂　茶白色細砂をﾗﾐﾅ状に多く含む
62 濁灰青色粘性粗砂
63 濁黄灰色粘性細砂
64 淡灰茶色細砂
65 灰茶色細砂混じり粗砂
66 茶灰色粘性粗砂
67 灰色細砂
68 黒褐色粗砂
69 橙褐色粗砂混じり細砂
70 淡灰色粗砂混じり細砂
71 明茶褐色粘性粗砂
72 淡橙褐色粘性細砂
73 明黄灰茶色粗砂混じり粘性極細砂
74 青灰褐色粘質土
75 灰褐色粘性粗砂
76 黄灰褐色粗砂混じり粘質土
77 暗灰褐色粘質土
78 暗青灰色粘質土
79 81に同じ
80 暗灰青色粘質土
81 灰青褐色粗砂混じり粘性細砂
82 灰褐色粗砂混じり粘性細砂
83 青灰色粘性粗砂
84 淡橙褐色粗砂混じり細砂
85 87層に同じ
86 青灰色粗砂混じり粘質土
87 青灰色粗砂混じり粘質土
88 茶灰色粘性粗砂　黒色ﾏﾝｶﾞﾝ沈着層を層底部に多く認める
89 暗橙褐色混粗砂細砂
90 撹乱

第174図　B区東半南壁トレンチ南壁土層断面図２（天地S＝１／40・左右S＝１／80）





1 黒褐色粘土＋淡黄色ｼﾙﾄ ﾗﾐﾅあり
2 淡黄色ｼﾙﾄ ﾗﾐﾅあり
3 濁黄茶灰色粗砂混じり粘性細砂
4 淡黄色粗砂 鉄分多く沈着 ﾗﾐﾅあり
5 暗茶灰色粗砂混じり粘性細砂
6 灰白色細砂中粒砂 鉄分多く沈着 ﾗﾐﾅあり
7 灰黄色細砂 鉄分多く沈着 ﾗﾐﾅあり
8 灰色粗砂 鉄分多く沈着 ﾗﾐﾅあり
9 淡黄色に黄橙色ﾗﾐﾅ＋暗灰色ﾗﾐﾅ細砂
10 明緑灰色ｼﾙﾄ
11 23＋25の主色
12 灰白色細砂
13 茶灰色中粒砂 鉄分多く沈着
14 褐灰色粗砂 ﾗﾐﾅあり
15 灰白色細砂 ﾗﾐﾅあり
16 褐灰色粗砂
17 灰黄色粗砂中粒砂 ﾗﾐﾅあり
18 黄灰色粘土
19 暗灰色粘性極細砂 薄青色地山ﾌﾞﾛｯｸ若干含
20 黒色粘性極細砂 腐敗した葉や木を一面に含む ﾍﾞｰｽは粘砂か？
21 灰黄色粗砂
22 灰白色粗砂
23 灰褐色粗砂＋明褐色粗砂
24 灰色中粒砂
25 褐灰色＋明黄褐色(ﾗﾐﾅ) 粗砂
26 灰白色中粒砂
27 灰ｵﾘｰﾌﾞ色細砂 SR02
28 にぶい橙色細砂
29 灰白色粘質土
30 黄灰青色粘性極細砂
31 青灰色粘質土 29に同じだが地下水位の影響でｸﾞﾗｲ化している
32 淡灰黄色粗砂混じり粘性細砂



第175図 B区西半東西トレンチ南壁土層断面図（天地S＝１／40・左右S＝１／80）

第175図は調査区西半の東寄りで掘削したトレンチの北壁土層である。トレンチの大半がSRB05の埋土で占められる。ただ、埋土の単位が複雑で全ての層がSRB05に帰属させられるのかは十分検討できなかった。1・2層は当初別単位の流路埋土であると想定していたが、SRB05の埋土の一部として捉えなおした。大きくみると、3～20層までと、21～25層までの2つの単位に捉えることができるようだが、いずれも主たる埋土は粗砂・細砂の互層であることから、若干場所を違えながら流下した痕跡と想定する。なお、このトレンチでは第169図模式図④～⑥に相当するのは28～30層である。

③第2面の設定

さて、調査開始時点では、試掘調査の成果を受け、遺構面は一面のみであると想定して作業計画を立てていたが調査が進むにつれ、単一の時期ではなく、複数の時期に亘る遺構が同一面で捉えられている状況であることが判明した。ピット・土坑などの遺構に切られる形で複数の旧河道が検出できていたが、トレンチ調査を実施した結果、ほとんど無遺物に近い状況であることが判明し、大半の旧河道についてはトレンチ掘削を行なっただけで、記録も下層確認トレンチを掘削する際に併せて行なうに留めることとした。ところが、B区西半部北半で追加の下層確認トレンチを掘削した結果、灰青色砂混じり粘質土上面（第169図⑥層上面）で黄茶灰色砂混じり粘質土の落ち込みがいくつか確認できるところが認められたため、調査区の1／4の範囲をこの灰青色砂混じり粘質土上面まで掘削を行ない、これを仮第2面とした。しかし、同面においてはこの落ち込み以外の遺構は検出出来なかった。落ち込みの土質が同層上面にある黄茶灰色砂混じり粘質土とさほど差がないことから、灰青色砂混じり粘質土は、上層である黄茶灰色砂混じり粘質土が地下水の影響下においてグライ化したものであると判断した(図版84)。また、この過程で西半部と東半部の境界付近でSRB07の存在が確認できたため、これを第2面として掘削した。SRB07の帰属する土層序は第169図⑤層上面と想定している。

3. 遺構と遺物

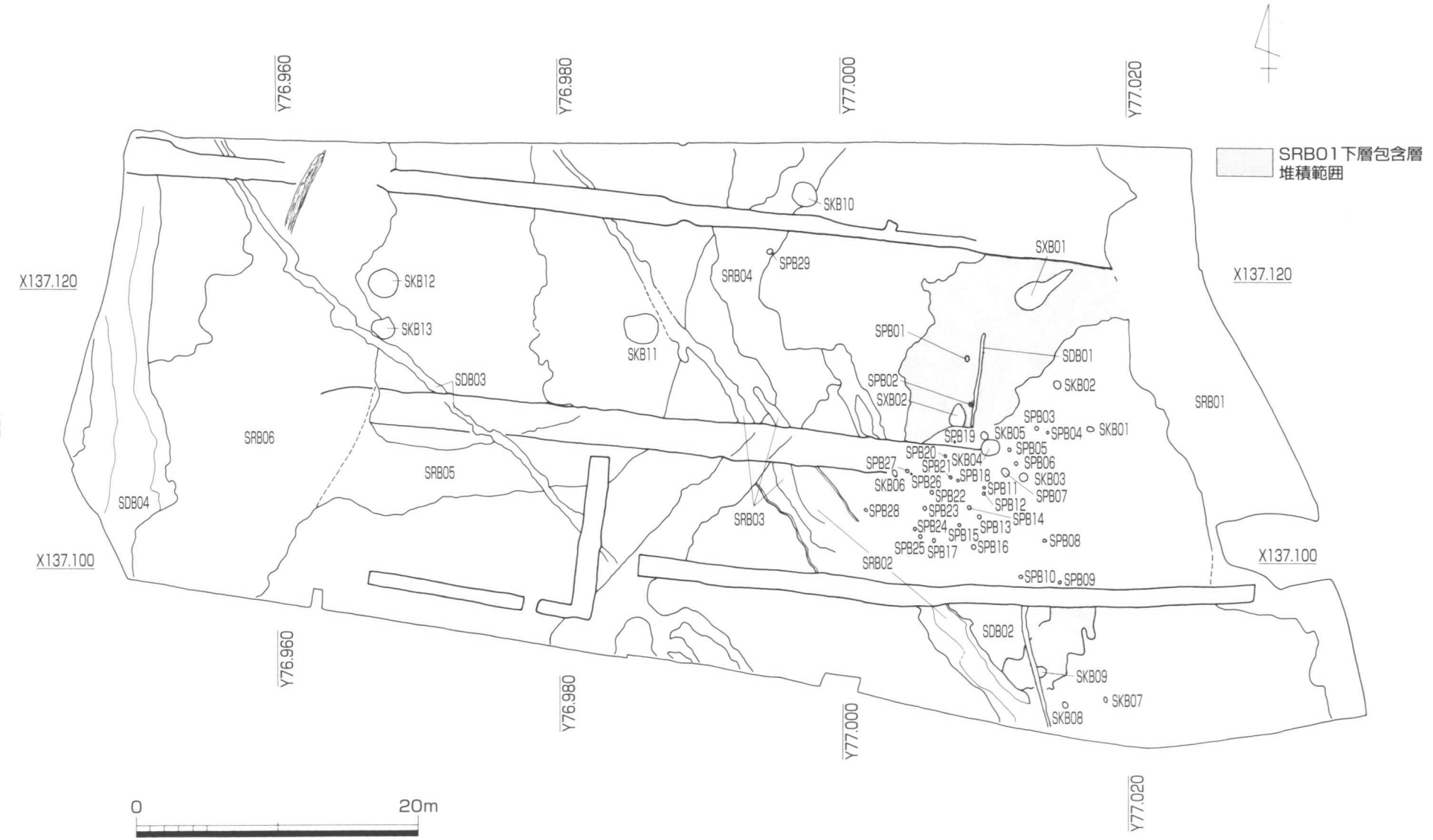
当調査区は第1遺構面・第2遺構面が存在する。第1遺構面（第176図）では土坑13基・柱穴29基・溝状遺構4条・性格不明遺構2基・自然流路6条を検出した。土坑は調査区全面において散漫な分布を示すが、良好な遺物を多く含み、時期が特定できるものはほとんど調査区東半に偏って分布する。柱穴もほぼ同様の分布を示している。溝状遺構については調査区西端において検出したSDB04を除くと、やや直線的に延びるSDB01・02及び東南東から西北西へ延びるSDB03が認められるが、数としては少ない。片桐地形分類では当調査区の中央部は微高地aに相当するが、微高地に分類された範囲を含め、調査区ほぼ全面で旧河道が認められる点が留意される。旧河道についてはSRB01からSRB06を第1遺構面として捉えている。第2遺構面はB区中央付近のごく限られた範囲でのみ確認しており、SRB07がこの遺構面に帰属する。以下、主要な遺構についてのみ報告する。

第1遺構面

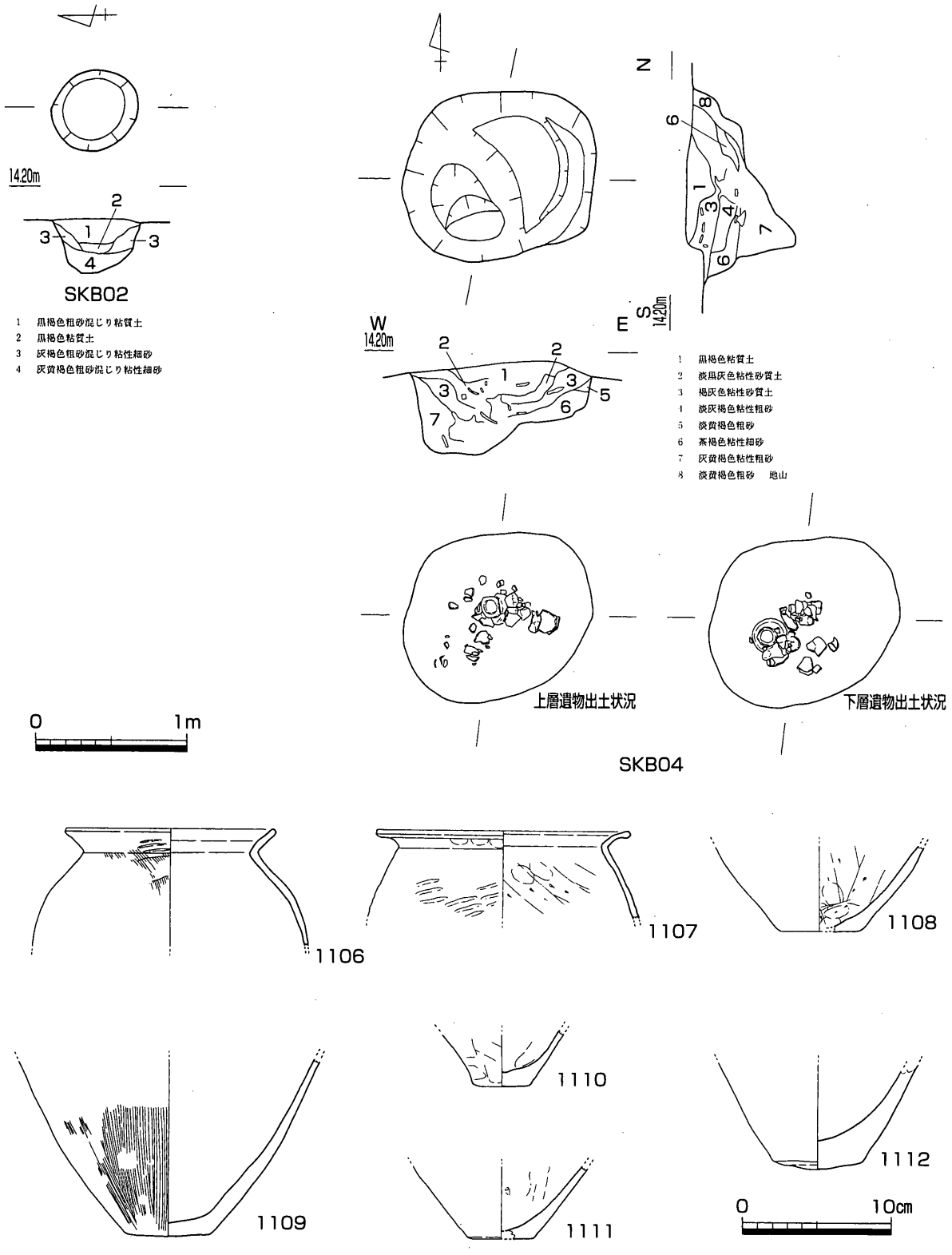
（1）土坑

SKB02（第177図）

調査区東側中央付近で検出した土坑である。平面形は直径約0.60mの円形を呈し、断面形は最深部で0.35mを測る椀状を呈する。埋土は4層に細分できるが、大別すると黒褐色粘質土からなる上層と、灰

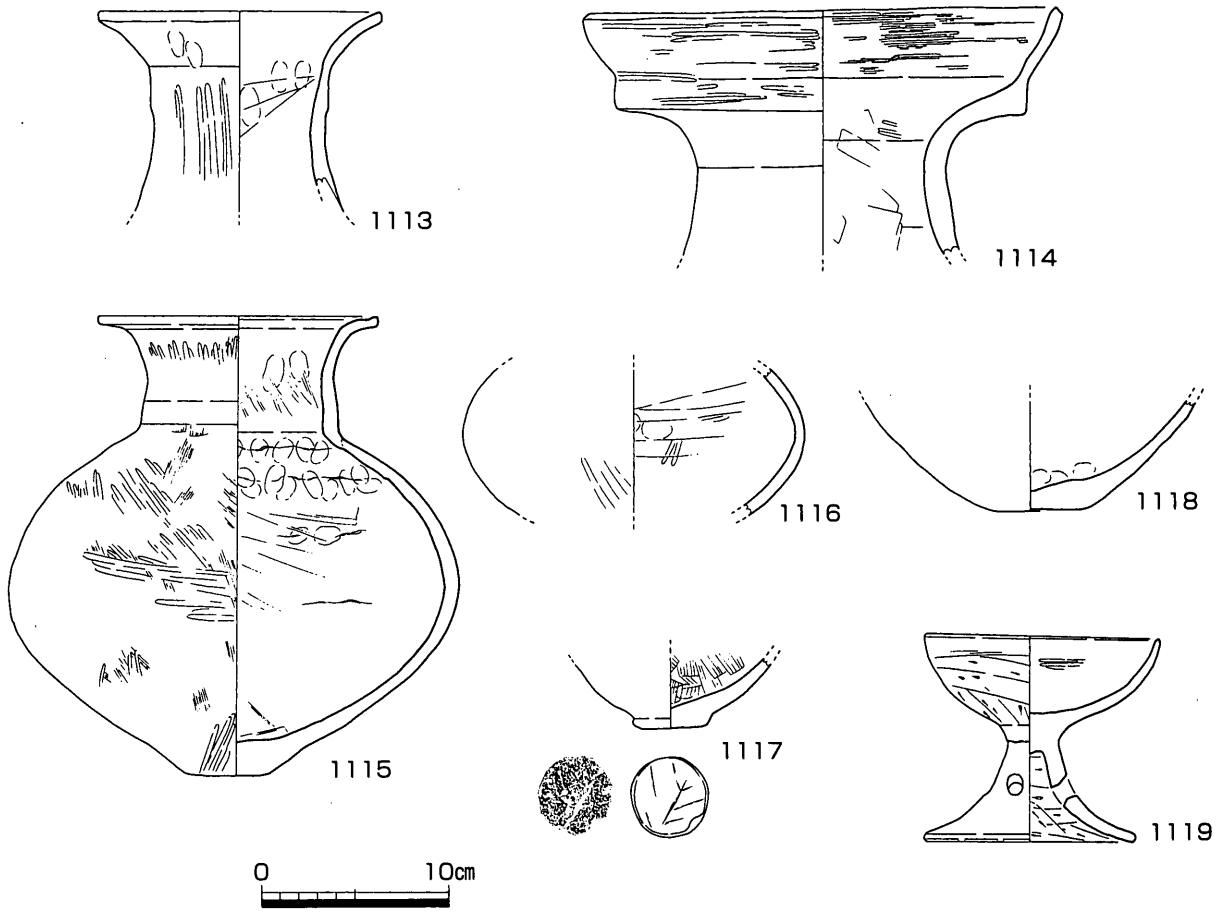


第176図　B区遺構配置図（S＝1／400）



第177図　SKB02・04平・断面図（S＝1／40）、SKB04出土遺物1（S＝1／4）

褐色系の粗砂混じり粘質土からなる下層に分けられる。上層は下層を切り込んで堆積していることから、掘り直し後に再堆積した可能性が想定できる。

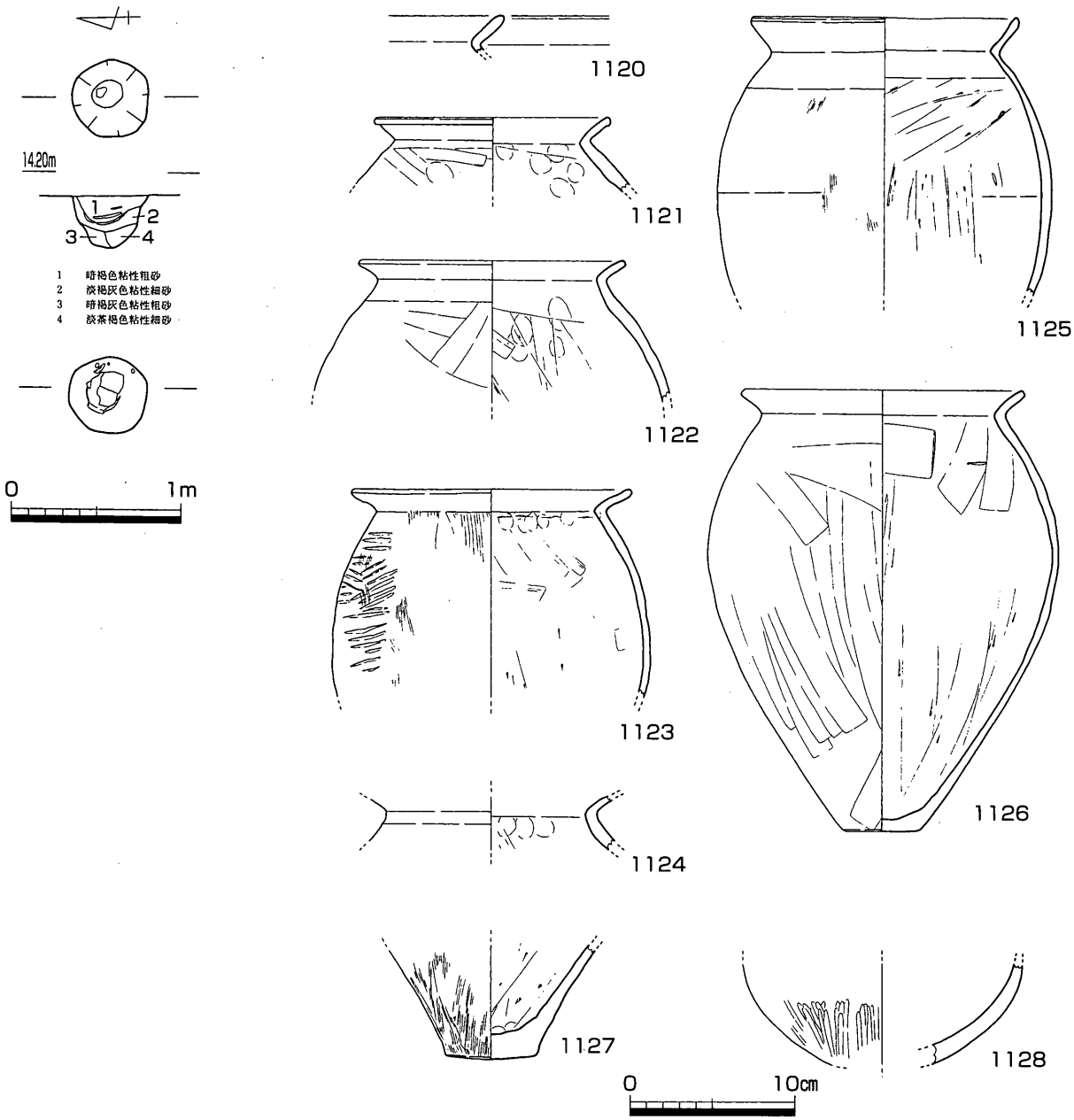


第178図　SKB04出土遺物２（S＝１／４）

SKB04（第177・178図）

調査区東半中央付近で検出した土坑である。平面形は長軸1.26m・短軸1.06mを測る歪な楕円形を呈し、断面形は最深部で0.73mを測り、底部で二段程度のテラスを持つやや複雑な形状を呈している。埋土は概ね７層に細分したが、最上層で黒褐色粘質土が認められる他は、粗砂ないし細砂を主体とする。

当遺構からは、下層から中層にかけて大量の土器が出土した。大半が破片化しており、完形に戻るものは少ないが、甕（1106～1112）・壺（1113～1116・1118）・鉢（1117）・高坏（1119）が認められる。甕については特に全体の器形が判別しうるものがないため、詳細不明であるが、口縁部は体部から緩やかに折り返しており、弱い稜線が形成される特徴を持つ。底部は明確な平底を有する。壺については長頸壺（1113）・広口壺（1115）・二重口縁壺（1114）が認められる。胴部の状況がある程度想定できる資料は1115・1116のみであるが、最大径が器体の中央付近に位置するようである。外面調整はいずれもヘラミガキが認められる。底部は平底である。鉢（1117）は底部破片のみで詳細不明であるが、突出した平底を有し、底部外面には木葉圧痕が認められる。高坏は1119の１点を図示しているが、小型の椀状を呈した坏部を有する。外面調整は坏部についてはヘラケズリを施すが、脚部については明瞭に確認出来なかった。内面調整については坏部にヘラミガキが施されるが、摩滅が進み、全体の調整がヘラミガキによるものかどうかは確認できない。脚部内面はヘラケズリによる調整が施される。また、脚部の中央付近に三方向からの穿孔が認められる。遺構の時期については出土遺物から弥生時代後期後半から終末期にかけてのものと想定できる。



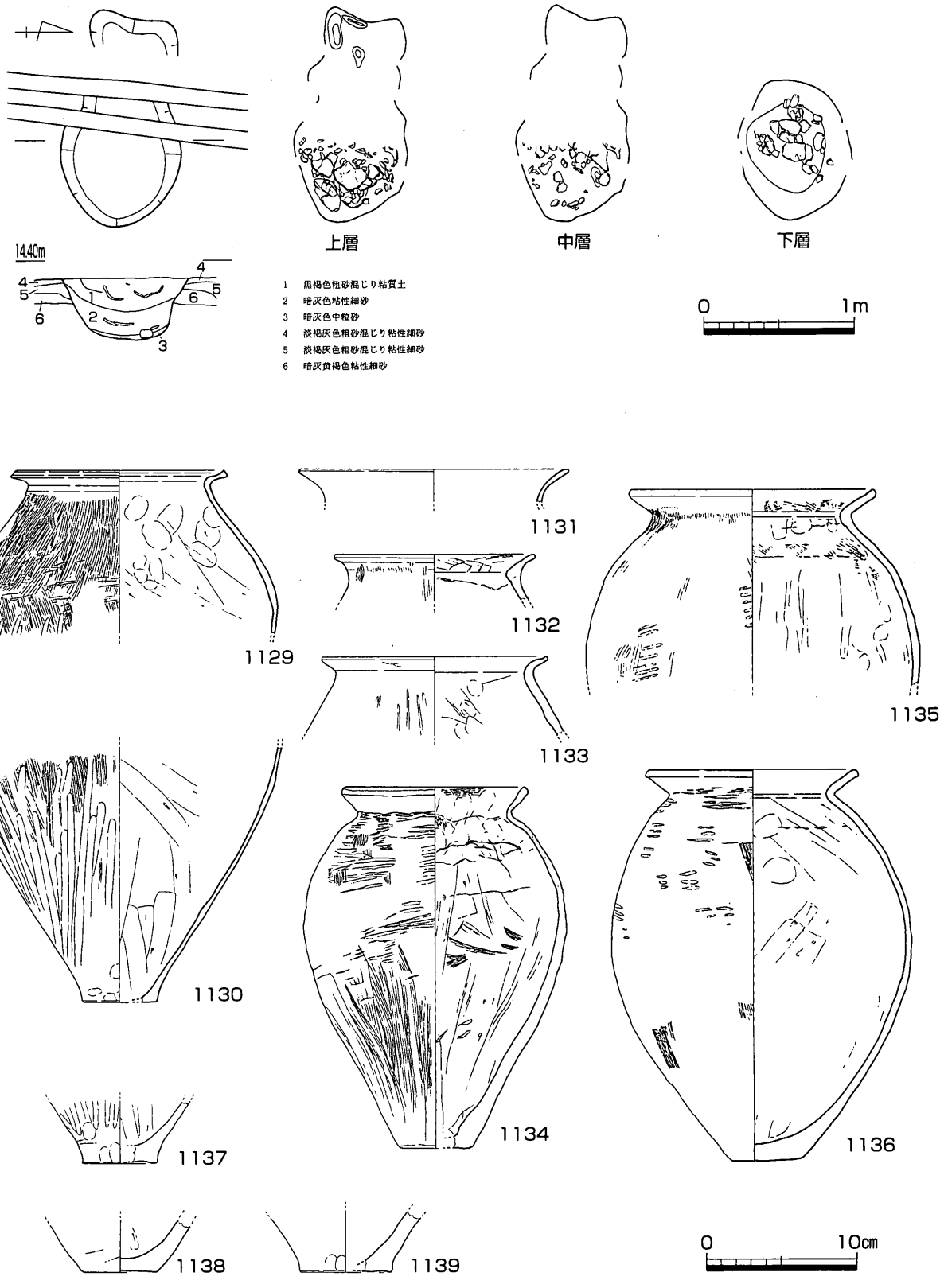
第179図　SKB05平・断面図（S＝1／40）、出土遺物（S＝1／4）

SKB05（第179図）

調査区東半中央付近で検出した土坑である。SKB04に隣接する。平面形は直径0.47mのややいびつな円形を呈し、断面形状は最深部で0.30mを測る深い椀状を呈する。埋土は概ね4層に細分され、暗褐色系の粘性粗砂を主体とする。

当遺構からは、中層付近で破損した甕二個体程度が重なって出土した。出土遺物は甕（1120～1127）が主体である。口縁部は「く」の字に折れ曲がり、わずかに外反するものが多い。体部は胴部最大径が器体中央かやや上に来るものである。底部資料はわずかであるが、平底を呈しているものである。1128は鉢に分類した個体の体部を図示しているが、外面にヘラミガキの痕跡が認められる。破片資料であることから、壺体部を誤認している可能性がある。

遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期後半から終末期にかけてのものと想定する。



第180図　SKB09平・断面図（S＝１／40）、出土遺物１（S＝１／４）

SKB09（第180・181図）

調査区東半南壁中央付近で検出した遺構である。後述するSDB02により切られることから、これに先

行する遺構であることがわかる。平面形は東西1.38m程度、南北0.76m程度を測る不整形な遺構である。断面形状は南北断面では最深部で0.42m程度を測る深い椀状を呈する。東西断面は西が浅く東が深い形状を呈し、比較的深い部分だけを見ると平面形状は長軸0.90m・短軸0.72m程度のいびつな楕円形を呈する。埋土は上層で黒褐色混粗砂粘質土、下層で暗灰色粘性細砂からなる。遺構は、周辺に堆積する遺物包含層である黒褐色ないし暗褐色の混粗砂粘質土を切り込んでいる。

遺構からは比較的多量の弥生土器が出土しており、若干量はほぼ完形に復元しうる状態である。図示していないもののわずかに須恵器を含むが、SDB02出土遺物の掘り残しと見られる。遺物は主として東に寄った深い部分からの出土が大半である。第180図1129～1139は甕である。体部から口縁部へと「く」の字に屈曲し、口縁部は直線的に開く形状を取るもの（1132～1136）と、屈曲は弱くやや緩やかに外反するもの（1131）が認められる。胴部最大径は器体中央かそれよりも上に位置するものがほとんどである。底部の形状はいずれも平底を呈する。1129と1130は、接合は認められないもののほぼ同一個体と考えられ、外面はハケ調整後体部下半にヘラミガキを施し、内面は底部から胴部最大径付近までヘラ削り調整でそれよりも上は指押さえの痕跡を残すものである。器壁を薄く仕上げることと胎土中に角閃石を多量に含むこと、色調がチョコレート色を呈することから、所謂「下川津B類」土器であると想定する。これ以外の資料については外面調整に叩き目を残す状況が見られ、器壁もやや厚手である。第181図1140～1147は壺である。完形を保つものが認められないことから詳細不明であるが、口縁部は外反する傾向にある。胴部については最大径の位置が器体中央付近にあるが、その部位が弱い稜線を形成する1146と球形化した1147が認められる。第181図1148～1151は鉢である。小片のみであり、詳細不明であるが、大型の1148が認められる。小型のものには脚台の付く1151が認められる。製塩土器の可能性がある。底部のみの出土であるが甑（1152）の出土も認められる。1153は台石である。大半が欠落しており詳細不明であるが、現存部のほぼ中央付近の表裏に使用に伴うと見られる敲打痕が認められる。

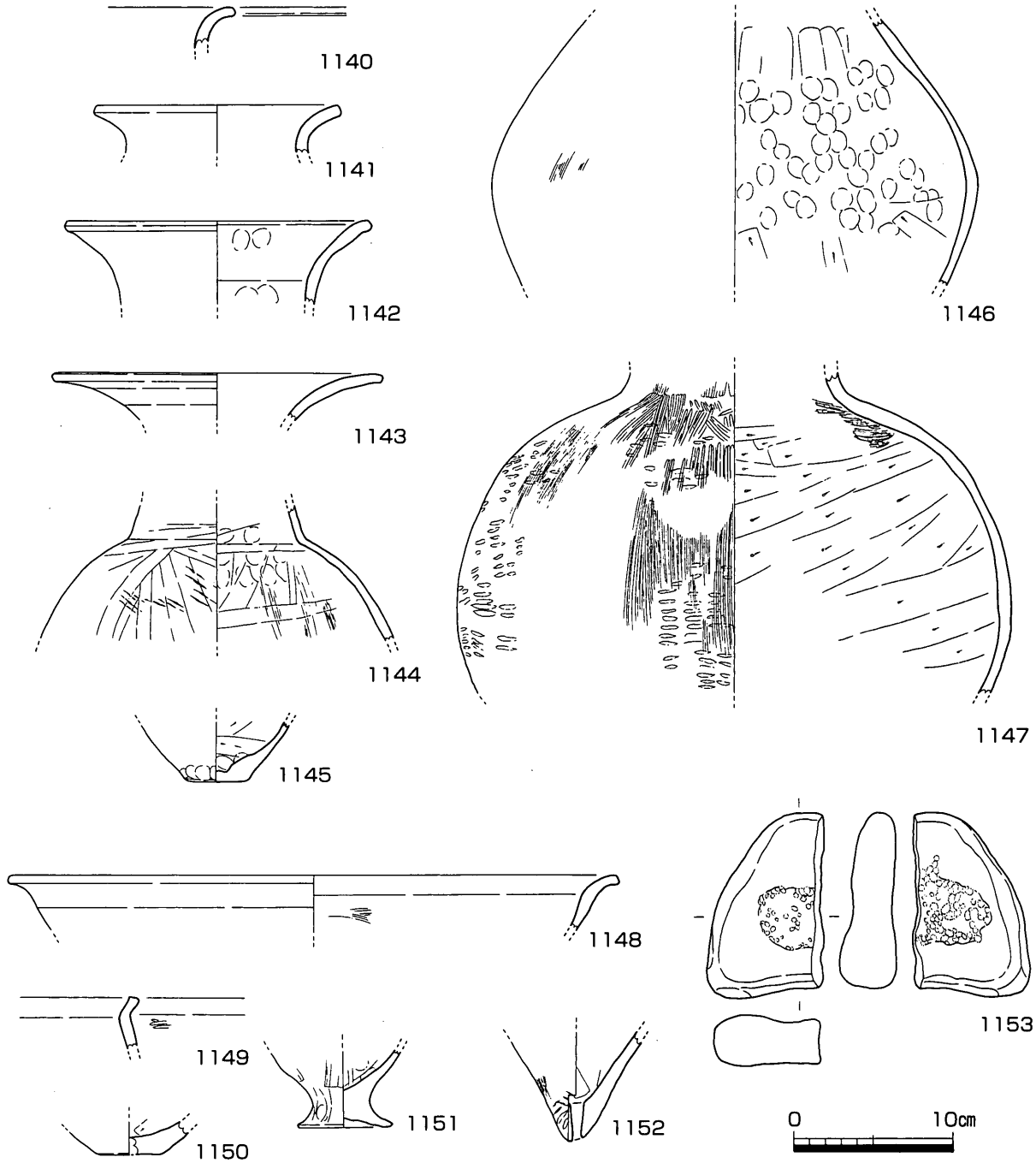
遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期後半から終末期にかけてのものと想定する。

SKB10（第182図）

調査区中央北壁付近で検出した遺構である。SRB04を切っていることから、これに後出する遺構であることがわかる。平面形はほぼ円形を呈しており、直径は1.70～1.80mを測る。断面形状は二段の落ち込みを持つ皿状を呈し、深さは最深部で0.44mを測る。埋土は７層に細分でき、黒褐色系、あるいは灰色系の細砂・混粗砂粘質土・粘質土の互層からなる。出土遺物は皆無で、遺構の時期についても不明である。

SKB11（第182・183図）

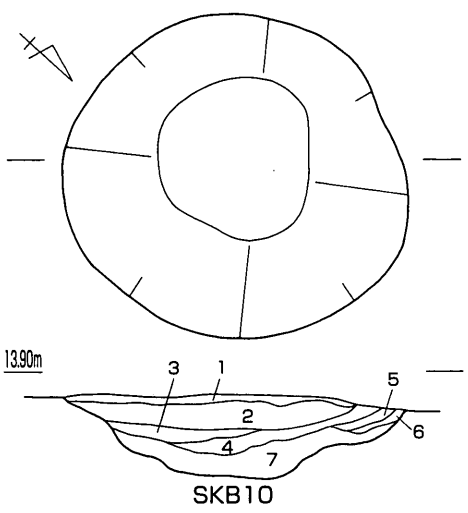
調査区中央やや北寄りで検出した遺構である。SRB05と重複して検出していることから、これに後出する遺構であることがわかる。また、SRB03に北側を一部切られていることからこれに先行する遺構であることがわかる。平面形状は不整形で東西約2.12m・南北約1.80mを測る。断面形状は椀状を呈し、深さは最深部で0.86mを測る。埋土は９層に細分できるが、当遺構掘削開始当初、SRB05内の埋土の単位として捉える調査ミスから上層の記録が不十分となっており、正確な状況が不明であるが、残った部分から判断すると、上層は黄色系の粗砂、中層は黒色系粗砂混じり粘質土、下層が黒色粘土からなる。ただし、下層は完掘出来ていない可能性が残る。下層埋土からは多量の植物遺存体が検出できたが、調査後

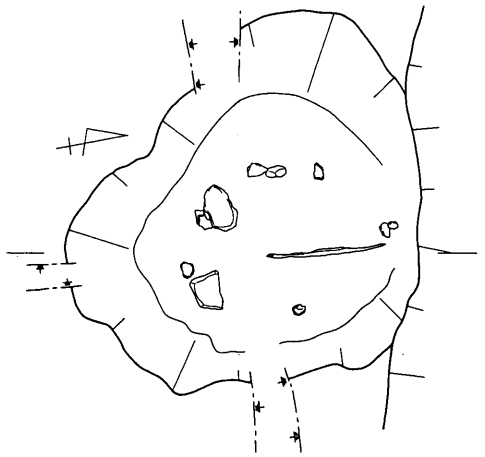


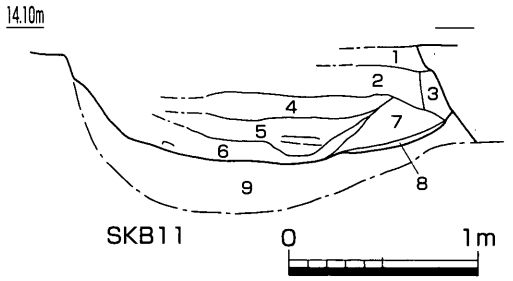
第181図　SKB09出土遺物２（S＝１／４）

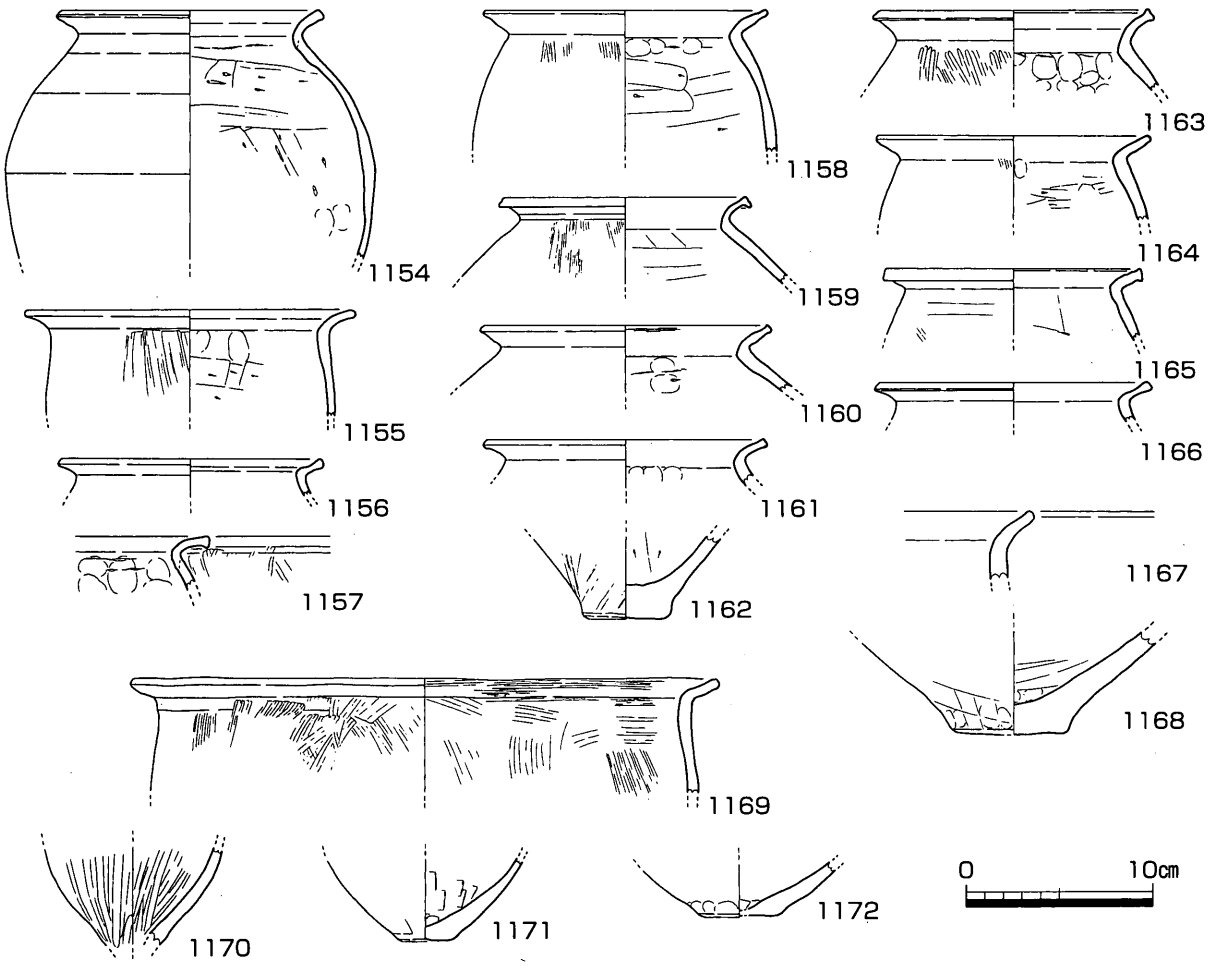
の保管状況が不十分であり、分析が実施できなかった。調査当時の所見では、ウリ科・ヒョウタン科とみられる種子が認められた。

出土遺物は弥生土器を主体とする（第182・183図）。甕（1154～1166）・壺（1167）・鉢（1168～1172）が認められるが、いずれも破片資料であることから、器形全体の状況は判別しがたい。口縁部は体部から「く」の字状に屈曲し、外反しながら斜め上方へやや長く延び、頸部内面に弱い稜線を形成するものが大半である。口縁端部の形状は丸く仕上げるもの（1155・1158・1164）・面を形成させるもの（1154・1165）・上方へ摘み上げるもの（1156・1160・1163・1166）・外側へ折り返すもの（1157・1159）とバリ

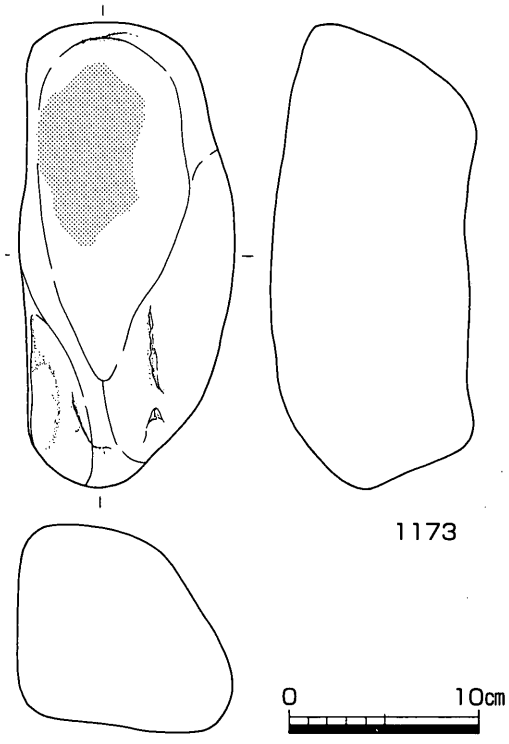






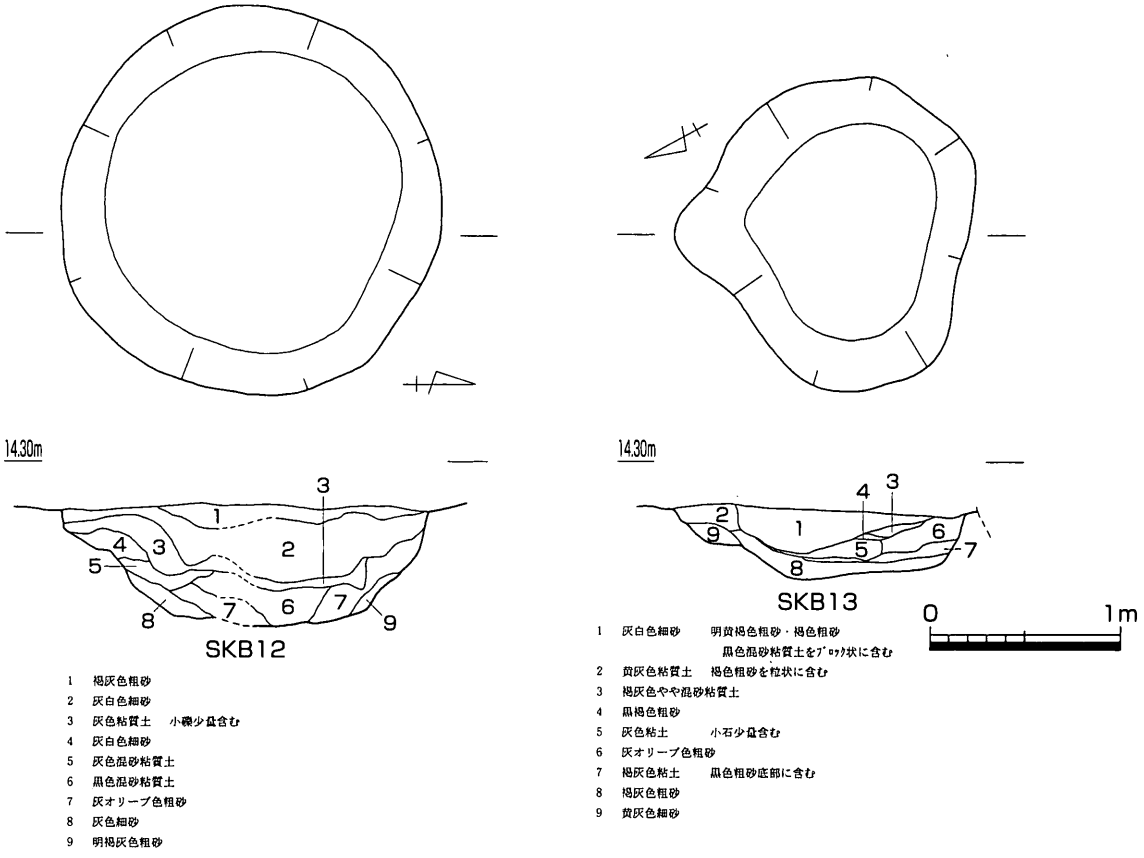


第182図　SKB10・11平・断面図（S＝１／40）、SKB11出土遺物１（S＝１／４）

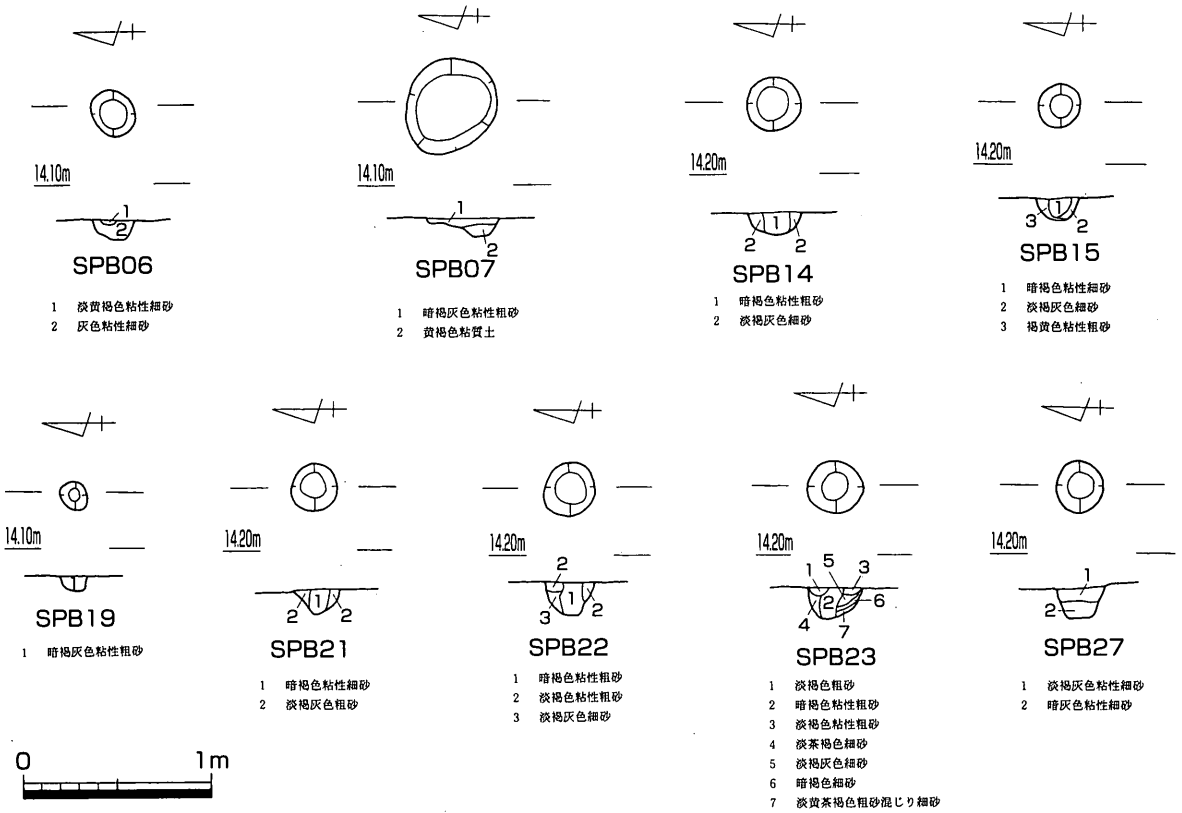


第183図　SKB11出土遺物２（S＝１／４）

エーションに富む。外面の調整は磨滅したものが多いが、その多くはハケ調整を施したものと見られる。例外的に、1163においてはミガキ調整を施したと見られる。内面については頚部内面付近までヘラ削りを施したと見られる個体が一定量存在する。底部資料は1162に図示したが、平底を呈する。壺は小片１点（1167）を図化したのみで、詳細は不明である。鉢についても同様に破片資料のみである。1170については内外面に精緻なヘラ磨き調整を施すものである。口縁部および底部が遺存しないことから詳細は不明であるが、底部がやや窄まる状況を呈しており、壺の肩部付近の破片である可能性も想定できるが、内面に精緻な調整を施していることから鉢に分類している。第183図1173は砥石に分類した。明確な作業痕跡が見えにくいが、図トーン掛け部において周辺部と比較して著しく平滑化した状況が見て取れることから、同器種に分類した。砂岩製である。



第184図　SKB12・13平・断面図（S＝１／40）



第185図　SPB06・07・14・15・19・21～23・27平・断面図（S＝1／40）

SKB12（第184図）

調査区西半中央北寄りで検出した遺構である。平面形は円形を呈しており、直径約2.10mを測る。また、断面形状は椀状を呈し、深さは最深部で0.54mを測る。埋土は9層に細分できるが、概ね上層と下層に大別できる。上層については周辺地山ブロック及び土坑下層埋土がブロック状に入り混じった状況を呈しており、著しい攪拌が想定される。下層はレンズ状堆積の連続であり、灰色系の砂質土を主体とする。

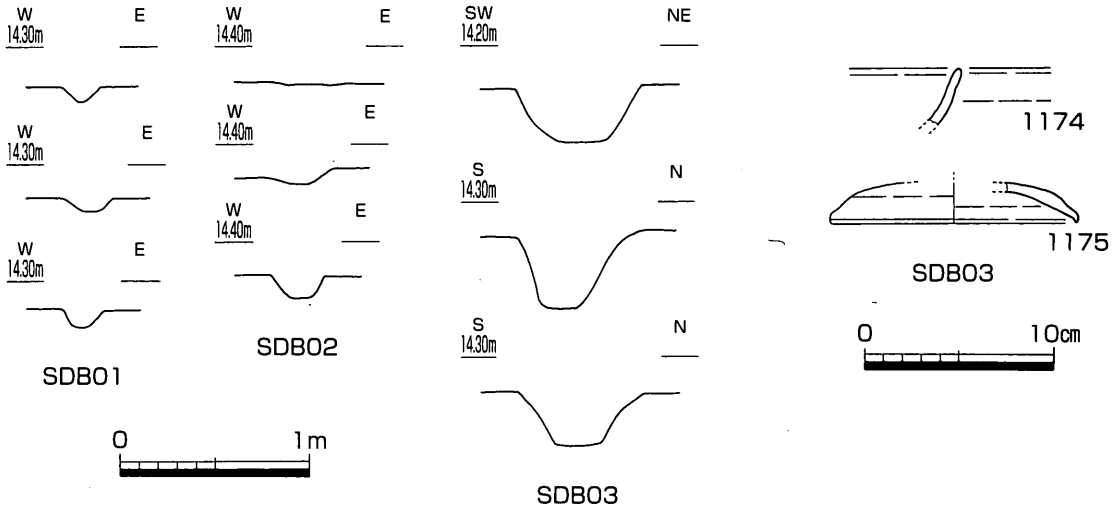
出土遺物は弥生土器の小片がわずかに認められるのみで、詳細な時期については不明である。

SKB13（第184図）

調査区西半中央やや北寄り付近で検出した遺構である。平面形は不整形であり、東西最大約1.63m・南北最大約1.60mを測る。断面形状は不整形な椀状を呈しており、深さは最深部で約0.38mを測る。埋土はSKB12とほぼ同じ状況を呈しており、時期的にも近接するものと想定できる。出土遺物は弥生土器の小片をわずかに含むのみで詳細は不明である。

（2）柱穴（第176・185図）

先に触れたとおり、当該遺構は調査区東半中央付近に集中する。調査区南壁中央付近SRB04西岸付近でも数基のピット状遺構を検出していたが、いずれも浅いものが多いことと、建物を構成するように見えなかったことから、SRB04の肩付近の落ち込みとして再評価した。ここで報告するものの大半も深さがほとんど無く、柱穴と断言できるものは少ない。若干柱痕らしきものを留めるものが認められる程度



第186図　SDB01～03断面図（S＝１／40）、SDB03出土遺物（S＝１／４）

である。これらの柱穴から掘立柱建物ないし竪穴住居跡に伴うものを抽出するのは困難であることから、単純に柱穴としてのみ報告する。直径は0.15～0.40m程度のものが主体となり、深さも0.10～0.20mの間に概ね収まる。出土遺物は皆無であり、詳細な時期については不明である。

（３）溝状遺構（第176・186・187図）

SDB01（第176・186図）

調査区東半中央付近で検出した南北方向の溝状遺構である。検出長は約6.80mを測り、幅は0.15m前後を測る。断面形状は浅い皿状ないし椀状を呈しており、深さは0.08m前後を測る。出土遺物は弥生土器の小片を少量含むのみで、時期の判別が可能な資料はない。

SDB02（第176・186図）

調査区南壁際東寄りで検出した南北方向の溝状遺構である。検出長は約９mを測り、幅は0.15m前後を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは0.01～0.10mを測る。

この溝の北端は、地形の項目で触れた水田の段差によって途切れており、耕地化に伴い削平を受けたものと想定できる。SKB09を切っていることから弥生時代後期以降の遺構であることがわかる。出土遺物は弥生土器の小片を含むのみで、時期については不明である。

SDB03（第176・186図）

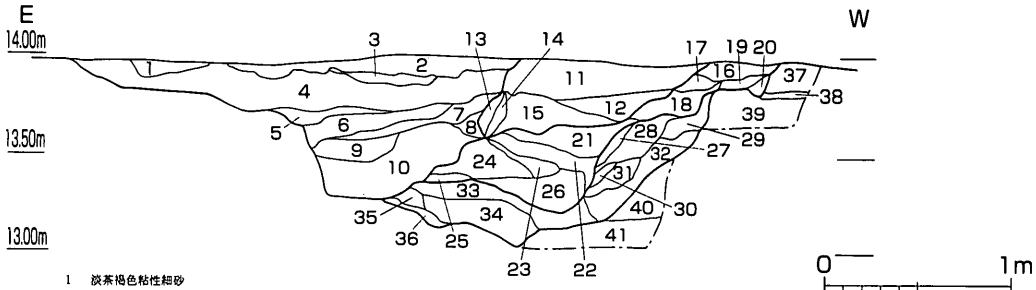
調査区西半部を南東から北西へ斜行する溝状遺構である。検出長は約42mを測り、幅は約0.70mを測る。断面形状は最深部で0.26～0.36mを測る深い箱状を呈する。埋土は暗褐色ないし黒褐色粘質土からなる。見かけの上では、SRB04南端で南東方向へ複数に枝分かれした溝状の落ち込みと一連のものとして捉えられるが、埋土の状況では枝分かれした溝状の落ち込みの埋土は茶褐色の砂質土を主体としていることから別単位の遺構であると判断した。出土遺物はわずかで、弥生土器の小片を主体とするものの、須恵器坏片（1174・1175）を若干含む。小片であることから詳細は不明であるが、古代頃のものと想定できる。

SDB04（第176・187図）

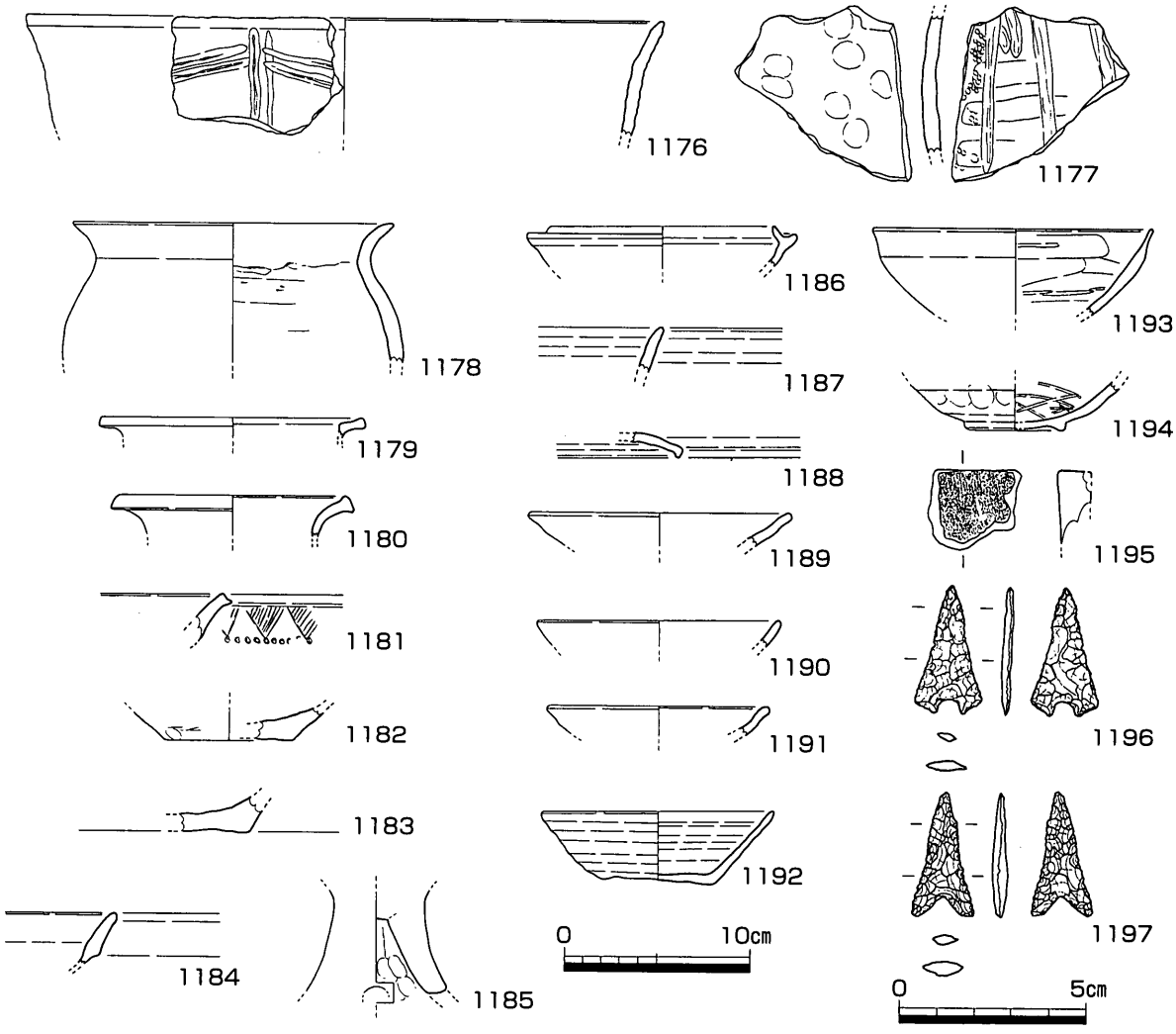
調査区西端で検出した溝状遺構である。検出長は約32mを測り、幅は上面検出幅で最大７m前後を測る。完掘後の断面形状は概ね逆台形を呈し、最深部で0.96mを測る。

上面検出時にやや蛇行する平面プランを取っていたことから、調査段階では旧河道として調査したが、完掘した段階で底部が直線的に延びる状況が確認できたことから、人工的な遺構であると判断し、溝状遺構として捉えなおした。主軸方位は溝底部の方向で計測するとN2.50°W、比較的直線的に延び、かつ長さのある東岸で計測するとN５°Eを測る。ただし、西岸の大半が調査区外へ出ていることから、計測した主軸方位は誤差を含む可能性がある。埋土は第187図に示したとおり、36層に細分しているが、堆積状況から大きく４つの単位（第187図太線）に大別が可能である。これらの埋土の単位は、それぞれ先行する単位の各層を切り込んで堆積している状況が認められることから、最低でも３回の再掘削がなされた可能性が想定できよう。

出土遺物はあまり多くは出土していないものの、縄文土器から黒色土器まで幅広い時期のものが出土している。やや多く認められるのは弥生土器である。1176・1177は縄文土器である。共に摩滅が著しく、明瞭に地文が認められるものはなく、辛うじて沈線様の文様が認められるのみである。1176は深鉢の口縁部片であるが、外面口縁直下から２本の沈線が垂下し、その両側から同様の幅で左右へわずかに下がりながら施された沈線が認められる。胎土中に結晶片岩を僅かに含む。1177は深鉢の体部片と見られる。表面にわずかに縄文および沈線が認められるが、裏面には指頭痕がわずかに認められるのみで、詳細は不明である。共に縄文時代中期の所産と想定する。1178～1185は弥生土器である。いずれも小片であり詳細は不明であるが、1178・1179は甕である。また、1180～1183は壺に、1184・1185は高坏に分類した。いずれも弥生時代後期の所産と想定する。1186～1189は須恵器である。1186は古墳時代後期、1187は古代の坏身である。また、1188は古代の坏か皿の蓋、1189は古代の皿と想定する。1190～1192は土師質土器である。1190・1192は坏・1191は小皿に分類した。1193・1194は黒色土器椀である。1193は摩滅がやや進んでおり、詳細は不明であるが、内面は板ナデ調整の後、下位の一部にヘラ磨きを施す。外面は口縁部の一部で指押さえ後回転指ナデ調整が施されているのが窺える程度である。また、1194は底部の小片であるが、内面見込みから体部下位に暗文状のヘラ磨きが認められる。外面は体部に指押さえの跡が見られるほか、高台貼り付け部に回転指ナデの痕跡が認められる。高台は貼り付け高台でかなり矮小化している。1195は平瓦である。小片化しており、外面はほとんど摩滅していることから詳細不明であるが、内面は布目の痕跡が認められる。以上は古代末から中世にかけての所産と想定する。1196・1197は凹基無茎式の石鏃である。共に細身でやや長大なもので、脚は短い。1197は両側縁を細かい鋸歯状に調整する。調整は精緻で表裏には素材面を残置しない。出土遺物の状況から13世紀後半頃の遺構であると想定する。



1 淡茶褐色粘性細砂
2 茶褐色粗砂　径3mm～1mm・白褐色細砂層をはさむ
3 褐灰白色極細砂
4 暗灰褐色粘質土混じり褐灰色粗砂　粘質土は3層との境をなす
5 暗灰色粗砂混じり粘質土
6 淡褐色細砂
7 茶褐色細砂
8 淡褐色細砂　ﾏﾝｶﾞﾝ粒を若干含む
9 赤褐色粗砂　径3mm～5mm
10 橙褐色粗砂混じり淡黄橙色細砂
11 淡褐色粗砂混じり細砂　左下がりのﾗﾐﾅ状を呈する
12 暗灰色粗砂混じり粘質土
13 淡黒褐色粗砂　径3mm前後
14 淡灰色粘性細砂
15 淡褐灰色粗砂混じり細砂
16 暗褐灰色粘性粗砂
17 淡褐色粗砂
18 褐灰色粘性粗砂
19 淡茶褐色粗砂
20 灰褐色粘性粗砂
21 褐灰白色粘性粗砂
22 淡褐色粗砂
23 黒褐色粗砂
24 灰白色極細砂
25 灰色細砂混じり白色細砂
26 灰色細砂混じり白色細砂
27 黒色細砂
28 褐灰色細砂
29 暗灰色粘性細砂
30 淡褐色粗砂
31 灰青色粘性細砂
32 暗灰褐色粘性細砂
33 黒褐色粗砂混じり淡茶褐色粗砂
34 茶褐色粗砂
35 暗茶褐色粗砂
36 青灰褐色細砂
37 淡黒灰色粗砂
38 淡黒灰色粘性粗砂
39 濁茶褐色粘性粗砂
40 濁青灰黄色粘性粗砂
41 濁黄灰青色粘性粗砂

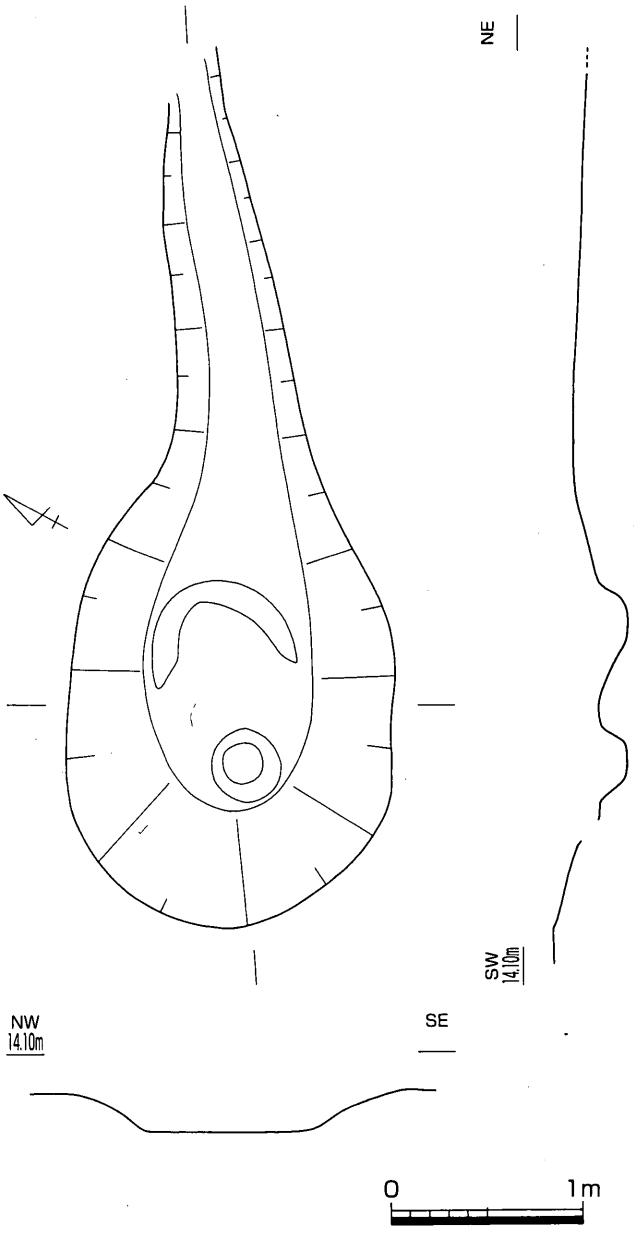


第187図　SDB04断面図（S＝１／40）、出土遺物（S＝１／４・１／２）

（4）性格不明遺構

SXB01（第188図）

調査区東半中央北寄りで検出した遺構である。平面形は主軸がSW－NEを取るおたまじゃくし様を呈しており、長軸約2.30m・短軸約1.70mの楕円形の落ち込みとそこから派生する幅0.30～0.15m程の溝状遺構からなる。落ち込みは皿状を呈し、深さは概ね0.20m前後を測る。溝底部は主軸に沿うように北東方向へレベルを下げてゆく。当初、平面形状から出水状遺構の可能性を想定したが、掘り込みは浅く、底部が透水層まで達していないことから、同遺構の可能性は想定しがたい。出土遺物はなく、時期についても不明である。

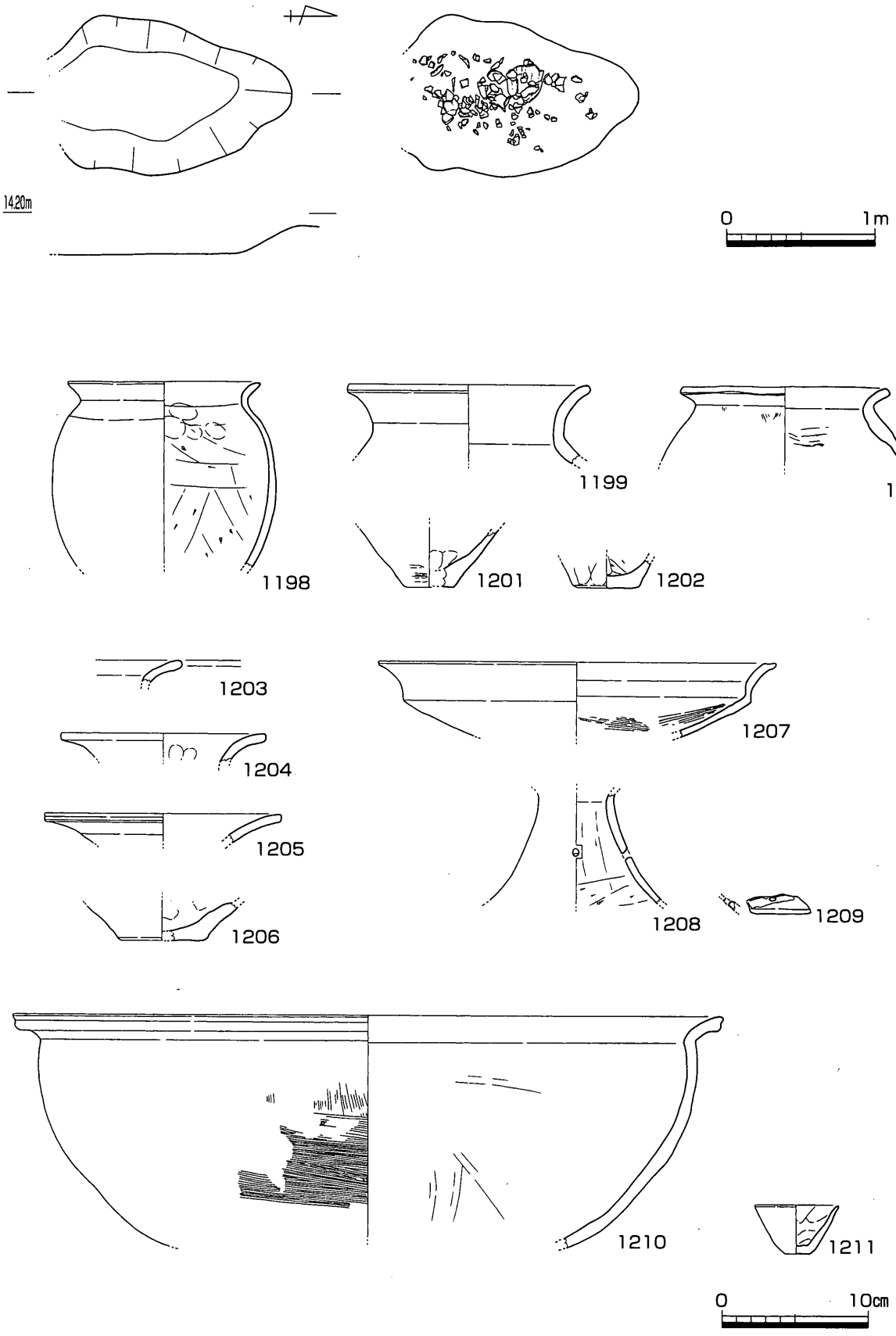


第188図　SXB01平・断面図（S＝1／40）

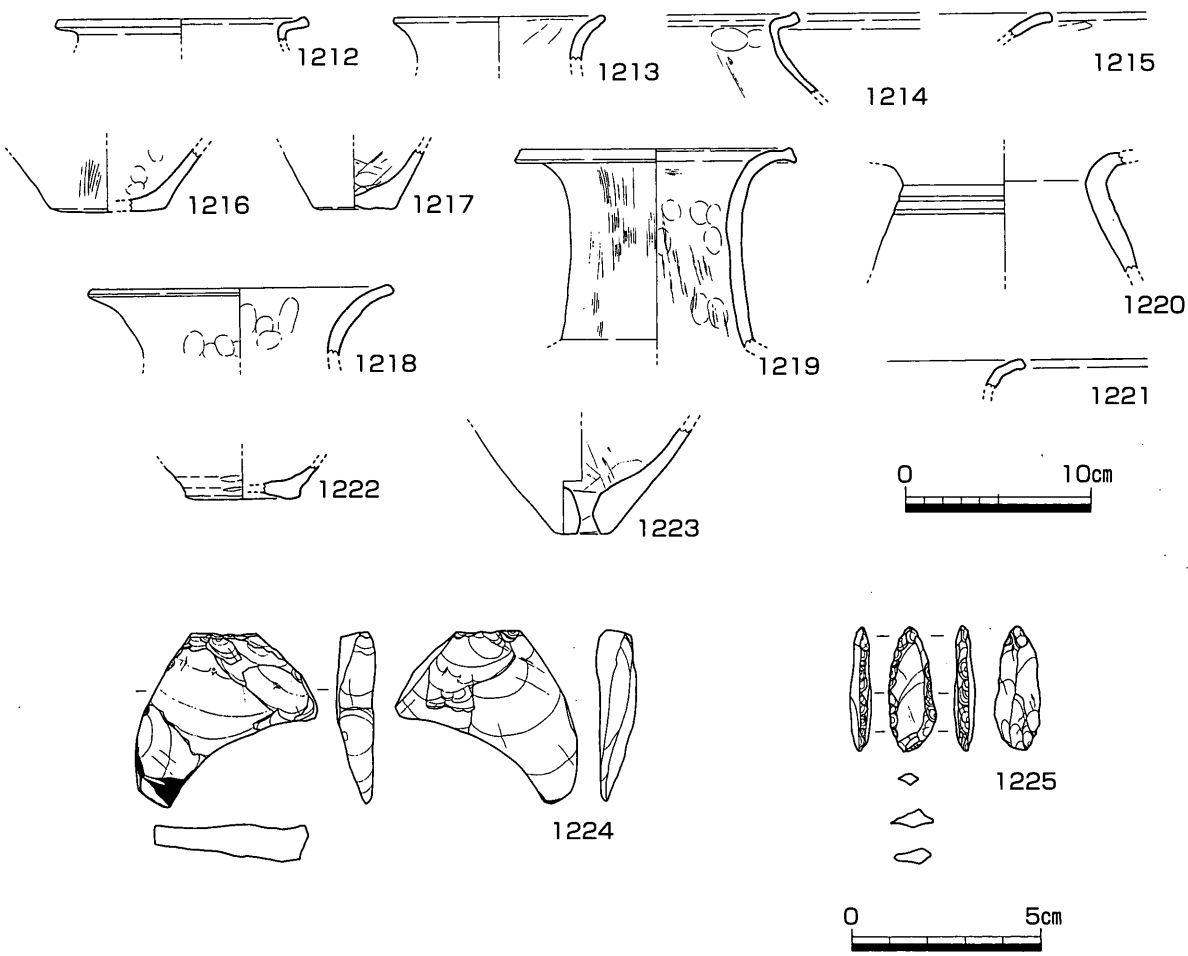
SXB02（第189図）

調査区東半中央で検出した遺構である。平面形は南側が試掘トレンチにより削平されており詳細は不明であるが、南北1.56m以上・東西1mの南北に長いいびつな涙滴状を呈する。また、断面形状は浅い皿状を呈し、深さは概ね0.18mを測る。周辺に堆積していた黒褐色混粗砂粘質土の遺物包含層上に掘り込まれていたが、この部位のみ遺物の密度が高く、土器溜り状を呈していた。埋土は当遺構の地山である黒褐色混粗砂粘質土とほぼ同色同質であったが、SXB02埋土の方は砂質がやや強い。

出土遺物は図示したようにやや多量に出土しているが、大半が小片化しており、器形が判別できるものは少ない。判別できた器種については甕・壺・高坏・鉢が認められる。1198～1202は甕に分類した。完形を保つものがないことから詳細は不明であるが、体部から口縁部にかけては緩やかな屈曲で口縁部はやや外反しながら斜め上方へ延びる。頚部内面には明瞭な稜線は認められない。1199については壺を誤認している可能性がある。底部については平底を呈する。1203～1206は壺に分類した。1207～1209は高坏である。1207の坏部は外面の調整は摩滅・剥落のため不明であるが、内面の調整はヘラ磨きの痕跡が残る。1208・1209は脚部である。1210・1211は鉢である。1211は手づくねで整形されており、ミニチュア土製品として捉えた方が良いかもしれない。



第189図　SXB02平・断面図（S＝１／40）、出土遺物（S＝１／４）



第190図　SRB01（北）出土遺物（S＝1／4・1／2）

（5）旧河道

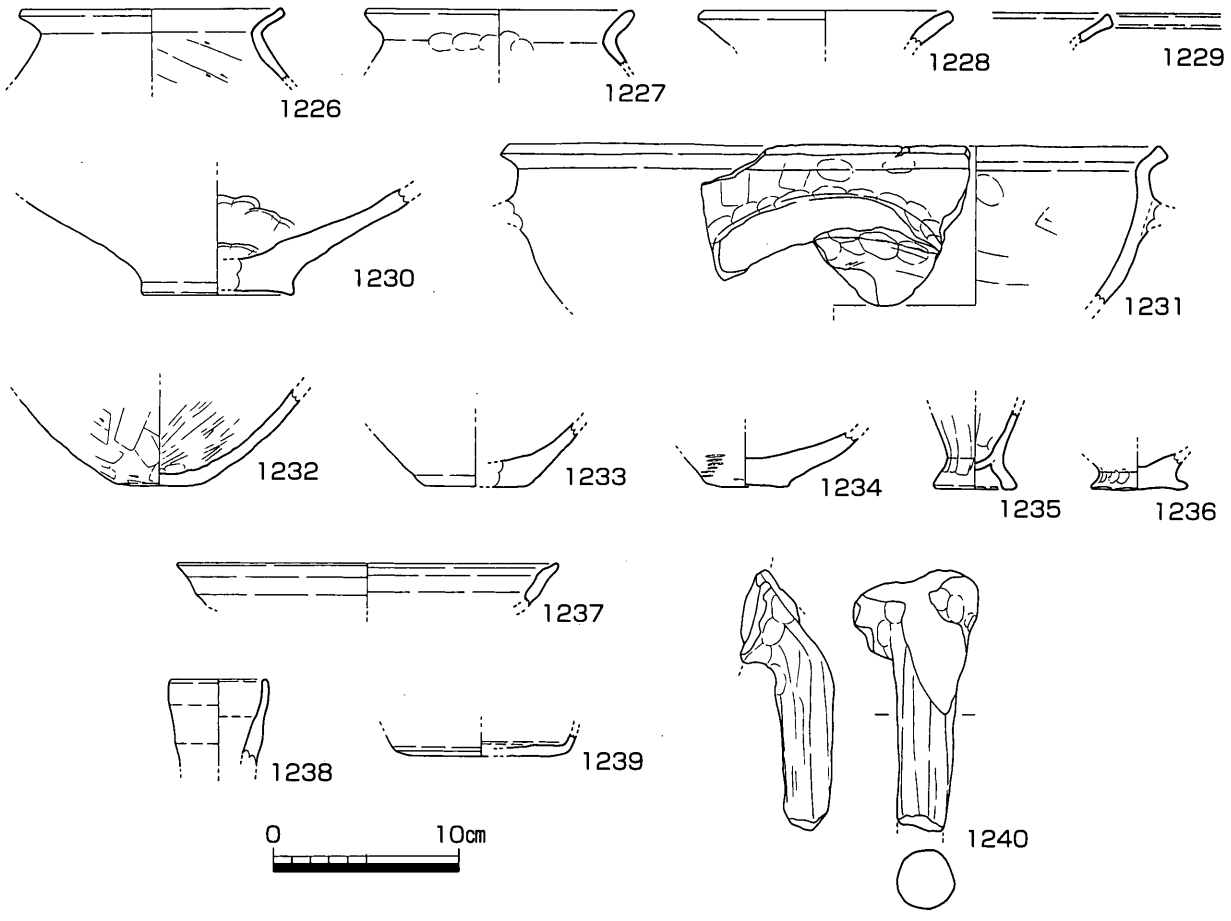
SRB01（第170・173・176・190・191図）

調査区東端で検出した旧河道である。検出長は直線距離で約44mを測り、幅は最大で約7mを測る。東接する現古川とほぼ並行して走っており、A区で検出したSRA01と同一の遺構であると想定する。中心部を一部掘削したが、あまり遺物が多く出土する傾向が見られなかったことから全面完掘はしていない。上面は現古川の護岸工事に伴うと想定できる攪乱層が認められた。この攪乱層以下は茶灰色の砂質土が主体を占めるが、西岸において複数の遺構の地山となる暗褐色ないし黒褐色の粗砂を多く含む粘質土の堆積が認められた。堆積範囲は第176図中のトーンをかけた部分に明示しているが、北側は比較的広範囲に、南側はやや狭い範囲で同層の堆積が認められた。この層についてはSRB01と直接関連するかどうか不明であることから、SRB01下層包含層として報告する。

砂質土中からはあまり多くの遺物の出土は認められなかったが、図示していないものの土釜などの小片が出土していることから、中世以降の堆積層であると想定できる。SRB01下層包含層からは弥生土器が、小片が大半を占めるもののやや多数出土している。出土遺物については北側包含層（第190図）と南側包含層（第191図）に分けて報告する。

北側包含層（第190図）

1212～1217は甕である。1213については壺と誤認している可能性がある。体部から口縁部にかけて残



第191図　SRB01（南）出土遺物（S＝１／４）

るものについては「く」の字に屈曲し、やや横方向へ短く延びる形状を取る。また、角閃石を多量に含む。底部は平底のものが主体となるが全体に反映するかどうかは不明である。1218～1221は壺である。1220については頚部片のみであることから詳細は不明であるが、当遺跡出土の他の土器に比べると、胎土がやや粗く器形もイレギュラーである。他の土器が概ね弥生時代後期に属するものと想定しているが、当資料に関しては弥生時代前期末～中期前葉の所産である可能性を想定する。1222は鉢の底部に、1223は甑にそれぞれ分類した。1222は小片であることから他の器種と誤認している可能性がある。1224・1225はサヌカイト製石器である。1224は楔形石器に分類した。表裏に認められる剥離面は共に上端からの加撃によるもので、下端からの剥離面は認められない。右側面上方には上端からの加撃に伴う裁断面が認められるほか、同面下端には裁断面に先行すると見られる折れ面が、左側面にも折れ面がそれぞれ認められる。1225は二次加工剥片である。やや厚みのある横長剥片を素材とし、ほぼ全周に背面側から急峻な二次加工を施したものである。スクレイパーの可能性も想定できるが、使用痕は認められない。小型品であることと先端部を尖らせようとする意識が認められることから、石鏃の未製品の可能性を想定しておきたい。

南側包含層（第191図）

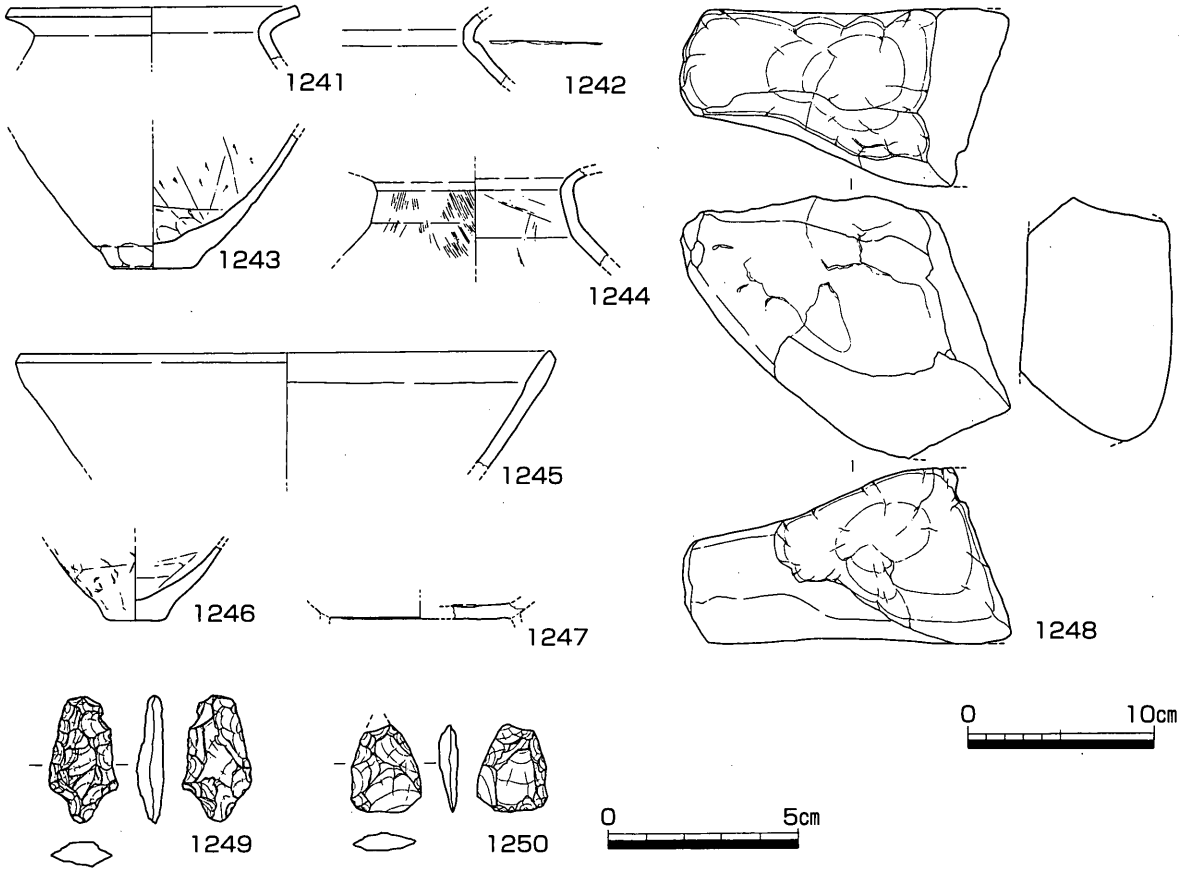
1226～1229は甕である。口縁部のみの小片であることから詳細は不明である。1230は壺底部に分類した。内面に受熱に伴うと見られる剥落痕が認められる。1231～1236は鉢である。大型のものと小型のものに分類できる。1231は大型のものである。破片資料であることから詳細は不明であるが、両側に把手

のつく器形が想定できる。1232～1236は鉢の底部と想定したが、平底のものが主体となるほか、小型品の中には1235・1236のように脚台の取り付くものも認められる。1235については内面指ナデ調整・外面ヘラ削り調整を施したものであるが、大浦浜遺跡で報告されたヘラ削りⅡ[6]に相当するものと想定でき、製塩土器である。1237は高坏の坏部口縁片である。1238は須恵器平瓶の口縁部である。1239は須恵器坏底部に分類した。1240は土釜脚部である。1238～1240の遺物は、包含層上面に遺構が掘られていることから上面遺構の掘り残しに伴う遺物であると想定し、この包含層の堆積は北部・南部共に弥生後期以前のものと想定する。

SRB02（第173・174・176・192図）

調査区東半中央南で検出した旧河道である。検出幅は約２mで、検出長は約25mを測る。深さは最深部で0.30m程と浅い。SRB01下層包含層を切っていることからこれに後出する遺構であるといえる。調査区中央付近でSRB03と重複関係が生じるほか、ほぼ同じ位置でSRB04と交差する。この交点以北ではSRB02はどこへ抜けるのか判別できなくなった。また、SRB03がこの流路の延長上に存在するが、本来SRB02南端とSRB03が同一流路で、中央付近でSRB02･03が重複する部分においてはSRB02としたものが別単位の流路を誤認している可能性がある。埋土は茶灰色粗砂混じり細砂である。

出土遺物は弥生土器を主体とするが、若干量の須恵器を含む。1241～1243は甕に分類した。1242は小片であることから詳細は不明であるが、頚部外面に段を有する。1244は壺である。1245・1246は鉢に分



第192図　SRB02出土遺物（S＝１／４・１／２）

6　大山真充・真鍋昌宏　1988『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ　大浦浜遺跡』香川県教育委員会

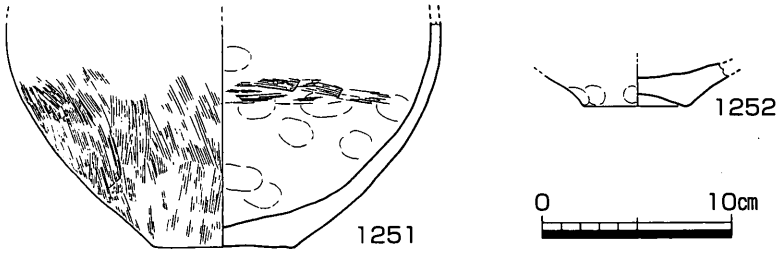
類した。1247は須恵器高台付坏である。底部の小片であることから詳細不明であるが、底部と体部の境界付近に高台を貼り付けた痕跡と見られる弱い盛り上がりがわずかに認められる。この高台の位置と平坦な底部の状況から9世紀代の所産と考えられる。1248は砂岩製の台石ないし砥石である。大きく破損していることから詳細な分類は困難である。図正面に大きな窪みが認められるほか、両側面及び下端に受熱に伴うと見られるクレーター状の剥落痕や、赤化が認められる。1249は凸基有茎式の石鏃である。かなり厚みのある素材を用いて製作されており、左側縁に施した二次加工は比較的連続的に進んでいるものの、右側縁正面に施した二次加工は、特に基部付近において著しい階段状剥離を呈する。おそらく素材の厚みを減じるために連続的に大きく二次加工を施した結果に伴うものと想定できる。この部分が器体の最大厚を測るが、裏面へ加工は及ばず、素材面は残置されたままである。また、先端部右側に折れ面が認められ、それを切る複数の二次加工痕が認められる。加工中の事故により欠損した先端部の復活を試みたものと想定できるが、上手くいかなかったものと見られる。結果的に厚みを減じ切れなかった基部と調整の上手くいかなかった先端部が原因となり、作業が放棄されたようである。したがって、当資料は未製品であると想定する。1250は平基無茎式の石鏃である。両側縁に粗い二次加工を施し、先端部の成形にかかったところで、先端部を事故で欠損し、作業が放棄されたものと見られる。表裏面共に基部はほぼ素材面が残置され、裏面に基部成形のための二次加工がわずかに施されている。1249・1250共にサヌカイト製である。

出土遺物の状況から概ね古代以降の所産と想定する。

SRB04（第171・174・176・193図）

調査区中央で検出した旧河道である。検出長は直線距離で約40m、検出幅は最大で約4mを測る。調査区中央付近までは北東方向へ直線的に流れるものの、調査区中央やや北寄りで大きく北西方向へ向きを変え、北側トレンチ付近で再び進路を北東方向へ変える。埋土は茶褐色粗砂を基調としており、底部付近では著しいマンガンの沈着を認める。全掘していないことから詳細は不明であるが、遺物の出土量はわずかである。

出土遺物（第193図）は弥生土器の小片が大半である。2点図示した。1251はSRB04南端西岸上で検出した壺底部である。同流路の最終埋没に伴い形成されたピット状の浅い落ち込みから出土している。正位を保って出土していることから、本来はこの流路埋没後に掘削された遺構に伴う可能性も想定されるが、周辺で検出した同様のピット状遺構が極めて浅いものばかりであったうえ、建物を構成する要素も認めがたかったことから、同流路に伴う遺物として扱った。器壁内外面にマンガンの沈着が著しく認められることから、全体の調整の観察がしにくいが、一部において外面にハケ調整を、内面には指押さえ後板ナデ調整をそれぞれ施した痕跡が認められる。1252は南端流路底部付近から出土した壺底部である。



第193図　SRB04出土遺物（S＝1／4）

上記の状況から、SRB04の時期は決定しがたいものの、出土遺物の時期から弥生時代後期頃のものとしておきたい。

SRB05（第172・175・176・194図）

調査区西半で検出した旧河道である（第176図）。調査区西半中央のSRB06の下から出てきた後、東へ直進した後、調査区中央付近で北へ大きく進路を変更する。SKB11およびSRB03に切られていることからこれらに先行する遺構であることがわかる。全掘していないことから詳細不明であるが、屈曲部から流路幅が不自然に大きく広がる平面形状をとる。埋土は粗砂・細砂の互層を主体とし、一部粘質土が堆積する。

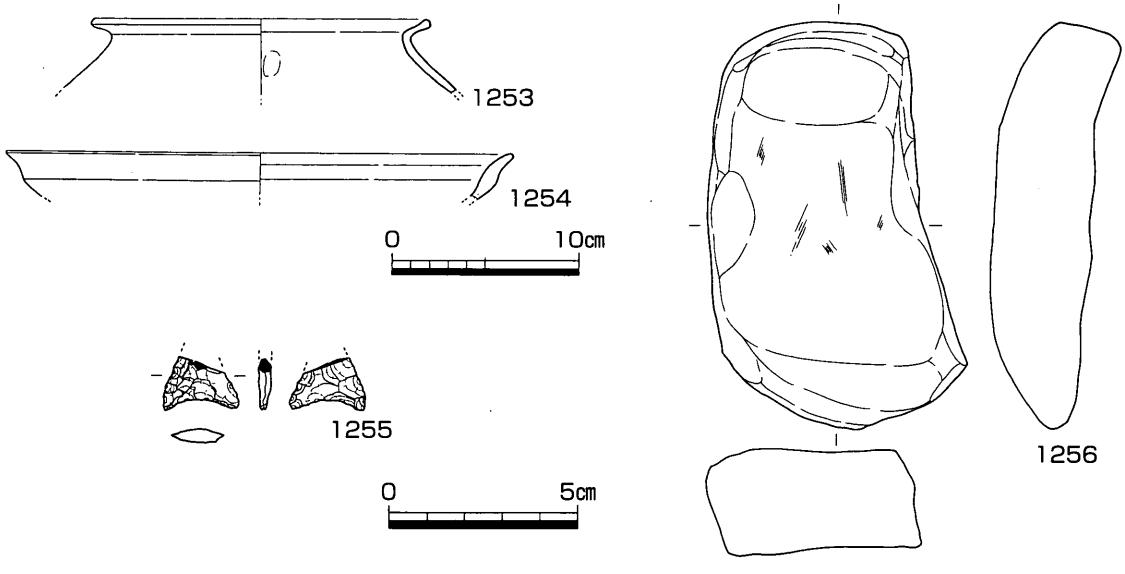
出土遺物（第194図）はややローリングを受けた弥生土器の小片からなり、全体形状がある程度判別できるものはない。器種判別が辛うじて可能な2点を図化した。1253は甕口縁部である。調整は摩滅によりほとんど判別できない。口縁部は短くやや水平方向へ延びる形状を取り、端部は上方へ摘み上げられる。頚部は強く屈曲し、内面に弱い稜線を形成する。1254は高坏口縁部である。調整は摩滅が著しく詳細不明である。1255は凹基無茎式のサヌカイト製石鏃である。上半部が欠損し、全体の状況は不明であるが、概ねほぼ全面に二次加工が施されたものと想定できる。1256は砥石である。正面中央付近に使用痕が認められる。

上記の状況から、詳細な時期については不明であるが、弥生時代後期頃の旧河道であると想定する。

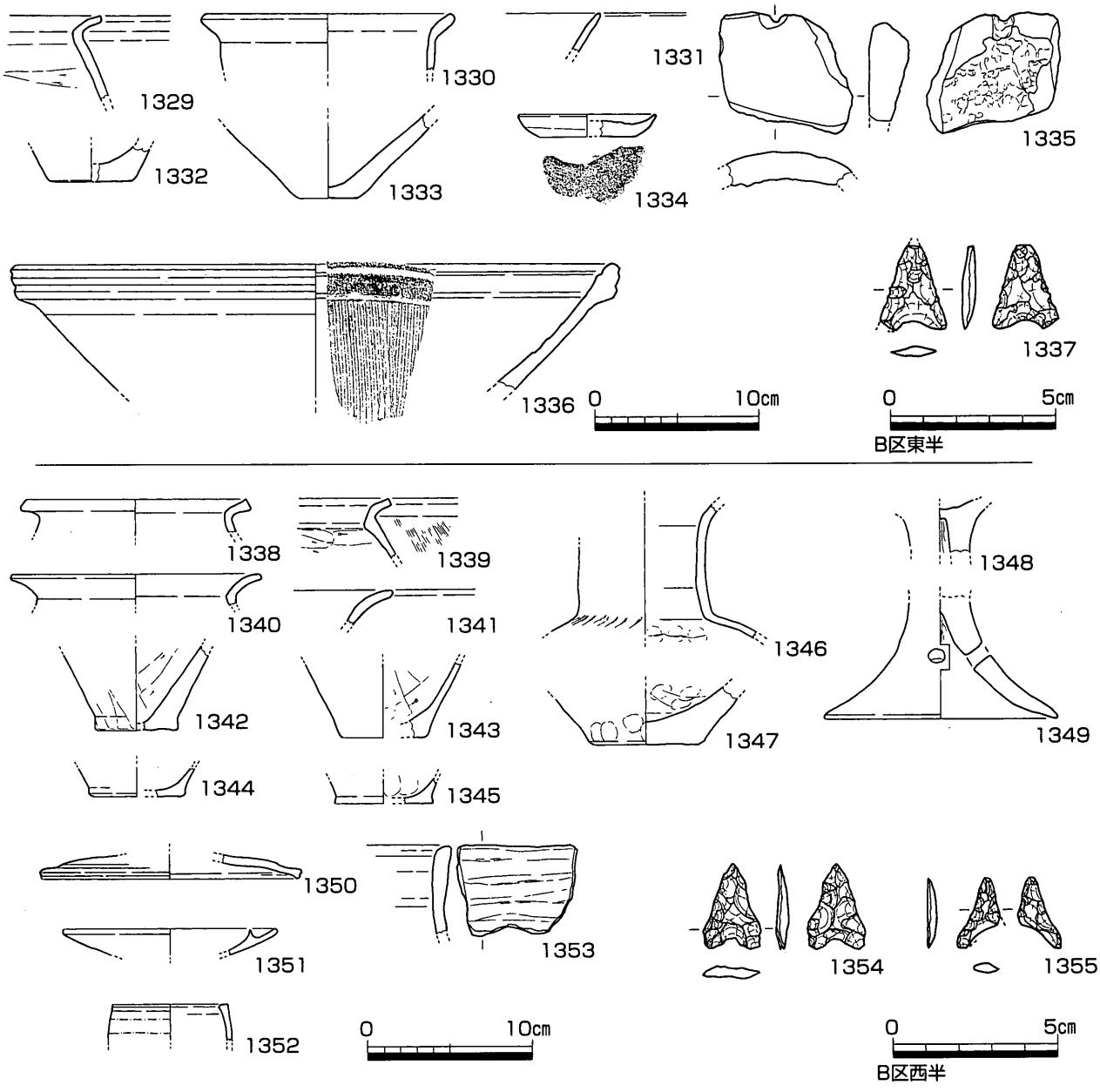
SRB06（第172・176・202図、図版97～99）

調査区西寄りで検出した旧河道である。検出長は直線距離で約33m、幅は最大で約15mを測る。完掘していないため、詳細は不明であるが、埋土は細砂・粗砂を中心とする。

北端部上層掘削時に流木数点を検出した。うち1点は32層から出土しており、全長約7m・太さ0.80mを測るかなりの巨木である（第176図・図版98・99）。上半は腐食に伴い失われており、断面U字形に遺



第194図　SRB05出土遺物（S＝1／4・1／2）



第195図　B区東半・西半包含層出土遺物（S＝1／4・1／2）

存していたことから、当初丸木舟の可能性を想定したが、材に厚みがありすぎる上、明瞭な加工痕が認められず、完掘に至って流木であると判断した。

調査終了間際にSRB05・06の交点付近でSRB06の上面検出ラインに直交する形で同流路の断面形状確認を試みた結果から、最深部では概ねG.L.マイナス1.50m付近に底部が来るものと想定できる（図版97）。

出土遺物は弥生土器の小片の他、縄文土器が若干出土しているのみである。第202図1285は同流路出土の縄文土器である。破片資料であることから天地左右が逆転している可能性もある。頚部付近の破片と想定する。内外面ともやや摩滅しているが、外面には太く短い沈線が綾杉状に施される。地文については不明であるが、施されていなかった可能性がある。内面は平滑で板状工具によると見られるナデ調整が施される。

（6）包含層（第195図）

主として機械掘削及び平面精査時に出土した遺物を図示した。調査時の単位で大きく東西に分けて報告する。

第195図1329～1337は東半出土遺物である。1329～1333は弥生土器である。1329·1332は甕である。細片の出土であることから、詳細は不明であるが、体部から口縁部にかけては「く」の字に屈曲し、口縁端部は弱い平坦面を形成する。外面調整は摩滅により不明であるが、内面は体部上半にヘラ削りの痕跡を認める。底部は平底を呈するが調整については摩滅により不明である。1330・1333は鉢である。いずれも小片であり詳細は不明であるが、1330はボウル状の体部を呈するものと想定する。1333は平底の底部であるが、壺底部と誤認している可能性もある。1331は須恵器皿に分類した。小片であることから詳細は不明である。1334は土師質土器小皿である。厚みのある底部からわずかに直線的に斜め上方へ立ち上がる体部を持つ。底部外面に糸切り痕を認める。1335は性格不明の土製品である。やや湾曲した粘土板状を呈するが、内径部に著しい受熱痕を認める。胎土はやや密であるものの、手にした感触が軽く、スカスカした印象を受ける。図上端に穿孔の痕跡を認める。鞴の羽口か坩堝を想定したが、金属滓などの付着が認められないことから、詳細は不明である。1336は擂鉢である。備前系のものと想定する。1337はサヌカイト製の凹基式無茎石鏃である。先端及び片側の脚を欠損する。

1338～1355は西半出土遺物である。1338～1349は弥生土器である。1338～1345は甕である。いずれも小片であり、詳細不明であるが、口縁端部を上方へ摘み上げる1338、口縁部をやや外反させながら伸ばし、端部を丸く仕上げる1340・1341が認められる。底部及び器壁を薄く仕上げる1344・1345には胎土に多量の角閃石が認められる。1346・1347は壺である。1346は長頸壺の頸部である。頸部と肩部の境にヘラ状工具によると見られる連続した刺突文が認められる。1348・1349は高坏脚部である。1350は須恵器蓋である。1351は京・信楽系陶器灯明皿である。1352は施釉陶器香炉である。1353は縄文土器深鉢である。1354・1355は共にサヌカイト製の凹基式無茎石鏃である。

以上は第1遺構面の遺構である。

第２遺構面

SRB07（第196～205図）

調査区中央の検出した旧河道である。下層確認トレンチ掘削時に存在が判明した流路であり、ほぼ南北方向に流れる流路で、検出長は約30m、幅は最大幅で約７mを測る。埋土の大半は粗砂･細砂からなる。第196図断面①は調査区北壁で記録した土層である。１・２層上面が第１遺構面にあたる。２層はSRB05の埋土である。記録時に乾燥が著しく進んでおり、水を打って細分を試みたが復旧できなかったため、大きく捉えるに留めている。１層は大きく捉えているが、本来２層に細分できる。この１･16層が第169図④～⑥層に対応する。３～13層までを当初SRB07と捉えていたが、調査の結果、14～30層が遺物包含層であることが判明し、これも同じ流路埋土とした。網掛けをした部分に粗砂の間層（10層）を挟みながら黒褐色系の粘質土が堆積し、流滞水を繰り返す環境下にあったものと想定できる。そのほかは粗砂・細砂が主体となる。

断面②は調査区中央付近で黒褐色粘質土除去後に、西岸において掘削したトレンチ土層である。３層の茶褐色粗砂は遺物包含層である。断面①の15層か17層に概ね相当する。４～14層は遺物の出土は特に認められず、SRB07の下位に存在する流路の埋土と想定している。15層は埋土の状況から第169図⑦層に相当するベース土である。

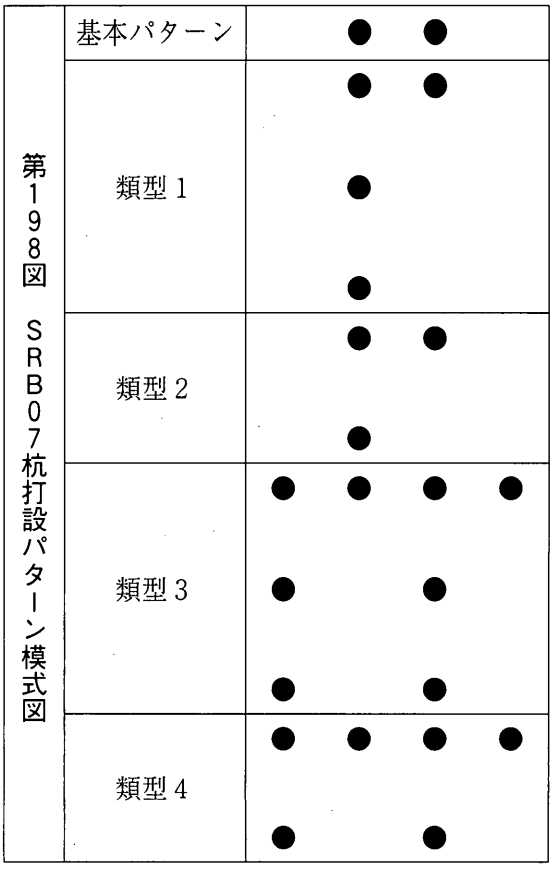
断面③は調査区南壁で記録した土層である。１層上面が第１遺構面にあたる。東端の１～５層を切る空白部がSRB04の西岸にあたり、SRB07はこれに先行する流路であることがわかる。１層は黄灰褐色粘性極細砂で第169図④層に類似することから比較的安定したベースと想定していた土である。４層～９層までは粗砂と細砂からなり、間に粘性細砂が堆積する。10層で一度粘質土を挟むが11層～13層で再び砂質が強くなる。ここまでを堆積状況からSRB07上層としておく。14・16層で断面①で確認できる黒褐色系の粘質土の堆積が認められる。この間に15層の淡黄褐色粗砂混じり細砂の間層を挟む状況は断面①とほぼ同じである。ここをSRB07中層とする。17層～34層は再び粗砂・細砂を主体とし、粗砂混じり粘質土・粘性極細砂等を間層として含む。この層をSRB07下層としておく。これ以下の層は調査時の所見では遺物を伴い、その時期についてもSRB07と大差ないと判断しており、SRB07に伴う埋土であるとしていたが、最終的に土層観察を行なった結果、SRB07よりも下位の流路であると判断した。ただし、出土遺物は取上げ方法の失敗から分離できず、時期差の有無についての検討は出来ていない。また、調査当初、SRB07はSRB05の下層と同一流路であると想定していたが、北半部では流域が重複するものの、南半部においては重複が認められないことから整理の段階で別流路と判断しなおした。

さて、先に触れた黒褐色系の粘質土中には植物遺存体からなる有機物が多く含まれる。先に本節２－②・③で触れたとおり、第１遺構面の下層確認トレンチを掘削している際にこのSRB07の存在が確認できたが、この有機物層中の成分を土壌サンプリングのため同層を一部掘削したところ、杭が打設されている状況が認められたため、第２面の設定に至っている。この有機物層の範囲確認は、まず北半部上層を機械掘削により除去した。その結果、黒褐色粘質土にパックされた状態で木の枝や流木が多く出土した。また、南へ広がる状況が確認できたため、残りの部分についても機械により掘削した。掘削深度は約0.50mである。黒褐色粘質土を除去した結果、複数の杭が流路内ほぼ全面に打設されていることが判明した。杭は調査中に行方不明になったものを含め、127本出土している。杭の検出レベルは標高12.5m前後に集中しており（第197図）、SRB07中層のレベルとほぼ合致することから、基本的に同一レベルに打設された可能性が高いと想定する。また、杭はいずれも地表に数cmから最大20cm弱現れている程度で、

上部は欠損しているものと想定できる。打設面は断面図③の中層と下層の境界で、砂質土層に打設されたものが大半となり、流路底部として捉えられる青灰色粘質土層へ達するものはない。

杭の分布は大きく３ヶ所にまとまる傾向が認められることから、便宜的に北から順に北群・中央群・南群と分ける（第213図）。比較的早い段階で杭の出土状況が判明した北群では、一部の杭群において、後述するようにある一定の規則性をもって杭が打設された状況が認められていた。簡易的な出土状況の記録終了後、杭はすぐにナンバリングして取上げたが、その後、図面上で周辺の流木を除去した状態で杭の分布を平面的に観察したところ、第197図に挙げた杭群の分布があることが判明した。

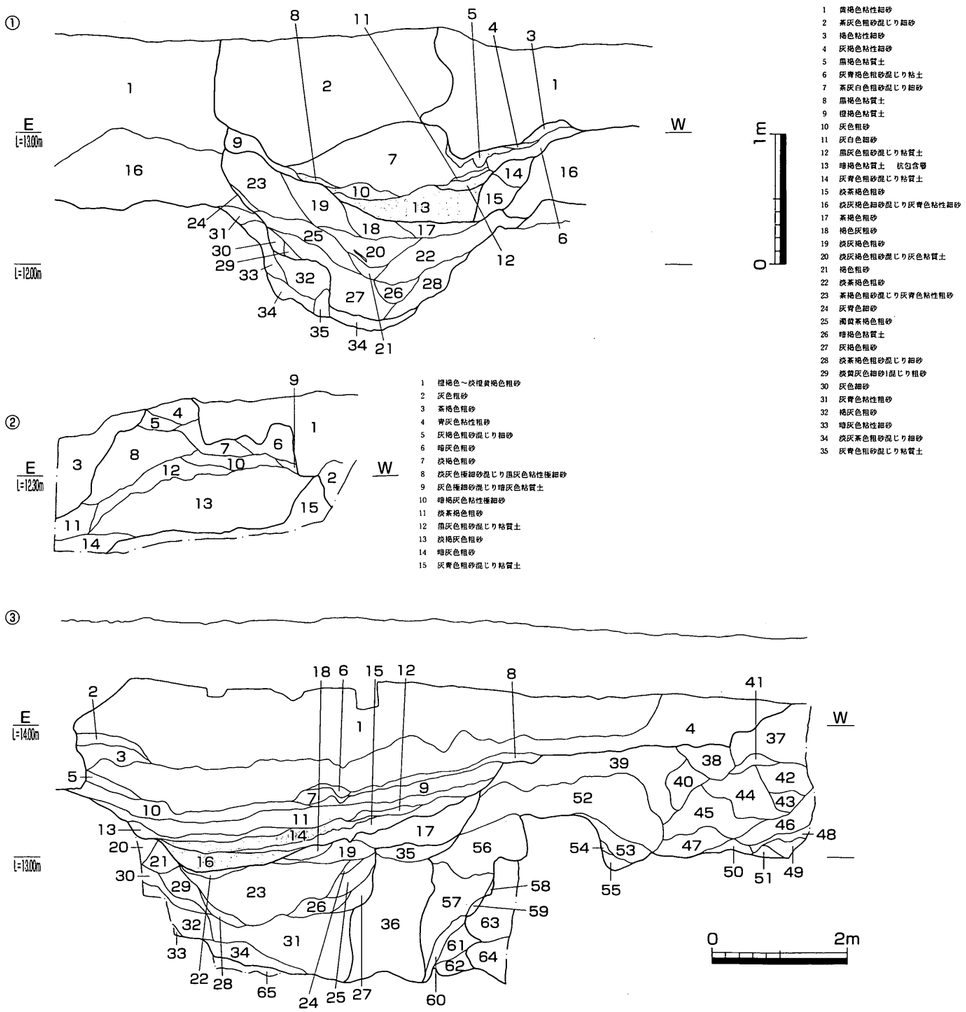
杭の打設パターンは次のとおりである。第198図に模式図を挙げておく。基本的なパターンは約10cm前後の間隔で、川底にほぼ垂直に打設された２本の杭がセット(基本パターン)になると考えられる。これらは大半が流路に対して直交あるいは並行に打設される。さらに基本パターンを30cm前後の間隔で逆L字を描くように組み合わせられたものが認められ、これを類型１とした。同じく基本パターンと１本の杭を逆L字に配置したものを類型２とした。さらにこの類型１・２を40cm前後の間隔で組み合わせたものが認められることから類型１の組み合わせを類型３、類型２の組み合わせを類型４とした。また、これらを杭群とし、北から順に杭群１～11と仮称しておく。杭群を構成しない杭についても、基本パターンを構成するものが若干散見され、本来的にはもう少し杭群が構成されていた可能性が想定できる。



第198図　SRB07杭打設パターン模式図

第199～201図には検出した杭の実測図を挙げている。第199図は杭群２構成資料である。いずれも樹皮を伴った芯持ち材を使用しており、現存する長さは最長36.2cm、最短で12.9cmを測り、平均値は25.1cmである。太さはもっとも太いもので5.7cm、細いものは3.4cmを測り、平均値は4.5cmである。先端の加工痕は比較的良好に確認できるものについては複数枚の単位が認められる。加工痕は平面形が寸詰まりの楕円形を呈し、やや湾曲した面を持つ。

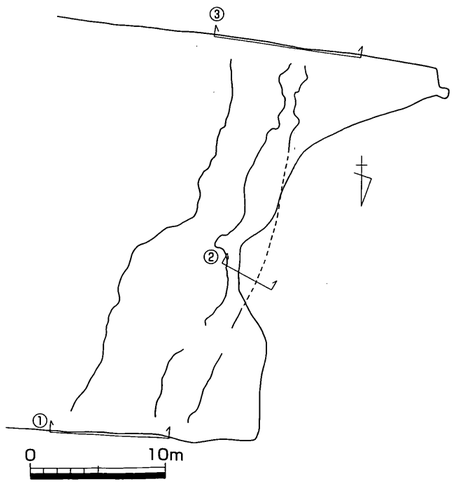
第200図は杭群３構成資料である。材の使用は杭群２と共通である。現存する長さは最長33cm、最短7.5cmを測り、平均値は22.6cmである。太さはもっとも太いもので５cm、細いものは3.8cmを測り、平均値は4.3cmである。先端の加工痕は基本的に杭群２と同様の状況を示すが、杭20のみやや長い加工が認められる。第201図は杭群７（46～50・52～54）及び基本パターンを構成するものの中から無作為に抽出した杭である。杭群７については、現存する長さは最長で26.6cm、最短で14.2cmを測り、平均値は18.6cmである。太さはもっとも太いもので5.6cm、細いものは3.3cmを測り、平均値は4.25cmである。また、無作為に抽出した杭は最長28cm、最短8.4cmを測り、平均値は20cmである。また、太さはもっとも太いもので6.5cm、細いものは3.6cmを測り、平均値は4.68cmである。先端の加工痕はそのほとんどが先述した杭群と差



1 黄褐色粘性細砂
2 茶灰色粗砂混じり細砂
3 褐色粘性細砂
4 灰褐色粘性細砂
5 黒褐色粘質土
6 灰青褐色粗砂混じり粘土
7 茶灰白色粗砂混じり細砂
8 黒褐色粘質土
9 橙褐色粘質土
10 灰色粗砂
11 灰白色細砂
12 黒灰色粗砂混じり粘質土
13 暗褐色粘質土　炭包含層
14 灰青色粗砂混じり粘質土
15 炭茶褐色粗砂
16 炭灰褐色細砂混じり灰青色粘性細砂
17 茶褐色粗砂
18 褐色灰粗砂
19 炭灰褐色粗砂
20 炭灰褐色粗砂混じり灰色粘質土
21 褐色粗砂
22 炭茶褐色粗砂
23 茶褐色粗砂混じり灰青色粘性粗砂
24 灰青色細砂
25 濁黄茶褐色粗砂
26 暗褐色粘質土
27 灰褐色粗砂
28 炭茶褐色粗砂混じり細砂
29 炭黄灰色細砂1混じり粗砂
30 灰色細砂
31 灰青色粘性粗砂
32 褐灰色粗砂
33 暗灰色粘性細砂
34 炭灰茶色粗砂混じり細砂
35 灰青色粗砂混じり粘質土

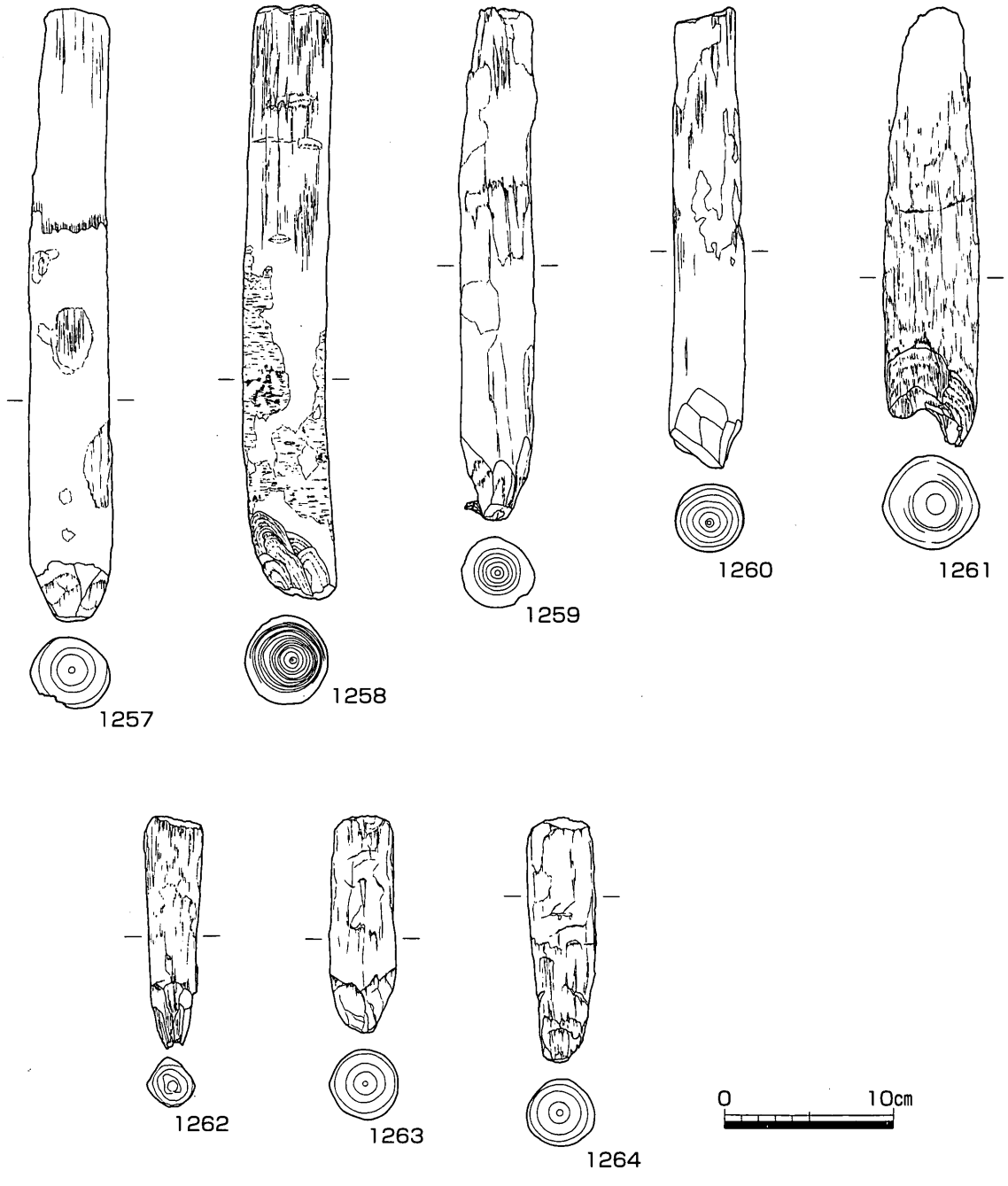
1 橙褐色～炭橙黄褐色粗砂
2 灰色粗砂
3 茶褐色粗砂
4 青灰色粘性粗砂
5 灰褐色粗砂混じり細砂
6 暗灰色粗砂
7 炭褐色粗砂
8 炭灰色極細砂混じり黒灰色粘性極細砂
9 灰色極細砂混じり暗灰色粘質土
10 暗褐灰色粘性極細砂
11 炭茶褐色粗砂
12 黒灰色粗砂混じり粘質土
13 炭褐灰色粗砂
14 暗灰色粗砂
15 灰青色粗砂混じり粘質土

1 黄灰褐色粘性極細砂
2 炭橙褐色粘性細砂
3 炭褐灰色粘性細砂
4 炭褐色粘性粗砂
5 炭橙黄褐色粗砂混じり粘性細砂
6 炭橙褐色粗砂
7 炭黄褐色粘性粗砂
8 炭橙褐色粘性細砂
9 炭黄褐色粘性細砂
10 暗灰褐粘質土
11 炭茶褐色粘性粗砂
12 炭灰色粘性細砂
13 炭茶褐色粗砂
14 褐色混じり灰褐色粘質土
15 炭黄褐色粗砂混じり細砂
16 暗茶褐色粘質土　植物遺存体を大量に含み炭を被覆する
17 灰黄褐色粘質土
18 炭灰褐色細砂
19 暗灰青色粗砂混じり粘質土
20 黄褐灰色粘性粗砂
21 青灰色粘性粗砂
22 炭褐灰色粗砂　土器包含層
23 青灰褐色粘質土
24 褐灰色粗砂　土器若干含む
25 褐色粗砂　土器若干含む
26 褐色粗砂混じり粘質土　植物遺存体を多く包含する
27 炭灰褐色粗砂　土器包含
28 褐灰色粗砂混じり細砂　土器若干含む
29 炭褐灰色粗砂
30 暗灰黒粘性極細砂
31 炭灰褐色粗砂　土器包含
32 暗褐灰色粘性極細砂
33 暗灰青色粗砂
34 緑青碾粗砂
35 灰褐色粘質土
36 暗灰青色粘性粗砂
37 炭黄茶褐色粘性粗砂
38 炭茶褐色粗砂
39 橙黄褐色粗砂混じり粘質土
40 茶褐色粗砂
41 炭橙黄褐色粘性粗砂
42 赤橙褐色粗砂
43 炭褐灰色粗砂
44 炭橙黄褐色粗砂
45 赤橙色粗砂混じり細砂
46 炭黄褐色極細砂
47 青灰色粗砂
48 褐色粘質土
49 赤橙色極細砂
50 暗褐色粘性細砂　植物遺存体を大量に含む
51 暗灰色極細砂
52 灰黄褐色粗砂混じり粘質土
53 褐灰色粗砂混じり粘質土
54 炭緑青灰色極細砂
55 暗灰色粘性粗砂
56 青灰色粗砂混じり粘質土
57 炭茶褐色極細砂　灰色極細砂を汁状に含むほか植物遺存体を多く包含する
58 灰青色細砂
59 黄茶褐色粘性極細砂
60 暗灰色粘質土
61 炭灰青色粗砂
62 炭灰色粗砂
63 炭茶褐色粗砂　61との層境より土器及び石膜
64 炭茶褐色粗砂　61との層境より土器及び石膜
65 灰青色粗砂混じり粘性細砂



第196図　B区第２面　SRB07土層断面図（天地S＝１/40・左右S＝１/80）

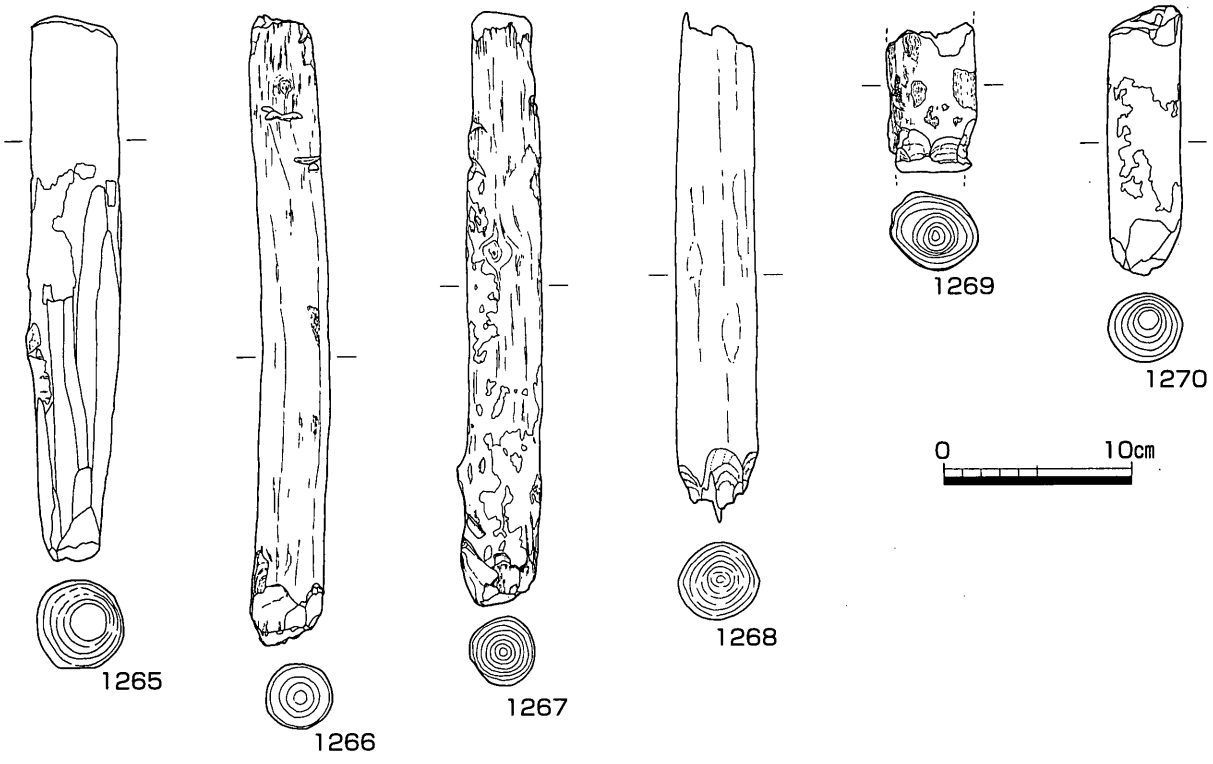
第197図　SRB07杭分布図及び立面図（1/80）



第199図　SRB07出土遺物１（S＝１／４）

はないが、杭２のみやや深い位置まで加工が及ぶ。図示したものはいずれも樹皮をとどめた芯持ち材が用いられる。また、焼き焦がした痕跡は認められない。以上の杭のうち、20点を対象に樹種の同定を試みている（第３章第２節）ほか、第８表(CD内)に観察表を挙げている。

ところで、これらの杭は先述したとおり、黒褐色粘質土に被覆されていたが、この粘質土除去中に数点の縄文土器片（第202図1286～1289）が出土した。細片であることから詳細不明であるものの、無文の粗製土器のほか、口縁部直下に沈線の認められる1287が出土している。いずれも縄文時代後期に属するものと想定しておく。

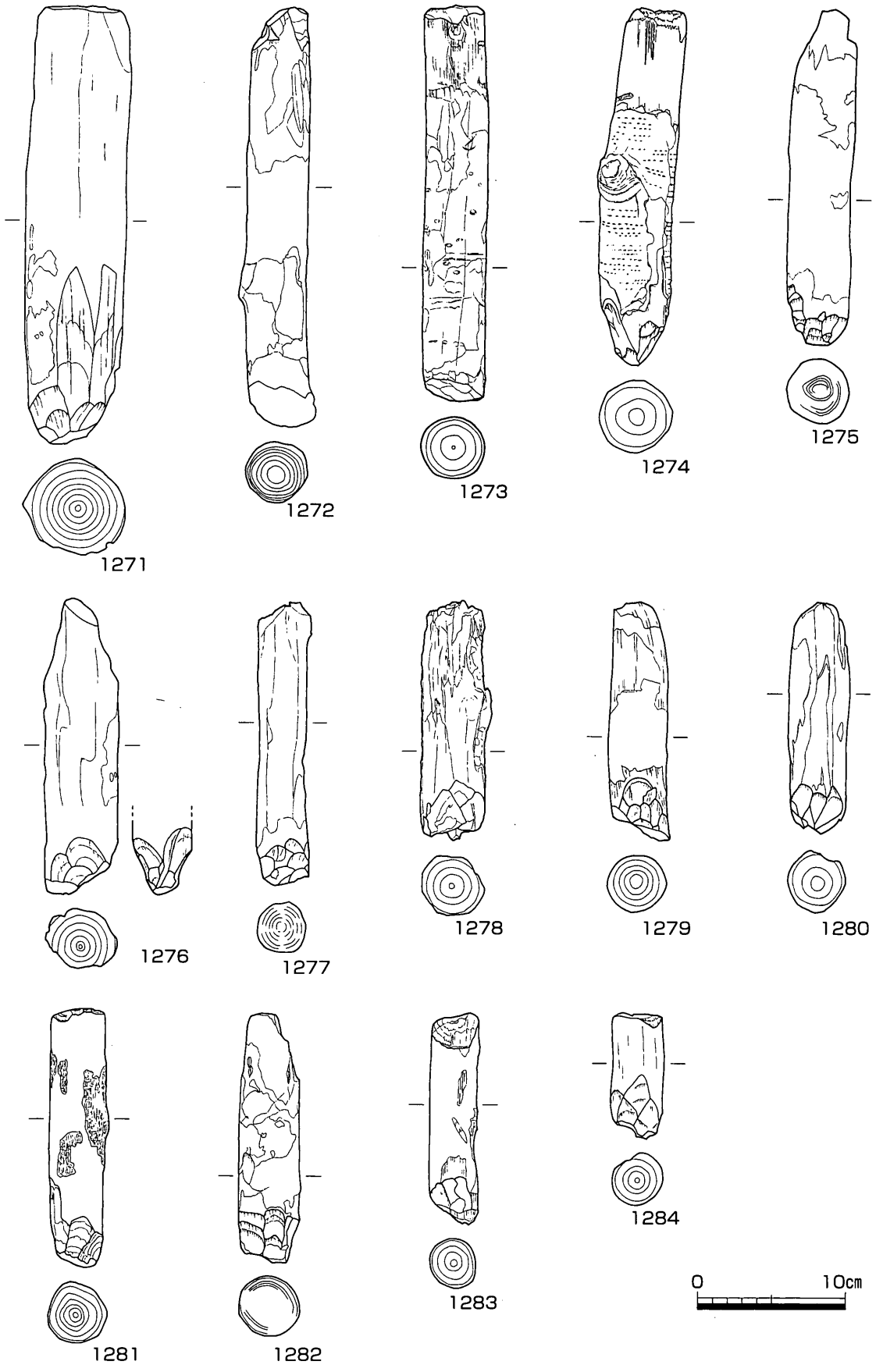


第200図　SRB07出土遺物２（S＝１／４）

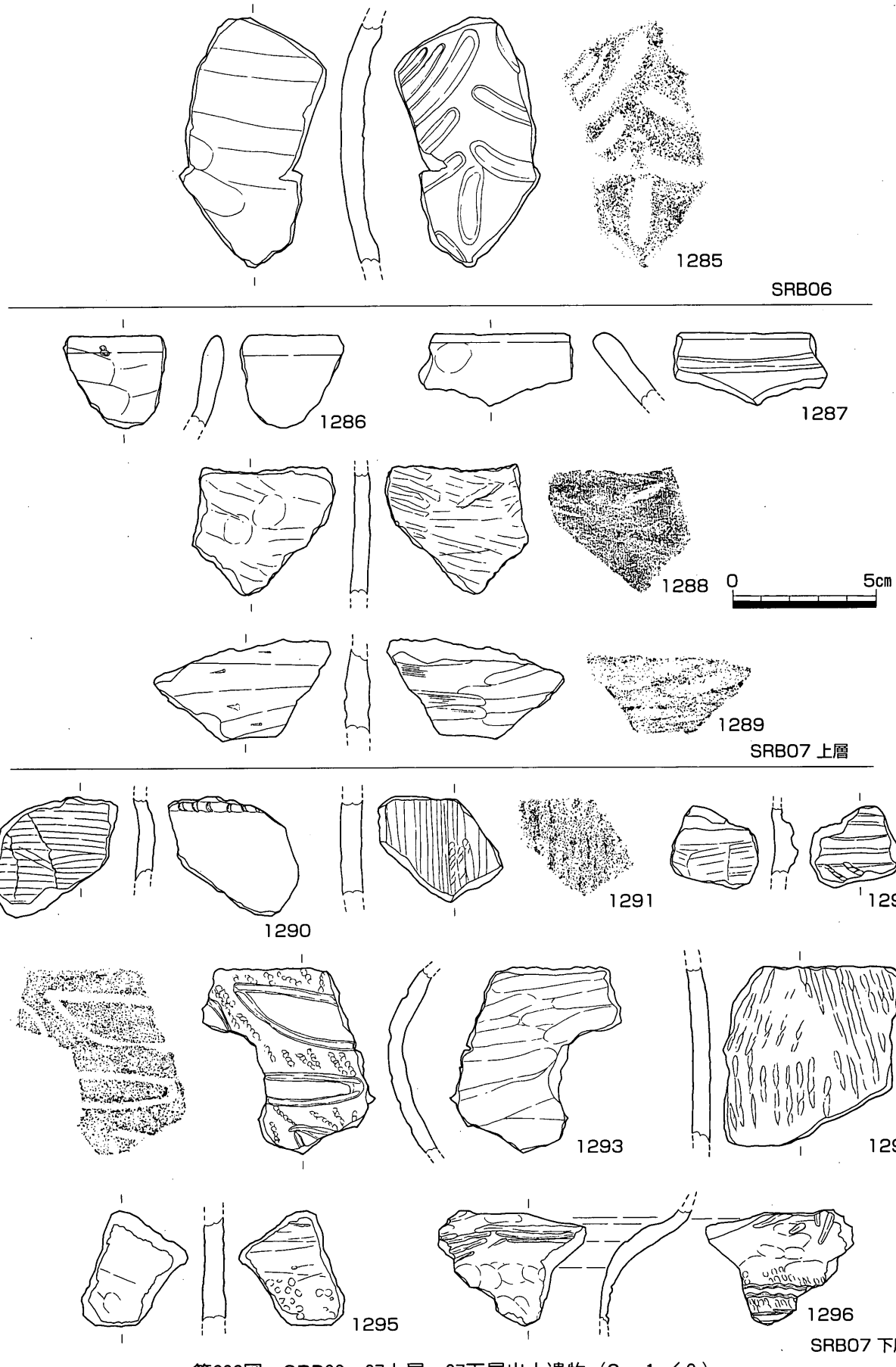
一方、杭の打設面より下の下層は灰色系粗砂を中心とする埋土で埋まった流路で、当初無遺物層であると判断していたが、調査途上で縄文土器片が出土したことから、全面掘削を行なった。その結果、125点の縄文土器片と若干のサヌカイト製石器が出土した。ただし、調査開始時に掘削したトレンチの状況から単一の流路であると判断して掘削を行なったが、南へ掘り進めるうちに河道の幅が広がっていった。上面検出時において、下流側がやや西へ寄ってゆく傾向が見られたことから、河道が湾曲しているものと判断していたが、調査区南壁の土層（第196図断面③）を観察した結果、単一の流路ではなく、複数の流路が重複した結果であることが判明し、ここでようやく河道の単位を誤って捉えていたことに気付いた。そのため、遺物は下層流路のものも一括で取上げた形となり、帰属する流路は不明である。

第202図1290～第205図1319は杭打設面下層から出土した土器を示した。いずれも破片資料であることから、口縁部の状況から傾きがある程度判別できるもの以外については全て破片を水平において図化している。したがって、必ずしも正確な器形を表現しているわけではないことを予め断っておく。

1290は深鉢と想定できる。外面の摩滅が著しいが、内面の調整に二枚貝の背面を用いたと見られ、条痕が認められる。外面上端には半裁竹管によると見られる押引文が認められる。縄文時代前期の羽島下層式の可能性が想定できる。1291は内外面の摩滅が著しいが、外面に縦位の条からなる縄文が辛うじて遺存する。1292は小片であることから判断は困難であるが、外面を肥厚させた口縁部が遺存しているものと想定できる。外面は口縁端部に並行する２条の沈線が認められる。その下にわずかに左上がりの条からなる縄文が認められる。内面は比較的平滑で板状工具によると見られるナデ調整の痕跡が認められる。縄文時代後期前半から中葉頃のものと想定できる。1293は体部片である。外面がやや摩滅するものの比較的文様が明瞭に確認できる。外面は地文が縄文で、反時計回りに施された沈線による区画が４単位認められる。沈線の底に細かい線条痕が認められ、巻貝の頂部を用いて施文したものと想定できる。

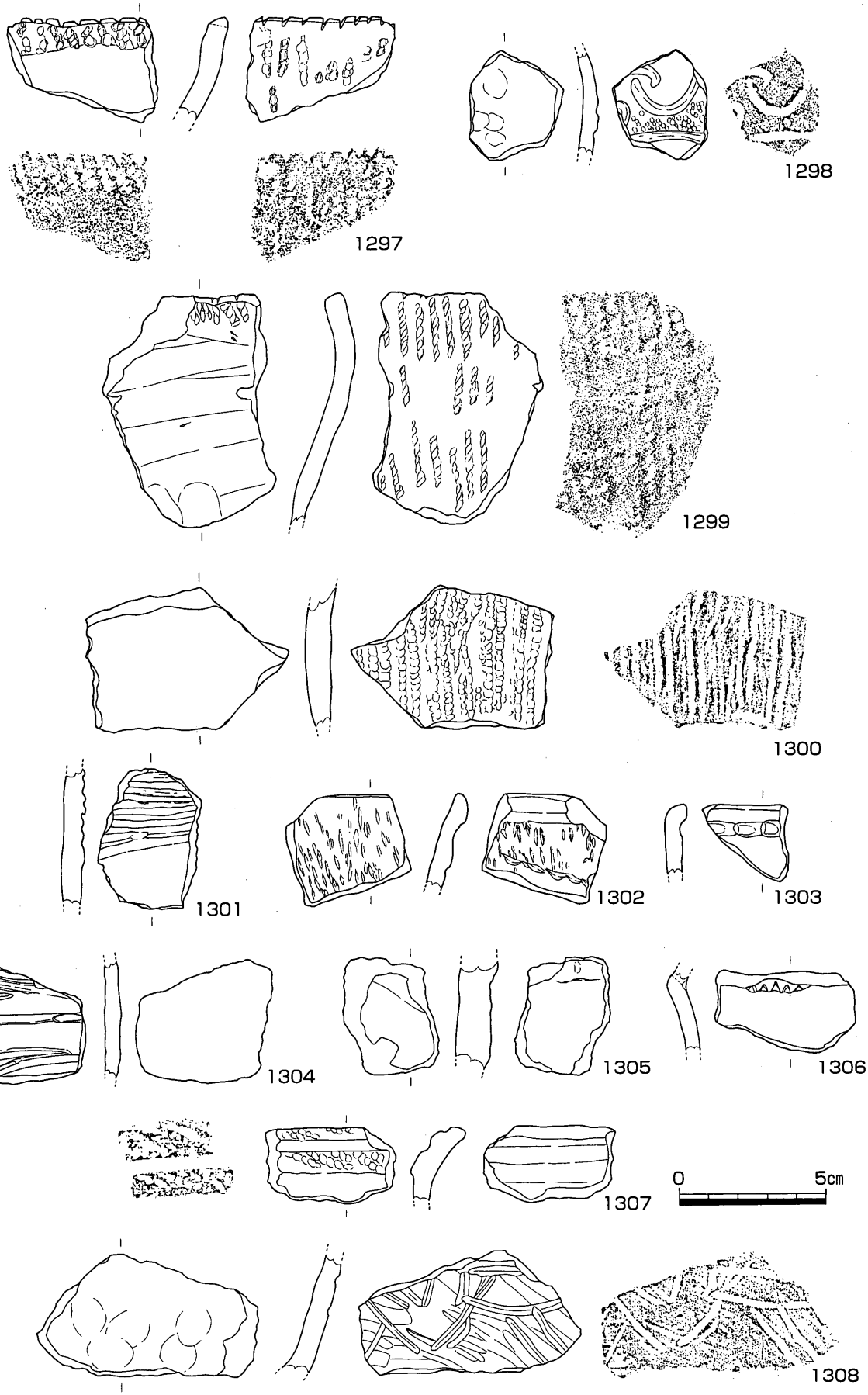


第201図　SRB07出土遺物３（S＝１／４）

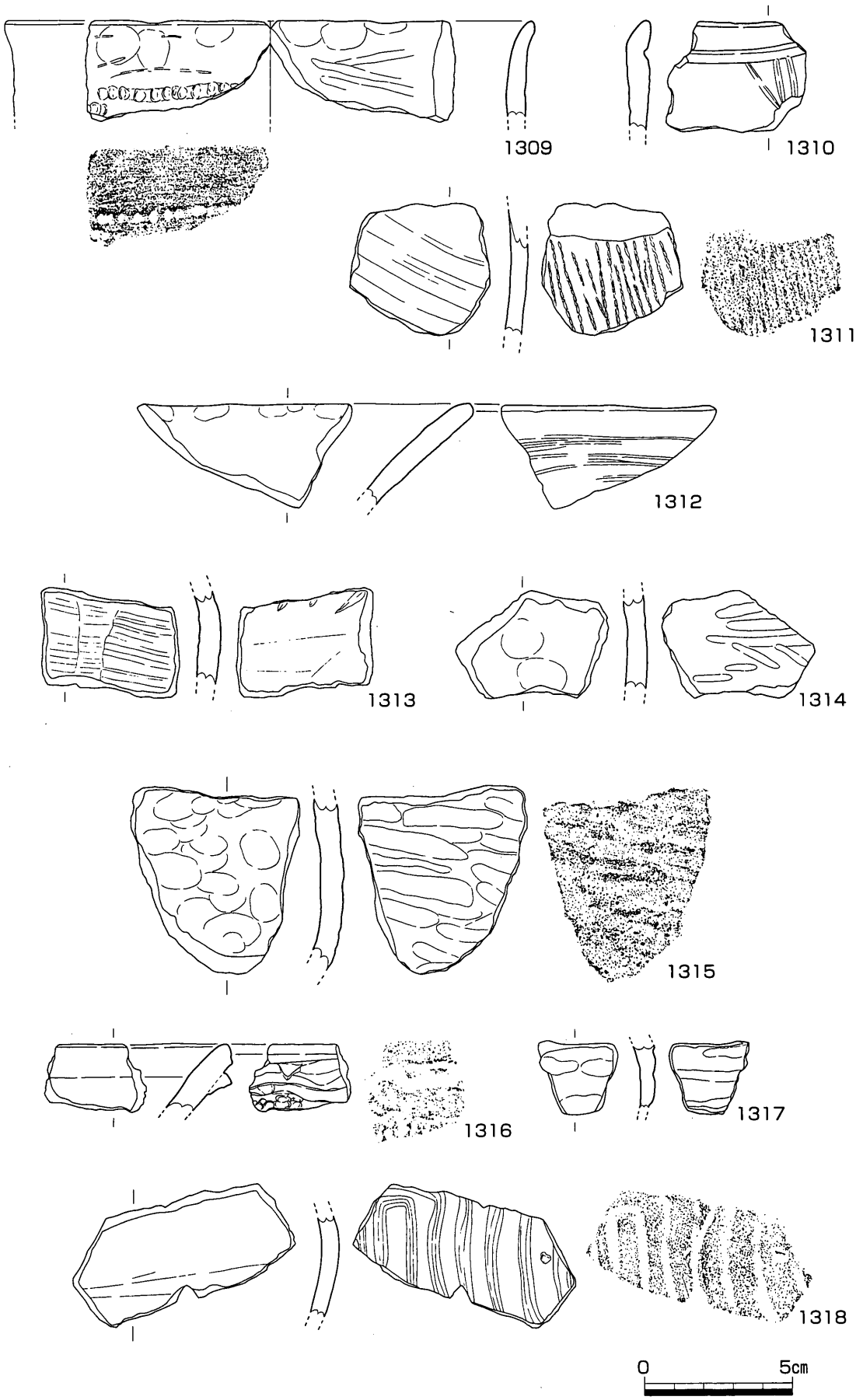


第202図　SRB06・07上層・07下層出土遺物（S＝1／2）

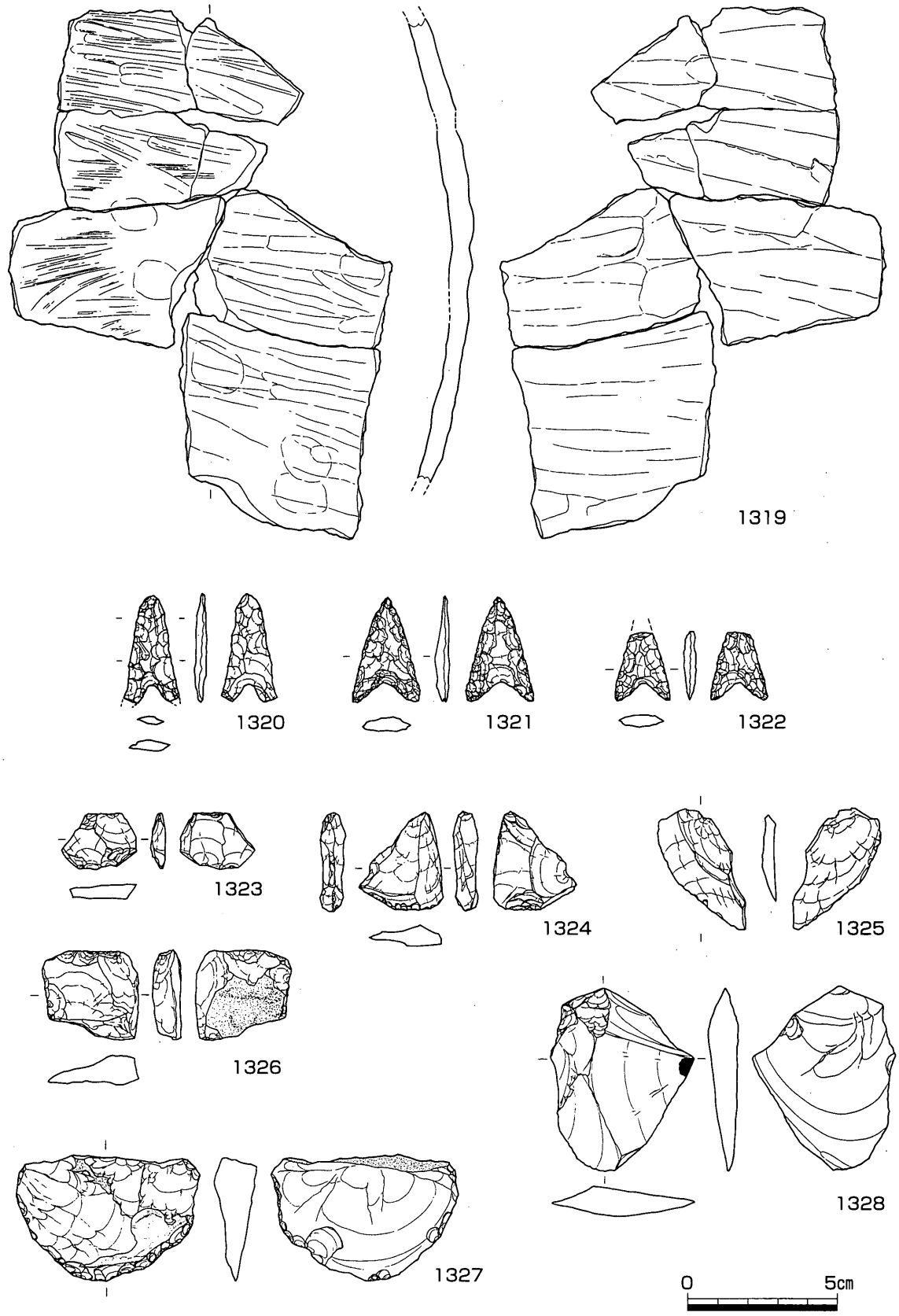
区画の中は地文が磨り消される。内面は比較的平滑に磨き潰されるが、ミガキの単位が認められる。縄文時代後期前葉のものと想定できる。1294は体部片である。内外面の摩滅が著しいが、外面には辛うじて浅い撚りの原体によると見られる縄文が認められる。内面は平滑であり、磨き潰したものと想定できる。1295はやや摩滅が進んでいることと小片であることから部位は不明であるが体部片であろう。外面は二枚貝によると見られる条痕が認められる。内面は平滑で板状工具によると見られるナデ調整が認められる。1296はキャリパー形を呈する深鉢のくびれ部片である。内外面共にやや摩滅が著しいが、外面下半には縄文の地文及び竹管によると見られる並行する細い2条の波状文が認められ、その下位に現状では1条の細い沈線が認められる。上半は無文であり、指頭痕が認められる。内面は指押さえ後ナデ調整を施しており、指頭痕が残る。船元Ⅳ式か里木Ⅱ式と見られる。1297は口縁部である。内外面共にやや摩滅が進んでいるが施文は遺存している。外面は若干間隔を持った縦位の条からなる縄文が認められる。口縁部内面はわずかに肥厚させ、その部位に外面同様の縄文が認められる。また、面取りが施される他、端部に幅の狭い刻み目が施される。肥厚した部分の下位はミガキによるものか平滑に仕上げられる。1299は胎土や調整・施文方法から見ると同一個体の可能性があるが、口縁内面の肥厚部が目立たない点に若干の差異がある。こちらは1297に比べると内面のミガキは明瞭である。共に船元Ⅲ式か。1298は小片のため詳細不明であるが、深鉢の体部と想定する。内外面の摩滅が若干進むものの、施文は遺存している。外面は、連続性は明らかでないものの直線と曲線からなる4条の沈線が認められ、その周囲には左上がりの条からなる縄文が認められる。沈線の区画内は地文がナデ消されている。内面調整はミガキと見られ、若干指頭痕が残るものの極めて平滑である。福田K2式か。1300は深鉢のくびれ部片と想定する。小片であることと若干摩滅が進むことから詳細は不明であるが、内外面の調整は確認できる。外面は一条置きに深い条が認められ、縄巻き縄文と見られる。内面はミガキにより平滑に仕上げたものと想定できる。船元Ⅳ式か。1301は深鉢のくびれ部直下付近の破片と見られる。3ないし4単位の竹管文が施される。地文は認められない。船元Ⅲ式か。1302は深鉢の口縁である。内外面共に摩滅が進むが、辛うじて調整が確認でき、内外面共に撚りが弱く細い条がほぼ縦位に施される。SDB04の1176と類似した胎土を持ち、共に胎土中に結晶片岩を若干含む。船元Ⅰ式か。1303は口縁部である。深鉢のものか。全体に摩滅が著しいため、詳細不明であるが、外面口縁端部直下に押引きとも見られる刺突文が認められる。内面は図化していないが縄文が辛うじて認められる。船元Ⅱ式か。1304は外面の摩滅が著しいが、内面に二枚貝によると見られる条痕が認められる。時期は不明である。1305は外面の摩滅がやや著しいが、貼り付け突帯が辛うじて認められる。内面はナデ調整と見られる。胎土中に大量の結晶片岩が認められる。1306は内外面摩滅が著しく詳細不明である。深鉢のくびれ部と見られるが、この部位に刺突文が見られる。胎土中にわずかに結晶片岩を認める。1307は深鉢の口縁である。内外面共に調整が比較的良好に認められる。外面はナデ調整で無文である。内面は肥厚させ、この部位に左上がりの条を持つ縄文が施された後、一条の深い沈線が施される。津雲A式と見られる。1308は鉢底部付近の破片である。内外面の調整は比較的良好に遺存する。外面の地文は巻貝条痕で、おそらく2本の単位からなる沈線が施される。内面はナデ調整と見られる。後期前半期のものか。1309は深鉢口縁部である。内外面若干摩滅が進むが調整は比較的遺存している。内外面共に指頭痕が認められ、さらに巻貝条痕が残る。また、口縁部直下に現状では二条の浅い押引文が認められる。彦崎Z1式か。1310は口縁部である。内外面の摩滅が著しく沈線だけが残る。沈線は口縁直下で口縁にほぼ並行して施されるものと、そこから垂下する3条のものが認められる。里木Ⅲ式か。1311は内外面やや摩滅が進む。外面は縦位の撚糸文が認めら



第203図　SRB07下層出土遺物１（S＝１／２）



第204図　SRB07下層出土遺物２（S＝１／２）



第205図　SRB07下層出土遺物３（S＝１／２）

れる。内面は二枚貝条痕と想定される調整が認められる。1312～1315は後期から晩期にかけての無文粗製土器と想定する。1312は口縁部の破片である。1316は口縁端部である。小片であり詳細不明であるが摩滅の度合いは低い。外面は口縁直下に隆帯を持ち、その直下まで縦位の縄文が施される。内面はミガキにより平滑に仕上げられる。船元Ⅱ式か。1317は摩滅が著しく詳細不明であるが、３条の並行した沈線が認められる。1318は浅鉢の体部と見られる。やや摩滅が著しいが、内外面共にミガキが施される精製土器である。外面には縦位の沈線が認められる。おそらく、雷文状を呈するものと想定する。この文様から松ノ木式と想定できる。

1319は粗製土器深鉢の体部と見られる。やや摩滅が著しいが、内外面共にそれぞれ単位の異なる条痕が認められる。外面は指ナデと見られる粗い単位の条痕が、内面は巻貝によると見られる条痕が認められる。

第205図1320～1328は石器を図化した。いずれもサヌカイト製である。1320～1322は凹基無茎式の石鏃である。1323・1324・1326は楔形石器である。1327はスクレイパーである。打面を大きく残した横長剥片を用い、主として腹面側から調整により刃部を作り出す。打面と背面に礫表を留めることから原石の表皮に近い部分を素材としたものと想定できる。1325・1328は剥片である。

第７節　Ｃ区の調査成果

1. 地形

当調査区の立地は、標高14.5m前後を測る平坦地である。旧状は等高線に対してほぼ並行する細長い二筆の水田である。調査区はこの水田を全て対象とした。

この調査区は片桐地形分類①及び②によると、微高地aに分類される。ただし、これは試掘調査の結果、低湿地aに伴う堆積層の存在が認められなかったためで、後述するが調査区の東西両端で旧河道を検出していることから、独立した微高地が形成されていた可能性もある。ただし、中央部において下層に旧河道の存在が認められ、あまり安定した地形ではないようだ。また、木下地形分類（第165図）によると段丘Ｉ面に分類される。

2. 土層序

当調査区の基本土層序もB地区同様、明確に掲載できるものはない。第206図に模式図を掲載し、その代わりとする。遺構面は概ね床土直下に位置し、ベース面（第206図太い実線）は暗茶白色砂質土となる。ただし、後述するが、当調査区においては調査区東西両端及び中央付近において旧河道の存在が認められ、模式図に示した土層序が観察できたところはごく一部である。遺構検出面は床土に接している他、一部では遺構面あるいは遺構埋土のブロックが床土に混入していることから、遺構そのものはかなり著しい削平を受けているものと想定できる。この状況から、調査区壁の土層記録はほとんど行なっておらず、辛うじて西半分において一部土層図作成を行なったのみである。旧河道についても、一部掘削した結果、遺物の出土が希薄であったことから、写真による記録にとどめている。

耕作土
明黄褐色混粗砂粘性細砂（床土）
暗茶白色砂質土
濁灰茶白色砂質土
黄茶褐色混粗砂粘質土
灰青色砂混じり粘質土
淡灰色粗砂

第206図　C区土層模式図

3. 遺構と遺物

当調査区では土坑４基、柱穴89基、溝状遺構45条、旧河道３条を検出した。いずれの遺構も遺存状況が不良であることと、出土遺物が極めて希薄であったことから、比較的良好な遺構のみ報告する。

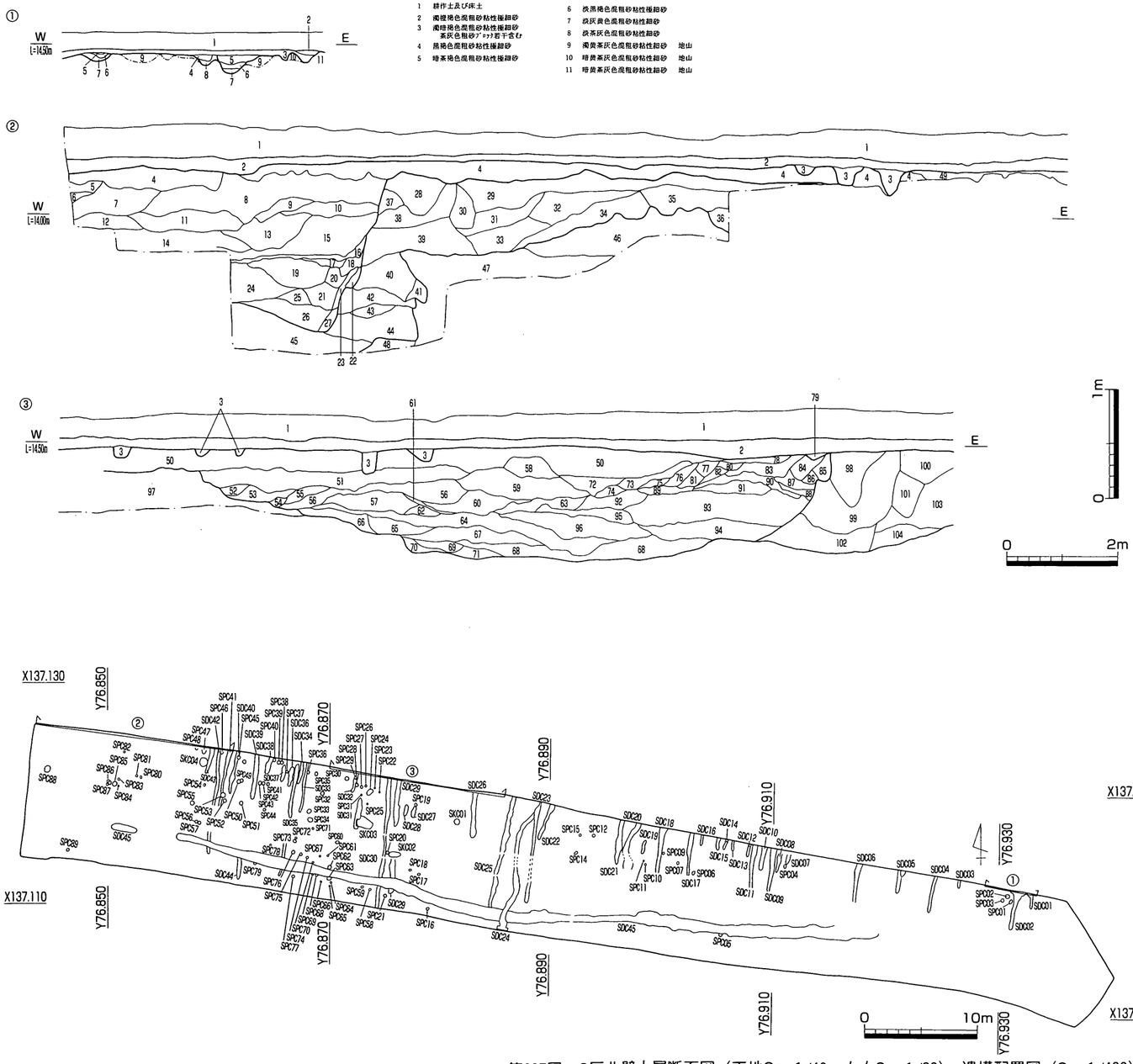
（１）土坑

SKC01（第208図）

調査区中央やや西寄りで検出した遺構である。平面形は、一辺が約0.50mを測るいびつな隅丸方形を呈し、断面形状は箱型を呈し、深さは0.20mを測る。埋土は上層で褐灰色系の砂混じり粘質土、下層は暗灰色系の粘質土からなる。出土遺物はなく、詳細は不明である。

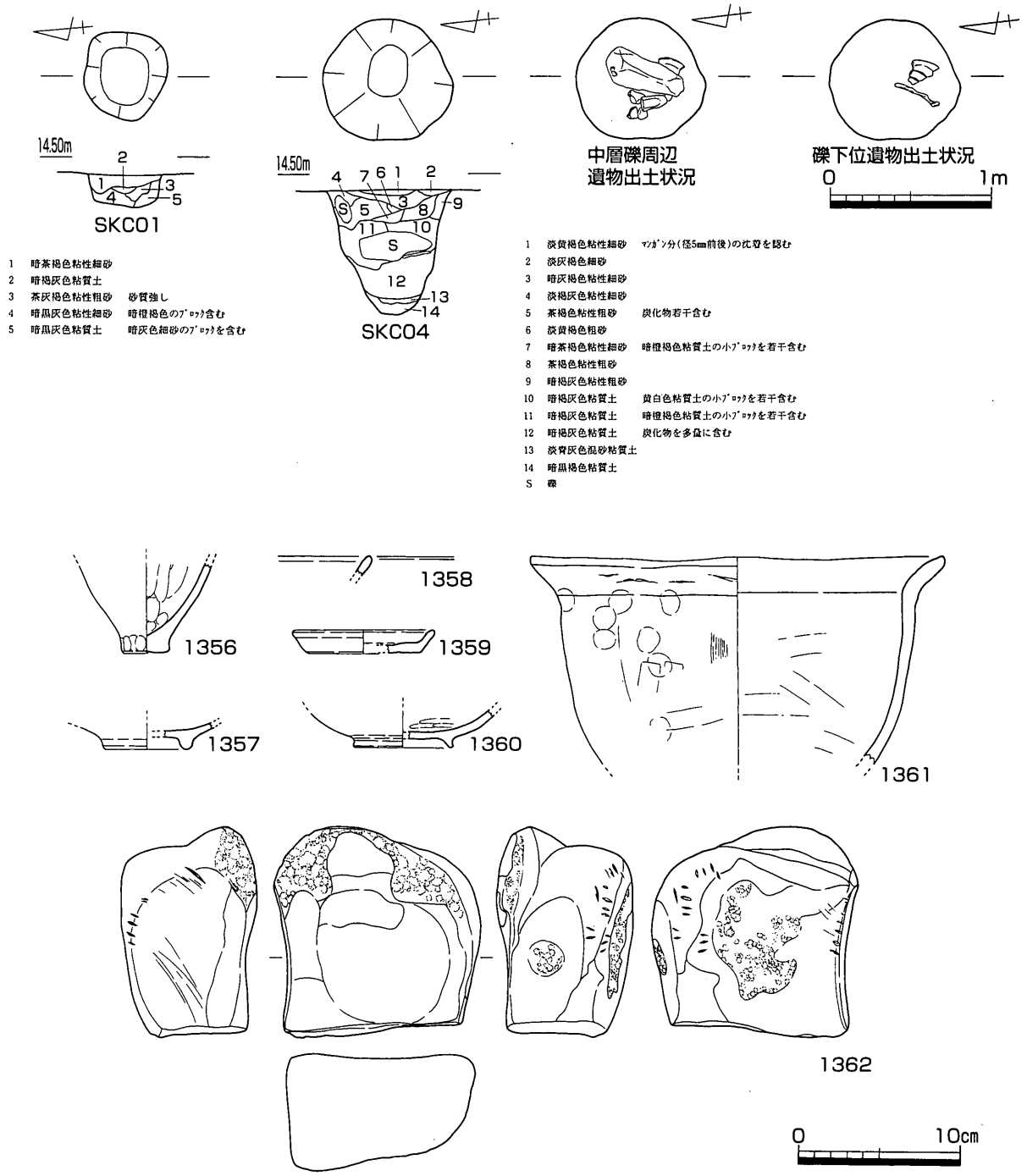
SKC04（第208図）

調査区西側で検出した遺構である。平面形は長軸0.80m・短軸0.74mを測るいびつな楕円形を呈する。



1 耕作土
2 床土
4 茶褐色粘性細砂 ﾏﾝｶﾞﾝ分の沈着著しい
5 茶褐色細砂
6 茶褐色細砂 5.よりやや明るい
7 灰茶褐色細砂 やや水平に暗茶褐色細砂層が入る
8 灰灰褐色粗砂 径3mm前後の小石を大量に含む
9 灰褐色細砂
10 暗茶褐色粗砂
11 褐色細砂 やや水平に径3～5mmの砂礫層を包含する
12 褐色粗砂 径3～5mm灰黒褐色粗砂をﾗﾐﾅ状に含む
13 黒褐色砂礫 灰褐色細砂・赤褐色粗砂をﾗﾐﾅ状に包含する
径10cm前後の小石をやや多く含む
14 褐灰黄色粗砂混じり粘性細砂
15 暗褐色粗砂 黒褐色粗砂をﾗﾐﾅ状に含む
16 黄褐灰色細砂 灰橙褐色細砂をﾗﾐﾅ状に含む
17 褐灰色粘性細砂 灰褐灰色細砂をﾚﾝｽﾞ状ﾌﾞﾛｯｸとして含む
18 暗褐色粘性粗砂 径2～5mmの小石を多量に含む
19 褐色砂礫 径3～7mmの小石を多量に含む他
径15cm前後の小礫をわずかに含む
20 灰褐色細砂
21 黒褐色粗砂 灰褐色・赤褐色の粗砂をﾗﾐﾅ状に含む
22 灰灰黄色粘性粗砂
23 灰褐灰色粘性粗砂 灰黄褐色粘性細砂のﾊﾟﾌﾞﾛｯｸを微量含む
24 褐灰色粗砂
25 灰黄褐色細砂 灰褐灰色細砂をﾗﾐﾅ状に含む
26 黄褐色細砂 褐灰色・赤橙褐色粗砂をﾗﾐﾅ状に含む
27 灰黒褐色細混砂粘質土
28 暗褐灰色粘性細砂
29 灰褐灰色粘性細砂 径5cm前後のﾏﾝｶﾞﾝ粒を多量に含む
30 褐灰色粘性細砂
31 灰灰褐色細砂
32 茶褐色粘性粗砂
33 灰褐色粗砂混じり細砂
34 灰灰黄褐色粘性細砂
35 褐灰色粘性細砂
36 暗褐色粘性細砂
37 灰茶褐色細砂
38 褐灰色粘性粗砂
39 暗褐灰色粘性粗砂
40 灰褐灰色粗砂 灰褐色細砂をﾗﾐﾅ状に包含する
41 灰褐色粗砂混じり細砂
42 灰灰褐色粗砂混じり細砂 47層土をﾌﾞﾛｯｸ状に含む
43 灰茶褐色細砂
44 灰褐灰色細砂 褐灰色細砂をﾗﾐﾅ状に包含する
45 灰茶褐色細砂
46 橙褐色粘性細砂
47 灰黄色細砂
48 茶褐色細砂
49 褐茶灰色粗砂混じり粘性細砂
50 黄褐灰色粘性砂質土 黄橙褐色粘性砂質土のﾊﾟﾌﾞﾛｯｸを多く含む
51 茶褐色粗砂混じり細砂
52 灰褐色細砂
53 暗褐灰色粗砂
54 灰褐色粘性細砂
55 茶灰褐色粗砂
56 灰褐色粗砂
57 灰褐色細砂混じり粗砂 細砂はﾗﾐﾅ状に包含される
58 茶褐色粘性粗砂
59 黄茶褐色粗砂
60 灰褐色砂礫 径7～10mmの小石を多く含む
61 灰灰褐色細砂 同層下部に黄褐色細砂層
62 灰灰褐色細砂混じり粗砂
63 灰褐色粗砂混じり細砂
64 灰灰褐色細砂混じり粗砂 同層下部にｼﾙﾄ層
65 暗灰褐色粘質土 粘性強く植物遺存体を大量に含む他
灰骨色細砂をﾌﾞﾛｯｸ状に含む
66 灰灰黄色粘質土
67 灰灰褐色粗砂 65層との境に植物遺存体を包含する
68 灰褐色粘質土
69 黄灰色粘質土
70 暗灰黄色粘質土
71 灰骨色粘質土
72 褐茶灰色粗砂混じり粘性細砂
73 灰茶褐色粘性粗砂
74 灰灰褐色粘性粗砂
75 茶褐色粘性細砂
76 黄茶褐色細砂
77 灰茶灰色細砂
78 茶褐色粘性細砂
79 暗灰色粘性粗砂
80 茶灰褐色粘性細砂
81 褐茶灰白色粗砂混じり粘性細砂
82 茶褐色粗砂混じり粘性細砂
83 暗茶褐色粘性細砂
84 暗赤褐色粘性粗砂
85 灰黄褐色粘性粗砂
86 黄褐色粘性粗砂
87 灰褐色粗砂
88 灰灰褐色粗砂
89 灰茶褐色細砂
90 茶褐色粗砂
91 灰茶褐色粗砂
92 茶灰褐色粘性粗砂
93 灰褐色粗砂
94 赤褐色粗砂
95 灰茶灰色細砂
96 灰褐灰色粘性細砂
97 褐黄茶灰色粗砂混じり粘性細砂
98 暗茶褐色粘性細砂 黄褐色細砂のﾊﾟﾌﾞﾛｯｸが多量包含
99 灰灰黄色粘性細砂 橙褐色粘性細砂のﾊﾟﾌﾞﾛｯｸ多含
100 撹乱
101 灰灰褐色粘性細砂
102 黄灰骨色粘性細砂
103 灰灰褐色粘性細砂 橙褐色粘性細砂のﾊﾟﾌﾞﾛｯｸ多含
104 灰骨色粘性粗砂

第207図　C区北壁土層断面図（天地S＝1/40・左右S＝1/80）、遺構配置図（S＝1/400）



第208図　SKC01・04平・断面図（S＝１／40）、SKC04出土遺物（S＝１／４）

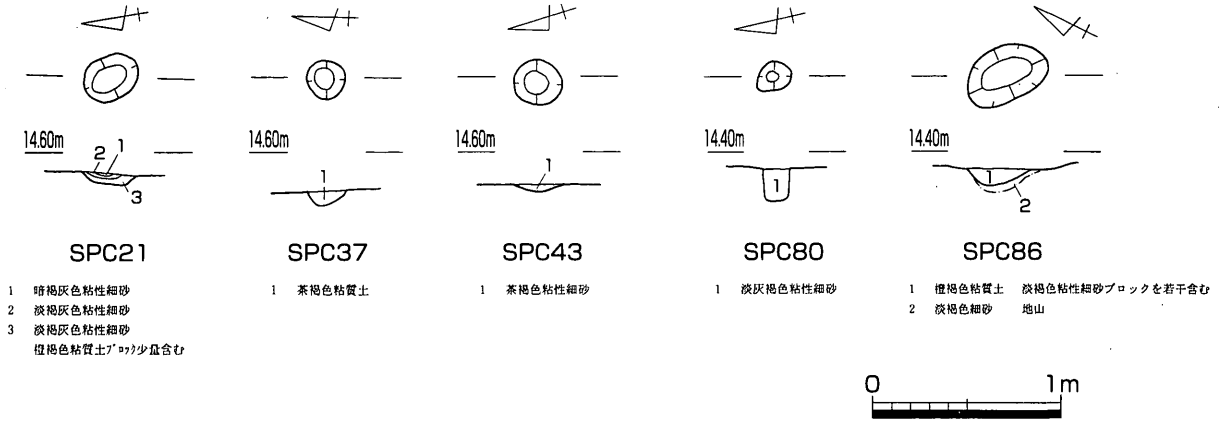
断面形状は深い「U」字形を呈し、最深部で0.76mを測る。埋土は細分すると14層に分層できたが、大きく上・中・下の各層に大別できる。上層は茶灰色系の粘性細砂からなる。周辺の地山と同系色を呈しており、自然埋没が想定できる。中層は暗褐灰色粘質土からなるが、地山下層の小ブロックが混じる。

また、大型の礫が大量に入っていた。これらの礫の大半には煤の付着や受熱痕が認められる他、周辺に炭化物・焼土小ブロックが含まれていた。下層は青灰色砂質土・黒色粘質土からなる。当土坑掘削時には微量ながら、絶えず底部付近からの湧水が認められた。

出土遺物は第208図1356～1362が認められた。1356は弥生土器甕である。小片であることから詳細は不明であるが、混入資料と見られる。1358は軟質須恵器の椀である。口縁部の小片であり、詳細は不明である。1359は土師質土器小皿である。底部と体部の境は明瞭である。上層からの出土である。1357・1360は黒色土器椀である。いずれも底部の小片であることから詳細は不明であるものの、共に内面のみ黒色処理されたものであり、やや平坦な広い底部を持つ器形が想定できる。また、1360については内面にヘラミガキの痕跡を認める。1361は土師質土器土鍋である。破片資料であることから、やや深い器形に復元しているが、もう少し口径は広がる可能性がある。1362は砂岩製砥石である。展開した面全てに使用に伴う摩滅痕が認められる他、各面の境界で稜線を成す部位に線状痕が認められる。
出土遺物の状況から、片桐編年のⅡ-⑥期、12世紀後半頃の所産と想定しておく[7]。

（2）柱穴（第207・209図）

全体で89基検出したが、建物を構成するものは確認できなかった。また、大半がしみ状を呈しており、全体的に浅く、断面形状が皿状を呈するものがほとんどである。分布の傾向は調査区西側に比較的集中する。土層記録を行なったもの5基を報告する。SPC21・37・43・80・86について記録しているが、先に触れたとおり、SPC80のみが断面形状が筒型を呈するのみである。埋土は茶褐色・灰褐色の粘質土を伴うものが多い。なお、いずれの柱穴からも遺物の出土は認められなかった。

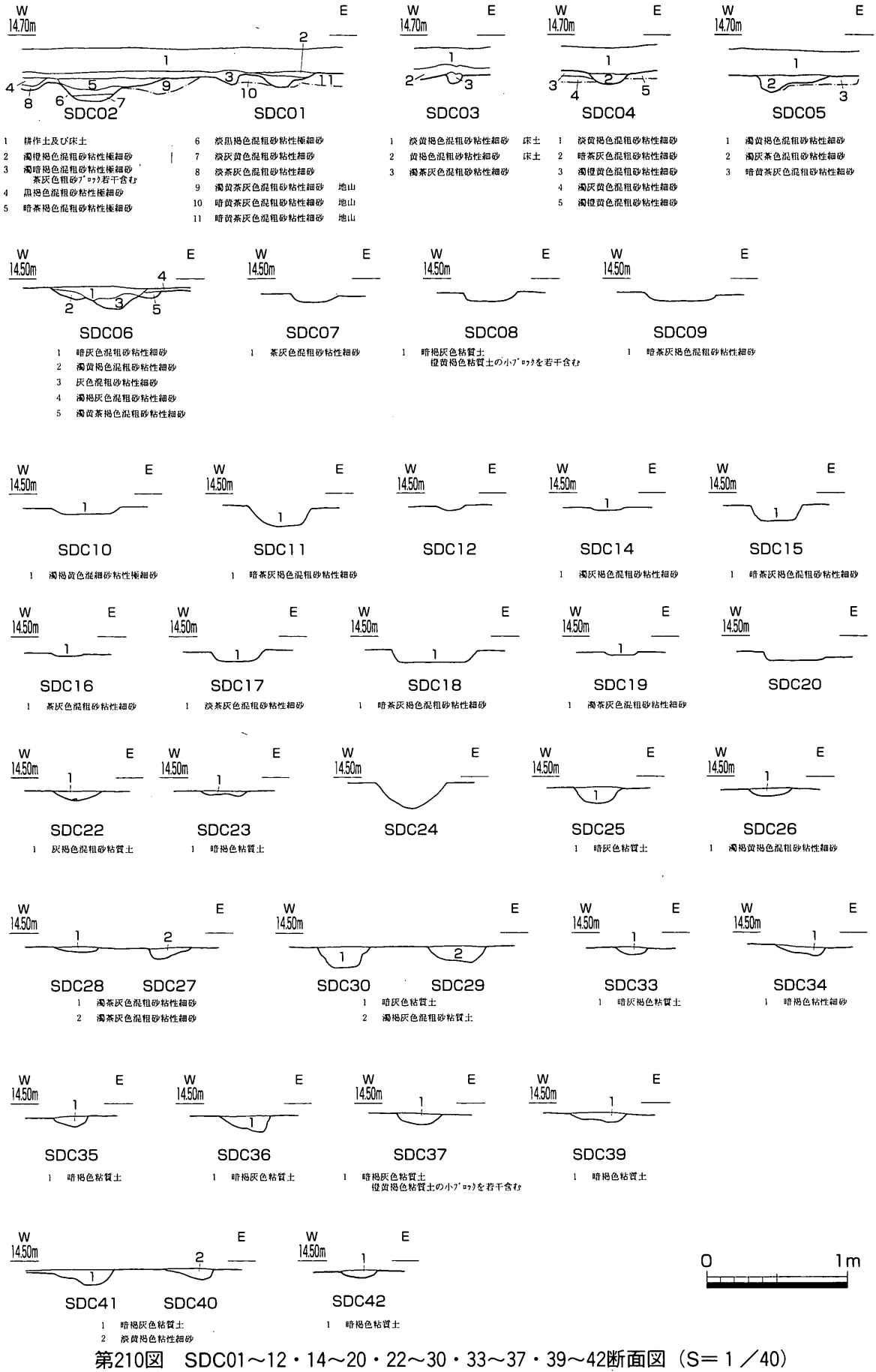


第209図　SPC21・37・43・80・86平・断面図（S＝1／40）

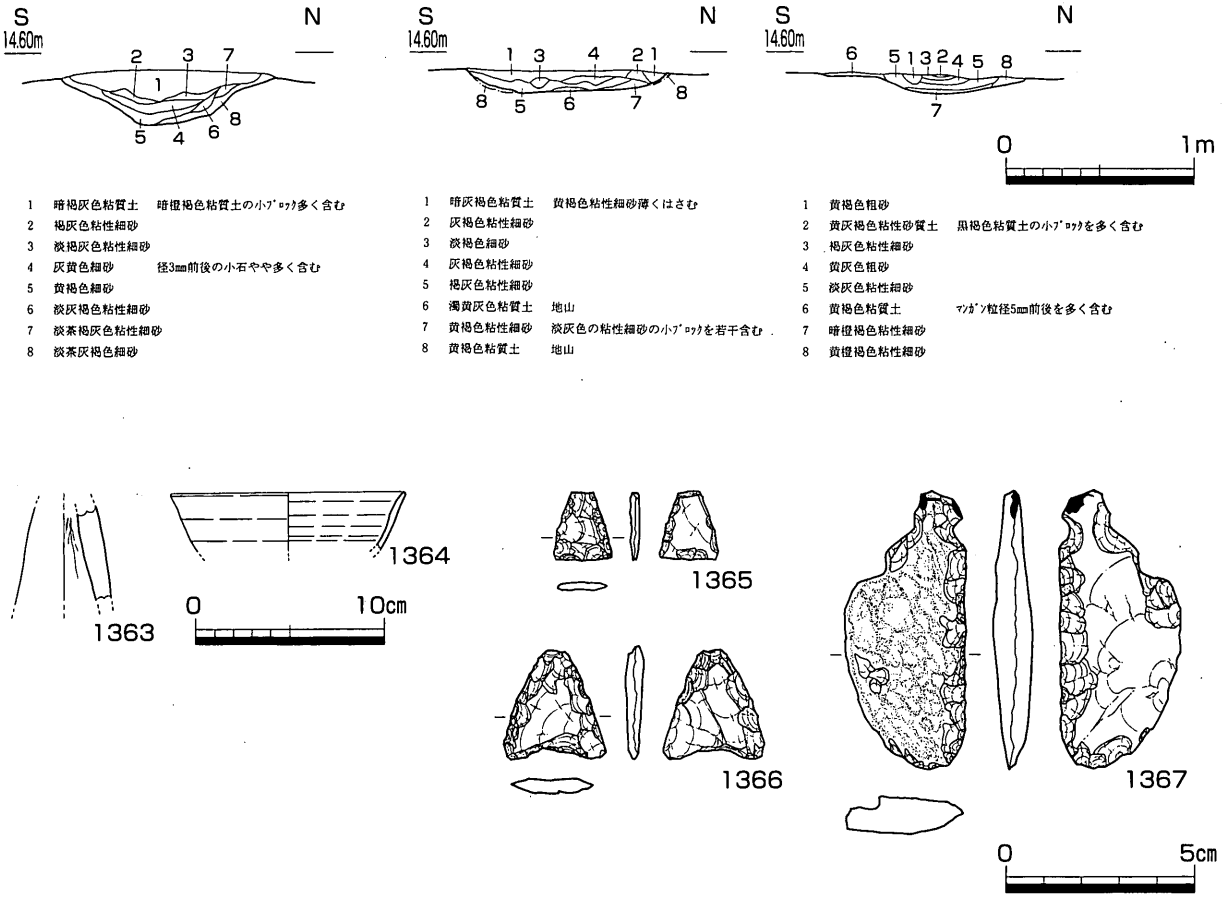
（3）溝状遺構（第207図・第209図）

45条検出した。SDC45を除くと全てが南北方向に主軸を取り、周辺の地割とほぼ同一方向に主軸を取る。いずれも比較的直線的に延びるものが多いが、SDC20・24がやや蛇行傾向を示す。遺物の出土状況はあまり良くない。いずれの遺構もわずかに弥生土器片を中心とする著しくローリングを受けた小片が散発的に出土したのみである。溝の深さは基本的に総じて浅く、0.10m以下のものがやや多く目立つ。深いものでも0.30m前後を測るのみである。SDC01・02の断面図（第210図）で確認できるとおり、溝が掘削された面は最低でも2面存在したことが確認でき、複数の溝が時期を違えて掘削された様子がうか

7　片桐孝浩　1992「第5章　考察　—古代から中世にかけての土器様相—」『中小河川大束川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』香川県教育委員会



第210図　SDC01～12・14～20・22～30・33～37・39～42断面図（S＝1／40）



第211図　SDC45断面図（S＝1／40）、SDC09・17・22・45出土遺物（S＝1／4・1／2）

がえる。それを裏付けるように、溝の埋土は暗褐色系の粘質土を持つものと、茶灰褐色系の粗砂を含む粘性細砂を持つものに大別でき、それに淡黄褐色粘性細砂を埋土に持つものがごくわずかに確認できるのみである。

遺物の出土が認められるのはSDC05・06・09～11・13・16～18・20・22・23・25・45の14条であるが、いずれも小片のみで時期を判別しうる資料に欠ける。いずれも混入資料である可能性が想定できる。以下、図示しうるものをあげておく。第211図1363はSDC22出土の弥生土器高坏脚部である。1364はSDC17出土の須恵器坏である。また、1365はSDC09から、1366はSDC45からそれぞれ出土したサヌカイト製石鏃である。1365は平基式無茎、1366は凹基式無茎のものと想定できるが、1366はやや大振りで厚みを伴うことから、未製品である可能性がある。共に片面に大きく素材面を残置し、主として周縁部のみに調整加工が施される。1367はSDC45出土のサヌカイト製石匙である。表皮付きの横長剥片を素材とし、打点の反対側に浅い二次加工を連続的に施して刃部を設けたものである。摘みはわずかな調整加工によって作り出されるなど、素材の変形度合いは低い。

（4）旧河道（図版122）

同遺構は3条検出している。トレンチ調査の結果、まとまった遺物の出土が認められなかったことから、それぞれ概略のみ触れておく。

調査区東端で検出したSRC01（図版122）は最深部で地表下2m近くまで下がるもので茶灰色粗砂を主

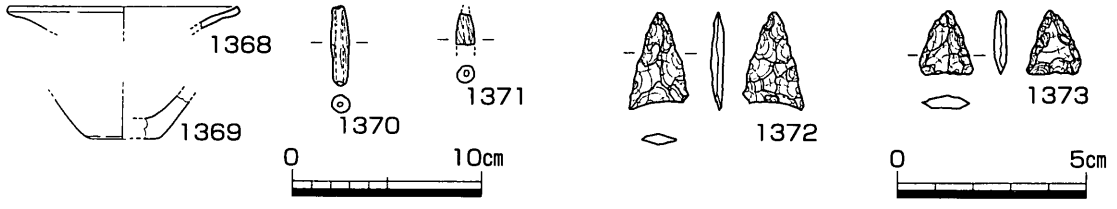
体とする埋土である。上面検出時に西岸と想定されるプランが認められ、おそらくSRB06につながってゆくものと想定できる。出土遺物は認められなかった。

SRC02は調査区西端で検出したもので、概ね南西から北東方向へ向けて流れる流路である。埋土は灰茶色ないしは茶灰色粗砂を主体とし、灰白色ないし灰青色細砂をラミナ状に含む（第207図・図版123)。上層は灰褐色砂混じり粘質土が堆積する部分も認められ、その下位と粗砂層との境界に一部マンガン分の著しい沈着が認められた。C区西端はSDB04から西へほぼ108mの位置にあたり、条里型地割の坪界溝を検出できる可能性があったが、調査区内においては確認できなかった。調査区の西側でコンクリートの用水路が南北に流れていることから、この真下に坪界溝が存在する可能性は否定できないが、SRC02による削剥を受けている可能性も想定できる。当流路からも出土遺物は認められなかった。

SRC03は調査区中央付近で検出した旧河道である。この流路の上面が当調査区の遺構面を形成しており、上層は濁黄茶褐色粗砂混じり粘質土を主体とし、その下位に茶灰色・灰色粗砂の堆積が認められる。下層は淡灰白色・淡茶灰色・暗褐色の粘質土からなり、間層に白色・灰白色の砂質土の堆積が認められる。粘質土中にはいずれも広葉樹起源の植物遺存体が多含されていた他、甲虫類の上翅が若干認められた。樹種同定などを行なえるようサンプルを大量に採取していたものの、保管状況が不良であったため、分析作業は行なえていない。これらの自然遺物と共に、縄文土器と想定できる土器小片・小型サヌカイト剥片が微量出土しているが、図化に耐えうる資料ではないことから割愛した。

（5）包含層（第212図）

調査区ほぼ全面でわずかに残った包含層および調査区の壁整形時出土の遺物を挙げる。遺物の出土は希薄で、1368・1369は弥生土器壺片、1370・1371は管状土錘、1372・1373はサヌカイト製石鏃である。



第212図　C区包含層出土遺物（S＝1／4・1／2）

第８節　小結

1. SRB07検出の杭群について

第６節 - ３で報告したとおり、当流路において127本の杭が河床へ打設された状況が確認でき、61本11群のまとまりが認められた。これらについて若干のまとめを行なってみたい。

A. 杭の打設状況について

まず、杭のデータについて事実報告で記しきれなかった部分を第８表(CD内)を用いながらここで補っておく。取上げた杭は106本ある。長さのデータは全て完存したものではないと想定するため、参考程度に留めておきたいが、4.50～36.2cm のものが認められる。平均値は20.2cm である。太さは最大径2.60～８cm のものが認められ、平均値は4.60cm である。先端は角錐状を呈するものが多いが、不明瞭なものも多い。全ての杭が芯持ち材を用いており、樹皮が認められるものが多く認められる。ただし、これは調査中に樹皮が乾燥のため剥落したものが多いことから、本来は全ての杭に樹皮が遺存していたと考えてよいだろう。先に事実報告で杭群２・３及びランダムに抽出した杭について紹介しているが、これらと比較すると、いずれの項目についても資料全体の平均的なものと合致する。留意点は太さについての項目で、杭群構成資料の平均値はいずれも全体で見た平均値4.60cm と近似することから、選択する素材の太さが概ね共通するものと想定する。長さについても、杭群構成資料の平均値と全体のそれはほぼ近似しており、総じて上面の遺存状況が不良であるということがわかる。

杭材の樹種については、第３章第２節において詳細が報告されているのでそちらを参照いただきたいが、この分析においてはイヌガヤ・クスノキ科・ツバキ属・カキノキ属・アカガシ亜属・モチノキ属・ツブラジイが用いられていることが判明した。これらは「遺跡周辺地に成立していた照葉樹林から、杭材の太さに適した直径４～６cm の枝材を伐採して来た」ものと想定される。また、これらの材は晩秋から早春にかけて伐採されたもののようであり、当該期における施設の設営・利用が想定される。

次に打設状況をもう一度整理しておこう。繰り返しになるが、杭群は基本パターンと仮称した２本セットの杭を基準とし、これらの組み合わせにより、４つの類型を成す。基本パターンとした杭群の特徴として、２本の並立した杭が流路に対して並行ないしは直交して打設される点を先に挙げておいたが、これに規制された結果と思われるが、いずれの類型も上流側の基本セットが流れる方向に対して直交するように打設されている点が留意できる。類型１は基本セットがL字に組み合わされたものであり、類型２は基本セットと１本の杭で逆L字に組み合わされたものである。類型３は類型１を、類型４は類型２をそれぞれ並列して組み合わせたものであり、類型１と２の組み合わせと見られるものは認められない。ただし、類型３・４合わせて６群あるうちの５群が類型３の形態を取っている点から考えると、本来、類型２・４は共に、それぞれ類型１・３の形状を取っていたものが壊れた可能性は否定出来ない。しかし、類型２が比較的安定して認められることから、類型２・４は類型１・３それぞれの変異パターンと考えておきたい。このことからこれらの杭群は、いずれも明らかに規則性をもって打設されていると見ることが出来る。さらに上記の類型を組み合わせた状態での規則性が認められないか検討してみたが、明瞭に抽出できなかったため、類型３・４をもって最大の規則性と見ておきたい。ただ、この規則性が何を示すのか定かではないが、一つの可能性として、検出状況で地表から数cm から20cm 弱の状態であったことから上部構造の復元は困難であるものの、これらの杭群、特に類型３・４の配置は何らかの施設を成していた結果ではないかと考える。

B. 杭群の性格について

当初、これらの施設の性格として、しがらみあるいは井堰状のものを想定したが、杭は流路のやや屈曲する部分のほぼ全面から出土している。打設部位は概ね川底の平坦な部分に設定される。中央群でやや比較的密集するものの、かなり隙間を開けて出土しており、流路の一部を遮断する状況ではないこと、この周辺にここで堰き止めた水を配するための導水路が認められないことなどの理由から、井堰としての可能性は低いと考える。やや離れた位置にある横断道原間遺跡Ⅲ区SRⅢ03では井堰に伴う可能性が想定される杭の出土が見られるが、その杭は不安定な流路堆積層に斜めに打設されているほか、取水用と想定される溝がすぐそばに存在する。したがって、類型１～４の杭は横断道原間遺跡の物とは性格が異なると考える。また、善通寺市永井遺跡[8]SR8501底部においても縄文時代晩期に打設された杭が14本検出されているが、これは流路の方向に沿ってほぼ列をなす状態であることから、この類例とも性格が異なるのではないかと考える。また、護岸のような施設も想定してみたが、岸に沿って打設される状況でもないことから、これも当てはまらない。さらに、堅果類を水に漬けておく「さらし場」のようなものも想定してみたが、さらされたであろう対象物が検出されていないことと、他の事例からすると規模が小さすぎるように思う。

では、どのような施設が想定できるであろうか。そこで、まず基本セットである２本の杭の間隔に注目してみた。詳細な計測を行なっていないので統計的な証明が出来ないが、これらの間隔は概ね10cm 前後を測る。この間に何かを挟んでいたと仮定すると、杭の配列によって、類型３のパターンであれば約50cm 四方の、類型４のパターンであれば約50×30cm のスペースが生じ、このスペースは上流側に「コ」の字型に開口する状態となる。ただし、いずれにしてもかなり小型の施設であろう。しかも、このような施設であれば、当時のSRB07の水量にもよるが、下流側の閉塞する部分にかなりの水圧がかかるのは避けられない。比較的施設の破損率は高かったであろう。そこで、これらの施設に用いられた杭をもう一度見てみたい。調査中に剥落したものがほとんどであるが、多くの杭には樹皮が遺存していた。また、全ての杭において芯持ち材が用いられていた。このことから、細い雑木を切り倒し、少量の加工を施したのみで杭としている可能性が高いと想定する。さらに、先端の加工に片側からのみの加工しか施されないものが認められることから、伐採した後、その伐採痕を尖頭部として用いたものもあるのではないかと考えられる。したがって、かなり簡便な施設であった可能性は十分考えられよう。

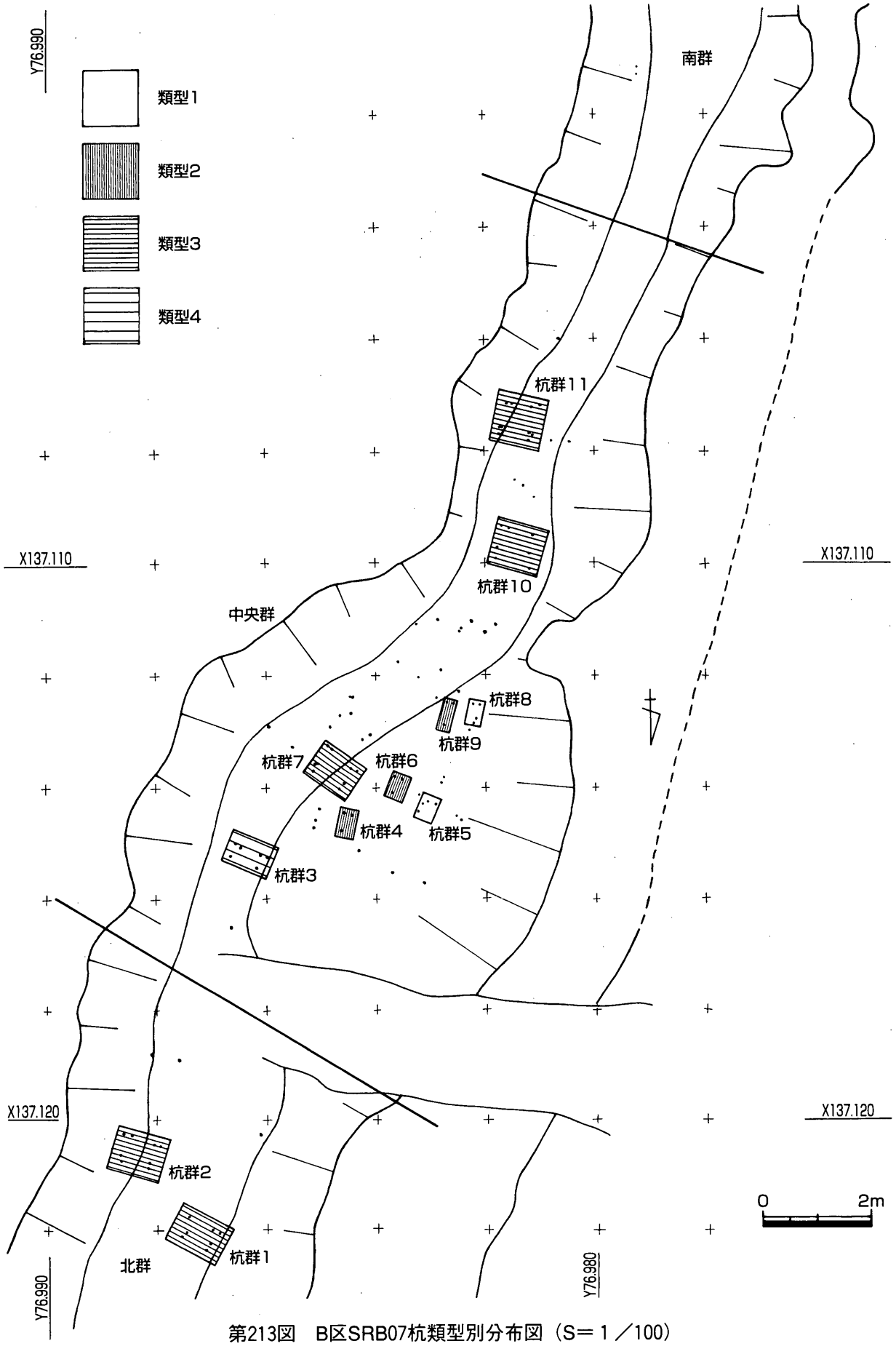
一つの可能性としては簗のような漁撈関連の施設ではないかと考えているが、これについても確証は得られない。仮に簗であったと想定した場合、上流側に開口する施設であることから川を下ってくるものを捕獲していた施設であることが想定できる。ただし、魚導部と見られる施設がなく、それに代わる河床礫も認められないなど、問題も多い。岩手県盛岡市所在の萪内遺跡[9]において検出された漁撈施設（魚）や、近年調査が行なわれた北海道石狩市所在の石狩紅葉山49号遺跡[10]で検出された魚など、内水

8　渡部明夫・安藤清和　1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第九冊　永井遺跡』香川県教育委員会他

9　工藤利幸　1982『岩手県埋文センター文化財調査報告書　第32集　御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書　盛岡市萪内遺跡（Ⅰ）』（財）岩手県埋蔵文化財センター

10　石橋孝夫・工藤義衛　2001「縄文時代の河川漁遺跡　石狩市紅葉山49号遺跡」『月刊考古学ジャーナルNo.469』ニュー・サイエンス社

石橋孝夫他　2003　http://www.city.ishikari.hokkaido.jp/kakubu/kyouiku/49iseki/m49gaihou/open.htm



第213図　B区SRB07杭類型別分布図（S＝１／100）

面漁撈の痕跡が検出された例はあるものの、大半において魚導部と筌・簗といった施設がセット関係にある。大阪府東大阪市所在の池島·福万寺遺跡[11]においても縄文時代晩期から弥生時代前期のものと想定される杭列が漁撈施設として評価されているが、この例でも溝流路を遮る状態で打設されており、原間遺跡例とはやはり異なる。当遺跡例においては網を張っていた可能性も想定は出来るが、錘の出土が認められないので推定の域を出ない。魚導部が認められない点から考えると漁撈関連の施設という案も難しい。さらに川幅の狭いSRB07においてどれほどの漁撈活動が出来たかと疑問もある。A区とB区の間に古川が存在するが、この川に生息する魚種について調べていないため、単純な比較は出来ないし、『香川県漁業史』（香川県漁業史編さん協議会　1994）によると、吉野川からの導水である香川用水が出来てから、県下の魚類相が従来とは変化していることが指摘されている。また、香川県下の淡水魚については「大河を持つ阿波や土佐と比べて、その規模や種類、生産量が格段に少な」い。それを踏まえたうえで、同書において紹介されているヤナ漁との比較を行なってみたい。同漁は県西部の三豊郡財田町財田川上流域において昭和44、５年頃まで行なわれていた事例であるが、これによると、対象魚はカニ・ウナギ・アユ・アカマツ（カワムツ）・コイ・フナである。漁期は秋９～10月である。川幅いっぱいに丸木を渡し、そこへ川上に向かうよう箐棚を立てかけて流路を遮断するもので、秋雨により増水した流水に乗って落ちてくるものを対象に捕獲していたようである。近隣の農家住民が行なう漁であり、獲れた魚は自給用で生業として行なわれていたものではなかったという。この他にも、県内においてはかつて、河川の規模によって筌ヤナ・網ヤナ・壺ヤナなどの小規模なヤナ漁が行なわれていたらしいことが記される。おそらく、いずれの例も専業的なものではないと考えられる。

さて、本遺跡例と比較すると、施設を上流側へ向けるという点では共通しているといえる。ただし、やはり川を遮断する形で設営されている点は本遺跡例とは異なる。さらに問題になるのは設営時期である。先に杭材の樹種同定の分析結果について若干触れたが、本遺跡例の施設が構築された時期については杭材の伐採時期が晩秋から早春にかけてであることから、概ねこの時期に構築・機能していた施設であることが想定できる。つまり、本遺跡例が漁撈施設であると想定した場合、民俗例とは漁期が合わない点がネックとなる。

C．結論

以上のように思いつくまま推論を述べてきたが、この杭群については、調査終了後から想定してきた漁撈関連施設であるという確証を得ることが出来なかった。これに替わる代案も現状では想定しがたい。

ただし、①ある一定のパターンをもって設営されている施設である。②設営時期が晩秋から早春にかけてのものである。という２点は大きく変わる評価ではない。これらをもとに、今後、類例増加を待った上で、再評価する機会を待ちたい。

2．SRB07出土の縄文土器について

杭群の打設面の上下から合計125点の縄文土器片を検出したが、調査方法にミスがあり、出土層順と遺物が十分対応できていないことから杭の打設時期や流路堆積土の時期について対比させることが出来なかった。そこで、遺物の状況のみを簡単にまとめておく。

11　國乘和雄他　1998『池島・福万寺遺跡　発掘調査概要ＸＸ　95－１調査区（1995・1996年度）の調査概要』
財団法人　大阪府文化財調査研究センター

出土土器は、杭打設面上面から縄文時代後期のものが、杭下層からは縄文時代早期？～縄文時代晩期前半頃までのものが出土している。いずれも小片で、若干転摩を受けているうえ、半数以上が無文であることから、時期決定が可能なものは施文が残るなど特徴的なものに限られた。時期毎に見て行くと、縄文時代早期のものは摩滅が著しいことから図示していないが、胎土中に繊維を含むものである。前期のものは羽島下層式・彦崎Z１式と見られるものがそれぞれ１点ずつ認められる。中期のものは全体で18点と比較的多く認められ、船元Ⅰ式から里木Ⅲ式までが数点ずつではあるが認められる。特筆する点は船元Ⅰ式の可能性を想定した1302において、胎土中に結晶片岩を含む状況が認められることである。わずかな資料であることから断言はしがたいものの、香川県において結晶片岩の産地が認められないことから、同石材を産出する地域、特に直線距離が近い徳島県吉野川流域との関係が想定される資料であるといえる。その後の中期の土器には結晶片岩の存在は認められず、ある特定の時期のみの状況である可能性が想定できる。後期のものと想定できるものは全体で14点あり、津雲A式・福田K２式・松ノ木式がそれぞれわずかずつではあるが認められる。晩期のものは図示し得なかったが、縄文時代晩期中葉の滋賀里Ⅲ式土器の深鉢口縁部が２点出土している。この時期においても１点ではあるが、結晶片岩を胎土中に含むものが認められ、中期同様、徳島県吉野川流域との関係が想定できる。その他、多数の無文・条痕文土器が認められるが、いずれの時期に属するか、筆者は判断しかねたが、これらはおそらく後期・晩期に属するものと想定する。形式の判別できる資料が共伴しているにもかかわらず、その対応関係を押さえ得るだけの調査精度が無かった点が悔やまれる。

先に触れたが、この流路内出土遺物は小片化とやや転摩が進んだ資料が中心であるが、1319の事例のように、破片同士が接合するものも認められる。また、施文を確認できるものも多い。調査対象地内では当該期の遺構の検出はできなかったが、近隣のそう遠くない場所からの流入を想定できよう。これらの資料からは近隣における縄文時代の集落の存在が想定できるが、現状では資料数が極めて少ないことから推測の域を出ないものの、第165図の段丘Ⅱ面～Ⅳ面付近をその候補として想定する。この部位は平成11・13両年度において県道建設に伴い調査が実施されているが（第２章第２節～４節）、当該期の遺構については未検出である。SRB07の検出面が、第１遺構面下に位置することから想定すると、各調査区の下層に存在していた可能性もあるが、未検証である。

各時期に分けてみると遺物の出土量は少ないと言わざるを得ないが、従来、西讃地域や島嶼部と比較すると検出例の多くなかった東讃地域において、縄文時代中期以前の遺物が若干なりとも出土した意義は大きい。流域を違えるが、すでに報告されている金毘羅山遺跡（山下他　2000）において、縄文時代前期の所産と想定される玦状耳飾の出土や、羽島下層式土器・船元Ⅲ式土器が認められるなど、僅かずつではあるが資料が増加してきている。また、同遺跡においては縄文時代晩期突帯文土器が破片資料ながら多く出土している。今後、特に東讃地域における縄文期のあり方が明らかになってくる可能性が想定できる。また、僅かな資料ながら、結晶片岩を胎土に含む土器の存在から阿讃山脈南側の地域との関連が窺えるものが検出できた点は興味深い。横断道原間遺跡において、弥生時代後期の土器胎土に結晶片岩を含む例が認められることから、阿讃山脈南側との何らかのつながりが縄文時代まで遡ることが明らかにできたといえる。

参考文献

大内町史編さん委員会　『大内町史』
『大内町史　補遺編』

大久保徹也　2002　「四国北東地域における地域的首長埋葬儀礼様式の成立時期をめぐって」
『論集　徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会

香川県漁業史編さん協議会編　1994　『香川県漁業史　通史編』香川県漁業史編さん協議会

千葉　豊　1992　「西日本縄文後期土器の二三の問題―瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題―」『古代吉備　第14集』古代吉備研究会

戸沢充則編　1994　『縄文時代研究事典』東京堂出版

鳥浜貝塚研究グループ　1979　『鳥浜貝塚―縄文前期を主体とする低湿地遺跡の調査１―』福井県教育委員会

長井博志　2003　「第５章　まとめ　第１節　東讃地域の土師器の変遷」
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第45冊
天王谷遺跡』香川県教育委員会

西岡達哉　2003　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第46冊　池の奥遺跡
金毘羅山遺跡Ⅱ』香川県教育委員会

間壁忠彦・間壁葭子　1971　『倉敷考古館研究集報　第７号　里木貝塚』

森　格也・信里芳紀・長井博志　2004　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第47冊　成重遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会

森下英治・信里芳紀・乗松真也　2000　「讃岐地方における弥生土器の基準資料Ⅲ―前期後半～中期前葉の土器群を中心にして―」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅷ』
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

真鍋昌宏　「2．讃岐地域」『弥生土器の様式と編年　四国編』

山下平重他　2000　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第36冊　金毘羅山遺跡Ⅰ・塔の山南遺跡・庵の谷遺跡』香川県教育委員会

第３章　自然科学分析の結果

第１節　原間遺跡（平成11年度）焼失家屋SH303出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1. はじめに

ここでは、焼失家屋SH303から出土した炭化材５点の樹種同定結果を報告する。SH303は、丘陵裾に立地する弥生時代後期（約1800年前）終ごろの集落内にあり、この集落から出土した住居址の典型的なひとつであり、炭化材は出土状況から梁材などの建築材と推定されている。当遺跡における弥生時代後期の集落では、建築材にどのような樹種を利用していたのか、その一部ではあるが樹種を明らかにする。

2. 試料と方法

同定は、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５mm角以下の大きさに整え、直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM－T100型）で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、香川県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

５試料からは、落葉広葉樹のクヌギ節（③と④）、常緑広葉樹のアカガシ亜属（②）とクスノキ科（⑤）、草本性単子葉類（①と⑤）が検出された。

クスノキ科（⑤）は、管孔がやや小型～中型であることから、管孔が大型のクスノキや管孔が小型で潅木のクロモジではないと思われるが、シロダモ・タブノキ・ハマビワ・カゴノキなど中高木となるいずれの樹種は材組織が類似しているので、属や種を特定することは出来ていない。検出されたクヌギ節・アカガシ亜属・クスノキ科の材は、いずれも建築材として有用材な樹種であった。

①は、草本性単子葉類の稈（茎部）が集積した状態であった。また、⑤のクスノキ科材の側面にも単子葉類（茎部）の集積が見られた。この単子葉類の稈は、直交しており規則的に細かく編まれていたようであり、非常に細い小枝も含んでいた。保存が悪いために、草本の種類は特定できないが、維管束鞘が発達していることからイネ科の可能性があると思う。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材組織の写真を提示する。

コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen.　Cyclobalanopsis　ブナ科　図版１　２a－２b（②）

細胞幅の広い集合放射組織を挟み小型～中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材である。道管の壁孔は小さく交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織はほぼ同性、単列のものと集合放射組織があり、道管との壁孔は孔口が大きく、柵状・交互状である。接線断面と放射断面は、次に記載するクヌギ節と同様である。

アカガシ亜属は常緑広葉樹で、いわゆるドングリをつけるカシ類の仲間であり、おもに暖温帯に分布

し、森林の主要樹種である。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性がある。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 Quercus subgen. Quercus sect. Cerris ブナ科 図版1 3a－3c（④）

年輪の始めに大型の管孔が主に1層配列し、その後は小型で孔口が円形で厚壁の管孔が単独で放射方向に分布する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織はほぼ同性、単列のものと集合放射組織があり、道管との壁孔は孔口が大きく、柵状・交互状である。

クヌギ節は落葉広葉樹で、いわゆるドングリをつけるナラ類の仲間であり、クヌギとアベマキが属する。いずれの種も暖帯の山林に普通の高木で、二次林を構成する主要樹種でもある。材は重厚で割裂性が良い。

クスノキ科 Lauraceae 図版1 4a－4c（⑤）

中型の管孔が単独や多くは2～3個が放射方向に複合し分布し、周囲状柔組織が顕著な散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は異性、主に2細胞幅、放射組織の上下端や単独で大きく膨らんだ油細胞がある。管孔は中型であることから、管孔が大型のクスノキや小型のクロモジ以外のクスノキ科の材である。

クスノキ科は、主に暖帯に分布し多くは常緑の高木で、海岸付近から山地の森林に広く生育する。

単子葉類（草本性） Monocotyledoneae（herbaceous） 図版1 1a（①）

実体顕微鏡下の観察では、破損した稈（茎部）が多数集積しており、稈の表面には細い縦筋が見られた。

横断面は稈外周部に近い部分が観察でき、維管束が散在する不整中心柱である。厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘が維管束を厚く取り囲んでいた。このような維管束は、イネ科の竹類に見られるが、試料の保存が悪いので、断片的な観察結果だけからイネ科とは断定できなかった。

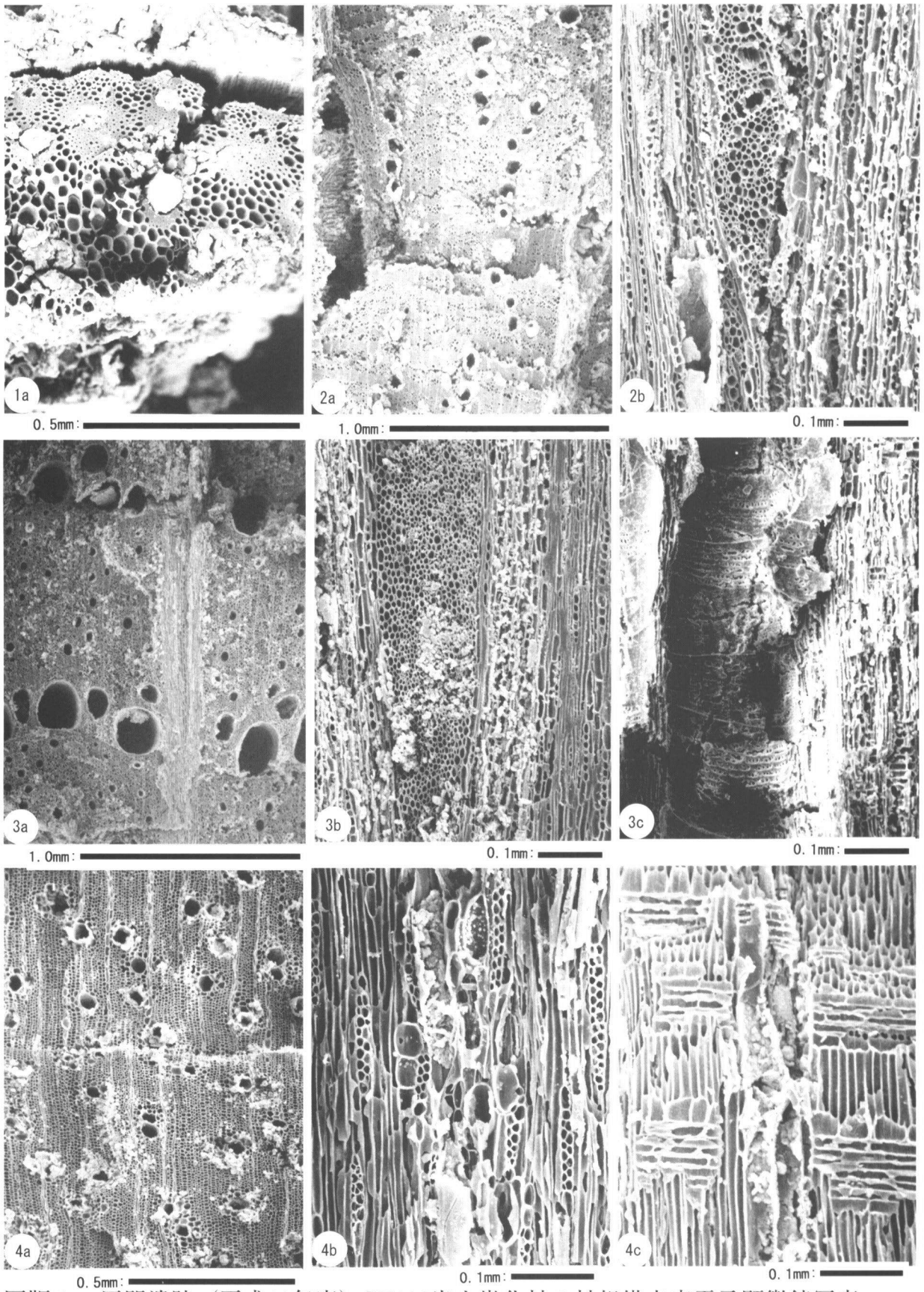
4. 考察

当遺跡の弥生時代後期の集落で一般的な形状であるSH303から検出された梁材などの建築材樹種は、クヌギ節・アカガシ亜属・クスノキ科であった。いずれも建築材として有用な材が使用されていた。アカガシ亜属とクスノキ科は、照葉樹林の高木層を構成する主要な分類群であることから、遺跡周辺にはこの土地本来の自然植生である照葉樹林が成立していたと考えられる。

単子葉類の集積したものも検出され、⑤ではクスノキ科の材に付着し細かく編まれていたような状態で出土した。①や⑤のこれらは、屋根材や壁・床材、または篭などに利用されていたことが連想される。

表９ 焼失家屋SH303出土炭化材樹種同定結果

同定試料	遺構名	取り上げ番号	樹　種	備　考
1	SH303	①	単子葉類（草本性）	稈が多数集積した塊
2	SH303	②	アカガシ亜属	焼失家屋の梁材か
3	SH303	③	クヌギ節	焼失家屋の梁材か
4	SH303	④	クヌギ節	焼失家屋の梁材か
5	SH303	⑤	クスノキ科	焼失家屋の梁材か
			単子葉類（草本性）	クスノキ科材側面に塊が付着編まれている？



図版１　原間遺跡（平成11年度）SH303出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真

１a:単子葉類(1)　２a－2b:アカガシ亜属(2)　３a－３c:クヌギ節(4)　４a－４c:クスノキ科(5)

a:横断面　　b:接線断面　　c:放射断面

第２節　原間遺跡（平成９年度）SRB07出土杭材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1. はじめに

ここでは、弥生時代のムラはずれに近い旧河道SRB07から出土した杭群の杭材樹種を報告する。

この杭群の性格は不明であるが、打設された位置関係からいくつかのパターンが見られ、異なる３タイプの杭群から20点が抽出され樹種同定が実施された。試料20点はすべて芯持ち丸木材で、その太さから枝材と思われ、樹皮が残存する材からは、樹皮に内接する最終年輪部位を調べ、伐採時期を記録した。

2. 試料と方法

材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。

内樹皮の付着する材は、横断面を薄い内樹皮が残存する部分で切片を作成し、樹皮に内接する最終年輪部位を調べ、伐採時期を記録した。

材組織標本は、香川県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

各試料の同定結果は、表２に示した。

木杭（８～15）でひとつのセット関係（杭群２）

クスノキ科３点、カキノキ属２点、ツバキ属･アカガシ亜属・モチノキ属が各１点であった。３点で最終年輪部位が確認でき、晩材で終わっていたクスノキ科２点と、早材で終わっていたかまたは晩材が形成されている可能性があるツバキ属１点であった。

木杭（20～25）でひとつのセット関係（杭群３）

ツバキ属３点、クスノキ科１点、イヌガヤ２点である。針葉樹のイヌガヤが含まれていた。３点で最終年輪部位が確認でき、晩材で終わっていたツバキ属２点とイヌガヤ１点は晩材？であった。

原則２本でセット（基本セット）になるものの各１本（２･30･45･88･100･118）を、全試料から無作為に抽出

クスノキ科３点、ツバキ属２点、ツブラジイ１点であった。４点で最終年輪部位が確認でき、管孔が１層だけ見られ早材が形成され始めた時点で終わっているもの２点（クスノキ科１点･ツブラジイ１点)、ツバキ属１点は早材の形成が見られ晩材の形成も始まっている可能性があり早材～晩材？と判断し、クスノキ科１点は晩材で終わっていた。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材組織写真を提示した。

イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia （Knight） K. koch　イヌガヤ科　図版２　１a－１c（23）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材の移行は緩やかで、仮道管にらせん

肥厚があり、樹脂細胞があり、分野壁孔は小型である。

イヌガヤは本州の岩手県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山林の下に生育する常緑小高木である。材は緻密で固い。

コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis ブナ科 図版2 2a－2c（8）

集合放射組織を挟み小型～中型の単独管孔が放射方向に配列し、接線状配列の木部柔組織が顕著であり、年輪界は不明瞭な放射孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織はほぼ同性、単列のものと細胞幅が広く大きな集合放射組織があり、道管との壁孔は孔口が大きく、柵状・交互状である。

アカガシ亜属は高木となる常緑広葉樹で、おもに暖温帯に分布する。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は堅い。

ツブラジイ Castanopsis cuspidata Schottky ブナ科 図版2 3a－3b（30）

やや小型～中型の管孔が単独で間隔をあけて3層ほど分布し、晩材部は小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。写真には含まれていないが、細胞幅の狭い集合放射組織があり、その部分で年輪界が大きくずれる。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織はほぼ単列同性である。

シイノキ属は暖帯に生育する常緑広葉樹で、関東以西・四国・九州に分布するツブラジイ（コジイ）と、本州の福島県と新潟県佐渡以南・四国・九州に分布するスダジイがある。材組織ではシイノキ属の放射組織は単列がほとんどであるが、スダジイは樹心部に限り集合放射組織が現れることがあり、ツブラジイは樹心以外でも現れる。当遺跡の試料は樹心以外の部分であり、集合放射組織の存在が確認できた試料はツブラジイと同定した。

クスノキ科 Lauraceae 図版3 4a－4c（100） 5a（45） 6a（9） 7a（11）

やや小型～中型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して散在する散孔材。管孔は周囲状や翼状柔組織に囲まれている。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔と階段数の少ない階段穿孔がある。放射組織は異性、2細胞幅、大きく膨らんだ油細胞があり、道管との壁孔は大きく交互状から階段状で孔口の形状も一定ではない。

管孔が大きく油細胞の出現頻度の高いクスノキや、小型管孔からなるクロモジ属以外の分類群であるが、材組織は類似性が高くこれ以上は識別できない。

クスノキ科は暖帯に種類数が多く生育する主に常緑広葉樹である。

カキノキ属 Diospyros カキノキ科 図版3 8a－8c（14）

やや小型で角張り厚壁の管孔が単独または2～4個が放射状に複合して散在しる散孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は異性、1～2細胞幅、2細胞幅部分は平伏細胞からなり上下端に直立細胞が単列であり、細胞高は10細胞前後で揃い、層階性をなす。

カキノキ属は、暖地に生育する常緑性のトキワガキ、落葉性で栽培種のカキノキとマメガキなどがある。

モチノキ属 Ilex モチノキ科 図版4 9a－9c（12）

非常に小型の管孔が放射方向またはやや斜状に複合して分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が25～30本ほどの階段穿孔、内腔にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、おもに3細胞幅の紡錘形で上下端に方形・直立細胞がある。

モチノキ属は、温帯～暖帯の山地に生育する常緑または落葉性の高木または低木で、約15種がある。山間の湿地に普通の落葉低木のウメモドキ、関東地方以西の山地に生育する常緑性のソヨゴ、茨城県・福井県以西の山野に普通の常緑性のクロガネモチ、海岸に近い山地に生育する常緑性のモチノキなど、暖帯に分布する種類が多い。

ツバキ属　Camellia　ツバキ科　図版4　10a－10c（13）　11a（25）　12a（22）　13a（25）

非常に小型の管孔が散在し、年輪の始めの管孔はやや大きい散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が太く20本ほどの階段穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は上下端に方形・直立細胞がある異性、1～2細胞幅、大きく膨らんだ油細胞があり、道管との壁孔は階段状である。

ツバキ属は暖帯の海岸から山中に生育する常緑の低木または高木で、ヤブツバキ、サザンカなどがある。

4. 考察

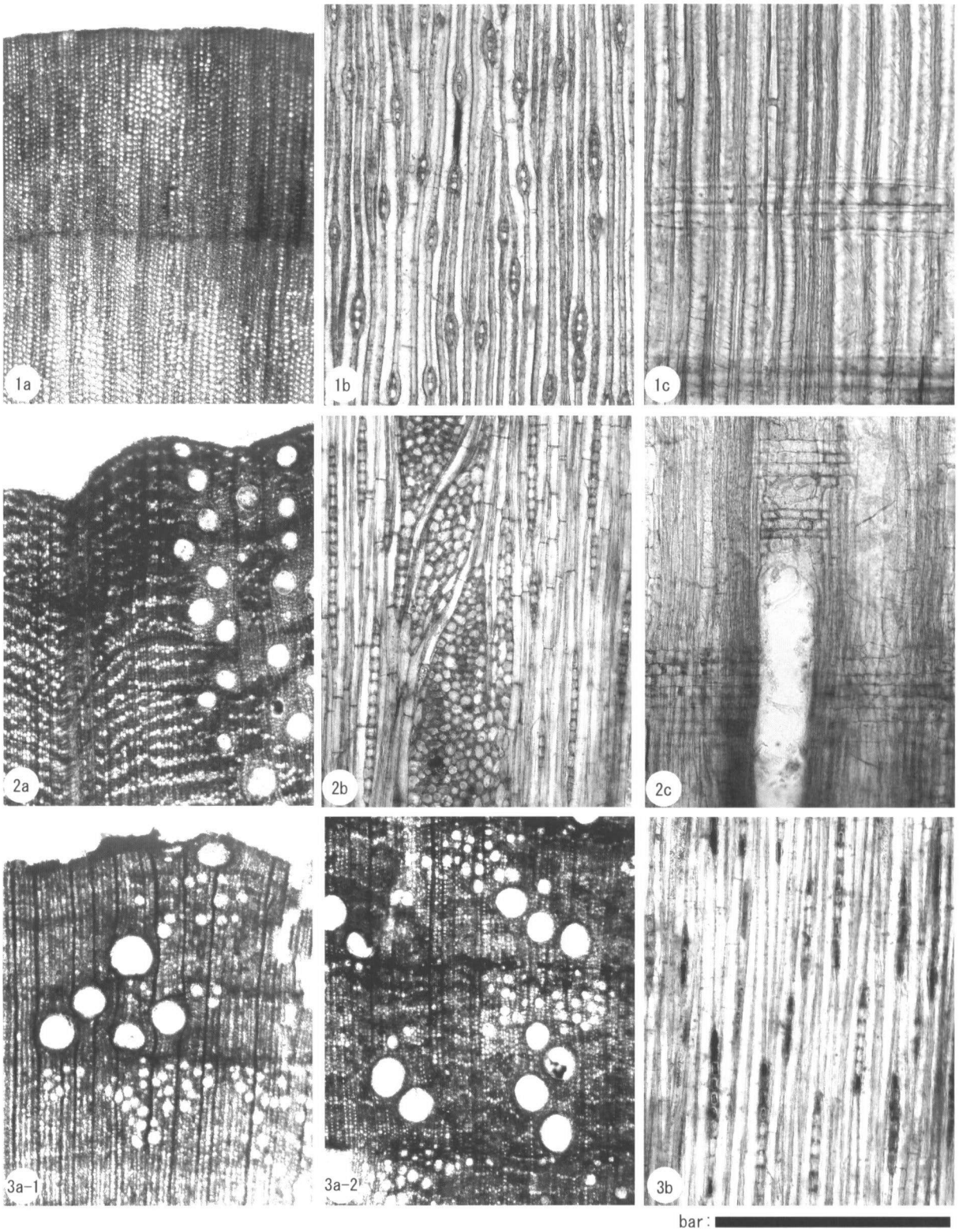
20本の杭からは、針葉樹のイヌガヤ（2点）、広葉樹のクスノキ科（7点）・ツバキ属（6点）・カキノキ属（2点）・アカガシ亜属（1点）・モチノキ属（1点）・ツブラジイ（1点）の合計7分類群が検出された。イヌガヤは、暖帯から温帯下部に生育する針葉樹であり、検出された広葉樹も一部落葉性の種類を含むものもあるがほとんどが常緑性の分類群であり照葉樹林の主要な構成樹種である。従って杭群構築に際し、遺跡周辺地に成立していた照葉樹林から、杭材の太さに適した直径4～6㎝の枝材を伐採して来たと思われる。クスノキ科とツバキ属の材は、3つの異なるセット関係のいずれからも検出され、全体的に最も多く使用されていた。この2分類群以外の樹種は、セット関係により出土傾向にやや違いが見られた。杭群2からはクスノキ科とツバキ属以外ではカキノキ属・アカガシ亜属・モチノキ属が検出され、杭群3ではイヌガヤが、基本セットからはツブラジイが検出された。これらに分類群が、セット関係に強く関連して樹種選択されたものかどうか、今回の調査からは不明である。伐採時期と関係する最終年輪部位であるが、晩材、早材～晩材？、早材のものがあった。早材は早材部の量が非常に少ない事から、早春に伐採されたと判断できる。晩材で終了していた材は、晩秋から翌年の春前に伐採されたものと考えられる。早材～晩材？で終わっていた材は、早材とすれば春～夏であり、晩材？であれば晩秋から翌年の春前であり、いつに伐採されたか特定できない。各セットで、伐採時期はぴったりと合わないが、多くの材はおおよそ晩秋から翌年の春前か早春に伐採されたものが多いと言える。

表10　SRB07出土杭材の樹種同定結果

試料番号	遺構名	杭番号	セット関係	樹　種	最終年輪	樹皮の残存	杭観察項目			
							直径(cm)	材の形状	先端形状	加工痕
6	SRB07	8	杭群1	アカガシ亜属	不明	○	4.7	芯持ち丸木	角錐	明瞭
7	SRB07	9		クスノキ科	晩材	○	5.2	芯持ち丸木	楔状	明瞭
8	SRB07	10		カキノキ属		×	4.2	芯持ち丸木	角錐	2回程度
9	SRB07	11		クスノキ科	晩材	○	5.7	芯持ち丸木	角錐	
10	SRB07	12		モチノキ属		×	4.3	芯持ち丸木	角錐	明瞭
11	SRB07	13		ツバキ属	早材～晩材？	○	4.5	芯持ち丸木	角錐	明瞭
12	SRB07	14		カキノキ属		×	3.4	芯持ち丸木	角錐	不明瞭
13	SRB07	15		クスノキ科		×	4.1	芯持ち丸木	角錐	不明瞭
14	SRB07	20	杭群3	クスノキ科		×	5.0	芯持ち丸木	角錐	明瞭
15	SRB07	21		イヌガヤ		×	3.8	芯持ち丸木	角錐	
16	SRB07	22		ツバキ属	晩材	○	4.4	芯持ち丸木	角錐	
17	SRB07	23		イヌガヤ	晩材？	×	4.3	芯持ち丸木	角錐	
18	SRB07	24		ツバキ属		×	4.7	芯持ち丸木		
19	SRB07	25		ツバキ属	晩材	○	3.8	芯持ち丸木	角錐	
20	SRB07	2	原則2本で基本セットうち各1本を抽出	ツバキ属		○	6.5	芯持ち丸木	角錐	
21	SRB07	30		ツブラジイ	早材	○	4.3	芯持ち丸木		
22	SRB07	45		クスノキ科	晩材	○	4.6	芯持ち丸木		
23	SRB07	88		クスノキ科		○	3.6	芯持ち丸木	角錐	
24	SRB07	100		クスノキ科	早材	○	4.2	芯持ち丸木		
25	SRB07	118		ツバキ属	早材～晩材？	○	4.9	芯持ち丸木		

表11　SRB07出土杭材のセット関係ごとの樹種比較

セット関係	杭群2		杭群3		2本セットが基本セット	
樹種	樹種	最終年輪	樹種	最終年輪	樹種	最終年輪
イヌガヤ			2	1点:晩材？		
クスノキ科	3	2点：晩材	1		3	1点：早材　1点：晩材
ツバキ属	1	1点:早材～晩材？	3	2点：晩材	2	1点：早材～晩材？
アカガシ亜属	1					
カキノキ属	2					
モチノキ属	1					
ツブラジイ					1	早材
合計	8		6		6	

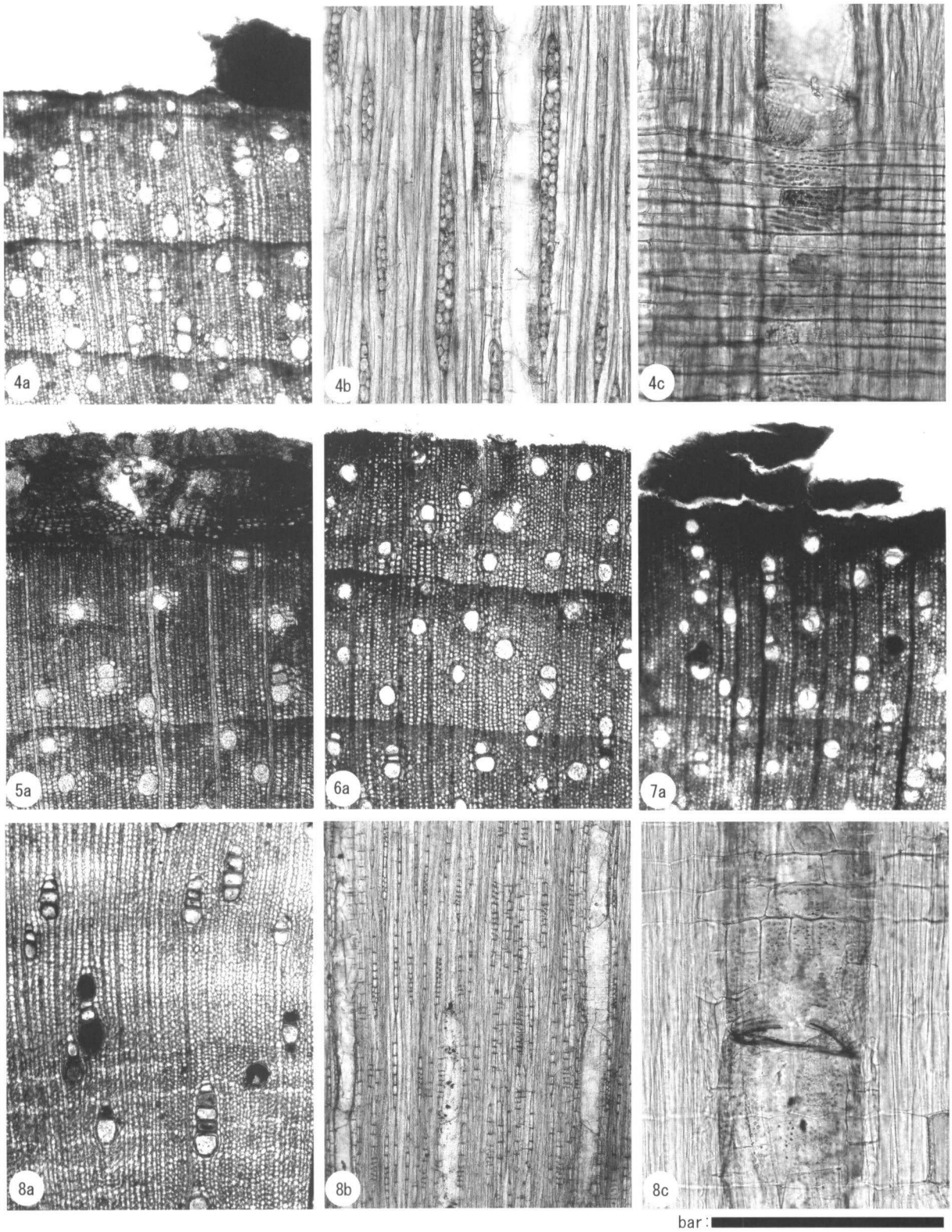


図版２　SRB07出土杭材の材組織光学顕微鏡写真

１a－１c:イヌガヤ(23)　２a－２c:アカガシ亜属(8)　３a－３b:ツブラジイ(30)

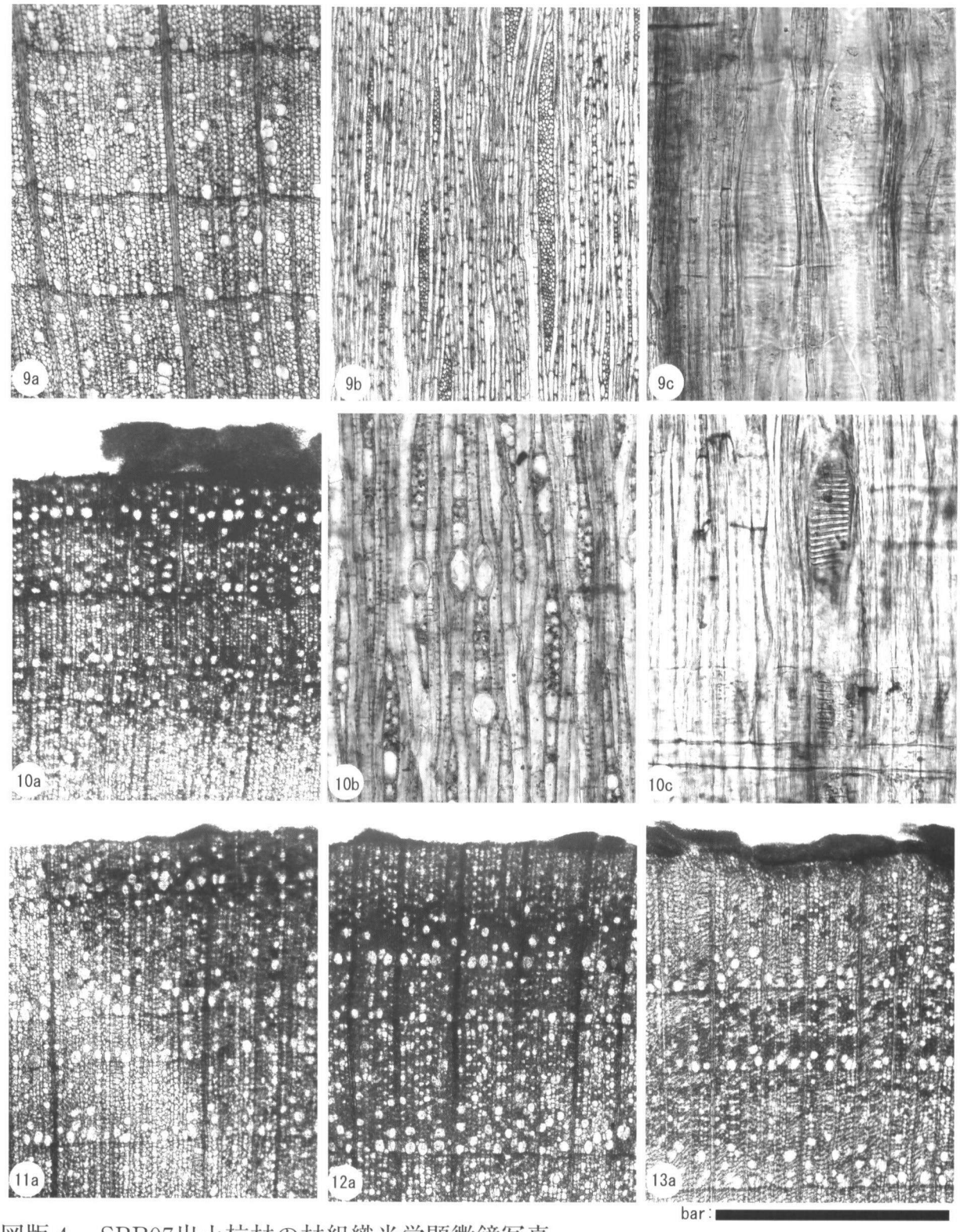
１a:晩材部？　　２a:最終年輪部位不明　　３a－１:早材

a:横断面　　b:接線断面　　c:放射断面　　bar:a＝１mm,　　b･２c＝0.4mm,　　１c＝0.2mm



図版３　SRB07出土杭材の材組織光学顕微鏡写真

４ａ－４ｃ:クスノキ科(100)　５ａ:クスノキ科(45)　６ａ:クスノキ科(9)　７ａ:クスノキ科(11)
８ａ－８ｃ:カキノキ属(14)　４ａ:早材　５ａ:晩材　６ａ:晩材　７ａ:晩材
ａ:横断面　ｂ:接線断面　ｃ:放射断面　bar:ａ＝１mm,　ｂ＝0.4mm,　ｃ＝0.2mm



図版４　SRB07出土杭材の材組織光学顕微鏡写真

９a－９c:モチノキ属(12)　10a－10c:ツバキ属(13)　11a:ツバキ属(118)　12a:ツバキ属(22)
13a:ツバキ属(25)　　10a:早材～晩材？　　11a:早材～晩材？　　12a:晩材　　13a:晩材
a:横断面　　b:接線断面　　c:放射断面　　bar:a・９b＝１mm,　10b＝0.4mm,　c＝0.2mm

第３節　原間遺跡出土鉄製遺物の分析調査

安来市体育文化振興財団・和鋼博物館
村　川　義　行

香川・原間遺跡発掘調査で出土した鉄製遺物ついて分析調査した結果を報告する。

遺構の時期は弥生時代後期後半と推定されている。

1. 供試材明細および分析調査方法

1－1.　供試材

表１に試料明細を示す。

表１　調査試料明細表

	出土遺構	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
報文873	Ⅱ区①SH201北西部ベルト部上層	69.0	27.0	11～20	58
報文460	Ⅱ区①SH204内SP02	37.5	32.5	5～20	21

1－2.　調査項目および方法

（１）外観

外観写真撮影および目視による外観形状、色調などの観察。

（２）顕微鏡観察組織

試料より切出して樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の＃150、＃240、＃320、＃600、＃1000と順を追って研磨し、最終はダイヤモンドの３μ～１μで仕上げてから光学顕微鏡により組織を観察した。

（３）硬さ測定

試料の金属鉄の組織あるいは鉱物組成同定を目的として、ビッカース微小硬度計を用いて硬さを測定した。試料は顕微鏡観察試料を供用した。

（４）ＥＰＭＡ分析

顕微鏡組織観察試料をＸ線マイクロアナライザーにより電子線を照射し、発生する特性Ｘ線を分光・画像化する定性分析とＸ線強度比から元素定量値を求め、データー解析を行い鉄滓の鉱物組成の組織を同定した。

2. 調査結果

2．1　外観

2．1．1　外観写真を写真１に示す。

2．1．2　外観目視観察

（１）報文873：

全体が灰褐色に覆われ錆ぶくれしている。刀子片（区部）のようにも見えるが形態不明。板状で身の厚さは５～10㎜位かそれ以下と推定される。重い感じで磁着性あり。

（２）報文460：

全体が灰褐色に覆われ錆ぶくれしているが、Ｌ字部分が残っていることから袋状鉄器の破片のようにも見える。全体が灰褐色で磁着性あり。

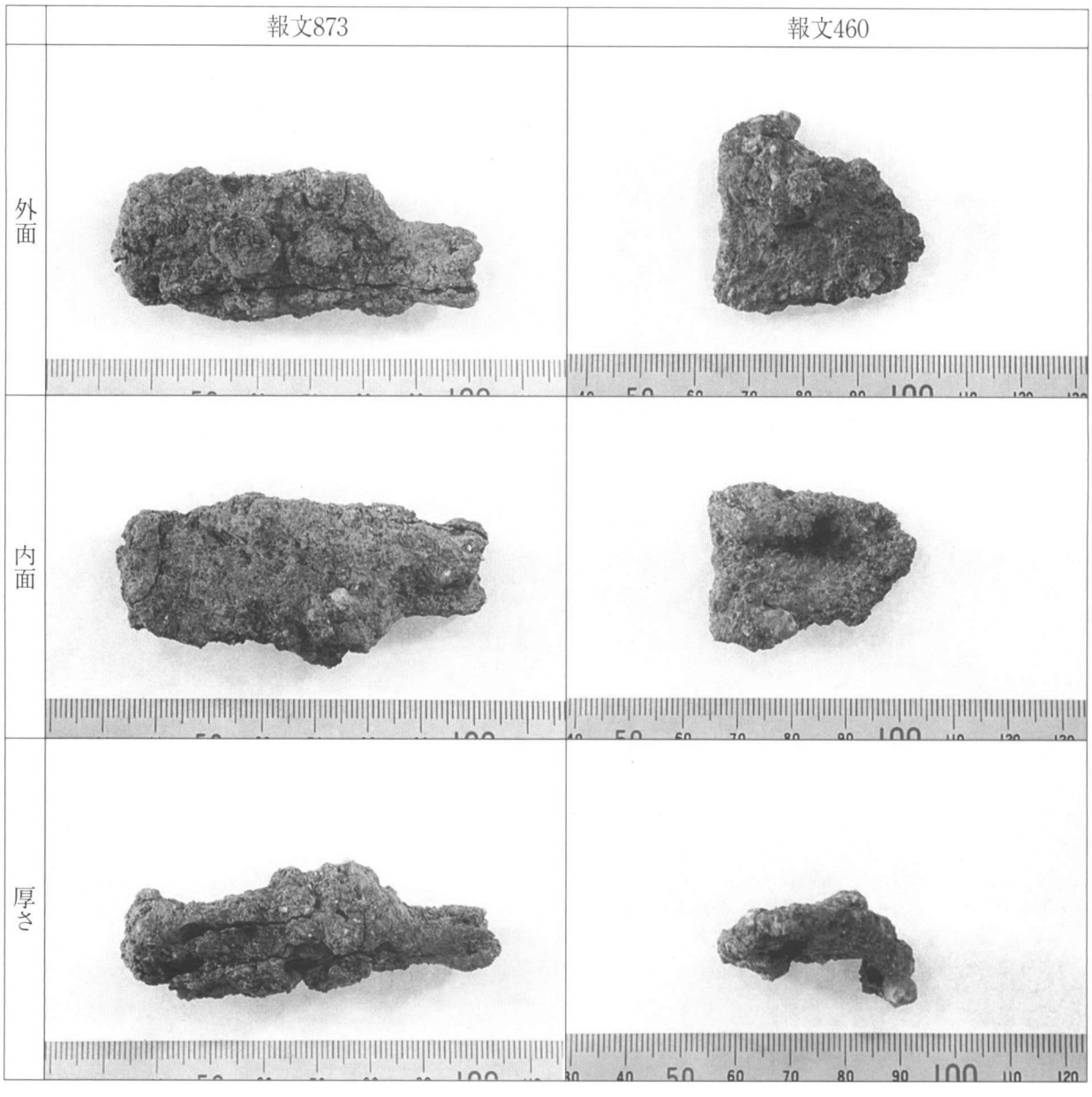


写真１　調査試料の外観写真

2．2　顕微鏡組織観察

試料の切断位置および組織観察面を図１に示す。

図１　試料の切断位置および組織観察面

2．2．1　マクロ組織観察

（1）試料報文873の断面マクロ観察組織を写真2に示す。

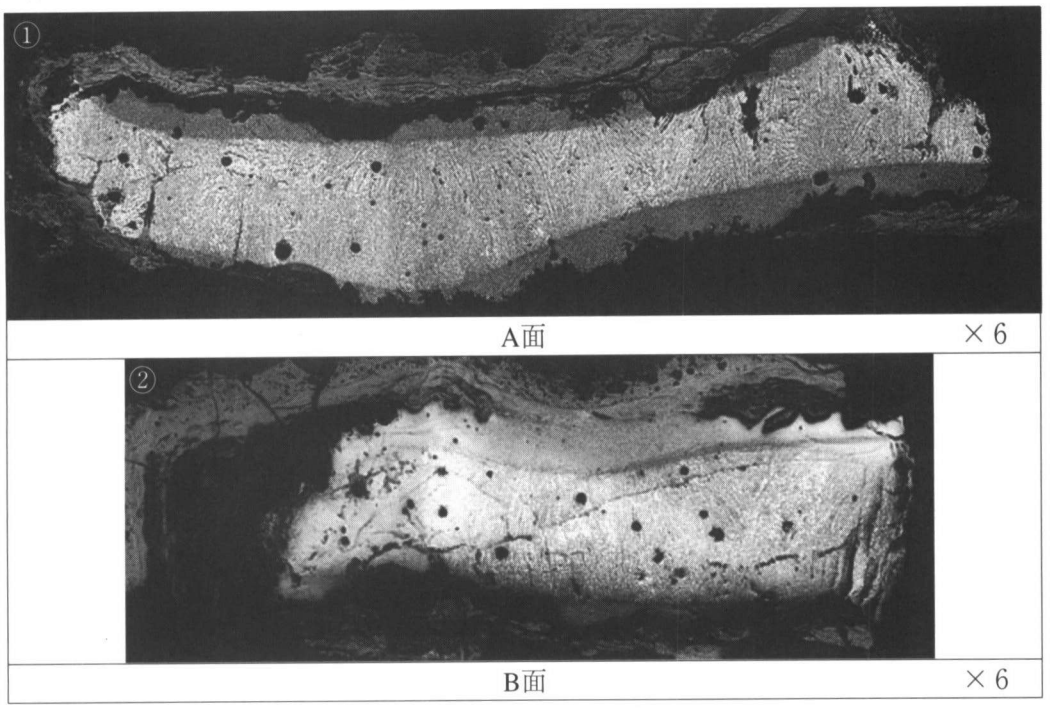


写真2　試料報文873の断面マクロ組織

（2）試料報文460について断面マクロ観察組織を写真3に示す。

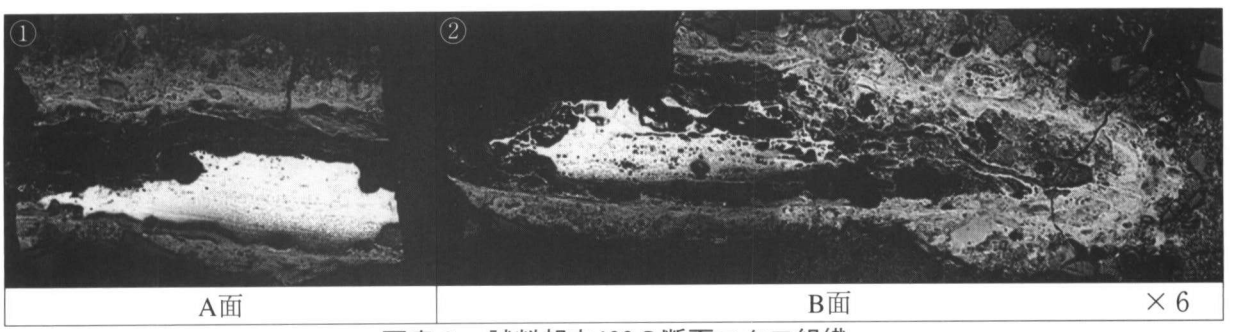


写真3　試料報文460の断面マクロ組織

2．2．2　ミクロ組織観察および硬さ測定

（1）報文873：報文873のA面についての顕微鏡観察組織を写真4に、硬さ測定結果を写真5に示す。

中心部（④、⑤）はセメンタイトとパーライトからなる白鋳鉄で硬さはＨＶ314（白色セメンタイト部：ＨＶ824、斑灰黒色パーライト部：ＨＶ290）、外周部（②、③）はパーライト組織と少量のフェライト組織で硬さはＨＶ248である。鋳造組織であるが外周は脱炭している。最表層は錆化脱落を受けて不鮮明であるが脱炭層の厚さはそれほど均一ではない。

（2）報文460:報文460のA面についての顕微鏡観察組織を写真6に、硬さ測定結果を写真7に示す。写真6－①、②に示すように、延伸された組織を示す。また、厚さ方向で炭素量が偏析し、袋状の内側部分はパーライト組織～外側部分はフェライトで、硬さはＨＶ257～ＨＶ150と組織、硬さともに緩やかに変化する。また、結晶粒の大きさは高炭素の内側部分はやや微細であるが低炭素の外側は粗大である。

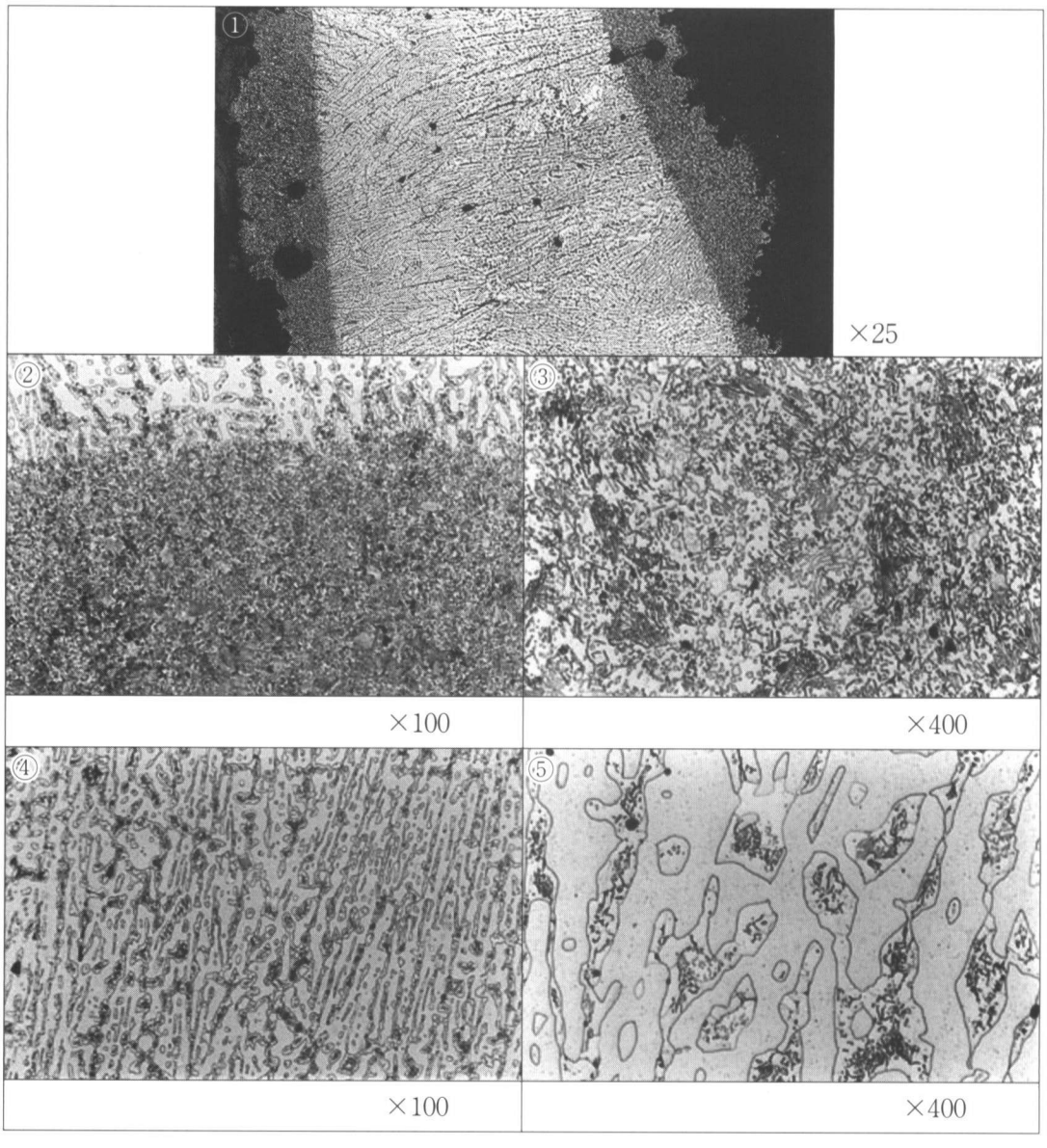


写真4.　調査試料報文873－Ａ面の顕微鏡観察組織

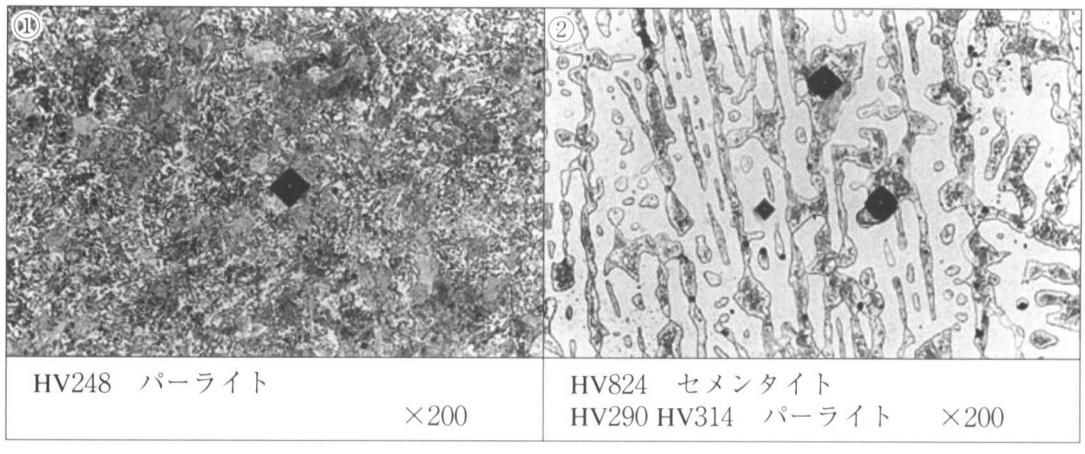
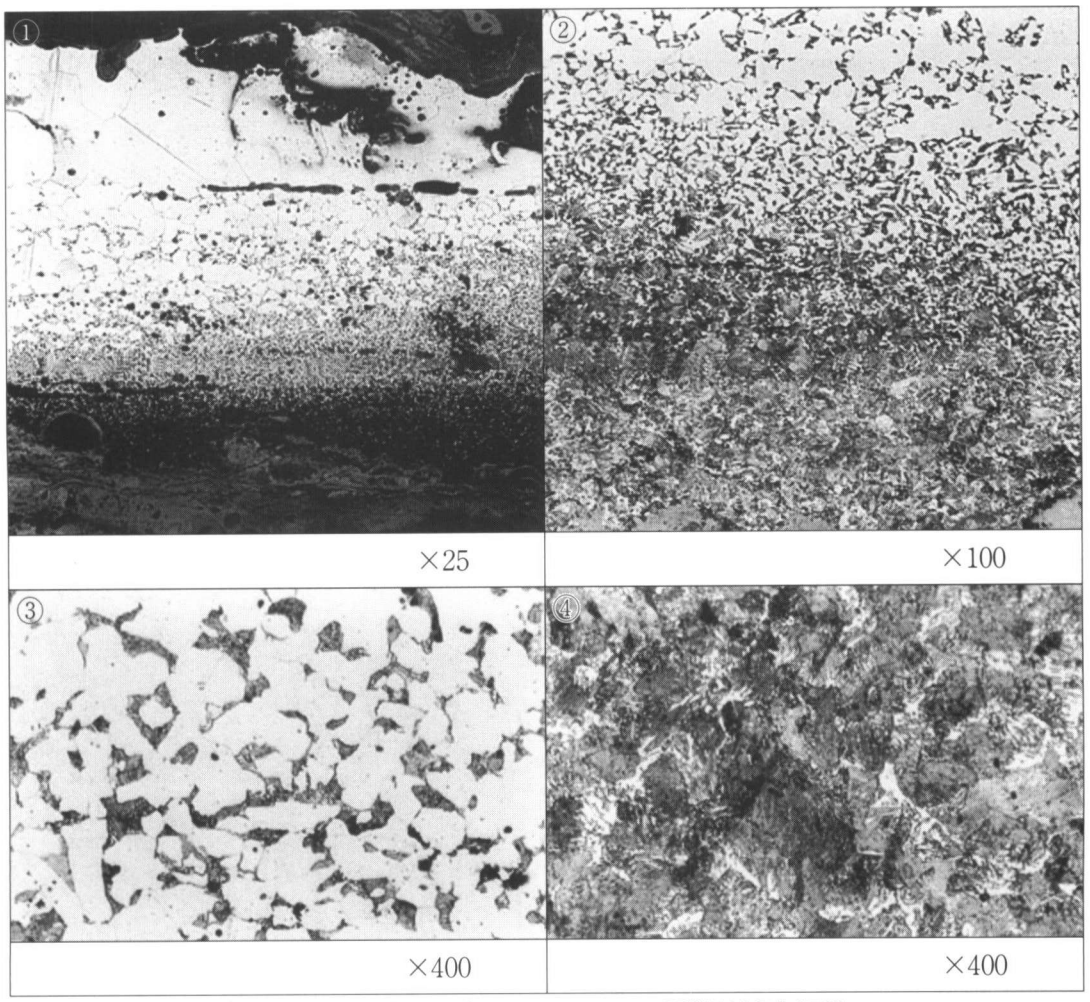


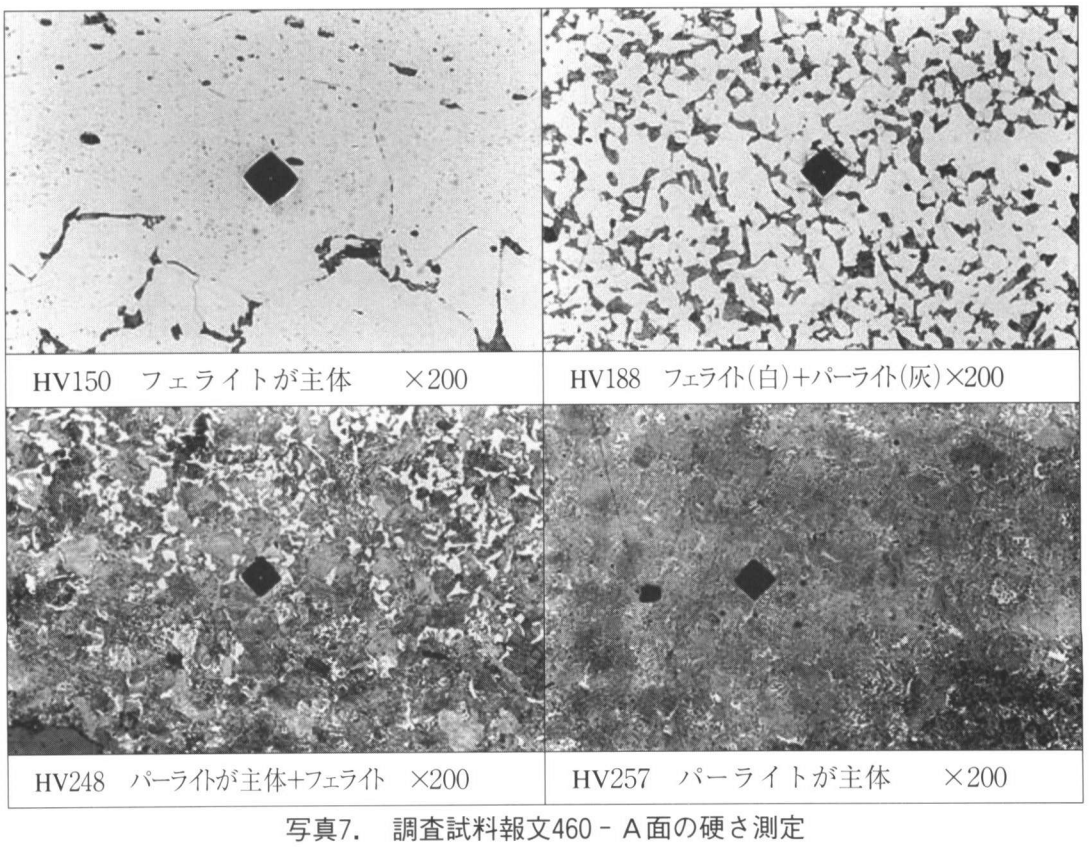
写真5.　調査試料報文873－Ａ面の硬さ測定



×25　×100

×400　×400

写真6.　調査試料報文460－Ｂ面の顕微鏡観察組織



HV150　フェライトが主体　×200　HV188　フェライト(白)+パーライト(灰)×200

HV248　パーライトが主体+フェライト　×200　HV257　パーライトが主体　×200

写真7.　調査試料報文460－Ａ面の硬さ測定

2．3　EPMA微小部分析

（1）報文873：板材の中心部組織のうち、A部は高Cの炭化物（セメンタイト：Fe３C）である。ここで、C分析値は7.94％となっているが、セメンタイ（Fe３C）のC組成は6.69％なのでEPMA分析値のC値は高目に出ることに注意を要する。B，C部はパーライト（セメンタイとフェライトの共析組織）である。また、基地中には、0.1～0.3％程度のリン（P）を含有している。

外周部は、球状化した炭化物（セメンタイト：Fe３C）と縞状のパーライトおよびフェライトからなる組織であるが、全体のC量はA部よりも低く脱炭している。

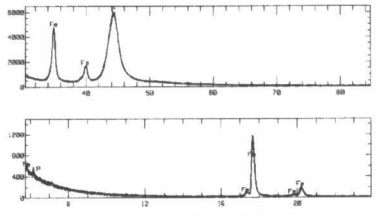


図１　報文873 - 中心部の定性分析

	A	B	C	全体
C	7.94	1.44	0.24	4.60
P	0.01	0.20	0.30	0.13
Fe	92.1	98.4	99.5	95.3

図２　報文873 - 中心部の定量分析値

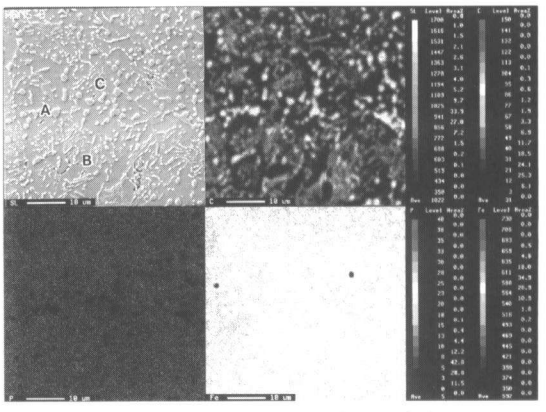


図３　報文873 - 中心部の特性Ｘ線像

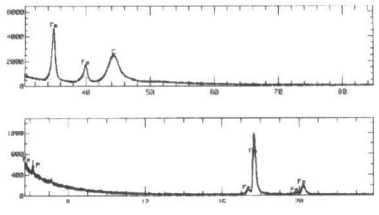


図４　報文873 - 外周部の定性分析（全体）

	A	B	C	全体
C	0.25	1.87	5.85	1.95
P	0.13	0.19	0.08	0.15
Fe	99.6	97.9	94.1	98.3

図５　報文873 - 外周部の定量分析

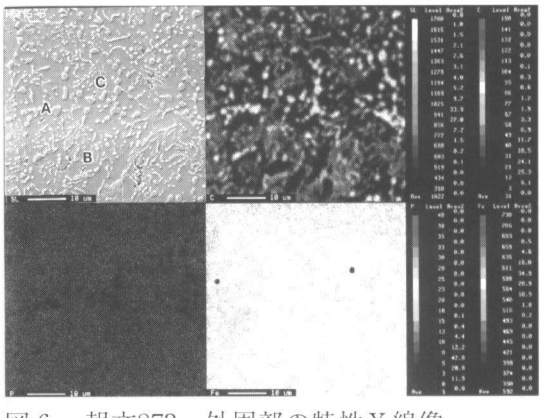


図６　報文873 - 外周部の特性Ｘ線像

（1）報文460：

縞状のパーライトとフェライトの混合組織であるが、外側はフェライト比率が多く低炭素であるが、内側はパーライトの比率が多く高炭素である。内側部の炭素量は組織から判断して、0.6～0.65％程度である。（この場合もＥＰＭＡ分析値は高目の値である。）

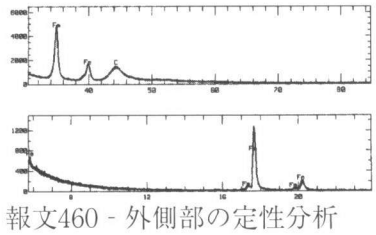


図７　報文460 - 外側部の定性分析

	A	B	全体
C	0.19	1.82	0.43
P	0.015	0.009	0.011
Fe	99.7	98.1	99.5

図８　報文460 - 外側部の定量分析

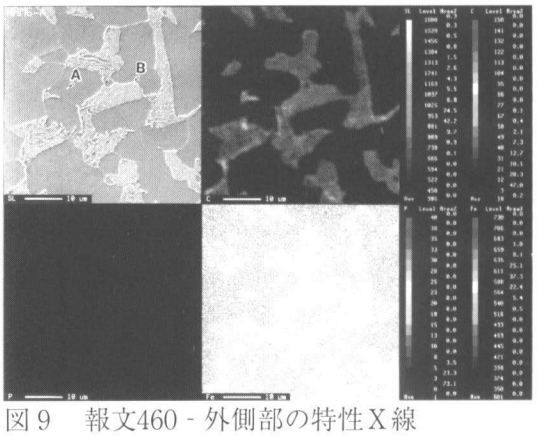


図９　報文460 - 外側部の特性Ｘ線

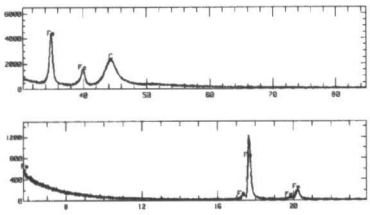


図10　報文460 - 内側部の定性分析

	A	B	全体
C	0.30	2.30	0.75
P	0.009	0.005	0.007
Fe	99.6	97.6	99.2

図11　報文460 - 内側部の定量分析

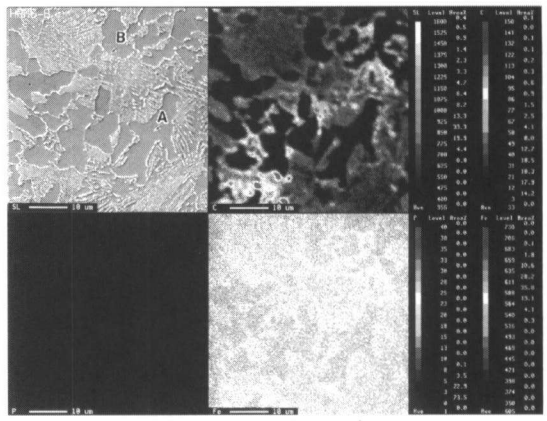


図12　報文460 - 内側部の特性X線

3. まとめ

（1）報文873：最外層は錆化しているが、芯部はメタルが良好に残っている。メタル部は鋳造組織で外周は脱炭層が存在する。組織から判断すれば、鋳鉄脱炭鋼（白心可鍛鋳鉄）と分類されるもので、板状笵に溶銑を鋳込んだ後、高度の温度管理で脱炭軟化処理を施して肉心部に白鋳鉄組織を残して周縁部を脱炭パーラート共析鋼として白鋳鉄の硬い脆い材質に靭性を付与している。このような組織構成の鉄器出土例は比恵遺跡（弥生中期後半）・鋳造鉄斧が報告されている[(1)]。これらは舶載品とされているが、一方、弥生時代の鉄製品のなかには鋳造鉄器の再加工品や本来脆い鋳造鉄器の効果的な使用法も知らず作業中に破損したものが多数含まれるとされている[(2)]。そこには、鑿切り、曲げ加工、研磨の工程のみで組織変化は殆ど起きてないと考えられ、今回の調査資料について、組織・分析のみから製造過程の判断は困難である。

資料は非常に厚さが薄いこと、断面のマクロ組織観察からは利器として機能するほどの鋭利な刃先は残っていないことがポイントと考えられるが不明である。鉄中のリン含有量が高いことから素材は砂鉄系ではないと思われる。

（2）報文460：最外層は錆化しているが、芯部にメタルが若干残っている。メタル部は非金属介在物が延伸していることから鍛造したものと判断される。また、結晶粒が等方性を示すことから鍛造後に高温加熱－徐冷されたと推定される。炭素量は板厚さの両端で大きく異なり、一端は共析鋼組成（炭素量0.7～0.8%）で高炭素あるが、他端はほぼフェライト組織（0.05～0.1%）で非常に低炭素ある。結晶粒径が両端で差があるが、これは鍛造後の加熱温度の差によるものでなく、内側は炭素量が高くて析出炭化物量が多いため結晶粒の成長が阻止されたと思われる。この炭素量の差が元々の素材によるものか、鍛造加熱あるいは鍛造後の加熱温度の差によるかの判定は難しい。

形状が袋状の痕跡のような部分を有することから、木柄などが装着されていたのではないかと想定され鉄製品の一部ではないかと思われる。

以上の分析は、日立金属㈱冶金研究所、㈱ハイメック中国事業所で実施した。

4. 参考文献

（1）大澤正巳：「比恵遺跡第51次調査出土の二条凸帯鋳造鉄斧の金属学調査」 福岡市教育委員会、1996

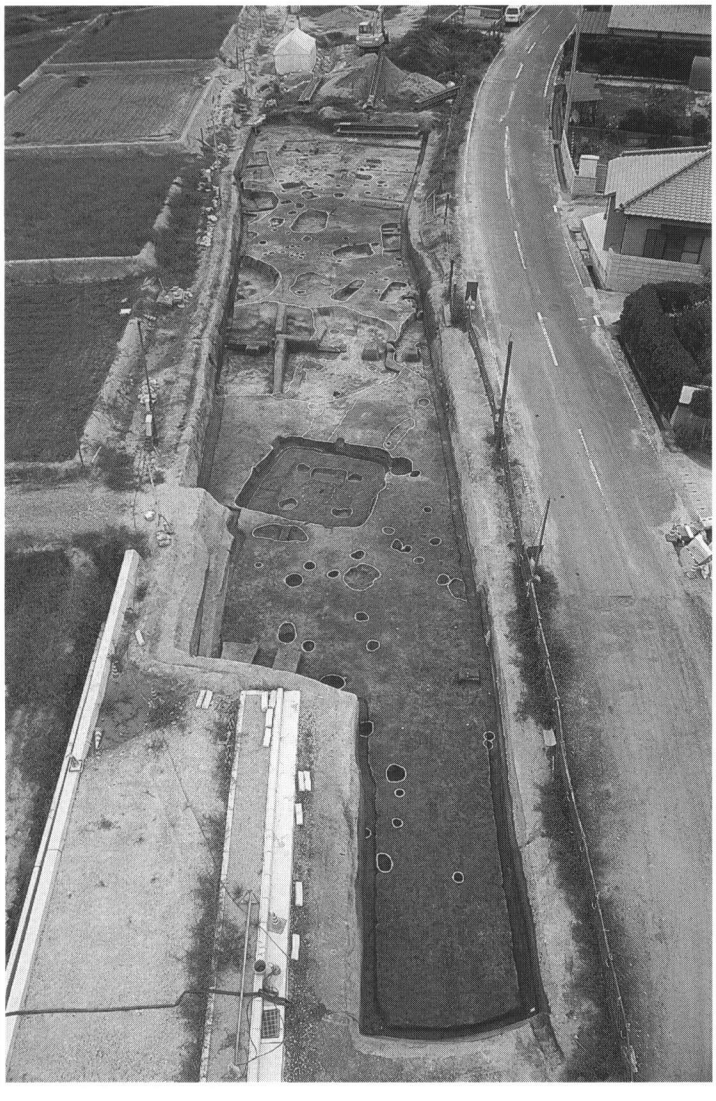
（2）野島　永：「破砕した鋳造鉄斧」『たたら研究』第32・33号、たたら研究会、1992

原間遺跡Ⅰ区（下が北）

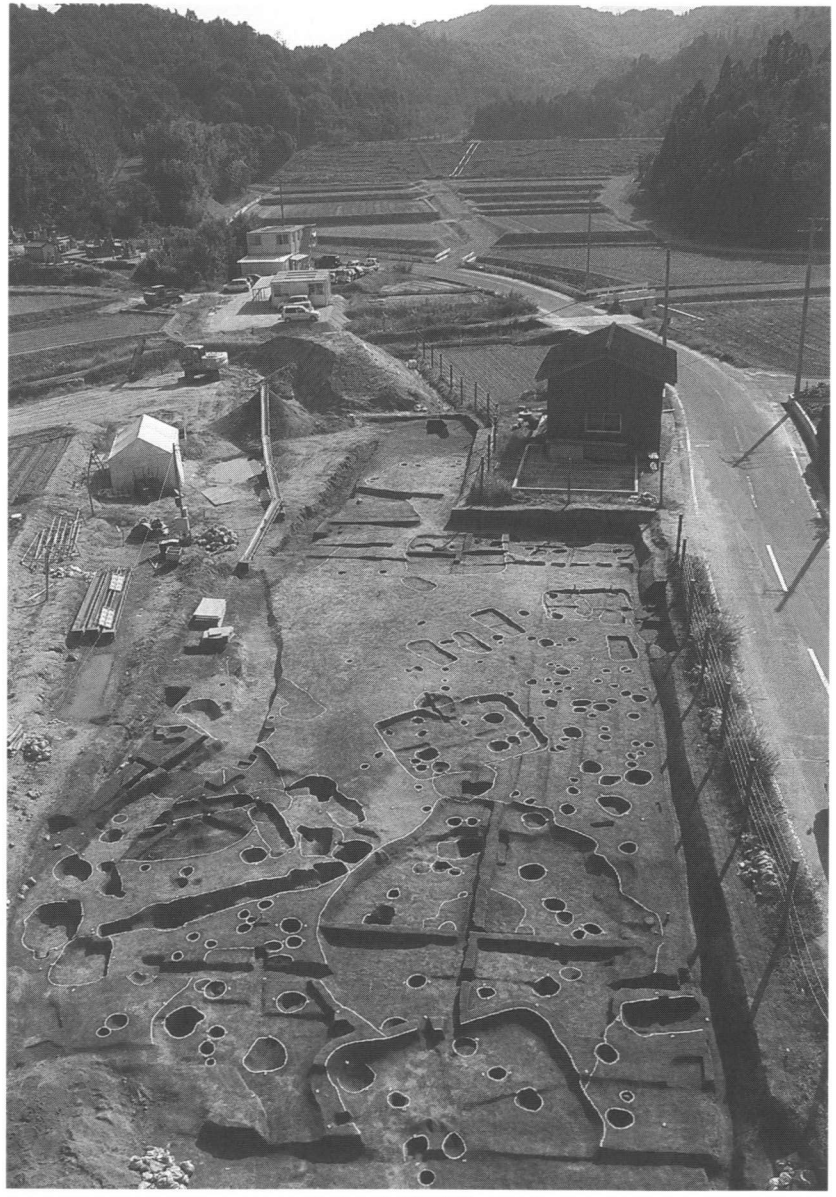
原間遺跡Ⅱ区（右が北）

図版 2

I 区全景（南から）



I 区全景（北から）



Ⅱ区　全景（北から）

Ⅱ区　全景（南から）

図版 4

SH101　全景（南から）

SH102　全景（東から）

SH101　遺物出土状況（東から）